

特集

都市づくりを仕掛ける : 建築家たちの実践

The Architects' Record in the Pursuit of Urban Design



MITSUBISHI

SOCIO-TECHの三菱電機

富士山なら、5分で昇れるエレベーター。



世界最高速・分速750mの乗用エレベーターが
横浜ランドマークタワーで稼動。

安全で快適な、横浜ランドマークタワーの
世界最高速・乗用エレベーターです。

世界最高速の乗用エレベーターは、お客様を2階から
69階の展望フロアまで、267mを約40秒でお連れ
することが出来ます。最高速度は分速にして750m、
例えば富士山なら、わずか5分で昇れるスピードです。
三菱電機独自の研究が、駆動制御装置や独創の流
線形フォルムを開発。静かで揺れの少ない快適な乗り
心地を追求した技術陣のたゆまぬ努力の結果です。
※最高速度(分速750m)で継続運行すると仮定して計算したものです。

三菱電機の総合ビル管理システムが
日本一の高層ビルをサポートします。

三菱電機は、ビル内環境をより快適にするための監
視制御と、管理点数7万点を処理する超大規模ビル
管理システムを納入しています。このビルをきめこまか
く管理するために各階ごとに制御するフロアコント
ロール方式を導入しました。このシステムは各種設備
の信号をフロアごとに集約し、中央処理装置とネッ
トワークで結ぶ新開発の総合ビル管理システムです。
より快適なビル環境づくりを目指して

三菱電機はソシオテックでお応えします。

「安全そして快適さ」をテーマに、高度なビル総合テク
ノロジーで横浜ランドマークタワーをサポートしていま
す。すぐれた技術と創造力を駆使し、社会とひとり
ひとりの人間を調和させるために、私たち三菱電機
は21世紀に向けて、ソシオテックでお応えします。

三菱電機の先端技術が
横浜ランドマークタワーに
生きています。



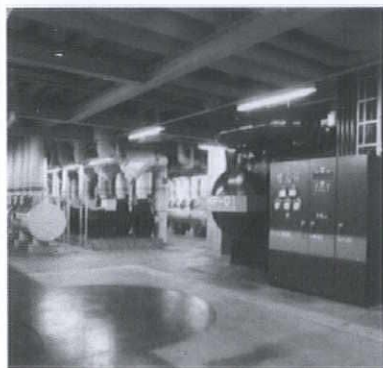
 三菱電機株式会社

KANDENKO



快適な環境をお届けするのも ——関電工の技術です。

個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…
…。人々の営みの場で、いま求められているのが、
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快
適な環境の場をお届けしています。

関電工

お問い合わせは/環境設備部

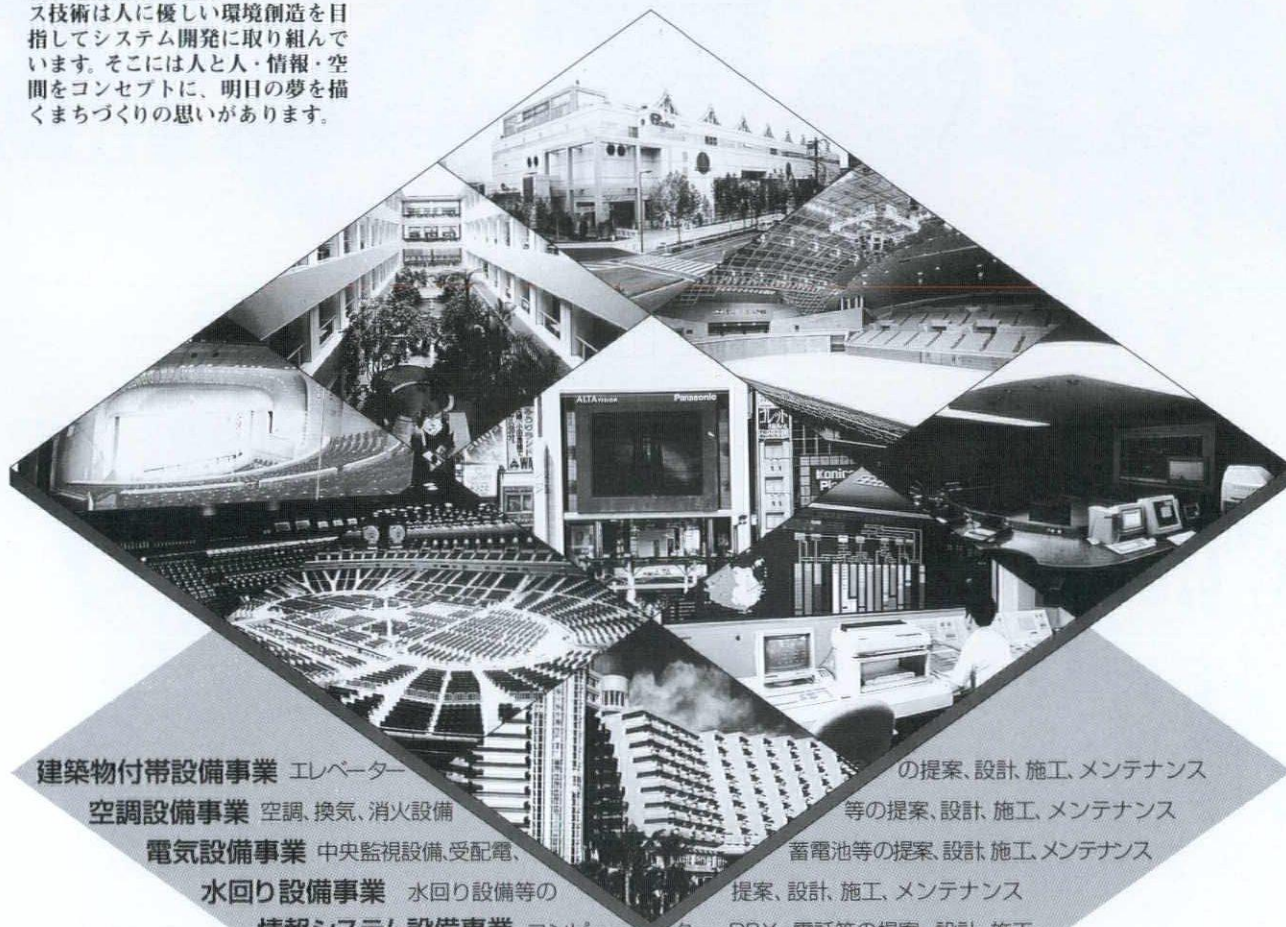
本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎：NTT 03(5476)2111 TTN 4431)2111

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター

空調設備事業 空調、換気、消火設備

電気設備事業 中央監視設備、受配電、

水回り設備事業 水回り設備等の

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

ター、PBX、電話等の提案、設計、施工、

メンテナンス

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。



松下電器産業(株)システム営業本部
建設システム営業部

☎03-5460-2809

北海道支店 ☎011-222-5815

東北支店 ☎022-223-5111

首都圏建設

システム支店 ☎03-3436-5045

神奈川支店 ☎045-682-3701

中部支店 ☎052-951-6010

関西支店 ☎06-949-2251

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0678-21-3133

九州支店 ☎092-431-1100

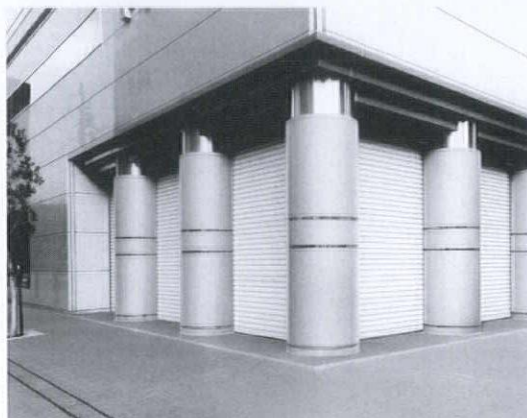
沖縄支店 ☎0988-53-2826

AV & CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM



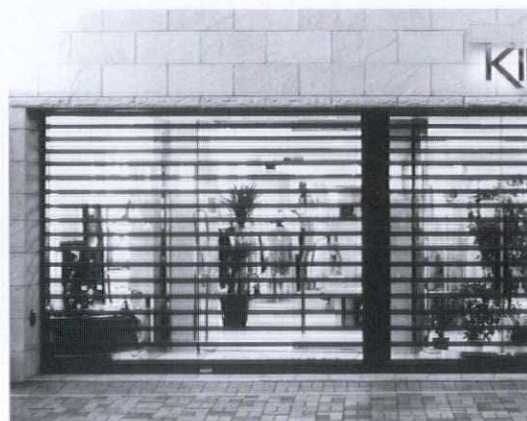
この街の、人と夢を守るために。



ビル用重量シャッター



住宅用窓シャッター



店舗用透明シャッター

ビル建材、店装建材、住宅建材：etc。私たち三和シャッターは多彩な商品の提供と、サービス&ケアで、みなさまの暮らしに貢献してきました。ビルや工場の開口部を守るさまざまなシャッター。店頭を彩り、ファサードをつくるさまざまなドア。その街に住む人そして夢をまもるために、24時間がんばりつづけています。これからも三和シャッターは、総合建材のトップブランド企業としてみなさまの暮らしに役立つ活動ができるよう努力していきたいと思ひます。

三和シャッター工業株式会社

本社 〒163-04 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル44階 Tel.03(3346)3011(代表)

スポーツ、イベント、コンベンションなど、多様な用途に対応するドーム空間は
地域の活性化、新しい街づくりの中核をなす施設として全国各地で注目を集めています。

しかし、さまざまなイベントを成功させるためには、

高度な機能はもちろん、ひとびとを包む快適かつ創造性に満ちた空間が求められます。

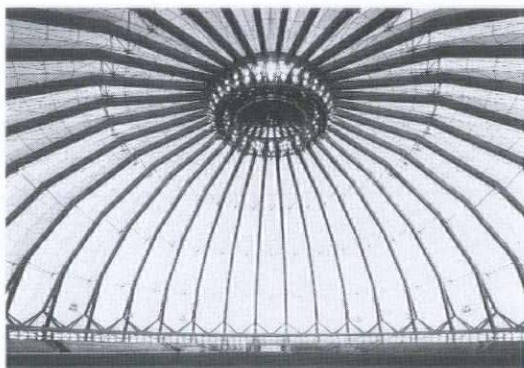
これらの要求に応え、カジマは数多くの大空間建設で培った実績と先進技術を結集し、各種ドームを開発。

それぞれの地域、用途、目的にもっともふさわしいドームを提案、実現してきました。

すでに、これらのドームでは、野球やサッカーなどのスポーツやコンサート、文化・産業イベントなどが開催され、
ひとびとにダイナミックな空間体験と大きな感動を与えています。

熱中大空間

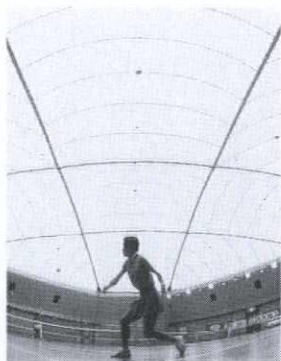




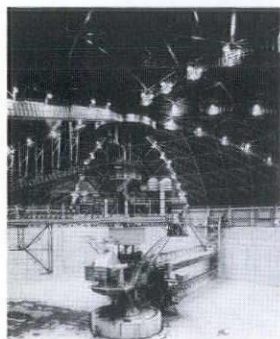
出雲ドーム(木造ドーム)
大空間に日本の伝統美を生かした木造とスチールによるハイブリッド膜構造。



あきたスカイドーム(スーパーパラソル・ドーム)
自然光を透過する膜屋根とスチール造のスーパー・スペースアーチによるハイブリッド膜構造。

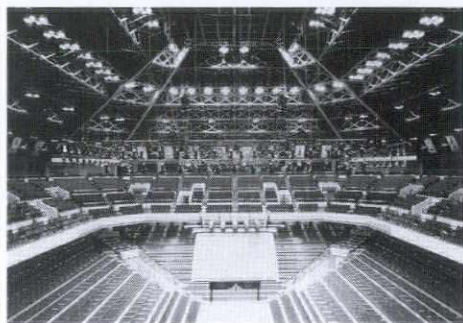
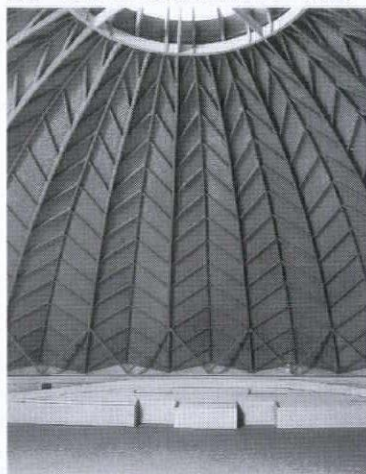


クリエイティブ・テニスガーデン千葉(エアドーム)
膜屋根を空気で支えるため超大スパンにも対応が可能、戸外のような明るい大空間。



竹原火力発電所貯炭場内部(ラメラドーム)
安全性・経済性にすぐれ、あらゆる用途に対応できる鉄骨ドーム。

信州博覧会グローバルドーム(木造ドーム)
国産から松材による大断面集成材をはじめて採用。



新国技館(スチールトラス)
多様な設計条件にフレキシブルに対応できる豊富なトラス技術ラインナップと建設実績。

大空間の安全を支える 確かな技術。

強風や地震、火災、温度変化などに対して総合的な観点から最良のものを採用。コンピュータを駆使した構造解析や各種シミュレーションなどにより究極の安全性確保に努めています。

大空間をドラマチックに演出する 照明・音響技術。

スタジオ・コンサートホールなどの豊富な設計・施工実績をもとに最新の実験設備による実験・研究を重ね、それぞれの用途に応じたクオリティの高い照明・音響システムを提供しています。

より快適な室内環境をつくる 空調技術。

大型模型による温度分布シミュレーションや観客席における気流の実測を重ね、これらのデータを基に、最も快適な室内環境実現のための空調設備をトータルシステムで組み込みます。

鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社: 千107 東京都港区元赤坂1-2-7
お問い合わせは—
建築技術本部 (03)3404-3311(代)

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY

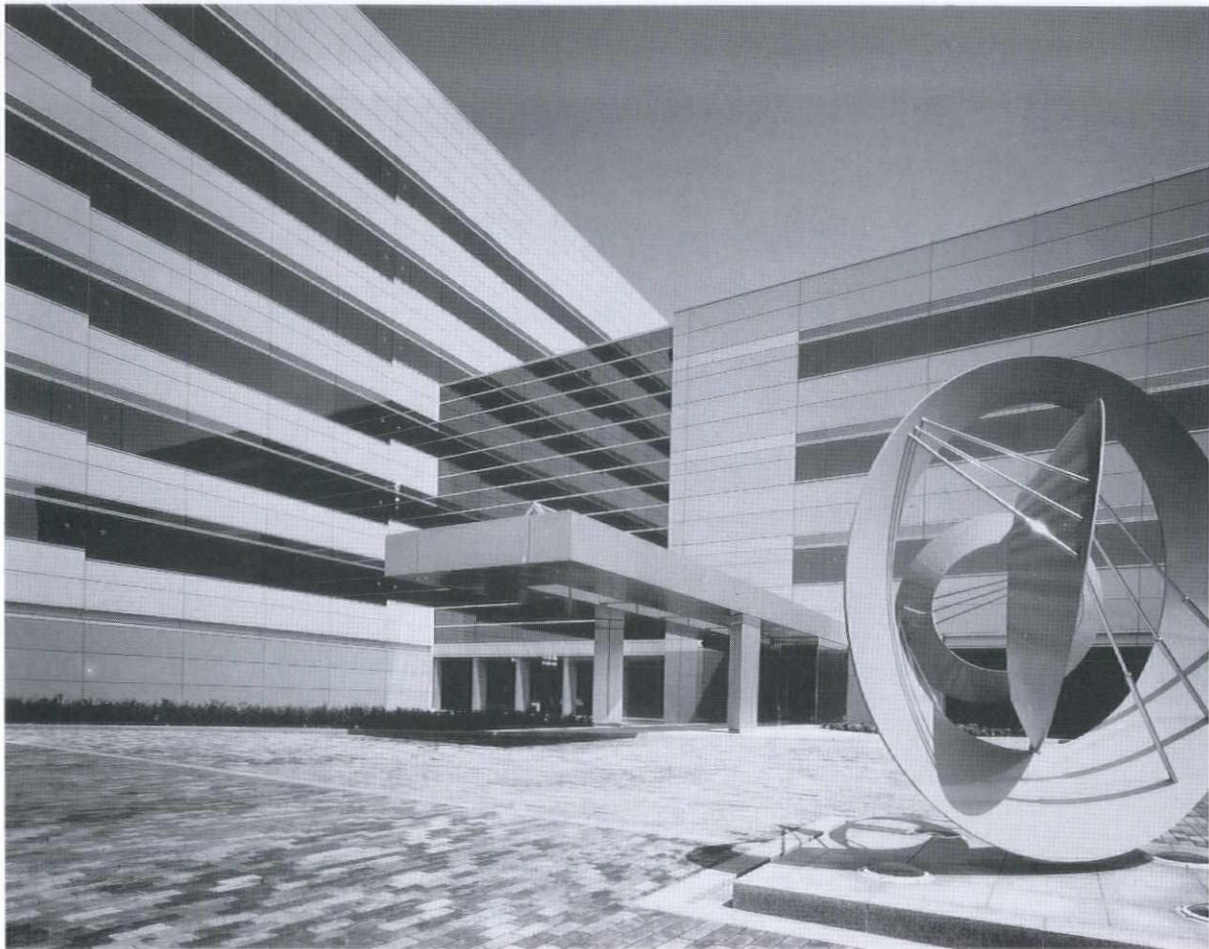
軽井沢
 **ホテル 鹿島ノ森**
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎03(3478)6220
現地 ☎0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335



大興物産の海外建材シリーズ

No.4 ガラス



埼玉・バイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーティアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問い合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店	☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719	シンガポール オフィス	☎65-3440590 FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248		
大阪支店	☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270		



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

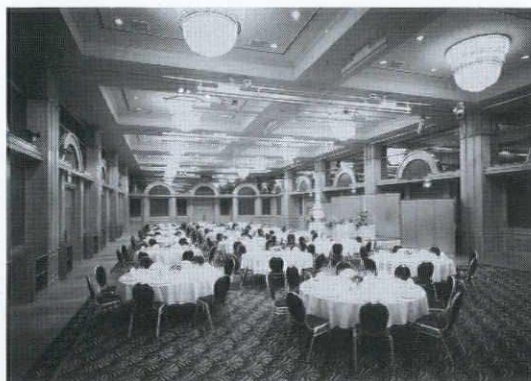
ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



大宴会場 永代

HOTEL
East
21
TOKYO

地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775



日本アス仕様

それぞれの味を生かし

防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ベストロン

NS防水

カナート



総合防水メーカー

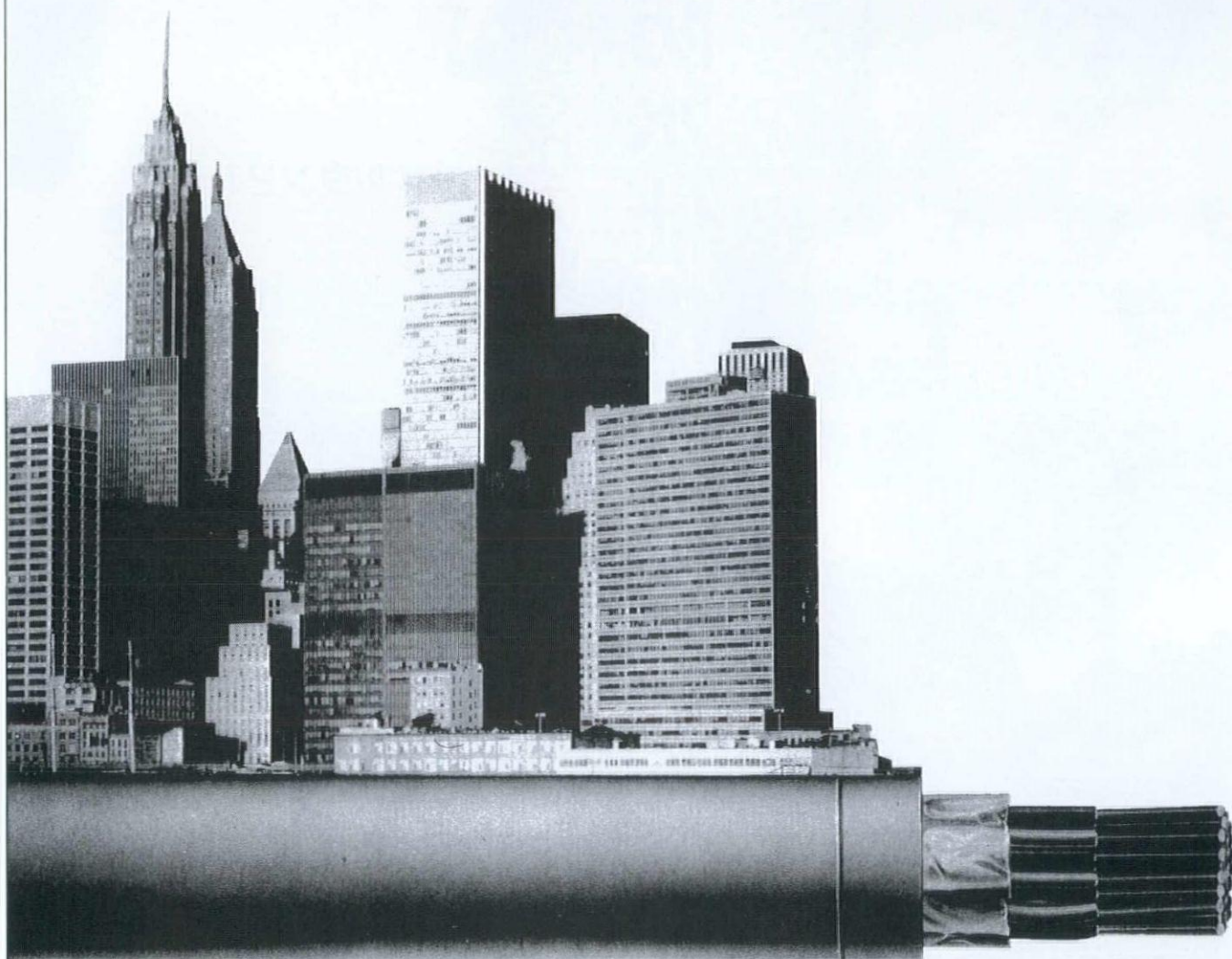
日新工業株式会社

営業本部 103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京	☎03(5644)7221 (代表)	福岡	☎092(451)1095 (代表)
千葉	☎043(245)0201 (代表)	札幌	☎011(281)6328 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	仙台	☎022(263)0315 (代表)
大阪	☎048(642)5811 (代表)	広島	☎082(294)6006 (代表)
名古屋	☎06 (533)3191 (代表)	松山	☎0878(34)0336 (代表)
	☎052(933)4761 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)

広告についてのお問合せの際は<SDを見て>と御明記願います

ビルにも神経があります。



古いビルも最新のビルも確実な電気工事で支えています。

ビルにとって電気系統の働きは、人体にはりめぐらされた神経の働きに似ています。外部の情報を収集したり、整理して送るなど、まさにコントローラーの役目をもっているからです。とくにこれからの高層ビルは、複雑な建築技術が必要なだけに、ビルの中樞神経といわれる電気系統の安全性、合理性、経済性などは、ビルがより良く機能するうえで欠かすことのできない条件です。私ども弘電社は1本の配線にも、細心の注意を払って確実な設計、施工を行なっています。

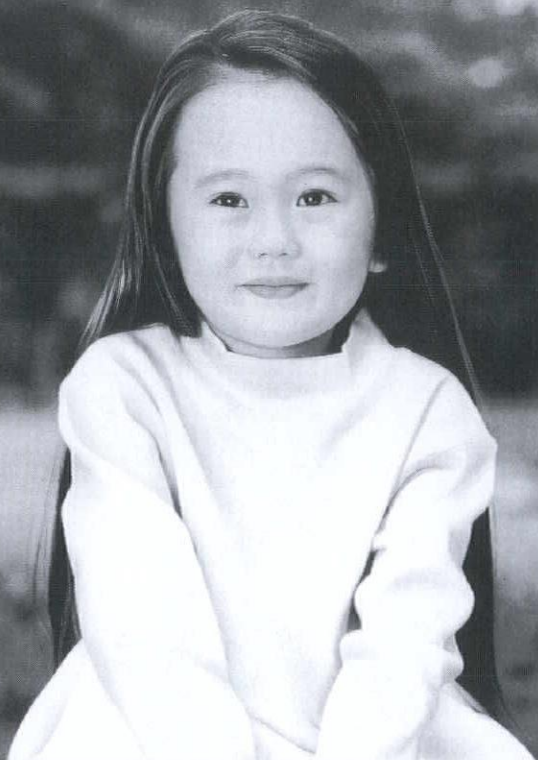
電気工事のパイオニア



株式会社 弘電社

取締役社長 巽 圭 吾
〒104東京都中央区銀座5-11-10
TEL.03(3542)5111

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.



建築設備の一役を担う

電気設備工事

最新の技術と信頼される施工



大栄電気株式会社

代表取締役社長 伊藤 赳

本社 東京都中央区銀座3-7-10 TEL 03(3562)0311(大代表)

支店営業所 大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、
浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄

Kinden
CORPORATION



都市の鼓動が、
聴こえますか。



現代社会の知力である「情報」。都市の動脈ともいふべき「エネルギー」。そして人が快適に暮らし、働くための「環境」。都市は、いまやそのどれ一つが欠けても機能しないと言えるでしょう。私たち〈きんでん〉が柱として取り組んでいる分野は、まさにこうした都市に生命を吹き込むもの。たとえば、光通信やCATVなど、マルチメディア社会を実現する情報通信ネットワークシステムの構築。住まいやオフィスの快適性を向上し、心を豊かにしてくれる環境づくり…これらは、これからの都市づくりに欠かせないものです。現代の都市をいきいきと息づかせるために。未来の都市がさらに豊かで創造的なものであるために。私たち〈きんでん〉は総合設備エンジニアリングをさらに発展させたいと考えています。人・都市・地球のためにできること。〈きんでん〉は、あなたのそばで考えます。

都市に生命を吹き込む技術——きんでん

株式会社 **きんでん**

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 〒531
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 〒141

9401 原 広司 3500円
地球外建築、空中都市、梅田スカイビル、JR京都駅、原部、グラーツ・影のロボット、ヤマトインターナショナル、他。論文:原広司、B.ボグナー、三宅理一、他。写真:宮本隆司、大野繁

9402 台湾現令設計観察 1950円
建築と都市を中心とした台湾現代デザインを紹介。台湾建築:李祖原、吳增榮、潘冀、陳瑞憲、他。グラフィック:劉潤、陳龍宏。写真:陳春緯。取材・監修:村松伸、小嶋一浩

9403 バイオクライマティックタワー 1950円
自然環境との適合を課題とした高層建築を模索するマレーシアの建築家ハムザ&ヤング。文:池田武邦、ケン・ヤング、他。[都市を考える—The Cell Cityの提案]大都市を複数の細胞に区分する新提案

9404 堂夢の時感/木島安史の世界 3000円
作品:寿聖庵、孤風院、YAS居、球泉洞森林館、折尾スポーツセンター、設計競技作品、他。文:木島安史、桐敷真次郎、木村俊彦、高橋青光一、橋本文隆、他。略年譜、作品データ、執筆一覧

9405 東ドイツの近代建築 1950円
旧東ドイツの近代を歴とした表現主義建築を、35都市にわたる調査をもとに紹介。クリンゲンベルクのダム(H.ベルツィヒ)、アインシュタイン塔(メンデルゾーン)、他。文+写真:長谷川肇

9406 アートがつくるワークプレイス 2500円
「働く人々のための空間とアート」に着目し、海外の事例を紹介。文:南條史生、D. F. ハンセン。アーティスト:アンドレア・プラム、他。企業等:IBM、ブリティッシュ・カウンシル、他

9407 ビーター・ウォーカーの世界 2200円
アメリカ・ランドスケープ・アーキテクトとしての彼の初期から現在にいたるまでの主要作品を紹介。東京海上東日本研修センター、IBMクレアレイク、バーネット・パーク、ロングエーカー公園、他

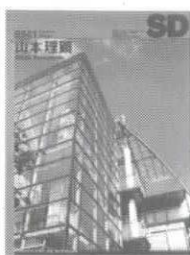
9408 マッシミリアーノ・フクサス 1950円
フランスを中心に展開する近作を紹介。ロランのヨーロッパ建築研究所、他。文:D.マンドレリ、堀池秀人、他。[異界の僧院—モルドバのルーマニア正教会堂] 写真:平剛、文:山崎揚史

9409 思考と建築・都市:アメリカ東海岸の新たな動向 1950円
B.シャーマン&キブニス、マイケル・ソーキン、他。文:松畑強、他。[「手法」から「縁起」へ/吉川油脂寄宿舍]TAO ARCHITECTS/野田俊太郎、写真:堀内広治

9410 トロハの通した構造と空間 3000円
鉄筋コンクリートを表現の素材として追求したエドアルド・トロハの遺作を紹介。[芸術都市への群生/イタリア・ジベリーナの試み]地震で全壊した同市の復興プロジェクト

9411 シティ・ターミナルの空港建築 3500円
世界22の空港を挙げ、ターミナル・ビルに技術的、デザインの可能性を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・メトロポリタン、関西国際空港、他。文:ディヤン・スジック、他

9412 SDレビュー1994 1950円
第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、J.ビザル+P.ルゲ、吉松秀樹、石黒由紀+田端繁、遠藤秀平、城戸崎和佐、中村勇大、他。[国際競作プロジェクト/オシヴィエンチム孤児院]



9501 山本理顕
作品:緑園都市、岩山町立総合中学校、庵泉老人デイケアセンター、保田窪第一団地、他。写真:北嶋俊治、大野繁。論文:山本理顕、宇野求、T.ヘネガン。鼎談:横文彦+植田実+山本理顕 3000円



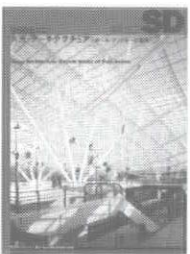
9502 南イタリアのバロック建築
地中海の島シチリアとプーリア地方サレント半島のレッチェを中心に、南部イタリアのバロック建築を紹介。掲載都市:パレルモ、シクリ、他。写真:小野一郎。文:竹山博英、長谷川正允、岡田哲史 1950円



9503 集合住宅の現風景
近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。文:作品:荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永謙、松永安光、元倉真琴。座談会:植田実+室伏次郎+松隈洋 1950円



9504 テクノ・スケープ
テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザインへの新たな視線を提示する。文:宇野求、岡河貢、永瀬唯、A.ロジェ、他。座談会:中村良夫+三谷徹+宇野求。東京湾岸マップ 3000円



9505 メガ・アーキテクチャ
巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作を紹介。シャルル・ド・ゴール空港、TGV-RER駅、他。対談:安藤忠雄+P.アンドルー。[神戸外国人居留地の形成とその展開] 文+構成:坂本勝比古 1950円



9506 デジタル・アーキテクチャの可能性
インタビュー:原広司、伊東豊雄、N.M.ディナーリ、他。CAD研究室将来の可能性:笹田研究室、両角・位寄研究室、他。[自然と共存する家具] 写真:浅川敏 1950円



9507 柳澤孝彦/美術館の空間とディテール
作品:東京都現代美術館、富岡市立美術館、郡山市立美術館、他。文:鈴木博之、内藤廣、青木淳、大野秀敏。座談会:宇佐美圭司+柏木博+柳澤孝彦。写真:村井修 2700円



9508 まちのパブリックスペース
人々の日常生活と密着した公共施設である交番・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリエ作家の近作からみる。作品21点。文:中川理、仙田満。オンライン座談会:青木淳+中川理+花田佳明 1950円



9509 丹下健三
最新作シンガポールの超高層ビル[UOBプラザ]、新宿の新たなスカイラインを構成する[新宿パークタワー]を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。 3800円



9510 環境に呼応する建築:シーザー・ペリの最新作
近年、海外での活躍が目されるペリの最新作を紹介。[ランドマーク・グラフィティ—「タワー・アート」に通天閣:ヴァナキュラーな電脳都市展」より] 1950円



9511 長谷川逸子:1985-95
過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介。作品:山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館他、全30作品。論文:ピーター・クック、他。対談:多木浩二+長谷川逸子 3000円



9512 SDレビュー1995
第14回SDレビュー誌上発表。由田徹+岡本美樹、李鏡男、トム・ヘネガン+アーキテクチャ・ファクトリー [Villa Romana:ローマのヴィラと庭園] [水戸岡鋭治のトランスポート・デザイン] 1950円



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武蔵 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐賢館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、尻別山家、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井晟一。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文＝荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円



横文彦②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

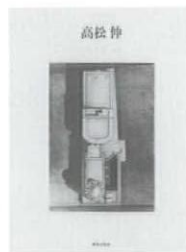
4326円



伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で育かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



高松 伸

高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磁き込まれた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。経緯Ⅰ、Ⅲ、他。

3800円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンベスまで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

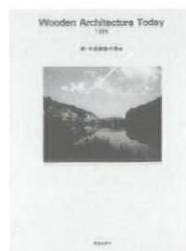
4300円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

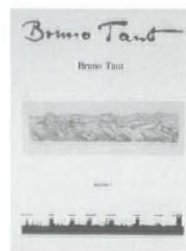
3300円



続・木造建築の現在

海外61作品。国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

3708円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスボラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザールその歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレンゴの形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館 (TEPIA) というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



磯崎新③ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

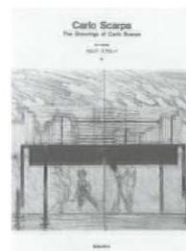
4800円



磯崎新④ 1985-1991 part 2

part 1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム・ディズニー・ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディウム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

4500円



カルロ・スカルパ図面集

プリオン家墓地进行と主要作品のドローイング約150点を収蔵。プリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

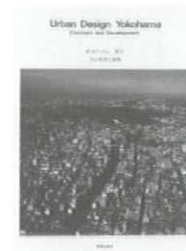
3500円



安藤忠雄③アンビルト・プロジェクト

'70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトⅡ、Iギヤラリー、大淀の茶室、他。

3800円



都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦×表原敬×小澤恵一、他。

5000円

都市づくりを仕掛ける：建築家たちの実践

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
山田良 大野由美
飯塚りえ
アドバイザー：伊藤公文

6	鼎談：継続する都市づくりをめざして	岡田新一+八束はじめ+堀池秀人
13	くまもとアートポリス	
16	くまもとアートポリスの評価と課題	川上 隆
17	くまもとアートポリスの近況	八束はじめ
	牛深ハイヤ大橋 白川橋景観整備——フライングライト 馬見原橋 杖立橋+杖立橋多目的ホール 鮎の瀬大橋 熊本市営新地団地A-E棟 県営電蛇平団地 石打ダム資料館 花の温泉館 有明フェリー長洲港ターミナル 泉村ふれあいビジターセンター	公園ファニチャーデザイン 教会の見えるチャペルの鐘展望公園 TOTO AQUAPIT ASO うしづか海彩館 天草ビジターセンター・展望休憩所 つなぎ物産ギャラリー・グリーンゲイト 県立天草工業高等学校実習棟 不知火町図書館・美術館 熊本北警察署坪井交番 荒尾警察署長洲交番
53	クリエイティブTOWN岡山	
56	CTOの目指すもの	長野士郎
57	都市環境の創出と設計者選定	岡田新一
	県営中庄団地建替 作陽音楽大学倉敷キャンパス 電子の驛(給水塔) 倉敷市立玉島北中学校 グリーンヒルズ津山 岡山西警察署庁舎 岡山県南部健康増進中核拠点施設	加茂川町民体育館 ひるぜんジャージーランド・ビジターセンター 県立総合教育研修センター 県立鳥城高等学校・生涯学習推進センター 健康の森 水島サロシ 岡山県バイオテクノロジー研究所
109	長崎アーバン・ルネッサンス	
111	ナガサキ・アーバン・ルネッサンス2001構想について	徳永正憲
112	癒し ^{ヒーリング} の詩学：文化的戦略として	堀池秀人
	長崎港ターミナルビル 長崎港元船B棟上屋 長崎港元船C棟上屋	
129	白石メディア・ポリス	
131	「くらし日本一のまちづくり」を目指して	川井貞一
132	「白石デザイン会議」の試み	川向正人
134	デュアル戦略 ^{ストラテジ} の都市づくり	堀池秀人
	白石市立白石第二小学校 しらさぎ橋美装計画 白石デザインフォーラム展示デザイン	STREAM(白石市北保育園) VELO・CITY(白石市文化体育活動センター) ZONA(福祉の里)
148	知事の意識と官僚制	三宅理一
150	まちづくりと建築家の活動	国吉直行
154	連載：apple tomology MOVE FORM トムの時空形象学 4 チューブとネット	戸村 浩
157	展覧会レポート：「抽象性／透明性・再考」考 ライト・コンストラクション展	松畑 強
158	展覧会レポート：若き建築家6人香港に上陸 インビジブルランゲージ——香港展	伊藤公文
160	展覧会レポート：彫刻家と建築家の共同製作の可能性 イサム・ノグチとルイス・カーン——刻み込まれたランドスケープ	垂井洋蔵
161	展覧会レポート：風景の生成 クリスト&ジャンヌ=クロード展——梱包されたライヒスタークと進行中のプロジェクト	渡邊高宏
162	書評	
164	新刊紹介	
165	お知らせ	
168	ニュース：ランドスケープ／人工と自然の風景 景観工学と風土——日仏工業技術会シンポジウム	宇野 求
169	海外建築情報：ビルディングタイプ その4 戦争博物館	

発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子
発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内取次店：トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社特別定価：2,800円
[本体2,718円]年間直接購読料：25,000円
特別定価号+送料込み表紙：
長崎港ターミナルビル
STREAM(白石市北保育園)
岡山県営中庄団地建替(期)
熊本県営新地団地表紙写真：
大野 繁
田中宏明
浅川 敏
岡本公二
表紙デザイン：小泉均

Special Feature:

The Architects' Record in the Pursuit of Urban Design

6	Discussion: Toward City Building with Continuity	Shinichi Okada+Hajime Yatsuka+ Hideto Horiike
13	Kumamoto Artpolis	
16	The Achievements and Problems of the kumamoto Artpolis	Takashi Kawakami
17	Recent Developments at the Kumamoto Artpolis	Hajime Yatsuka
	Ushibuka Haiya Bridge Shirakawa Bridge Landscaping: Flying Light Mamihara Bridge Tsuetate Bridge+Tsuetate Multipurpose Hall Ayunose Bridge Shinchi Public Housing Complex Block A-E Ryujabira Public Housing Complex Ishiuchi Dam Museum Ubuyama Green House Spa Nagasu Harbor Ferry Terminal Izumi Visitor's Center Park Furniture Prototypes Sakitsu Hilltop Park TOTO AQUAPIT ASO Ushibuka Fisherman's Wharf Amakusa Visitor's Center, Service House Tsunagi Gallery for Local Products Amakusa High School of Industry Shiranui Town Culture Center Tsuboi Koban Nagasu Koban	
53	Creative Town Okayama	
56	The Objectives of Creative Town Okayama	Siro Nagano
57	The Creation of Urban Environments and the Choice of Architects	Shinichi Okada
	Nakasho Housing Reconstruction Sakuyo Academy Kurashiki Campus The Electronic fold (Water Supply Tower) Tamashima Kita Junior High School, Kurashiki Green Hills Tsuyama West Okayama Police Headquarters Southern Okayama Prefecture, Central Health Promotion Facilities Kamogawacho Civic Sports Center HIRUZEN Jersey Land: Visitor Center Okayama Prefectural Teacher Training Center Okayama Prefecture Ujo High School and Lifelong Learning Kenko no Mori Mizushima Saloon Okayama Prefectural Research Institute of Biotechnology	
109	Nagasaki Urban Renaissance	
111	On the Nagasaki Urban Renaissance 2001 Plan	Masanori Tokunaga
112	Cultural Strategy and the poetry of Healing	Hideto Horiike
	Nagasaki Port Terminal Building Nagasaki Port Warehouse B Nagasaki Port Warehouse C	
129	Shiroishi Media Polis	
131	Community Building for "The Best Living Environment in Japan"	Teiichi Kawai
132	The Shiroishi Design Conference Challenge	Masato Kawamukai
134	A Dual Strategy for City Building	Hideto Horiike
	Shiroishi Municipal No.2 Elementary School Shirasagi Bridge Shiroishi Box (XX Box / Type 001) STREAM (Shiroishi Nursery School) VELO-CITY (Shiroishi Messe) ZONA (Health and Welfare Village for Aged People)	
148	Governor's Views and the Bureaucracy	Riichi Miyake
150	Community Building and the work of Architectures	Naoyuki Kuniyoshi
154	Series: MOVE FORM apple tomology 4 Tube and Net	Hiroshi Tomura
157	Exhibition Report: A Reexamination of Abstraction and Transparency Light Construction	Tsuyoshi Matsuhata
158	Exhibition Report: Six Young Japanese Architects in Hong Kong Invisible Language—Tokyo - Hong Kong 1995	Kobun Ito
160	Exhibition Report: The Potential for Collaboration of Sculptors and Architects Isamu Noguchi and Louis Kahn	Yozo Tarui
161	Exhibition Report: Creating Landscapes Christo and Jeanne Claude—Wrapped Reichstag, Berlin, 1971-1995 and works in progress	Takahiro Watanabe
162	Book Review	
164	Book Information	
165	Announcements	
168	News: Landscaping: Combining the Natural and the Artificial Land scape Engineering and Climate	Motomu Uno
169	Eminent Works Abroad: Building type3 War Museum	

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J

Printed in Japan

This Copy: ¥2,800
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 184

Cover:
Nagasaki Port Terminal Building
STREAM/Shiroishi Nursery School
Nakasho Housing Reconstruction
Shinchi Public Housing Complex B

photo:
Shigeru Ohno
Hiroaki Tanaka
Satoshi Asakawa
Koji Okamoto

Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

特集

都市づくりを仕掛ける： 建築家たちの実践

Special Feature

The Architects' Record in the Pursuit of
Urban Design

くまもとアートポリス

クリエイティブTOWN岡山

長崎アーバン・ルネッサンス

白石メディア・ポリス

Kumamoto Artpolis

Creative Town Okayama

Nagasaki Urban Renaissance

Shiroishi Media Polis

都市づくりでは、
いかにしてその都市に刺激を与え、
市民の意識を触発する空間を
形成できるかにかかっている。
近年自治体では、
各々のアイデンティティの確立をめざし
建築家を登用した都市づくり・まちづくりを
推進しようという動きがある。
その方式としては、
コミッショナー、プロデューサーと
称されるところの
個人のリーダーシップに期待するもの、
数名によって構成される
委員会運営によるもの、
地域に溶け込む参加型のものなど、
ほか様々なかたちが模索されている。
ここに紹介するものは、
そうした建築家たちの
積極的な参加のもとに展開されている、
まちづくり、都市づくりへの実践であり
バブル崩壊という荒波を受けながらも、
継続されるべき都市づくりへの
果敢な挑戦でもある。

継続する都市づくりをめざして

岡田新一×八束はじめ×堀池秀人

委員会方式 vs コミッショナー方式

八束：熊本の場合は、細川前知事がベルリンにIBA（ベルリン国際建築展）を見にいかけたことがきっかけになっています。IBAとアートボリスはずいぶん違うタイプのプロジェクトで、IBAはご存知の通り、ベルリンでは何回かやられている国際建築博覧会の形式を踏襲したというような経緯があって、ヨーロッパではわりと伝統的に行われていた手法だったかと思います。それに対して熊本の場合は、従来の公共建築の範疇の手法を見直していこう、特にデザインが持っている文化的な意義、価値をどういう形で評価して発注方式に取り入れていったらいいかというようなことから始まったわけです。この方式という点では、今回の3県1市の4プロジェクトの場合は、コミッショナーとかプロデューサーという言い方で、個人—この場合、建築家になります—が個々のデザインのクオリティに関して責任を負うということで、従来の委員会と違った形でポリシーと見識というか、ヴィジョンを明らかにして、その責任を個人が負っているという格好ですね。それに対して、広島市では幾人かの異なった分野の委員が今後の計画を推進していくというような話でごく最近立ち上がって、伊東豊雄さんも関わっていると聞いています。また、京大の布野修司さんたちが島根で一連のコンペを通じて新しい発注方式を定着させていこうとしておられます。熊本以前にも、東京都や埼玉県には設計者選定委員会があって、最近ではかなり大規模なものもそれで決まるようになってきているという流れがあるように思います。

こういうようなシステムのときには、個人か委員会かというのは大きなチョイスだし、今回は個人寄りのシステムが主として取り上げられているわけですが、当然それぞれの利点があるだろうと思います。熊本の場合でいえば、当初、ひとりが決めるというのはいかがなものかという意見があったわけですが、それ以降は成果が認められたのか、比較的順調にきたように思います。特に、役所の場合はどうしても単年度で事を済ませたいということがあるものですから、我々としては時にはその条件では十分な設計ができないかもし

れないということで、お断わりしたケースもあったくらいで、決断に長々と時間をかけているわけにいかないという意味では、個人のイニシアティブが強かったことには明らかな利点があったと思います。

一方、委員会で決めるというやり方は、中井正一の有名な本がありまして、それ自体としては面白い考え方だと思うけれども、現実には日本の、特に官庁で採用されている委員会方式は、中井のイメージしたようなものとはえらく違って、広く意見を聞くという点は確かにいいことだと思うけれども、最終的には最大公約数風の、要するに無難な選択になってしまう。そうすると本当に優れた人材を探すという本来の目的よりは、みんなから文句を言われないということの、どうもアリバイづくりに委員会になっていることが多いような気がしてしょうがないですね。そういう意味では、熊本は今のところうまくいっていると思います。

ただ、長くやっていると、熊本の場合は仲間うちにとどまらないように広い範囲のいろんな個性の方にお願いをしてきたわけですが、システムが好ましいか好ましくないかということ以前に、そんなに人材がいるわけじゃないということがあります。コミッショナーというのは個人に立脚する、あるいは個人の資質によりかかる部分が非常に大きいと思いますが、やはりシステムとしても継続されなきゃいけないということで言うと、個人色の是非というのはそれぞれあるだろうし、少し違うカラーを入れることも必要だろうと。これは熊本を7年間やってきた僕の実感ですね。

岡田：個人か委員会かという問題は、都市をつくるのか建築をつくるのかということと絡んでくるわけですね。僕は、建築というのはやはり建築家がつくる、これは本当に個人の問題だと思います。だけど都市というのは、もっと広い建築の集合で都市ができるわけで、都市を個人でつくれるかという問題は、これは絶対つくれるはずがないですね。ただ、だから委員会となると、それは短絡すぎると思います。

僕は都市における個人というのは、一人の人間の人格じゃなくて、都市をつくるコンセ

プトというか、あるいは都市をつくるイメージというか、個性ある都市のイメージ、それを「個人」という言葉で置き換えて論じられるかと思います。そういう意味から、都市をつくるには、はっきりしたイメージがなきゃいけない。都市には多くの人が住んでいるけれども、あたかも「個人」に置き換えられるようなイメージが都市にはなければいけない。都市計画的に統合されたひとつのコンセプトがなきゃいけない。例えば、明治期に東京からつくられたときには、コンセプトがあったけれども、今となってはそういうコンセプトが薄れてきていることによって、東京の混乱というものが出てきているわけですね。

そういう意味で、CTO（クリエイティブタウン岡山）は都市づくり、まち並みづくりというテーマが与えられているけれども、それをひとりの建築家がデザインしていくというのはまずできるはずがない。ところで、僕が個人の資格でコミッショナーをやっているということは、僕がデザインをやるわけじゃなくて、そこにひとつの統合されたコンセプトを入れていきたいということです。そこに個性ある都市のイメージを表すことができるのではないかな。だから建築家を選ぶにしても、前衛的な建築家に目をつけるのではなくて、まちづくりのコンセプトに合った建築家を指名するという方向です。

都市というのは、100年200年、それ以上の時間にわたってつくられていきますね。そうすると、そういうコンセプトが継続していくことによって都市というのはできるわけで、その継続にまた意味があると思います。日本の場合には、まだ都市に対するそういう思想がないものだから、首長が代わるとそのポリシーを受け継がない、むしろ意識的に避けるということがあって、これは都市をつくる上では非常にマイナスですね。そういったことがまた日本の都市の混乱のもとでもあるということで、岡山県でも首長が代わるときに、都市づくりに対するポリシーが継承されるだろうかということが僕の大きな関心事ですね。

パリやベルリンでは、パリならばナポレオン、ベルリンならばカイザーの時代に骨格がつけられて、そこで両都市のイメージという



岡田新一／建築家／1928年生まれ
1955年 東京大学卒業
1957年 東京大学大学院修了
1963年 イェール大学大学院修了
1956年 鹿島建設設計部入社
1964年 SOM勤務
1969年 岡田新一設計事務所設立、
AIA名誉会員
クリエイティブTOWN岡山コミッショナー

ものが出てきています。ミッテランもコールにしろ、それを受け継ぎながら都市をつくろうとしている。そういう流れというか、コンセプトの継承がすごく重要だと思います。だから、そういう日本にないやり方の種をまいて岡山に都市づくりの土壌をつくっていくことができればいいというのが僕の考えであり、CTOの狙いです。

八束：長崎の場合は、一応委員会が別にあることはあるようですね。それは「アーバン・ネッサンス構想」が先行プロジェクトだったからということなんですか。

堀池：ええ。「アーバン・ネッサンス構想」は、他のいろんな都市でやっているような都市づくりと全く同じようなやり方で、約50人の委員会です。その辺で多数決にもっていかざるを得ない部分があって、当然の成りゆきですが、可でもない不可でもないというところが居心地がいいために、そこにどうしても結論が向かってしまう。そのために、それぞれの委員の方々がやや不満を持ちながら参加しているように感じられました。

先ほど八束さんがおっしゃったように、民主主義のルールでやろうということを前面に出していきまると、どうしても合理ということで割り切っていくかざるを得ないような方法になっていくわけですね。結果的に「船頭多くして舟山に上る」ような話になってしまっ、それぞれの構成している委員やメンバーの人たちの思いもよらぬ方向にいつてしまう可能性だって出てくる。

そういうことに対して白石の市長が非常に明快だったのは、作家性を非常に強めた都市づくりをとまっておっしゃったわけです。市長は民主主義が間違っているとおっしゃったわけではなくて、そういうことについてもう1回仕切り直して、振り返って見直す必要があるだろうというわけで、そうしたことから委員会方式とは違ったやり方という発想になって、僕はこれにはひとつの安全弁があるだろうと見ています。

というのは、先ほど岡田先生がおっしゃったように、都市づくりというのは継続していくことが大事なことでと思います。一方で首長が代わると継続性がなくなるという問題が起こっているわけですが、熊本の場合は幸い

首長が代わっても継続されたわけですね。これは非常にハッピーなケースで、首長は代わらなくても、コミッショナーないしプロデューサーが代わるということもあり得る。それが僕は安全弁だと思います。

白石の場合に、市長に僕が一番最初にお願したの、プロデューサー職を1年ごとの契約にしてください、だめだったらそこで堀池をキックアウトしてください、それを判断するのは市長です、ということをお願いしたわけですね。結果を1年間で判断するのが非常に難しいことは百も承知ですが、不穏動きがあったりとか、そういう段階でキックアウトできるような安全弁はつくっておきたいという意味で、1年ごとに契約を更新する形をとってください。これは長崎でもお願いして、契約は1年ごとにしてもらいました。

文化というのは、数の論理で芸術を評価するのが非常に無謀なことに映るように、どうも多数決でつくっていくものとは相容れない部分があるはずだと思います。その辺をこれまで長いこと、わが国だけではありませんが、民主主義を標榜している国々の中では、合理で割り切っていくということが前面に出過ぎたために、無味乾燥な都市ができてしまった、という言葉が一番言い当てていると思いますが、そういう批判が起こってしまった。長崎の知事も白石の市長も、そういうことをうすすら感じられたところからスタートしたというのが特徴だったと思います。

岡田：1年単位で考えるというのは、僕は疑問を感じますね。建築ひとつとっても1年では終わらないでしょう。少なくともプロジェクトが起こって完成するのに数年かかるし、何期かの工事に分かれれば10年以上のプロジェクトはいくらでもあるわけだから、つくる立場で考えると、僕には1年というのはとても考えられないですね。

八束：岡山の場合は、熊本と同じように4年が1期みたいな言われ方がありますが、実は熊本の場合は4年1期という言い方はしているけれども、4年ごとに節目のイベントをやるという程度のこと、あれは別にコミッショナー任期じゃないんです。

僕もどちらかというと、やはり4年ぐらいはやってみないとなかなか利点、欠点が見え

てこないんじゃないかなという気はします。その節目でどううまく変えていけるか。熊本の場合、先ほど堀池さんが言われたように、知事が代わられたにもかかわらず続けられたということが非常に重要なことだったと思います。それは現知事の英断だったとも思うのですが、同時に、仮にコミッショナーが代わってもアートボリスがつぶれてしまったというふうにはならない。あるいはクオリティががたっと落ちてしまったというふうにはならないようにすることは非常に大事ですね。コミッショナー、プロデューサー個人の資質で左にも右にもいつてしまうようなことになる、やはりこのシステム自体にちょっと問題があるということの証になってしまうので、先行プロジェクトとしては、そういう個人に負っている部分とシステムが生かしている部分をどううまく折り合いをつけるかを示していく責任がある、というようなことだろうと思います。

委員会という意味でいうと、実は熊本は2期になってからアドバイザー・コミッティというのができました。実際に1期でいろんな問題が起きたわけです。アートボリスの場合、最初は卑小なレベルでのマスコミでの批判があつて、それは全く根拠がなかったわけではないですが、かなり大部分のものは無理解によって生じたもので、その後、理解を得てほとんど消滅していった。ただ、そういうレベルの話とは別に、実際に熊本でもすべての物事が理想的に動いたわけではないし、いろんな問題があった。それを諸方面から指摘していただいて、ではそれをどうやって実際の運営に反映させていくかという事です。ただし、いきなり問題を全部、無加工なままコミッショナー側につけてこられると混乱をきたすでしょう。熊本の場合はアドバイザーシステムがもともとありまして、コミッショナーとアドバイザーと知事の、いわば三頭体制でやっていたわけです。そのアドバイザーのもとにアドバイザー・コミッティができて、そこでいろんな問題を吸い上げて議論をして、やはり、これはコミッショナーに言ったほうがいいという場合には上がってくるというようなクッションがあります。

堀池：先ほどの任期の話でちょっと誤解があ



八束はじめ／建築家／1948年生まれ
1972年 東京大学卒業
1978年 磯崎アトリエ入社
1984年 UPM八束はじめ建築計画室設立
くまもとアートポリスコミッショナー事務局ディレクター

るようですが、僕は1年間で都市づくりができると考えているわけではありませんし、だからといって4年間で都市づくりができるとも思いません。何年がいいかという議論は今置いておきまして、僕が1年間と申し上げたのはあくまでも安全弁であって、実際は1年間で代えるというのはかなりリスクなことになるわけですね。都市づくりという観点から言いますと。現実には僕は何年間かやってきているということが、それを示していると思います。

例えば建築家を選ぶときに、偏らないように選ぶことが都市づくりにとっていいことなのかどうか。僕はそれをやってきたことが今までの都市づくりを可もなし不可もなしで、中途半端なものにしてしまったということにもなっていると思います。建築家を推薦する場合にはその責任が出てきますが、それ以降はその建築家に委ねてしまうので、そこで彼らの資質の中にある能力、個性とかそういうものがでてきて初めて、それが文化というものと橋渡しをしようとする行為になると思うんです。ただ、そこまでをコントロールしきれないというのは常にあります。だから、これは非常に難しいんですが、極端にいうと、どういう建築家を選ぶかということに関しての偏りがあってもいい。その人なりのちゃんとした視座が定まった上で選んでいくということであれば、僕はそれでいいというふうに割り切らなきゃいけないと思っていますし、それがこの方式の大きな売りにもなっていると思います。

だから、それをもしやらないで委員会に投げ返してしまったら、結局はもとの木阿弥になってしまうと思うんです。だから常にひとりになってしまうと自分への精神的な負担は大きくなってきますね。先ほど言った安全弁というのは、自分にとって精神的なチェックを受けるんだということを頭の中に常に置けるという意味で、精神的な逃れになっているのかもしれない。

プロデューサー／コミッショナーの資質

八束：他県あるいは他の自治体でもこういうシステムが今後も起こり得ると思いますが、

一体プロデューサーなりコミッショナーというのは何ができればいいか、あるいは建築家でなければいけないのか、というような質問をよく受けます。

ひとつには、バブルのときに、いわゆる商業空間のプロデュースをやる「空間プロデューサー」という非常に不思議な言葉ができたわけですね。アートポリスのシステムと商業空間のプロデューサーシステムとはどう似ていて、どう違うのか。あるいは、あの時代には広告代理店までも、片方でクライアントをいっぱい持っていますし、片方でいろんなタレントを探してきて、それを結びつけるのが彼らの商売ですから、自分たちでもそういうプロデューサーのシステムができるんじゃないかと考えられて、僕もいろいろ意見を求められたことがあります。

これに関しては、僕はかなりネガティブな答え方をしてしまっていて、建築というのは、施主とデザイナーをはじめとしたタレントを結びつけなければならないというものではない。あるいは外国人のデザイナーを採用する場合に、一種の安全弁というか保証としてゼネコンをつければそれでいいというものでもない。プロデューサーが建築家でなければならないかどうかは微妙なところだけれども、そのサイドに建築の実際の動き方を心得ている人がいて、節目節目できちんとした誘導ができていかないうまいかかと思っています。

もうひとつは、確かにプロデューサーなりコミッショナー個人で人を選ぶと、常に仲間うちを選ぶという批判があるわけですね。これはもちろん原則的には好ましいことではない。熊本の場合は、例えば磯崎スクールと呼ばれるものがあるわけではないし、アートポリスで参加されている建築家がそういうカラーに染まっているというふうには見られないで済んでいると思います。ただ、チョイスしていくときに、この人に仕事を任せてリライアブルかどうかというのは、我々もかなりナーバスにならざるを得ない。単に建築家としての仕事を、例えば雑誌なりを通じて知っているというだけでは怖いところがあって、僕としてはどうしても、その人がどういう仕事の仕方をする人かということを得た人材を探した。それで結果的にある程度知っている

人に話を持ちかけるという公算が強くなる。

幸いに熊本ではそういうことはなかったのですが、僕はいろいろ批判をされる可能性はあるだろうと思っていました。ただ、プロジェクトの進行をスムーズにするには、そのぐらいまでプロデューサー側あるいはコミッショナー側が踏み込んでいかないとうまくいかないんじゃないかなというのが、僕のこれまでの経験を含めての個人的な意見ですが、その辺りはいかがでしょう。

堀池：都市づくりは、先ほど岡田先生がおっしゃったように、建築をつくっていくことの集積であるということがひとつあると思います。もうひとつは、都市をターゲットにしてひとつの構想を組み上げていくということ、は、必ずしも建築をそのまま積み上げていきインテグレーションとして都市がその線上にあるということとも違う、もうひとつの論理があり得ると僕は思っていて、そのことに対しては、やはり建築家で、かつそういう都市的目配りができる人でないとできないだろうと思っています。

例えば、商業空間などのプロデュースで出ているようなやり方は、ある限定された範囲であるテーマパークとかそういうところでは、機能を発揮していけるのではないかと思います。僕はどうも都市づくりというのは、大きい小さいではなくて、単に商業というように目的を絞らないで、もっと広げた意味での社会的な影響とか、そういうものを判断の中に入れていかなければいけないという意味でも、そういう目線を配れる人でなければいけないだろうと思っています。

それから、プロデューサーは建築家であるべきかどうかというのは、建築家の中にそういうものが入るのか、あるいは建築家がそっちに入るのかという、その人の考え方があろうかと思いますが、建築家であることは非常に強い味方になってくれると思います。先ほど八束さんがおっしゃったように、建築をつくっていくという行為に対する理解がないとなかなかこのプロデュースというのはいくまもなく成立していかない行為ではないかと思っています。プログラムだけをプロデュースするという意味とはちょっと違うかなという感じがですね。

岡田：CTOで僕がやっていることはプロデューサーじゃないわけです。プロデューサーというのは、音楽でいえばコンダクターと同じようなことだと思いますが、ものをつくるためにタクトを振る、そういう役割を持ちますね。さっき都市は個人ではできないだろうと言ったと同じように、プロデューサーが都市をつくるなんてことは、まず僕自身は考えて

いないわけです。したがって、コミッショナーというのは建築家を事業主体に推薦する。推薦するときにはどういう目で推薦するか。どういう目であるところにプロデュースの意味合いが入ってくることは否めないけれども、プロデュースが先にあって、そのコミッションをするということじゃない。むしろ、プロジェクトは僕の知らないところで上がってくるわけですから、都市との関わりというのは、あまりコミッショナーとしての僕個人が表に出ないほうがよいかと思っています。そういう中で建築家を推薦していますが、推薦するときに、僕はむしろスクールを探すわけですね。例えば倉敷ならば浦辺調というのがあります。もし、倉敷の中に何かプロジェクトがあってそれをCTOに乗せようという場合には、浦辺スクールというものがやはり意識に上るわけです。同じように、どこかの地域でそこにいくつかのプロジェクトがある場合の選定では、スクールを頼りに見てみようとする場合があります。新倉敷周辺のプロジェクトがそれなのですか。

ところが、今日ではスクールというのが消えてしまっている。あるいは「磯崎スクール」というのがあるかもしれないけれども、あれは全国に広まり過ぎて、同じようなことをやる人がふえてしまったからスクールにはならない(笑)。建築の設計をやる人たちは、時流ということじゃなくて自分が何をやるかということで、スクールが日本国中に群衆しているとか、そういう意味のスクールは仲間うちというのとは全然違うわけ。だから大いにそういう意味では仲間をつくりなさいと。そうするとコミッショナーとしては非常に仕事に楽になると思っているわけです(笑)。

それでコミッションするには、建築家の能力というのは、何もデザイン能力だけでなく、建築をまとめる能力を見て僕はコミッションしたいと思いますから、これは建て主の立場に立って推薦をする。都市づくりを文化とか、あるいは21世紀や22世紀を考えて、何かひとつ強烈なコンセプトで都市にインパクトを与えるという考えもあるけれども、これは実際にお金を出して建てる立場からすれば困ったことになる場合もある。したがって、それなりの人を選ぼうということになりますから、全国に網を張って、その人の作風をそこに訪れて実際に見る、あるいはひとつだけじゃなくて幾つかの作品を見ることによって選ぶというプロセスを取ります。建築家個人を知らなくても、作品を知れば大体わかるんじゃないかと思っています。

そういうことで、建築家を紹介するのがコミッショナーの役割だとすれば、おそらく素



人の方にはできなかなうと思いますね。建築領域外の人がコミッショナーをやるとすれば、それをサポートする建築家が必要です。熊本の場合は、アドバイザーに非常に適任の方がおられたからできたわけですが、岡山の場合にはいないんですね。岡山県には建築科のある大学がないので、適任者を見つけるのが難しい。地域をつくるという経験のある方にアドバイザーになっていただければいいなと思います。

八束：堀池さんの場合は、長崎ではコミッショナー的な役割で、白石の場合はご自身で設計を幾つかやられていますね。白石の市長がむしろそういうことを積極的に望まれた。そういう意味で堀池さんをプロデューサーにされたようですが、これは昔の言葉でいうと、シティアーキテクトですね。

堀池：そうです。マスターアーキテクトとかシティアーキテクトですね。

八束：例えば、シンケルがベルリンで仕事をしていたとか、ミュンヘンでクレンツェが仕事をしていた。これは大体王様がやれという形で全権を与えていたに等しいのですが、彼らはかなりの部分を自分でやったわけですね。ほかに適材がいると思った場合はそうした建築家を起用していますが、堀池さんの立場はそれに近いんじゃないかという印象を僕はもちました。

熊本の場合は、磯崎さんにしても僕にしても、今のところ自分でやらないとか、やれないことになっているので、多少うらやましい点はあるけれど(笑)、多分、これは対象が市である場合と県である場合とでおのずと違って来るかなという気がしますね。

堀池：まちのスケールね。

八束：ええ、そういう意味ですが、白石ぐらいのスケールで堀池さんの作品があちこちできて、それでひとつのアイデンティティをもってくるということは、むしろ、いろんな人がやってバラバラになるよりは、かえって市長のねらいには合っているのかもしれないですね。

堀池：長崎では、いわば八束さんや岡田先生の立場と同じような感じで、建築家を推薦していくということですが、そこでは目利きでなければいけない。果たして、自分が目利き

堀池秀人／建築家／1949年生まれ
1983年 東京大学大学院博士課程修了
UCLA建築・都市計画学部大学院客員
講師
1979年 堀池秀人都市・建築研究所設立
長崎県都市プロジェクト顧問、宮城県白石市都市プロデューサー

と言えるかどうかという疑問はありますが、その辺を見通して選んでいくことが大事だと思います。そのためには建築を読めなければいけない。

それから、あまり経験のない人は、個性的なデザインができるかもしれないけれども、建築の基本的な構成に至らないぐらいにしか設計をまとめきれないというような人だっている可能性があります。そこをプロとして見抜いていくことも必要だと思います。

それから、白石ではこの都市はどういう方向に向かうべきか、そしてどういうイメージでつくっていくべきかについても、僕の方から実際にデザインをしていくということを提示しているわけです。これは都市のスケールが小さいということも幸いしていると思いますが、ただ建築だけをつくっていくということとはちょっと違う視点で関わっております。

長崎の場合でも、実は僕は「コノテーション」という言葉によってそれぞれの建築家を誘導していきますが、それはどういうコンテクストがあるのかとか、どういうふうを考えているのかということ为首長に一応説明しなければいけないから、そのための絵はあるわけですね。その絵については、あえていうと、マスタープランではなくて、僕はマスターイメージであると。もう少しグランドイメージを描いていって、その中かなり抽象化された絵が描かれている。それによって大きく外れないようにしていくというようなやり方をしているという意味でも、僕の立場は、それを描ける人でなければできないだろう、社会学者ではできないだろうと思いますね。

八束：僕が聞いた話ですが、建設省でも、我々がやっているような仕事にある程度ヒントを得てとか、デザインというカテゴリーを計画を推進していくための評価の要素として入れようという動きがあるらしいですね。それで熊本の県庁の方に、ずいぶんヒアリングをされているみたいです。例えば、従来だと公開空地をつくるのであればこういうボーナスをあげましようとか、そういうやり方で国が誘導してきたわけですが、そういう公開空地とか緑地とかいうわりと客観的に説明しやすいカテゴリーのものに比べて、デザインというのは非常に説明しにくいのです

から、今まで国もあまり正面切って取り上げようとしなかったものを評価しようというふうに流れが変わっているということでしょうね。

ただ、同時にデザインを入れるのであればという仮定を誰が一体判断するのか。我々のプロジェクトの場合は、それをコミッショナーがやっているということですが、堀池さんが目利きというふうにおっしゃったけれども、目利きの部分をどうするのか。責任の所在がはっきりしないと、集団の目利きというのはまずないわけだから、それが今後の公共プロジェクトでどうしてもつきまとう問題だろうという気がします。

シティプランニング・コーディネータ

八束：これは熊本が先行のプロジェクトであるがゆえの限界というか、結局、最初にかけたボタンはなかなかかけ替えが難しいというところがあって、熊本の場合は、建築課と住宅課のジョイントプロジェクトになったために、今は建築課だけになっていますが、なかなか都市計画の話に広げていけないんですね。長崎の場合は、県のプロジェクトといっても長崎市の、それも港湾の部分にかなり集中していますから、どのみち面の話は出てくるし、マスターイメージと呼ぶにせよ、そういうガイドラインの話は出てこざるを得ない。熊本の場合は、そういう枠組みがないものですから、なかなかそういうふうに踏み込めないんですね。

ただ、小さなまちとか村のレベルですと、そんなに大きなプロジェクトでなくても、ひとつの建築ができることによってだいぶ周りへのインパクトとかインセンティブがありますね。それを核にまちづくりとして、例えばイベントをくっつけるとか、別の建物をくっつけるとかいうことを否が応でも自治体は考えざるを得ない。熊本のプロジェクトでもそういうことがあって、これは我々が仕組んだことではないのですが、アートボリスの波及効果だったと思います。逆に、例えば熊本市のような大きな規模になると、事業主体がこちらは県ですし、都市計画の主体は市にありますので、なかなか取り込んでいけない。コミッショナーが建築家であることがかなり重要であるという話が今まで3人の基調としてあるのですが、そこまで踏み込んでいこうとすると、例えば商業空間のときの空間プロデューサーといわれる人たちの職能の問題として、実際にそうだったかどうかは別にして、デザインの問題だけ話をしているわけにはいなくて、飲食店であればメニューの品揃え

をどうするか、サービスの水準をどうするか、あるいは時にはユニフォームをどうするかという話まで、要するに事業計画の話まで踏み込んで議論を組み立てられないとプロデューサーになれない。これは当然普通の意味でのインテリア・デザイナーではなかなかできない。これと似たようなことは公共建築のプロデューサーにも求められるものかもしれませんが。

そういうことまで考えていくと、都市をつくっていく上での専門家は誰なのかという話に行き着かざるを得ないし、建築の話は明らかにそのかなりの部分ではあるけれども、全部では当然ない。熊本の場合でも岡山の場合でも、プロジェクトが立ち上がってくるところをコミッショナーサイドがどうにも今のところコントロールできないみたいですが、熊本は明らかにそういうことができていないんですね。そのレベルから行政の話も含めて、民間のプロジェクトならば事業計画の話、公共プロジェクトの場合もプログラムの話等々、いろいろ出てくるわけで、それに対して、いわゆる都市計画家が全部カバーできる能力をもっているかというところではないと思いますし、建築家のひとりの手にも余ることである。そういうふうに話を広げていった場合に、もっと総合的な意味での、都市計画といっているのか、まちづくりといっているのかかわりませんが、その方法を模索していくということは、多分この次の段階の大きな課題なのかなという感じがしています。

岡田：僕はヨーロッパ、アメリカの都市と比べて、日本の都市はすごく未熟だと思うんです。例えば、岡山県の基本構想の段階ではかなり絵まで描いてあるし、いろんなことをやっているわけです。そういったものが事業化されて僕らコミッショナーの目の前に出てくるわけですね。設計者をどうしましょうかと。僕らが関わる以前は、そのまま担当部局に落ちて、設計者が決まり建設された。そのときに基本構想で採られたイメージにまで立ちもどらないで設計が決ってしまう。日本の現実では、そういうつながりがどうも切れているから、シティプランニングと実際のプロジェクトのデザインとは切れてしまっている。僕はそれをつなげる人がしっかり存在することによってアメリカの都市や、ヨーロッパの都市がつくられていると思います。

そういう意味では、日本でシティプランニング・コーディネーターというか、シティプランと実際のプロジェクトをつなげるコーディネーターというものが必要ですね。そのコーディネーターというのはさっきのプロデューサーと全然違うと思います。そういう意味

では、岡山での僕のコミッショナーとしての役割は、シティプランニング・コーディネーターだというような意識です。

したがって、いろんな都市計画的な見方からすると、あるいは福祉なら福祉施設建設プログラム、学校建設なら学校政策と現実の複合的な都市イメージとの食い違いが気になって、いろいろ言いたくなるわけです。そしてそれに対してコメントを出しています。つまり、コミッショナー・キーセンテンスというものをそのプロジェクトの始めに出しているわけですが、そのキーセンテンスは、建築家にこういうコンセプトでこうやってくれというものではなくて、逆に行政側あるいは事業部局に対して、もうちょっとこういう点を考えたらいいんじゃないかと。例えば、商業施設の話が出ましたが、人が集まるレジャーとか、あるいはクアハウスとか、そういうものを計画しながら、そのソフトが案外考えられていなくて、ハード志向でもって出てくる場合がある。そういう場合にはソフトをしっかり考えなきゃいけない、運営をどうするかを考えなきゃいけないということをコミッショナーのキーセンテンスの中に入れる。指名された建築家が言うよりインパクトが強い。そういう面でキーセンテンスが、建築家のねらいを行政側に出していくのに、援護射撃をする場合がある。そういう点が重要だと思います。

それで、今考えているのは、各プロジェクトの設計が事業化され出てくるのではなくて、事業化する段階でCTOに乗せてほしいと主張しています。今まではみんな基本設計から出してきているわけですが、今度の24番目のプロジェクトは基本計画から乗せようということと動いている。だからまだ絵もないし、土地もふたつぐらい候補があるけれども、どちらを選ぶか、どういうふうに造成するかということからCTOに乗せようとしています。これは一歩前進した発注方式だと思います。

もうひとつの問題は土木関係、河川とか道路ですね。地域づくりをやるには、必ず建築単体じゃなくて、その外部空間を対象に乗せることが必要なわけです。これらを含めてCTOに乗せたいんだけど、これは何回試みても乗ってこない。土木的な分野と建築の分野との問題は非常に大きなものがあります。建設省辺りで都市づくりをデザイン的に考えようという話が出ているというのは、大変好ましいけれども、都市デザインの問題では都市局と住宅局、あるいは建築部局と土木、河川局、あるいは港湾局の間でコーディネーションができないといけないわけですね。僕らはCTOの仕事を通しながら、下からだんだ

ん上に上がってって、一番元締めのところでもう少し横の連絡ができるようになる、具体的に都市づくりが図れるようなことになれば、大変いいと思っているのです。

八束：土木の問題は非常に大きい問題で、建築家じゃないと実務の進み方がわからないのでコントロールが難しいという話が出てきたわけですが、実を言えば、我々は土木では専門家じゃないわけで、熊本の場合でいうと、例えばこの間も百何十mのスパンのレンゾ・ピアノ設計による橋梁が載ったんですが、ほかに幾つか橋があったり、あるいはトンネルの換気の施設があったりする。これは建築家がなかなか手掛けてこなかった種類のデザインの対象で、それをやったということは僕は熊本の非常に良い点だったと思います。が、ふたを開けてみると、本当にとんでもない話が出てくるんですね。建築の設計のプロセスと土木の設計の、あるいは施工の過程は全く違う前提になっていて、何でそんな話があるか理解ができないようなことがいっぱい起こってきている。逆に、最近では橋でも景観の設計という言葉ができて、デザインを取り入れましょうという、一応それ自体としては結構な声が出てきているんですが、ふたを開けてみると、要するに欄干にどうしようもない彫刻をくっつけておしまいというようなケースがずいぶんあります。これは、実際は土木構造物がランドスケープなりタウンスケープなりを支配する割合は個々の建築よりはるかに大きいから、ものすごく大きな問題ですね。そのことまで手をつけていけると僕は素晴らしいなと思います。

堀池：入り込めない領域になっているわけでしょう、そこは。

八束：なかなかね。

岡田：土木のほうは、都市景観、デザインを自分たちでしっかり考えてやっているのに、何で今さらそんなことを議論するんですかというわけですが、彼らが考えていることは、今、八束さんが言ったような欄干に飾をつける、僕からすれば、むしろ、ない方がいいというようなものだったり、県道なんかでも、街路樹もあるし街灯もあるし立派な断面だというのですが、途中で学校があっても変えないうで、起点から終点まで同じ断面でいくわけですね。それで彼らはデザインをしていると信じ込んでいる。全く切り方というか見方が違う。その辺りを変えていくというのは非常に大変ですね。

堀池：土木を正面から変えようとする、なかなか難しいですね。僕も幾つかそういう難しさにぶつかって、今はちょっと聞き直しまして、土木って、基本的には設計者という意

識があまりなくて、設計・施工みたいな発想ですね。結局、僕が気がついたことは、土木の人達って、意外とつき合ってみるとナイーブな方が多いんですよ。それで僕は夢みたいな絵を描いて土木の人に堂々と示してしまうんです。そうすると興味を示し始めますね。そういうことから、例えば長崎県だと土木部長が、前は全然距離があった人が、この頃は向こうからまた見せてくれませんかと電話してくれるようになって、デザインのことで知らなかったことが多いとおっしゃるんですね。むしろ決め手がないし、下手に触ると専門家の人にたたかれるから言わないほうがいいだろうというので通ってしまっているケースが多いという話です。

それで、八束さんがおっしゃった、熊本の場合は面になかなかいかないというのは、僕はいい部分と悪い部分があるかなと思うんです。悪い部分は、おそらくコミッショナーなりプロデューサーなりの、人を選ぶというところに批判が集まりやすいという欠点をもっていないかなと思います。いい部分は、面でないがために、下手に面を描いたものよりはコンフリクションが起きにくい。それがひとつの刺激となって、その地区にそれに類した影響、デザインのレベルの高いものをつくらうという動きが起こったりとか、それに類した建築が出てきたりという意味の影響があるかなと思います。アートボリスはそれぞれの建築家の選び方が、僕はある程度成功されていると思うのは、その人達がその地域にだいたい溶け込み始めていて、例えば伊東豊雄さんはそのあとに幾つかのプロジェクトを引き受けられたわけでしょう。そういう現象が起こってきたのは、下手に面を描いていなかったことが幸いしているかなという気もします。

アートボリスの波及効果

八束：熊本の場合、周りに波及していったという話は、これは計算してそうなったわけではないのですが、もちろん、ある程度期待はありました。ただ、悪いことも実はありましたね。熊本でデザインというものが市民権を得たのは大変いいことで、デザインを志す若い人——あそこには建築関係の学校が5つぐらいありますから——をエンカレッジしたというのはとてもいいことだったと思います。が、時々とんでもないデザインのものができるとですよ。しかも、アートボリスの建物のすぐそばに(笑)。アートボリスというのは、アートとついているものですから、どうしても最初の一般の方のイメージは、非常に変な

ものをつくるプロジェクトであると認識されているものですから、そっちの方がむしろアートボリス作品に見えたりする(笑)。

実際に我々がノミネートするようなアートボリスの建築家は、周りの状況が見えないで、ただひたすら変なものをデザインされる方はほとんどいませんからね。そういう意味で、移行期の誤解に近い産物なのかもしれないけれども、そういう問題はどうしても避けがたい問題として出てきている。それを誘導する立場に今のところないので、ちょっと困った問題だなとは思っているんですけどね。

堀池：それでも影響があった、効果があったという意味では、今度はそこから学び取りながら、その効果を逆に利用するような方法に組み上げられればいいなと思いますね。

八束：そこまでいって初めて、地方の建築文化が本物になって根づいたということだと思いうし、僕はアートボリスの最初から言っているのですが、実はコミッショナーというのは地元がやるのが一番いい形だと。我々の次のコミッショナー体制ですぐそうなるということでは必ずしもないですが、どうやったら地元でそれを最終的にお返しできるかという道をつくっていくのが我々の任務だろうということを行っています。

堀池：仕組みを残していくということだと思いますね。長崎の場合、そんなに広い範囲じゃないと言いつつも、そこそこの大きさになっています。ですから、それぞれの地区にかなり刺激的なプロジェクトを今後展開していこうというときに、そのプロジェクトを担当した建築家の方に、その地区のある意味ではマスターアーキテクトのような形になっていただいてはどうかと。今後の、そこで民間の仕事だとか、いろんな建築行為が起こっていくときに、その相談に乗っていただけるような仕組みをつくらうと考えています。どうもやりっぱなしで終わらせたくないというのと、先ほどのようにキッチン化されたものとか出てきたときに、建築家が何らそれ以降関わりを持たないということで、ある意味で無責任な構図には置きたくないというのがあります。意見を言ってもいいような形をひとつの方式としてつくっておきたいと考えているわけですね。

多分、このようなやり方というのは、コミッショナーとか、あるいはプロデューサーという立場は、僕は最後は方式が残って、本人は消えていって、それがずっと継続されていくということに意味があるわけですから、それをいかに強固につくっていくかということだという気がします。だから、いやらしい言葉に聞こえるけれども、かなり戦略的な発

想でそれをつくっておかないといけないという気がしますね。

八束：時と場合によっては、非常に強いインシアティブが必要になるだろうと思いますし、それを避けてはいけないんだと思いますが、理想的に言えば、何もしていないように見えて、周りがちゃんと動いているなんていうのが一番いいでしょうね。

堀池：熊本で一般市民においてまで、例えば山本理顕さんのものが批判の対象になりましたが、僕はあれは非常に、他人事だからかもしれないけれども、話題になってよかったというふうに見ているんですよ。

八束：あれは、ご本人と役所側の担当の人は大変だったと思うけれども、結果的には非常にいい宣伝になりましたね。実際に住民と計画側との関係もその後かなりスムーズに修復されていったし。

岡田：その波及というのは、それを見てデザイナーが触発されて何かやるというだけじゃなくて、事業者というか、これから建物を建てる側に波及していくと本当にいいですね。

ところが、これも一長一短があって、倉敷は幾つかのプロジェクトをCTOに乗せたけれども、CTOに乗せると金がかかるというところがあって、倉敷の熱意が少し冷めてしまったわけで、それが非常に残念なことですね。

マイナス面は、やはり予算的な問題で、議会は何でそんなコストのかかるプロジェクトをわざわざ選んでやるんだというようなことになりますからね。そこら辺を推薦された建築家は大いに注意していただきたい。僕はここで課題になった4地域はうまくいっていると思うし、これからあるべき姿を示していると思うけれども、これを積極的に進めるには、指名した建築家の協力も大いに必要ですな。

八束：コストの問題は確かに熊本でもずいぶん言われて、熊本では一応標準の単価の1割増ということになっていますが、地方の市町村に話をもっていくと、まずその話がひっかかるということはあるですね。

堀池：予算化のときに、役所の内部的につくっていく予算獲得のためのプランというのがかなり生きていきますね。だから僕は長崎では一旦枠取りをしていって、そこから壊すことを相当議論するようにしているんですが、これが一番大きくネックになっているなと思います。

岡田：僕はこれからおもしろい傾向がでてきたと思うのは、市長が建物じゃなくて、政策面でCTOを打診してくることがあるんですね。例えば、具体的なものが出発点だけれど

も、ある土地を手当てした、そこに市民病院とか福祉施設を建てたいがどうしたらいいだろうというようなことをCTO事務局に聞いてくる。それに対して、そういうものは集中したほうがいいとか、むしろ、分散して住区の中に分散させた方がよいとか、あるいはどういうコンサルを入れて計画をすすめるべきかということをおアドバイスできる。そういう行政面にわたってCTO的な扱いができるんじゃないかというのは、少し希望が持てますね。

今、建設省で公共住宅の見直し法案が通ったらしいのですが、それで住宅政策づくりに補助を出す。そういうことによって、地域のハウジングについてもっと大きな立場から、そのリロケーションとか、その他、いろいろな問題を見直そうというようなことで、それがCTOに乗らないかというような問い合わせがくる。これなどは大きなプラス面の影響だと思います。

国際性と地方性

堀池：海外にいくと、アートボリスのことはかなりいろんなところで触れられますね。ひとつは、例えば、トム・ヘネガンが学会賞をとったとか、あるいは参加建築家が海外でもかなり評価が高い人たちのせいか、よくはわかりませんが、いずれにしても、大きなムーブメントみたいなものとして外国では非常に好意的に捉えられています。長崎の場合も、日本とか外国ということは関係なしに、選んでいった結果として外国の人が入ってくるかもしれないけれども、ひとつの大きなムーブメントとして評価されるような捉え方になればいいなとは思っています。そういう意味で、非常に熊本はいい参考にさせていただいています。

八束：外国の建築家によるプロジェクトはもっと増やしたかったんですが、何分、あまり小さいプロジェクトですと招請費が出ないということもあって……。

ただ、僕がよかったなと思うのは、我々が手がけている3県1市は全部地方ですね。当然、皆さん体験されていると思うけれども、熊本の場合でも、熊本らしさとアートボリスとはどういう関係にあるんだというのがまず最初にくるわけです。答えは難しいわけですが、国際化と地方の特性は矛盾するものというふうに普通捉えるわけですね。だけど、トム・ヘネガンの畜産研究所の厩舎に関して言うと、あそこは国立公園にあるんですが、あいう風景に溶け込むような建築は、日本人には真似できないぐらいイギリス人はうまい。日本にもその種のものはあちこちにある

わけですから、その先例になれることを期待してやるんだといって、僕は環境庁を説得した経緯がありましたが、トムはそれに非常に見事に応えてくれたと思います。

だから、日本の風土、日本の自然景観に調和する建物というのはなにも地元の人じゃなくてもできる。逆に言えば、地元の建築家は地方色だけを売り物にしないでいいんだということにもなります。国際性と地方性というのは必ずしも二項対立、全く違うものというふうにならないで済むことを、十分な量ではないけれども見せることができた、あるいはこれから見せていきたいという気はしています。

堀池：アートボリスは、必ずしも地元の人の手によるものだけが地方性を出し得るということではないことが言われるきっかけにもなったと思います。もうひとつは、地元の人たちも世界に目が広がっていますね。目に見えない形で真の意味の国際化のきっかけになっていっているんじゃないかなという印象を僕はもちました。

実はIBAを見学に行ったときに、向こうで計画局の人たちと話をしているときに、くまもとアートボリスの話がわりとすんなりと向こうから出てきたのが、僕は非常にショックだったんですね。しかも、まだ十分な成果が出るかどうかかわからないころだったので、非常に驚きだったですね。これは、他の日本で行われている単一の建築に外国人が出掛けているプロジェクトがそんなに力をもっていないのと比べると、驚異でした。地方・中央という議論がいつべんに霧散していくようなムーブメントのきっかけにはなっているのかなという気はします。

岡田：「中央」ということが言われるから「地方」があるのであって、初めから「地方」があるわけじゃないですね。僕らが考えているのは、あくまでも普通の「まち」だと思うんです。ヨーロッパのまちでも、例えばボストンでも、それぞれ落ち着きというのがありますね。そういう定住環境というか、普通の「まち」をそれぞれの都市で見ているということですよ。

1995年10月25日 於鹿島出版会

くまもとアートポリス

Kumamoto Artpolis

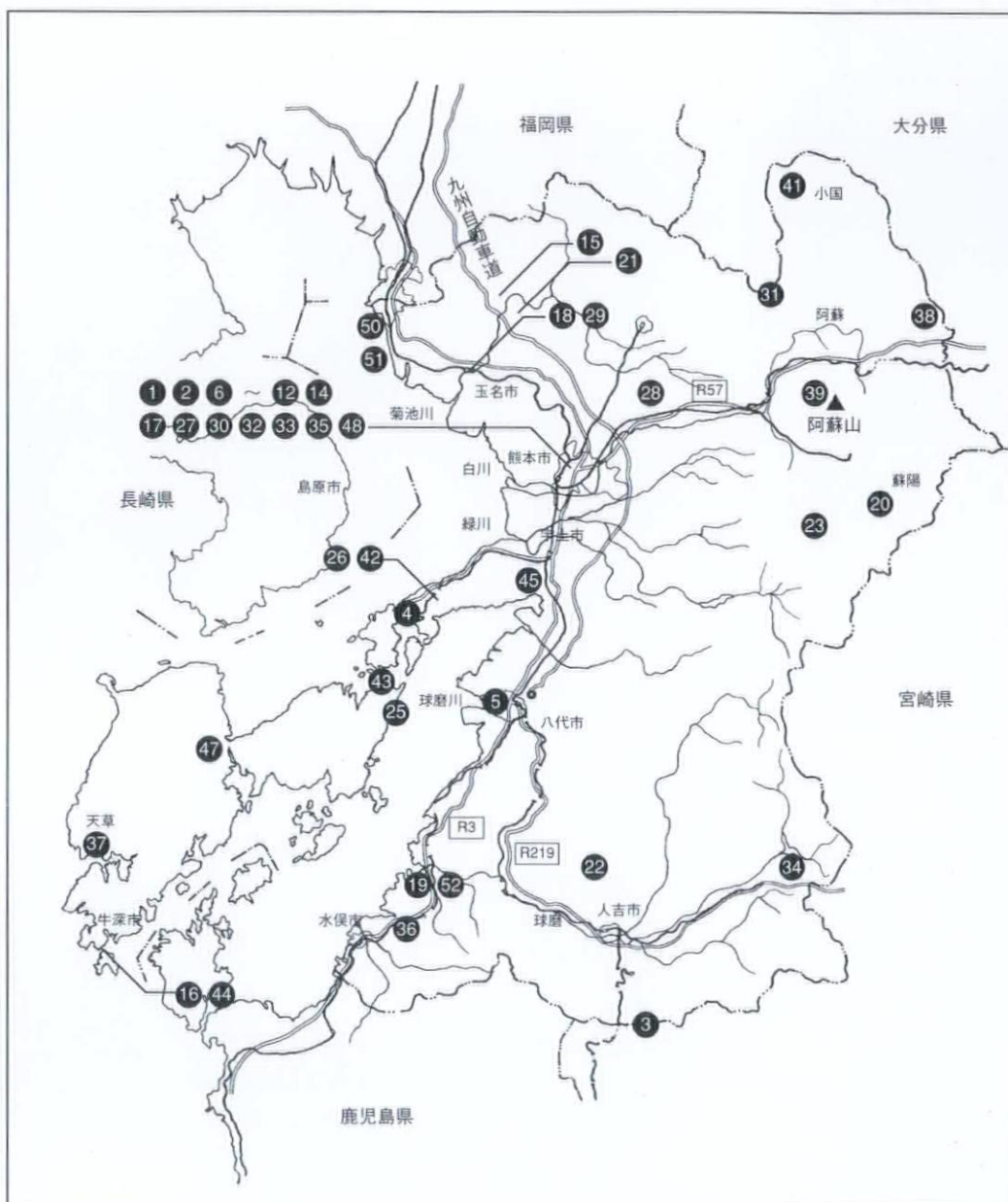
熊本県では「都市にデザインを、田園にアイディアを」のキャッチフレーズを掲げ、地方における都市づくりの先駆的役割を担ってきた「くまもとアートポリス」。(SD9101号)

当時、コミッショナー方式という新たな手法により推進されてきた都市づくりも、はや7年を経過し、第2期の終盤を迎えようとしている。

以下は、他都市に都市づくりの影響を与えながら、着実な歩みを続けている「くまもとアートポリス」の主に第2期のプロジェクトである。

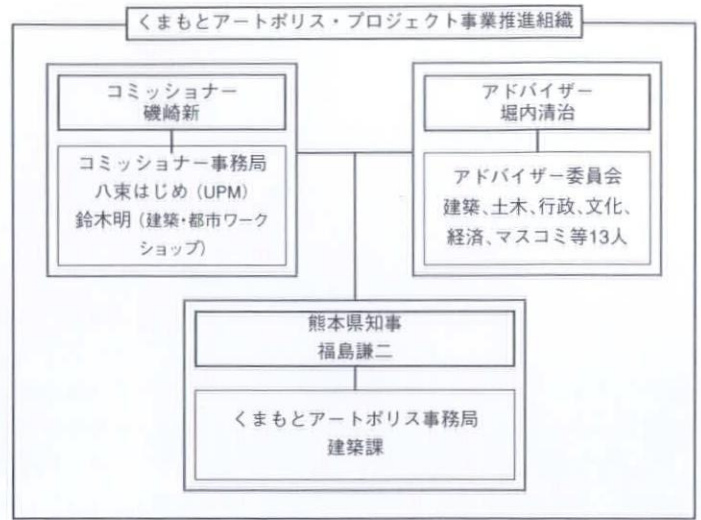


熊本県県章

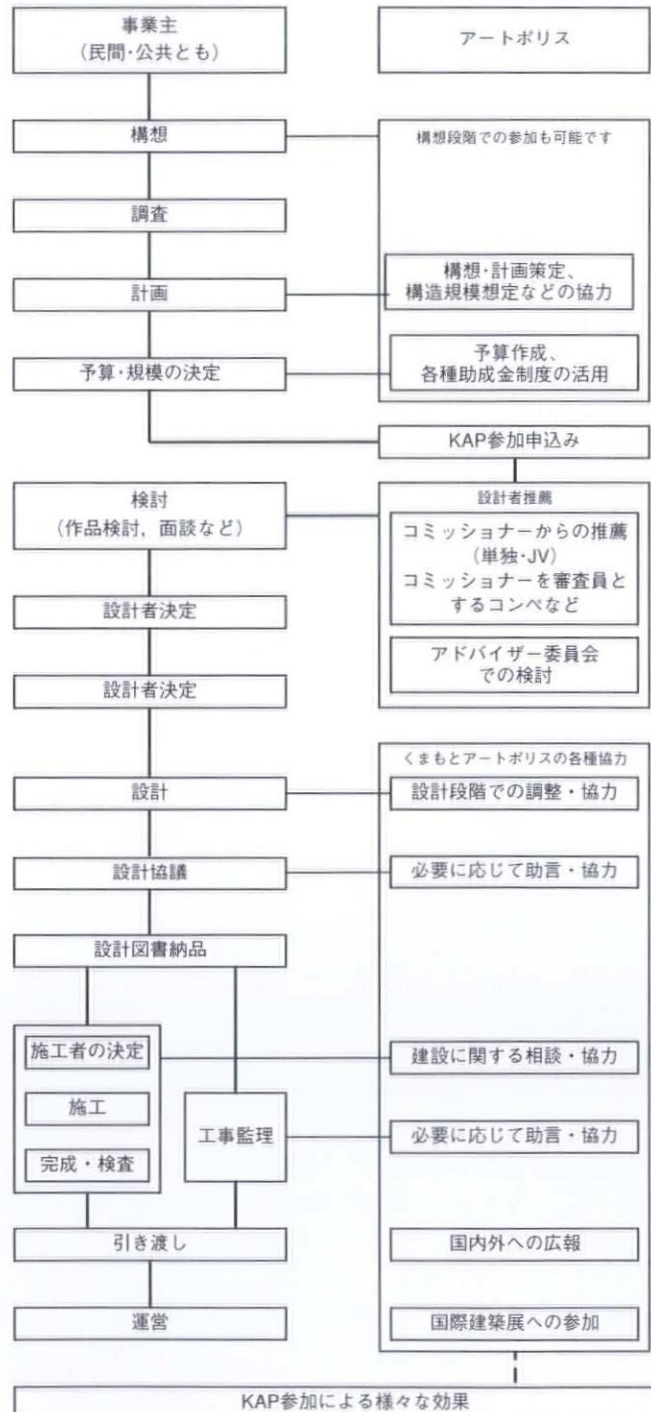


1. 熊本北警察署
篠原一男+太宏設計事務所
熊本市草葉町
2. 熊本県営保田窪第一団地
山本理顕
熊本市帯山
3. 加久藤トンネル換気所
小山明+パシフィックコンサルタンツ
人吉市大畑町、宮崎県えびの市
4. 三角港フェリーターミナル
葉祥栄
宇土郡三角町
5. 八代市立博物館未来の森ミュージアム
伊東豊雄
八代市西松江城町
6. 熊本市花畑パークトイレ
大塚豊一
熊本市花畑町
7. 熊本市上江津湖畔トイレ
日田兆
熊本市神水本町
8. 熊本市営新地団地A棟
早川邦彦
熊本市清水町
9. 熊本市営新地団地B棟
緒方理一郎
熊本市清水町
10. 熊本市営新地団地C棟
富永譲
熊本市清水町
11. 熊本市営新地団地D棟
西岡弘
熊本市清水町
12. 熊本市営新地団地E棟
上田憲二郎
熊本市清水町
13. 県道橋景観整備（基礎調査）
倉俣史郎+高木富士川計画事務所
14. 熊本市営託麻団地
坂本一成+長谷川逸子+松永安光
熊本市新南部町
15. 光のまちづくり
岩崎敬+瀬口英徳
16. 牛深ハイヤ大橋
レンゾ・ピアノ・ビルディング・ワーク
ショップ+オーブ・アラップ&パート
ナース+マエダ
牛深市牛深町
17. 熊本県営帯山A団地（公開コンペ）
新納至門
熊本市帯山
18. 玉名市文化施設構想
豊田文生
玉名市岩崎
19. 湯の香橋
岸和郎
芦北郡芦北町

20. 清和文楽館
石井和紘
上益城郡清和村
21. 熊本県立装飾古墳館
安藤忠雄
鹿本郡鹿央町
22. 球磨工業高校伝統建築実習棟
象設計集団
人吉市城本町
23. 鮎の瀬大橋
大野美代子中央技術コンサルタンツ
上益城郡矢部町
24. 公園ファニチャーデザイン、同整備マニュアル
沖健次+東京ランドスケープ
阿蘇郡小国町
25. 松島町合津終末処理場管理棟
斉藤宏
天草郡松島
26. 石打ダム管理所
青木茂
宇土郡三角町
27. 熊本県営新渡鹿団地
小宮山明
熊本市渡鹿
28. 大津町第二庁舎・町民交流施設
鈴木了二
菊池郡大津町
29. 玉名天望館
高崎正治
玉名市大倉
30. 大甲橋景観整備
倉俣史朗
熊本市水道町
31. 草地畜産研究所畜舎
トム・ヘネガン+インガ・ダグフィ
ンスドッター+桜樹会・古川建築事
務所
古川建築事務所
阿蘇郡阿蘇町
32. 再春館レディース レジデンス
妹島和世
熊本市帯山
33. 熊本県立美術館分館
ラベニャ・アンド・トーレス+
大和設計
熊本市千歳城町
34. 湯前まんが美術館・公民館
桂英昭+AIR
球磨郡湯前町
35. 熊本県営竜蛇平団地
元倉真琴
熊本市帯山
36. つなぎ物産ギャラリー・グリーン
ゲイト
北山孝二郎
芦北郡津奈木町
37. 教会の見えるチャペルの鐘展望公園
梅田正徳+スペースデザイン設計
事務所
天草郡河浦町
38. 花の温泉館
ワークショップ
阿蘇郡産山村
39. TOTO AQUAPIT ASO
木島安史+YAS都市研究所
阿蘇郡白水村
40. 白川橋景観整備
藤江和子アトリエ
熊本市二本木
41. 杖立橋+杖立橋多目的ホール
新井清一
阿蘇郡小国町
42. 石打ダム資料館
入江経一
宇土郡三角町
43. 天草ビジターセンター・天草展望
休憩所
古谷誠章+中川建築設計事務所
天草郡松島町
44. うしぶか海彩館
内藤廣
牛深市牛深町
45. 不知火町図書館・美術館
北河原温
宇土郡不知火町
46. 馬見原橋
青木淳+中央技術コンサルタンツ
阿蘇郡蘇陽町
47. 熊本県立天草工業高校実習棟
室伏次郎
本渡市亀場町
48. 熊本北警察署坪井交番
マニユエル・タルディッツ+加茂
紀和子
熊本市坪井町
49. 泉村ふれあいビジターセンター
武田光史+ロゴス設計同人
八代郡泉村
50. 有明フェリー長洲港ターミナル
石田敏明
玉名郡長洲町
51. 荒尾警察署長洲交番
塚本政利+設計機構ワークス
玉名郡長洲町
52. 県立芦北青少年の家
エリア・ゼンゲリス+エレニ・
ジガンテス+鈴木了二+島村建築
設計事務所
芦北郡芦北町



くまもとアートポリスの流れ



川上 隆

熊本県は、1988年から「くまもとアートポリス(以下KAPという)」を文化運動と位置付け積極的に推進してきており、8年が経過しようとしている。

このような運動は、長期間継続して初めてその効果が発揮できるものであり、現段階で運動全体の評価を云々するのは早計だが、それでも現在言えることを幾つか挙げてみることにする。

先ず第1には、熊本のPRに大いに役立っていることであろう。完成したプロジェクトが増えるにつれ、見学に訪れる人が相次いでおり、担当の建築課職員が直接案内した方々だけでも毎年約千人に及んでいる。独自に見学される方のほうがはるかに多いであろうことを考えると、全体では相当な数の方々が熊本を訪れているものと思われる。そして、これらの方々にKAPを通じて熊本を知っていただき、熊本の元気を印象づけることができたと考えている。

2番目の効果として挙げられるのは、参加プロジェクトを有する市町村に活気をもたらしたことである。文楽館が建設された清和村は、同村に伝承されている文楽人形芝居とともに十数年来「文楽の里」づくりに力を入れてきた。そして、文楽館の建設により村を訪れる人が急増し、公演回数も爆発的に増加した。KAPに参加した八代市〈八代市立博物館 未来の森ミュージアム〉、産山村〈花の温泉館〉や津奈木町〈つなぎ物産ギャラリー〉等でも同様の効果が見られる。このように参加プロジェクトが、その地域のシンボルとして地域の人々の自信を深めるのに大変役立っているのである。

第3の効果として、コミッショナー制による設計者推薦システムを採用したことに伴う様々な波及効果が挙げられる。その幾つかを例示すると以下のようなものが挙げられる。

①KAPでは、そのプロジェクトに最も相応しいと思われる設計者をコミッショナーが推薦することとしているので、これまで実績がないという理由で公共建築を手掛けるチャンスが与えられなかった気鋭の建築家も起用することができた。その結果として、素晴らしい提案をいただくことができたと思っている。

②KAPという舞台を設定したことで、設計者

の能力、意欲を十分発揮できる環境が整えられた。具体的には、良いものをつくりたいという目的で参加した発注者は、設計期間、設計料や工事費等についていい条件をそろえる努力をし、また設計者からのプログラムを含めた提案を可能な限り受け入れる努力をしている。

③上記の①、②に起因することであるが、参加プロジェクトのレベルが非常に高いことから、地元の良い刺激を与えた。地元の設計界は、自分たちも頑張ろうと思うと同時に、設計のプロセスを学びたいという気持ちを抱いている。建設業界からは技術力の向上に役立ち、業界のイメージアップに貢献したという発言もあり、普段要求されないような難しい注文を誠実にこなし高い評価を受ける一方、自らの技術力に自信を深めている。また、一般の建築主にもKAP参加プロジェクトに負けないようなものをつくりたいという声もある。

④独創的なアイデア、デザインであるが故にインパクトの強い賛否両論が交わされた。一見デメリットとも思えるが、そのことによって環境デザインに対する県民の関心を高め、まちづくりにおける建築の力、デザインの力の再認識に貢献したと考えている。また、真に反省すべき点は真摯に受け止め、アドバイザー委員会の新設など改善を加える良い機会になった。

効果だけを見ると順風満帆のように受け取られがちだが、課題もある。その第1は民間事業の参加が少ないことである。平成7年11月現在52件の事業が参加しているが、そのうち民間等は3件のみである。事務局である建築課も手をこまねている訳ではないが、民間事業においては未知の設計者を起用することは少なく、一朝一夕には解決できない課題である。

第2の課題は、KAPが県民運動と呼べるほどには県民に認識されていないことである。効果で述べたことと相反するようだが、高い関心が一部の人間に偏っているのは否めない。そこで、いかにしたら県民運動となりうるかということについて検討、推進しているところである。例えば、今年度から「くまもとアートポリス推進賞」という顕彰制度(県およ

びKAP参加建造物を除く)を新設した。この賞は、質の高い独創性のあるデザインを有する建造物を顕彰し、環境デザインに対する関心を高め、都市文化並びに建築文化の向上による地域づくりを図ることを目的としている。つまり、KAPの目的を達成するためのもうひとつの手段であると同時に、KAPを広く県民の皆さんに認識していただくための制度なのである。一方、民間では建築関係者を中心に「KAPを考える会」という団体が設立された。同会は、KAPを永く継続させるため県民運動としての起爆剤になることを目的に発足したもので、昨年5月には「自分たちで考える地方都市の未来」と題したシンポジウムを開催し、今後も様々な活動を展開されると伺っている。

このように幾つかの課題を抱えてはいるものの、解決の糸口は見出せるものと考えている。

本来、創造行為である建築は、精神的な価値が投影されたものであり、文化をベースとした魅力ある地域づくりには建築等の施設が不可欠である。本県にも先人が残した数多くの文化遺産があるが、我々はこれらの遺産を大事に守り、次の世代へ引き継いでいかなければならない一方で、現代を反映する文化的資産づくりにも英知を傾け、次の世代に渡していく必要がある。そのためには、さらにKAPを拡大、発展させ推進していく所存である。本年、1996年11月には、4年に一度開催することとしている第2回目の国際建築展「くまもとアートポリス'96」を開催する予定なので、ぜひ多くの皆様方に熊本を訪れていただき、KAPの現状をご覧いただきたいと考えている。

●かわかみ・たかし/熊本県土木部長

くまもとアートポリスの近況

八束はじめ

くまもとアートポリスについては、最初のメジャーな特集であった本誌91年1月号以来、これまでもかなり紹介され、私もその意義などについて随分書いているし、本号でも別立ての座談会もあるので、ここでは簡単な中間報告として現状を述べることにしよう。

アートポリスは現在二期目の3年目、通算7年目に入っている。もう少しで二期の終了であり、一期の終わりの92年に開催されたイベントと同様の国際シンポジウム、展覧会の企画が立ち上げられているところである。参加プロジェクトは50を越し、一部の例外はあるものの、殆どが順調に進行している。大分長い時間をかけているピアノ+岡部+ライスの牛深の橋も、つい最近150メートルものロング・スパンの桁がかかり全貌を現してきた。このような大きなプロジェクトからごく小さなものも含めてであるにせよ、50という数はなかなかのものではないだろうか？ 多少手前味噌ではあるが、これもただルーティンとして数を揃えただけではなく、一つひとつが手塩にかけたものであるという点が得難い特長になっていると考えられる。世の中の動静を反映してか、全体に規模は幾分粒が小さくなっているが、事業全体としてはスムーズに流れているということが出来るだろう。福島知事も2000年には節目となるようなイベントを考えたいという旨の発言をされており、この種の事業としては先例が無いだけでなく、ロングランなプロジェクトともなりそうである。

実際に、92年には、国内の3プロジェクト（奈良、横浜、富山）に加えて、ヨーロッパからパリ（グラン・プロジェ）やベルリン（IBA）、フランクフルト（ムゼウム・ウファール）、バルセロナ（オリンピックに合わせての再開発）などの諸プロジェクトを招待した

が、本96年のイベントにもそれに代わる事業をと考えても、経済状況と相応して、彼の地でも継続されているプロジェクトはごく少ない。95年5月には熊本市の姉妹都市でもあるテキサス州のサン・アントニオ市での同種のシンポジウムに招かれてプレゼンテーションを行ってきたが、アメリカ国内からの参加ではこのような類のプロジェクトはなくて、むしろアートや商業建築を通してのコミュニティの活性化などの地味な仕事が多く、比較して、日本の方が未だこのような建築的な、つまりそれなりに予算のかかる事業がつづけられるというのは恵まれた条件なのかもしれない。しかし国内でも奈良の国際建築博覧会の繰延べが伝えられるなど、状況は必ずしも樂觀できるものではない。その意味でも、一時的にジャーナリスティックな話題になることも悪くはないが、長く続けられるということはそれ自体極めて意義深いのではないだろうか。

二期に入って、確かに量的にはベース・ダウンしたが、その代わりに周辺への波及が進んでいったことは見逃せない。八代の「未来の森ミュージアム」での成功によって、設計者伊東豊雄氏が、町の小さなギャラリー（民間）の設計を委嘱され、公共でも引き続き養護老人ホームや広域消防署を建てたこと、あるいは清和文楽館を完成させた石井和宏氏がその隣に物産館を建てたことなどはその最も直接的な波及だが、新井清一氏なども、本来の小国町杖立橋の工事は随分時間がかかっているものの、同時に周辺のまちづくりの構想なども依頼されていると聞いている。青木淳氏の馬見原橋なども、町はこれを新たなまちづくりの拠点と考えたい意向をお持ちのようであり、武田光史氏は泉村の産業振興センターで様々なプログラム・運営上の提案を行わ

れている。これらはもとより成り行き的なせりものであるものであって、コミッショナーにせよ、県庁にせよ、アートポリスの運営側が意図的に仕組んだことではないし、またしたところでその通りなるものでもないが、期待はされていたものだった。このような意味では、点刺激がゆっくりと周りに効果を広げているということもできる。上に言及したサン・アントニオのイベントも、きっかけはリカルド・レゴレタの手になる市立図書館の竣工であった。建築にはそれだけの起爆性があるということだろう。

雑誌などを通すと、どうしても単体の建築の出来栄に目が行ってしまふのは止むを得ないが、実際にはこのような波及効果は重要であって、単に優れたデザインを供給するというにはとどまらず、これを良い方向に誘導することもこのような事業の成否を決める要因であるかもしれない。建築的な成果としては、アートポリス本来のリストにあるものだけではなく、これらの周縁関連プロジェクトや全く独立的な計画も優れたものであれば評価していこうという主旨の顕彰事業も開始された（ただし、この部分はコミッショナーとは別だてである）。また、一期でも小さなキオスクやストリート・ファニチャーのコンペが開催されたが、八代ではミュージアムの前の通りにつくられるバス停のコンペが開かれ、予想以上の数の案が全国から応募された。レベルもかなりのものであったと聞く。応募者の多くは若い建築家だったと思われるが、これも裾野の広がりである。

更には、建築関係者のみならず広範な地元の人々の参加を得て「アートポリスを考える会」という組織もつくられ、ここはアートポリスの運営母体の財団化というような事柄の

検討を行うと同時に、講演会などのパブリシティ活動を行っている。今回の特集号の元になったのも、この組織の主催したジョン・イト・シンポジウムである。対象の性質上主観的な判断にゆだねざるを得ないデザインの質への判断をコミッショナー個人に委託するというコミッショナー制の、ある意味では「鶴の一声」式の部分を、こうした裾野からのサポートによって補完することは、この種の事業の成功にとって極めて重要であることを改めて痛感させる。本来この種の事業は地方の地元の建築文化の向上を目指すものだから、外からタレントを引っ張ってくるだけでは済むはずもなく、こうした周辺への配慮は欠かすことができないし、それはコミッショナーや県庁だけの力では実行は無理である。この点は熊本はかなりうまくいっているということができる。

本来的に熊本にはこのような成果を挙げるための文化的土壌が備わっていたということは私たちにとって幸いであった。中には、鼎談でも触れたような皮相な波及のされ方もないではないが、それは文化としてのより一層の深化、熟成を待つということではないだろう。これに対して、受賞歴を並べ立てるのは余り品の良いことではないからここではそれを誇ることはしないが、建築学会・作品賞の受賞が三つ出たうちで二つまでが公営住宅であったこと（早川邦彦氏の熊本市営・新地団地Aと元倉真琴氏の県営竜蛇平団地）は、アートボリスの本分が、「アート」ということばを冠しているが故に誤解されやすいような、贅沢な箱物や目立たんかなのデザインにあったわけではないことを示しているのではないだろうか。もう一つの受賞作、草地畜産

研究所畜舎（トム・ヘネガン+インガ・ダグフィンスドッター、桜樹会・古川事務所）もまた、鼎談で出たように、外国人建築家でありながら、日本人以上に自然景観に調和した成果を生み出した点が評価されたのであり、この点を裏書きしている。

本誌95年8月号の「まちのパブリック・スペース」特集で、中川理氏がアートボリスを含む公共建築の新たな展開と、氏の言われるところの「公共建築のディズニール化」とのクリティカルな接点について述べられていた。この文章はおおむね我々の仕事には好意的なものだったと受け取らせて頂いてはいるが、公共建築におけるデザイン・テーマがフィクショナルなものであるという点でディズニール的なキッシュと我々の仕事には区別しがたいところがあるという主旨は如何なものだろうか？確かに行政だけではなく、一般ジャーナリズムの建築に対する評価がともすると「風変わり（ストレンジ）な」という点に向けられがちであり、その点では例えば篠原一男氏の北署と中川氏の言及する「カエルの橋」に変わりはないといえなくはないし、そのようなレベルでの受け止められ方を問題とする氏の指摘は正しい。一般市民に親しまれるというような行政的なキャッチフレーズにはそのような陥穽が確かにある。現に熊本でも、最近竣工したある町の庁舎がヨーロッパの城を模したというのでアートボリス関係者の間での話題になった。しかし、「カエルの橋」がストレンジネスのオーダーから一歩も出ることが出来ないのとは違って、すぐれた建築には単なるイメージ喚起より先の意味がいくらでもあり得ることもまた同様に間違いない。それを否定するのは建築的可

能性に対するニヒリスティックな態度というものであろう。そして、我々のプロジェクトに関する限り、行政もそんな皮相なレベルでのみ問題を捉えているわけではない。行政レベルでも、ただ他愛もないイメージの問題だったら抱え込まないで済むような諸々の苦勞事を、そうではないからこそ抱えながら事業遂行をしている（「カエルの橋」なら、こんな苦勞を誰もあえて背負い込みはしません）ということは指摘しておきたい。

閑話休題として、先に規模的には小粒化したと書いたが、実のところ、98年に熊本国体が予定されており、その基幹施設として陸上競技場と屋内運動場のコンペが施行され、磯崎審査委員長のもとで選ばれた当選案、とりわけ屋内運動場（第一工房）は、その作品の質の高さからいってもアートボリス作品としてカウントされると期待していたのだが、今のところ諸般の事情で果たされていないのが残念である。またこの事業の特色の一つとして考えていた国際化（地方と世界をつなぐというコンセプト）も、小規模だとなかなか海外発注が難しいために滞っていたが、最近になって芦北青年の家（仮称）というプロジェクトが上がってきて、まだ計画としてここに発表できる段階ではないが、鈴木了二氏とギリシアのジガンテス/ゼンゲリス両氏とのジョイント・プロジェクトとして既にスタートしている。二期の最終年である来年度には県庁事務局の熱心な働きかけによってプロジェクト数も増えることが予想され、何とか質量共に充実したフィニッシュを決めたいと考えている。

●やつか・はじめ／建築家、くまもとアートボリス・コミッショナー事務局ディレクター

牛深ハイヤ大橋

レンゾ・ピアノ・ビルディング・ワークショップ+
オーブ・アラップ&パートナーズ・インターナショナル+(株)マエダ

Ushibuka Haiya-Bridge

Renzo Piano Building Workshop+Arup & Partners International Ltd.+
Maeda Engineering Co.

1989年にアートポリス参加事業の1つとしてスタートした牛深港連絡橋(仮称)は、1995年9~10月の2か月間弱の間に883mの上部工(橋桁)部分の架橋を終了し、天草南端の風景の中に長大なその姿をあらわした。

牛深市は、雲仙天草国立公園の南西部、入り組んだ天草半島の先端に位置する。

八代海、太平洋へとつながる風景は、自然のもつ深い造形の意味を教えてくれる豊饒さをもっている。連絡橋は牛深ハイヤ大橋と名づけられた。ハイヤはこの街を発祥とする祭り踊りの名称だ。漁業にいきる歴史の一端を象徴するこの名前が「海の大通り」ともいえるこの橋につけられた。

架構の工事は小さな港の湾に突然あ

らわれた2200tのフローティング・クレーンによって80m~150mの橋桁が吊り上げられ、無音の中、巨大でドラマチックな光景を描きながら進められた。

細やかな地形の線と澄んだ水面の天草の風景の中に、幅13.6m長さ883m桁高5mの橋をどうやって自然に受け込ませるかが数年にわたるデザインの探求の中心であり、さらに精密な製作と施工の課題だった。構造表現の突出する吊り橋や斜張橋を避け、あえて、単純な連続桁梁を選択したのは、最も簡潔な表現によって、1本の線として風景の中に橋を浮上させることで、自然の中に浸透させることを試みたからだ。

断面は風に対する流体力学的検討を中心に風除板の利用や、底面の曲面化

が計られた。同時に、こうした科学技術的要素は橋のヴォリュームを視覚的に軽く、リズムカルな連続線として表現するデザインの展開へと導いていった。

風除板と底面の曲面により、橋桁5mの高さは3分割され連続する光と影のリズムの形象となって、薄く細やかで豊かな曲線として海面の上19mの空を横切る。少し上向きにつけられたフラップは、変化する空の光の色彩をその純白の面に反射し、繊細な鏡の群列となる。

グレーの底面は、水面に映った半島の深い緑を吸収して、淡い緑の眺めをつくりだす。表面の仕上げの塗装として、白から幾段階かのグレーをほどこしたのは、まさに自然の変化が人工物

としての橋への写り込むことを意識したからだ。漁業の基地牛深の港はほとんど24時間稼働している。連絡橋は漁業の営みにおけるダイナミックな活動の舞台である牛深港の中で、ゆらぎ変移する自然と呼应し、風景に新たな意味を加えてこの海面に浮き上がる。

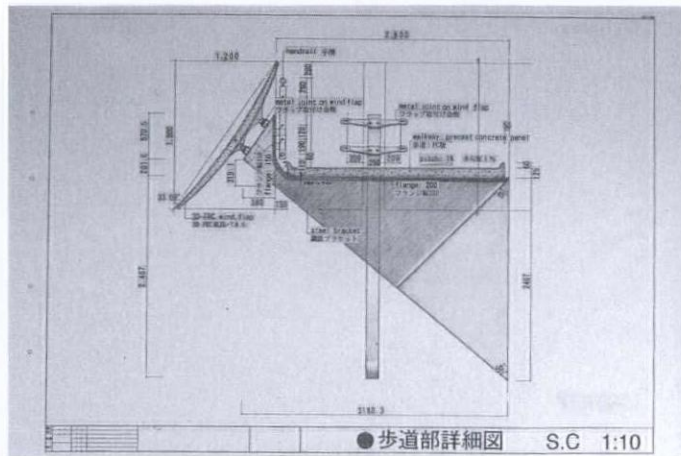
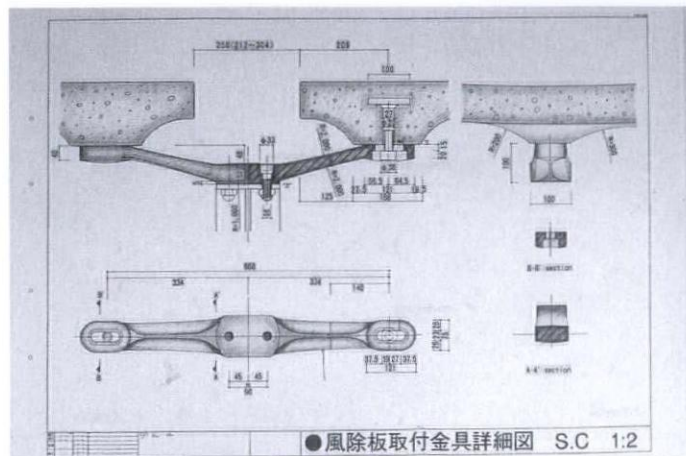
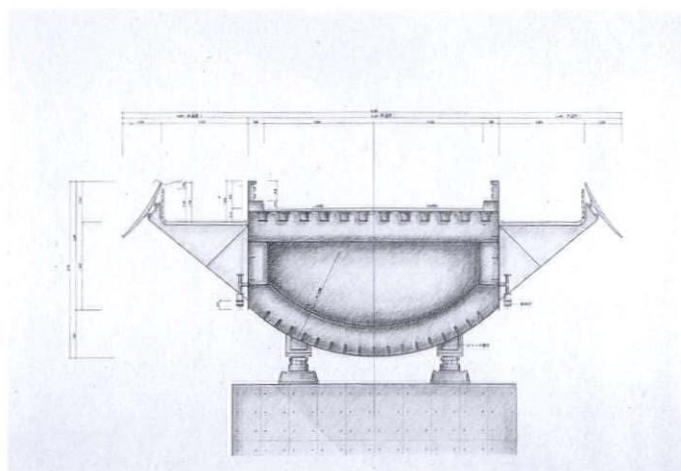
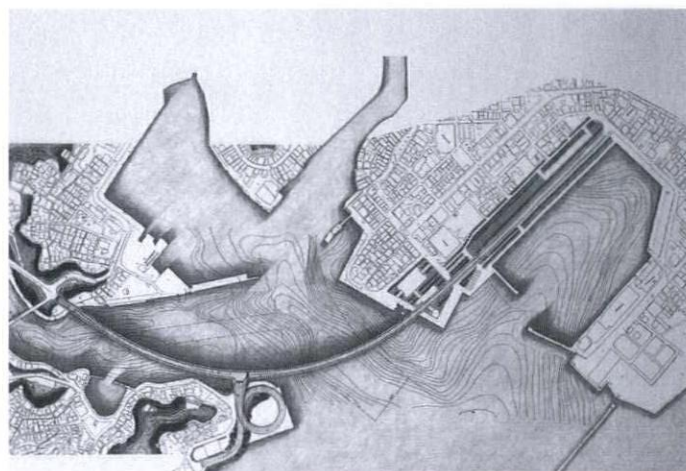
(岡部憲明)

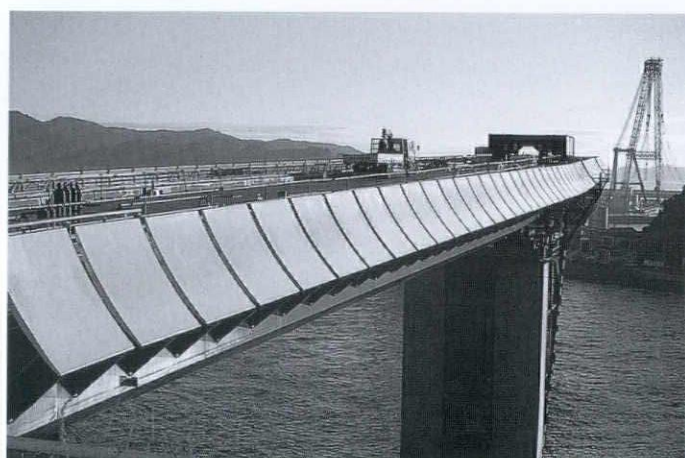
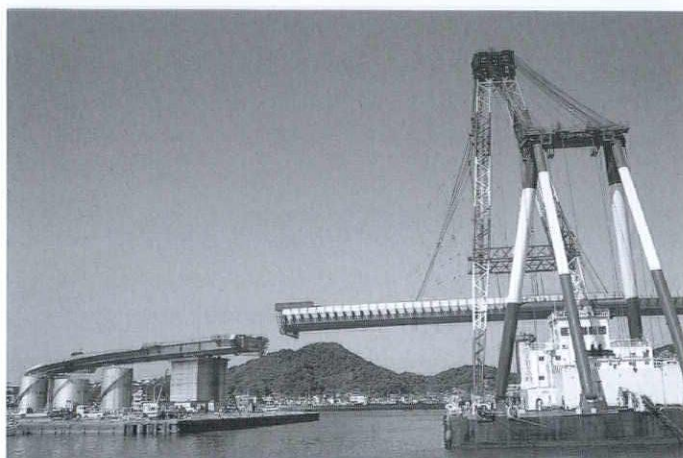
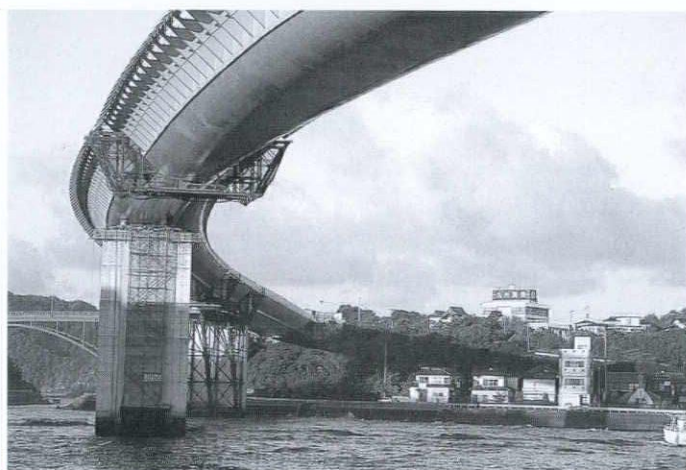
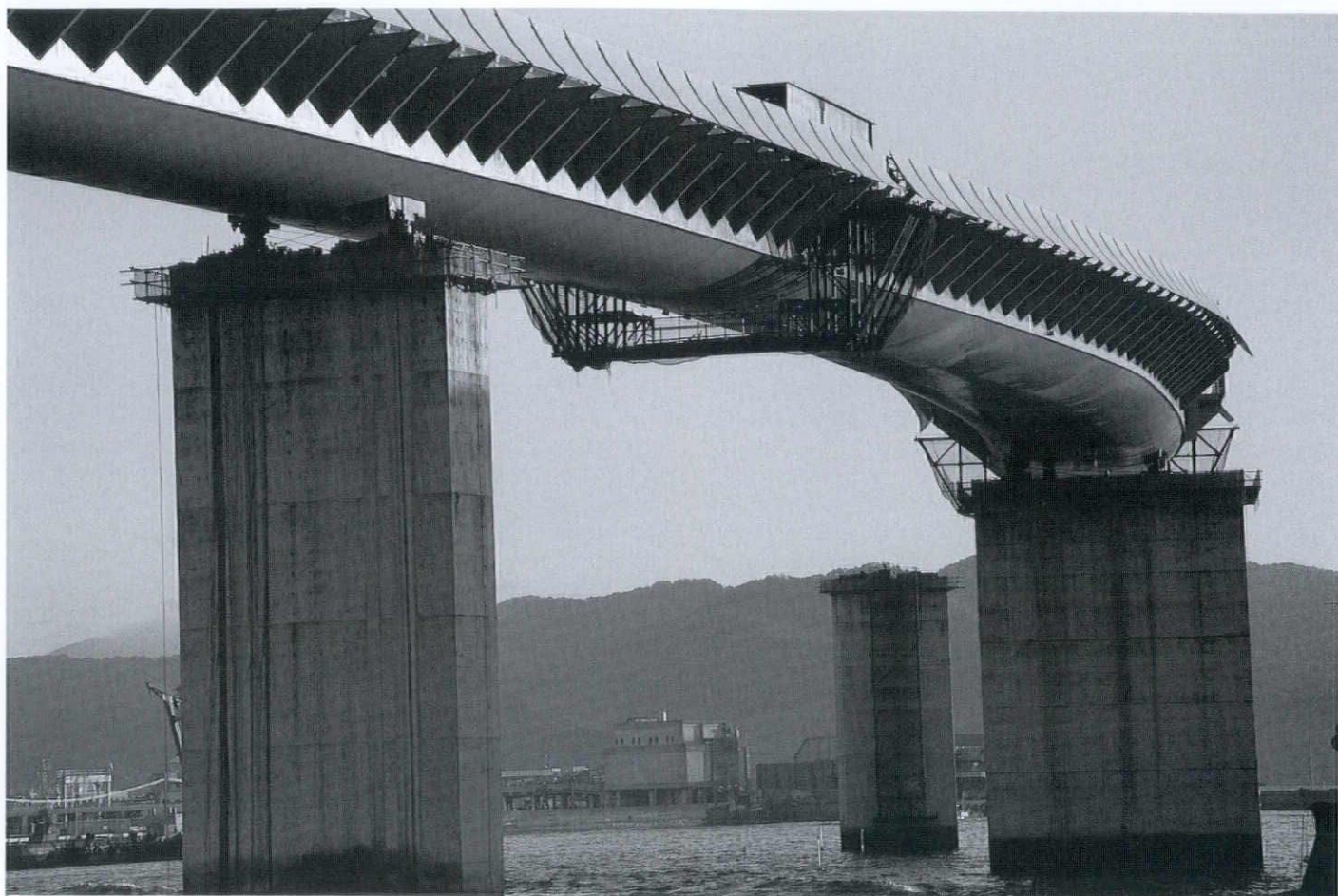
所在地：熊本県牛深市牛深町崎町地内
主要用途：橋

施工：(株)横河ブリッジ(1工区A1~P3) / 日立造船(株)(2工区P3~A2)

規模：橋長：883.0m / 幅員：13.6m(車道部7.0m)(歩道部2.5×2m)

架設工法：フローティングクレーン一括





白川橋景観整備——フライング・ライト

藤江和子アトリエ

Shirakawa Bridge Landscaping: Flying Light
Fujie Kazuko Atelier

今回のプロジェクトは「白川橋景観整備基本計画」に含まれ、また「くまもとアートポリス計画」において、大甲橋とこの白川橋が対象となった。

道路は県の道路維持課および県警察の管理下にあり、一方、一級河川の白川は国の管理下にあるという構図の中で、行政担当官の業務はその調整が主な仕事となった。河川や河川敷と橋上空間を人々のために取り戻す様々な提案をしたものの、実現に向けての議論をする機会がほとんどなく、結果としては国の管理範囲に侵入するデザインはことごとく実現できなかった。

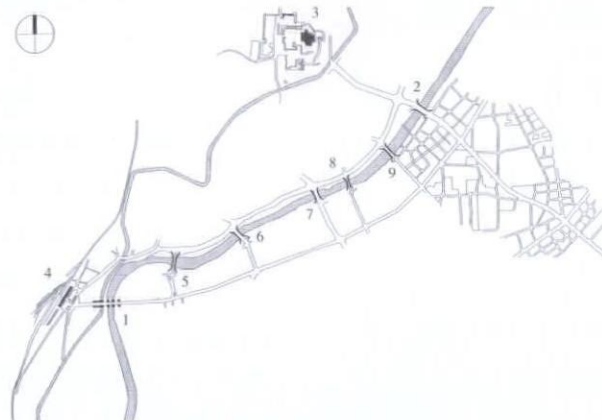
苦勞と言えども、密集した市街地にありながら、取り巻く河川空間が限りなく広く続くため、スケール感の認識と把握に非常に慎重になったこと。2種類の構造から成る既存の橋梁上に工作物（街路照明）を設置するため、造形物と橋梁の、ふたりの構造設計家と協働する必要があったこと。そして最大の苦勞は予算とデザインのバランスを取ることであり、建築の場合とは異なる難しい作業であった。

橋は街において最も公共性の高い、特別な都市空間である。にも関わらず熊本の人々にこの橋の存在認識は薄いように思えた。これは記憶に残る特徴がないことに起因している。そのため、遠景から認識できる特徴のある造形と、日常的に利用する人々の皮膚感覚に触れる素材感を大切に、「熊本の顔」として記憶されることに留意した。

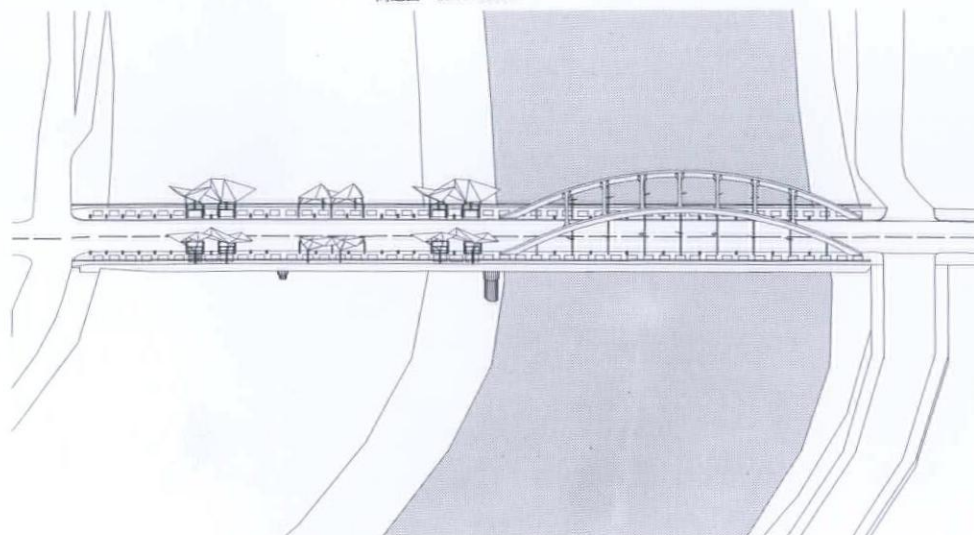
機能整備という点では街灯の整備が重要課題であると思われ、シリーズ展開を試みていたデザイン手法（万華鏡シリーズ）を用いて、浮遊する大きな照明——フライングライトをデザインした。形が不定形で、視点の移動と相乗して全景がはっきり記憶しづらく、また陽光を受けて表情が豊かに変化するのが特徴だ。風景の中のスケールと頭上に浮遊するオブジェ（ただし、具体的な象徴性を感じさせない形）の質量感のバランスを取り、ベンチや車止め、ペーパメントのパターンとともに、150mの移動が楽しく変化のあるものとなる空間を目指した。（藤江和子）



- 1: 白川橋
- 2: 大甲橋
- 3: 熊本城
- 4: JR熊本駅
- 5: 泰平橋
- 6: 長六橋
- 7: 代健橋
- 8: 新代健橋
- 9: 銀座橋



周辺図 S=1:50000



所在地：熊本市二本木
主要用途：橋
設計協力：原口修
構造設計：佐々木睦朗構造計画研究所
施工：武末建設、山本金属製作所
規模：橋全長：150m
竣工：1992年12月

馬見原橋

青木淳／青木淳建築計画事務所＋中央技術コンサルタンツ

Mamihara Bridge

Jun Aoki & Associates + Central Engineering Consulting Co., Ltd.

熊本アートポリス

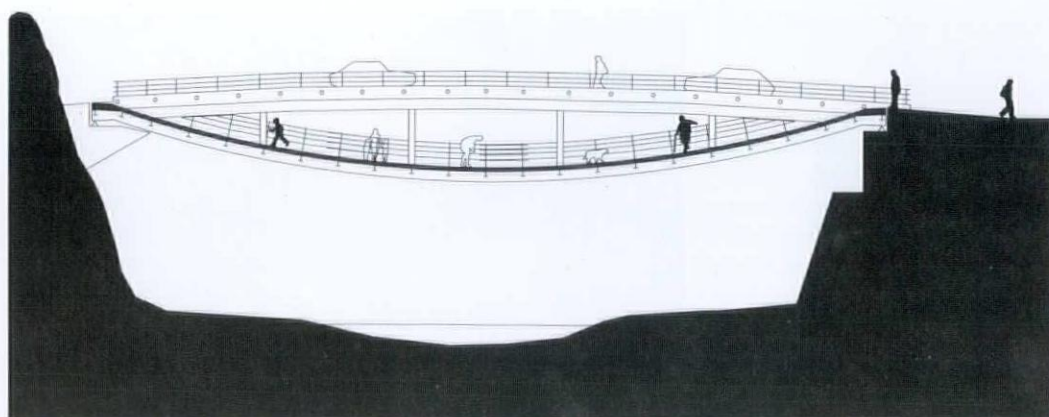
馬見原橋は、熊本アートポリスの一環として、熊本県と宮崎県との県境につくられた長さ40メートル弱の小さな橋である。場所はかつての日向と肥後の交通の要衝にあたり、県下でも3番目に町制が敷かれたほど宿場町として栄えた町である。そうした名残をわずかに残す街道筋の一番端に、町のシンボルとして、この橋の新規付け替えが計画された。

条件の特殊性としては、橋を渡ったところでシメナワのかかった一對の岩(夫婦岩)に挟まれていることが挙げられる。この神聖さを保つためにも、橋の幅は不可能であるというだけでなく、その景観を十分に尊重する必要があった。また、現在の町には、何気なく佇めるような都市的場所はない。そこで、渡るという機能を果たすと同時に「人々が居られる」空間としての橋が構想された。「人々が居られる」というのは、たとえば、夏には日陰のもと、川面を渡る風や涼しげな水の流れが感じられるようなことである。

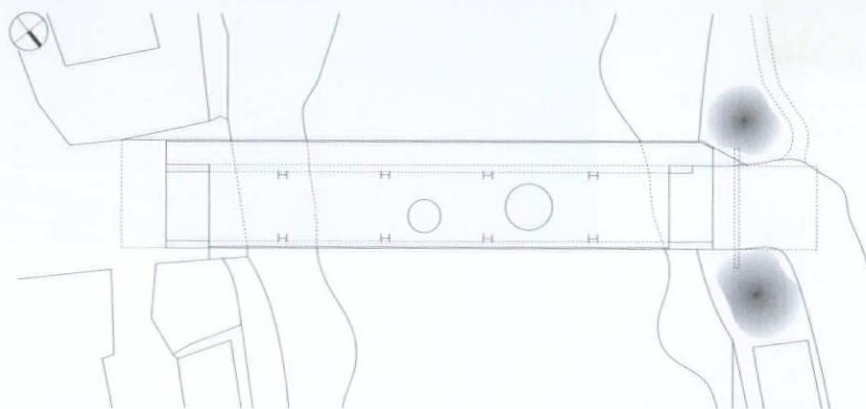
橋は、道路が川の上に来て、そこで上下にスプリットし、また合わさるというもの。横から見ればくちびるのよう。上くちびるが歩車道で、下くちびるが歩行者専用道。下くちびるにかかる引張力を、柱による突き上げと上くちびるにかかる圧縮力で相殺している。全体で一体の鋼製サスペンション・アーチ構造となっている。

アスファルト舗装の上面版はなめらかに夫婦岩の間に吸い込まれる一方、木製床の張られた下面版は太鼓橋を逆さにしたような具合に、一度川の流れに近づき人々にとって「居られる」場所として計画された。その下面版には2ヶ所、丸い穴があげられ、人々に普段とは違った水との出会いを与えている。

(青木淳)

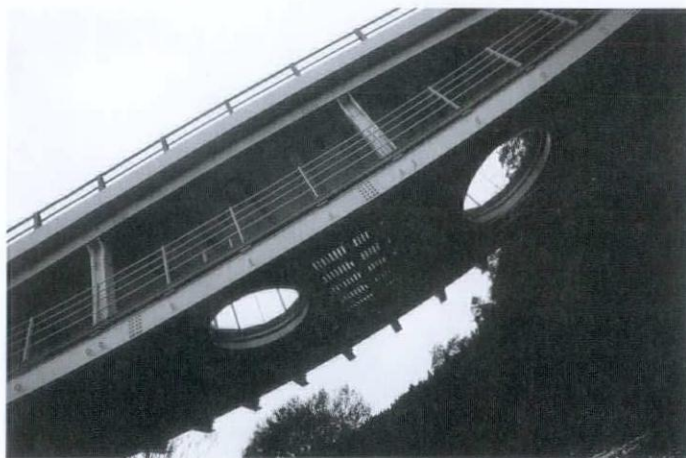


断面図 S=1:350



平面図 S=1:500

所在地：熊本県阿蘇郡蘇陽町馬見原町道新町線
 主要用途：橋
 構造設計：中央技術コンサルタンツ九州支店
 主要構造：主体構造：上部工・S造
 (変形フレンドリー)、下部工・RC造／杭・基礎：直接基礎
 規模：橋長38.250m、桁長38.050m、支間長37.250m、幅員、車道部5.00m、歩道部6.750m
 施工：1995年6月





杖立橋+杖立橋多目的ホール

新井清一／アライ・アーキテツク

Tsuetate Bridge + Tsuetate Multipurpose Hall
Kiyokazu Arai / Arai Architects

くまもとアートポリス

熊本県小国町北部の温泉街の中心に位置する橋の架替、および建築の計画である。雨季にはしばしば氾濫する川、その兩岸にぎっしりと旅館や民宿が立て看板のように軒を連ね、既存のコンテキストは、川と平行に強いオーダーを残している。

この計画は建築をつくることにとどまらず、住民の新たな意識の起爆剤となって街全体が変わっていくことをね

らいとして進められた。橋と建築をひとつの構成と捉え、地域の活性化につながるよう、街全体のランドスケープの起点となるよう計画した。土地に限りがある杖立の街に、広い道や広場に代わるような「瀧目のスペース」の必要性を提案した。渓谷に架かる橋は、流れる川と直交するオブジェとして位置付ける。そして、対岸からの眺めや街の持つコンテキストから「面として

の壁」を、橋を受け止めるように（川と平行に）配置し、その裏側に北側道路と橋のレベルを結ぶ動線を確保した。緩やかなカーブで折れ曲がる1枚のスラブに包まれた多目的スペースは、小国杉の丸太の斜材によって上空に持ち上げられる。

この計画が、杖立の街に、より一層の活気を導く「きっかけ」となることを期待している。（新井清一）

【杖立橋】

所在地：熊本県阿蘇郡小国町大字

下城杖立

主要用途：歩道橋

共同設計：至田利夫／シダ橋梁設計センター

主要構造：2径間連続鋼斜張橋

規模：橋長 53.45m／橋幅 3.20m／

有効幅員 2.85m

【杖立橋多目的ホール】

所在地：熊本県阿蘇郡小国町大字

下城杖立

主要用途：多目的スペース

構造設計：TIS & PARTNERS

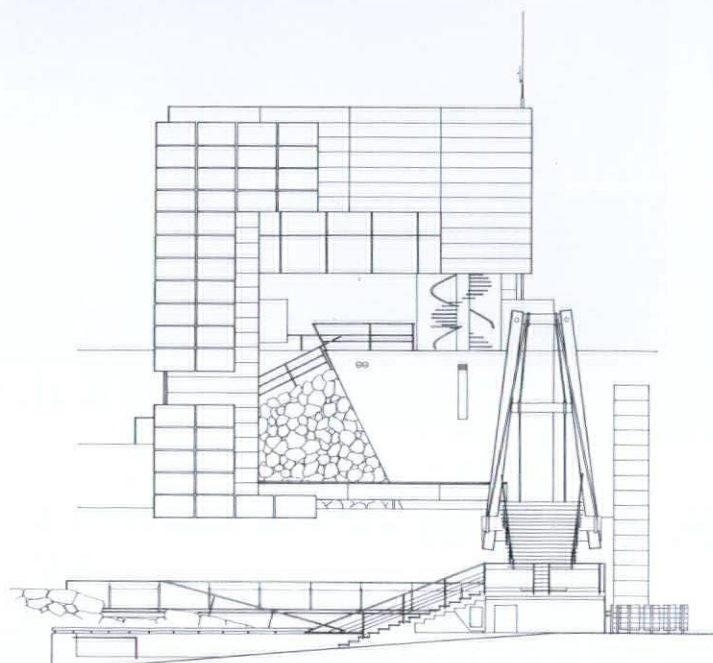
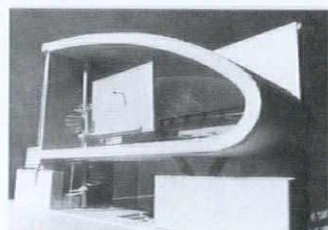
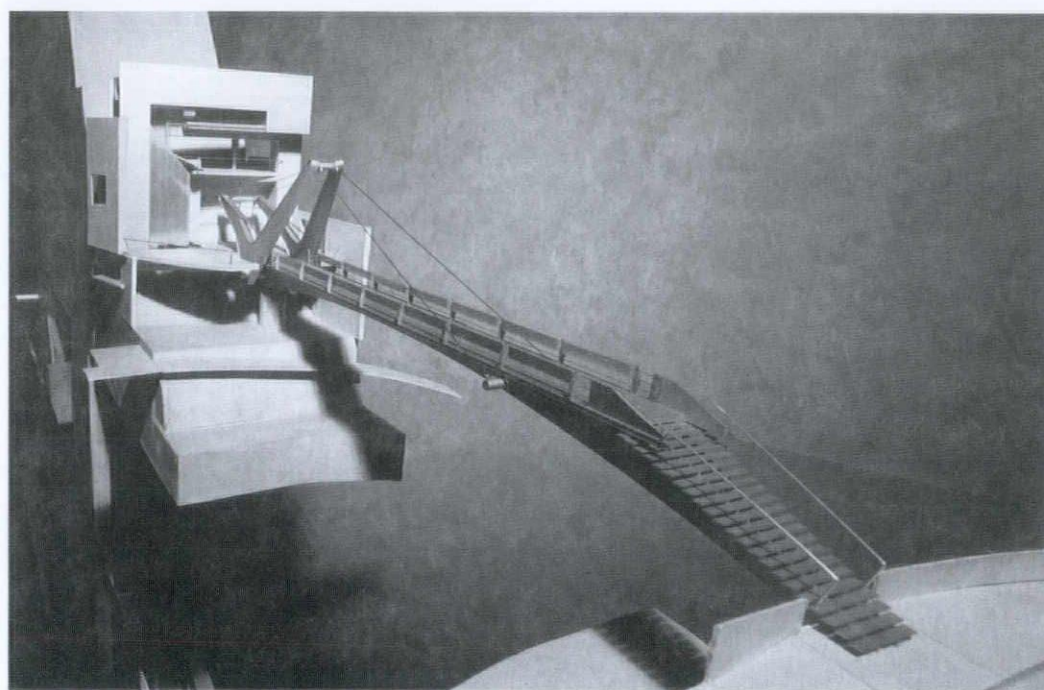
敷地面積：156.66㎡

建築面積：92.65㎡

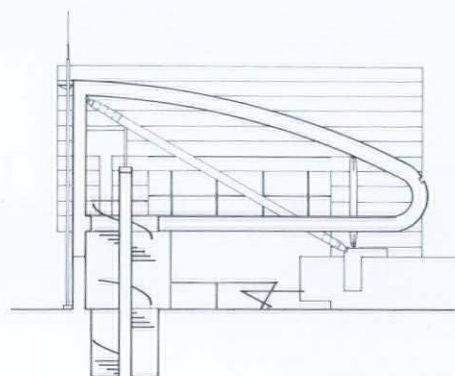
延床面積：128.45㎡

主要構造：RC造、S造

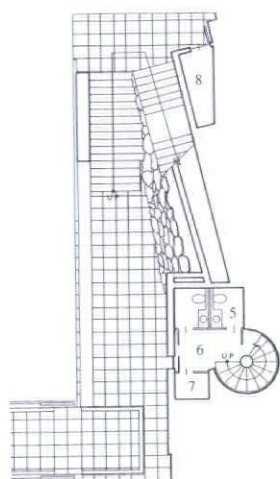
規模：地上2階、地下1階



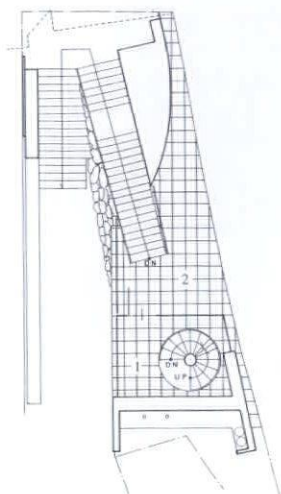
南立面図 S=1:300



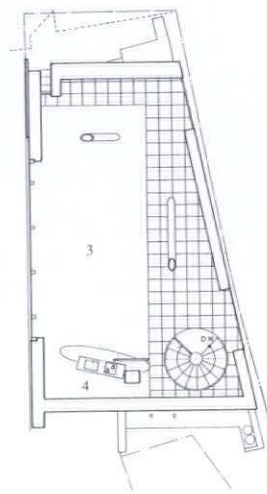
断面図 S=1:300



地階平面図 S=1:300

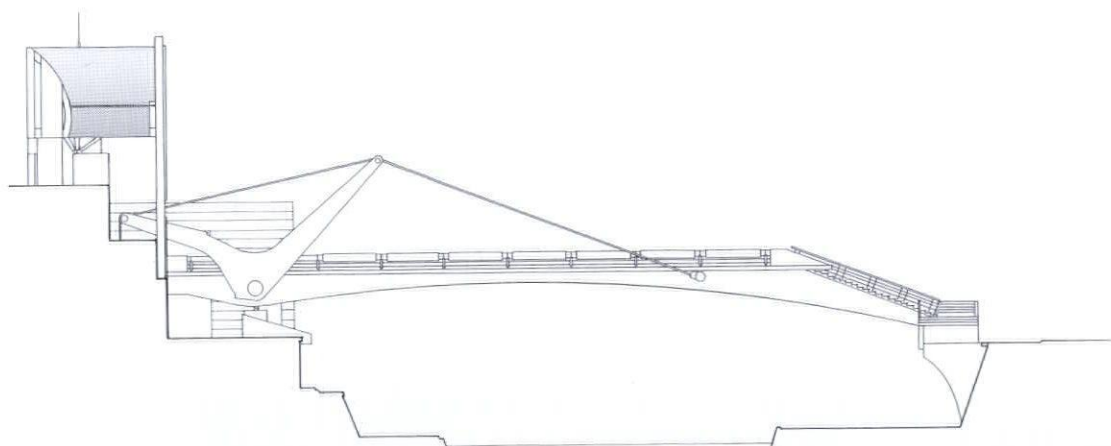


1階平面図 S=1:300

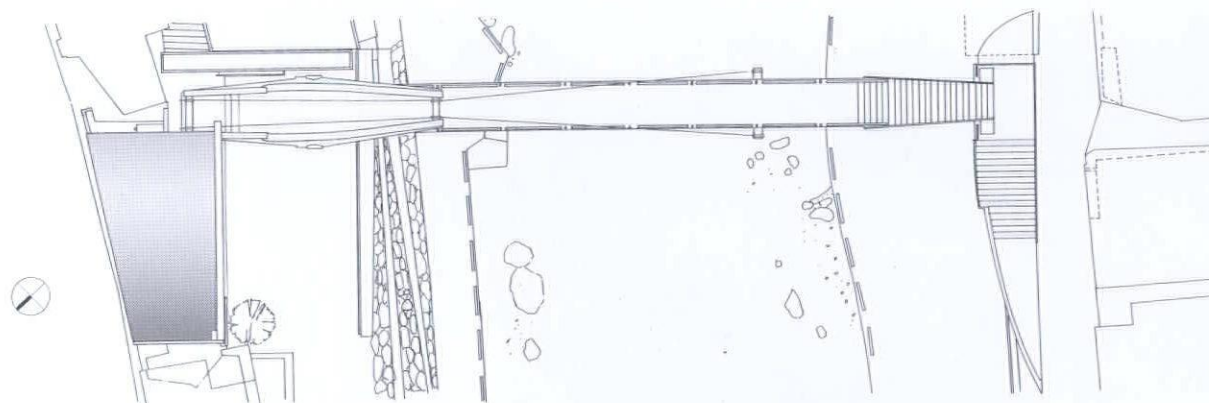


2階平面図 S=1:300

- 1: エントランス・ホール
- 2: ピロティ
- 3: ホール
- 4: キッチン
- 5: トイレ
- 6: 地下室
- 7: 倉庫
- 8: テレメーター室



西立面図 S=1:500



配置図 S=1:500

鮎の瀬大橋

大野美代子+エム アンド エム デザイン事務所+中央技術コンサルタンツ

Ayunose Bridge

Miyoko Ohno + M & M Design Office + Central Engineering Consulting Co.,Ltd.

くまもとアートポリス

熊本県矢部町は阿蘇山の南方に位置し、通潤橋をはじめ今も優れた石橋の多く残された地域である。阿蘇山の噴火によって形成された山地であるが、架橋地はその山深く流れる緑川溪谷の緑の濃い山々を切り裂いたような険しい地形である。幅300m、深さ140mのV字形ではるか谷底に清流のきらりと光るダイナミックな景観を呈している。この風景を活かした橋づくり、言い換えれば「橋のある風景」をつくることがこのデザインの目標であった。

谷の片側は開けているが、反対側は山がせまっていること、また、谷の斜

面中程に岩棚のあることから、斜張橋とV形橋脚を組み合わせたアンバランスな形態のイメージを地形に重ね合わせてつくった。すなわち、開けた側にタワーを立て、岩棚にV脚を立てることとした。崖の表面には火砕流の堆積した岩肌が露出し、それにはコンクリートのテクスチャが馴染みやすいため、コンクリート橋が適している。そこで構造形式は3径間のPC斜張橋として、基礎も谷をなるべく痛めないよう工夫している。

形状については、斜張橋の持つ緊張感をシャープでスレンダーに表現し、

鋭く切り立つ谷の厳しさに対応させた。ケーブルは2面吊りで、緑を背景に際立つオレンジ色とした。

スレンダーな桁には、ケーブルの定着部を櫛形に取り付け、明確化している。

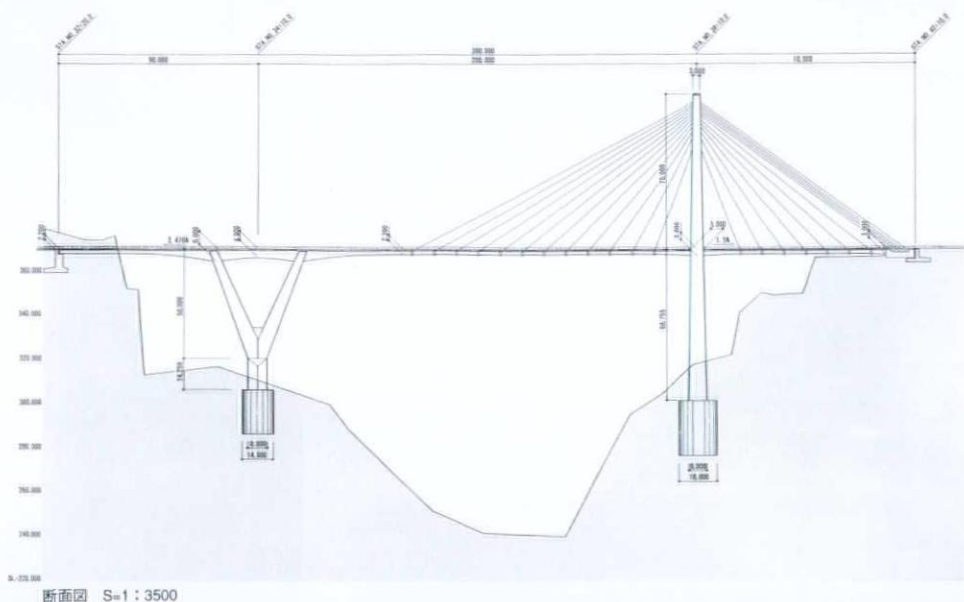
この道路は、2車線片側歩道の農道である。町側からのルートは山間のカーブの連続で切土部を進み、その閉鎖的な空間を抜けると突然、谷の上に出る。そこは、この橋のV脚上であり、谷の風景が眼下に広がる。そして対岸側から張り出されたケーブルをくぐり、橋詰の広場へ導かれる。このようにシークエンス景観としても、ドラマ

ティックな構成にしている。

前述のように、矢部町は石橋のメッカである。

この地に現代の橋集技術を展開し、橋を通して現代文化の息吹を後世に伝えることができれば幸いである。そしてそれが地域の人々に親しまれる「橋のある風景」となることを願ってやまない。

(大野美代子)



断面図 S=1:3500



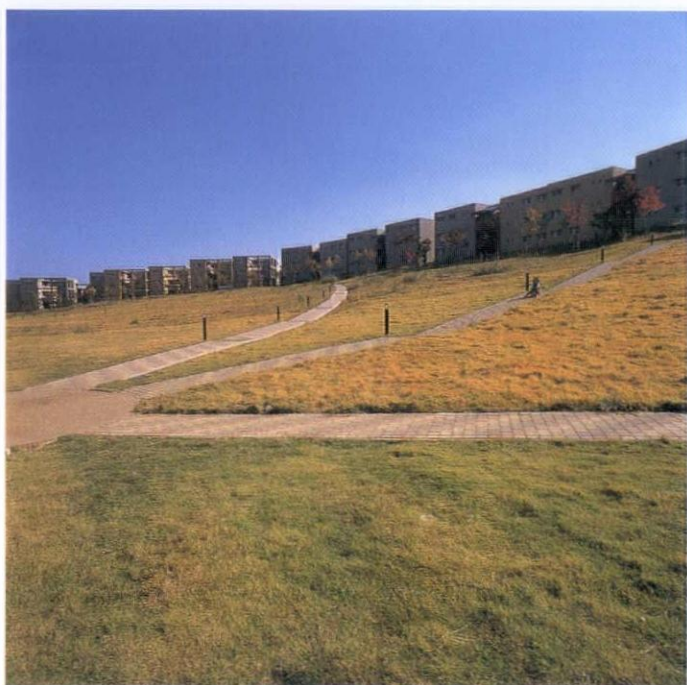
所在地：熊本県上益城郡矢部町
 主要用途：道路橋（片側歩道）
 構造設計：（株）中央技術コンサルタンツ
 施工：住友建設（株）・佐藤企業（株）建設工事共同企業体
 主要構造：3径間連続PC斜張橋
 逆台形1室PC箱桁 ファン形2面吊り
 規模：橋長390m／幅員8m／
 タワー高さ138m
 竣工：1999年予定

熊本市営新地団地A-E棟

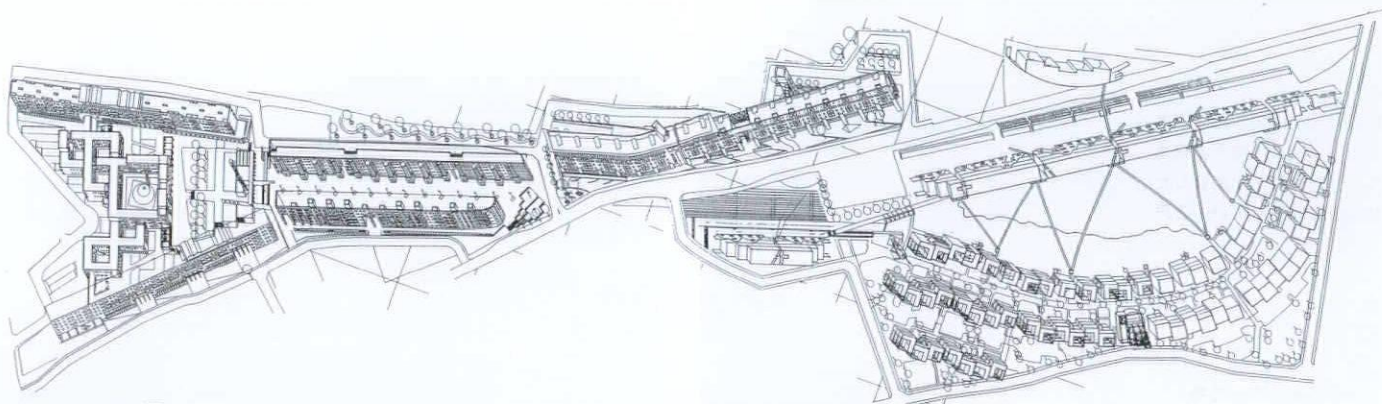
A棟:早川邦彦建築研究所 B棟:緒方理一郎建築研究所
C棟:富永譲+フォルムシステム設計研究所 D棟:西岡弘建築工房
E棟:上田憲二郎建築事務所

Shinchi Public Housing Complex Block A-E

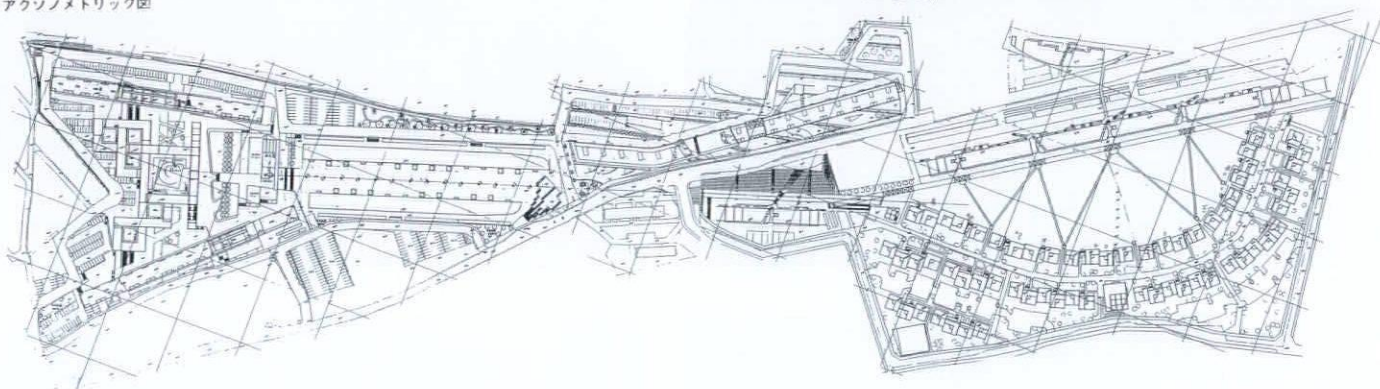
A: Kunihiro Hayakawa Architect & Associates, B: Riichiro Ogata Architects & Associates, C: Yuzuru Tominaga + Form System Institute, D: Nishioka Hiroshi Architectural Office, E: Kenjiro Ueda, Architect & Associates



所在地:熊本市清水町新地
敷地面積:122,631m²
[A棟]
設計者:早川邦彦建築研究所
竣工:1992年3月
[B棟]
設計者:緒方理一郎建築研究所
竣工:1992年3月
[C棟]
設計者:富永譲+フォルムシステム
設計研究所
竣工:1993年10月
[D棟]
設計者:西岡弘建築工房
竣工:1994年3月(4期)、
1995年6月(5期)
[E棟]
設計者:上田憲二郎建築事務所
竣工:1994年3月(4期)、
1995年5月(5期)

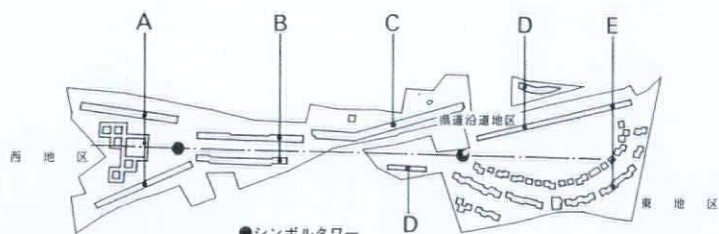


アキシノメトリック図



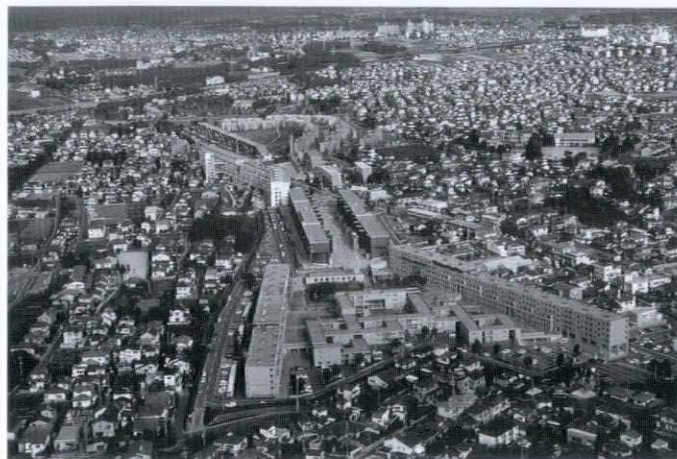
配置図 S=1:2800

- A 早川邦彦
- B 緒方理一郎
- C 富永謙
- D 西岡弘
- E 上田憲二郎



全体構成概念図

●シンボルタワー



熊本県営竜蛇平団地

元倉真琴/スタジオ建築計画

Ryujabira Public Housing Complex

Makoto Motokura / Kenchiku Design Studio, Tokyo

集合住宅というものを、例えばマンションとか住棟と呼ばれるような建築の単位として捉えてしまうのは間違いである。そして、そのような単位を集めることによって、街や都市をつくることができるとするのも間違いである。1戸1戸の住宅が集合した状態を集合住宅と呼ぶ方がよい。2戸の集合もあれば、100戸の集合もある。地球全体を覆いつくす状態をイメージすることさえできる。つまり、集合住宅というものは、単位として規定するものがそれ自身にはない。

集合住宅について考えるということ

は、1戸1戸の住宅の集合の在り方について考えるということだ。それは街や都市について考えることと同じことだ。しかし、現代の私たちの街や都市は、かつての村落のような共同体としての強い求心性のある全体像を持っていない。金太郎飴のようにどこを切っても同じであり、何の脈絡もなくダラダラと続いている。

私たちに求められているのは、都市の新しい単位の在り方である。そして集合住宅に期待されているものもここにある。集合住宅は、都市の細胞というべき単位のモデルを示すべきである。

熊本県営竜蛇平団地での私たちの試みは、この都市のモデルを示そうとしたものである。ここでは建築の集合というやり方はとっていない。1戸1戸の住戸の集まりの状態を、建築という箱の中に収めてしまうのではなく、そのままの状態を表わそうとした。誰もが知っている街のように、道があって庭があって各住戸の入口がある。そんな街そのものを立体的につくろうとしたものである。地縁的なコミュニティの形成を期待したものではなく、街(道)の持っている開けっぴろげで、猥雑な煩わしさを持ち込もうとしたものであ

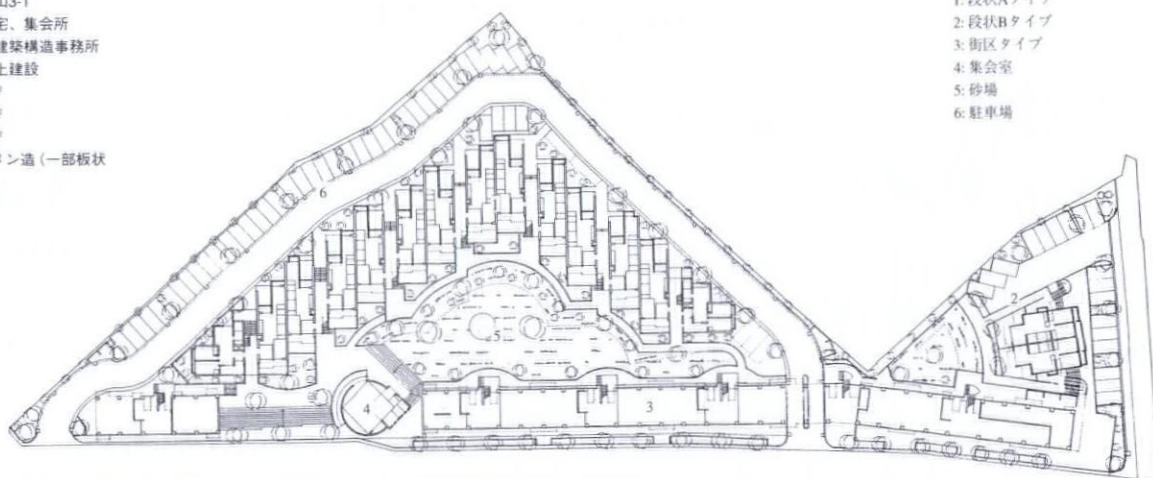
る。各住人は直接街に対することで、つまりその関係を調整することによって、自らのアイデンティティを獲得することができる。

このプロジェクトの都市の単位としての提案は、公園的なオープンスペースと、道路に面したピロティである。ピロティは道に対してアーケードとして機能していると同時に道とオープンスペースとのつながりをつくっている。つまりこの装置によって、集合住宅(団地)は、都市の単位としての意味を獲得している。

(元倉真琴)

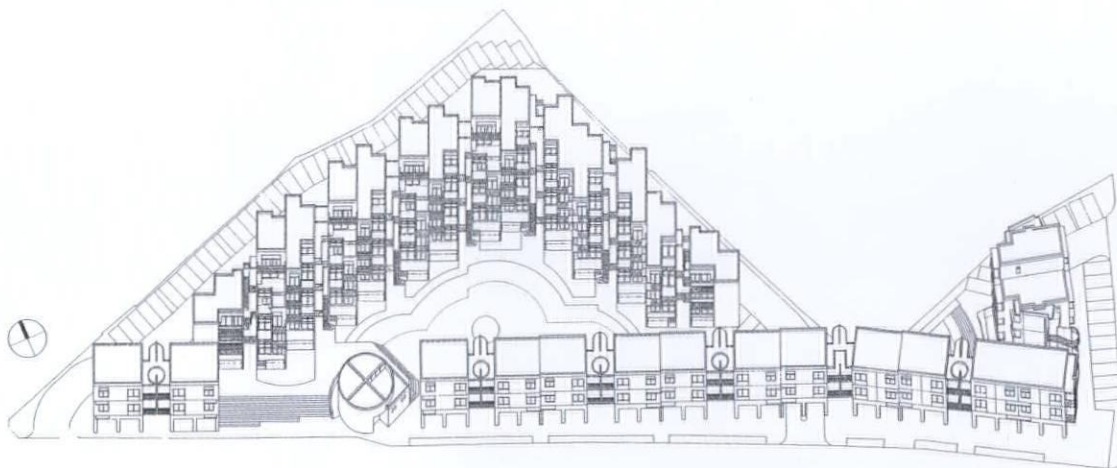
Kumamoto Arpolis

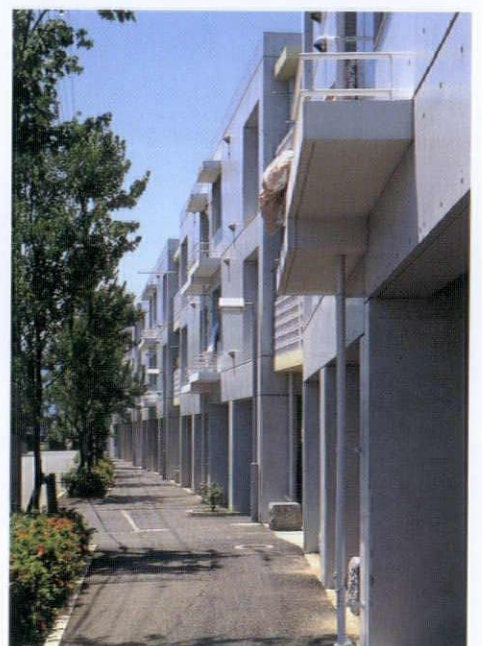
所在地：熊本市山3-1
主要用途：共同住宅、集会所
構造設計：SIGLO建築構造事務所
施工：中瀬組、水上建設
敷地面積：8,498㎡
建築面積：2,495㎡
延床面積：6,511㎡
主要構造：RCラーメン造（一部板状ラーメン造+壁式造）
規模：地上5階
竣工：1994年2月



- 1: 段状Aタイプ
- 2: 段状Bタイプ
- 3: 街区タイプ
- 4: 集会所
- 5: 砂場
- 6: 駐車場

配置・1階平面図 S=1:1400





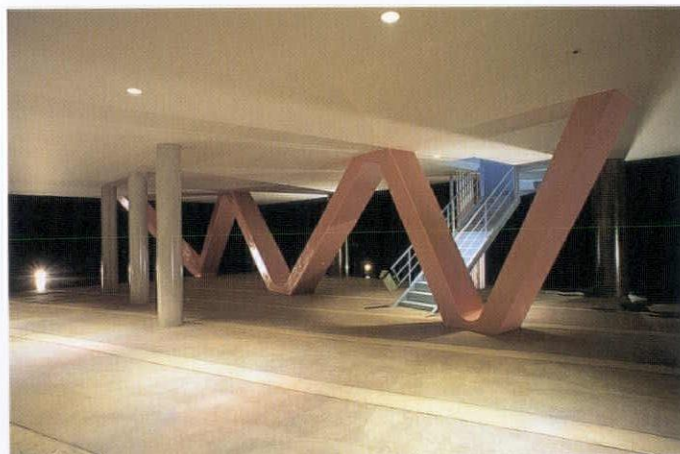
石打ダム資料館

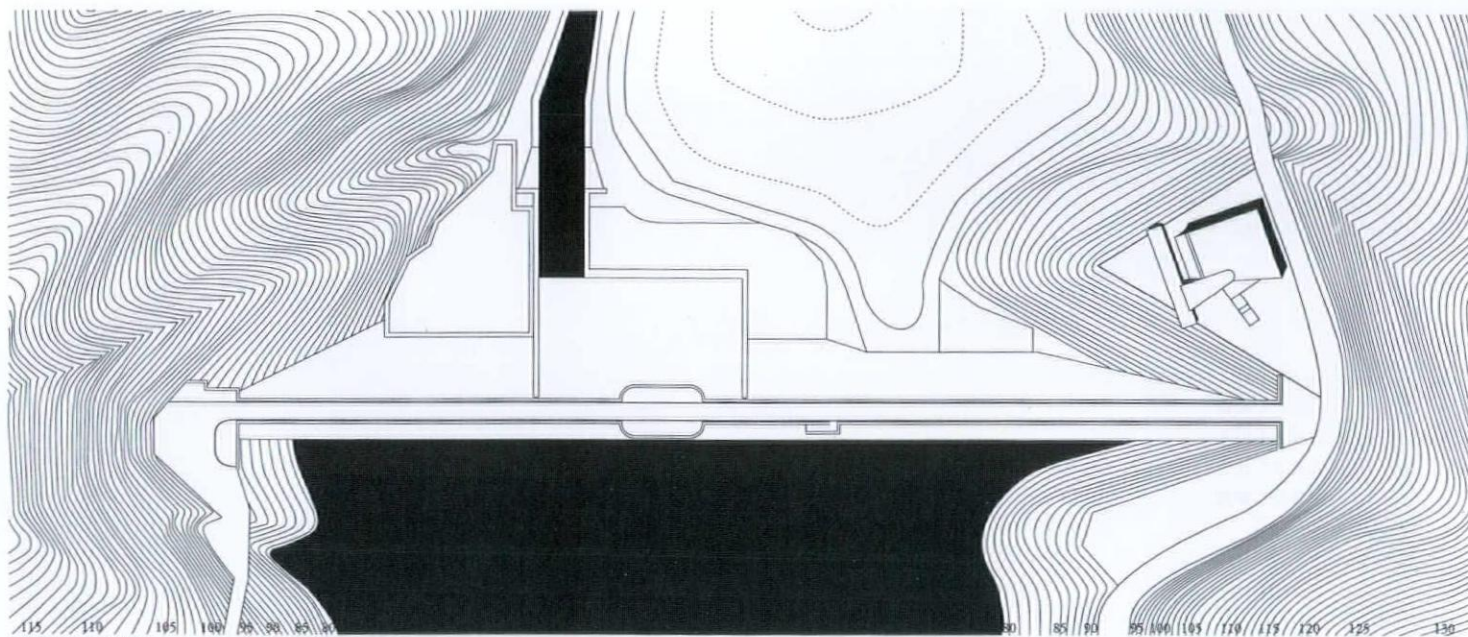
入江経一+パワーユニットスタジオ

Ishiuchi Dam Museum
Kei'ichi Irie+Power Unit Studio

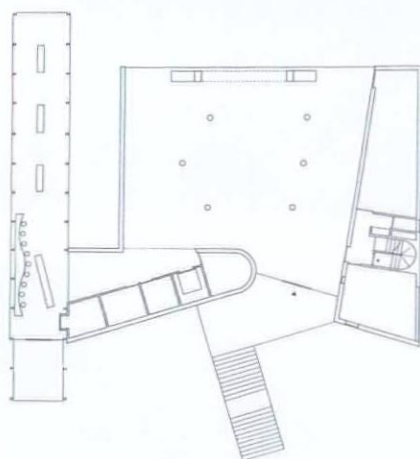


Kumamoto Artpolis

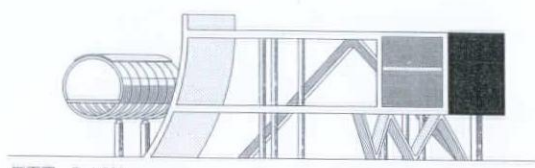




配置図 S=1:1800



平面図 S=1:500



断面図 S=1:500

熊本アートポリスに参加することは、様々な建築のアプローチの中で建築の社会性を考える機会となった。建て主が公共であろうとなかろうと、人々にとって共通の環境となってしまう以上、建築は社会性をもつ。ところで、建築の形はどのように生まれるのだろう。形を規制する多くの条件がある。敷地、環境、法規、機能的な与件、構造的な

可能性、素材。これらの条件の内部でいずれにも責任を果たしつつ、その反面でいずれからも全く自由なところから、美しい形は生まれるのではないだろうか。美はこれらの条件すべてを口実とする必要がないのだと思う。完成した建築について論理で説明できることは、断片的なものに限られる。

伸びやかに広がる谷、そこに新しく

生まれたダムと人造湖。それだけがこの建築にとっての揺籃であって、そこから建築を養いたいと思った。何よりも美しいのは低い尾根に挟まれた水面から谷へと伸びる地形の変化であり、その上に広がって西の海へと続く空である。ここからは海は丘に隔てられていて見えなかったが。（入江経一）

所在地：熊本県宇土郡三角町中村字八久保
 主要用途：資料館
 構造設計：ティ・アイ・エス・エンド・パートナーズ
 施工：マコト建設
 敷地面積：1,521m²
 建築面積：520m²
 延床面積：455m²
 主要構造：RC耐震壁付ラーメン構造（一部S造ブレース構造）
 規模：地上2階、塔屋1階
 竣工：1993年3月

花の温泉館

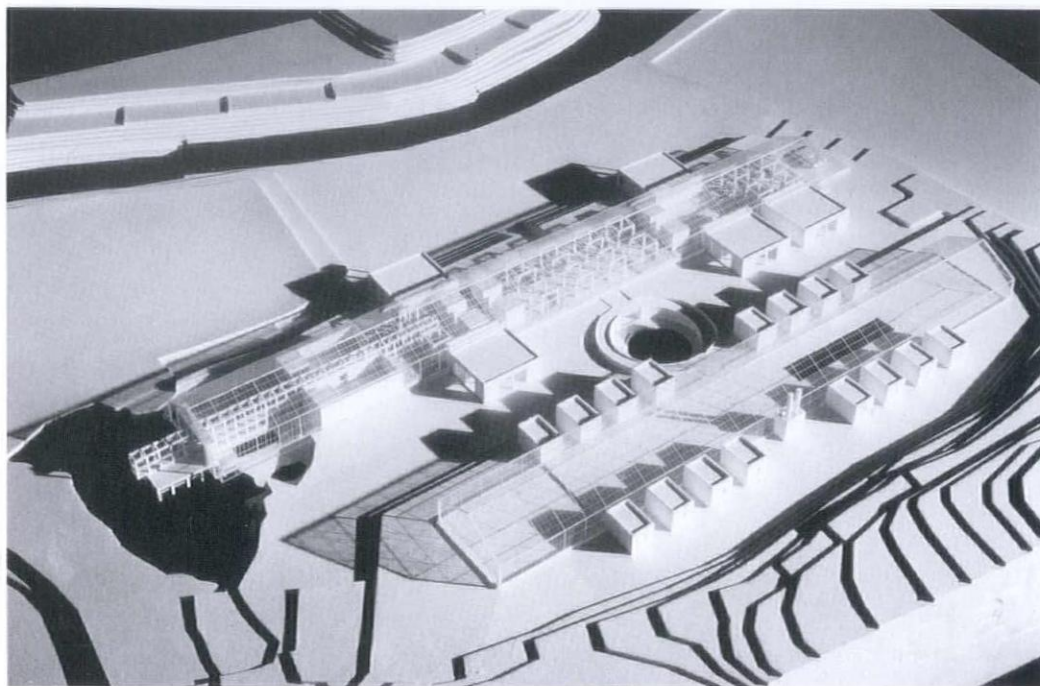
ワークショップ

Ubuyama Green House Spa
WORKSHOP

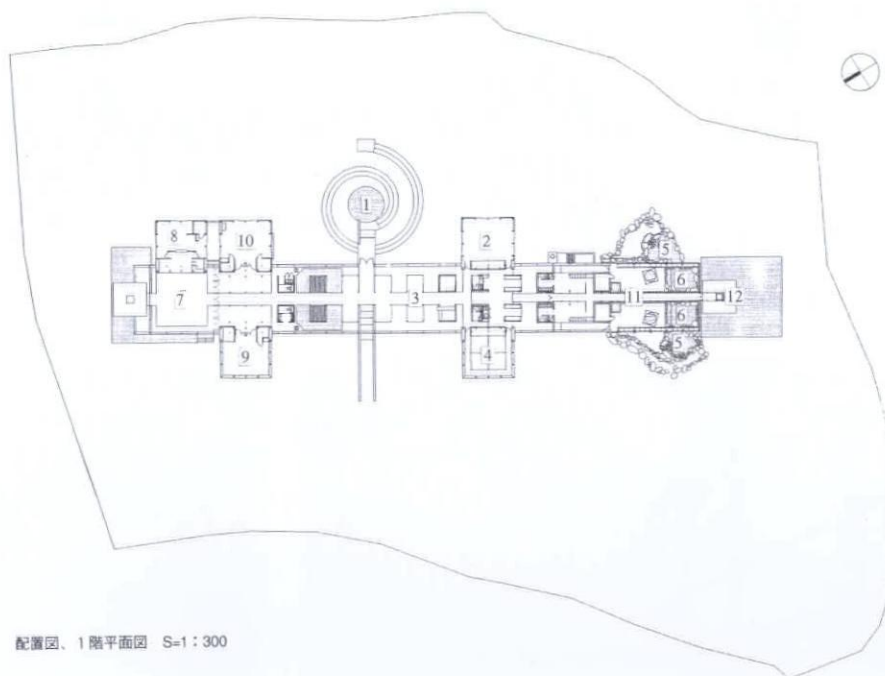
私達の提案は、村に異系の物体を持ち込むのではなく、村の日常生活をガラスの被膜の中でクリアに示すことであった。100mの長大な農業用のガラス温室を用い、そのシェルターの中に温泉、集会、展示、物産販売、アトリエ、飲食の施設のユニットを並置した。建築はなるべくつくりこまないようにし、持ち込まれるエレメントを浮かび上がらせる方法を考えた。村長、村議会、青年組織への説明、意見交換を経て建設の運びとなったが、否定的な意見をもつ人もいた。他に類例のない形式の新しさに対して期待と不安が混在していた。監理中もいろいろな民宿に泊まり、県の農政の担当者や地元有志が出席する集まりに参加、意見を交換した。

温泉が中心の一期工事を終え、仮オープンした。8月のオープンであったため日差しはことのほか強く、環境調節において若干の問題も露呈した。コンクリートの粗い素地の露出、節だらけの杉材は村議会の一部の方の感覚の違いから生じた苦言もあり、2期工事の課題とした。また、翌年の本オープン盛り上げる意図から私達の設計した東京・渋谷で同じガラス温室を用いたテンポラリーなレストランで村の産業振興課や農協の若い人たちが参加し、ふたつの空間を呼応させるためのイベントを行なった。しかし、その先は運営主体をどこにするか決着がつかず、具体的な見通しがつかないまま完成を迎えようとした。結局、直前になりレストランは農協、物産販売部門は地元有志というかたちで運営することになった。予算も準備期間もないため、建物の形式に比して用意されたものは、周辺のものとは差異のないものとなった。つくりこまずエレメントを露出させるものとしては少し寂しいものとなった。しかし、関係者の努力により、盛大に本オープンを迎えた。村の風景にふさわしく目立たない外観だが、温室空間の意外な開放感が非常に評価された。その後は村の人たちの手によって、少しずつ変化が加えられ、成長し続けている。(ワークショップ)

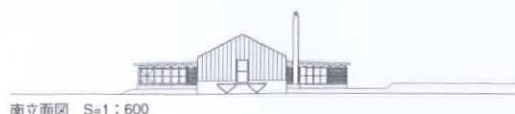
所在地：熊本県阿蘇郡産山村大字田尻下釜蓋
主要用途：温泉、レストラン
構造設計：構造計画プラスワン
施工：佐藤工務店
敷地面積：11,523㎡
建築面積：1,382㎡
延床面積：1,399㎡
主要構造：S造、RC造
規模：地下1階、地上1階
竣工：1993年4月



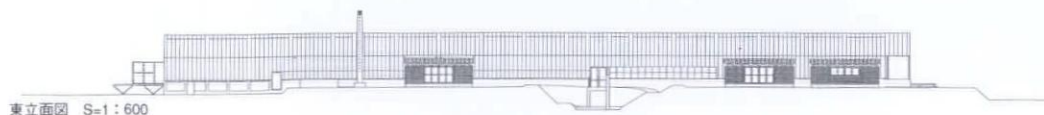
3期工事を含めた提案。当初、青苗温室に宿泊ユニットを付加した施設を並置する計画であった。現在、村の人たちの手により温室のみ作られ、活状を呈している。



配置図、1階平面図 S=1:300

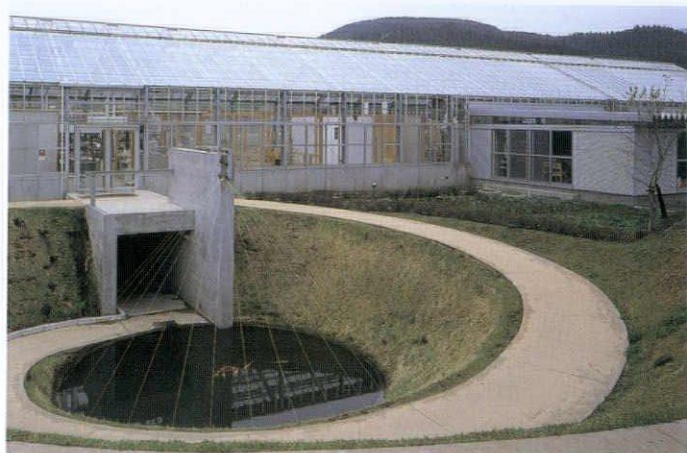
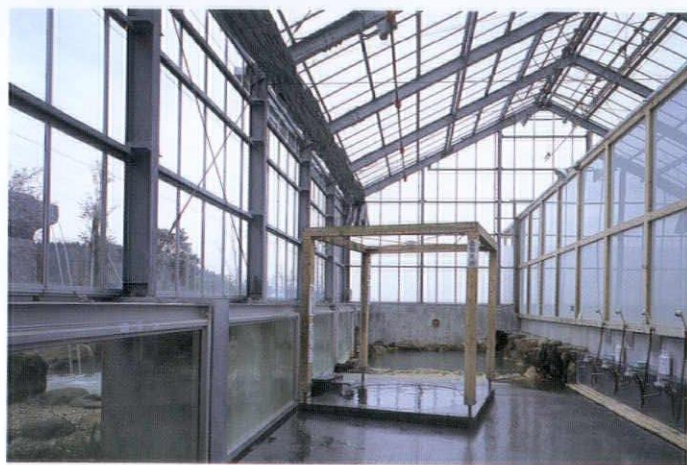


南立面図 S=1:600



東立面図 S=1:600

- | | |
|------------|-----------|
| 1: 光と水のホール | 7: レストラン |
| 2: 多目的室 | 8: 厨房 |
| 3: 販売コーナー | 9: 工房 |
| 4: 休憩コーナー | 10: 管理事務室 |
| 5: 露天風呂 | 11: プリッジ |
| 6: 岩風呂 | 12: デッキ |



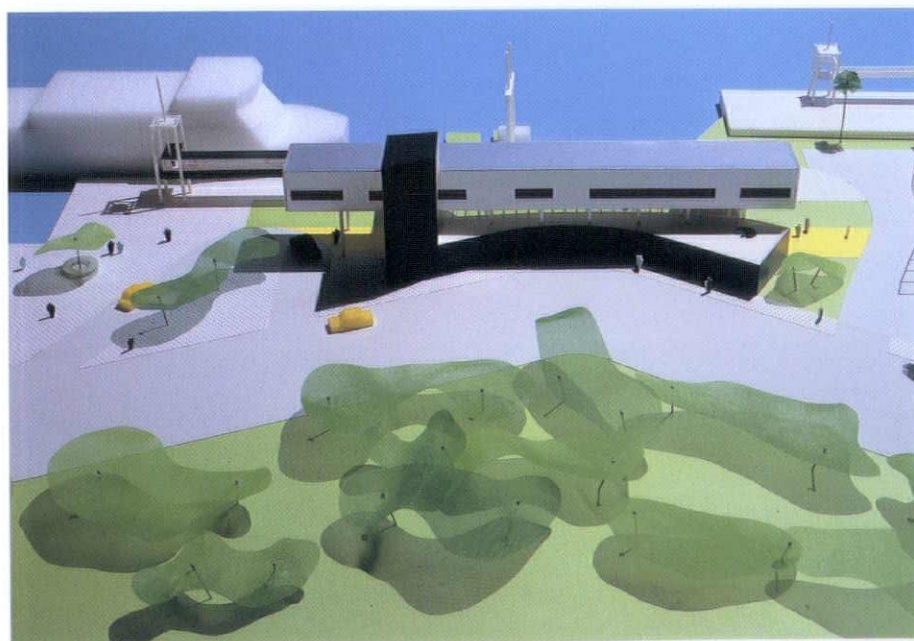
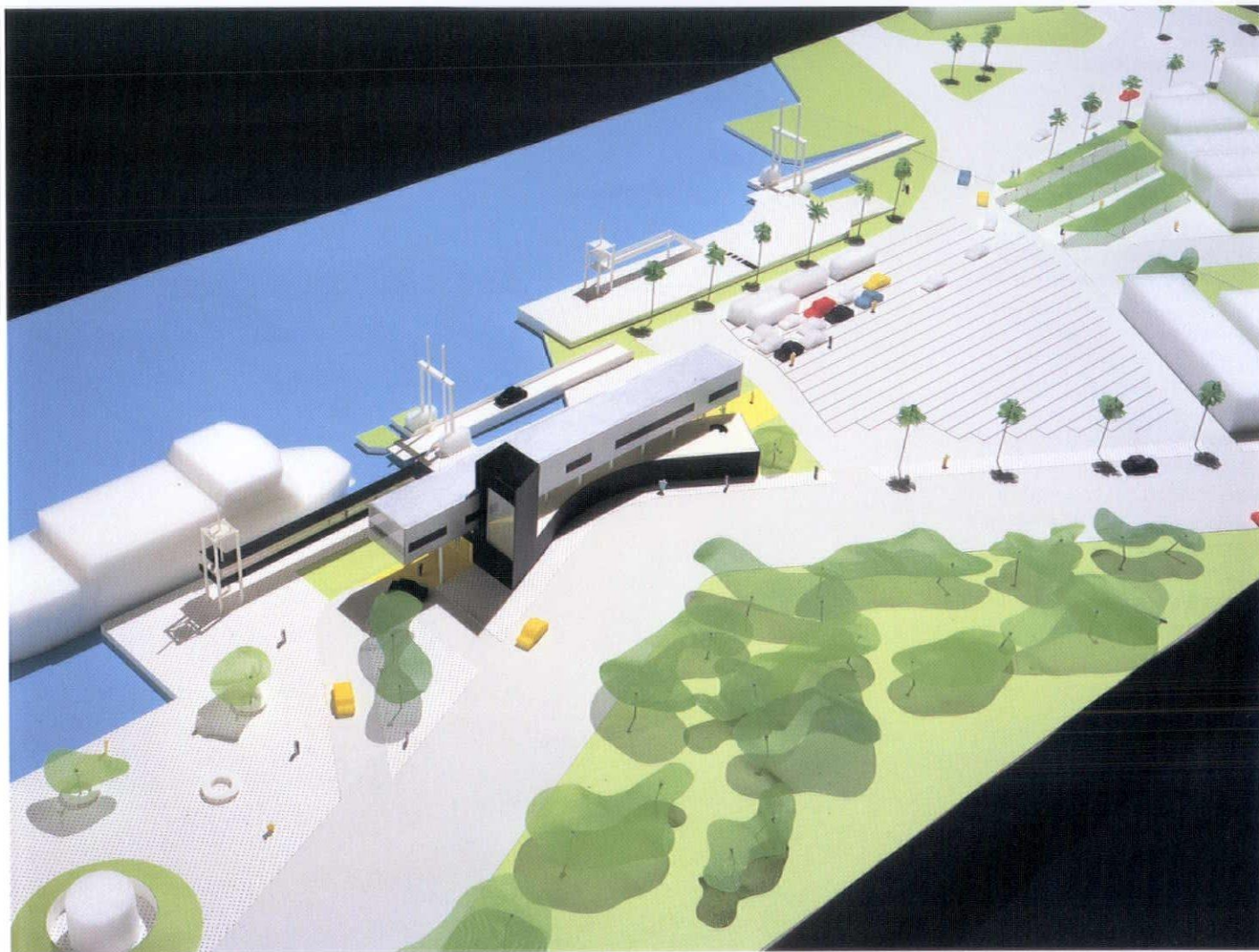
有明フェリー 長洲港ターミナル

石田敏明建築設計事務所

Nagasu Harbor Ferry Terminal

Toshiaki Ishida Architect Associates

Kumamoto Artpolis



背景；有明フェリーは有明海に面する熊本県の長洲港と長崎県の多比良港を結ぶ両県営の定期航路である。敷地の対岸には島原半島の雲仙普賢岳が眺望できる。夕景が印象的な自然に恵まれた環境の中にあり、環有明海周遊観光ルートと九州横断広域観光ルートの一部になっている。一方、周辺には大規模な生産施設が建ち並んでいて観光地としての環境は未整備状態である。現在、ターミナルは第1待合所（車用）と第2待合所（人用）に分散して配置されている。計画施設はこれらふたつの待合所を統合し、フェリー利用客をはじめ観光客、地域住民に開かれた交流の場として計画され、敷地全体は有明海の自然を生かした観光、レクリエーションの拠点として公園化される予定である。

配置；敷地全体は北北東から南南西に延びた海岸線に面して不整形な形でリニアに広がっている。つまり北北東から車の進入口、チケット売り場、駐車場、その先に公園を含んだ本プロジェクトの敷地が、海と弓形に迂回している道路に挟まれた格好で位置する。この位置からは、対岸にある島原半島の雲仙普賢岳が眺望できる。フェリーの着岸形式は護岸に対して並列配置で、人道橋（人用）、可動橋（車用）等の港湾施設もこれに準じて配列されている。この配列は敷地に軸性を与え、人や車、モノの流れを生じさせている。こうした敷地の特性を反映させるべく、建築は線形ヴォリュームとし、人道橋および可動橋利用者のアプローチの中間に流れに沿って配置する。

建築の構成；建築は3つのヴォリュームから構成される。すなわち、道路の形態に沿ったサービスを含めた動線のヴォリュームと、2層分の吹抜けのある待合スペースと3階の事務、管理のヴォリュームである。これらは即物的かつ等価な相互関係を保って構成される。ガラススクリーンで被覆された明るく開放的な待合スペースの両端は、異なるアプローチ手段（人道橋および可動橋利用者）のそれぞれのエントランスになっているため、コンコースの性格を有し、護岸に沿ってリニアに確保される。外部は可能な限り緑化され、屋上は雲仙普賢岳をはじめ、有明海の雄大な自然がパノラマ的に眺望できる展望デッキとイベントスペースになっている。（石田敏明）

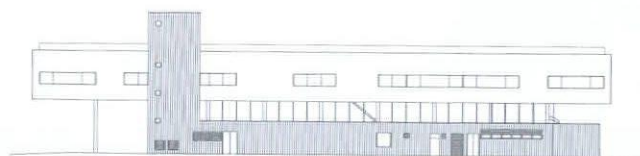
配置図 S=1:3800

所在地：熊本県玉名郡長洲町
 主要用途：待合所・事務所
 構造設計：テクトニックコンサルタント
 施工：岩下建設
 敷地面積：3,977.54㎡
 建築面積：567.09㎡
 延床面積：951.95㎡
 主要構造：鉄骨造
 規模：地上3階
 竣工：1996年3月

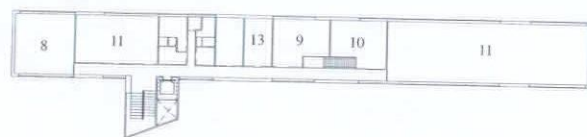
- 1: タクシー乗場
- 2: テラス
- 3: 待合室
- 4: 売店コーナー
- 5: 厨房
- 6: 連絡通路
- 7: 人道橋
- 8: 会議室
- 9: 応接室
- 10: 部長室
- 11: 事務室
- 12: 吹抜
- 13: 倉庫
- 14: 機械室
- 15: トイレ



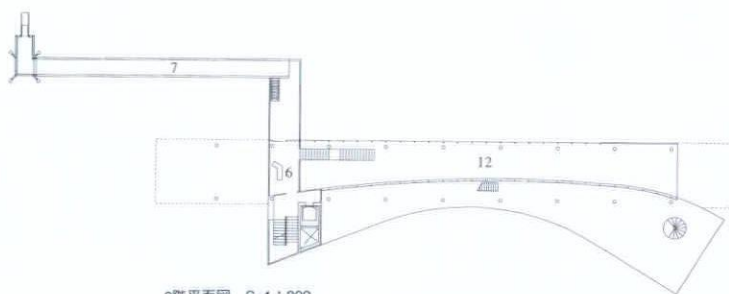
南側立面図 S=1:800



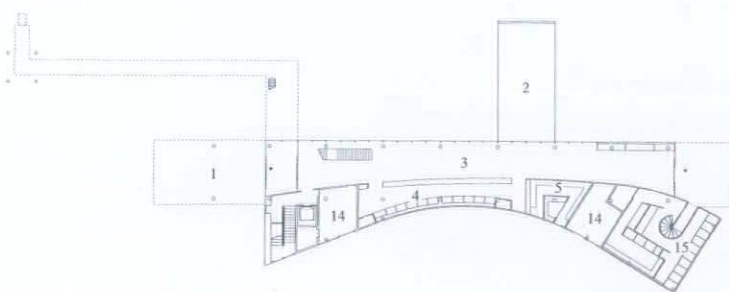
東側立面図 S=1:800



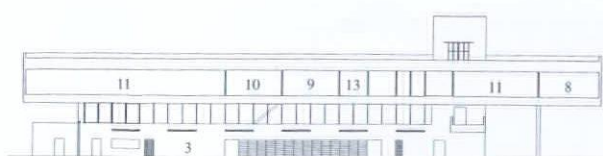
3階平面図 S=1:800



2階平面図 S=1:800



1階平面図 S=1:800



断面図 S=1:800

泉村ふれあいビジターセンター(仮称)

武田光史建築デザイン事務所+ロゴス設計同人

Izumi Visitor's Center

Koji Takeda & Associates+ROGOS Architect & Partners

泉村は、熊本市の東、宮崎県との県境にある。人口約3000人、面積の94%が山地という特異な山岳集落の村である。

村の中央を分水嶺が走り、地形的、歴史的、文化的、生態系的に性格の異なるふたつの水系の地域から構成されている。ひとつは平家落人伝説の五家荘を含む山深い球磨川水系であり、ひとつは比較的高度の低い氷川水系である。

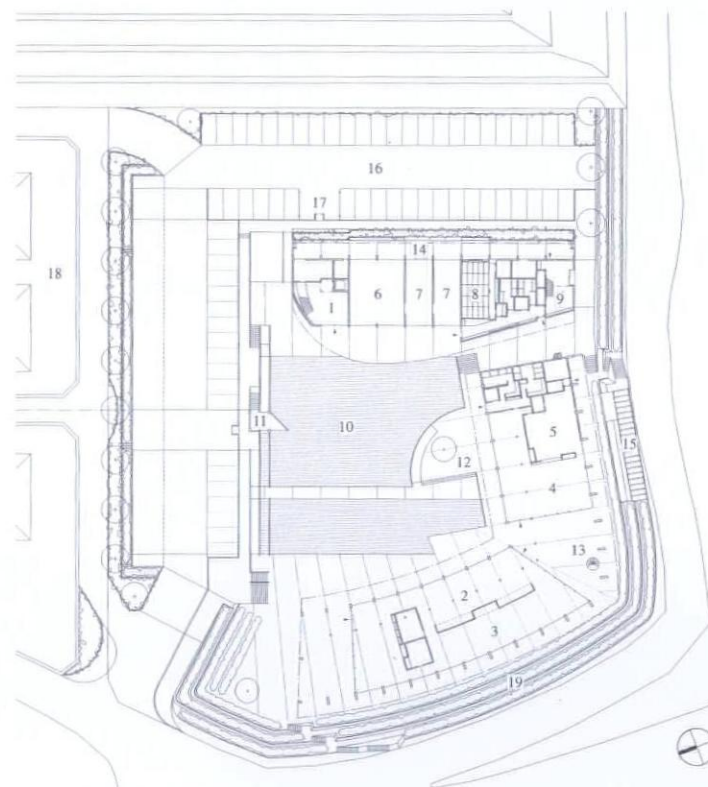
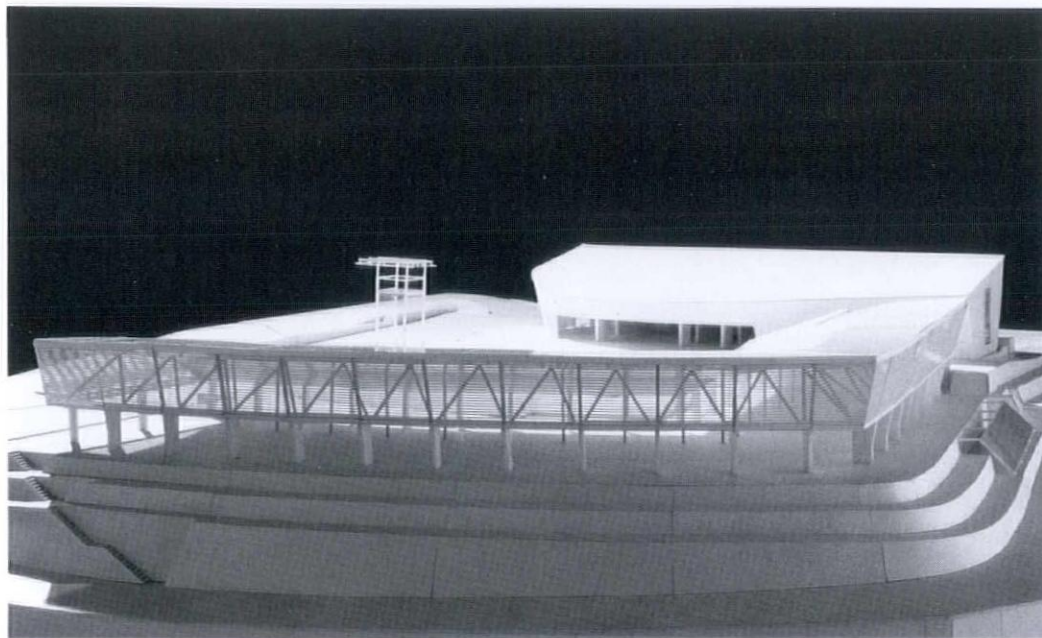
泉村の最も印象的な人工的景観に、風雪に洗われた石積み段々茶畑がある。この施設は、村の表玄関とも言える地点の造成地に計画されているが、ヒナ段状の擁壁を茶畑に見立てることにした。

本施設に与えられた主な役割は、過疎の村のイメージアップと、村の将来の産業の発信基地になること、村民が集まり楽しめる場をつくることにある。

そこで、建物には機能別にふたつの特徴的な形態が与えられている。村への来訪者のための、道路側のL字型の物産レストラン棟は、足元がRCの柱の開放的な、木造大屋根の建築である。一方、村の福利厚生施設性格の強い会議室棟は、イベント広場を力強く受ける要として、木の魂を削り出したかのような形態の木造建築である。外壁はともに村産の杉板が張られていて、村の林業のイメージをアピールしている。

イベント広場は、全体に5%の勾配をもったスロープ状になっていて、「市」を開くなどのイベントの際には全体が劇場の様に見渡せるよう計画されている。

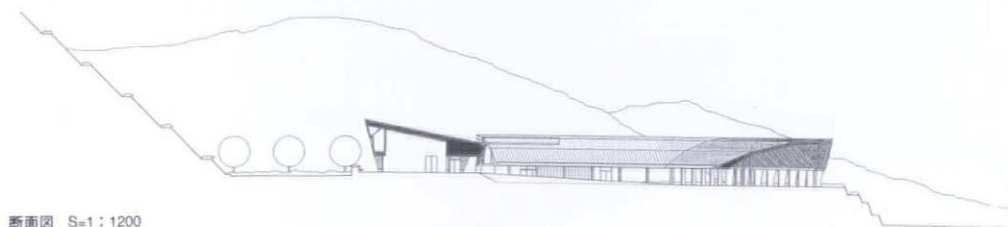
今後の課題は、1年半後の開館までに、どれほど村の人々の参加意識を高めてゆかということと、施設運営を始めとして、泉村の将来に向けた内容をどこまで形作っていけるかであると考えている。(武田光史)



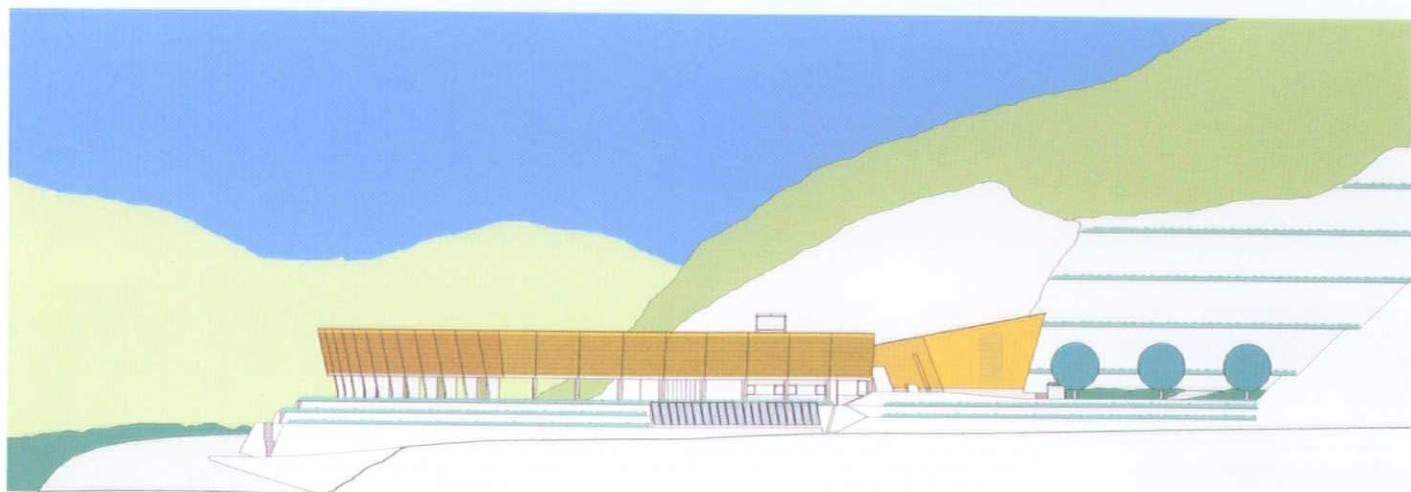
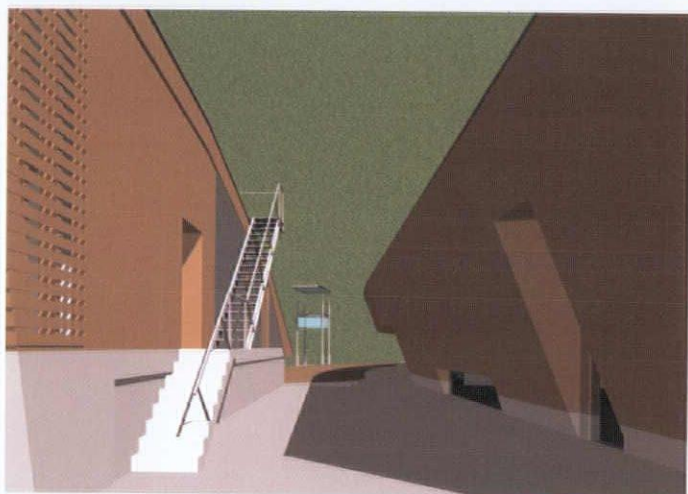
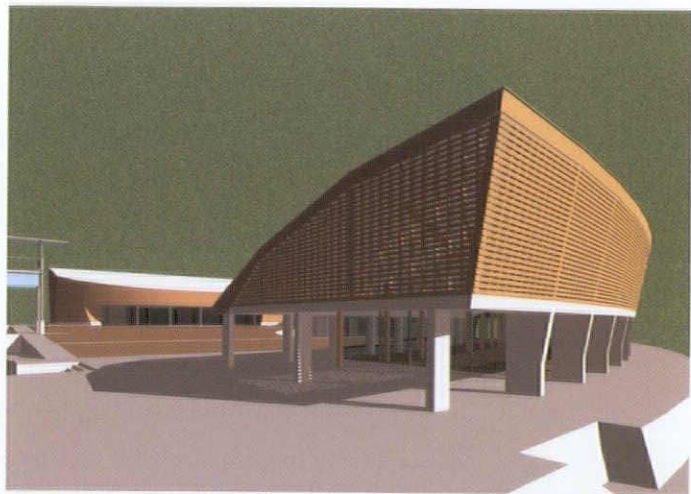
- 1: エントランス・ホール
- 2: 観光インフォメーション・コーナー
- 3: 特産品販売所
- 4: レストラン、ティールーム
- 5: 厨房
- 6: 会議室
- 7: 工房
- 8: 和室
- 9: 事務室
- 10: 広場
- 11: イベント・タワー
- 12: ティー・ガーデン
- 13: 半屋外イベントスペース
- 14: 屋外作業場
- 15: ソーラー集熱パネル
- 16: 駐車場
- 17: 身障者用駐車場
- 18: 住宅用地
- 19: 茶畑

配置図、1階平面図 S=1:1200

所在地：熊本県八代郡泉村
 主要用途：複合施設
 構造設計：金箱構造設計事務所
 施工：日動工務店
 敷地面積：8,477.7m²
 建築面積：1,991.3m²
 延床面積：1,860.9m²
 主要構造：木造、一部RC造
 規模：2階
 竣工：1996年12月



断面図 S=1:1200



西立面図 S=1:800

公園ファニチャーデザイン

沖健次/ジ・エアー デザインスタジオ

Park Furniture Prototypes

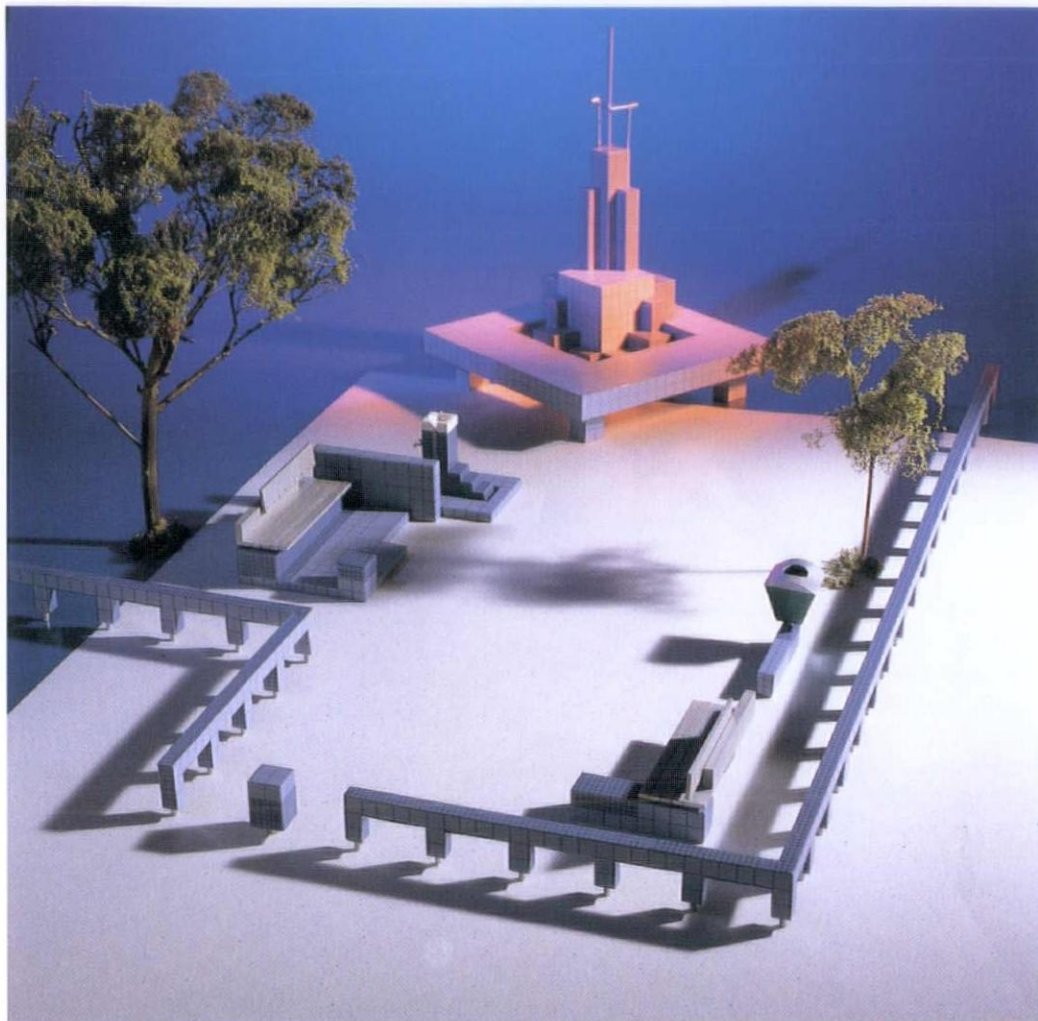
Kenji Oki / The Air Design Studio

熊本県内の児童公園整備マニュアルの作成と公園用のファニチャーデザインを求められた。公園整備マニュアルは、東京ランドスケープ研究所が行ない、ファニチャーデザインは我々が行なうこととなった。

児童公園をはじめ、公園の役割は周辺住人にとっての「遊戯」「休養」「運動」「催事」「集会」「避難」等に用いられ、「延焼の防止」や「自然享受」等も重要な点となる。ここでは、それらの目的に加えて、生活空間の延長上に位置付けられる「アウトドアリビング」の形成、数列的で明快な構成形態、図像による学習等の要素を加えた。50、100、150、300を単位とした3段階の紫色のグラデーションを持ったタイルで仕上げられ、それらをひとつの「連続体」として表そうとした。

これは、既存の街並みに活性と秩序を与えるため、公園全体をひとつの空間として捉えて、連続性と象徴性を持ったものとして構成されている。

(沖 健次)



Kumamoto Artpolis

1: 壁付ベンチ

壁、床、テーブル、ベンチ基部を一体化させることにより、「アウトドアリビング」を感じさせる特定の場を作り出している。

2: 一般型ベンチ・連続

一般型ベンチを連続しようとした場合。背なしR型座面等の組み合わせによりヴァージョンは拡がりをもつ。

3: ごみ箱・2連式

一般ゴミと分別ゴミの2種類のゴミ箱が並列する場合。

4: 車止め・柵

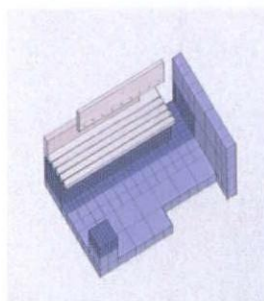
ファニチャーと同一モチーフによるデザイン展開を行うことで、公園全体を一体化させようとした。又、長く続く浮遊した柵が、彫刻的意味合いをもつことも考慮されている。

5: 遊具

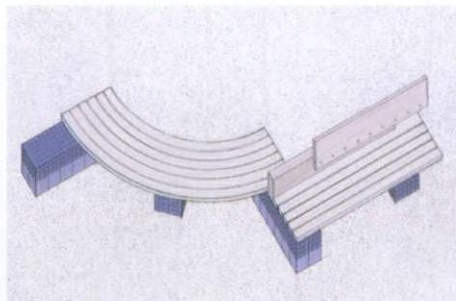
宙に浮いた基盤部はプレイステージとして、下にもぐり込んだり、上では歌を唄ったり、塔状の立体物に昇ったり、年齢に応じて様々な遊びを誘発することができる。また公園内のモニュメントとして、シンボル性の強い形態がとられている。

6: 水飲み場

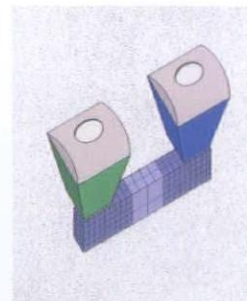
壁付ベンチ等と組み合わせ、連続感をもたすことができる。



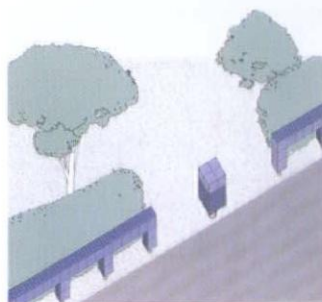
1



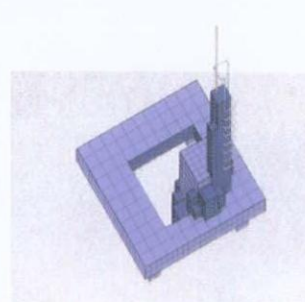
2



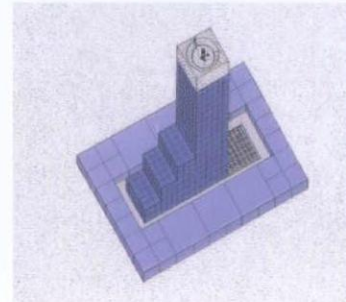
3



4



5



6

教会の見えるチャペルの鐘展望公園

梅田正徳+スペースデザイン設計事務所

Sakitsu Hilltop Park

Masanori Umeda+Space Design

くまもとアートポリス

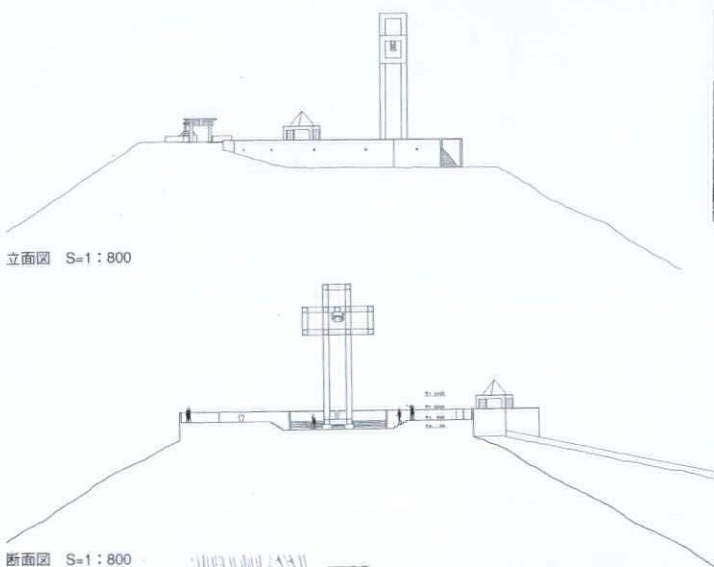
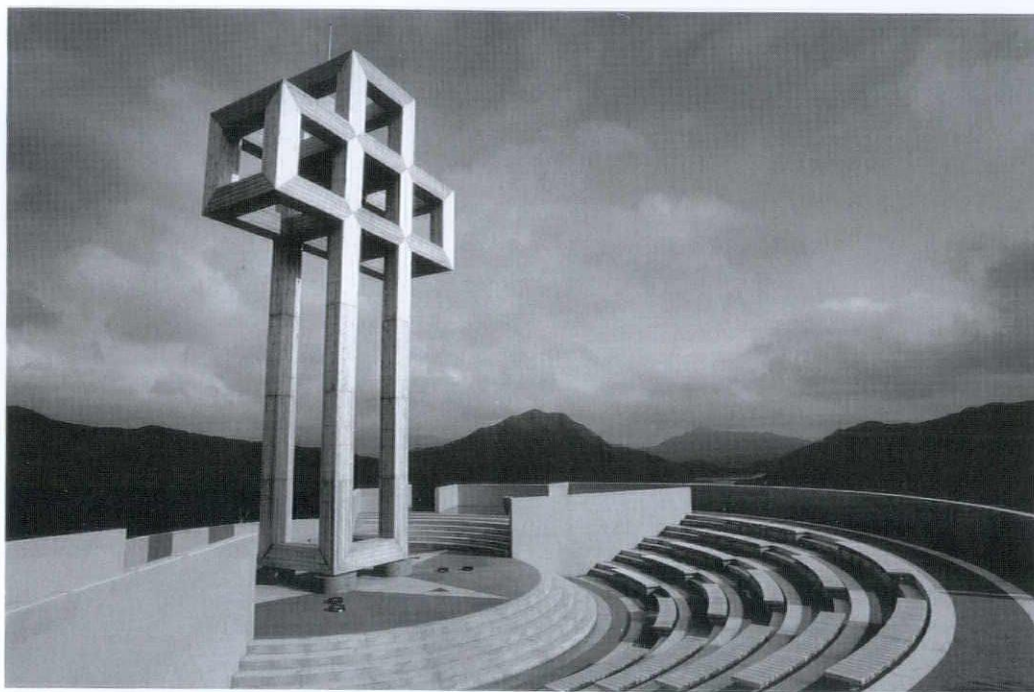
天草半島のひっそりとした漁村の崎津地区は古くからキリシタン文化の発祥の地として知られている。施主である河浦町は、地域振興を図る観光事業のひとつとして標高94.7mの金比羅山頂にチャペルの鐘展望公園を計画した。町の要望は「町の文化遺産である崎津天主堂が見え、対岸や海からも見えるランドマークとして機能し、定時に鐘の音が崎津周辺に響きわたるモニュメントの建設」であった。

最初に現場を訪れた時、眼下に見える漁村や教会、静かな羊角湾、そしてその後方には天草半島の山脈、西側には南シナ海が広がる絶景に感動しつつ、この時脳裏にひらめいたのはステンレスや人工的素材のモニュメントではなく、この美しい自然を主役にした脇役的で控えめな造形のイメージだった。

デザインコンセプトは現状の地形やけもの道、そして原生の植物などをできる限り生かしたプランであること。展望公園の平面形状は漁村に因み魚の形状にする。チャペルのデザインモチーフはキリシタン発祥の地をふまえ巨大な十字架とし、西方（ポルトガル）に向け設置する。その仕上げは時と共に自然と融合する木製にする。これはキリストが背負った十字架が木製であった事も意味する。そして屋外礼拝や集会、コンサートやイベントなど町民のための多目的な公共スペースを設ける。さらにライトアップによって漁船の指標となる様に考慮することなどであった。

鳥居と十字架が共存するこの摩訶不思議な空間が、長い年月を経て評価される事を切に願っている。

(梅田正徳)



1:チャペルの鐘展望公園
2:教会

所在地：熊本県天草郡河浦町崎津
主要用途：展望公園
構造設計：鐘楼：アド構造設計株式会社（東京）／展望公園：風設計室（熊本）
施工：大昌建設（株）、北野建設（有）
敷地面積：7,000㎡
建築面積：41.81㎡
延床面積：41.81㎡
主要構造：鐘楼：S造
規模：地上1階
竣工：1993年3月

SD9601
40



配置図 S=1:2000

TOTO AQUAPIT ASO

木島安史+YAS都市研究所

TOTO AQUAPIT ASO
YAS & URBANISTS

この建物は、阿蘇国立公園内に位置する阿蘇山火口へのロープウェイ乗り場のレベルの異なる駐車場の中央につくられた公衆トイレである。民間の企業の出資で整備し寄付された。

国立公園内で、環境条件が厳しく、火山ガス、火山灰や凍結の問題があり、しかも水の確保が難しく、汚水処理にも問題があった。また、公衆トイレの維持管理はどこでも頭を悩ませており、4K(汚い、臭い、暗い、怖い)対策が求められた。こうしたマイナス条件を逆手に取り、トイレ専門家の参加を得てソフト、ハードの両面から捉え直し、公衆トイレも文化的遺産であるとの考え方で設計が進められた。

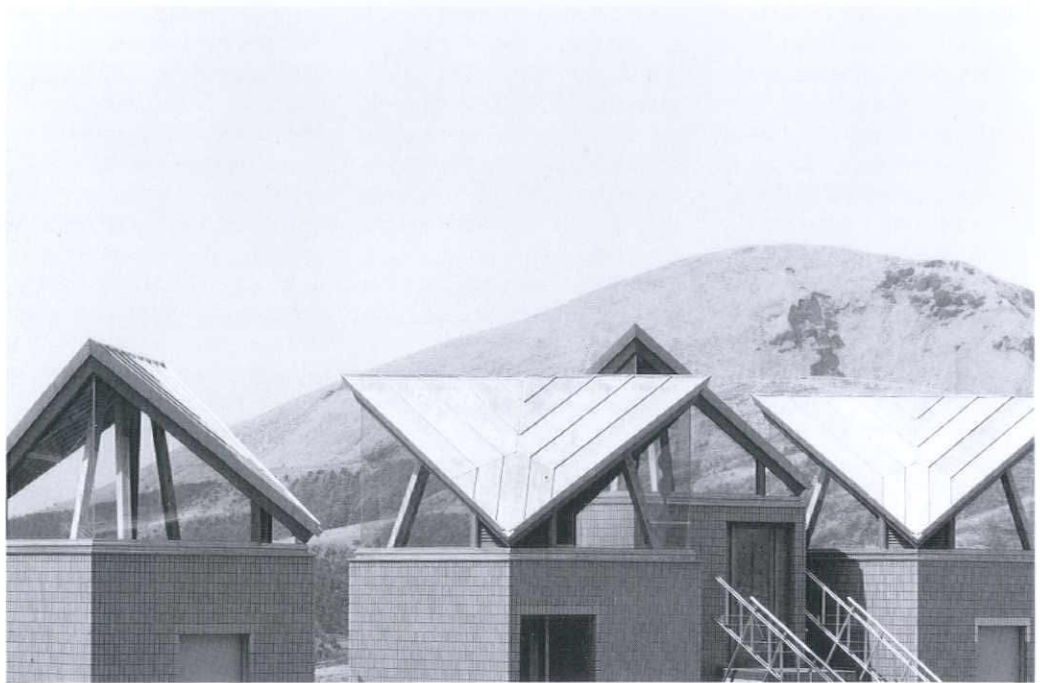
「水とやすらぎのある」休憩所(AQUA PIT)の名にふさわしく、7棟から構成された建物はそれぞれ独立した機能を持ち、7棟は季節や時間帯によって数の増減ができる構成となっている。

基本ユニットは3m×3mの平面にふたつのトイレブースと1ヶ所の洗面カウンターが納められている。トイレの快適性を高めるために、天井を高く取り、空間のヴォリュームを確保することで、自然の理論に機械を組み込んだ設備システムと空間の開放性を高めた。内部の仕上げは地元の木材を無垢で使い、本物に触れてもらうことで利用者との信頼関係を築くように考えた。

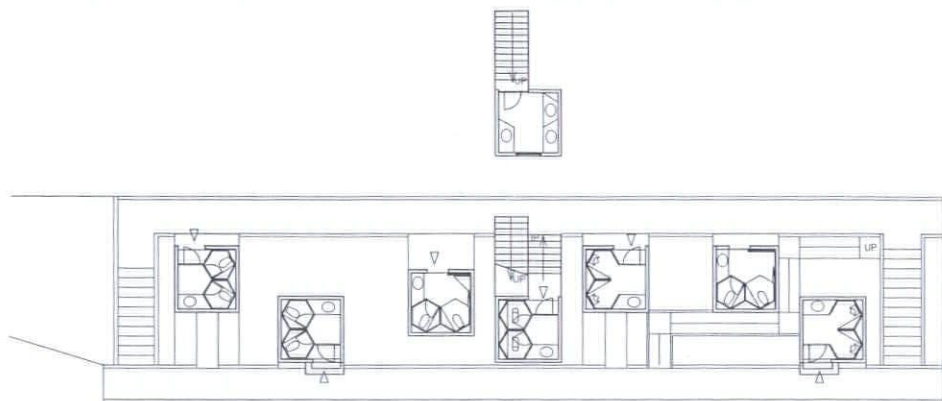
また、メンテナンスのためにマニュアルを整備し、管理スペースも確保しているため、現在でも綺麗に使われているのは嬉しいことである。さらに、平成4年にはグッドトイレ10選にも選ばれている。

分棟配置によって生まれた、変化に富んだ屋根のリズムは周囲の自然とのハーモニーをつくり出し、自然の中の点景として新しい価値を見出しているように思われる。

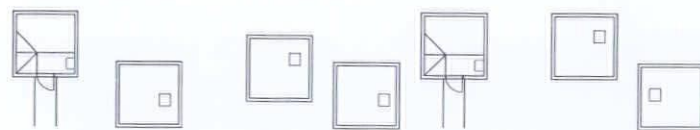
学生時代に山岳部に所属し、阿蘇に長く住んでいた木島氏ならではの鋭い洞察力和自然観によって実現できたものと考えている。(杉本洋文)



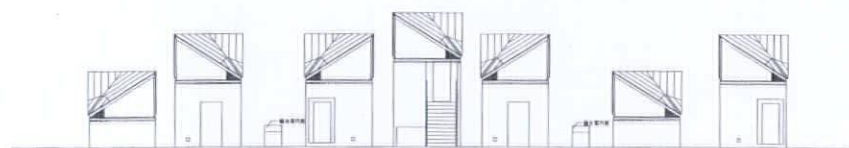
Kumamoto Artpolis



1階平面図 S=1:350



地階平面図 S=1:350



立面図 S=1:350

所在地：熊本県阿蘇郡白水村大字
中松字古坊中3845-9
主要用途：公共トイレ
構造設計：村橋久昭(熊本工業大学校受)
施工：(株)橋本建設
建築面積：60.9㎡
延床面積：69.6㎡
主要構造：RC造(一部木造)
規模：地上1階(一部2階)
竣工：1992年3月

うしぶか海彩館

内藤廣／内藤廣建築設計事務所

Ushibuka Fisherman's Wharf

Hiroshi Naito/NAITO ARCHITECT & ASSOCIATES

くまもとアートポリス

牛深は天草の南端に位置する漁業の街だ。ここは1500隻の漁船を擁し、ここだけで熊本の水揚げ高の4割を占めるといって活気に溢れた街だ。しかし、熊本市街地からどんなに早くても3時間以上かかる場所に位置しているため、観光客の日帰り行楽圏からは外れている。年に一度賑わうのは、佐渡おけさなど全国の踊りの原型であるこの地発祥のハイヤ踊りを記念して行なわれているハイヤ祭りの時ぐらいである。牛深はやはり、外部から遮断されたところ、といった印象が強い。ご多分に漏れず、この地も熊本都市圏への若年層の流出という悩みを抱えている。高卒者の9割がこの地を出ていくのだ。

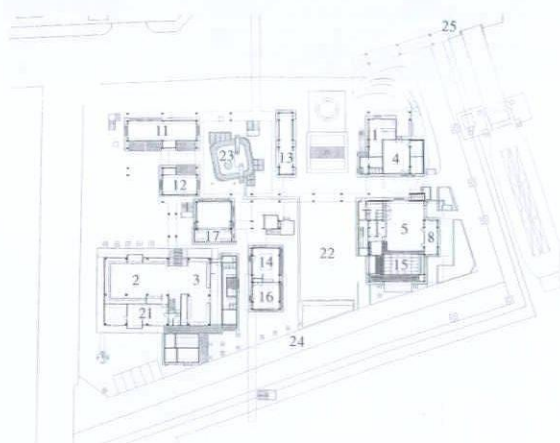
そうした流れを何とか食い止めようと、市長をはじめ行政も知恵を絞っている。レンゾ・ピアノの設計による牛深連絡橋は、アートポリス事業の一貫として街のイメージを一新する新しいシンボルになるだろう。我々が設計を委託された海彩館も、そうした街の新しいイメージづくりの一翼を担っている。海彩館の役割は、橋の完成とともに派生するさまざまな波及効果を、咀嚼し、浸透させ、外に対しても内に対してもしっかりとしたものとして根付かせることにある。

海彩館は、橋が海の上を飛んできて陸地にランディングするところの広場に建てられる。我々が最も気を使った

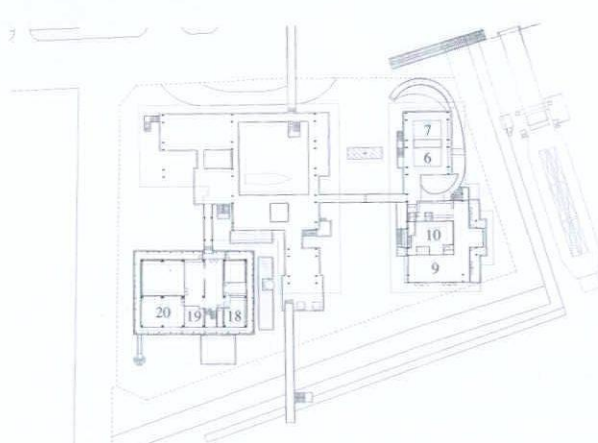
のは、ふたつのことに絞られる。ひとつは、橋のデザインとの整合性である。規模や位置から、橋とは不可避に関係してしまう。美しい橋のフォルムを台無しにするようではいけない。背骨のような橋の文脈を読み取り、そこから広がる肋骨のようなイメージで館を考えることとした。もうひとつは、街に対してどういう場を作り出せるかということだ。建物に担わされた役割は、市の漁業のプレゼンテーションの場を作ることである。魚市場の活気、水産加工、漁法や海の実態など、通常、観光客や外部の人の目に触れないものを、市場のようなシェルターの下に展開することを考えた。

橋と海彩館によって、街の方向転換のためのハードウェアの下地はできるのではないかと思う。問題はソフトウェア。市や住民がこれをどう活用するか、内容を豊かなものにしていけるかが、1年先の建物の完成に向けての大きな課題だと思っている。（内藤廣）

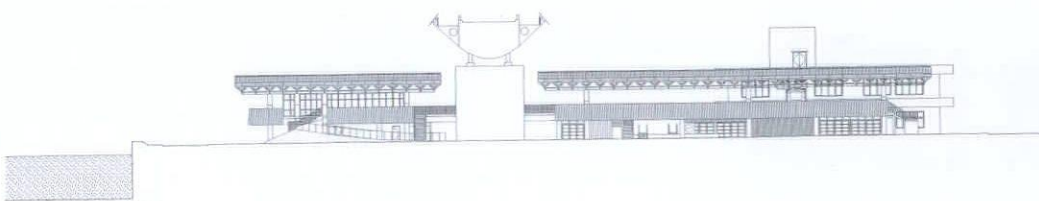
所在地：熊本県牛深市
主要用途：博物館+店舗+レストラン
構造設計：S.D.G.
施工：日本国土開発
敷地面積：5,761㎡
建築面積：3,686㎡
延床面積：4,650㎡
主要構造：RC造+PCコンクリート・ポストテンション組立構法
屋根：鉄骨+集成材混合トラス
竣工：1997年1月予定



1階平面図 S=1:2000



2階平面図 S=1:2000

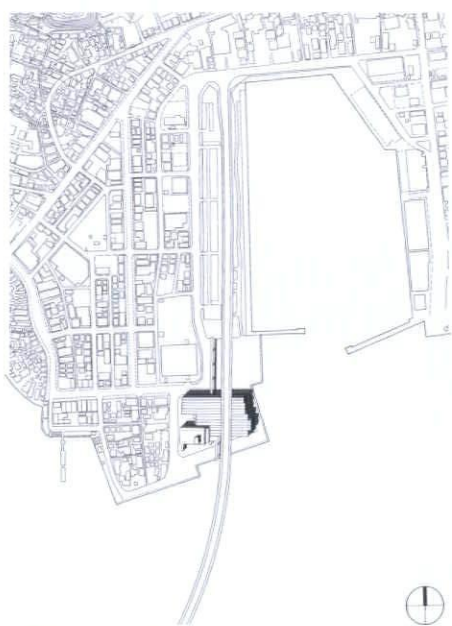
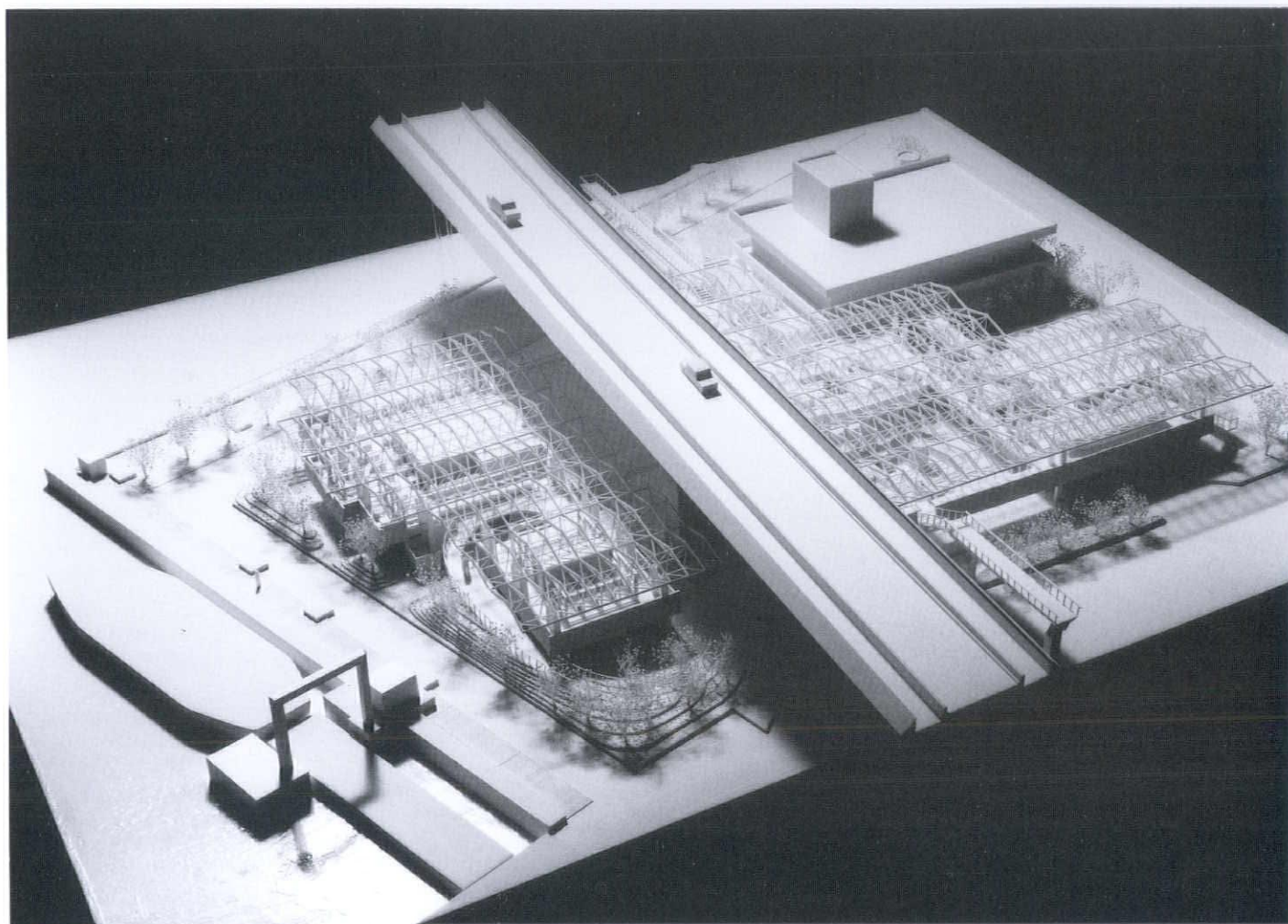


北立面図 S=1:1000

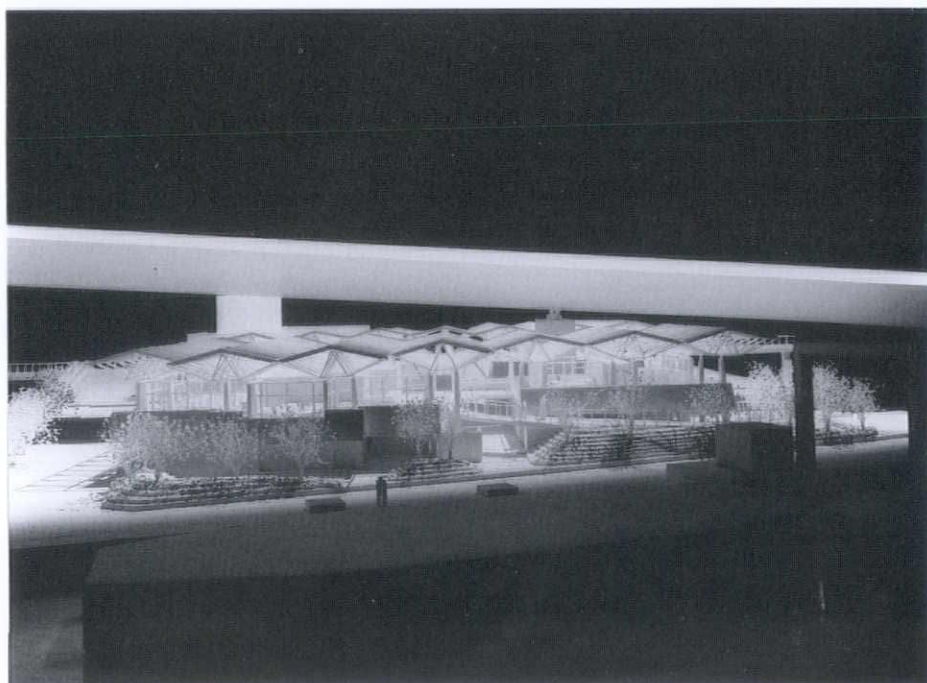


西立面図 S=1:1000

- 1: 総合案内所
- 2: 展示室
- 3: 特別展示室
- 4: 映像展示室
- 5: ハイヤ展示
- 6: 橋関係展示室
- 7: 市民ギャラリー
- 8: 喫茶室
- 9: レストラン
- 10: 厨房
- 11: 水産加工品売場
- 12: 魚介類売場
- 13: 土産品売場
- 14: 魚道場
- 15: ハイヤ道場
- 16: 体験工房
- 17: かまぼこ実演
- 18: さかな学習室
- 19: セミナー室
- 20: 視聴覚室
- 21: 管理事務室
- 22: イベント広場
- 23: いけす広場
- 24: 臨港通路
- 25: フェリー発着場



配置図 S=1:10000



天草ビジターセンター+展望休憩所

古谷誠章+中川建築設計事務所

Amakusa Visitor Center + Service House

Furuya Nobuaki+Nakagawa Architects Office

くまもとアートポリス

この施設は、熊本県が設置した天草の自然を紹介する国立公園のビジターセンターと、土地を提供した松島町が併設した無料休憩所の2棟からなる。つまり、建物のクライアントが県と町、さらに館内の展示は、建築とは別に国立公園協会が行なうという、やや複雑な発注関係であった。しかも、この辺りは国立公園の第1種特別地域であり、当然、建築物に対する規制が厳しい。屋根は切妻か寄せ棟、片流れは不可。外壁は黒かグレーかこげ茶色とし、曲線や曲面は使えない。これについても環境庁との調整が必要である。また、敷地の周辺では敷地造成や駐車場の整備などが、あらかじめ別途に発注されていた。

外形は切妻を原型として、屋根の棟はこの土地の元の稜線を踏襲している。切妻の北側の一边は外壁に合わせてカットし、斜めの軒ラインをアプローチの坂道に呼応させた。ランダムな振れ角を持つ床や壁のパターン、微妙に不揃いな外壁の出入りなどの手法によって、建築と自然の気脈を通じさせている。壁や床に用いられた石は、海や山や川で拾い集めたものを含めて、すべて天草で採れた石である。これらも単に壁材、床材として扱うのではなく、天草の自然を「展示」するのだと考え、意図的に断片化して使っている。

館内のほとんどの展示物は床に埋まるか、または置かれている。あたかも潮干狩りでも楽しむように、これらを思い思いに見てもらいたいと考えた。そして目の前には一切の壁がなく、館内のどこからでも海と島が続いて見える。潮位が刻々と変化し、干満のたびに広大な干潟が現われ、また消えていく。展示物と実際の風景とを対照させたかった。

容易ではない条件のもとでこの計画を遂行し、しかも片やウェイトレスのエプロンの相談から、果ては駐車場のあづまやに至るまで、休憩所の運営や周辺の環境づくりをも含めた提言ができたのは、アートポリスの一環であったことが大きく幸いていると思う。

(古谷誠章)

所在地：熊本県天草郡松島町
主要用途：博物館、無料休憩所

構造設計：裕建築事務所

施工：山口工務店

敷地面積：11,410.5㎡

建築面積：ビジターセンター：497.16㎡/展望

休憩所：263.97㎡/屋外便所：65.59㎡

延床面積：ビジターセンター：427.43㎡/展望

休憩所：227.09㎡/屋外便所：60.39㎡

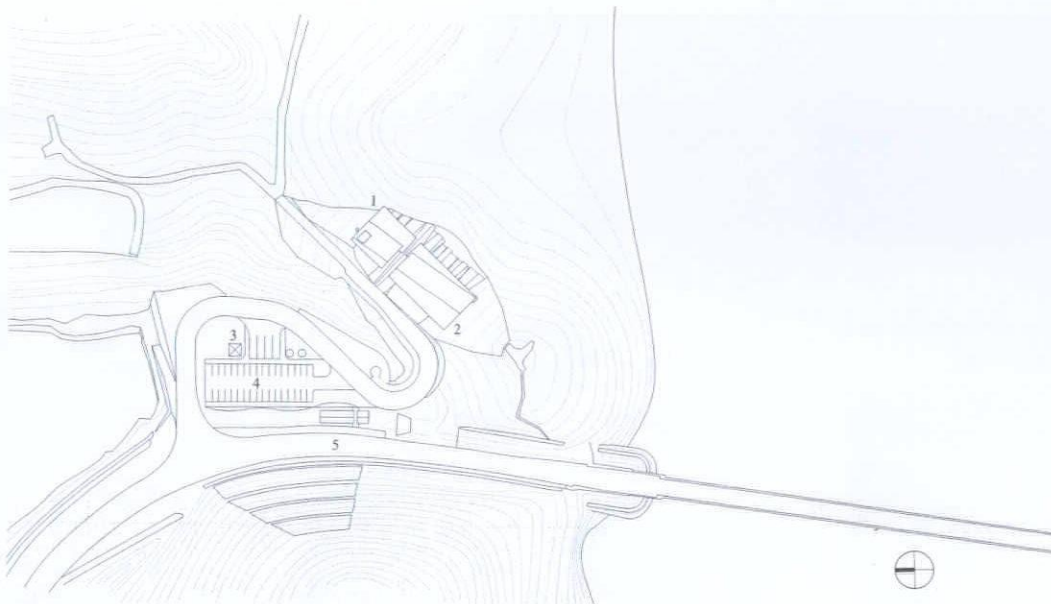
主要構造：混構造(木造+RC造+S造)

規模：地上1階

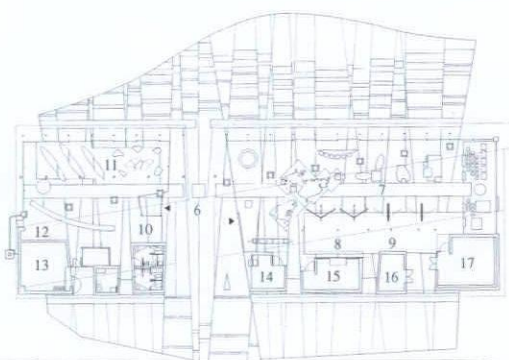
竣工：1994年7月

SD9601

44

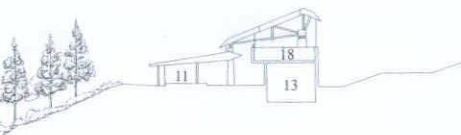


配置図 S=1:3000



平面図 S=1:800

- 1: 展望休憩室
- 2: 天草ビジターセンター
- 3: あづまや
- 4: 駐車場
- 5: 国道226号線
- 6: エントランス
- 7: 主展示室
- 8: レクチャールーム
- 9: 企画展示室
- 10: ホール
- 11: 休憩コーナー
- 12: 厨房
- 13: 空調機械室
- 14: 事務室
- 15: 準備室
- 16: 屋外倉庫
- 17: 倉庫・工作室
- 18: 屋外機置場



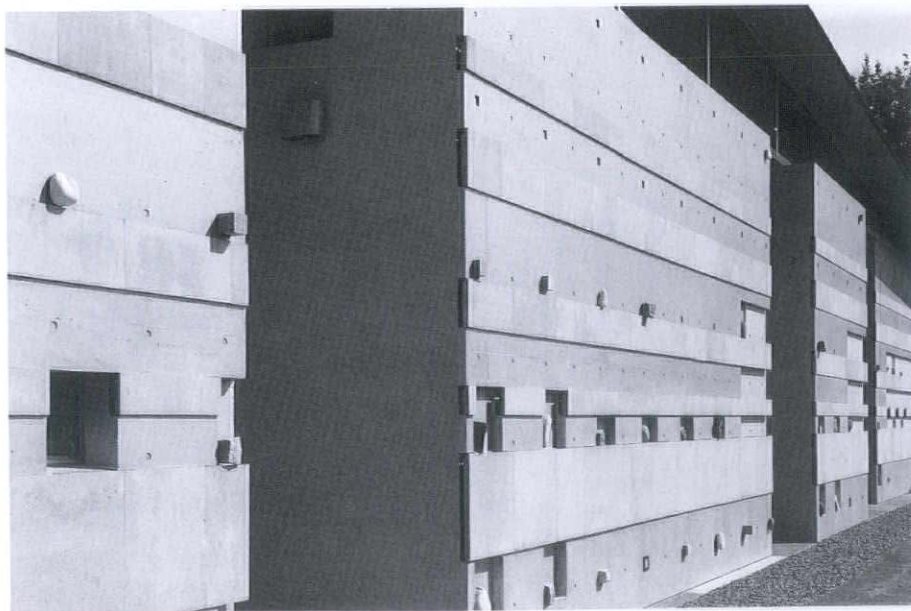
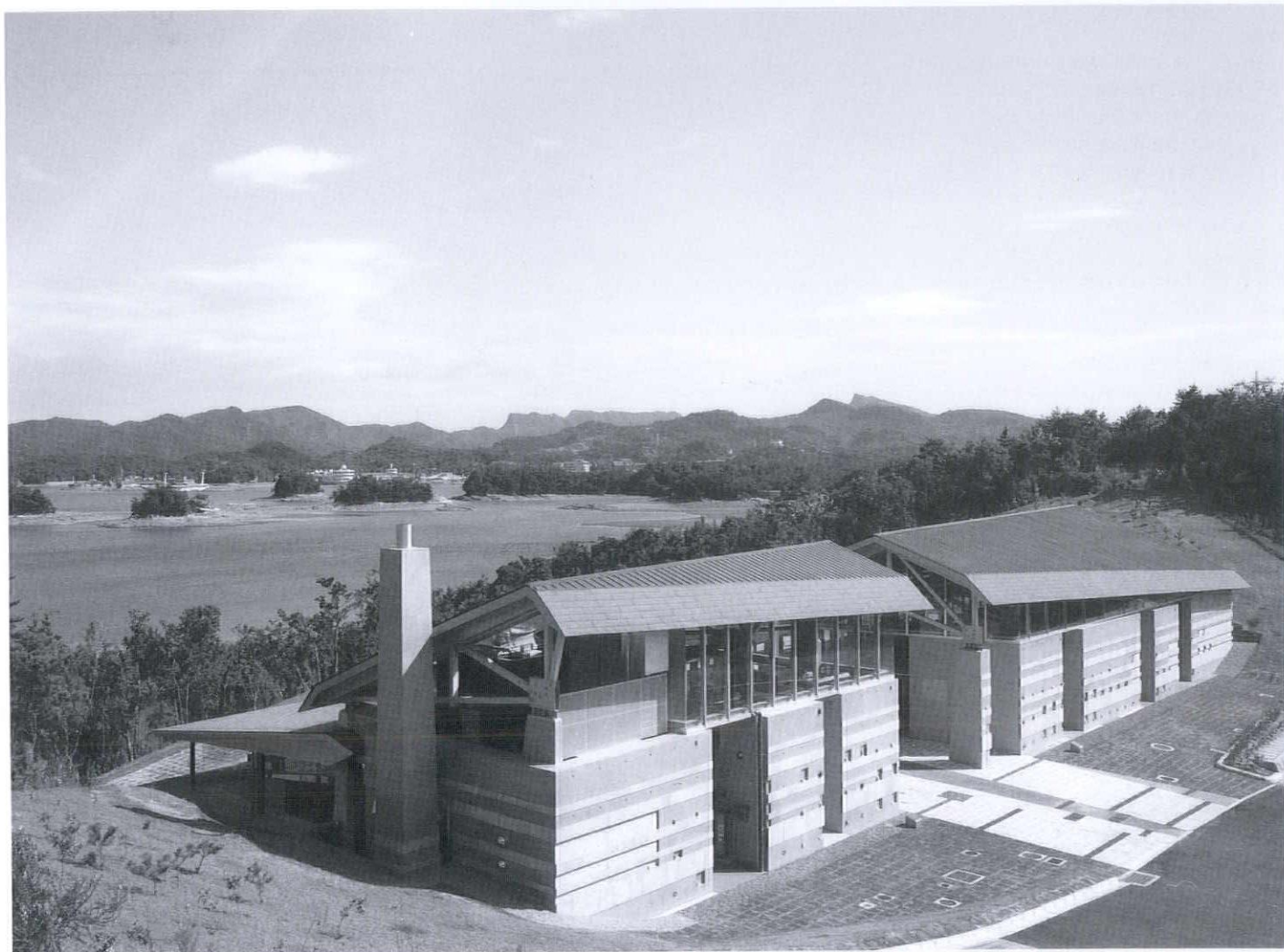
断面図 S=1:800



断面図 S=1:800



立面図 S=1:800



つなぎ物産ギャラリー・グリーンゲート

北山孝二郎/K計画事務所

Tsunagi Gallery for Local Products
Kojiro Kitayama / K Architect & Associates

くまもとアートポリス

津奈木町は熊本県の中でも最南端にある水俣市に隣接し、海と、山と、自然に囲まれた人口約5000人の街である。国道3号線沿いの庁舎跡地には石造りのめがね橋、町民が親しみを持つ津奈木川、険しい舞鶴城公園の山々など古くからの景観と、道路を隔てて福祉センター、文化ホールの公共施設が集まり津奈木町の文化的中心地域になっている。

その津奈木川やめがね橋など、町民が親しく接してきた場所をより身近にするため、施設を公園の中に配置して、物産の展示を目的とするだけではなく、いろいろな人が自由にゆったりとくつろげる場として計画された。建物を川や、海、山、橋と既存の公共施設を繋ぐコネクターとして考え、1階に物産ギャラリー、2階にレストランと会議室などを配置し、それらを階段とスロープで回遊できるよう計画した。広場や公園やスロープが人々の語り合う場となり、それに周囲の自然が加わることで、ゆったりとした気持ちでくつろぐことができるよう計画した。各々の施設が別々のテクスチャと構造を持ち、違った方向性をつくることによっていろいろな場を結びつけようとしている。コリドーとスロープ、グリーンゲートの名前の由来となった2本の大きな橋など、各々が対峙し、エリアに新しい緊張感と可能性をつくる。

国道に隣接する施設ではあるが、国道と平行に配置するのではなく、国道を串刺しにして奥にある街の景観の存在を見せ、山と川と橋と公園が一体となる場をつくろうとしている。

周囲の人がここでゆったりと時間を過ごし、山を歩き、川に入り、自然と一体になった物産ギャラリーやレストランを利用する。目的を持った施設だけではなく、無目的に過ごすことのできる空間が多くの人々の楽しめる場として定着し、地域を活性化し、街の将来の可能性をつくりだせればと期待している。

(北山孝二郎)

所在地：熊本県芦北郡津奈木町大字岩城1601

主要用途：物産ギャラリー、レストラン

構造設計：アスコナル構造研究所

施工：物産ギャラリー：高橋建設／めがね橋公園：坂口建設

敷地面積：2,358㎡

建築面積：451㎡

延床面積：497㎡

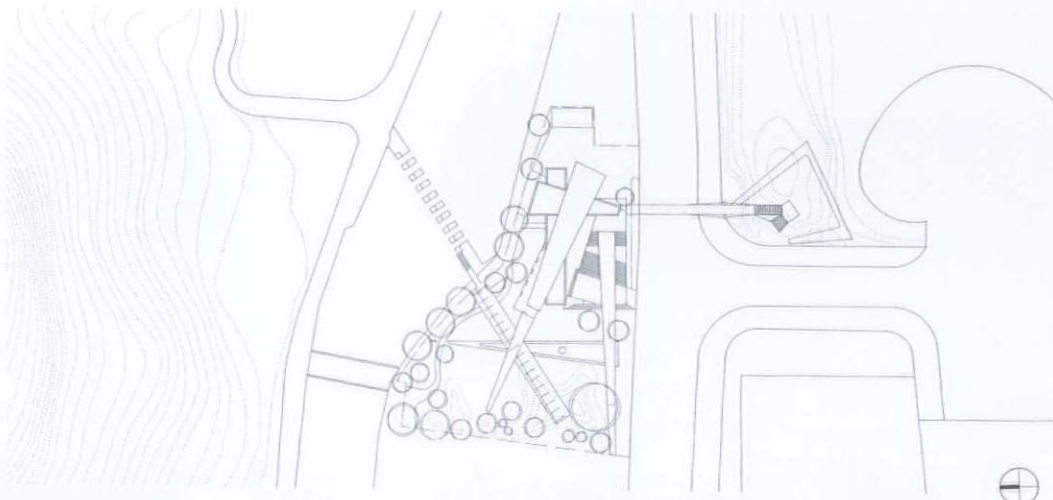
主要構造：RC造、S造

規模：地上2階

竣工：1992年6月

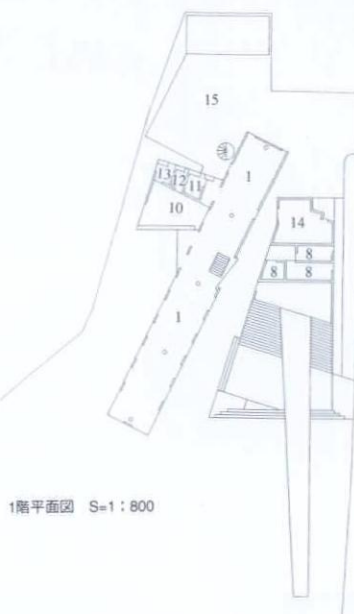
SD9601

46

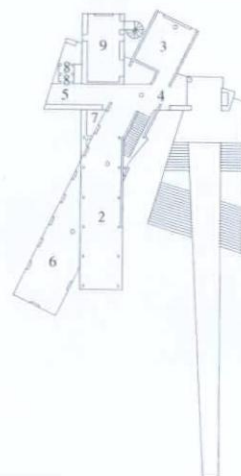


配置図 S=1:1600

- 1: 物産品ギャラリー
- 2: レストラン
- 3: 会議室
- 4: ホール
- 5: ロビー
- 6: テラス
- 7: 吹抜
- 8: トイレ
- 9: 厨房
- 10: 事務室
- 11: 更衣室
- 12: コピー室
- 13: 給湯室
- 14: 倉庫
- 15: 駐車場



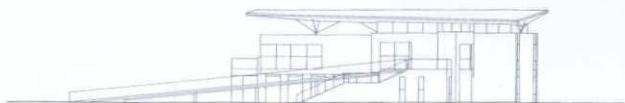
1階平面図 S=1:800



2階平面図 S=1:800



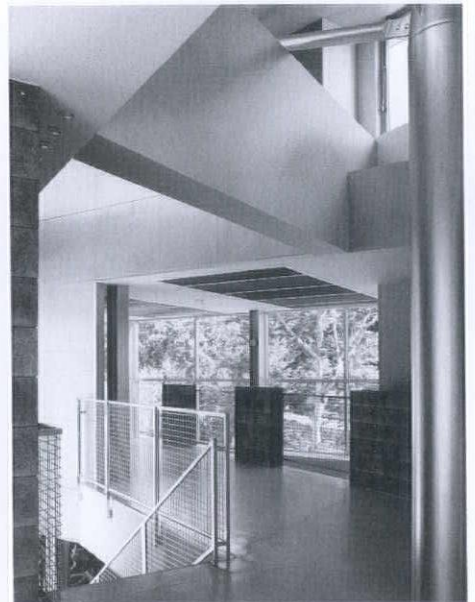
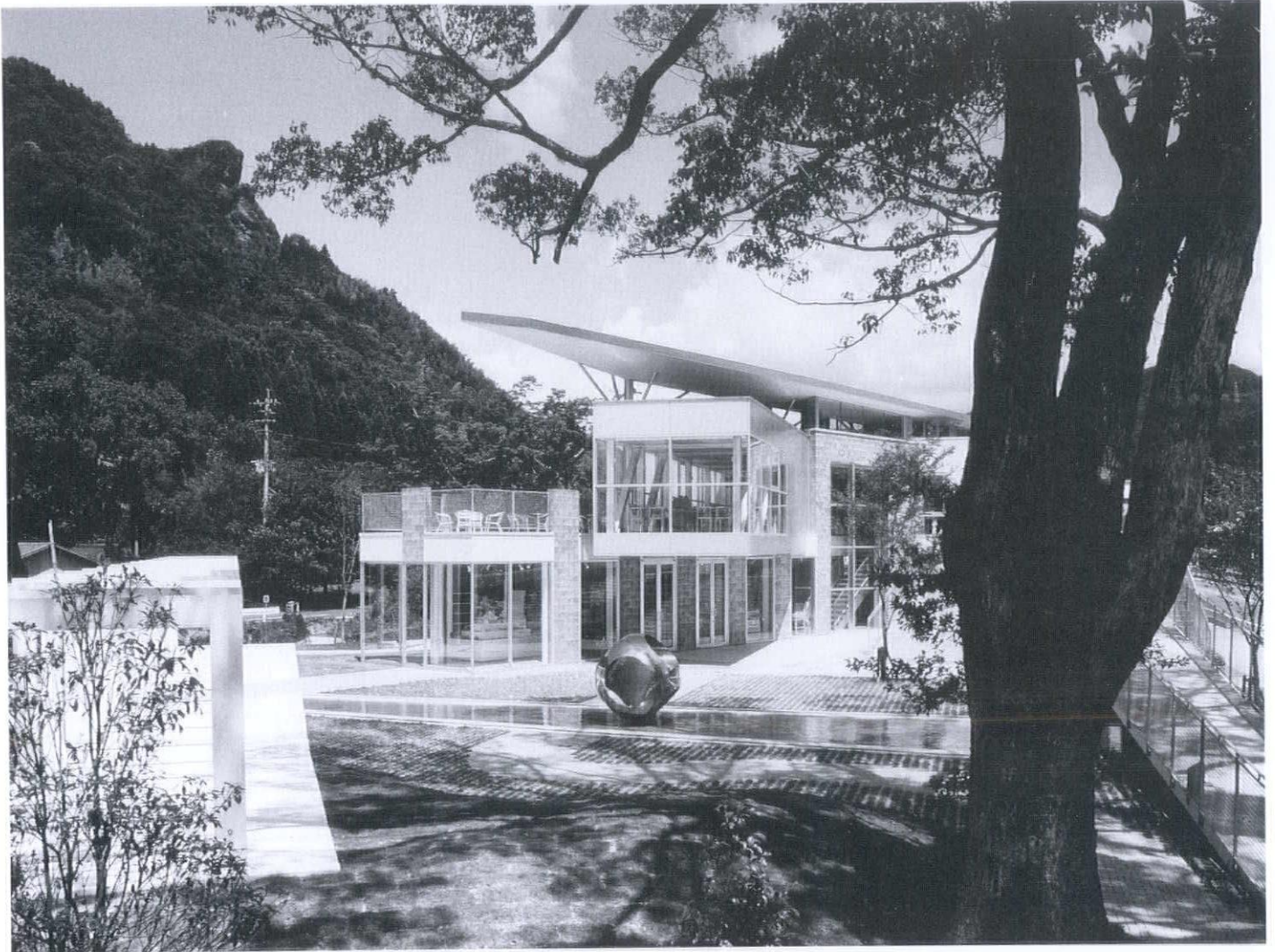
西立面図 S=1:800



南立面図 S=1:800



断面図 S=1:800



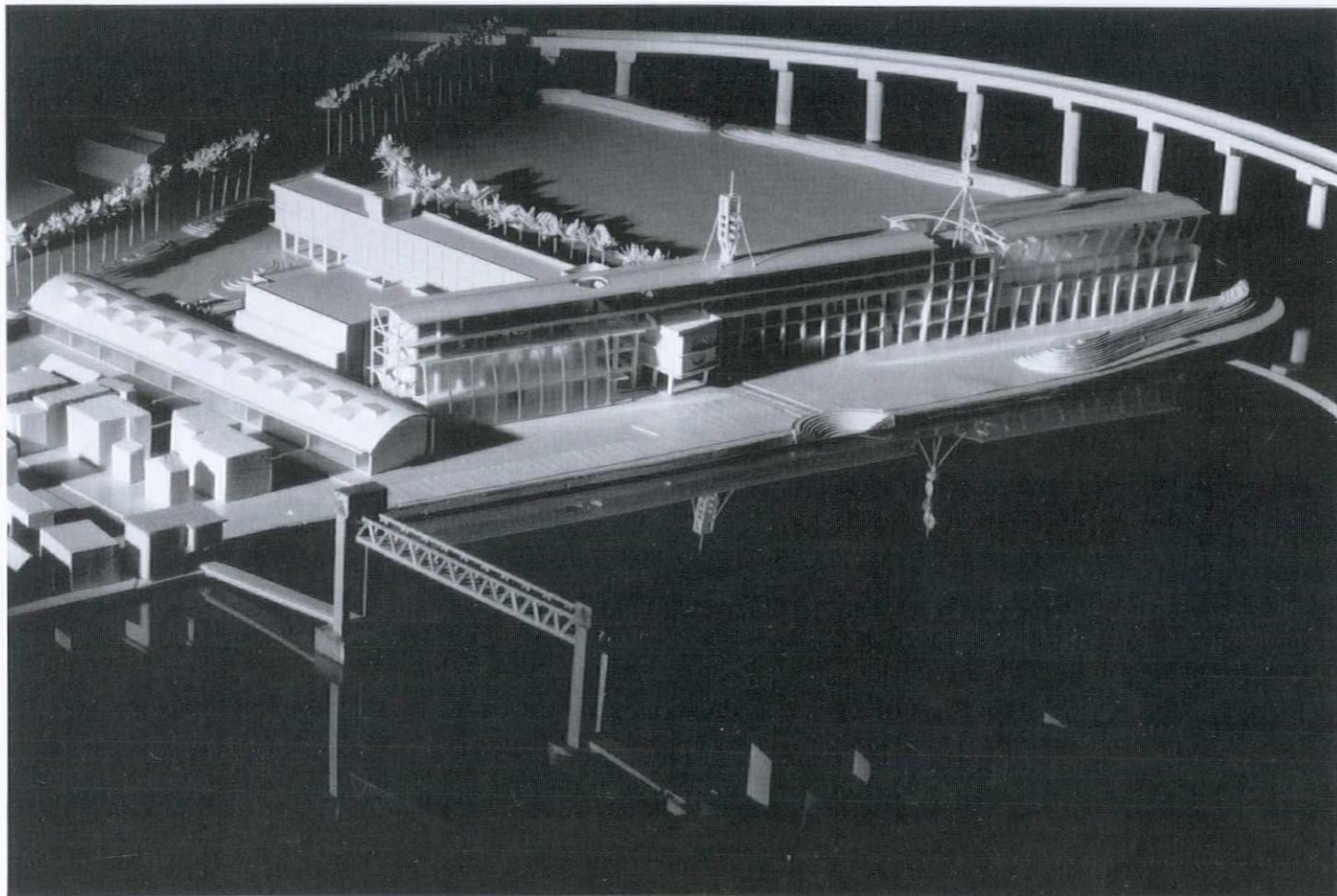
熊本県立天草工業高等学校実習棟

室伏次郎／スタジオ・アルテック+SDA設計事務所

Amakusa High School of Industry

MUROFUSHI Jiroh/STUDIO ARTEC + SDA Architects & Associats

くまもとアートポリス



所在地：熊本県本波市

主要用途：工業高校実習棟・体育館

構造設計：ジメント

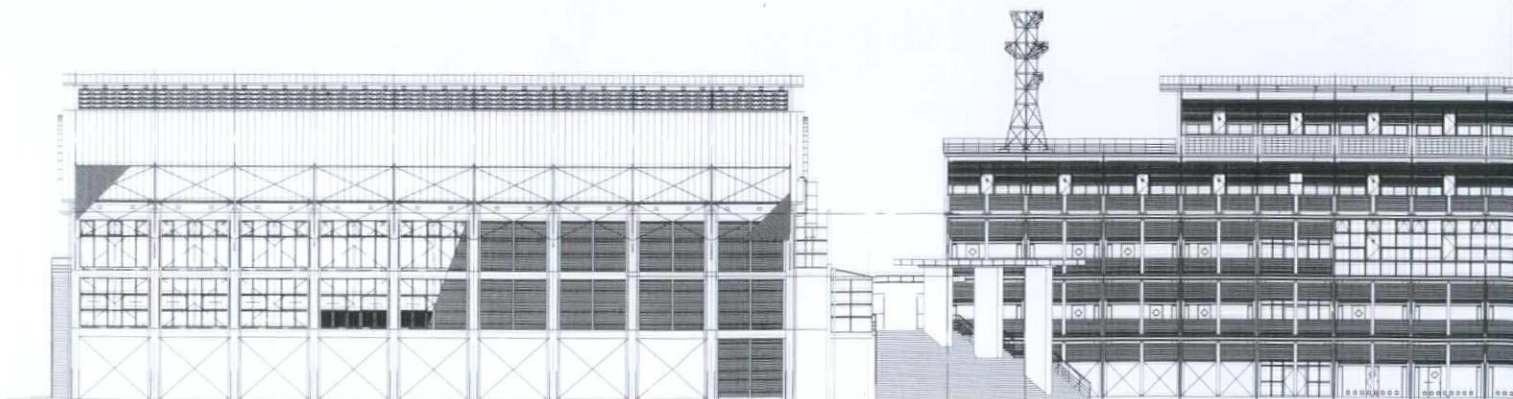
敷地面積：44,988.25㎡

延床面積：5階実習棟：6,681.00㎡／

体育館：4,022.16㎡／2階実習棟：

2,356.00㎡

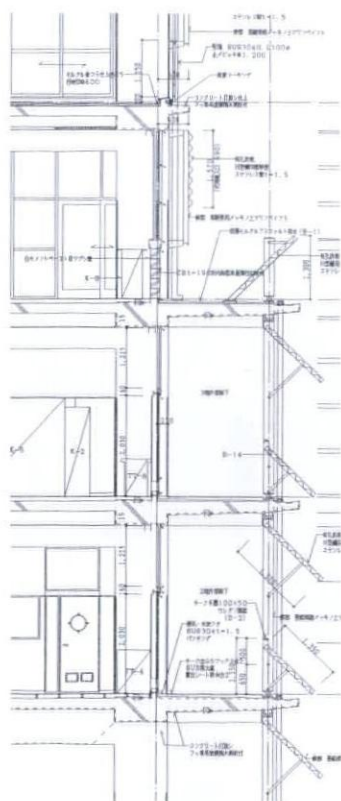
主要構造：5階実習棟：RC造+S造



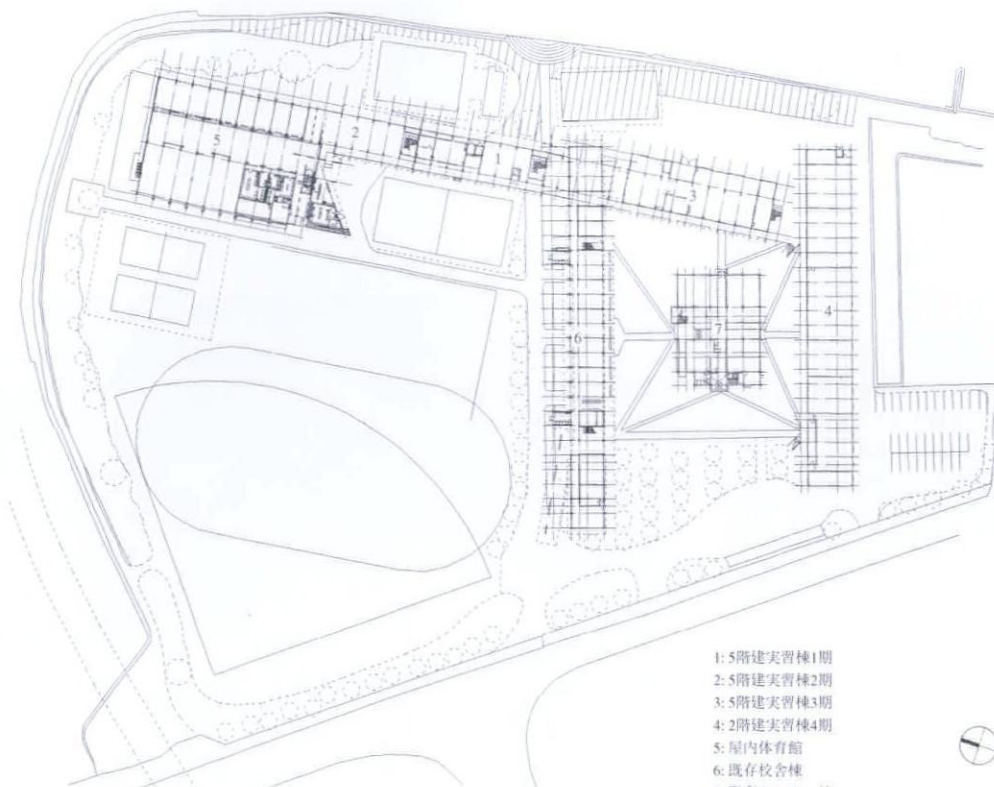
西面全体立面図 S=1:500

SD9601

48



矩計図 S=1:150



配置図 S=1:2400

- 1: 5階建実習棟1期
- 2: 5階建実習棟2期
- 3: 5階建実習棟3期
- 4: 2階建実習棟4期
- 5: 屋内体育館
- 6: 既存校舎棟
- 7: 既存センター棟

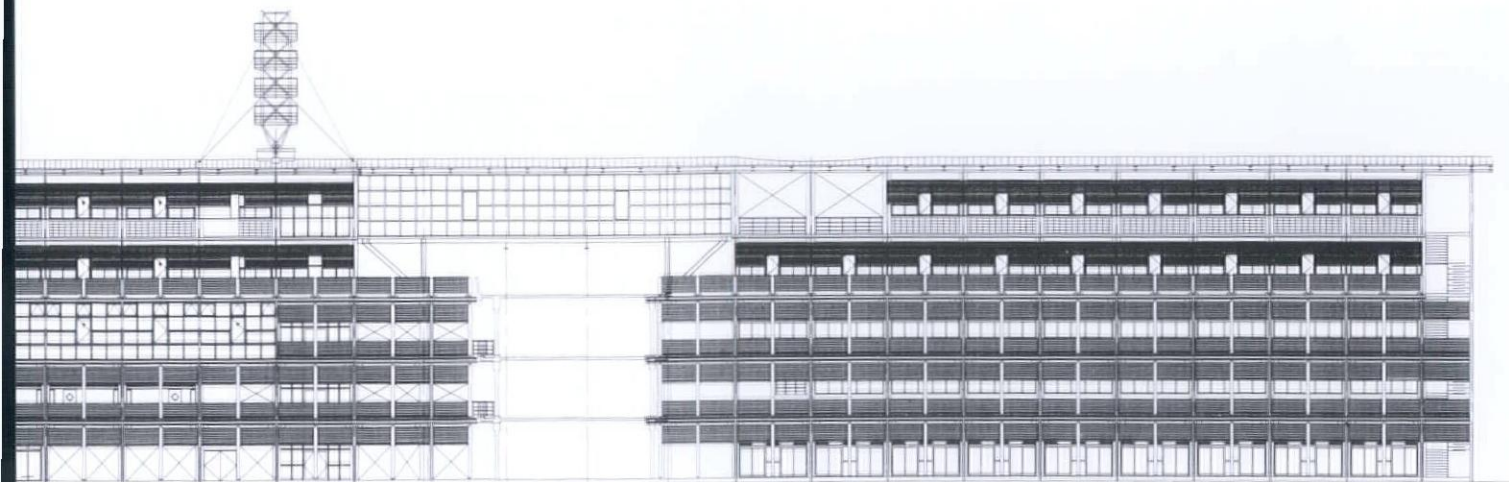
熊本県南部、天草地方の本渡市にある県立天草工業高校の改築計画である。既存施設の実習棟部分をまずスクラップ化、新築の後、近い将来教室棟を同様に解体、建替することを前提とした計画を要請された。校地面積は標準条件の60%程度と狭く、既存建物内、教室棟を残しつつ計画することの困難さが当初予想された。しかし、種々プロットプランを検討する中で、既存の教室棟を近い将来に解体予定とするこの意味を問うことになった。つまり建物は25年経っているが、老朽化しているとは考え難く、かつ典型的な70年代の標準型校舎であって、その学校建築として空間の良し悪しはともかく、天草五橋の瀬戸大橋のたもとに在って、永年に亘り、本渡市入口のランドマークとして存在していたものである。物理的寿命を来したものでなく、

風景の一部として町の歴史を形成した存在であった事実を大切にしたいという見解が生まれた。保存という意味ではなく、積極的に改修しつつも原形を残しながら風景を継承してゆくことを提案した。そのような判断から、校地のほぼ中央に位置する既存教室棟を跨いで高層一体化された実習棟、体育館の計画が生まれた。可能な限りグランド用地を残し、従来は校地の裏として扱われ、環境と意識されずに在った東側の瀬戸、可動歩道橋の風景と、西側の街区(アプローチ側)とを、校舎の存在によってより一層結び付けると同時に、瀬戸大橋と並ぶ位置に在ってスケール感を考慮し、本渡市入口のランドマーク性を明らかにすることを考えた。従来裏であった水際は、歩道橋から続く、市民に開放された水際プロムナードとして整備することを提案、計画検討さ

れている。

機能的プログラムは、既存校の改築という条件から当然起こり得る、現状からの計画変更に対する施主の意見が種々あること、教育プログラムが過渡期にあること、という実情に対し最大の柔軟性を持つべく、スペースは完全に一方フリースペースとしている。公立学校建築は公営集合住宅の状況に似て、制度の枠、規準に最も強く支配され、建築の標準化意識が未だに強く影響している。特に既存校に手を入れる際は、教育現場の現状を維持してゆこうとする力が極めて強く働く。そのような現状では、風景に対応する骨格としての場を作る、原型的なフリースペースが有効に働くものを考える。

(室伏次郎)



不知火町図書館・美術館（不知火文化プラザ）

北川原温建築都市研究所十伊藤建築事務所

Shiranuhi Town Culture Center

Atsushi Kitagawara Architects, Inc.+Ito Architect and Associates

くまもとアートポリス

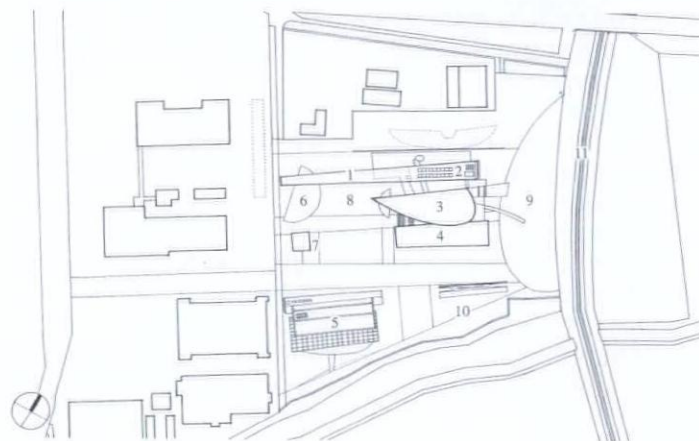
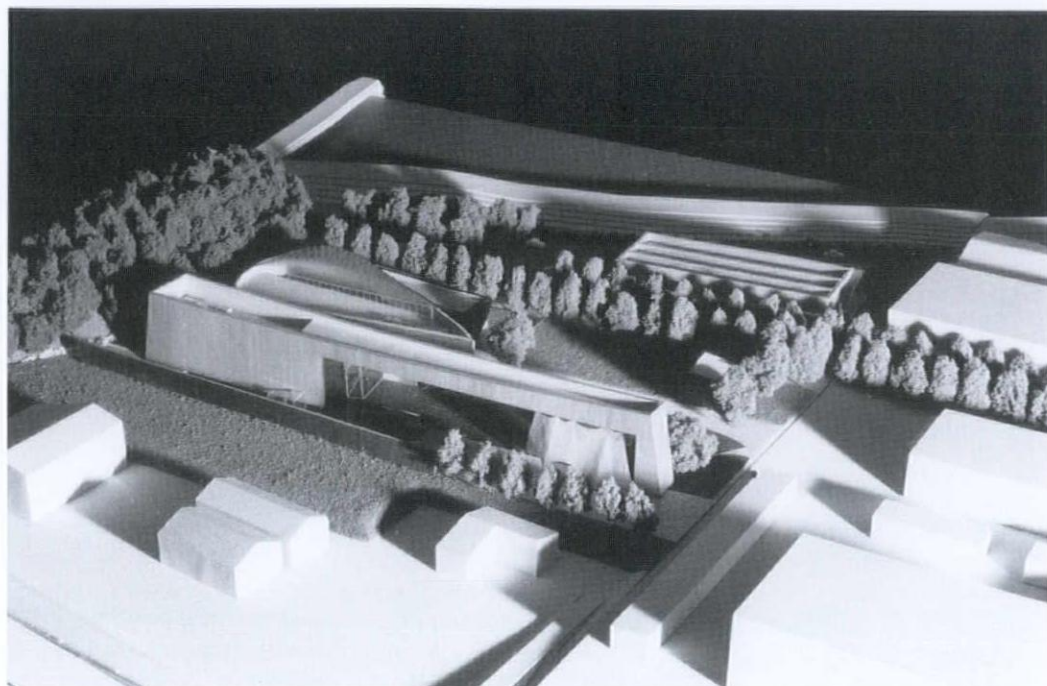
このプロジェクトは基本設計が完了した後、2年間の間において1996年の4月から実施設計に入る。

『日本書紀』にも記されている不知火の火は、陰暦の8月1日（八朔）頃、海浜上の特異な空気断層の効果によって、漁火が無数に現れたり水平に連なったりと不思議な変化を見せ、幻想的な光景を展開する。その光景は姿や形を変え、観念的な象徴として不知火町の歴史と文化の奥深くに横たわっているに違いない。不知火現象のメカニズムは特性の異なる複数の空気層、つまり空気レンズがその正体であると言われているが、この多層の空気という構造が脳裏から離れず、建築の多層性の形式を探ってきた。

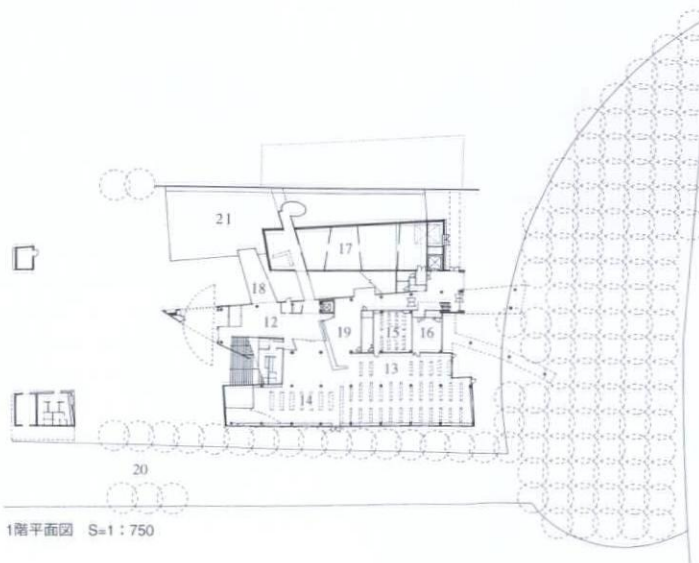
既存の公共施設群の間を貫いて設定される並木道は、この地区全体に新たな秩序を生成する背骨となるが、それはまた多層構造の最初の層でもある。現在設計中の美術館と図書館を含む複数の施設は、増殖する層と重なりながら配置される。各層は各々姿や意味を異にし、建築を構成する鍵となる要素の関係性の表現として捉えることができる。

この多層の空間を横断的に結んでいく動線を想定する。その動線のネットワークをコレオグラフィーとしてシミュレーションし、ドラマティックな空間体験のプログラムを用意する。もちろんそのプログラムから外れていくことを予想して。配置計画におけるもうひとつの特徴は、敷地の東端につくられる高さ7m程の小山である。この小さな山だけは多層性の海に浮かぶ別格の地形となる。

（北川原温）



配置図 S=1:3800



1階平面図 S=1:750

- 1: ジャイアントゲート
- 2: 美術館
- 3: 文化交流館
- 4: 図書館
- 5: プール棟
- 6: 屋外ステージ
- 7: ディスプレイフォーリー
- 8: 中央広場
- 9: 築山（緑の柱）
- 10: 町民公園
- 11: JR鹿児島本線
- 12: エントランスホール
- 13: 成人用閲覧コーナー
- 14: 児童用閲覧コーナー
- 15: 閲覧書庫
- 16: 会議室兼読書室
- 17: 展示室
- 18: ラウンジ
- 19: 事務室
- 20: メインアプローチ道路
- 21: 水盤

所在地：熊本県宇土郡不知火町
構造設計：都市空間構造研究所
敷地面積：18,244.60㎡
建築面積：約2,800㎡
延床面積：約3,500㎡
主要構造：RC造

熊本北警察署坪井交番 (KANBAN KOBAN)

加茂紀和子+マニュエル・タルディッツ/セラヴィアソシエイツ

Tsuboi Koban

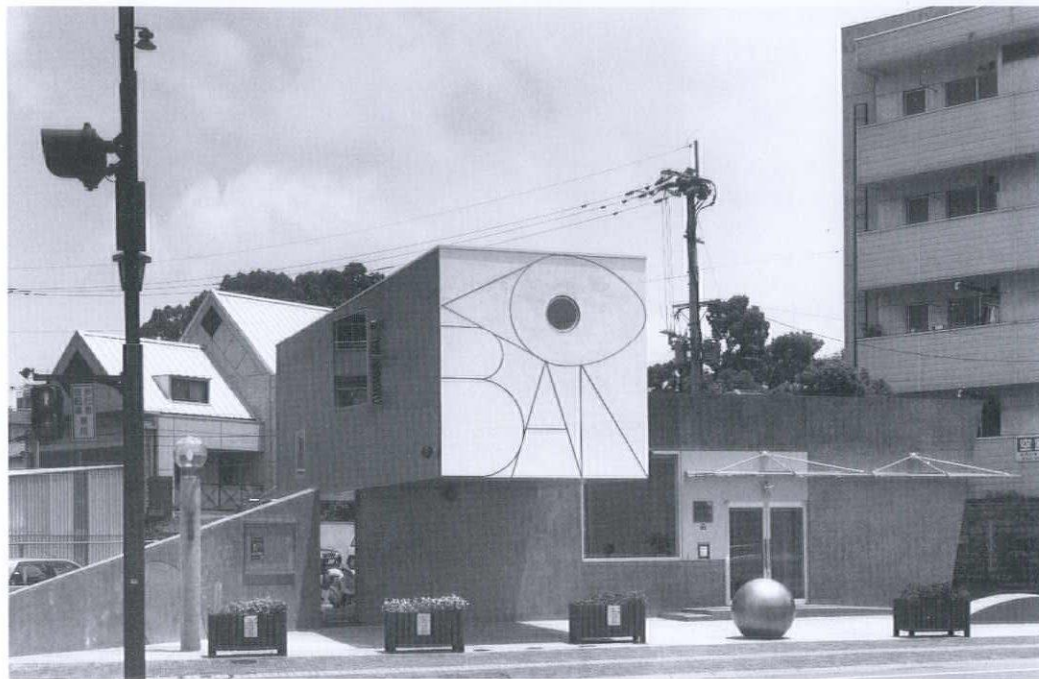
Kiwako Kamo+Manuel Tardits / Celavi Associates

立地は、熊本城や繁華街の中心部に近接し、敷地南側は、交通量の多い通りに面する。通りに対して奥行き深い敷地に、広場、交番庁舎、駐車場、倉庫が層状に配置されている。交番庁舎の1階のボリュームと隣地境界に立てた壁が敷地間口一杯にファサードをつくり、その面が、敷地内を表の空間と裏の空間に分断している。そして、歩道から連続する地面とこのファサード面を同一のテクスチャーとすることによって一体的な空間を形成させ、オープンスペースとして市民に提供する。そこに置かれたいくつかのオブジェは、ここが広場であることを象徴し、あるものは警察からのメッセージを伝える機能を持ち、またあるものは、バスを待つ人々のベンチとなっている。

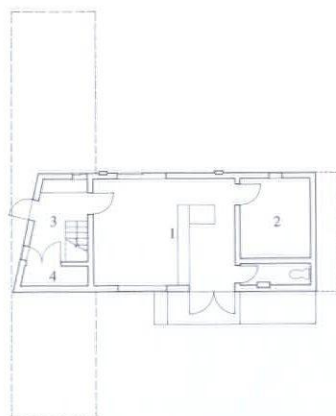
施主である熊本県警から出された第一の要望は、市民に親しまれるものとするのであった。私たちは、パブリック性(公共性)を生み出すためにパブリシティ的(商業的)手法を用いることとした。素朴な表情の交番庁舎1階のボリュームと対照的に、長さ12mの2階の金の直方体を裸体の看板として浮かべた。通りに突き出すようにその妻面には、KOBANという文字がデザインされている。設計がスタートした年、外国人でも解るようにと全国的にローマ字で表示することがきめられた。真鍮目地による、この坪井交番のKOBANは、人によっては、鳥に見えたり、目に見えたりするらしい。「ポッポちゃんの交番」と5歳の男の子が言っていたそうだ。

竣工してから半年あまり。最初はなんだかわからなかったけれど、そろそろ街の風景としてなじんできたところだ。女子高校生には、オシャレということで受けはいいらしいが、反面、年輩の男性には、交番らしくない。との意見が多い。夜間、ライトアップされ、赤色灯が灯るとカフェバーみたいだという声もある。ともかく、これからも熊本市坪井町のランドマークとして存在していくことを望んでいる。

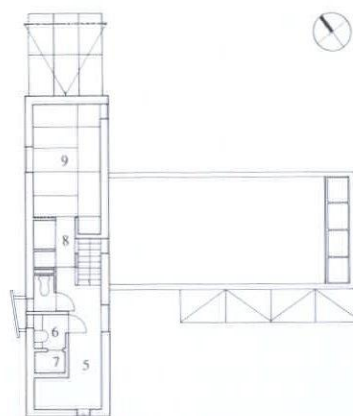
(加茂紀和子+マニュエル・タルディッツ)



Kumamoto Arpolis

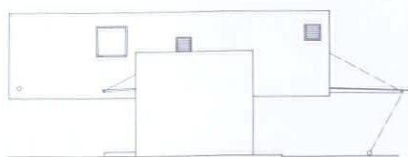


1階平面図 S=1:300

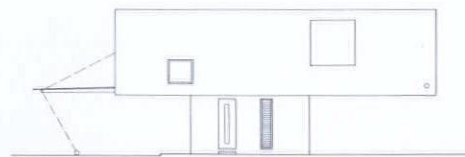


2階平面図 S=1:300

- 1: 事務室
- 2: 相談室
- 3: 湯沸室
- 4: 倉庫
- 5: ロッカー室
- 6: 洗面室
- 7: ユニットシャワー
- 8: 前室
- 9: 休憩室



東側立面図 S=1:300



西側立面図 S=1:300

所在地: 熊本県熊本市坪井町1-1
 主要用途: 交番
 設計協力: 新納至門
 構造設計: 形象社
 施工: (株) 野中工務店
 敷地面積: 647.4m²
 建築面積: 217.4m²
 延床面積: 183.7m²
 主要構造: RC造+S造
 規模: 2階
 竣工: 1995年3月

荒尾警察署長洲交番

塚本政利+設計機構ワークス

Nagasu Koban

Masatoshi Tsukamoto+A・S・WORKS

くまもとアートポリス

長洲交番はアートポリス事業51番目のプロジェクトで、交番としては48番目の坪井交番に続いてふたつ目の計画です。近年東京で多くつくられているいわゆる「文化交番」より少し規模が大きく、地域の交番としての性格が強い施設です。

長洲町は熊本県西北端にあり、有明海を挟んで、西に雲仙岳を望む港町です。近年の工業誘致により、造船所や大型の生産施設が立地するとともに、金魚や鯉の養殖で知られています。

この交番は長崎と連絡するフェリーターミナル(現在アートポリス事業50番目のプロジェクトとして工事中)から200m程離れた広い県道に面する位置にあります。このフェリーターミナルエリアは、高速道路網の発達によるフェリー交通のターミナル機能の相対的低下により、拠点の整備が遅れているようにみえます。

私達はそのような地域にあって、フェリーターミナル施設の新設とともに、近接する長洲交番の建て替えも、地域の活性化と環境整備の一貫として捉え、計画に含まれていない古い警察官舎部分も含めて、変則的な交差点に半島のように突き出た形の敷地全体を公園化することをまず第一に考えました。将来、古い警察官舎部分を取り壊して、建築と連続したポケットパークとなることを期待しています。

建築は周辺の低い町並みにスケールを合わせて、シンプルな煉瓦積み風の壁を県道に対して平行に4枚、直行方向に1枚立て、壁の交差する部分に、円形フラットの屋根を浮いた形で乗せています。とぎれながら連続する壁は、交通量の多い県道から交番機能を守ると同時に、道に対してリズムカルな表情を与え、少し大きめの円形フラット屋根は人を呼び寄せる庇でもあり、夜のライトアップによって、陸の半島にある灯台のように光ることを期待しています。

(塚本政利)

所在地：熊本県玉名郡長洲町長洲下原2006号

主要用途：交番

構造設計：福井構造設計

施工：共和建設

敷地面積：1,118.27㎡

建築面積：186.67㎡

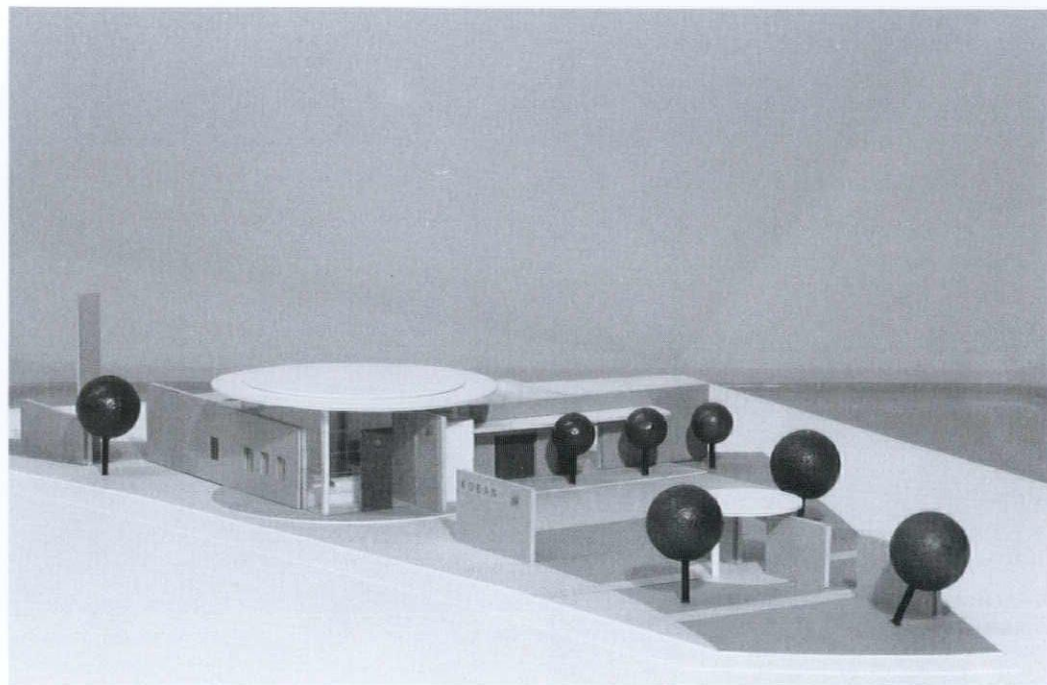
延床面積：152.55㎡

主要構造：RC及びS造

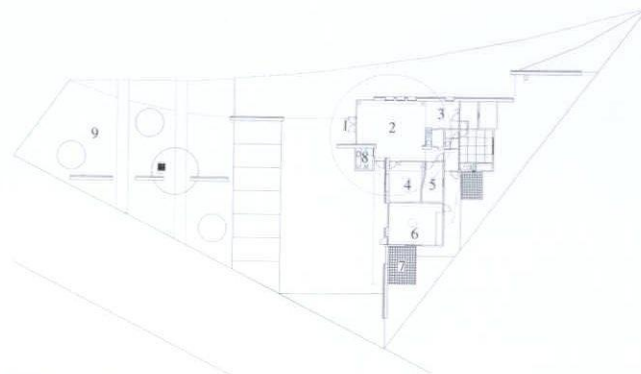
規模：平屋建

竣工：1996年3月予定

SD9601
52

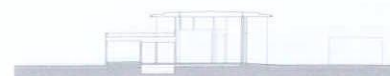


配置図 S=1:3000



平面図 S=1:800

- 1: エントランスポーチ
- 2: 事務室
- 3: 待機室
- 4: コミュニティルーム
- 5: 取調室
- 6: 車庫・保管物倉庫
- 7: 保管物置場
- 8: 客用便所
- 9: ポケットパーク (将来工事)



断面図 S=1:800

クリエイティブTOWN岡山

Creative Town Okayama

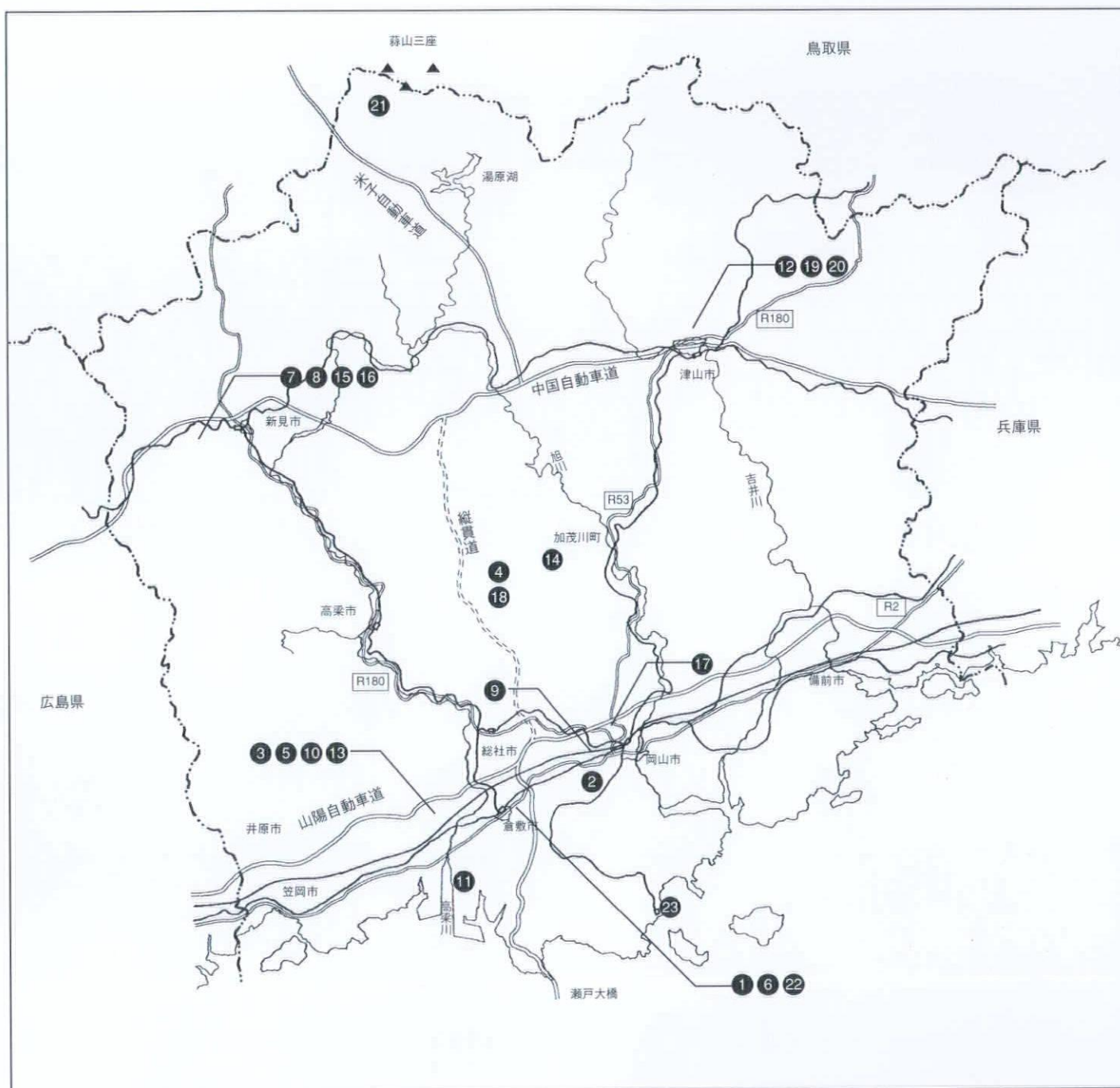
岡山県では、1991年に定住環境としての「都市環境の創出」を基本理念におき、都市づくりをスタートさせた。

「くまもとアートポリス」の手法を出発点としながらも、参加建築家たちと発注者との間にプロジェクトへのより深い意思統一をはかる手立て（キーセンテンスの提示）や、委員会の導入など、独自の方式を模索している。

以下は、第2期を迎えた「クリエイティブTOWN岡山」で展開するプロジェクトである。



岡山県CI



1. 岡山県中庄団地建替第1期
丹田悦雄・空間工房＋
(協)岡山県設計技術センター
倉敷市中庄
2. 岡山県南部健康増進中核拠点施設
阪田誠造／坂倉建築研究所＋
丸川大祐／丸川建築設計事務所
岡山市平田
3. 倉敷市立玉島北中学校
重村力＋TEAMZOO:いるか設計集団＋
(協)倉敷建築設計センター
倉敷市玉島八島
4. 岡山県総合教育センター
鈴木恂／AMS＋高原康一郎／高原
建築設計事務所＋寺尾好文／寺尾
一級建築設計事務所
上房郡賀陽町
5. 倉敷市西部研究学園地区：基本構想
松波龍一／都市環境研究所
6. 岡山県中庄団地建替第2期
阿部勤／アルテック建築研究所＋
(協)岡山県設計技術センター
倉敷市中庄
7. 健康の森：水のゲート・風のゲート
竹山聖＋猪俣浩二／設計組織アモルフ
新見市
8. 健康の森：センター施設
竹山聖／設計組織アモルフ＋貴田
茂／創和設計
新見市
9. 岡山西警察署庁舎
磯崎新／磯崎新アトリエ＋倉森治
／倉森建築設計事務所
岡山市野殿東町
10. 作陽学園倉敷キャンパス
吉村順三／吉村順三設計事務所
倉敷市玉島長尾
11. 水島サロン
芦原太郎／芦原太郎建築事務所＋
丹波英喜／丹羽建築設計事務所
倉敷市水島東千鳥町

12-1. グリーンヒルズ津山：基盤整備

都田徹／景观設計研究所東京事務所
津山市大田地内

12-2. グリーンヒルズ津山：センター
ビレッジ

北川原温／北川原温建築都市研究所
＋柳勝巳／やなぎ建築設計事務所
津山市大田地内

12.3 グリーンヒルズ津山：グラスハウス

横河健／横河設計工房＋木村旭／
木村建築設計事務所
津山市大田地内

13. 倉敷市西部研究学園地区給水塔

浜田邦裕
倉敷市玉島長尾

14. 加茂川町民体育館

青島裕之／青島裕之建築設計室
御津郡加茂川町

15. 健康の森：乗馬施設

佐藤正平／佐藤建築事務所
阿哲郡神郷町

16. 健康の森：テニス施設

前田敦／建築倶楽部
阿哲郡神郷町

17. 岡山県立鳥城高等学校・生涯学習
推進センター

芦原義信／芦原建築設計研究所＋
能勢延美／能勢設計
岡山市伊島町

18. 岡山県バイオテクノロジー研究所

土岐新／土岐新建築総合計画事務所＋
芝村満夫／ベン建築設計
上房郡賀陽町吉川

19. グリーンヒルズ津山：リージョン
センター

北川原温／北川原温建築都市研究所
＋岸本英夫／巴建築設計事務所
津山市大田地内

20. グリーンヒルズ津山：音楽堂

富田玲子／象設計集団＋芦田國廣／
芦田設計
津山市大田地内

21. ひるぜんジャージーランドビジター
センター

玄・ベルトー・進来／(株)玄・ベルトー・
進来
真庭郡八束村

22. 岡山県当中庄団地建替第3期

遠藤剛生／遠藤剛生建築設計事務所
＋(協)岡山県設計技術センター
倉敷市中庄

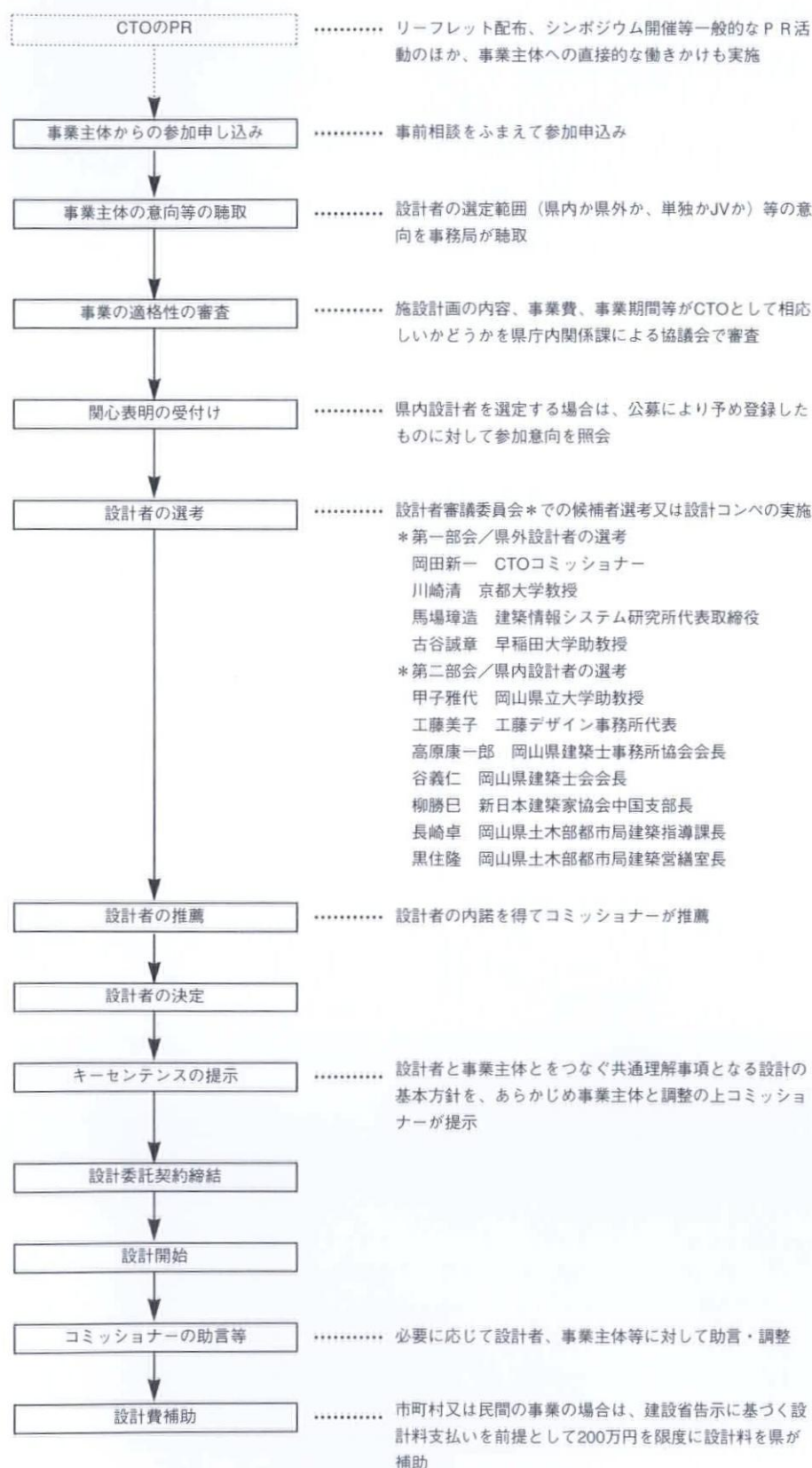
23. アクア・マリン玉野

安藤忠雄／安藤忠雄建築研究所＋
武鑑輝夫／梓設計中国事務所
玉野市日の出

24. アクア・スポーツサロン美作(基本
計画)(設計者選考中)

英田郡美作町内

CTOの流れ



CTOの目指すもの

岡山県知事
長野士郎

インタビュアー: 前田 敦

——「いいものは2番手であってもよい」とのお考えで、くまもとアートポリスに続いてコミッション方式による「クリエイティブタウン岡山 (CTO)」を始められたと聞いておりますが、特にこのシステムに期待されたものは何でしょうか。

熊本のこととも聞きましたけど、そもそもの発想は日本の公営住宅に対する不満からなんです。外国からドッグハウスと言われた公営住宅について、私も実につまらないと思っていました。いつもこれでいいのかと思っていましたから、そうでないものかを考えるということにははもと大賛成なんです。

そんな時に「世界の集合住宅」という写真集を見せてもらったんですが、いろいろな集合住宅がある。それで大いに開眼したんですよ。デラックスなニューヨークの住宅もあるけれど、本当に工夫してつくっているイタリアやドイツの公営住宅もありましたよ。それに比べると、気候風土も違う日本でどこでも同じようなものをつくっていくというのは役所の無感覚、ナンセンスですよ。そうした画一的な行政に対する反発もあったんです。

そこで、どうすれば良いかはわからなかったけれど、幸い岡山に縁のある岡田新一さんがいたので、ひとつやってみようと思ったんです。名前はCTOでも何でも良かったんですよ。(笑)

——知事が推進しておられる地方分権の実現には、地域は自ら考え自ら実践することが大事だと思いますが、一方CTOでは、県外の建築家を積極的に登用されています。この辺りのお考えはいかがでしょうか。

今までの殻を破って新しいものをつくることを自信をもってやるのは、土地のデザイナーには恐らくできないでしょう。大胆にやらなきゃいけないですから。「あいつが勝手なことをして」と言われるのは気の毒だから、それをむしろ他所の力のある人にやってもらうことが非常に刺激になる。また、刺激になるようなものをつくってもらわないといけない。そう考えると、全国的に通用する若手デザイナーとか、そういう人を連れてくることは必要だと思いましたね。

地域のことは他所の人ほどよく見えるとは思いませんけど、それにしても新しい目で見

ることは必要だし、地域にいるとしがらみがあつてできないところを抜け出すきっかけをつくるためには、建築の流れとか傾向を素早く感じて新しい設計思想を持つような人が一番いいと思いますね。

——CTOでは、地域の環境全体に影響を与えるようなプロジェクトが多いようですが、環境づくりには多様な公共施設整備との関係が重要です。そうなるのとタテ割り行政の問題が出てくると思いますが……

そもそも都市計画の思想がなくなっていると思うんですよ。本来、まちづくりということが先にあって、それに応じて道路なり何なりを考えていくべきなのに、道路などが先に出過ぎて、それに応じてまちをつくるから日本の都市は特色がなくなる。まちづくりは生活感と哲学とを持っている人にして初めてできることなんです。学校で技術を学んだだけではできないんです。ハードの計画が先行し過ぎて、都市の歴史とか伝統とか文化というのが消されていくんですね。これは大間違い出果余。同じことが地方の施設づくりにも弊害として出ている。CTOはそういうものに対する反抗ですよ。間違ってる。それを実物で見せてやろうと。

——バリのグラン・プロジェでは、まず全体像を描いて、その実現のために省庁連絡会議を作ったという経緯があるようですね。

日本じゃできないですね、役所の方が強すぎますから。だから役所を外した方がいいんです。私にやらせてみなさいと。そうしたら信用のおける人に頼んでいいものを作りますから。(笑)

——いいものを作ると、実際にそれを見ることによって、一般の人の意識も含めて環境に対する考え方が変わってくるでしょうね。

そうですね。まだCTOでもできあがったものが少ないけど、実物を見れば変わってくると思いますよ。

また、見ることは我々自身が反省することでもあるんです。こういう方向でいいのか悪いのか、いつも考える。CTOの建物がきっかけになって、環境との調和ということが大事になってくるといいですね。

その点については今の建築基準法はダメですね。個々の建物だけを見て周辺との関係を考えていない。環境と合うか合わないかを考えない建築確認はつまらないですよ。

それと大阪の万博があつたでしょ。あのテーマは確か「人類の進歩と調和」でしたよ。調和してましたか。てんでバラバラで勝手放題に作っている。日本のデザイナーというのはそういうことを平気でやるんです。自己主張が強すぎて全体の調和を考えない。それが今のまちをつくっている。今のまちを見て美しいですか。ヨーロッパの古い町や日本の城下町は、これは美しい。なぜか。そういう反省が関係者にないのを何とかできないかというのが根底にあるんです。

——建築と環境との関係を考え直す機会として、例えばこれから岡山城築城400年、後楽園の築庭300年、さらに10年後には岡山団体が開催されるわけですが、こうしたイベントとCTOがいい形で連動して、まち全体が良くなっていくというようなことは考えられないのでしょうか。

そうなれば結構だけれど、なかなか難しいでしょうなあ。それを目指す施策は当然考えるべきですけどね。

やはり、まちをつくるというのは行政がつくるのではなく、土木や建築の技術屋さんがつくるでもない。市民がつくるんだと。そういう考えの基礎のもとに、まちづくりの基本となるような構想が必要と思うんです。その構想に基づいてまちすじを整理したり、広場をつくっていく。いろいろなものを組み合わせる必要ですね。CTOもまだまだですけど、将来的にはそういう方向で発展すればいいですね。

ヨーロッパの諸都市を訪れると、そのたまたまに到着感があり町並みや広場など都市空間が豊かで、市民がその環境を楽しみ、生き生きと生活している様子に魅力を感じる。そのような都市が、市民が都市文化を享受できる真の定住環境といえる。それは一朝にしてつくられるわけではなく、長い歴史の中で数百年にわたって醸成されてきたものであり、多くの市民の手による結晶である。

日本の都市環境も、次の世代に対して受け渡すことのできる、そのような定住都市を目指すべきであろう。祖先から子孫へわたって大切に受け継がれるべき貴重な資産としての優れた都市環境（または国土）の創出に後れをとるならば、次の世紀において、日本は海外諸国から取り残される存在となってしまうであろう。日本の都市の現状を見ると、そのような危機を抱くのである。

確かに、日本の諸都市において建設は盛んに行われている。バブル崩壊後も、自治体における公共建築の建設は数多く行われている。しかし、それらの建設は個々別々の設計条件によって進められ、定住都市をつくるための大きな枠組というべきマスタープランの中で、総合的、かつ統合的なデザインがなされることがない。それでは定住都市環境の創出はおぼつかないのである。

都市は、道路、上下水道等々の下部構造を基盤にして都市計画されるが、住みよい定住環境の創出は、上部構造である建築によって決まる。建築の積み重ね、すなわち蓄積によって都市は創られていくのである。長い年月の間、100年を単位とする歴史的流れの中で、

都市のイメージが都市に住む人たちの間に保たれ、マスターデザインが踏襲されることによって、都市環境は潤いのある完成度を高めていくことができる。欧米の都市はそのような発展をして現在に至っている。^{*1}

これに対して、日本の実情はどうであろうか。都市の骨格をつくる公共建築の設計者が設計料の入札によって決められたり、設計事務所の資本金の額や、技術者の人数の多寡によって決められたりしている。そのような設計者選定は、都市環境を創出することとは無縁なことである。設計料入札が、設計行為に対しては相応しくないということが、各自治体の中で少しずつ認識されてきた。それに代わる設計者選定の方法がないものか、様々な方法が試行されている。インタビュー、ヒアリング、プロポーザル、コンペ等の方式がそれである。CTOにおけるコミッショナー制も、そのようなプロセスの一環として設けられたものである。

CTOについて

岡山県長野知事が熊本県細川知事（当時）から、熊本アートポリスについての説明を受け、建築のもつ文化性に改めて感銘を深められた。その直後であったと思う。「岡田さん、よいものは二番手であってもよいと思う。建築を通して町並みづくりを手がけたいのだが……」ということであった。

岡山は私にとって、少なからぬ関係のある土地であり、既に十指に余る建築を岡山、倉敷周辺で設計をしているので、土地勘も十分にもちあわせている。そして、建築のデザイ

ンが、「都市を創る」大きな要因となると認識している。長野知事よりの打診を受けて、クリエイティブタウン岡山（CTO）のコミッショナーを引き受けたのは、このような故郷感覚の延長としてのことであった。

CTOでは「都市環境の創生」という視点から環境を読み、そのような環境を組み込んで設計条件に添えてくれる建築家を選び推薦する、という方向をとりたかった。魅力ある都市を歴史的に辿ってみると、ある時代に、ある見方をもった人たちの目を通して、能力のある建築家が選ばれ建設にたずさわるということによって、それらの都市環境が創られてきたことを知ることができる。「町並みを創る」とはそのようなことであろう。建築が重い表現をとるか、軽い表現をとるか、また、どのような歴史の引用を用いてゆくか、というようなことではなく、環境のもつ景観や空間をどのように捉えて、そのコンテキストの中に建築を位置づけ、デザインしていくか、ということではなかろうか。地域によって特徴のある定住環境を創りだすことが、岡山で求めている都市文化の創出であると理解する。

そのような視点によれば、建設は経済行為ではない。都市文化を創出する行為である。したがって、土地に経済活動としての流動性をもたせたり、そのために建築容積等の規制緩和に向かうなどという方向は好ましいものではない。まして、設計者の選定の過程で経済的方法（設計料入札制や経済摩擦緩和のための外来建築家の参入など）がとられることは甚だ不適切である。「都市環境を創生する」という文化的側面から建築家は選ばれるべきであろう。

私が、岡山においてコミッショナーを引

き受けたのはそのような背景を考慮してのことである。したがってCTOコミッショナーは単に建築家を事業主側へ推薦するのみでなく、それらを結びつけるところに役割があると考え、推薦の折にはコミッショナー・キーセンテンスを添えている。

通常、官庁の建設では担当部所が企画を立て、設計条件をつくり、営繕課を通して設計者に依頼するというプロセスがとられる。その間にイメージの受け継ぎは行われず、設計条件という事項のみが受け渡される。一方、設計者は条件を与条件としてとらえる。予算のように限定され動かすことのできないものもあるが、多くの場合、イメージであるとか、マスターデザインのような、設計の基本に据えられるべき事柄が議論されず、設計者は個人の作品としての表現のみを追ってしまう。このように、重要な根本的なコンセプトが、設計条件の中から脱落してしまうのがほとんどの場合である。それを補うものとして、キーセンテンスには環境に対するコミットメントを含めて、両者の繋ぎの役割をもたせている。それは、推薦した建築家に対するコミットであると同時に、設計条件に関する発注者側に対するコミットであるという双方向に向けられたものと解することができる。

町づくり運動としてのCTOであるからには継続することにこそ狙いがあるわけで、四年を任期としているところは、比較的長い期間継続するコミッショナー制が確立されつつある重要な部分である。また、デザインの成否は決定された設計条件の質に関わっている。したがってキーセンテンスをきちんとまとめておくことが重要な鍵を担う。いくつかのCTOプロジェクトを進行させてみて、発注者

側に対するコミットと設計者に対するコミットの両者を円満に併立させることは甚だ難しいことであると実感している。それらが馴染むまではしばらく時間がかかるであろう。そのような調整もまたコミッショナーが気を配るべき事項である。

コミッショナーとして自治体に関わるようになって、気づくことがある。第一は予算が年度で切られる事業進行の仕組みである。

CTO第一回のプロジェクトである県営中庄団地の建替事業では、住み替えによるため、事業執行は四期に分かれる。ところが、それぞれの期は年度を異にし、予算の裏づけがないために2期以降の設計者は指名できない仕組みになっている。まちづくりの一環であるからにはひとりの建築家が全てを設計し、統合するということは行われるはずもない。多くの建築家が歴史的な時系列で参加するのがまちづくりの基本であるが、その折に互いのコミュニケーションが行われないならば、全体のマスタープランが受け継がれるはずがない。官側の単年度発注制度がもつ制約を解く手段としてコミッショナー制を活用することが考えられてよいだろう。即ち、コミッショナー制によるならばコミッショナー推薦の予定者として、後期の建築家を初期プロジェクトのマスタープラン段階に参加してもらい、特に期ごとのジョイント部分のデザインについて検討を加えるということも可能である。そのような動きを可能とすることもコミッショナーに期待してよい役割であろう。

第二に、多くの場合官側のプロジェクトにマスターイメージ、マスターデザインが欠落しているということである。これは重要なことだ。企画調整部局で長期にわたる総合計画

がつくられる。ここではかろうじて都市のイメージについて言及されるのだが、個々のプロジェクトが現場部局へ落とされる段階では、イメージの脈絡は切られてしまっている。縦割り行政の中に位置づけられた個々の事業担当部局に対して、統合された都市への理解、都市としてのイメージを描くことを求めるのは不可能というべきであろう。そこには都市計画と、個々の建設とを結ぶ機能が存在していない。これでは、統合された美しい町並みを実現させることはできない。イメージを図に落とすことのできる専門家を、しかも恒常的に都市計画と個々のプロジェクトの中間に存在させることなしに、全体計画を実現させることはできない。

そのようなことであるならば、思考をそこに置いて建築家の選定に当たり、優れた設計者として特定の建築家を当局へ推薦していく、ということによって「都市を創る」専門職としてコミッショナーを続けていくことができるのではないかと考えている。^{*2}

また、第2期から、設計者審議委員会を設けコミッショナーを含めた数人のグループで設計者併走を行い、CTO計画の永続性を計ることになった。^{*3}

●おかだ・しんいち／建築家、CTOコミッショナー

*1: 都市を創る」岡田新一、彰国社

*2: 快適環境社会の形成：プロデューサー方式の地域デザイン」岡田新一、ぎょうせい出版

*3: 第一部会メンバー：岡田新一、川崎清、馬場瑋造、古谷成章

第二部会：地元建築家審議のための部会

キーセンテンス

第1期

1. 周辺(外周・道路)との関係を考える。
2. 内側に空間をもち(セミプライベート・セミパブリック)、関係を考える。
3. 空を載る部分(スカイライン)を考える。
4. 年次計画相互のジョイントを考える。
5. 素材における関連として(一部でもよい)コンクリート打放を共通言語として用いる。

6. 全面道路との境界エッジは統一ある納まりにできないか？

7. 駐車場は植樹にて蔽う。

8. これまで共同住宅に関しては多くの調査研究がなされてきた。

それらのスタディに対して気配りを持つ計画でありたい。

9(補). 敷地は中庄の里山の周縁部にあり、古くからの定住環境を継承する住宅地の創生がほしい。とくに第3期以降の敷地は外縁道路より内部に入った場所にある。したがって、外周側の扱いと内側の空間の扱いとの関係をとくに考慮したい。都会のように外と内という分け方ではなく、もっと近接した関係をもたせることを考える。

□都市環境が問題にされる時代である。景観の調和が計画され、いろいろな試みが実践されている。軒高を揃える、屋根の形に制限を加える、素材を共通とする、色彩を統一する等々、フィジカルコード(景観規制、または美観条件と言われる)によって調整を試みようとする傾向が強い。現代の都市はそのようなプリミティブな手法によってつくられるものではない。

素材や工法が限定され、建設技術に限界があった時代には、それが制約となって節度ある美しい町並み、例えば旧倉敷のような町並みがつくられた。しかし、現代の都市は遥かに複雑な要素が絡み合っている。都市をつくるためにはフィジカルコードによらない統合の方法が採られなければならない。

ろう。

県営中庄団地は4期にわたって建替が行われる。一つの都市が一人の建築家によって、即ち一つのコンセプトによってデザインされるわけではない。都市が多くの建築家のデザインする建物によって景観がつくられていくように、期毎に建築家を異にして推薦しよう。それらの建築家は個々の傾向に偏ることなく、互に語り合える建築語彙を共有する人達であるべきであろう。ここで提示したキーセンテンスは、そのような繋ぎの役割を期待して書かれている。

ところで、官庁工事では予算の裏付けがあってはじめて出件するというプロセスをとっている。従って長期間にわたる年次計画では、後年次の設計者を予め指各することはできない。広い範囲にわたり、複数の建築家が参加するプロジェクトでは初期のマスタープランの段階からそれらの建築家が集り討論を積重ねることが好ましい。そのためにコミッショナーの意中として第1期丹田悦雄に続く阿部勤、遠藤剛生、納賀雄嗣の傾向を異にする建築家達を全体会議に招いている。

中庄団地の建替計画も第3期となると、周縁地区への波及がみられるようになる。第3期と第4期の敷地にかけて数軒の商店があるが、これを全体の建替計画に取り込もうという動きがみられるようになった。等価交換による再開発手法をとって中庄団地計画に組み込むことが考えられる。都市創りの手法が波及効果を及ぼし範囲を拡げていくことは好ましいことと考えている。

さらに、隣接する倉敷市営団地や川崎製鉄住宅の建替による再開発が話題になりつつある。このように波及が拡まっていくことを期待している。(岡田)

第2期

1. 第1期工事のキーセンテンスが踏襲されるが、第2期工事の発注の折に、多少の補充をしておきたい。



中庄団地周辺

2. 共同住宅は「住戸の集合」として集合の論理が先行しがちである。勿論そのことは重要である。しかし、集合の基本となる「住居」に対するアプローチがまず基本に存在すべきではないだろうか。第2期の設計者として推薦した阿部勤氏には秀れた自邸の設計がある。それは設計の根元である住居の型のひとつを示すものとして評価される。共同住宅において、原型である住宅を核としながら、町としての恒久性(建築の寿命、そして変化のゆるい定住環境)をいかに獲得していくか期待したいところである。

3. 昭和30年代の建設とは異なり、現代の集合住宅は50年、100年の永い寿命を保つであろう。これに対して、ユニットを構成する住居は将来拡張のための方法を保有することも恒久性に対するひとつの考え方である。

4. 植栽

一般に岡山の土壌は真砂又は粘土質で、そのままでは植栽に適さない。従って樹種の選定と客土の仕様については、十分に専門家と相談する必要がある。

□県営中庄団地も第2期が計画される段階になると、周辺に対して次第に影響を与えるようになってきた。丹田悦

雄の担当する第1期が入居者に評判がよいということも好ましい支持を得る結果になった。六間川の護岸改修による修景計画が倉敷市の土木部によって行われ、隣接する市営住宅や川鉄住宅の建替も促進されるという動きが出てきた。強い波及効果をもつということは都市環境を創る上での要諦である。これら周辺の諸プロジェクトがCTO計画として進められることを期待している。(岡田)

第3期

□中庄団地の建替計画も第3期となると、周縁地区への波及がみられるようになる。第3期と第4期の敷地にかけて数軒の商店があるが、これを全体の建替計画に取り込もうという動きがみられるようになった。等価交換による再開発手法によって中庄団地計画に組み込むことが考えられる。都市創りの手法が波及効果を及ぼし範囲を拡げていくことは好ましいことと考える。さらに、隣接する倉敷市営団地や川崎製鉄住宅の建替による再開発が話題になりつつある。このように波及が拡まっていくことを期待している。(岡田)

岡山県営中庄団地建替第1期

丹田悦雄・空間工房+（協）岡山県設計技術センター

Okayama Prefectural Nakasho Housing Reconstruction, Phase I

Etsuo Tanda・Architect Office KUKAN+

Okayamaken Sekkei Gijyutsu Center

クリエイティブTown岡山

地域文化を生態的に見直して地域の特性を創出しようとするクリエイティブTOWN岡山第1号として岡田新一コミッショナーは、県営中庄団地建替にあたって4期に分割することを提示された。その第1期が竣工、完成が近づく2期の後を受けた3期の計画がすでに進行している。異なるアイデンティティの地区が連結して、相互補完をする。住宅地から地域へと時間をずらしながら計画を少しずつ拡げていくという中継的役割をもつものである。すでにその反応が見られる。現在、隣接する市営住宅の建替え、市道や河川の改修など、コミッショナーをはじめ、関係者がそうした動きをすすめているところでもある。

したがって計画の命題は相隣および地区を超えた他の地区との関係性が特に求められる。そのため地区の「らしさ」の形態とその特異点の連続性は、機能的で合理的な方法による秩序づけとは別の次元にもとづく流動的な多様体に見えてくる。

ここではリニアとグリッドという複数の幾何学的な相を仮説して、堀や柵、ベンチあるいは築山等の中間体——サブモチーフ群の微少建築を住戸のバリアとして交錯させる。その場に鋭敏で複雑に反応する人の行動にとってそれは定量的に処理されがちな生活領域を超えて、かつ構築性よりも不規則な不安定性が空間と身近な生活の諸活動との相互作用によってふさわしいと考えられること。そのようなセミパブリックスペースを伝導体のように流動、変容させ得たのは、以上のような過程の計画にとって「完結しない秩序感」として説明できる。（丹田悦雄）



リニア棟東立面図 S=1:1500

北立面図



リニア棟西立面図 S=1:1500

南立面図



配置図 S=1:1500

所在地：岡山県倉敷市中庄138-2

主要用途：共同住宅

施工：山陽工務店、山室建設、三宅建設、大森工務店、赤木建設、奥村建設、山本建設、大森建設

敷地面積：11,910.74㎡

建築面積：3,144.78㎡

延床面積：7,189.02㎡

構造：鉄筋コンクリート壁式構造

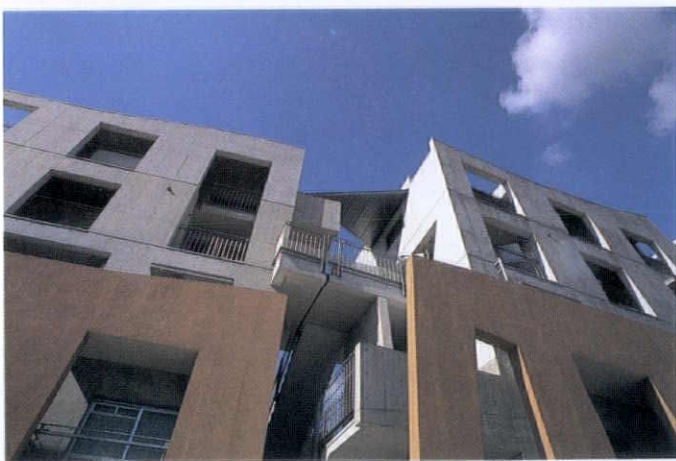
規模：1号棟（リニア）：地上5階、2-9号棟：

地上1-3階

竣工：1993年12月

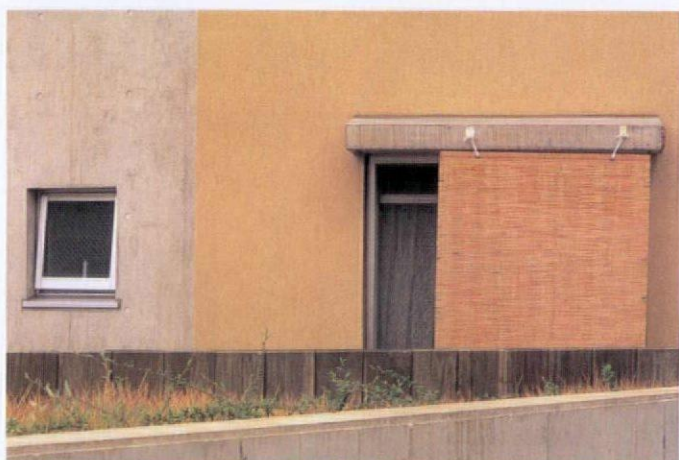
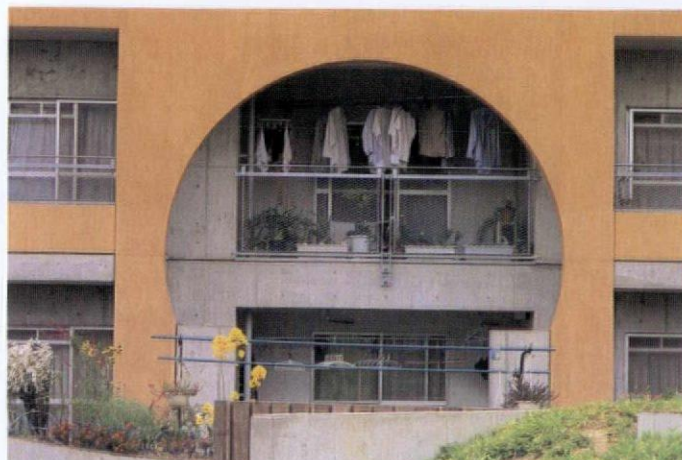
SD9601

60







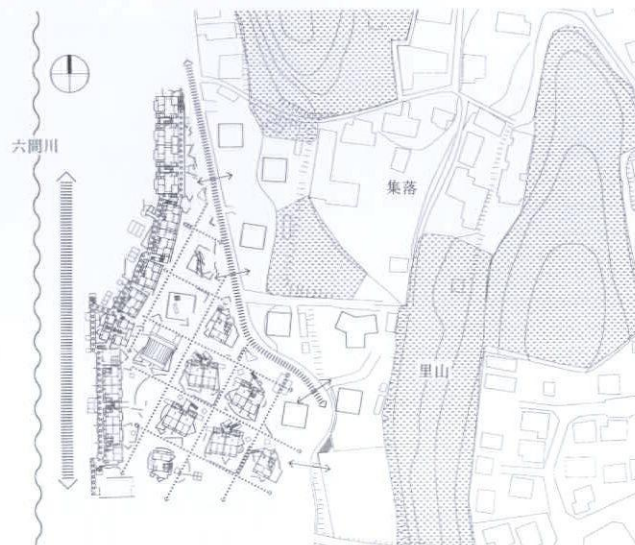




地図

このあたりは倉敷の市街地から岡山に向かう田園地帯にあり、二つの異なる中心が引き合うステレオ効果によって人工と自然、都市と田園のバランスがなんとか保たれているところである。都心への通勤可能な周辺部でもあつ

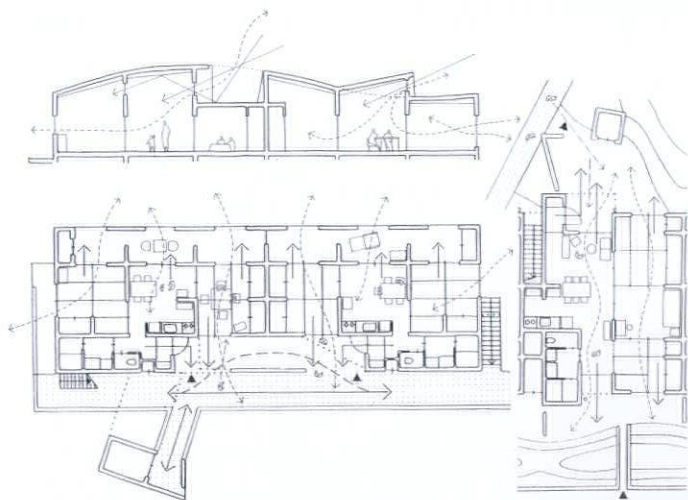
て、日本的な風景である里山集落が温存されている。おだやかな瀬戸内の気候と山なみを背にした好ましい人口密度と分布を以てて緑豊かな住み良い地帯ということが出来る。



住棟

倉敷の西側に沿って予定されている都市計画道路、及び倉敷の市街を望むそのスケールに対して、南北に線状の立体的な空中歩廊をもった住棟を配置し

て都市的な楽しさをつくりだした。背面の東側には里山集落の風景と一体化させるために小さな独立型の住棟が群島状にばらまかれている。



住戸

雑多な問題群を整理し、まとめるときの視点が住戸プランを特徴づけることになる。

1.生活感のくあふれ出しが住戸廻りにこまやかな風景をつくること。2.ここでは形態的な特徴であるく広場ーアルコーブ型によって住み手自身が自由に工夫しながら室内風景の創出ができること。3.上のふたつを重ね合わせ

るように戸口へのアクセスとく生活の開放の方向を一致させること。

以上は、セミパブリックスペースの計画上の限界である単調な形式化という困難を避けながら、そこに住み込む方途として、身近な日常性から微かにたちあらわれてくる生活の感情が、その場に響いてくることを考えた。



微小建築群

かつて木造住宅があったときのように住み手による菜園と草花が庭先に植えられている。この住戸まわりの通路は、散歩みちのようにネットワークを発生させて新旧の分断を防いでいる。その部分を計画上は身近な生活領域のための「庭」として二項対立的なパブリックとプライベートなスペースとを融合させたセミパブリックスペースが強く提案されている。

所在地：岡山県倉敷市中庄138-2

主要用途：共同住宅

施工：山陽工務店、山室建設、三宅建設、大森工務店、赤木建設、奥村建設、山本建設、大森建設

敷地面積：11,910.74㎡

建築面積：3,144.78㎡

延床面積：7,189.02

構造：鉄筋コンクリート壁式構造

規模：1号棟(リニア)：地上5階/2-9号棟：地上1-3階

竣工：1993年12月

岡山県営中庄団地建替第2期

阿部勤／アルテック建築研究所十(協) 岡山県設計技術センター

Okayama Prefectural Nakasho Housing Reconstruction, Phase II

Tsutomu Abe/ARTEC, Architects and Associates+

Okayamaken Sekkei Gijyutsu Center

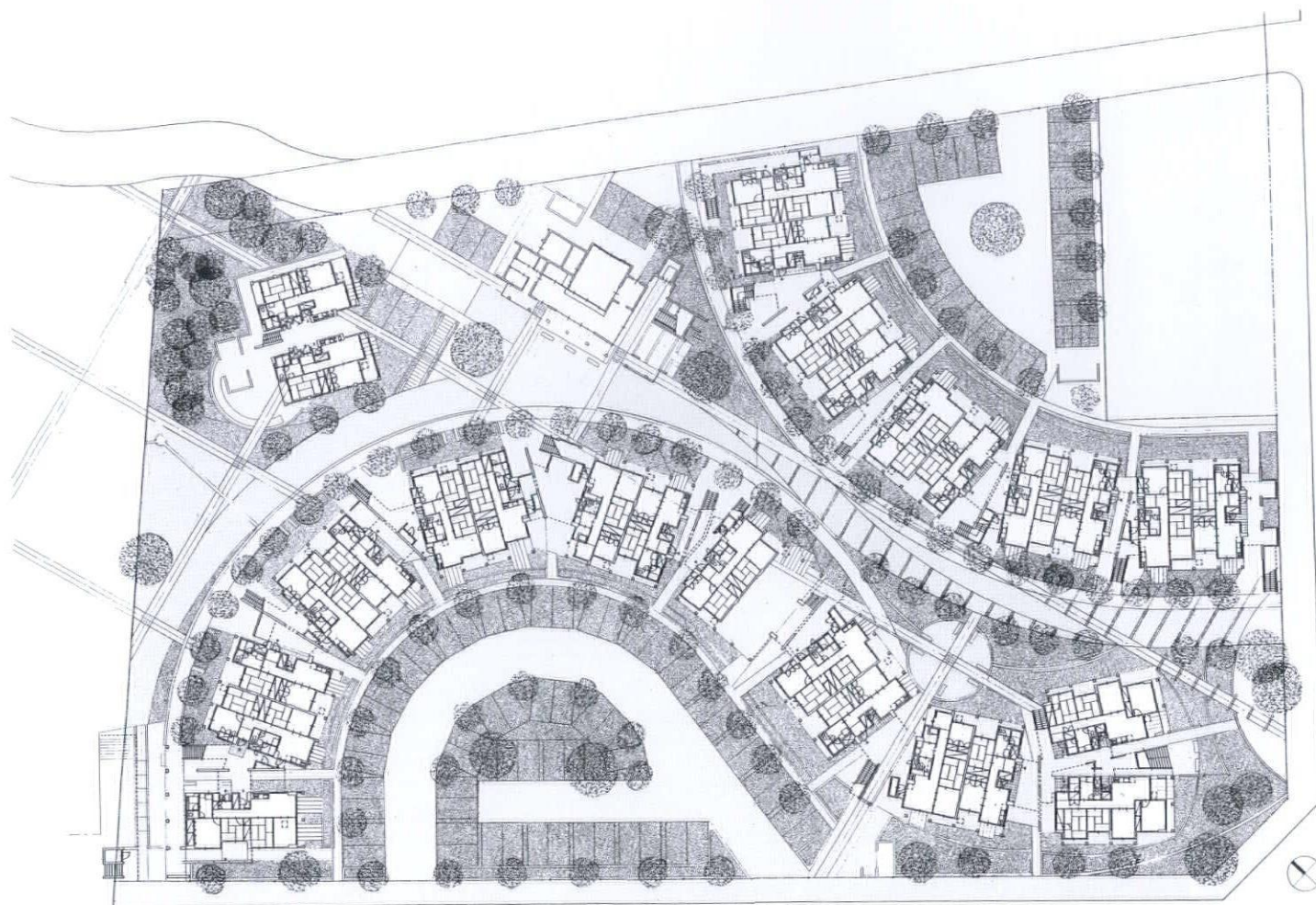
クリエィティブタウン岡山

このプロジェクトの最大の特徴は、1期から4期までの設計者が決まっており、それが時間的・空間的に直列につながることである。いわば団体競技で、さしずめ2人3脚の駅伝といったところである。岡田コミッションからキーセンテンスという形で全体を通しての大きな指針が提示された。そして全走者が集まりミーティングが行なわれ、第1走者が丹田さんからスタートしたわけである。この第1走者が適役で、精力的に走って山積みする諸問題を解決し、大きな流れを作ってくれたので、それを受けて第2期は地域の道に詳しいやなぎ建築設計事務所（岡山県設計技術センター）とのJ.V.という形でスタートした。この様な設計方式は1期から4期まで何人もの設計者が関わりを持ち各区分で良い記録を出しつつ、トータルとしても良い結果を残さなくてはならないので、各期毎の受け渡しをいかにやるかという事が重要となる。また、その事は前後の関係にとどまらず、中庄、倉敷、岡山といった地域といかにすり合わせ、環境をつくってゆくかにつながり、非常に興味深いことであった。この様な設計方式であることから、このプロジェクトでは「流れ」を大切に設計した。

1期からの流れとして大きく3つある。南北に走るリニア1棟とその中間階を走るペデストリアンデッキ、それに東の丘の中庄の里から既存並びに1期のポイント棟に周辺に拡がるランドモジュールの空間である。まず1期のリニア棟の流れは、2期の西棟とし大きく駐車場を囲みながら半円を描いて3期へとつながり、ポイント棟の点在する空間は、東側の既存棟の流れから1/4の円を描き3期へとつながる東棟の流れと、前述の西棟の流れの間に2期のポイント棟、センター棟を包含しつつ絞ぼり込まれた。キーセンテンスである、セミプライベートスペース、セミパブリックスペースとしての「内」をつくりながら、3期へとつながる。東西棟の3階には1期のペデストリアンデッキが路地状の空間となり、これも生活のにじみ出た「内」をつくりつつ、県道を橋で越え、3期へとつながる。2期では高齢者対応というテーマに沿って、接地感ある低層におさえ、6戸1棟の連鎖という形を取り、中庄の里の風景になじむスケールおよびイメージとした。材料、ディテールに関しても、1期や中庄の里から拾い集め、それに2期独自のものを重ね、3期へと託している。

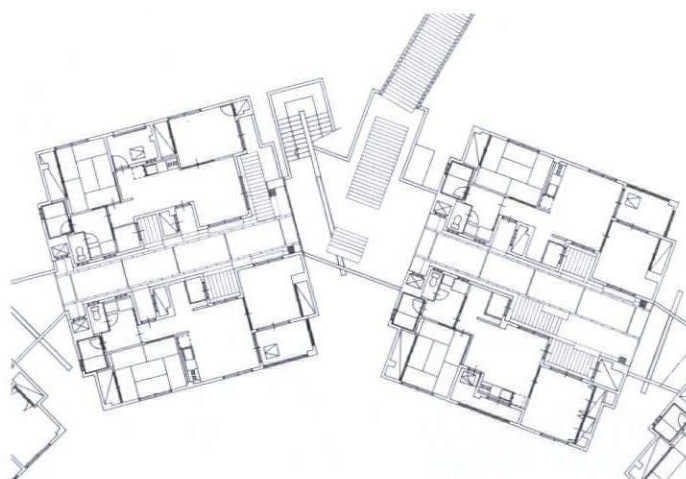
(阿部勤)



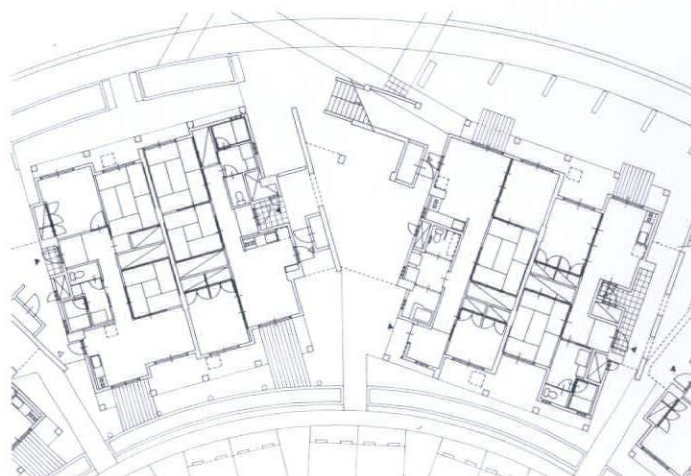


1階平面図・配置図 S=1:800

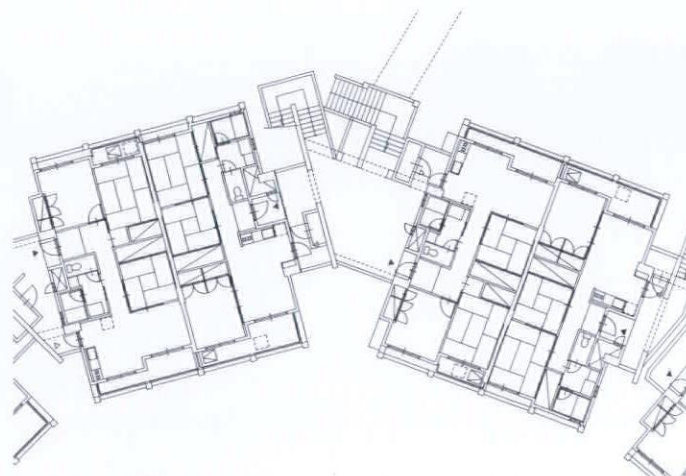
所在地：岡山県倉敷市中庄団地4番
 主要用途：共同住宅
 構造設計：(協)岡山県設計技術センター、
 (株)田中義吉設計事務所
 施工：第1工区：(株)大森工務店／
 第2工区：目黒建設(株)／第3工区：(有)風早興
 業／第4工区：(株)藤井組／第5工区：大嘉建設
 (株)／第6工区：仁熊建設(株)
 敷地面積：11,631.63㎡
 建築面積：3,415.19㎡
 延床面積：6,565.52㎡
 主要構造：鉄筋コンクリート造
 規模：地上3階(一部4階)
 竣工：1996年1月



3階平面図 S=1:400



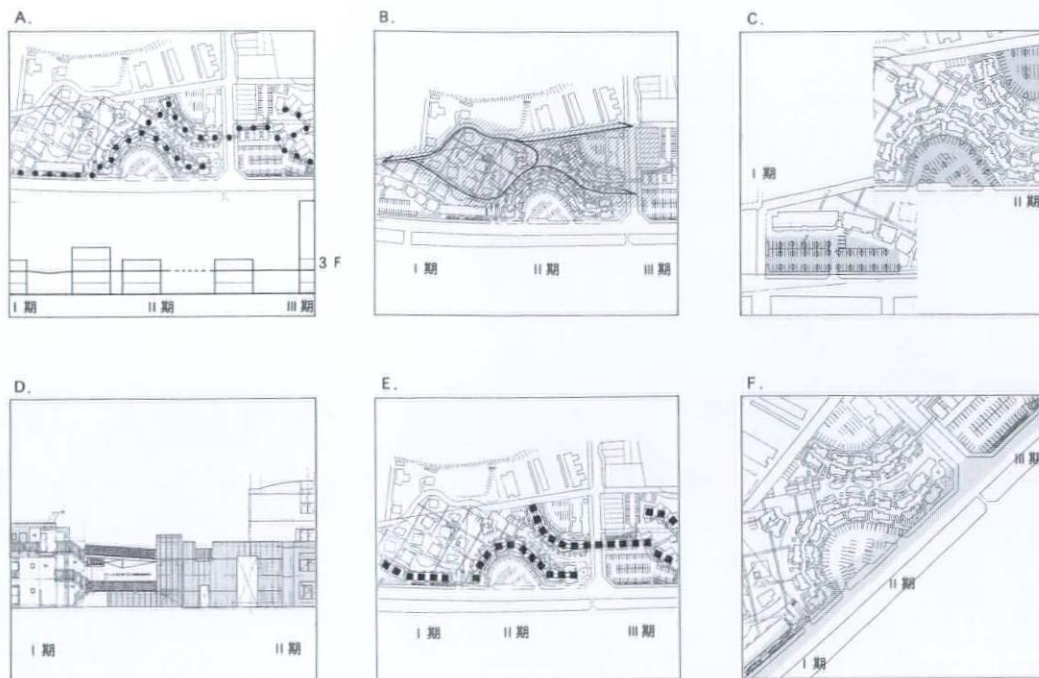
1階平面図 S=1:400



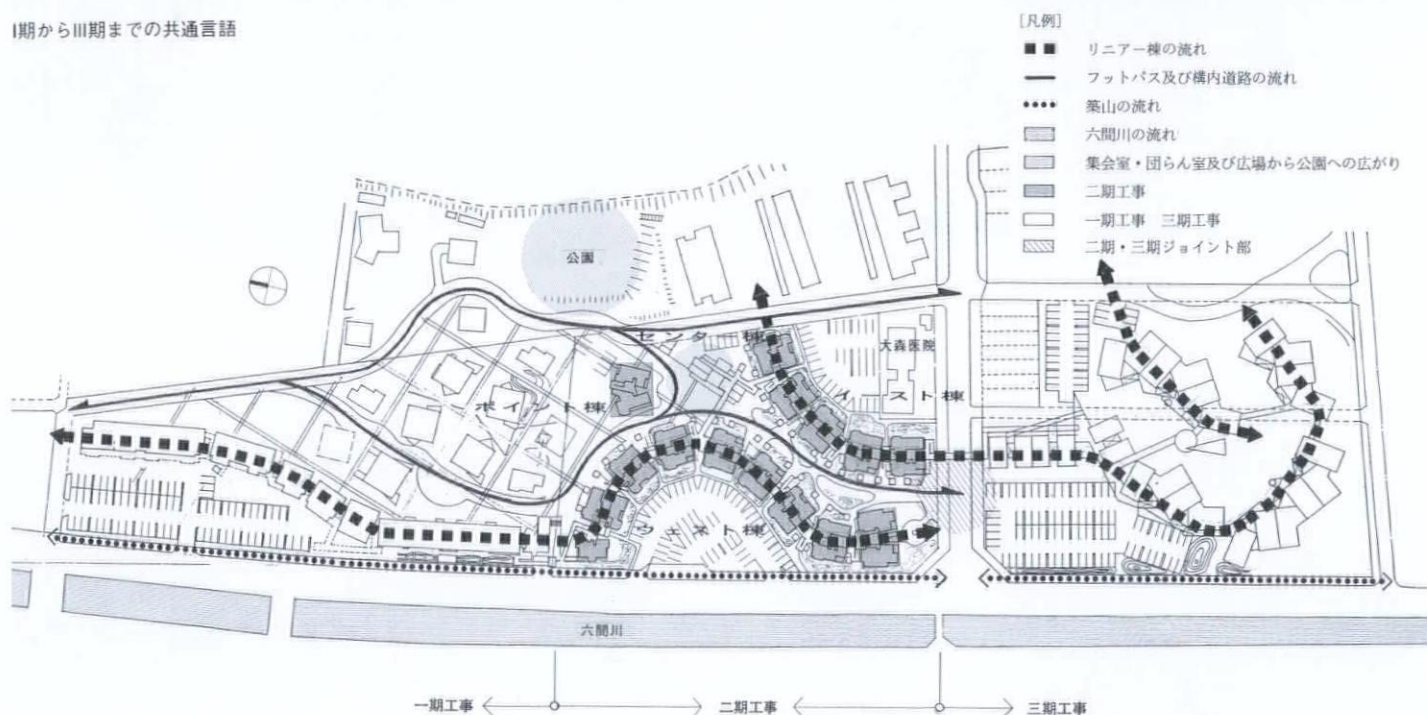
2階平面図 S=1:400

I期からIII期までの流れ

- A. 三階レベルペDESTリアンデッキ
- B. 団地内道路の線形
セミプライベート・セミパブリック空間
- C. 駐車場の植樹
- D. コンクリート打放し
- E. リニアー棟の流れ
- F. 西側市道沿の築山

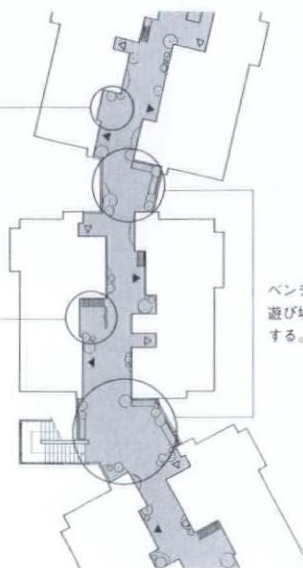


I期からIII期までの共通言語



3階ペDESTリアンデッキの提案

鉢植え、プランターなどが置けるスペース、玄関脇の専用テラスとして利用できる住戸にとってペDESTリアンデッキからの緩衝帯となっている。



- [凡例]
- ▲ 玄関
- △ サービス出口

ベンチ等を配置し、子供の遊び場や人々の交流の場とする。

3階に地盤面と同じような路地を作ることで準接地性を高める。センター棟にエレベータを備え、ペDESTリアンデッキにアクセスする。路地の空間-ペDESTリアンデッキに面して、セミプライベートスペースを設け、路地に変化をつけると共に、住戸のプライバシーを確保する。屋根は勾配屋根として路地に変化を与え、また、テラスへの採光を考慮する。

キーセンテンス

玉島北地区にいくつかのプロジエクトが計画されている。それらを関連させ総合させて「CTOプロジエクト」としてはどうか。

1. 玉島北中学移転

敷地環境:

南側の水路をどう関係させるか。

問題点:

(1) 跡地利用の方法

(2) 新校舎は21世紀における新しい教育施設として計画される必要がある。

構想チーム:

新しい教育施設の設計を始めるにあたっては専門家の検討チームを構成する事が好ましい。

2. 玉島北中-新倉敷駅間の道路景観
主街路の景観を考える。

(1) エッジのデザイン。

(2) 幹線道路に並木を考える。

3. 作陽学園計画

キャンパスの構想に合わせた敷地造成を行ったらどうか。たんに敷地を平坦にならすのではなく自然のアンデューレーションのなかに建物群を嵌め込むことは可能であろう。

4. 住宅A,B,C

地形の文脈をみながら、自然地形(非造

成型)の住宅敷地手法を導入したい。それによって、既成市街地から眺望される斜面の緑を「景観化」するだけでなく、市街地近傍で自然との共生感にあふれた優れた住環境を提供するだろう。

5. 既存集落の環境

落ち着いた定住的既存集落に対してはその良さが保たれ持続するような指導を行う。

6. 県道の景観整備

町並の形成指導:

県道には商業施設が進出するであろう。景観に組み込まれるよう指導する必要がある。

道路景観デザイン:

公園、遊歩道などを含めて。また、通学路を兼ねる駅近傍の線路は歩行者を考慮した断面形をとるなどのデザインがなされるべきであろう。

7. 給水塔

玉島北地区のシンボルとしてデザインされるとよいだろう。

8. 現玉島北中跡地計画

跡地を何に利用するかは、この地区の将来の発展に対して影響を与える事になるだろう。

9. 新倉敷駅前地区

区画整理されて久しいが未だ建設のポ

作陽学園倉敷キャンパス

倉敷市西部研究学園地区給水塔

倉敷市立玉島北中学校

Sakuyo Academy Kurashi Campus

Western Kurashiki-City Research & Campus Zone,

Water Supply Tower

Kurashiki City Tamashima-Kita Junior High School

テンションが低く、中心核を形成するに至っていない。今後は玉島北地区に施設計画が進み、駅前も建設のポテンシャルが上向いてくるであろう。その時期を迎える前に駅前地区のデザイン方針をたて、建設に対する景観コントロールを行う必要があると考える。

10. 地区内の媒域のデザイン

プロジェクトを差引いた

残りの地の部分——媒域のデザインは重要である。小路、小公園、小さな憩いの場、池等であるが、それら見過されがちな「媒域」に対しても都市整備の細やかな手が入ることが好ましい。このような一歩したことによって、定住環境としての落ち着きと豊かさが表現されるからである。最終的には落ち着いた定住環境を目標としたい。

11. 緑のデザイン

丘陵部分の開発によって、現在の山麓の植生の質を高め、地域の中により質の高い緑の拠点を創り出すようなことを考えたい。そのためには、造成にあたってできるだけ擁壁を用いない、法面を自然化する(ラウンディング、植林など)、比較的自然度の高い斜面は保全する、新たな宅地と残存山林との間を連続させる(密度的にも土地利用的にも動線的にも、割然と区分けしないでグランジュエーションを施す)などの工夫が必要である。

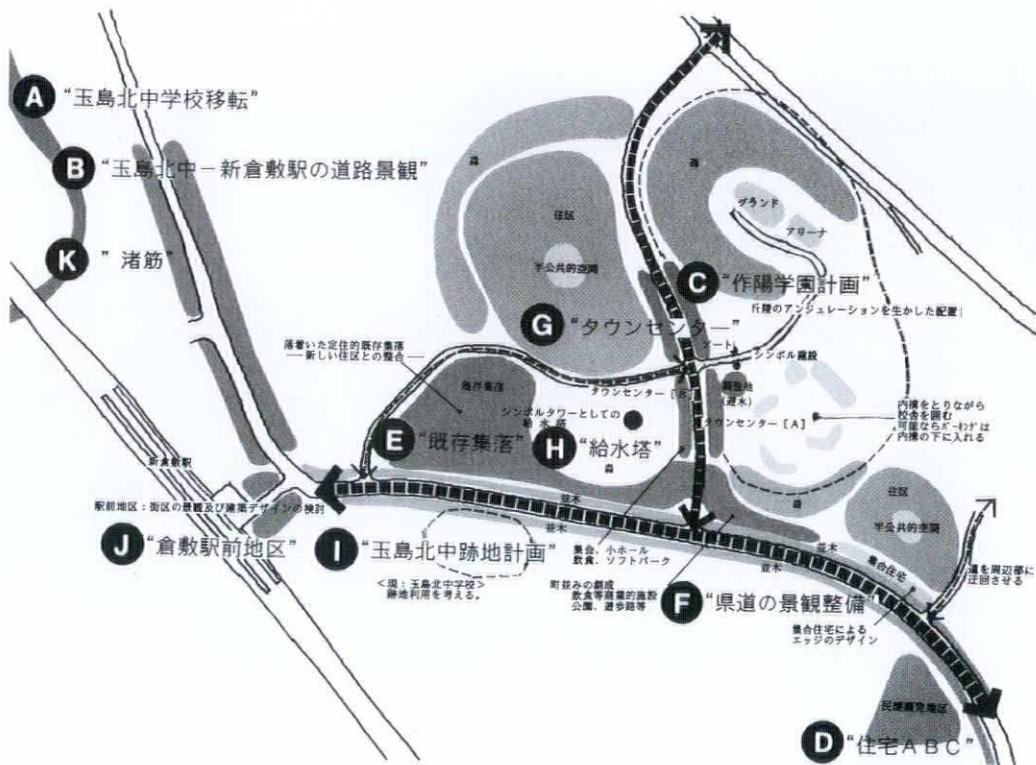
同時に、市街地内における新たな緑のネットワークの形成にも寄与できるような土地利用形態に配慮すること。既存集落の環境、県道沿道の景観形成、玉島北中学校の移転跡地の土地利用形態などは、そのシナリオの中にも位置付けられるように。

12. 機能の複合と融合

新たに導入される様々な機能、施設が、今後の長年にわたる街の形成過程でうまく「使い込まれて」いくような仕組みがほしい。そのためには、それぞれの機能の複合化、融合を大きな目標とすべきである。

□玉島北中学校移転に関しての相談があったことを契機としてヒヤリングを行ったところ、新倉敷周辺に数多くのプロジェクトがそれぞれ担当部所を異にして立案されていることが判った。それならば、諸計画を総合して「都市創り」としてまとめるべきではないか……という議論を市当局と行い、新倉敷周辺都市構想をCTOに乗せることになった。

そのなかで、とくに、土木部の所管する道路、水路、給水塔、等のインフラと、その上に建てられる建築とを共にCTOに乗せて都市としての調和をはかることを主眼と考えた。中央官庁を含めて、これからの都市創りや国土創りに関して大いに問題とされるべきことであろう。(岡田)



コミッショナー・キーセンテンスを受けた基本構想の提案

- A: 玉島北中学校
B: 数倉金光線
C: 学園地区
D: 低密度戸建て住宅地（自然地形住宅）
E: 既存集落
F: 県道の景観整備
G: 戸建て住宅
H: 給水塔公園
I: 文化施設
J: 駅前商業業務系市街地
K: 清筋

玉島北地区は、山陽新幹線新倉敷駅の北側一帯に展開する地区。これまでは開発が進まず、水田と桃畑を中心とした農村集落であった。この丘陵部に作陽学園大学の立地が決定したことを受けて、倉敷市の第4次総合計画に基づく「研究学園地区」としての地域整備を進めることとなり、大学キャンパスの整備をはじめ、玉島北中学校の移転、県道倉敷金光線の改良、給水塔の建設など、様々な都市整備プロジェクトが集中することとなった。基本構想は前頁のキーセンテンスを受けて、これら

の動向を「研究学園地区」として総合化していくためのガイドラインを、より具体的に提案したものである。7つの基本方針と15の土地利用方針を提示したうえで、「ネットワーク計画」「水郷計画」「学びの森計画」などの、各プロジェクトを横断する新たなキーコンセプトを提案した。その内容は法的にも行政的にもオーソライズされたものではないが、計画調整のプロセスの中で各プロジェクトに反映されている。

(松波龍一)

作陽学園倉敷キャンパス

吉村順三／吉村順三設計事務所

Sakuyo Academy Kurashiki Campus
Junzo Yoshimura Architect

1. 敷地計画

県道より正門まで12mの高低差があるため、学生のために幅8mのゆるい階段を、また左側からは来客のために車路を設けた。正門より中央広場迄は幅10m程のゆるいスロープで導かれている。

中央広場（70m×120m）右側中央に3号館（講堂）、広場中央左右に1号館、2号館と前面に池を配した7号館（学生食堂、学生会室等）が置かれ、その右側に4号館（練習棟）を配置した。

敷地の一段下がった左上に駐車場と自転車置き場、右側に体育施設を配置した。中央広場周辺は歩行者専用とし、メンテナンス道路は建物の外側に設け、人と車は完全に分けられる。

2. 建物内部計画

明るく、清潔でわかりやすい建物とする。

3号館は450席程で天井高が最高16mあり、ステージの右側にはパイプオルガンを設置する。1号館の左側管理部門が3階建、中央講義室、レッスン室、研究室が5階建、右側2号館を4階建とし、中央にはシンボルとしての塔を設け、新幹線新倉敷の駅より良く見える位置に配置した。

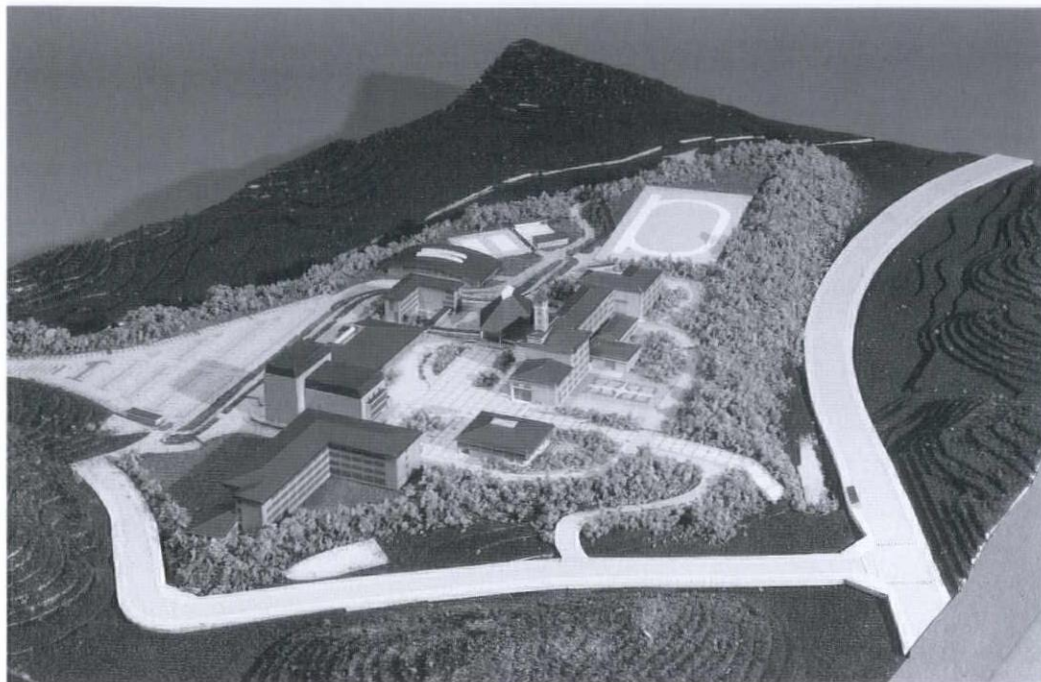
また中央左側にはエレベーターを配置し、身障者用とした。講義室、レッスン室、研究室の各階には学生が憩えるロビーを設けてある。7号館は静けさと明るい大空間とし、広場側には大きな開口と広いテラス、及び池を設け、憩える場所とした。

3. 設備計画

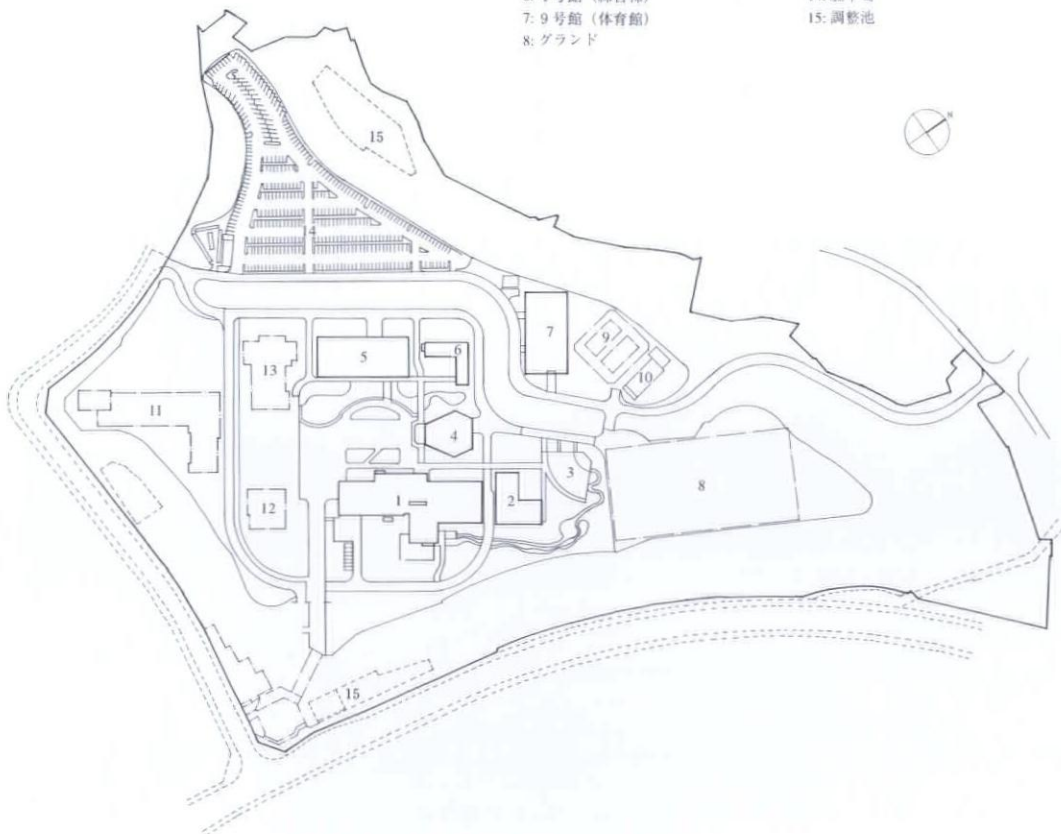
電気設備に関しては、6.6KVの高圧受電で1号館（本館）地下にメインの電気室を設け、7号館（学生会館）、9号館（体育館）にそれぞれサブ変電室を設ける。また非常用電源としては300KV程の発電機を1号館地下に設置。空調設備のメイン冷温水機は1号館と7号館に設置して、各建物の冷暖房を行なう。

中央広場内には設備用の共同溝（主に電気、電話、給水）を設け、将来のメンテナンスの対応を可能にする。

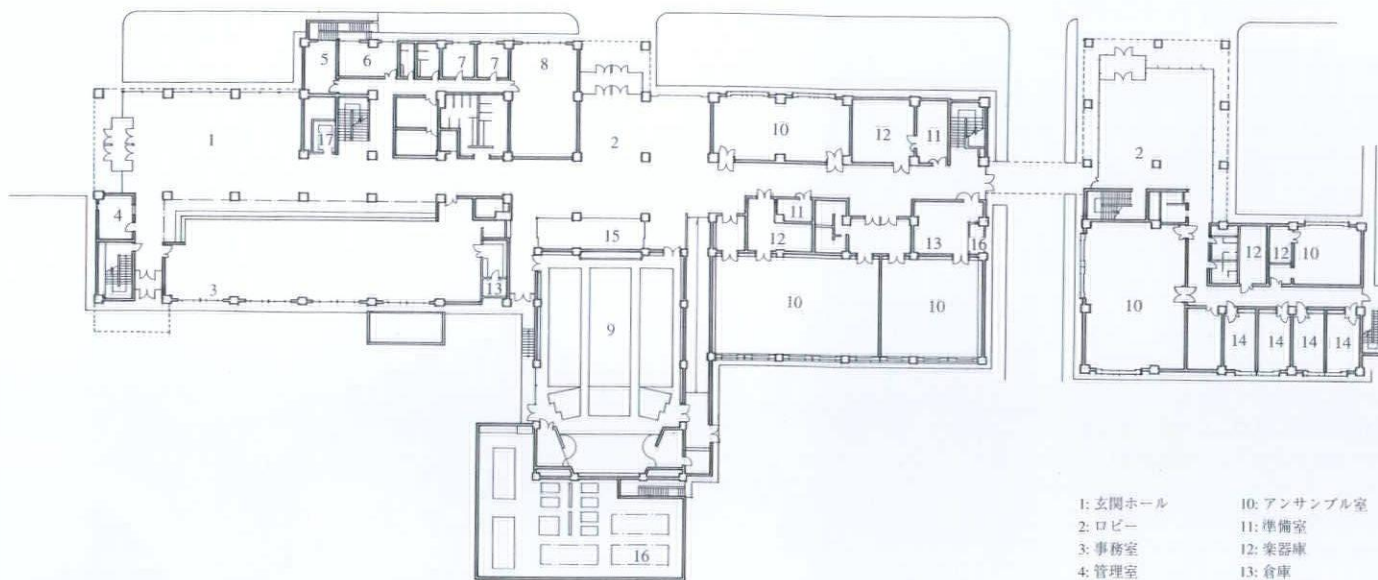
（大野 寛）



- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1: 1号館（本館・音楽館I） | 9: テニスコート |
| 2: 2号館（音楽館II） | 10: 弓道場 |
| 3: 屋外音楽堂 | 11: 新設学部館I・II（増築予定部分） |
| 4: 3号館（聖徳殿） | 12: 図書館（増築予定部分） |
| 5: 7号館（学生会館） | 13: 増築予定部分 |
| 6: 4号館（練習棟） | 14: 駐車場 |
| 7: 9号館（体育館） | 15: 調整池 |
| 8: グランド | |



配置図 S=1:5000



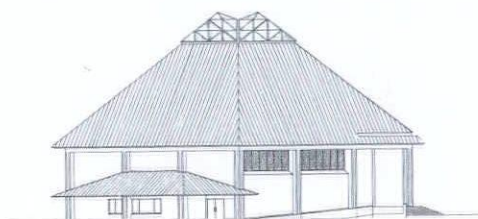
1号館・2号館1階平面図

- | | |
|----------|-------------|
| 1: 玄関ホール | 10: アンサンブル室 |
| 2: ロビー | 11: 準備室 |
| 3: 事務室 | 12: 楽器庫 |
| 4: 管理室 | 13: 倉庫 |
| 5: 印刷室 | 14: レッスン室 |
| 6: 電算室 | 15: 中庭 |
| 7: ロッカー室 | 16: 屋外機置場 |
| 8: 資料室 | 17: エレベーター |
| 9: 大講義室 | 18: トイレ |



1号館・2号館南立面図 S=1: 800

所在地：岡山県倉敷市玉島長尾3515
 主要用途：大学
 構造設計：(株)大澤構造設計事務所
 施工：五洋建設株式会社、アイサワ工業株式会社、戸田建設株式会社
 敷地面積：160,038m²
 建築面積：9,339.30m²
 延床面積：19,158.87m²
 主要構造：RC造
 規模：地下1階、地上5階
 竣工：1996年3月予定



3号館西立面図 S=1: 800



7号館南立面図 S=1: 800



9号館北立面図 S=1: 800



4号館南立面図 S=1: 800

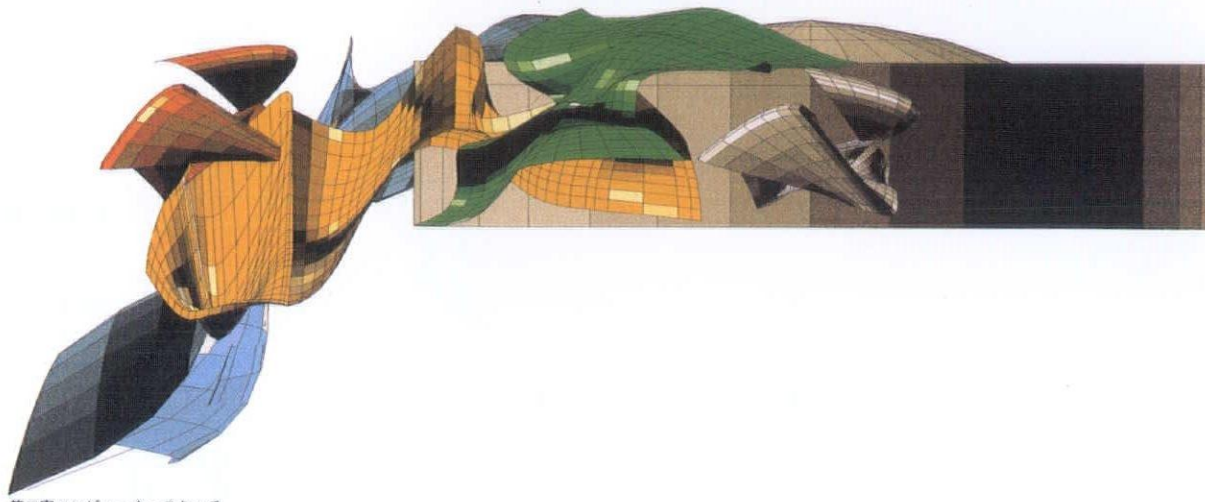
電子の壁 (倉敷市西部研究学園地区給水塔)

浜田邦裕

The Electronic Fold

(Western Kurashiki City Research & Campus Zone, Water Supply Tower)

Kunihiro Hamada



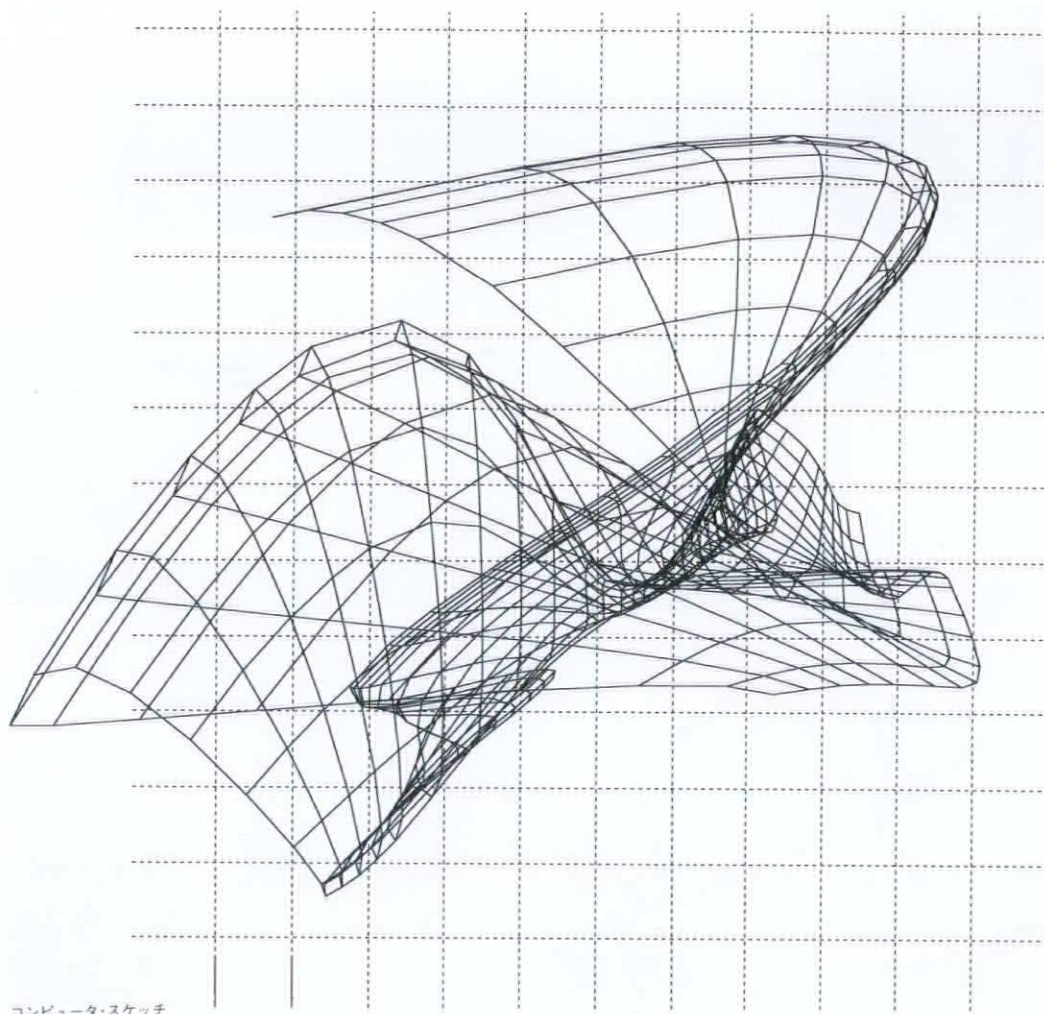
第二案コンピュータ・スケッチ

「電子の壁」＝ねじれた境界線

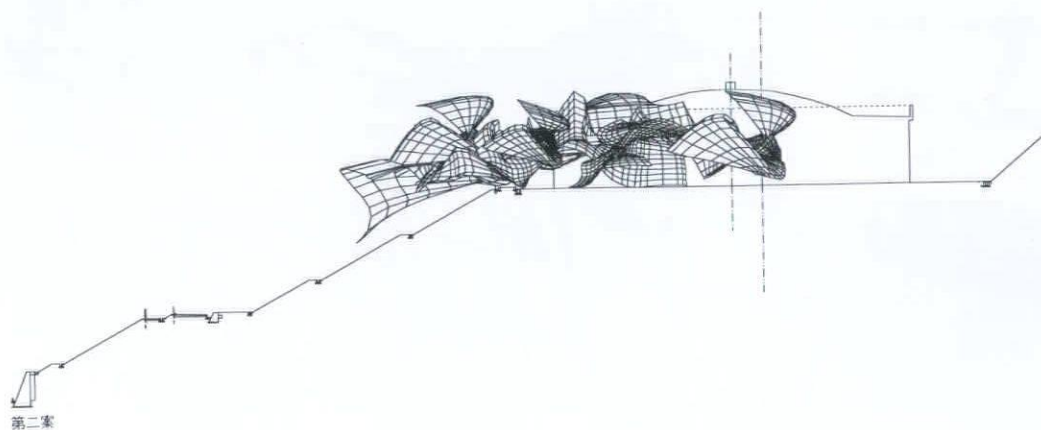
「情報」とは、茫漠とした概念だ。人間の身体のような物質ですら、遺伝情報という視点をとれば「情報」であることは間違いない。つかみどころのない情報の非物質性が、はるかに堅固そうな物質的モニュメンタリティーを崩す強さを持ちうることは概ね了承できるが、実際に表現をする媒体が物質である以上、非物質性の強さや面白さを物質的に固着させようとする行為は矛盾に満ちている。いかようにも視覚的な姿形を変化させようとする非物質性の利点は、映画のスチール写真のように静的な物質に落とされた途端にまったく異なるものとなり、それまでとは異なる時間進行のなかで変化を経験していく。芸術的営為では、形而上学的な概念は様々な物理的な媒体に翻訳されるのではなく、表現され、再び概念化していくが、モニュメントをなにかしらの観念を物質的に表現するものだと考えると、実際の効果は作者の意図とは反してしまうことが多い。モニュメントはセマンティクスの色合いの強い構造物だが、しょせんは差異をもとにした等価な物質であり、それ以上でも以下でもなく、特定の象徴的観念を結びつけようとするのは無理な相談なのである。

作品「電子の壁」はカテゴリーカルにはモニュメントと分類される。しかしその機能は、およそ古典的なモニュメントを想像していた人にとっては理解できないものであろう。もともとは新幹線の駅前にある小高い山の頂上にできるタンク状の土木構造物を視覚的にカバー・アップする役割と大規模に開発





コンピュータ・スケッチ



第二案

されるであろう場所に住む人にとてのランドマークとしての機能をもつ物体が基本的に求められていた。幸いなことに何かを記念する必要はなかったし、記念すべきものは何もなかったといっても非難は受けないであろう。モニュメントは過ぎ去った出来事を対象にしていることが多く、将来を対象にするモニュメントにしばしば付け加え

られるような物語性は縁がなく、築造されてからの変化のみがそのセマンティクスを変容させる。

ゆるやかな起伏が続く丘陵地である敷地周囲のランドスケープを見たとき、読み取るべき特別なコンテクストは少ない。そうした山の上に特別の機能を持たない人工物を置く意味など特にないとすら感じられる。さて、今回

のコンテクストもやはり、人工物から与えられることとなった。必ずしも望ましいことではないが、特徴に乏しいゆるやかな丘陵は、タンクという人工物とそれを設置するためになされた山の頂部の切除という操作によって特徴づけられた。タンクは通常の視点からは巨大な帯として目に入る。タンクはごく当たり前の円柱形をしており、美

しくも醜くもない、ただ風景に介入した物体である。これもランドマークにならないとはいき切れない。したがって、美観としては普通、邪魔なものとして扱われるタンクは、私のなかではすでにモニュメントの一部となり、緑の山肌にまわされた白い帯であり、切除され変形した山の頂部、白い帯状の構造物は新たなランドスケープなのである。

私がその上につけ加えたのは、意味論的な用意をされたオブジェクトではなく、それを少しだけ不確定にするための部品である。ランドスケープは視覚的な「重ね合わせ」の所産なのである。非物質の世界であれば、文字通り様々な変容の操作を加えていくのも容易だが、物質化した世界では特別な工夫をつけ加えないかぎり経年変化以外の変化を期待することはできない。ならば、見る人が移動することによって、像が変化することを期待する以外に方法はなからう。「電子の壁」は正面とか裏とかいった特定の向きを持っていない。見る人が様々な位置から見ることによって、切除された山頂と白い大きな帯でつくるランドスケープを変化させる、視覚的な仕掛けである。「壁」というのは面白い言葉である。必ずしもドゥルーズの使うような意味での壁ではないが、折り畳むことと折り畳まれたものとの関係には、空間論を拡張させるための大きな暗示が含まれているはずである。「電子の壁」は、この「壁」に大きくアイディアの骨格を負っている。様々に切れて、ちぎれた巨大な布切れ。視覚的に、白い巨大な帯を切断しようとする、散乱したガラス片が本来のねらいでもある。モニュメントは、背後の白い壁を文節するために、ちぎれて飛んでいく布片である。形態としては補助線によって、面を生み出すことが基本的な意図だった。初期のスケッチは、技術的な複雑さとの調整のなかで部材を簡素化していったが、あちこちで面をつくっていることは変わりがない。

モニュメントは朽ちていくのが望ましい。廃墟に対するノスタルジーではなく、ランドスケープへの介入が再びランドスケープ化するモメントが必要なのである。

(浜田邦裕)

創作は外見から見た複雑さに反してきわめて容易であった。ヴァーチャル・クレイ（電子の粘土）とよばれる手法を用いることで、ただの平面を何枚か用意し、それを分割し、ノードをつまみ上げ、ひねることによって際限もなく複雑な形態を完全に三次元の世界で作ることができる。

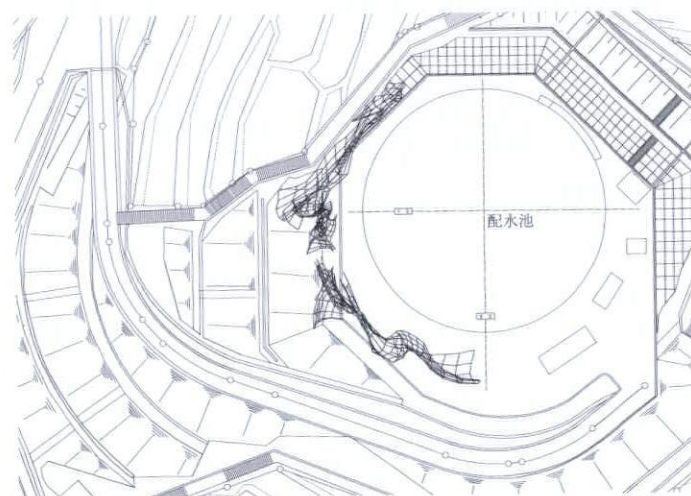
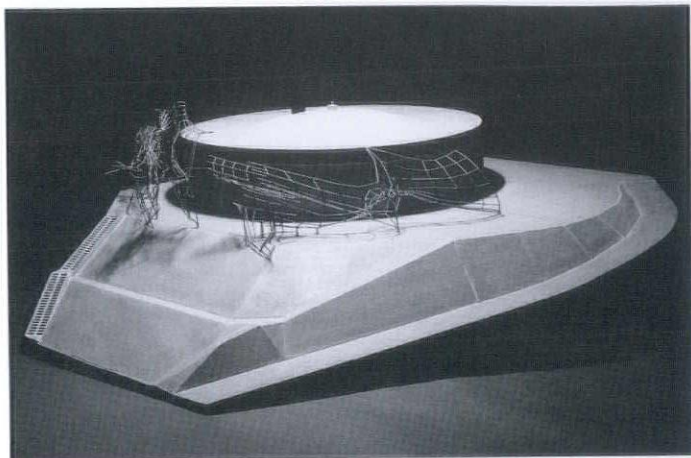
スタディー模型や鉛筆でのスケッチを使ってはおそらく手に入らない形を、この手法は与えてくれる。構造的な検討を加えるためには、コンピューター・スケッチで用いていたデジ

タル・データが直接利用可能となる。

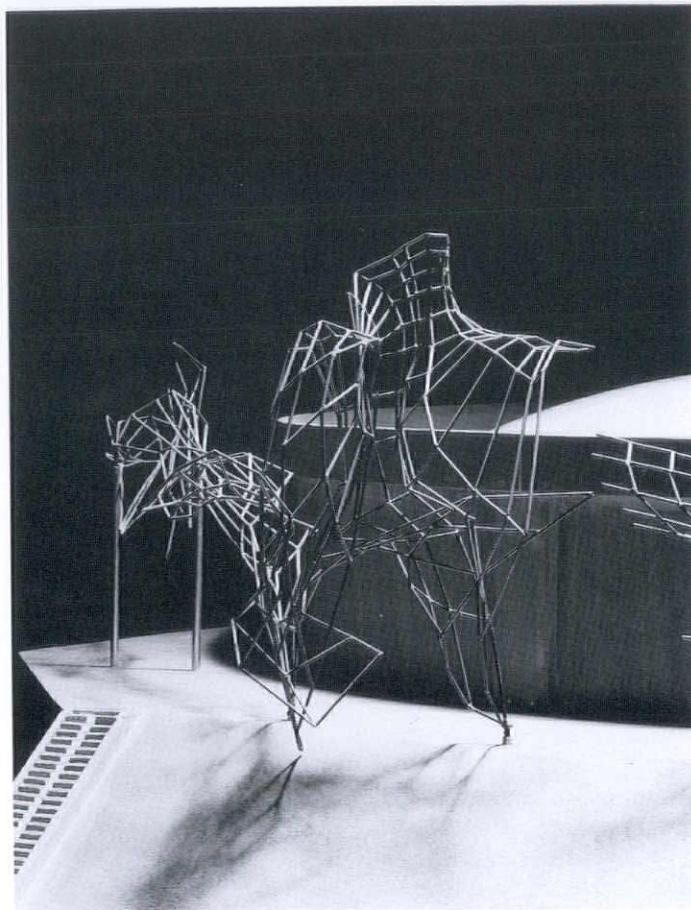
面白いのはこのデジタル情報を縮小模型のようなアナログ情報に移し替えるときに生じる困難さである。コンピューターの中でいとも簡単に扱えていたはずの情報は細いパイプで組み上げようとしたとき、再現はとんでもなく難しくなる。形そのものが特定の座標系の特徴を残さない不連続さは、通常の創作手順にはうまく適合

してくれない。模型や鉛筆スケッチによっての創作では、形態は作者の理解力をこえて複雑になることはないが、コンピューター内ではその操作が物理的不可能性を無視しているために、それを可能に見せることもある。

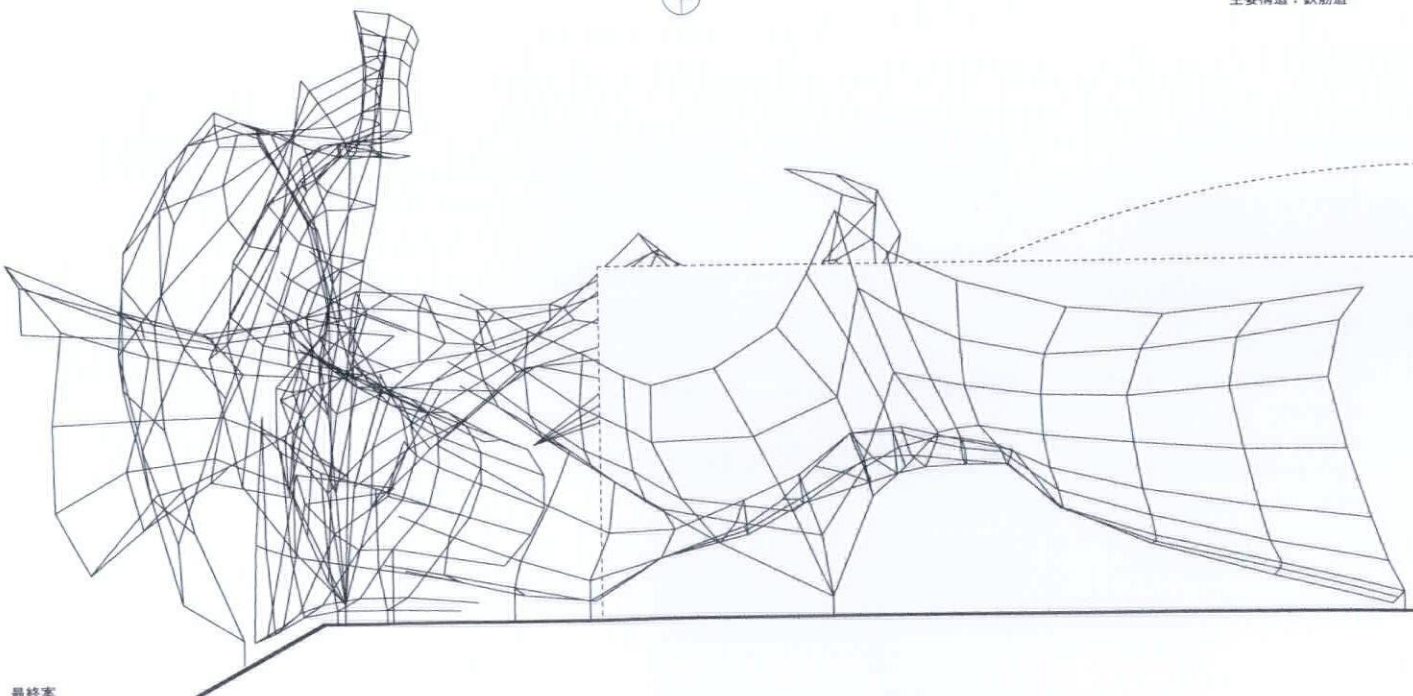
これはヴァーチャルな空間を散歩するとき、重力の感覚や障害物に衝突したときの感覚が無いために、実際の空間と奇妙なギャップを感じるのと似ている。



配置図 S=1:1300



所在地：倉敷市玉島長尾地区
主要用途：モニュメント
構造設計：横江勇雄
主要構造：鉄筋造



最終案

倉敷市立玉島北中学校

重村力+Team ZOO:いるか設計集団+
(協)倉敷建築設計センター

Kurashiki City Tamashima-Kita Junior High School,
Tsutomu Shigemura + Team ZOO: Atelier Iruka+Kurashiki Architecture
Design Center

クリエイティブTOWN岡山

この計画は、既存の玉島北中学校校舎が老朽化したことと、新倉敷駅周辺の新都心建設に関連して学校の新築移転が決定されたことから「クリエイティブTOWN岡山」の事業の一環として始まった。

敷地は山陽新幹線の北方にあり、南面は美しい滞の水辺に接している。この水辺を自然学習園とし、校地全体に豊かな緑を配し、倉敷や玉島市街地の街並みを意識した瓦屋根をリズムカルに並列することにより、風土との調和を図った。また、1学年6クラスという学校のボリュームを分節化することにより、都市景観として伝統的な街並みのやさしさを引き継ぐとともに、北にそびえる果樹園の山々の形状、田畑の広がりに対応し、新幹線のスピード感をも取り込んだデザインにより、新しい都市環境創出のきっかけとなるよう試みた。

平面計画は教育システムの多様な展開（学級教室型から教科教室型へのスムーズな移行）に対応できるように諸室を配置し、学習が学校生活の集団の規模に応じられる空間構成を計画した。

各一般教室には、生徒の学校生活の拠点となる「ホームベイ」を隣接させ、1学級40人分のロッカー、ベンチ、収納カウンター、掲示スペースの配置にそれぞれ変化をもたせ、クラスのアイデンティティを高めるように配慮した。通常クラスルームの運営時には、教室とホームベイとの両方で対応し、教科教室型運営時にはそれぞれを分離して使うこともできる。

各学年は教室、ホームベイに接して「教科学習コーナー」を設け、グループ学習、個別学習、チームティーチング等の多様な教育学習形態が行えるようにした。

そして全学年共通の情報の発信源として「メディアセンター」を建物の中心となる位置に配し、オープンな空間にすることによって、自由で様々な活動を可能にしている。

更に、地域に開かれた学校を目指して、グラウンド、体育館、柔・剣道場とともに、作法室、食堂、オーディトリウム等の開放が予定されており、体育と文化の両面で地域の核施設となることが期待される。



全体配置図 S=1:2000



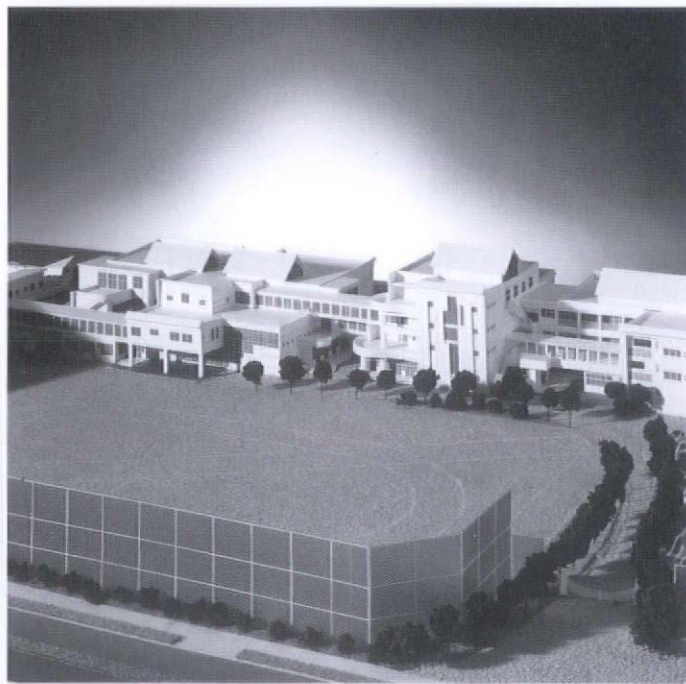
南立面図 S=1:1400



北立面図 S=1:1400

所在地：倉敷市玉島八島1519-1
主要用途：中学校
構造設計：野下構造設計。魚崎建築構造事務所
設備設計：サンテックエンジニアリング、三枝設備総合事務所
施工：第一工区：蜂谷工業(株)・(有) 風早興業JV / 第二工区：(株) 荒木組・(株) 大森工務店JV

／第三工区：三宅建設(株) / 第四工区：(株) 吉本組・浅野工業(株) JV
建築面積：7,257㎡
延床面積：13,357㎡
主要構造：RC造、一部S造
規模：地上4階



キーセンテンス

1. 教育システムの問題として在来の学級教室型ではなく開かれた教育システム（オープン化）の方法が各地で追求され実績をあげている。中学校に関しては学級教室、教科教室等の型等がこれまで考えられてきたが最近のカリキュラムの組み方や教育システムの研究等によって、更に発展的な、学童に対するのびやかな教育環境が創出されるよう願ってやまない。

2. 学校建築は古くから地域・地区のシンボルの存在であった。新倉敷地区は玉島に含まれる地域であるが、まだ都市としての性格がみえていない。新倉敷地区に対するCTOとしての最初のプロジェクトが玉島北中学移転プロジェクトである。従って地区に対する都市環境創出に対する先導的役割は大きい。

3. 周辺は都市として未開の田畑である。南側を流れる用水路は玉島に特有の水路の残構であり、周辺環境に対しては貴重な水辺ではなかろうか。とくに敷地に面する岸辺は自然の状態が残され、児童の教育環境としても甚だ貴重な存在であると考えられる。大いに活用されること。

それにしても最近河川改修で行われるコンクリート護岸で整備するというような自然の破壊は止めるべきであろう。自然形を残したロック式護岸等の配慮をしたい。

同様に敷地周辺の境界域をどうデザインするかも重要なデザインポイントである。

北側のアクセス路に関しても、その景観が考えられなければならないだろう。

□旧倉敷では浦辺鎮太郎の強い個性によって景観に独特な傾向がもたらされた。隣町である新倉敷においても個性ある町づくりが行われるとよいであろう。デザインの傾向はスクールによって現われてくると考えるので、顕著なスクールを思い描いてみたが、現代の建築界では個性をもったスクールが解体されている状況に愕然とした。そのような情状の、数少ない中から吉阪隆正スクールのメンバーを選びCTO建築家として推薦している。（岡田）

所在地：倉敷市玉島八島1519-1

主要用途：中学校

構造設計：野下構造設計、魚崎建築構造事務所
設備設計：サンテックエンジニアリング、三枝設備総合事務所

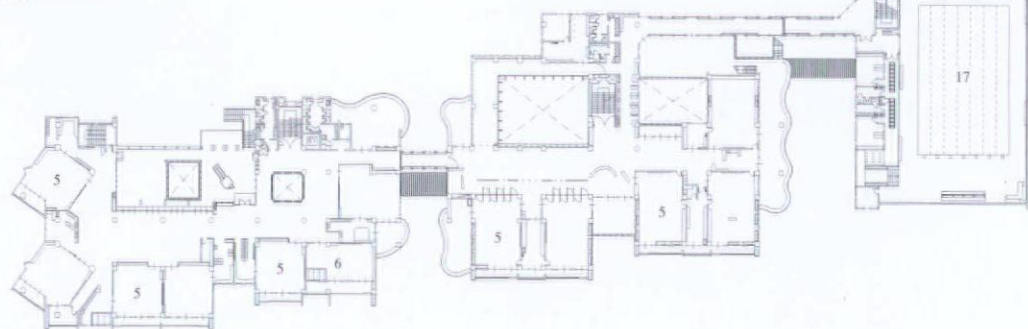
施工：第一工区：蜂谷工業（株）・（有）風早興業JV／第二工区：（株）荒木組・（株）大森工務店JV／第三工区：三宅建設（株）／第四工区：（株）吉本組・浅野工業（株）JV

建設面積：7,257m²

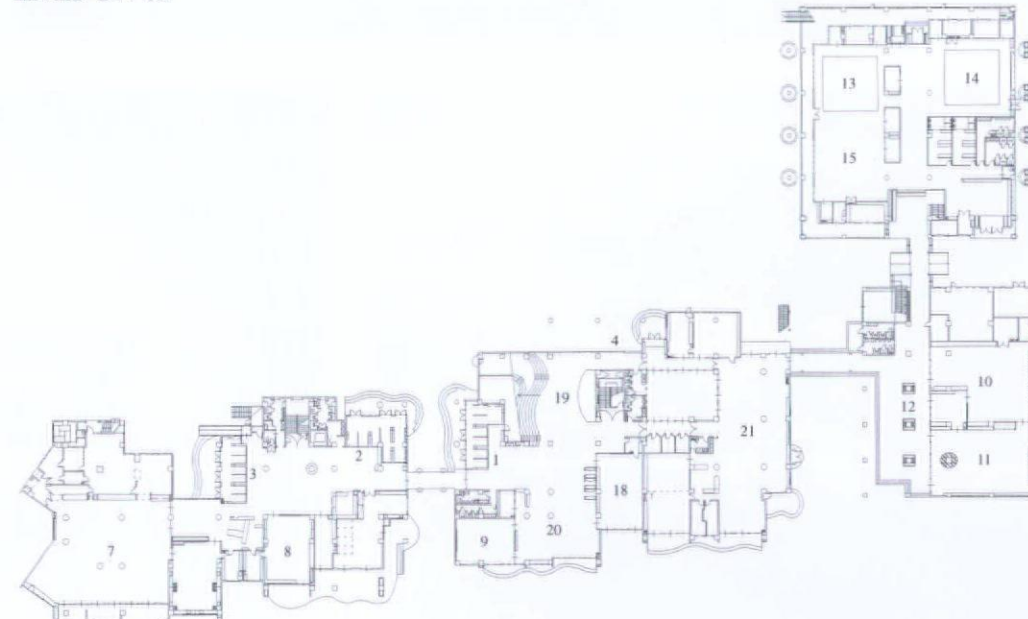
延床面積：13,357m²

主要構造：RC造、一部S造

規模：地上4階



2階平面図 S=1:1250



1階平面図 S=1:1250

- | | |
|-------------|--------------|
| 1: 1年昇降口 | 12: 作業スペース |
| 2: 2年昇降口 | 13: 剣道場 |
| 3: 3年昇降口 | 14: 柔道場 |
| 4: 職員・来客昇降口 | 15: 卓球場 |
| 5: 教室 | 16: アリーナ |
| 6: 特殊学級 | 17: 25mプール |
| 7: 食堂 | 18: コンピューター室 |
| 8: 被服室 | 19: オーディトリウム |
| 9: 視聴覚室 | 20: メディアセンター |
| 10: 実習室 | 21: 職員スペース |
| 11: 技術室 | |

グリーンヒルズ津山

Green Hills Tsuyama

基盤整備
センタービレッジ
リージョンセンター
ガラスハウス
音楽堂

Infrastructure Improvement Project
Central Village
Region Center
Glass House
Music Factory

キーセンテンス

1. 岡山県北地域を対象とした都市型リゾートの拠点として「津山芸術文化村」が創られる。

2. 日常生活の受け皿である既存の町や都市とは異なった別世界を形成する「夢」の存在であってよいだろう。

3. ところで、敷地は歴史的都市環境を保持する津山市域に存在する。このような歴史環境に挿入される新しい施設は、それらと無縁なものであってはならない。

4. 基盤整備について（略）

5. 敷地内管理道路は周辺部を通し中央部の拡がりを妨げない。管理道路は植樹により並木道とし来訪者の往来にも供する。

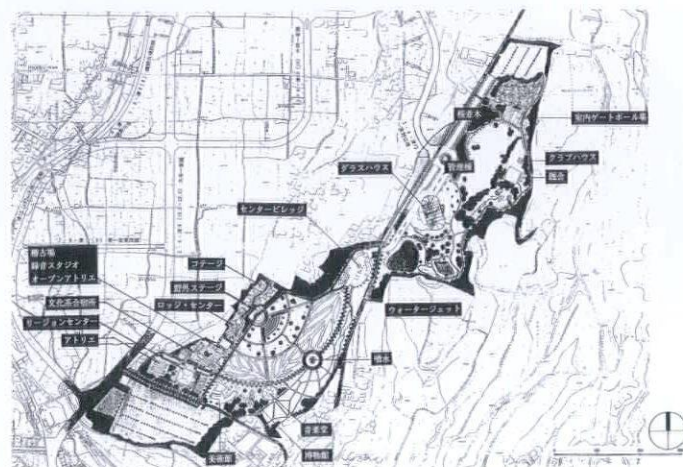
6. 造園計画は「自然景観」を尊重するものでありたい。人工的自然よりも「自然を創る」方向をとりたい。「敷地全体を花園に」「自然な全体」というテーマをもちたい。

□まず、津山市域に立地しているということで、伝統的町並保存に熱心な津山市の景観規制をうけることが考えられる。伝統的町並の景観を承継し既存の文脈の中に新しい建物を脈絡させていくことは大切なことである。出雲街道沿いの町並みを訪れると木造の町屋の間に明治大正期に建てられたレンガ造やRC造の洋館が象嵌され結構見事に収った町並を形成している。コミッ

ショナー・キーセンテンスの前段は伝統的風土の形態に対する対応の手法は地域に根強い伝統的な形態に執着するのみでなく建設テーマと敷地環境とによって多様な、又複雑な仕組みが考えられるだろう……という地域の人達に対する問いかけである。

次が、既につくられていたマスタープラン（整備計画）に対する見直しの提言である。公共事業が事業化されるにはコンサルに依頼して事業計画がつくられ建築家が推薦される以前に、最も重要なマスタープランの路線が敷かれてしまうわけである。可能ならば、事業計画を行う際にCTO建築家が担当するようなシステムがとられるのが最善の方法である。

□酷試跡地に計画される施設はガラスハウス（県事業）、音楽堂、博物館、美術館（市事業）のようなシンボルを形成する建物と、センタービレッジ（県事業）やリージョンセンター、研修、宿泊、アトリエ（市事業）のようにシンボル施設を支持する施設群とに大別されることに注目する。旧市内には、地となる町屋があり、その中に、大正期に建てられた洋風建築がシンボルの役割を担っている。このような歴史的都市環境を投影するものとして芸文村の施設をとらえる。但し、ここでは地とシンボルの関係を逆転して考え、地となる施設の設計者として前衛的傾向をもつ北川原温を、そしてシンボルとなる施設の設計者としてはモダニズムであり、また、風土に根ざした傾向をもつ横河健、富田玲子を推薦している。（岡田）



基本計画段階野マスタープラン

プロジェクトの背景

グリーンヒルズ津山は岡山県北地域を対象とした都市型リゾート公園である。事業計画及びプログラム段階（基本計画段階）は県サイドがイニシアティブを取り、事業そのものは岡山県と津山市が各施設を分担して事業化を行い、予算の分担を行なっている。道路工事、造成工事、調整池工事、防災工事、汚水排水工事、雨水排水工事、給散水工事、電気工事、公園工事等インフラに関わる基盤整備は県サイドが行い、上物の建築物をそれぞれ県と市で分担して事業を行う予定。また工事竣工後は全て津山市が公園全体の運営・管理を行う予定である。

基本計画案は当初、コンペによって併シナージ案が採用され、基本計画段階の事業計画のプログラム、来訪者の需要予測、地域の動向等事業の展開と、土地利用等のプログラムは県と併シナージによって報告書がつくられている。従って、基本計画段階のマスタープ

ランでは岡田コミッショナーのキーセンテンスは反映されておらず、この点について、キーセンテンスではマスタープランの見直しの重要性が指摘されている。このことはその後、基盤整備のプログラムが地元関係諸機関との数回に渡る協議の末、実施設計図書に反映され施工された後、建築のプログラムの変更によっては数々の調整の必要性を暗示している。事業計画段階では、事業の予測と将来の展望が、適確な眼で検討されていることが大切である。このことは当プロジェクト等に見られる、大規模で多様な機能を持つプロジェクトでは常に必要とされるが、基本計画から基本設計・実施設計の過程で行なわれる、県と市の現場での分担、及び調整、全体マスタープランと個々の建築との関係の調整、土木と建築との業務分担の調整、建設スケジュールの調整等、数々の調整の必要性に対する合理的なアプローチの方法をもキーセンテンスは示唆している。（都田 徹）

グリーンヒルズ津山：基盤整備

都田徹／景観設計研究所東京事務所＋ウエスコ＋イー・イー・シー

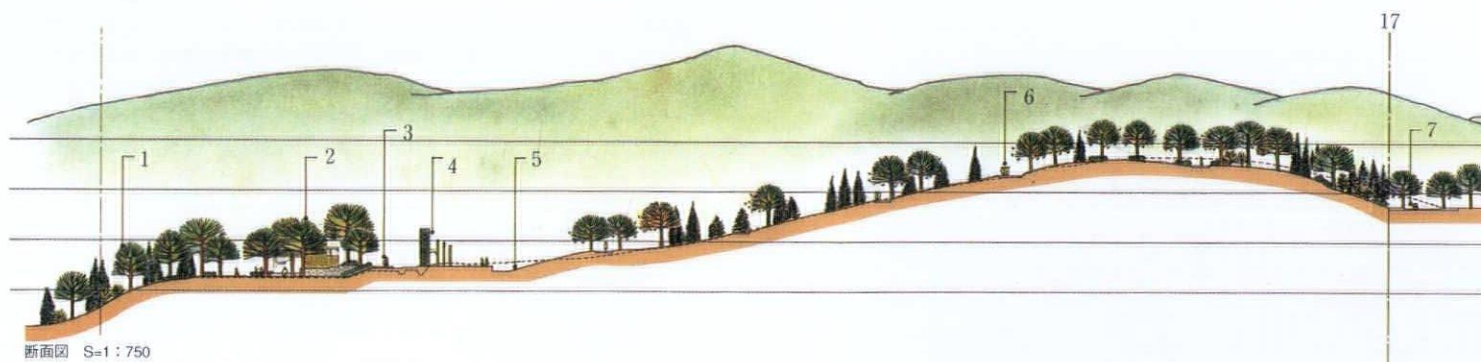
Green Hills Tsuyama: Infrastructure Improvement

Tooru Miyakoda / KEIKAN SEKKEI + WESCO + E・E・C

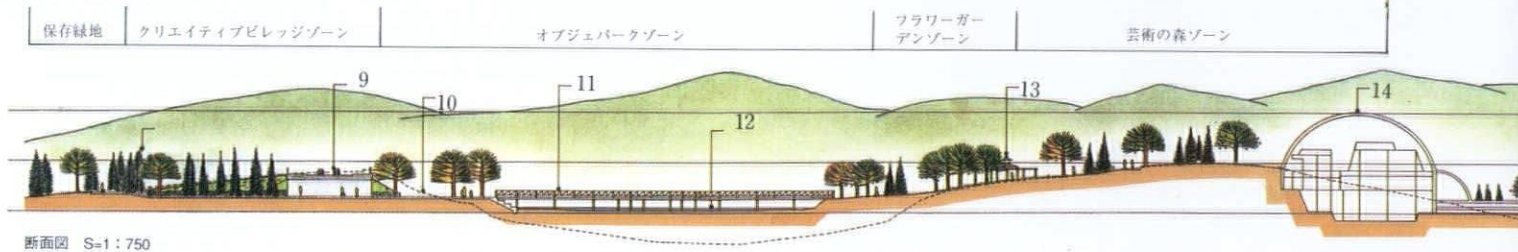
クリエイティブTown岡山



全体計画平面図 S=1:2000



断面図 S=1:750



断面図 S=1:750

保存緑地 センタービレッジゾーン 北プロムナードゾーン ウォーターガーデンゾーン グラスハウスゾーン

- 1: リージョンセンター
- 2: アトリエ
- 3: 文化系合宿所
- 4: ロッジセンター
- 5: 稽古場・録音スタジオ・オープンアトリエ
- 6: コテージ
- 7: 美術館
- 8: 博物館
- 9: 音楽堂
- 10: センタービレッジ
- 11: オブジェパーク・野外ステージ
- 12: フラワーガーデン
- 13: ウォーターガーデン (エコロジカルガーデン)
- 14: グラスハウス

- 15: ワイルドフラワーの草原
- 16: 中央広場
- 17: トリムの森 (ゲームガーデン・ヘッドガーデンを含む)
- 18: エントランス広場
- 19: 便所
- 20: 調整池・汚水処理場
- 21: 北プロムナード (チェリーストリート)
- 22: 南ストリート (プラムストリート)
- 23: 芸術の森の並木道 (市道114号線)
- 24: 管理棟
- P: 駐車場



- 1: 保存緑地 (現況林)
- 2: コテージ
- 3: 市道K114号線
- 4: 野外ステージ
- 5: 野外スタンド
- 6: 南プロムナード
- 7: 209号線
- 8: 民家
- 9: アンダーパス
- 10: 水のテラス
- 11: 霧のブリッジ
- 12: 新池
- 13: 展望広場
- 14: グラスハウス
- 15: トリムの森
- 16: 大田池
- 17: 敷地境界線

マスタープランで留意したこと

公園の中の建築群は公園の附属物である場合と、そうでない場合とがある。今回の公園のプログラムでは、公園が街づくりのプロセスを作り、その中で建築群は公園の骨格を作る上での基幹の役割を果たしている。建物がどのように風景と関わるかについてのクライテリアを作ることに努力している。

景観計画で大切にしたこと

南敷地ではセンタービレッジの屋根上から180°以上に展開する景観が素晴らしい。この風景の要めとして、野外劇場のステージを設けている。この場所は、①津山城・郡盤明神社軸(市街地発展軸)②中山神社参道軸③神楽屋城跡・初保峠城跡軸の3つの軸線の交点でもあり、南敷地での中心景観ポイントとなっている。また北敷地ではグラスハウスがこの役目を果たしている。

基盤整備のデザインコンセプト

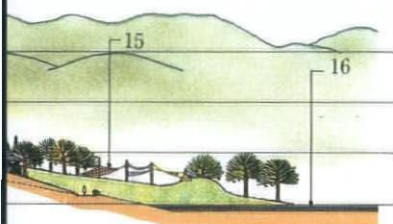
公園が本来めざす目的は、地域の社会資産のストックとなるような、文化資産を創造して行くことにあるものと思われる。

そのためには津山市に位置する津山酪農試験場跡地の文化的社会資産への活用は、この目的にあったものと思われる。本酪農試験場跡地のもつ牧歌的で、のびやかな田園的な自然風景の環境を守りながら、この敷地の中に来たるべき21世紀のライフスタイルに合った公的な文化・健康レクリエーション公園を創造することが、この公園の基盤整備の目標である。

そのためには、音楽・芸術に代表される津山の文化・芸術性をイベント文化も含めて、地域の資産とするために敷地の持つ自然の可能性を最大限に活かすことが必要である。このことは敷地の持つのびのびとした牧歌的な草原の風景を残しながら現代の生活で失われがちな野生的(自然の持つ本来の姿)な自然を呼び起こし、生態学的な自然回帰のシステムを創り、自然の中で、家族や子供達がのびのび遊べる公園空間を創造することが必要である。

北敷地ゾーンは、現況敷地の持つ牧歌的風景を主体としたワイルドフラワーの草原(多目的広場)、ウォーターガーデン、トリムの森、などを中心としたワイルドな施設を設けている。一方南敷地ゾーンは、センタービレッジの入口部から音楽堂、博物館、美術館などの施設が連続して文化・芸術施設を構成している。またクリエイティブビレッジゾーンでは、既存の樹木林を保全しながら、芸術家達が滞在するロッジ群が用意されている。南敷地の公園としてのテーマは、周辺の芸術創作基地と密接な関連性を持つ豊かな文化と自然環境との連携を持つ核を創ることである。それらは、フラワーガーデンやオブジェパーク、芸術の森ゾーンで代表されている。

公的なオープンスペースの資産は、21世紀の文化資産として最も価値があるものと思われる。このオープンスペースに我々は、エコロジカルでワイルドな自然のシステムとサイクルを提案したい。このことは、健康な人々でも身体的な弱者でもゆったりとした、自然の中で歩くこと自体が楽しくなるような空間の創造をすることでもある。また、人に優しく、動植物に優しい、双方が共存できるサステナブルな関係を保つことも、今回の公園設計の目的となっている。(都田 徹)



トリムの森ゾーン

凡例

- エキスポ・ウルトゥーショウ
- マヤドワン
- ノイ・コソノ
- インテリゲンチヤ
- サルスベリ
- ザンズバ
- コブリン
- ヘニエスダ
- ユキノキ
- ナカシタウ
- アメリカウ
- ランドマーク
- メサヒコイサ、クア、コブリン
- メサヒコイサ、グア、コブリン

ソーニング

基本設計では、基本計画で決まったゾーニングに関して、各ゾーンがそれぞれのゾーンの性格で完結するのではなく、それぞれのゾーンが隣のゾーンや類似したゾーン相互間へ影響を及ぼし、有機的に関連しあう関係を作る。

排水計画

文化・芸術ゾーンでは、雨水排水管に用いる管断面は、市道K114号線及びK149号線に埋設する本管をそれぞれφ900、φ1,350のヒューム管に設定する。アミューズメントゾーンにおいては、プロムナードに埋設する管渠（最大φ800HP）へ各集水枥から接続し排水している。

給排水計画

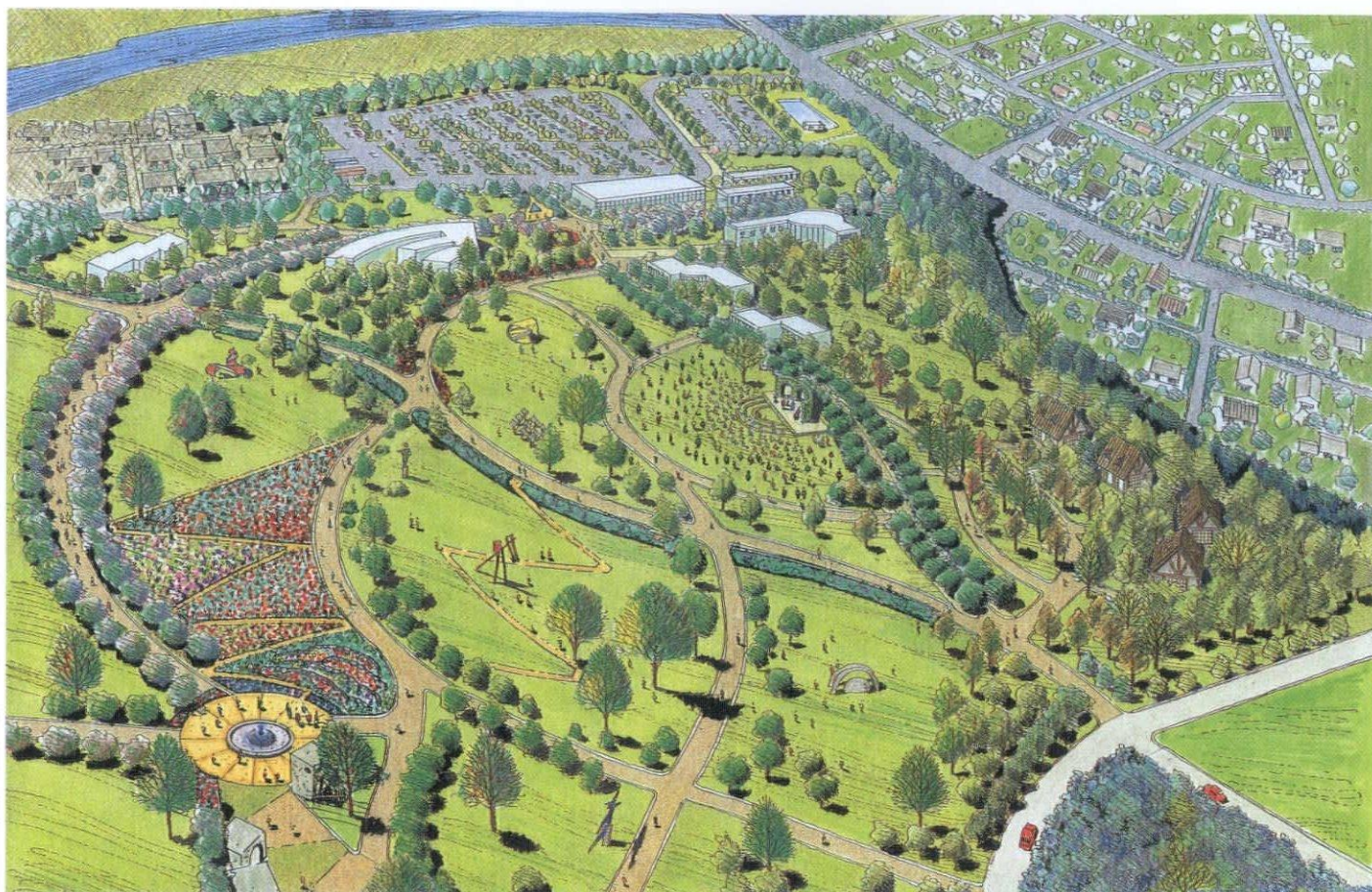
給水に関しては、県道2009号線（DIPφ200）及び市道149号線（DIPφ100）より引き込み口（接続先）を設け、緒施設への配水を行っている。又散水に関してはガラスハウスより排出されるプール排水（平均40t／1日）を、いったん新池にため、これを自動スプリンクラーと散水栓により散水している。

電氣照明計画

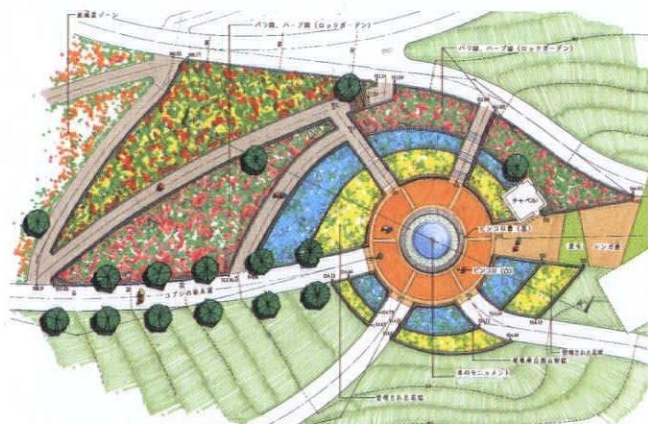
公園灯照明システムは周辺住民への考慮、自然環境保全、省エネルギー節電等を勘案し、駐車場や主要施設周辺地は午後10時までとし、その他のエリアについては午後9時までの照明時間を限定させた、半夜灯システムを計画している。

植栽計画

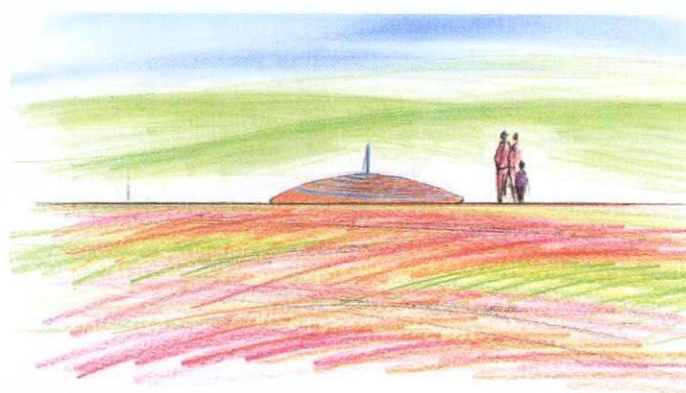
現存樹木を大切に保存すると共に、新しい樹木の植栽は、この地域の環境に適切で十分な樹種選定をもって行う。そのために敷地の持つ生態系を大切に、豊かな自然環境とそこに育つ緑を、21世紀の県民・市民の共有の資産として大切に位置づけている。



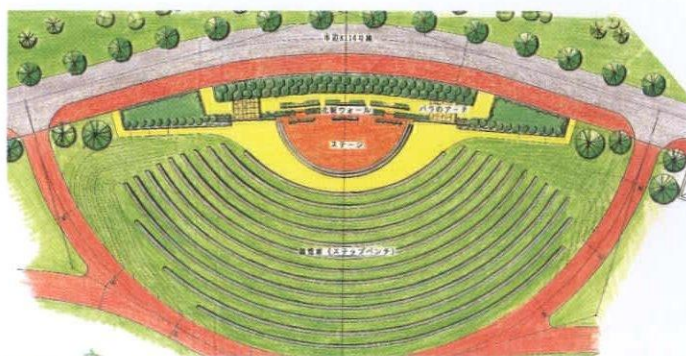
南敷地鳥獣園



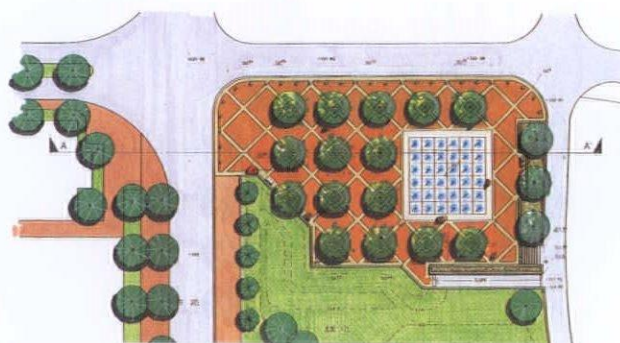
フラワーガーデン S=1:1200



フラワーガーデン/水のモニュメント



野外劇場 S=1:1200



エントランス広場 S=1:1200



断面図 S=1:1200

グリーンヒルズ津山：センタービレッジ

北川原温／北川原温建築都市研究所＋柳勝己／やなぎ建築設計事務所

Green Hills Tsuyama: Central Village

Atsushi Kitagawara Architects, Inc. + Katsumi Yanagi / Yanagi Architects

クリエティブ・タウン岡山

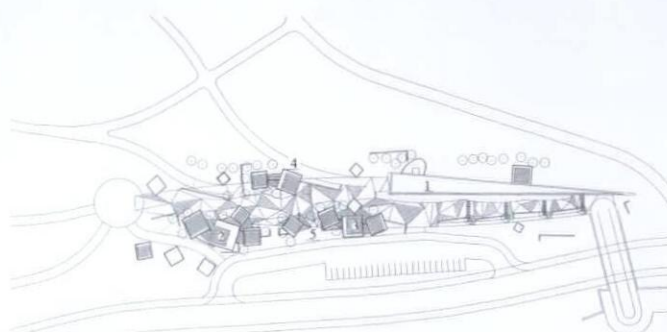
センタービレッジゾーンは、当計画地全体の中でも最も標高の高い貴重な尾根状の美しい丘の上に展開している。この丘は、北側の田園地帯から特に美しく臨むことができ、その眺めは自然の丘の持つ生き生きとした曲線を描き優美でさえる。またセンタービレッジは、道路によって南北に二分されている計画地全体の中心に位置し、2つの敷地の橋渡しの役目を担っていると同時に、重要な中継地点として回遊性を誘導する役割を担っていると考えられる。

この計画は、敷地に「出会い」の象徴として対照的な2つのイメージから構成されている。ひとつは歴史の象徴（例えば津山城の基壇の石塊）とする造山活動の強く大きな自然の力を表現し、もうひとつは、新しい生命の息吹の象徴として妖精の群舞を表現し、そこから空間的イメージを発展させ具体的な建築の形態に至っている。

またこの空間を自由に楽しくありながらも、確固とした統一的形象を獲得するためにマラルメの詩的空間構造とベンヤミンの考察を参考にしている。

マラルメの『骰子一擲』には、空間に散りばめられた幾つもの言葉のその相互の位置関係によって、言葉の中から様々な意味の世界が建ち上がっていくという「注意深く計算された言葉の配置」が見られる。この言葉の配置をメタフォリカルに建物の配置として読み替えるという作業を繰り返した。さらにベンヤミンの「パワー・コンスタレーション」の概念を応用した。すなわちひとつひとつの空間単位を「星」と仮定し、すべての「星」が「星座＝コンスタレーション」を形成し、空間に文脈が創出されるように各空間単位的位置、ボリューム、形状を検討した。

空間が特別の意味構造を持つ詩的世界への可能性を試みている。(坂本 学)



- 1: ギャラリー棟
- 2: レストラン1
- 3: レストラン2
- 4: 店舗1
- 5: 店舗2

配置図 S=1:3000

主要用途：物販店舗、飲食店
敷地面積：8,000㎡
建築面積：1,772㎡
延床面積：1,384㎡
主要構造：RC造
規模：地上2階

グリーンヒルズ津山：リージョンセンター

北川原温／北川原温建築都市研究所十岸本英男／巴建築設計事務所

Green Hills Tsuyama: Region Center

Atsushi Kitakawahara Architects Inc. + Hideo Kishimoto / Tomoe Architects

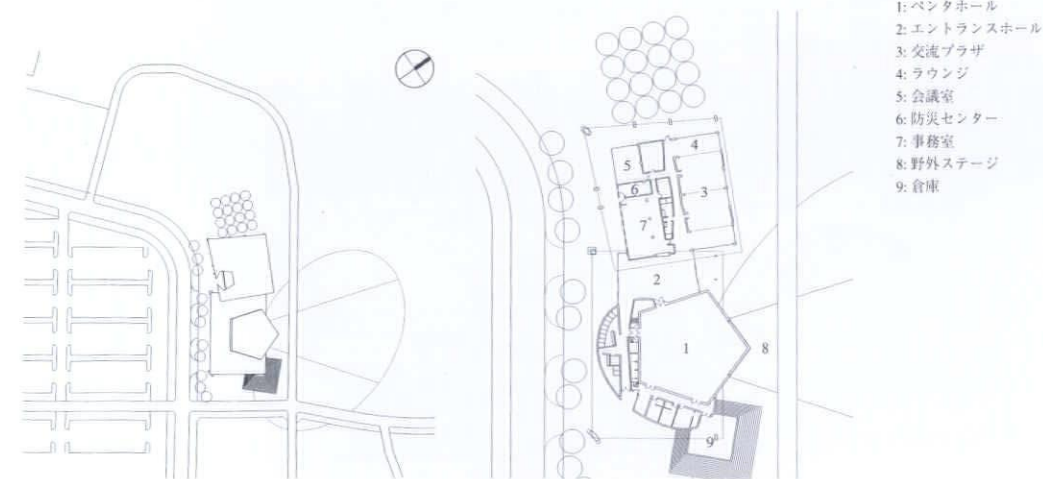
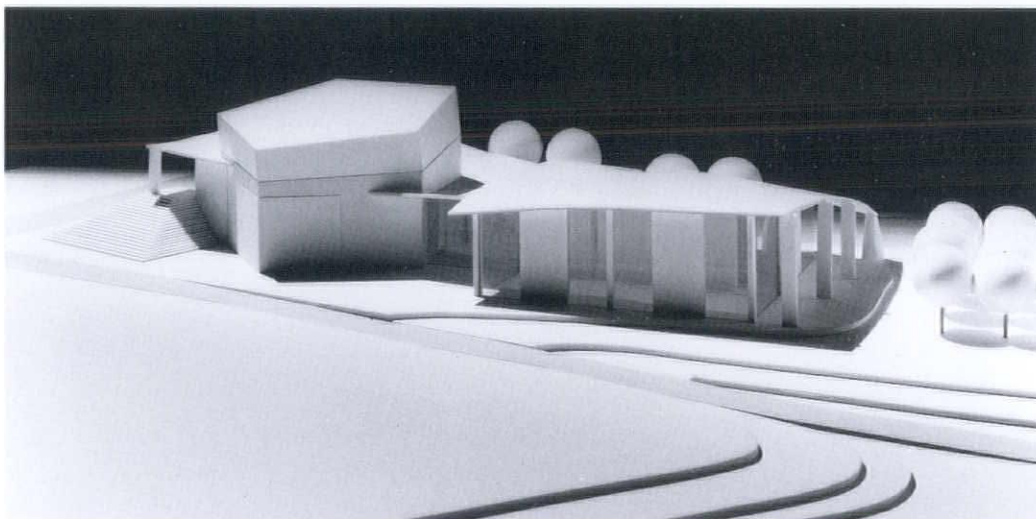
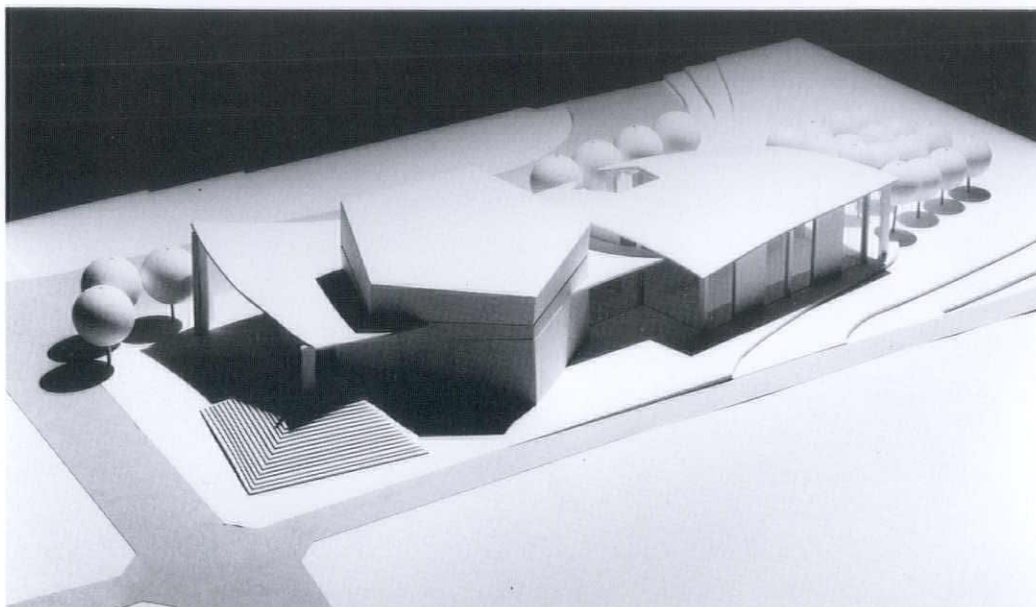
コミッショナーのキーセンテンスには「センタービレッジ、リージョンセンター、研修、宿泊施設、アトリエ等が地区の背景となる町並みを構成し、ガラスハウス、音楽堂、博物館、美術館がシンボルを形成する……」とある。

敷地は、伝統的な町並みが多く保存されている旧市街とはいささかかけ離れた牧歌的な風景の中にあり、それ自体すでに「別世界」(キーセン)である。「シンボルを形成する」施設は「別世界」において非日常的な体験を提供する場であるとすれば、町並みを形成するべき施設群は、「別世界」においての生活空間を提供する場になっていると解釈できる。シンボルではなく背景として構成されるとは、つまりはプログラムの問題であり、かならずしも旧市街に保存されているような町並みのアナロジーは必要なかった。

ある種の生活空間として形成されるべき建築群の中にあって、リージョンセンター以外の施設は現段階では不確定要素が多く残されている。町並形成という観点から他の施設との関係を強く意識することは自家撞着を起す危険があるように思われた。それゆえ今後展開してゆく施設に対しては、できる限りの方向性、可能性を残しながら、ある限定されたイメージに収斂されることなく、あくまで素材やスケール感においてのみある手掛かりを残すことを目指した。

それ以上に、この施設はパーキングに最も近いことから、芸術文化村とその外部とを隔てる、あるいは繋げるインターフェイスとしての機能が重要である。

隔てつつ繋げる、無限定なパースペクティブを許さない空間は日本の伝統的な街路空間のひとつの特徴であり、かつてそこでは単なるインフラとしてではなく、外部とのコミュニケーションの場として機能をしていたはずである。そのような、かつてはどこにでもあった街路や辻の風景を、プランニングにおいて参照している。(坂本 学)



- 1: ベンタホール
- 2: エントランスホール
- 3: 交流プラザ
- 4: ラウンジ
- 5: 会議室
- 6: 防災センター
- 7: 事務室
- 8: 野外ステージ
- 9: 倉庫

所在地：岡山県津山市大田地内
 主要用途：集会所、事務所
 建築面積：1,808㎡
 延床面積：1,533㎡
 主要構造：RC造+S造(屋根部分)
 規模：地上2階

配置図 S=1:3500

平面図 S=1:1600

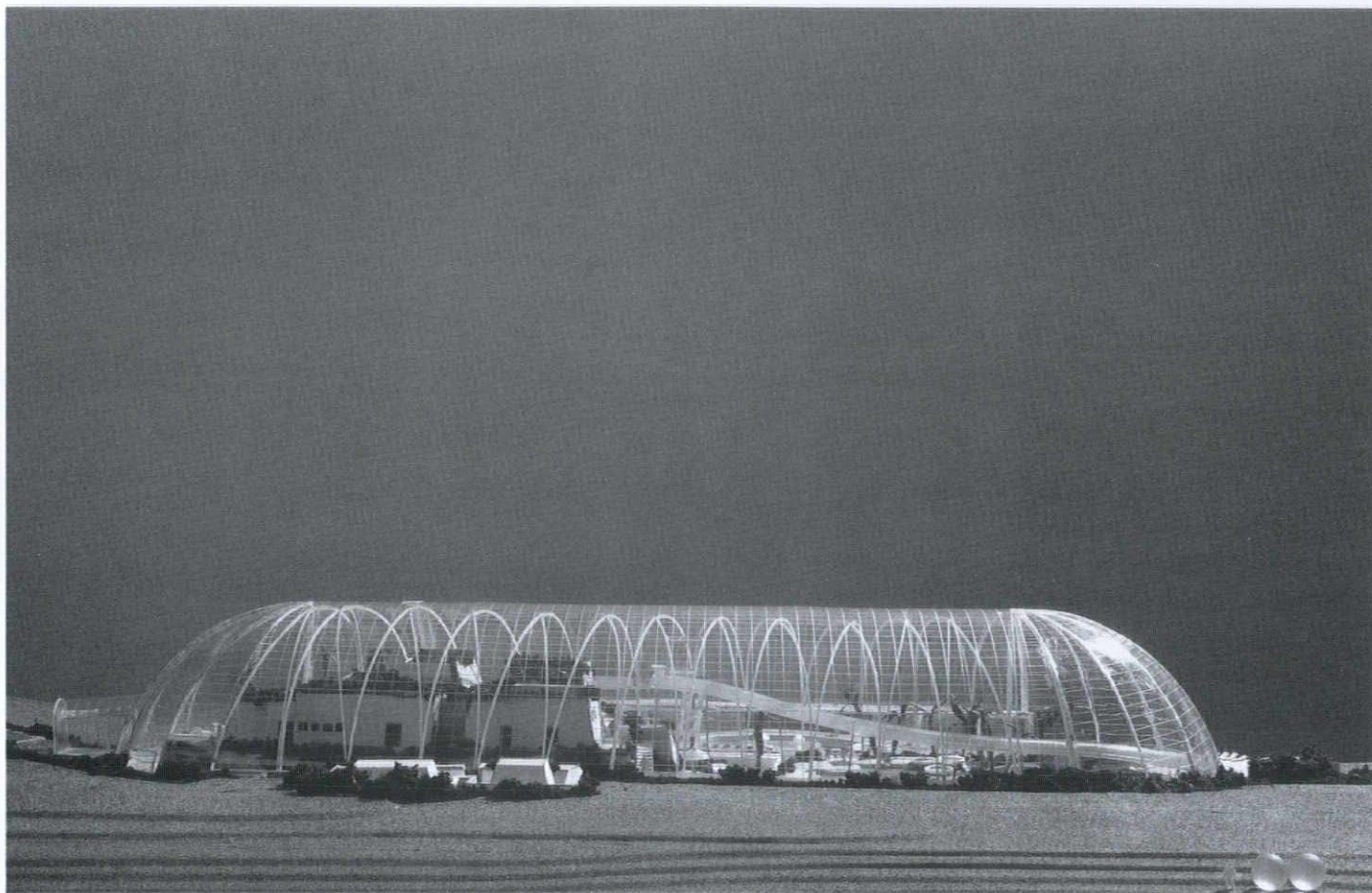
グリーンヒルズ津山：グラスハウス

横河健／横河設計工房＋木村旭／木村建築設計事務所

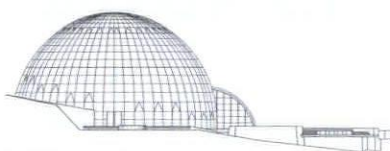
Green Hills Tsuyama: Glass House

Ken Yokogawa / Ken Yokogawa Architect & Associates Inc. +
Akira Kimura / Kimura Architects and Engineers Office

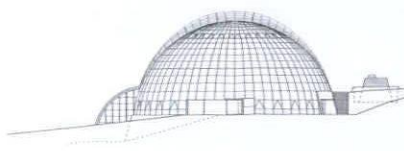
クリエイティブ
Town
岡山



東立面図 S=1:1200



南立面図 S=1:1200



北立面図 S=1:1200

グリーンヒルズ津山:音楽堂

象設計集団+芦田設計

Green Hills Tsuyama: Music Factory
Atelier Zo+Ashida Architects

クリエイティブ・タウン岡山

新しいまちづくりの中の音楽の宝箱はできてしまったけれど、いつも空いていてどうやって使おうかと悩んでいる「公共文化施設」が多い中で、津山市の音楽堂は、「中身一杯、箱はまだ」という建築本来の有り様を持つ珍しい存在だ。

「音楽都市づくり」をめざす市民の音楽活動が非常に盛んで、その主要な拠点となる音楽堂の建ち上がる日を、熱心な音楽愛好家達が心待ちにしている。多くのグループの練習風景を観察し、その人達との話し合いを重ねる中から「音楽堂」というより「音楽の家」のイメージが展開した。

「音楽の家」には、いくつかの音楽

室と大きな居間があり、音楽好きの人間が集まって練習する。いつもどこかで音が聞こえている。公園内を散策する人にも聞こえた方が良さだろう。各音楽室は独自の音環境からなり、それぞれに適した音楽のジャンルと規模がある。人々は好みによってそれを使い分ける。

「音楽の家」は、発表会場にもなる。音楽祭も催される。そして時にはプロの音楽家を招くホールに変貌する。緩やかな斜面の森が生かされて、室内だけでなく屋外での練習や演奏会やパーティーが行われる。

鳥、花、虫、木、風、人、音が交わり合う。

土地の記憶を反映させること
敷地は酪農試験場であった。緩やかな起伏のある丘陵地、多様な樹木、動物たち、散在する木造牛舎などの建物によって、のびやかな牧場の風景がつけられていた。その遙か以前は、栗の林を中心とする里山であった。

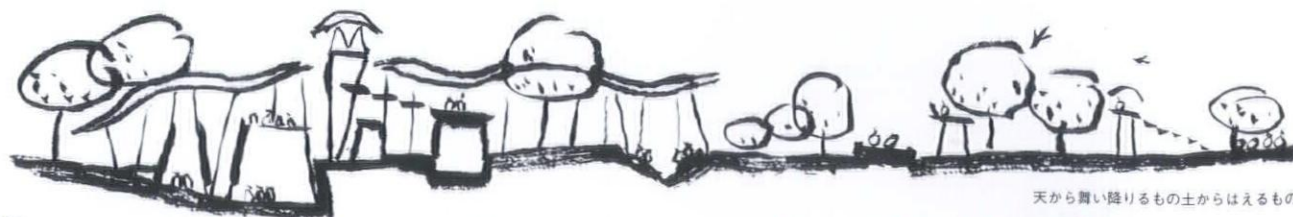
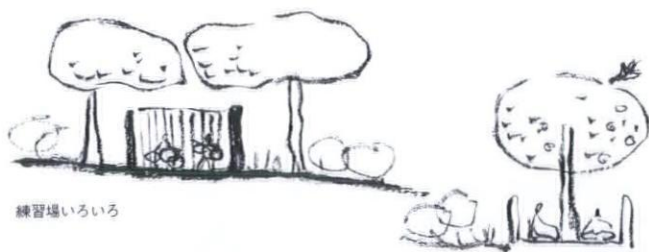
津山市内の町屋群の中に煉瓦造の優れた大正建築がある。それはかつて銀行であったが、今は洋学資料館となっていて、幕末から明治にかけて多くの優れた洋学者が輩出された津山の近代史を紹介している。

中山造りと言われ、古く美作地方の神社建築の主流をつくり出した中山神社が、敷地に近い集落にある。この美

しい神社と参道を通る軸線が敷地を通り抜けている。

この様な土地の記憶や物語を大切にしたい。 (富田玲子)

所在地：岡山県津山市
主要用途：音楽練習、発表会、コンサート
敷地面積：5,730㎡ (暫定)
建築面積：972㎡
延床面積：1,170㎡
主要構造：木造及びRC造
規模：地下1階、地上1階

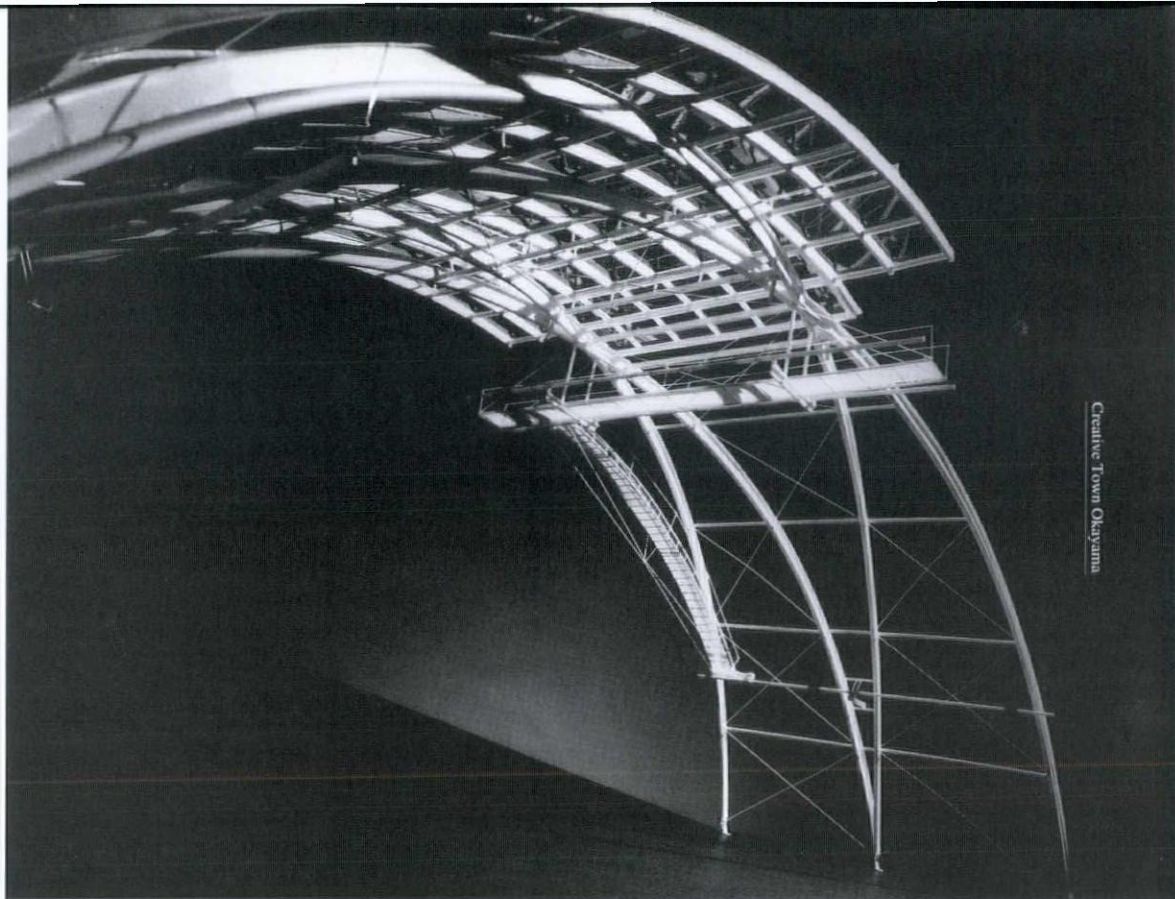


ガラスハウス…それは透明な建築、光り輝く建築である。その建築が「ガラスハウス」の名で呼ばれ始めたときから既に、単なる水施設としての器でなく、トータルな意味での透明性を確保すべき建築として出発したと言えるのだろう。

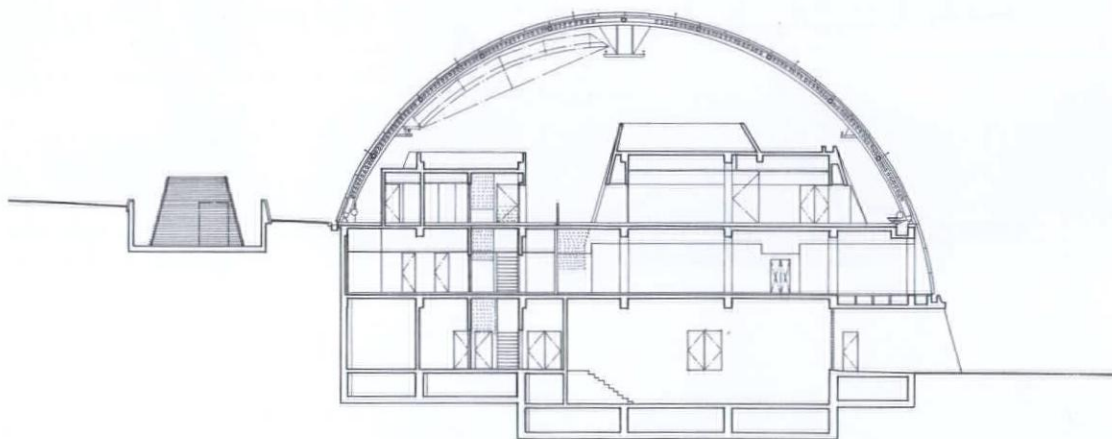
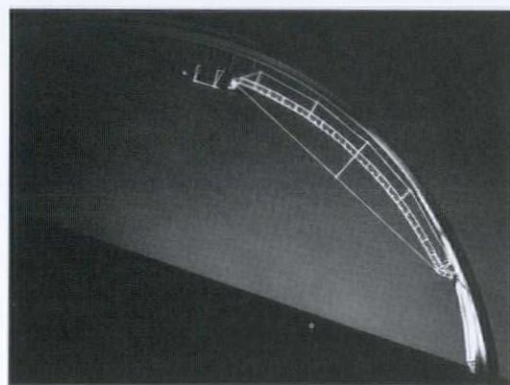
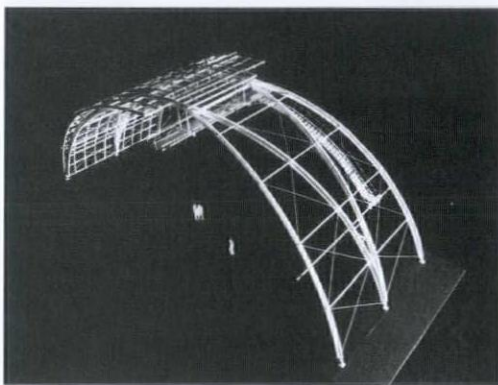
建築が太陽の恵みを享受するという機能を満足するという意味であれば、ガラスの使い方はその昔からトッライト、ハイサイドなど数多く見ることができる。しかしそれらは、いずれにしても建築の部位別の扱い、すなわち屋根架構あるいは開口部としての建築部位にとどまっているように思える。私がここで言う「ガラスハウス」とは、建築部位としてのガラスではなく、まさにトータルな意味で「ガラスの建築」をイメージするのである。

ところでグリーンヒルズ津山とは、酪農試験場跡地である。すなわち本州ではめずらしく、たおやかな稜線がいくつも重なるような丘をもったところである。牧草地の自然の姿そのままが気持ちの良い公園になるであろう。ガラスハウスもその形態は稜線の一部としてやわらかく溶けこみながら、しかし、陽の光を受けて透明な姿がキラキラ輝く、そんな姿を思いつつ、まさに透明なやわらかなガラス建築として実施設計が終了した。

宇宙的に輝く人工的な美しさも、この土地の持つ力、すなわち自然の牧草地の姿から生まれたものである。基盤整備のランドスケープデザインに係わる方々に申し上げたい。箱庭的な小綺麗さや遊園地感覚より、むしろ少々ワイルドな自然のままの姿が美しいのではないだろうか？ (横河健)



Creative Town Okayama



所在地：岡山県津山市大田地内
 主要用途：クアハウス
 構造設計：佐々木睦朗構造計画研究所
 建築面積：3,297.70㎡
 延床面積：5,326.84㎡
 主要構造：RC造+S造
 規模：地下1階、地上2階
 竣工：1998年3月予定

断面図 S=1:400

岡山西警察署庁舎

磯崎新／磯崎新アトリエ十倉森治／倉森建設設計事務所

Okayama Nishi Police Station

Arata Isozaki & Associates+Architect Kuramori & Associates

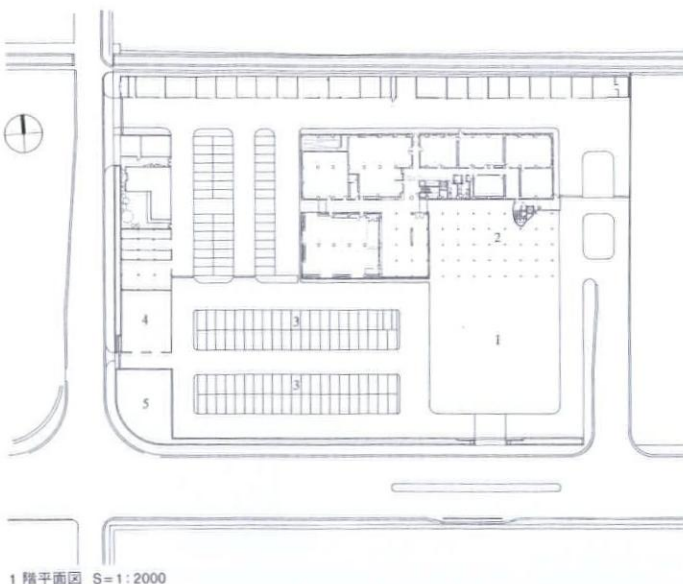
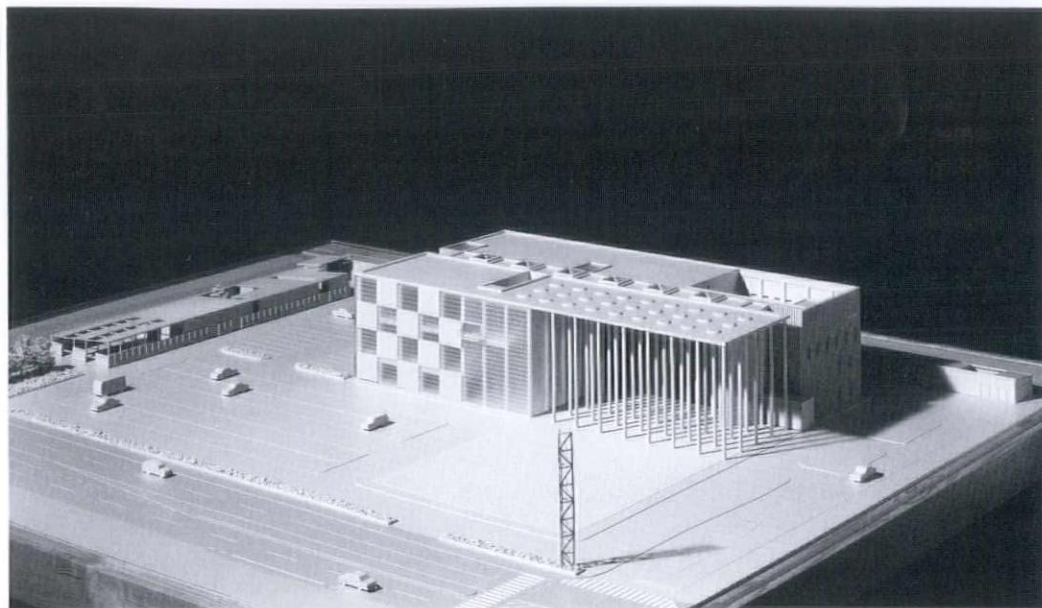
岡山西警察署は、クリエイティブTOWN岡山のひとつのプロジェクトとして計画された。

敷地はすぐ南側をJR新幹線が走る郊外地で、今はまだ農地が多い場所に独立して建設される。背後には小高い丘陵地が続き、吉備氏ゆかりの遺跡などがあり、日本で重宝がられた万成御影石の産地でもあった。唯一考慮されるべき周辺環境との関係は、高架上を走る新幹線からの視線であって、4層の階高を持つことは、そこから決められた。

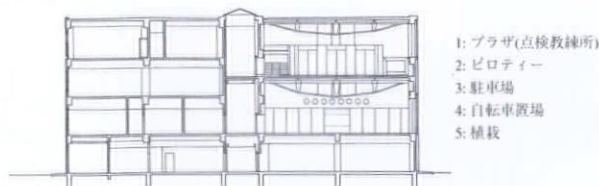
警察署に固有の機能は、まとめてひとつのブラックボックスに収容されている。その部分の外壁は亜鉛鉄板瓦棒張り、グレーのメタルの質感の生み出すソリッドな直方体の存在感が強調されている。その前面側にまったく同サイズの直方体が並列されている。それは2分され、万成を骨材にしたピンクの色調をもつプレキャストストーンと透明なガラスが市松状に組み合わせられている。これは耐震用のブレースに対応している。残部は屋根だけある多柱室で、ここは半戸外のエントランス、そしてガラス部分には市民に開放されている諸機能を収めている。

マッスとヴォイド、閉鎖と開放、透明と不透明、無柱と多柱、メタルと石、壁と被膜、実と虚、などの対立する概念や素材を徹底して並立関係に置き、それを中層の建物のサイズに拡大することによって、造物主(デミウルゴス)の尺度とでもいうべきものに近づけようとしている。近接した歩行者の視線に加えて、瞬時に通過する車窓からの視線によっても、容易にその公共建築としての特性を認知しうるためである。

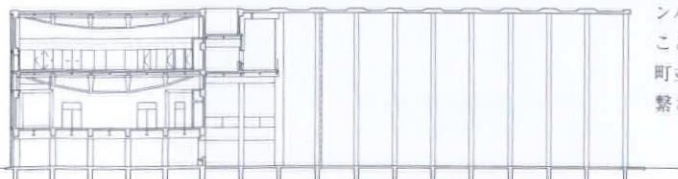
(磯崎新)



1 階平面図 S=1:2000



東西断面図 S=1:800



南北断面図 S=1:800

キーセンテンス

1. 敷地は岡山駅西口から倉敷(西)へ向かう新道に面し、新幹線から正面に見える位置にある。岡山駅西口の開発にからんで新たな町造りの核となる公共施設でありたい。

また、新幹線から間近に望見される位置にあり、多くの人々の目にする建物になるであろう。強いインパクトを与えるものでなくてはならない。

2. 一方警察署として、その安全性と市民に対する開放性という相反する機能の両面を満足させるものでなければならない。

3. 西警察署が強い核となり、独特な街並みが形成されていくことであろうことを想定している。従って、これに連続する街並みに対しては調整を配慮すべきである。

□新開地を貫く道路ではどこでもみられるパチンコ、ドライブインレストラン等限定的な建物が、新開道路に沿って立ち並びつつある。これでは好ましい都市環境が形成されるわけがない。インパクトの強い「西警察署」を建てることによって、現在形成されつつある町並みを切り、新たな町並み創りへ連繋させていきたい。(岡田)

所在地：岡山市野野東町333-1

主要用途：警察署

構造設計：川口衛構造設計事務所

施工：第1工区：峰谷工業・奥村建設共同企業

体／第2工区：中塚建設／

第3工区：佐藤建設

敷地面積：18,670㎡

建築面積：本棟2,400㎡／低層棟1,182㎡

延床面積：本棟5,861㎡／低層棟1,183㎡

主要構造：本棟：SRC造(一部S造)／低層棟：

RC造(一部木造、S造)

規模：本棟：地上4階／低層棟：

地上1階(一部地下1階)

竣工：1997年2月予定

岡山県南部健康増進中核拠点施設

阪田誠造／坂倉建築研究所＋丸川大祐／丸川建築設計事務所

Okayama Prefectural Southern Institute of Wellness

Seizo Sakata / SAKAKURA ASSOCIATES architects and engineers+

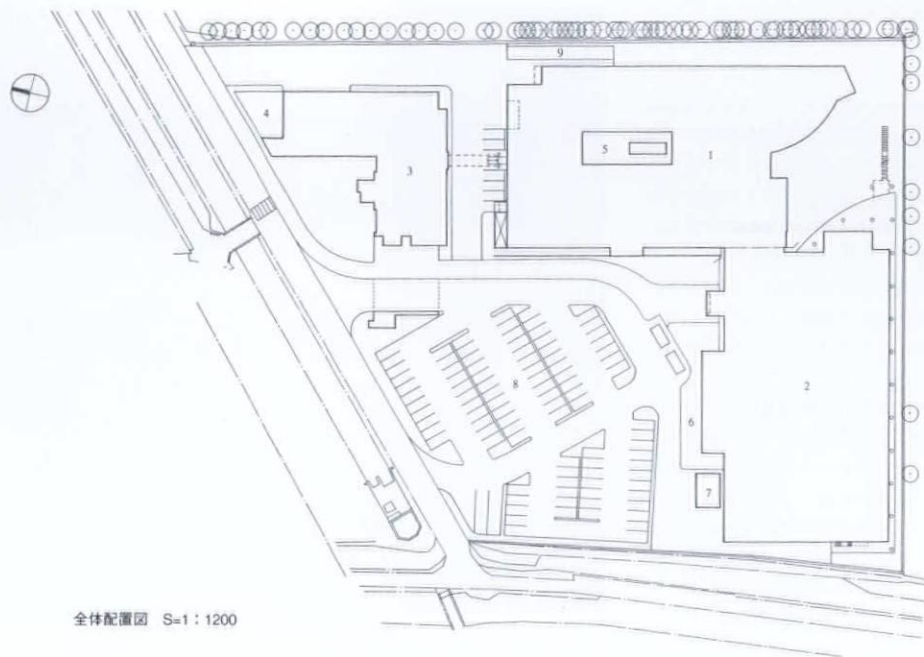
Daisuke Marukawa / MARUKAWA ASSOCIATES Architects and engineers

クリエティブ・タウン岡山

CTO第2番目に、設計者の選定を受けたプロジェクトである。敷地は、30数年前に造られた県立福祉設計に隣接している。一部コンクリート・大半木造の古い病院が、ここで医療を行っていた。健康の保持と回復の拠点づくり、検査・診断・運動指導・研修・研究・医療の機能を持つ施設を複合・連結する計画として、病院を使用しながら建設する、2段階施工の企画が立てられた。福祉施設敷地には、年月を経た樹木が多く、本敷地の境界に沿って南北に伸びる、楓の樹列がこの辺りの景観の魅力の中心となっている。

施設の性格から、建築内外の環境は、健康にふさわしいものでありたい。そのような環境は、制御される閉じた空間から脱出し、太陽光や風を身体に感じうる空間、緑など外部の自然と連続した空間構成を目指したい。設計開始前、CTOコミッショナーの岡田新一氏からは、「東京サレジオ学園的な空間」を要望された。

全体計画は必要床面積が大きく望まれ、利用面から駐車台数は多いほど望ましい敷地の場所である。必要最小限の駐車場としても、病院は6階建、中核施設は4階建でないと収まらない。とても、東京サレジオ学園のようなのどかな庭を確保することはできず、低層構成も計れない。そこで、岡田氏の要望に応えるべく、各階に可能な限り屋上庭園やテラスを確保する設計に努めた。施設内の各部からは、直接外に出られる小さいテラスや庭園を介して、広い外部に開いていることを狙った空間構成である。上述の高い楓の樹列が、周辺を含む外部空間の景観的、環境的要素の中心となるような空間計画のもとに、寛ぎや安らぎや解放感、平静で快適な各部を大切に考える建築を追求した。建築デザイン上では、ヒューマンスケールの強調を考え、地上や建築各部から見るこの建物の印象が、緑の庭と共に在る「高く、大きくない」建築を目指している。(阪田誠造)



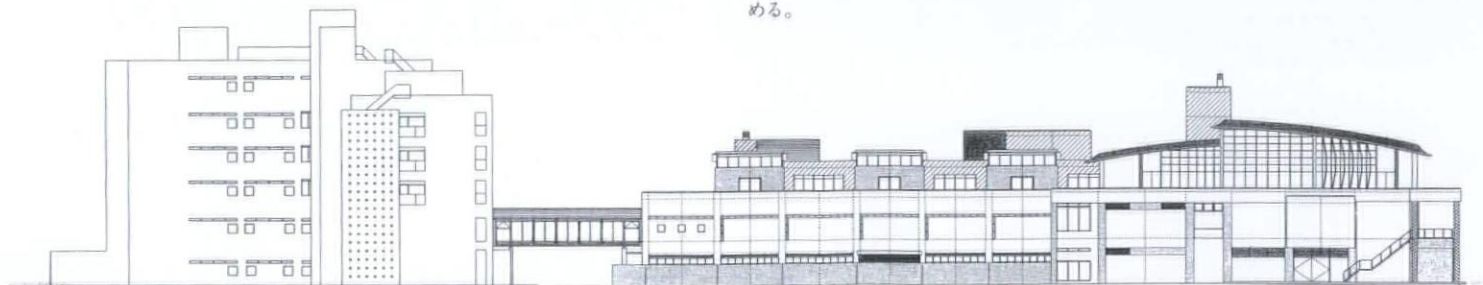
全体配置図 S=1:1200

キーセンテンス

1. 環境との連繋を尊重する
 - ・郊外の定住環境への組み込みを考える
 - ・仕上げに木を使うことも可能だろうか?
 - ・スカイラインをどう考えるか?
2. 隣接する岡山県総合福祉センターの敷地との間に境界線、塀、垣根をつくらない関係を持ちたい。
 - ・相互の往来ができてよいだろう。
 - ・「総合福祉センター」のレンガ敷、ナンキンハゼ並木の幹線路(幹空間)は恒久的な空間としてとらえておきたい。
3. 計画道路との関係
 - ・計画道路との関連は大切である。
 - ・周辺の公共施設計画、道路、川などの土木的要素及養護施設等の将来計画への布石を行うことも可能であろう。
4. 健康増進センター(県事業)と4団体病院(財団事業)とは同一敷地内の建物として関連づけ、併せて設計をすすめる。

□コミッショナーとして相談を受けた折には、既存病院をどう扱うか、移転か、或いは健康増進センターと併存する建替とすべきかということが担当部局で検討されつつあった。コミッショナー・キーセンテンスでは多少建築容積密度が高くなるけれども、両者を併存させ、機能を連繋させる方向を示している。それには、隣接する総合福祉センターとの間の垣根を取りはらうことによって、建築容積のアンバランスが解消されるだろう、とした。健康増進センターを所管する保健福祉部と総合福祉センターを所管するとはこれまで全く接触がなかったが、これを契機として相互施設の関連、境界の扱いについての部長間の話し合いがもたれた。(岡田)

- 1: A棟
- 2: B棟
- 3: 予防会病院(別工事)
- 4: 受水槽置場
- 5: 光庭
- 6: 植栽
- 7: 屋根付駐車場
- 8: 駐車場
- 9: 駐輪場

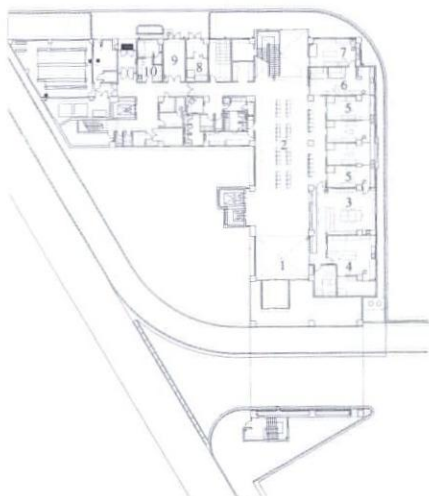
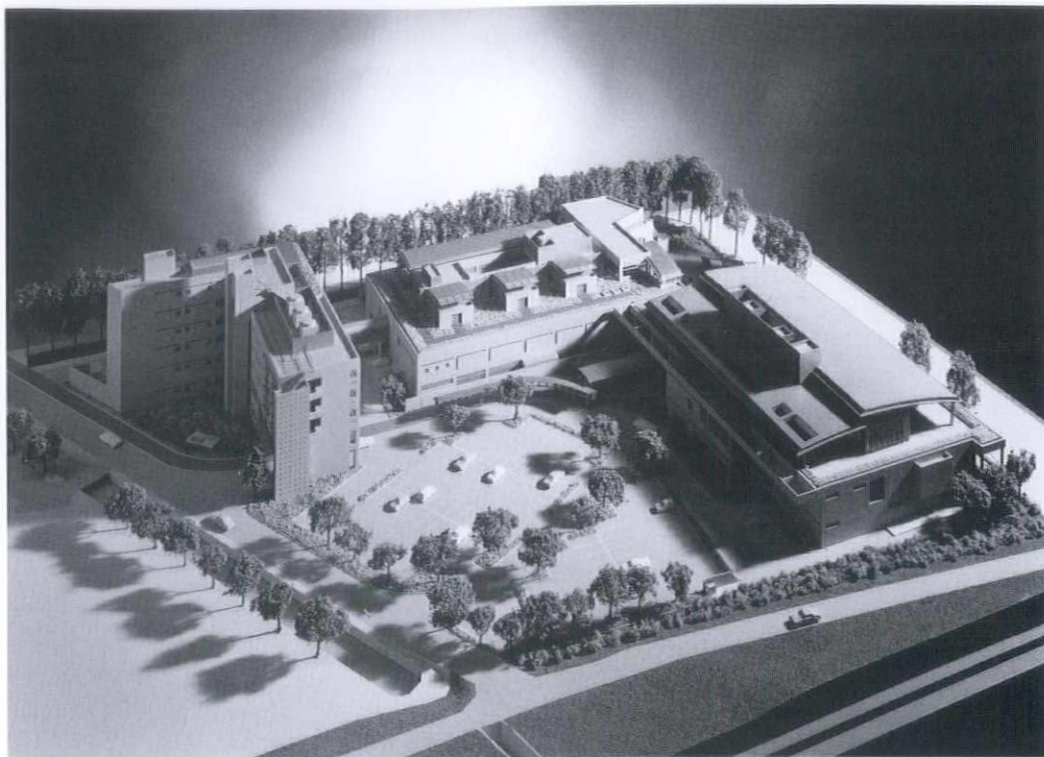


西立面図 S=1:800

SD9601
90

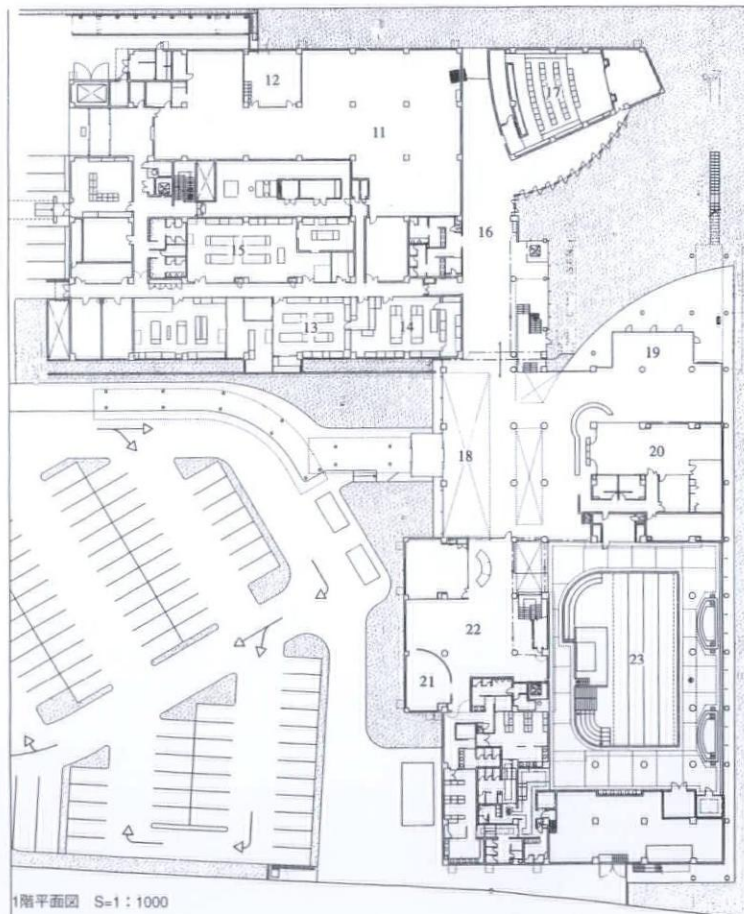


所在地：岡山県岡山市平田408-1
 主要用途：健康増進施設
 構造設計：森勇建築構造設計事務所
 施工：清水建設(株)・前田建設工業(株)・(株)
 荒木組建設工事共同企業体
 敷地面積：15,014.73m²
 建築面積：5,592.62m²
 延床面積：12,436.07m²
 主要構造：A棟：RC造 一部S造
 B棟：SRC造、一部S造
 規模：地下1階、地上4階、塔屋1階
 竣工：1997年2月予定



1階平面図 S=1:1000

- | | |
|-----------|-------------------|
| 1: 玄関ホール | 13: 水質検査室 |
| 2: 待合ホール | 14: 食品検査室 |
| 3: 事務所 | 15: 細菌・食中毒検査室 |
| 4: 調剤室 | 16: ラウンジ |
| 5: 診察室 | 17: ハイビジョンシアター |
| 6: 処置室 | 18: メインロビー |
| 7: 内視鏡室 | 19: ロビー |
| 8: 医療ガス室 | 20: 管理事務室 |
| 9: 電安室 | 21: リラクゼーション |
| 10: 警備室 | 22: ヘルスプロモーションロビー |
| 11: 財団事務室 | 23: 23mプール |
| 12: 役員室 | |



1階平面図 S=1:1000



北立面図 S=1:800

加茂川町民体育館

青島裕之／青島裕之建築設計室

Kamogawa Town Sports Center

Hiroyuki Aoshima / Hiroyuki Aoshima Architect & Associates

クリエイトTown岡山

おそらく体育館のデザインは、常に大空間を覆うための構造と技術の、新しい表現の追求であつたろう。しかしここで表現しようとしたものは、そうした技術的な革新性でもなければ、構造と形態の面白さでもない。ここでのテーマは、体育館というひとつの建築が、その地域あるいは住民にとって、意味のある社会的な存在になりうるか、ということである。

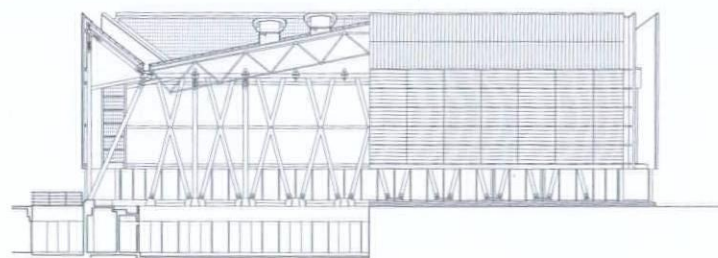
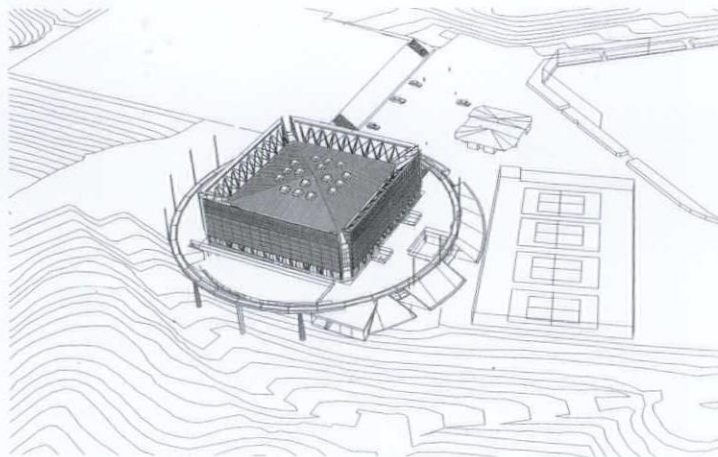
加茂川町は岡山県の真ん中に位置していることから、自ら「ハートオブ岡山」と呼び、誇りとしている。そしてそのキャッチフレーズのもと、中心性や心といったことをテーマとし、意欲的にまちづくりに取り組んでいる。

この体育館は、そうした町づくりを展開する上で、中心的な場となる。単にスポーツの場としてだけでなく、地域コミュニティの生活の核となる空間である。それ故、精神的モニュメントとしての表現が求められた。そこで円と矩形の、単純でシンボリックな構成とし、中心性をテーマとしたこの町にふさわしいイメージを生み出している。

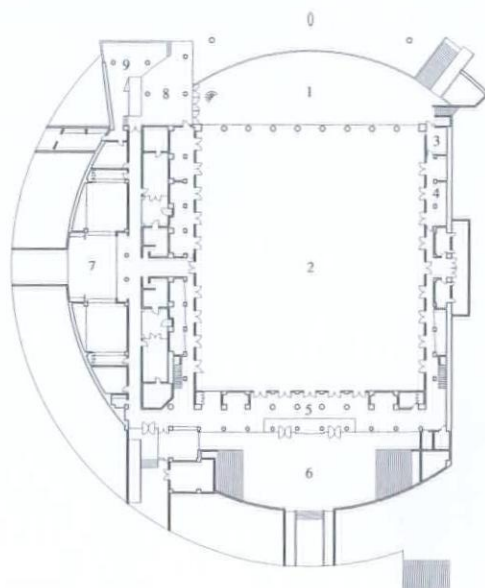
円形の墓壇の上のリングは、一周250mのジョギングトラックである。それは西側では空中に飛び出して、眺望の開けた展望ブリッジとなる。この空間的仕掛けが、町の名所として根付き、地域の人々に親しまれる場を形成してゆく。

墓壇の上に浮かぶ直線の構成のマスは、抽象的で単純な力強さをもって、周囲の自然環境と対峙している。繊細なディテールの処理が、その緊張感を高めている。

内部空間は、様々なイベント空間としても使えるよう、充分な音響・遮音・断熱性能を確保すべく計画している。一般的な屋根架構を採用しているが、構造のシステムと採光が一体となった、明るく開放的な空間となっている。こうすることで膜屋根よりはるかに安いコストで、それに匹敵する明るい空間を得ることができた。構造は矩形のスペースフレームを大きな三角形のフレームで持ち上げる形で、一見不安定な印象を持つが、三次元的な力の流れを考えると、地震力、風圧、長期荷重ともバランスよく解決した、合理的なものである。（青島裕之）



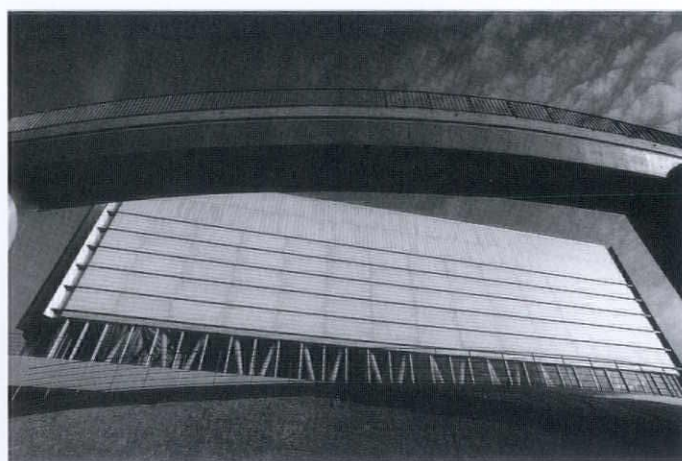
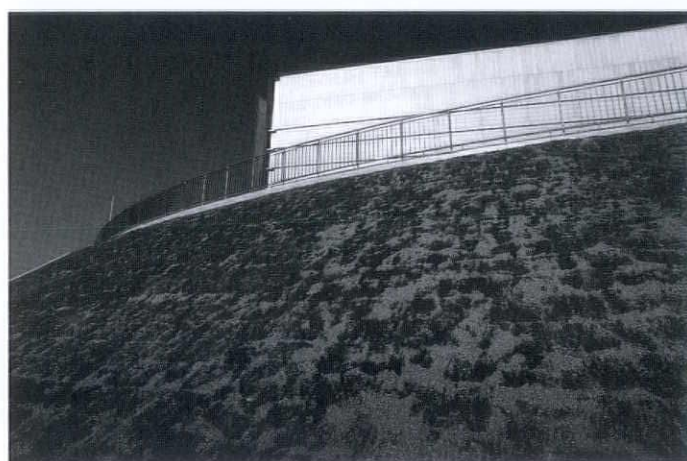
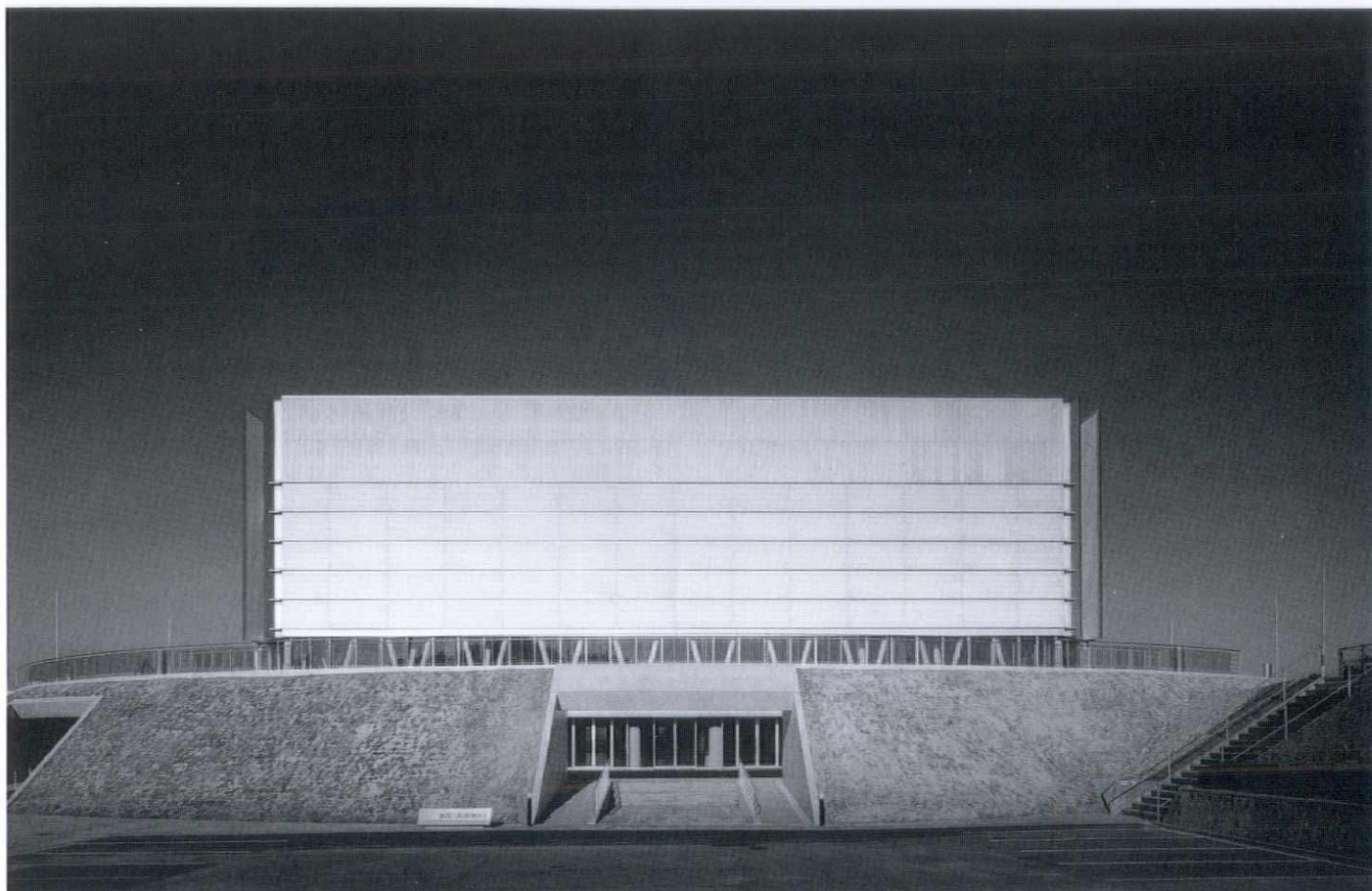
矩計図 S=1:600



平面図 S=1:1200

- 1: テラス
- 2: アリーナ
- 3: 準備室
- 4: 器具庫
- 5: エントランスホール
- 6: 前庭
- 7: 中庭
- 8: トレーニング室
- 9: カフェ

所在地：岡山県御津郡加茂川町上田東2360
 主要用途：体育館
 構造設計：後藤俊三
 施工：(株)鴻池組・蜂谷工業 (株)建設協同企業体
 敷地面積：76,245m²
 建築面積：3,146.534m²
 延床面積：3,555.12m²
 主要構造：RC造+S造（一部SRC造）
 規模：地下1階、地上1階
 竣工：1995年9月







ひるぜんジャージーランド・ビジターセンター

玄・ベルトー・進来 / (株)玄・ベルトー・進来

HIRUZEN Jersey Land Visitor Center

Guen Bertheau-Suzuki / Guen Bertheau-Suzuki Co., Ltd.

クリエイト・タウン岡山

敷地は岡山県北部の鳥取県との県境に近い蒜山高原の牧場である。蒜山三座（上蒜山、中蒜山、下蒜山）の裾野に広がる草原では、濃厚な牛乳がとれるジャージー牛の他に羊も育てられている。

数年前に建設された既存棟に、見学可能なチーズ・ヨーグルト加工施設と15席あまりのレストランを設けたところ、観光客に好評だったので、今回ビジターセンターを新築することで施設全体のキャパシティを拡大しようということになった。

既存のレストランをベーカリーに模様替える傍ら、ビジターセンターには100席のレストランと施主である蒜山酪農農業協同組合の乳製品のための売店を設けることになった。その他、同じ1階に見学可能なハム・食肉加工施設を設け、2階には講演や実体験を通じて地域生産者と消費者との交流推進を目的とした、50席の交流ホールも計画されている。

この地域景観の中で先駆的な役割りを果たしている既存棟を尊重し、その建物を意識した外観デザインを設計の出発点とした。既存棟にならって切妻屋根を特徴とする外観デザインの中で、独自のテーマが見え隠れするように、ガラスを庇の先端に導入した。既存棟と同材の屋根に対し、「見せるための下着」的な要素をこの部分に期待するものである。さらに、金属板葺屋根とガラス庇の重なる部分は、内部空間を暗示させてくれるであろう。

レストラン外観の屈折したガラス面は、この場所がらを象徴する蒜山の山々の移り変わる表情を連想させ、空間を多様化させるひとつの演出装置として考えた。さらに、場所から場所へ、例えばエントランスゾーンからレストラン、あるいは交流ホールへの移動の過程で、その空間ができるだけ多くの姿を見せるように内観のデザインに役割を持たせた。ちょうどひとつの山が見える位置や角度によって全く別の山に見えるように。

(玄・ベルトー・進来)

所在地：岡山県真庭郡八束村中福田956-42

主要用途：レストラン

構造設計：岡田建築設計事務所

施工：母里建設株式会社

敷地面積：12,053.919㎡

建築面積：1,188.95㎡

延床面積：1,261.68㎡

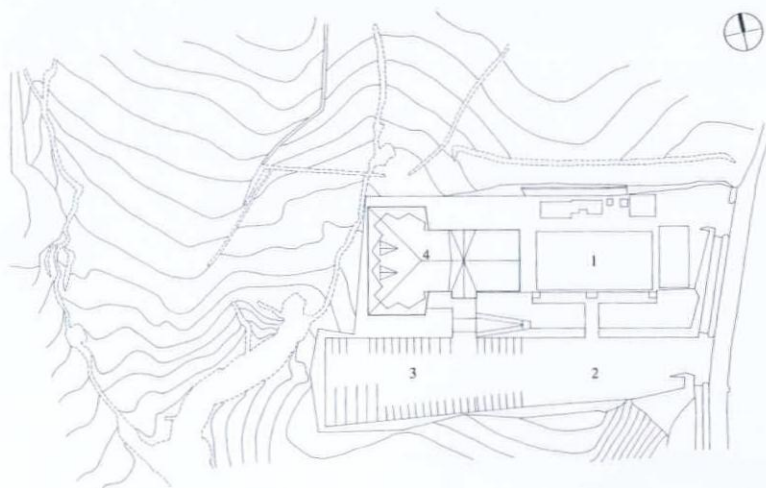
主要構造：S造

規模：2階

竣工：1996年10月

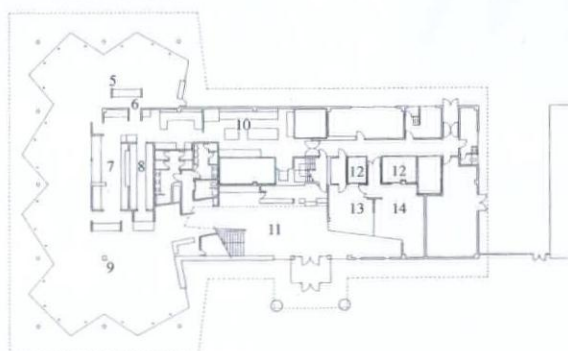
SD9601

96

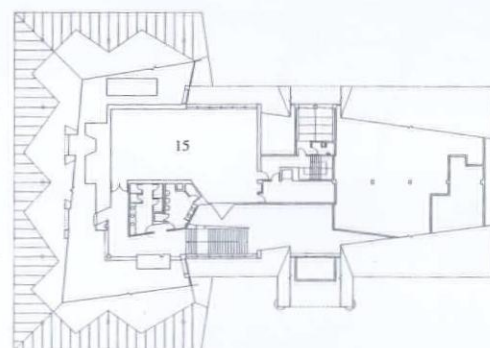


配置図 S=1:2500

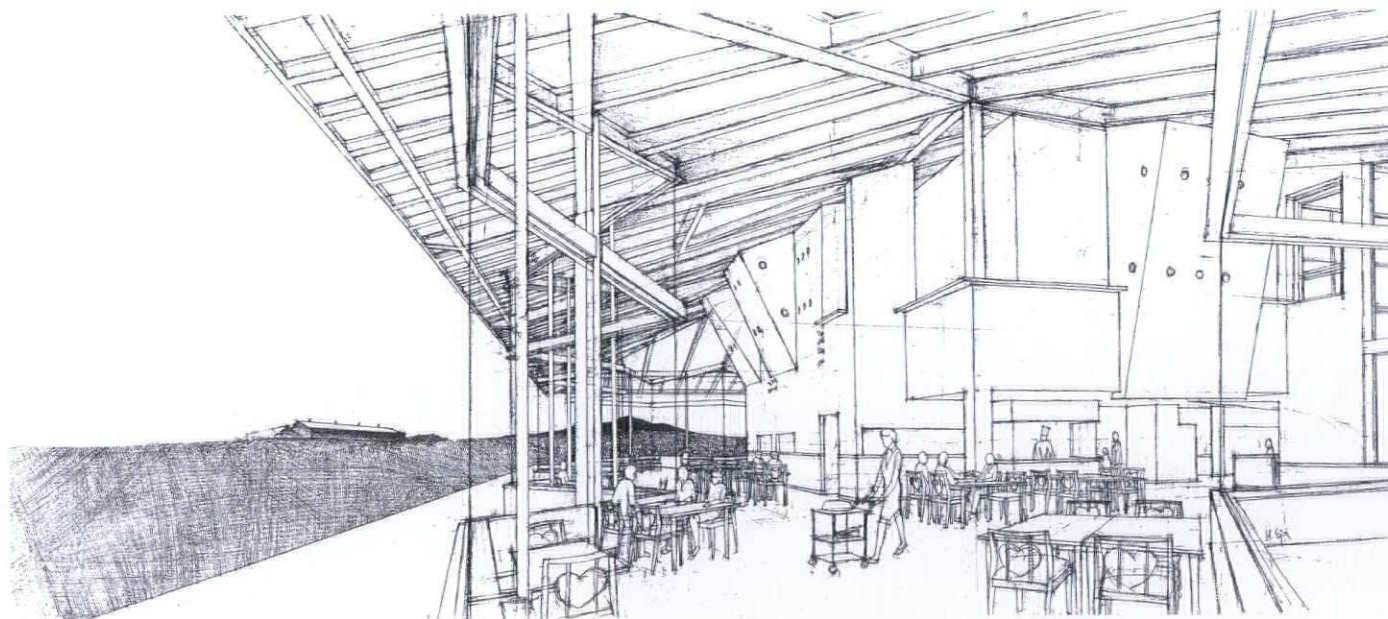
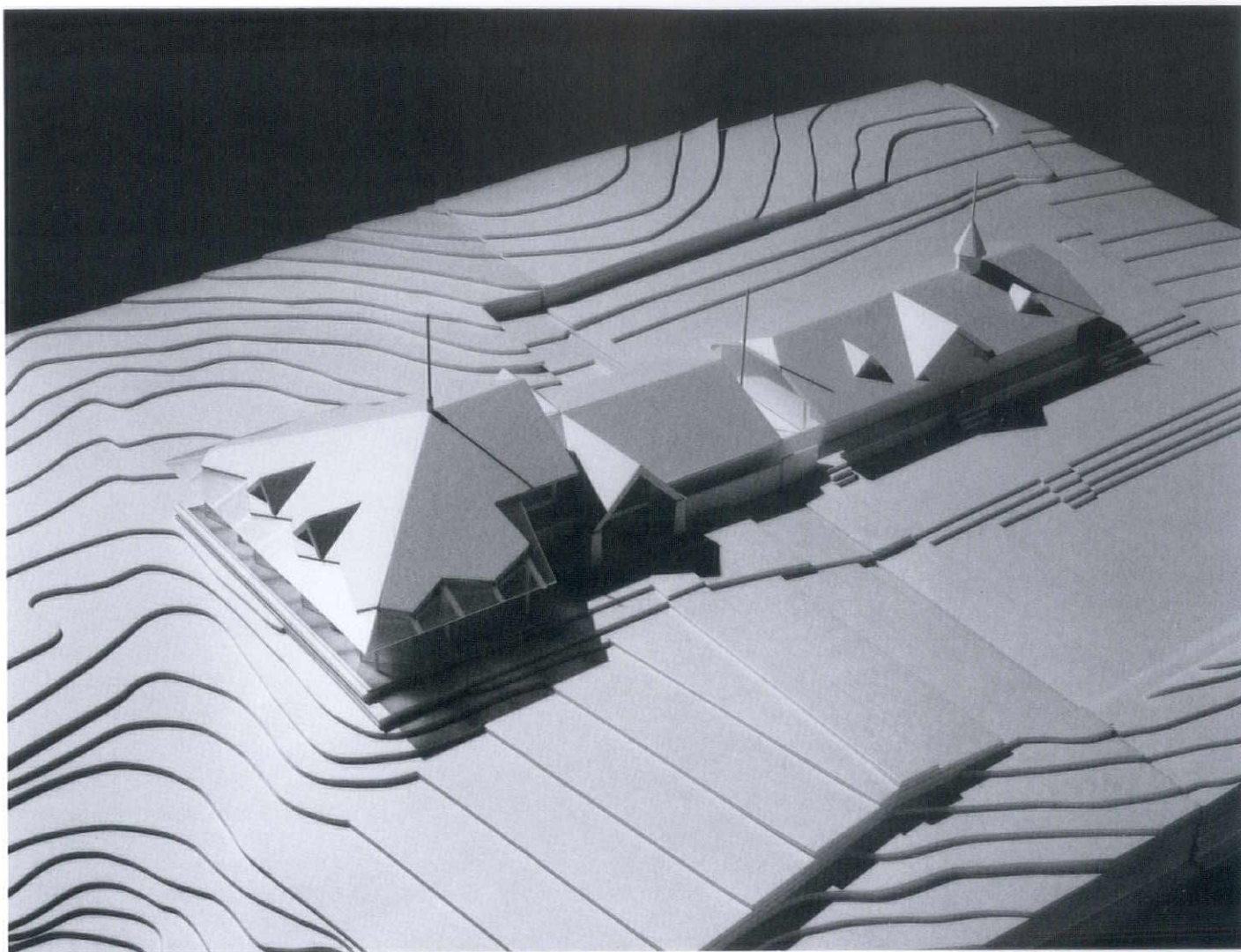
- 1: 乳製品工場
- 2: 既存駐車場
- 3: 新設駐車場
- 4: ビジターセンター
- 5: レストラン1
- 6: サービスエリア
- 7: パントリー
- 8: レストラン厨房
- 9: レストラン2
- 10: 主厨房
- 11: エントランスホール
- 12: 冷蔵庫・冷凍庫
- 13: ハム加工施設
- 14: 食肉加工施設
- 15: 交流ホール



1階平面図 S=1:800



2階平面図 S=1:800



キーセンテンス

「ひるぜんジャージーランド」はジャージー牛を飼育する酪農事業を主体としながら、酪農生産工場を観光客に開放する観光酪農を展開しようとしている。既に建設された建築もあるが、販売飲食等の施設を増設し、より魅力の

ある、楽しい観光酪農事業の発展が期待されている。

単に地域性や、在来の酪農建築のスタイルに頼るのではなく新しく魅力のある発想にもとづくデザインの展開が求められる。CTOに持込まれたということは、在来の枠を破ることが期待されたことと受けとめることができる。

一方、地域がもつ落ち着いた自然環境をも尊重しなければならない。これら二様の指向を巧みに調和させるデザインを期待したい。

□設計者は初案として新鮮なデザインを提案した。事業主体である酪農協同組合もこの案に魅力を感じた様子であ

ったが、既存建物のデザインとの落差が指適され現在案に落ち着いた。そのような流れの中で、最善の努力がなされたと考えている。

(岡田)

岡山県総合教育センター

鈴木 恂 / AMS+高原 康一郎 / 高原建築設計事務所+
寺尾 好文 / 寺尾一級建築設計事務所

Okayama Prefectural Education Center for Research and
In-Service Training

Makoto Suzuki / AMS+Kohichiro Takahara / Takahara Architects+
Yoshifumi Terao / Terao Architects

クリエイティブ・タウン岡山

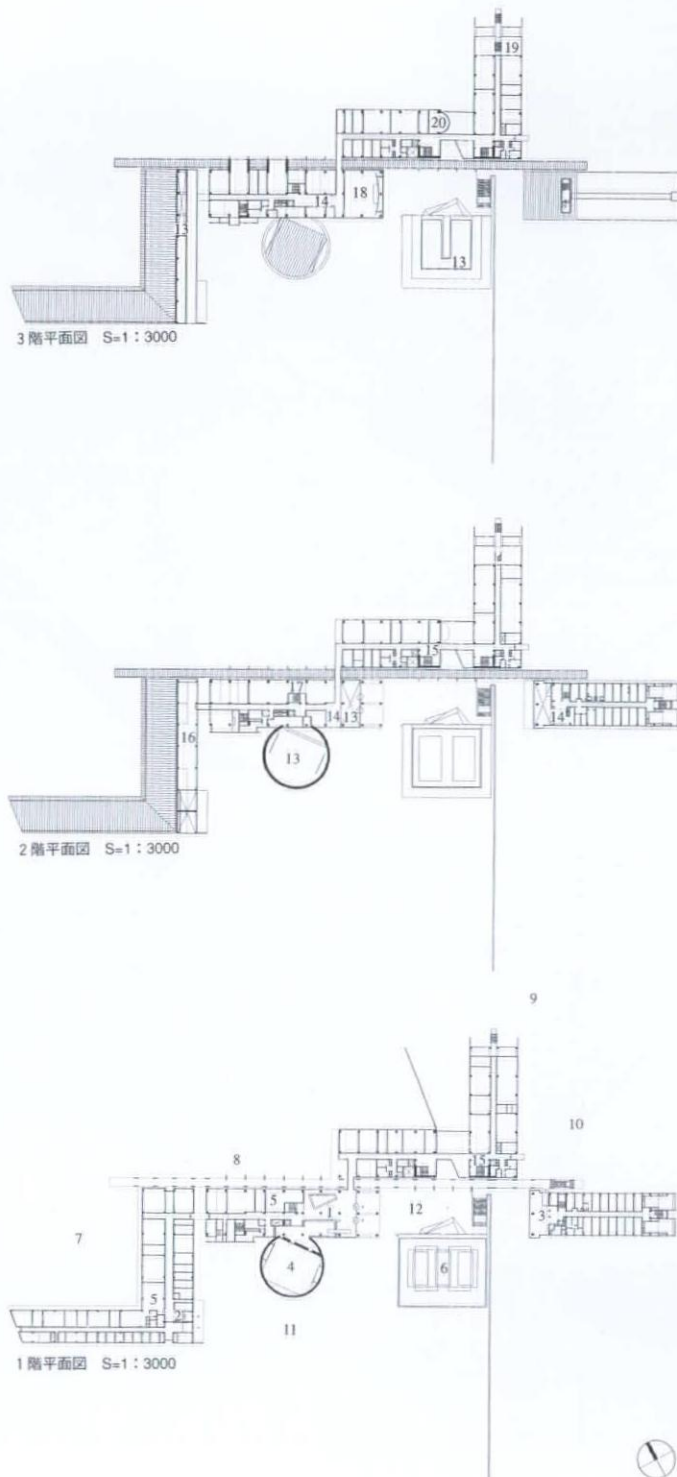
この教育研修機関は多岐にわたる機能を包含した複合施設に近い。研修内容の多様性からいっても、多機能の集約性からみても、単純な構成パターンでは括ることができない。長短期の滞在型の研修に対応すること、周辺自然環境を利用した野外研修の展開を期待すること、情報教育分野での新しい試みの数々、学生参加の実習や演習の実践的研修、そして教育相談や身障者教育の現場を通しての研修などがそこに含まれる。こうして、1ヶ所集中による研修の効率化を計るということは、その分だけ建築的な工夫の様々が重層的に要求されるということでもある。

この施設が計画されている吉備高原都市そのもの、建設過程にある都市である。したがって、高原都市開発の最北端に位置するこの施設は、周辺開発の拠点的な役割を持つとともに将来のまちの環境的な中心になることを予想して計画されねばならない。この施設の広場や回廊などが、体育館やグラウンドと共に地域住民と共有する公園的環境として計画されているのは、その一例である。

このようにして教育研修機関は自己完結した単体の建築ではなく、高原都市の一翼を担うまちのイメージを孕むことになる。ひとつのまちのような研修機関の成り立ちをみると、大きく分けて6部門7棟の建築の群として捉えることができる。その群は、丘陵を造成した地山の大地に線状に並ぶが、ここで採用した配置構成の基準は、そのまちを屋根筋に雁行型に造ることであった。この雁行型の配置を縫うように回廊とデッキが群の間隙に配される。雁行する棟や回廊によって、そこに開いたり閉じたりする庭や広場が生まれ、建築空間の内と外が出入りして、まちを取り囲む自然との接点を増やしてゆくのである。

こうして造られた半野外的な場所、半自然的な領域こそは、研修活動が室内の限定された場から開放されるきっかけを捉え仕掛けであり、研修活動の多様性を支えるための柔軟な空間構造そのものということができる。

これをまちの伽藍配置と見立てて、その群の構成と内外の関わりの中に、CTOのキーセンテンスである「吉備の歴史表現」を思考しつつ、現在、実施設計を進めているところである。(鈴木 恂)



- | | |
|------------------|---------------|
| 1: エントランスホール | 12: エントランスプラザ |
| 2: エントランス | 13: 吹き抜け部分 |
| 3: インフォメーション・ロビー | 14: ラウンジ |
| 4: 大研修室 | 15: エレベーターホール |
| 5: オフィス | 16: ライブラリー |
| 6: 体育館 | 17: 研究室 |
| 7: イースト・ガーデン | 18: 中研修室 |
| 8: コリドー・ガーデン | 19: テラス |
| 9: ロック・ガーデン | 20: プラネタリウム |
| 10: ウェスト・ガーデン | 21: 天体観望室 |
| 11: センター・プラザ | |

キーセンテンス

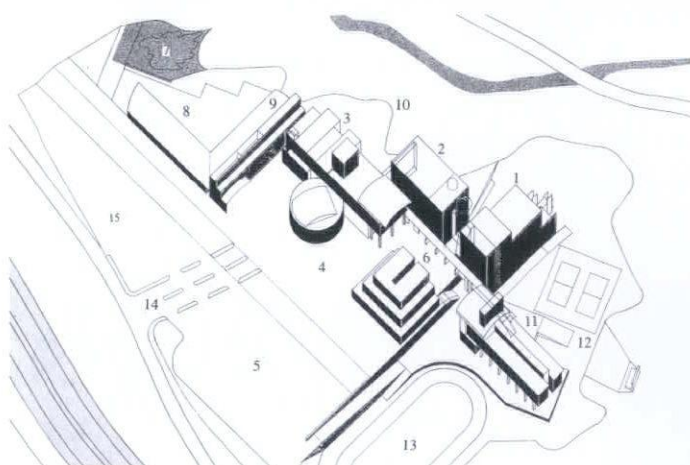
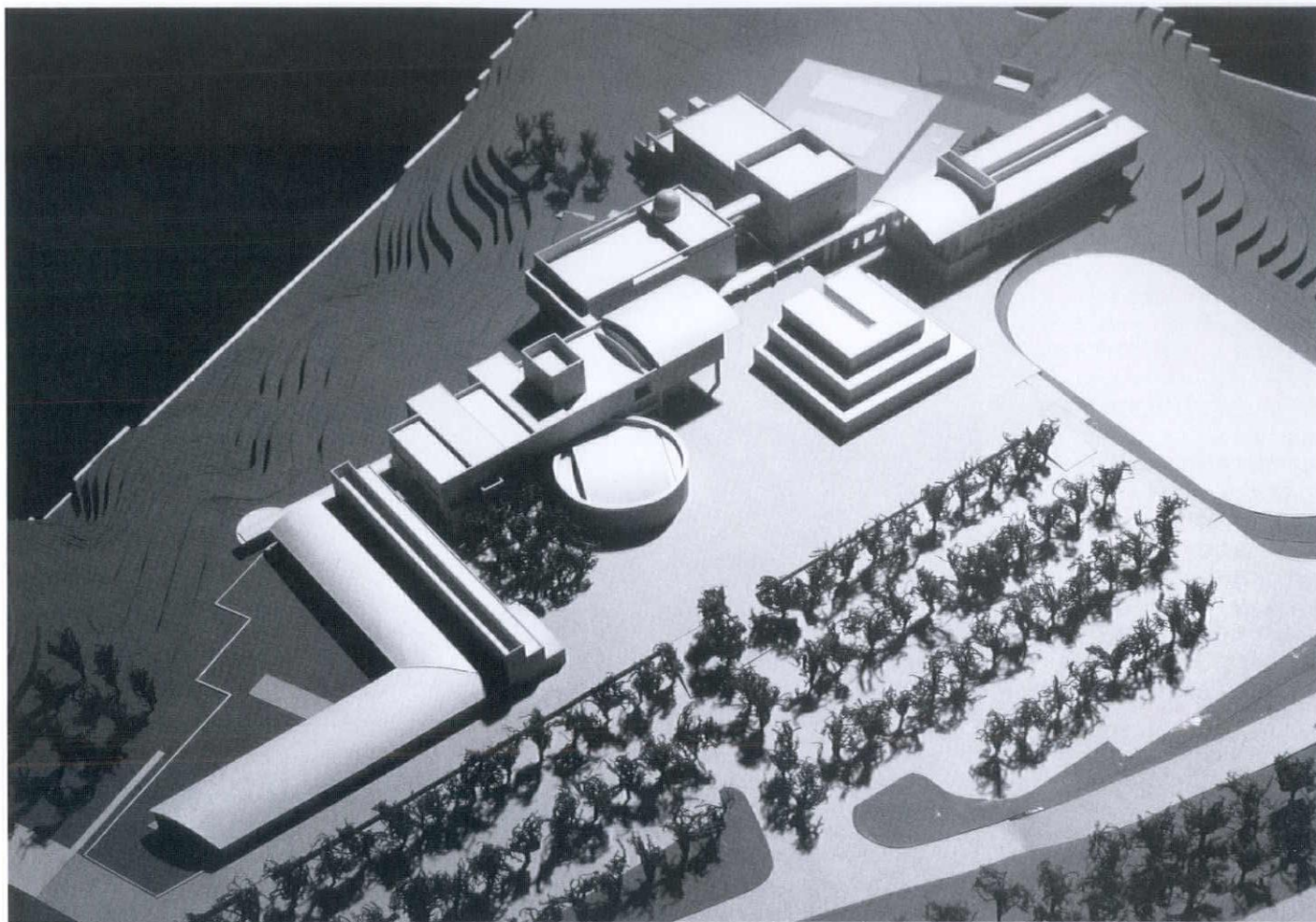
1. 敷地は古代の吉備文化の栄えた土地であり、国分寺の塔が残り、国宝吉備神社などの遺構が多い。このような歴史的な時系への位置づけと県央に位置するというロケーションによって県下の自治体をネットワークする中心域としてとらえられる。

そこに建てられる建築は単に和風瓦屋根といった安易な解決に流れるのではなく、古代に吉備文化が生まれた創成の時に回帰して歴史的脈絡を思索し、解を求めるというものでありたい。

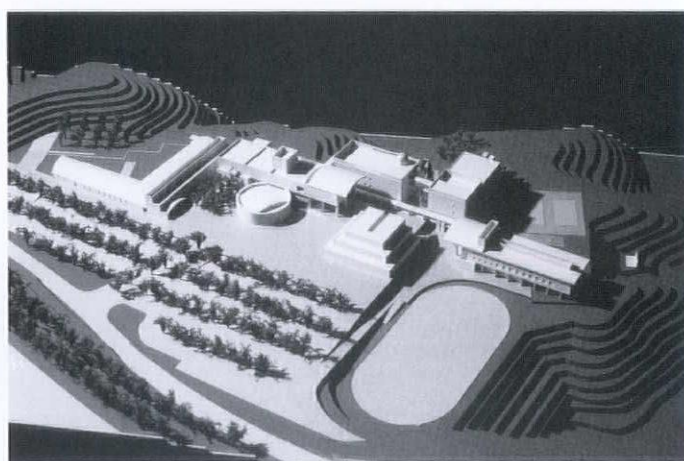
2. 教育センターは単に教科に対する教育知識の再教育のみでなく、新しい教育環境（それはフレキシビリティと空間のゆとりで代表されるだろう）に対する理解、慣れを得ることを可能とするような新しい再教育のための環境空間でありたい。単に研修室が並んでいるようなものでは不十分である。ゆとりをもった空間として心身共にリフレッシュの効果をあげ、新しい「学校システム」への理解を高めるものでありたい。

□吉備という古代文化が栄えた地につくられる新都市であるから、建築のデザインにおいても歴史的建築語彙との関係が模索されるのは当然であろう。これまで建設された建物は歴史との関連が直ちに結びつくという安易な手法がとられている。果して、それでよいのだろうか、という疑問が、コミッション・キーセンテンスを導いている。(岡田)

所在地: 岡山県上房郡賀陽町大字吉川字石塔
7545-1
主要用途: 研修施設
構造設計: 松井源吾+ORS
敷地面積: 145,600㎡
建築面積: 7,500㎡
延床面積: 17,500㎡
主要構造: RC造、一部S造
規模: 地下1階、地上3階
竣工: 1999年度末



- | | |
|---------------|---------------|
| 1: 情報教育棟 | 8: 教育相談棟 |
| 2: 教科教育棟 | 9: 障害児教育棟 |
| 3: 管理研修棟 | 10: コリドー・ガーデン |
| 4: センター・プラザ | 11: 宿泊・食堂棟 |
| 5: 駐車場 | 12: ウェスト・ガーデン |
| 6: エントランス・プラザ | 13: グラウンド |
| 7: イースト・ガーデン | 14: アプローチ |



岡山県立鳥城高等学校・生涯学習推進センター

芦原義信／芦原建築設計研究所＋能勢延美／能勢設計

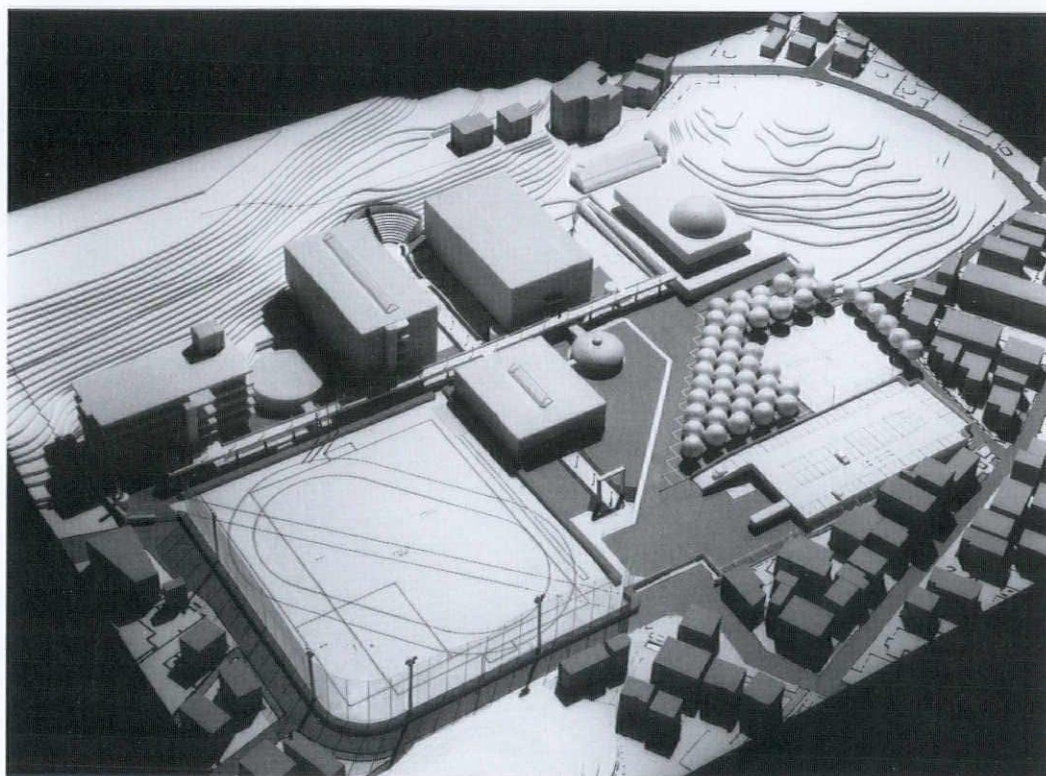
Okayama Prefectural Ujo Senior High School and Center for Promoting Lifelong Learning

Y-ASHIHARA Architect & Associates + NOSE Architectural Office

クリエィティブTown岡山

かつて、われわれの設計した県立児童会館の科学館と、隣接する県立短期大学の施設の一部である4号館（能勢設計）の建物を保持しながら、県立鳥城高等学校と、生涯学習推進センターを合築する計画である。

この計画を進めるにあたって、既存の両建物と新しく建てる施設建物とをうまく無理なく連携させることが大きな条件であった。そこでまず、敷地内の南・北の両端に位置している4号館と児童会館の間（約160m）を、京山の裾野に沿って2段の外廊下で連結させるシステムコリダーによって、全体の秩序を乱すことなく有機的に配置させることにした。そして、この学習施設を連結するシステムコリダーに直交するもうひとつのコリダーをつくり、これにはコミュニティの施設を配置した。この直交するコリダーには、施設全体の正面ゲートを連結させ、一方、京山側には小さな滝や階段状の円形小広場をつくることによって、この施設の利用者のみならず地域住民にも、気軽に集える、楽しい交流の場を提供できるものとする。（二之宮政雄）



キーセンテンス

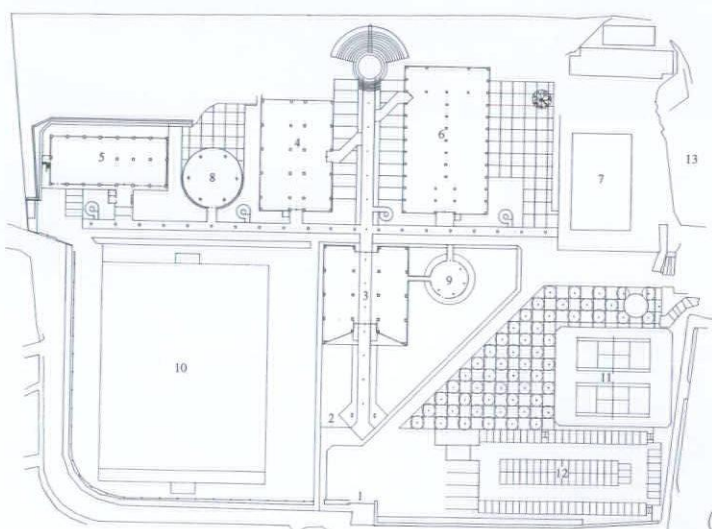
1. 鳥城高校は定時制であるために、昼間と夜間との利用時間帯のズレを利用しながら合築の効果を高めようという企画。定時制高校のオープンスクール化ともいべきテーマが設定されている。

2. 現在の児童会館のプラネタリウムは児童遊園地と共に存続させ児童公園として整備する。

3. 敷地は、京山と県立運動公園に囲まれたのびやかな環境の中にある。また運動公園に接する国道53号には優れた都市建築と評価される「まつもとコーポレーション」本社ビルが建設され、また、明治・大正期に建設された偕行社が運動公園に移設されるなど、周辺の環境整備も着々と行われつつある。

□既存の児童会館は芦原義信によって1962年に設計されたものであり、33年にわたりその役割を十分に果たしてきた。児童会館の一部にあるプラネタリウムは再利用され、新しい施設の中に組み込まれる。

町並みは既に存在する建築を継承しながら文脈が綴られていく。（岡田）



配置図 S=1:2500



立面図 S=1:1500

- 1: 正面入口・門
- 2: 総合案内
- 3: 交流棟
- 4: 講義棟
- 5: 情報・創作棟
- 6: 体育館
- 7: 児童会館
- 8: 学生食堂
- 9: 喫茶
- 10: グラウンド
- 11: テニスコート
- 12: 駐車場
- 13: 遊園地

所在地: 岡山県岡山市伊島町3-1-1、3-1-2

主要用途: 学校

施工: 第1工区: 鴻池組・荒木組建設工事共同企業体/第2工区: まつもとコーポレーション

敷地面積: 44,790m²

建築面積: 6,761m²

延床面積: 12,939m²

主要構造: RC造

規模: 塔屋1階、地上5階

竣工: 1996年11月

健康の森：水のゲート・風のゲート

竹山聖+設計組織アモルフ

Kenko no Mori: Gate
Kiyoshi Sey Takeyama+AMORPHE

「健康の森」は、県北西部の新見市郊外に広がる250haのエリアであり、このエリアに入ったことを強く印象づけるべく構想されたのが、ここに紹介される水のゲートと風のゲートである。「森」の中央を南北に貫く県道の北と南の入口に、それぞれのゲートが配されている。

CTOプロジェクトに昇格し、われわれが案を練る以前に、多くの案が提案されては消えていった。知事がどうしても首を縦に振らなかったのだそうである。以前の案を見、知事の「森」にかけの夢を想像し、また実際に敷地を訪れて現地の空気を胸一杯に吸い込んでみて、求められているものが、「森」の思想を一目で暗示してしまうオブジェであり、「森」の思想というのは人間が自然の恵みを感じ、受けとめることから始まるのだ、ということが即座に理解された。

それぞれの敷地で、自然の恵み、「森」のささやきに耳を澄ましてみた。大地

から水が湧き、空から風が訪れる。森の縁は、そして人間は、水によって生かされ、空気を呼吸している。北の入口の道路沿いには水が流れている。南の入口の谷間をときおり涼しい風が渡ってゆく。それらを何とか形に表すことはできまいかと考えた。県道であることや、三叉に分かれた道であったりすることから、通常の門型のゲートではうまくいかないことはわかっていて、それまでの提案はすべていわゆる門型のそれであった。

門型でないゲートを提案すること。訪れる人々にそれが「森」の入口であることををいきいきと示すこと。「森」が自然を呼吸していることが即座に理解されること。こうした思いが水のゲート、風のゲートにこめられた。

「考えというものはあるもんだなあ。」緊張して臨んだ知事プレゼンテーションの午後、こう言って知事は大きくうなずいた。

水のゲート

10分の1の傾きをもって道路際を流れる水を宙高く持ち上げ、アクア・ダクトとすれば、100mで10m近い落差を生み出すことができる。水を引き、落とすというシンプルな原理で、運動する自然を映し出すことができる。その下流に巨大な水車があったことも、水を持ちいることの意味を強めてくれる一つの要素となった。空と太陽の縁。

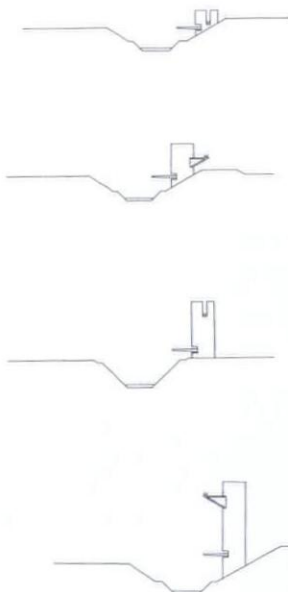
風のゲート

風を受けて運動する形態。風そのものを感じさせてくれる形。金属の羽。重なりでバランスをとってゆっくりと動く。台風でも大丈夫のように、安全を見て設計したので、少々風ではびくともしない。困った。でも風を感じてもらえる形だと思う。秋の終わりに訪れたとき、辺り一面に紫式部が実を付けていて、それがあんまりきれいだったので、その実をそのまま色見本にして塗ってもらった。血と空の間の紫。(竹山聖)

キーセンテンス

1. 哲多・神郷地区に県民の憩う健康の森を創造する。
2. それは単に健康のために過ごす、スポーツリクリエーションの場ではなく、心身共にリフレッシュし、一日あるいは数日を健康に過ごす事のできる別世界でありたい。
3. 敷地の造成及び植生は宮脇昭教授の指導のもとに、他に類をみない自然復元の方法がとられている。
4. このなかに建設される施設は、このような自然との積極的な対話を可能にし共存を可能とするデザインを指向する。そのような哲学をもつことがのぞまれる。
5. ゲイト：このような日常を越える領域へ至る心の転換、期待を誘起する通過領域としてのゲイトを設ける。
6. 現時点では（公によってつくられた）「特別な領域」とみなされるが、これは都市環境における目標を示すひとつの「相」であり、未来においてはこのような領域が地域、都市に広がっていくことを期待したい。

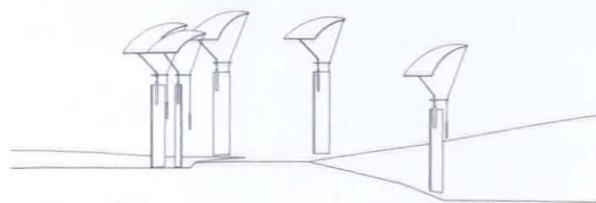
□「健康の森」のプロジェクトはCTOに乗る前に既に建設の一部が進められていたが、それらは旧態の安易な形態による建物で魅力は乏しい。そのためには新鮮な気風をもつ建築家を推薦したいと考えた。(岡田)



水のゲート・立面図 S=1:800

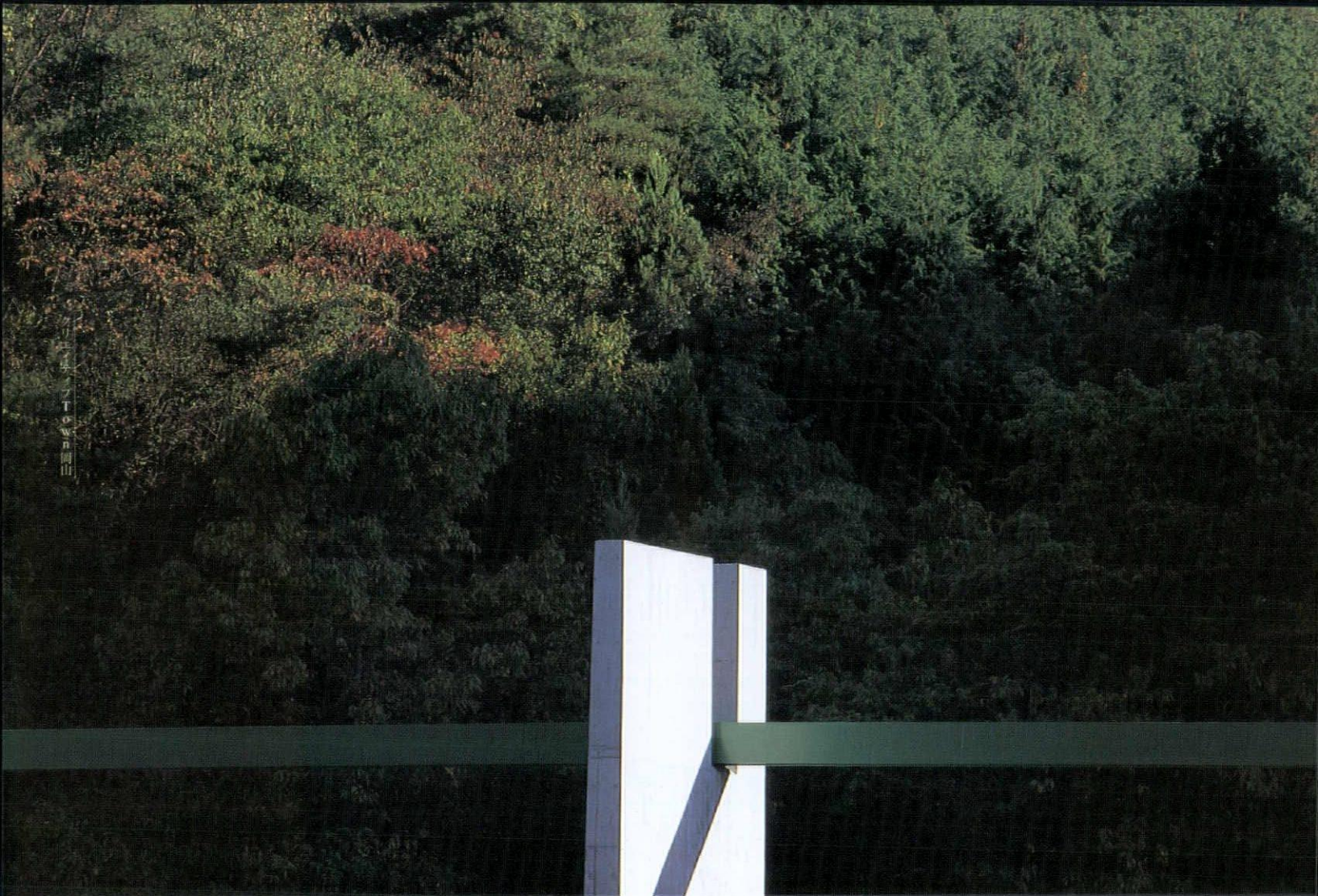


風のゲート・平面図 S=1:800



風のゲート・立面図 S=1:600

所在地：岡山県新見市
構造設計：今川憲英(TIS & PARTNERS)
竣工：1994年1月





健康の森：センター施設

竹山聖十設計組織アモルフ+貴田茂／創和設計

Kenko no Mori: Center Facility

Kiyoshi Sey Takeyama + AMORPHE+Shigeru Kida / SOWA
Architectural Associates

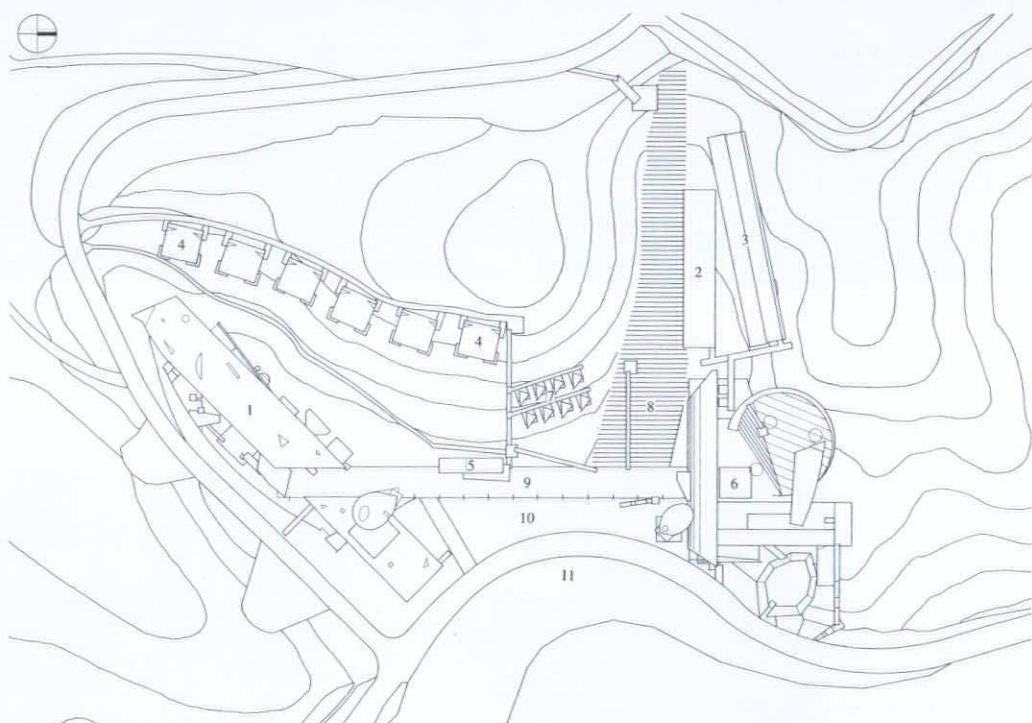
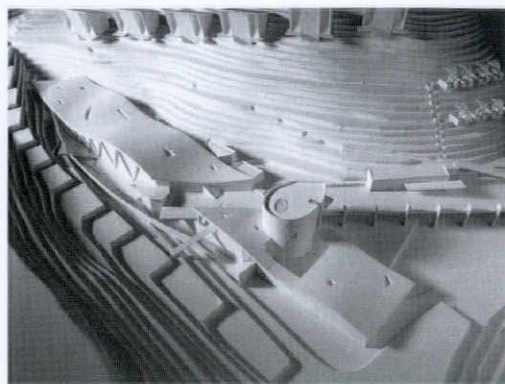
クリエティブ・タウン岡山

「健康の森」全体の運営の中心的な機能を果たす施設である。宿泊、研修、飲食、管理という基本的な機能をベースに、プログラムを組み立てた。

与えられた敷地は、およそこのあたりというくらいの、ほとんどどこにどう建ててもよいような話だったので、南と北の二つの丘の間の谷間をゆっくりと上って、表の広場から裏側のテニスコートに出られるように、木でできた大きな階段をつくり、その北側の斜面にへばりつくような宿泊棟をふたつ並べることにした。宿泊棟を高く持ち上げたのは、谷間が湿っぽいためと、陽が当たるようにと、景色がよいであろうから。広場に面した斜面の中腹になかなかの枝ぶりの栗の木があったから、この栗の木を囲むように中庭をとった。ギャラリーとレストランがここに面している。広場の側にカフェを置いたから、道行く人々や広場のイベントが楽しめる。ほとんど地形に埋もれるような建物だから、アプローチの側に、よっきり突き出した木造のホール棟を置いた。ホールの下は、「森」の思想を感じてもらう展示室になっている。インフォメーション・センターもその隣にある。

もともとはセンター施設と切り離して、向かい側の広場に計画されていた温水プールを、南の丘の裾の道沿いに長く伸びた形で置き直し、センター施設とデッキでつないで、一体化することにした。広場がそのまま野外劇場になるようなすり鉢状の良い形をしていて、もったいなかったからだ。デッキはステージと呼ばれ、野外劇場を眺めながら夕涼みができる。宙に浮いた木のデッキだ。この斜面には、大きな声ではいえないが、まわしが出るのだ。ステージに沿って、バーベキューテラスが並ぶ。その上にはコテージが木の間隙れに見えるだろう。ステージが、すべてのプログラムをつないでいる。つまりは自然の中の超領域である。

(竹山聖)



配置図 S=1:2400

- 1: アクア・アミューズメント棟
- 2: ペンションハウス棟
- 3: ペンションハウス棟
- 4: コテージ
- 5: ショップ棟
- 6: センターハウス棟
- 7: バーベキューテラス
- 8: ステップス
- 9: ステージ
- 10: アプローチ
- 11: ふれあい広場



立面図 S=1:2400

所在地：岡山県新見市

主要用途：センターハウス、ペンションハウス、

アクア・アミューズメント、コテージ

構造設計：今川憲英 (TIS & PARTNERS)

建築面積：6,859㎡

延床面積：8,958㎡

規模：地下2階、地上2階

SD9601

104

水島サロン

芦原太郎／芦原太郎建築事務所＋丹羽英喜／丹羽建築設計事務所

Mizushima Saloon

Taro Ashihara Architects+NIWA ARCHITECT & ASSOCIATES

〈水島サロン〉は、「定住環境としての新しい都市の創造を目的とし、長期に渡ってアイデンティティを持った都市環境を醸成していく」というクリエイティブタウン岡山の理念に基づき提案された、芸術・文化・スポーツなどの複合的な施設を備えた交流の拠点である。周辺施設との連携、地域に開かれた施設となるように配慮されている。

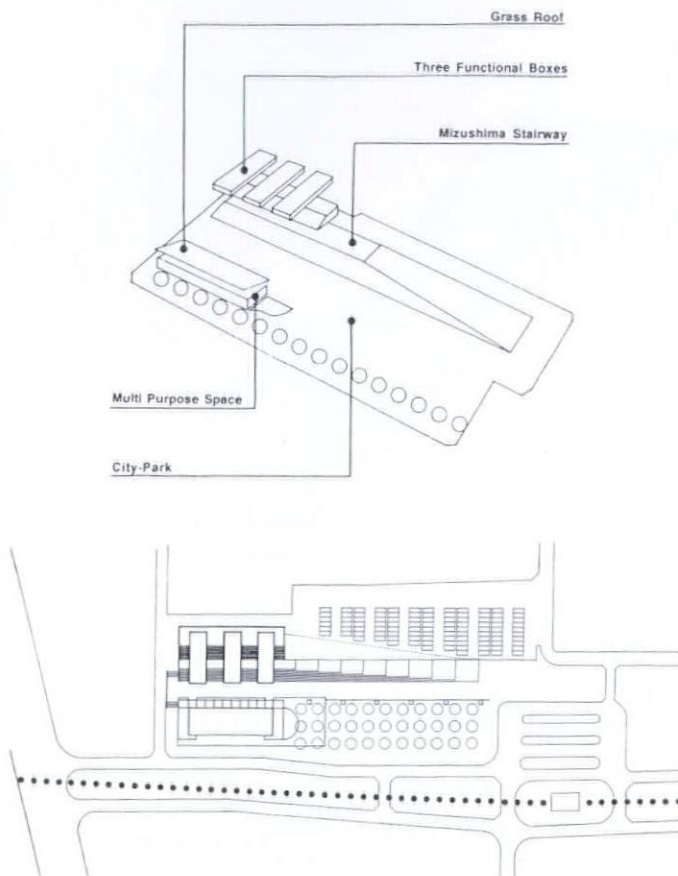
計画は、異なる機能を有した3つの「ボックス」、緑の屋根を持った「多目的スペース」により構成され、それらが水島階段・緑の広場・緑の斜面・プラザ・屋外駐車場といった「外部スペース」と一体となり都市公園を形作っている。

駅からのアプローチでは、起伏に富んだ緑の広場の木々の隙間から、緩やかに延びる階段が見える。この階段は広く人々に開放され、建物への導入経路としてこの施設の骨格となっている。

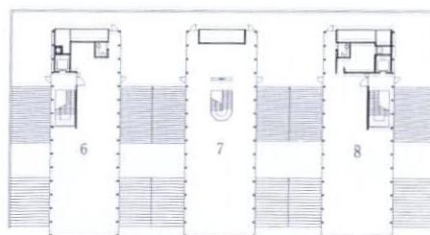
「多目的スペース」の上部は緑の屋根で覆われ、緑の広場の延長としても捉えられている。そして階段の最上段からは3つの「ボックス」が浮遊する。夜景も考慮されたこの3つのガラスのボックスは、視覚的に水島地区の中心地点としてのメッセージを発すると共に、地域に開かれた器としての機能を果たす「ボックス」として、この地区のアイデンティティともなるであろう。

(芦原太郎)

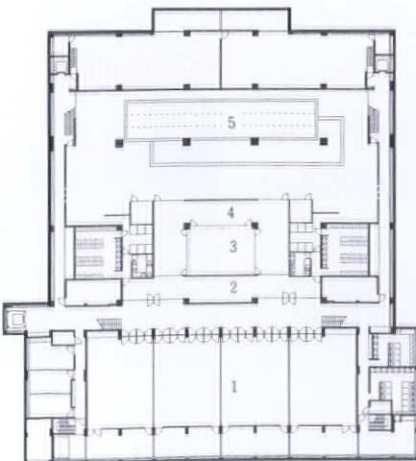
- 1: 多目的スペース
- 2: ロビー
- 3: スタジオ
- 4: トレーニングルーム
- 5: スパ
- 6: サロン
- 7: インフォメーションコーナー
- 8: レストラン



配置図 S=1:2000



3階平面図 S=1:1000



1階平面図 S=1:1000

所在地：岡山県倉敷市水島東千島町

1-15.22

主要用途：交流集会施設／1F：多目的スペース、ブル、トレーニングスペース／2F：会議室、ショップ、カフェ／3F：メインロビー／4F：レストラン、情報コナ、交流サロン

構造設計：構造計画 プラス・ワン

施工：(建築) まつもとコーポレーション・和田組JV

敷地面積：14,383.93㎡

建築面積：3,169.57㎡

延床面積：5,229.75㎡

主要構造：RC造(一部SRC造・S造)

規模：地上4階

竣工：1996年予定

キーセンテンス

1. 周辺は無機質な工業都市であるから、近くの玉島や旧倉敷のような歴史と伝統をもつ港町、天領都市とは異なった、未成熟で無性格な様相を帯びている。まだ都市的文脈がつくられつつある様子はみられない。

水島サロンは都市文脈を意識して建てられる最初の建設である。今後の「町造り」の流れを方向づける重要な役割を担う。

2. 建築を設計する側が今後の文脈の基本単位となる建築デザインを決めるのではなく、アドバイザーや、また、場合によっては市民参加によって基本計画がすすめられる……ということも、文脈形成の大きな役割をもつプロジェクトとしては重要なことである。

玉島や旧倉敷がもっているような伝統的デザインは工業都市である水島には相応しくないであろう。無機質な工業地に対応する精神性の追求、即ちヒューマンな空間や表現を追うこととなる。

3. 運営について(1)

多くの市民にとって使い易いサロンであることが、この施設を成功に導く鍵となるであろう。そのなかで主要な問題は「多くの市民」が「多様な市民」であることである。多様な使われ方を整理する方法として先づ、会員制、非会員制による運営が考えられている。運営ソフトの第一歩であるが、そのためには、都市の広場に相当する空間、即ち「幹空間」をサロンの中心に配置し、その奥に会員制によるサロンの入口が設けられ、手前の比較的人りやすい場所に非会員制組織サロンの入口が配置されるというようなことが考えられる。

4. 運営について(2)

水島に在る多くの企業の協力が必要である。企業が、自社内にサロンをもつのではなく、〈水島サロン〉を社員のみならず多くの人々との開かれた情報交換の場、そしてくつろぎの場として利用することを期待するものである。

□水島は倉敷市の一地区であるが、倉敷というだけで、月並な伝統形態が横行することになる。水島は地区生成の経過からも分るように、倉敷とは全く異なる性格をもちながら倉敷に含まれている。そのような地域が如何なる景観を定着させていくか、建築家側の問題というより、むしろ市民や行政側の問題としてコミッショナー・キーセンテンスを起草している。(岡田)



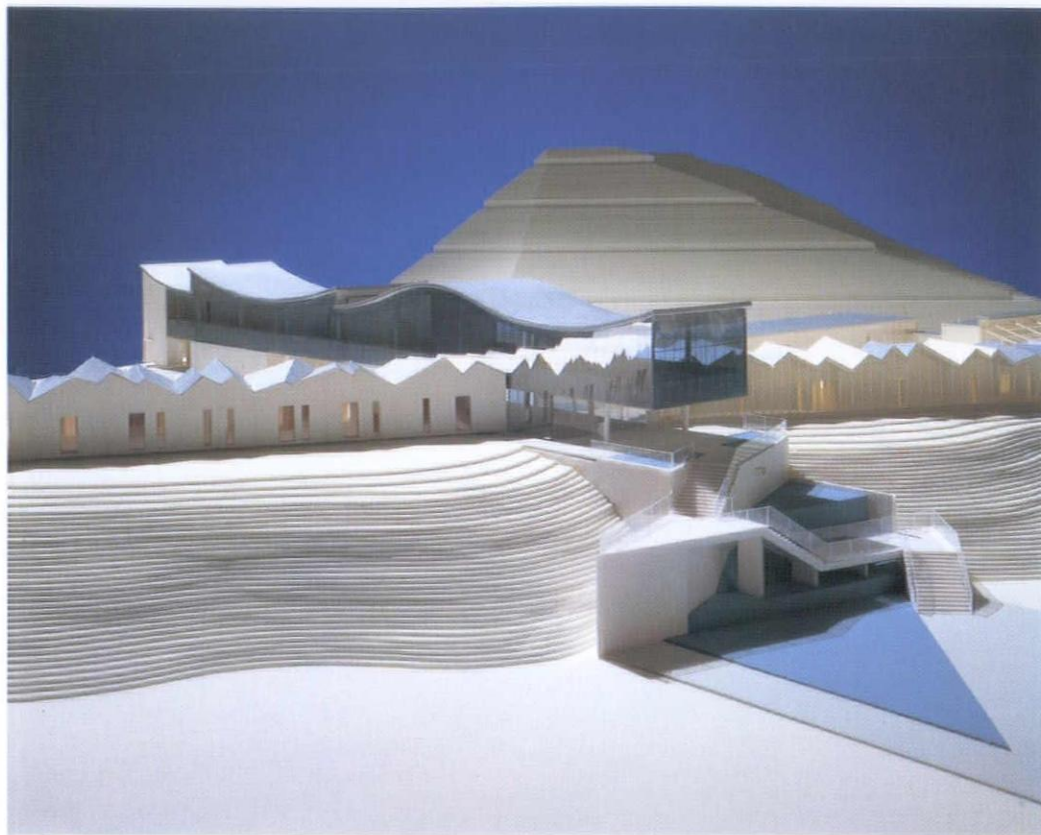
岡山県バイオテクノロジー研究所

土岐新／土岐新建築総合計画事務所＋芝村満男／ベン建築設計

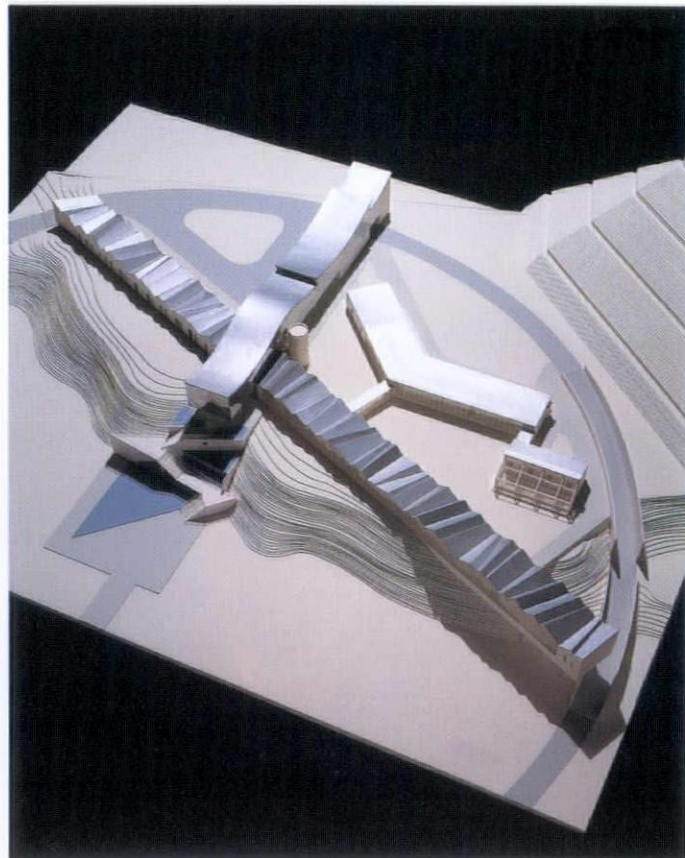
Okayama Prefectural Research Institute of Biotechnology
Shin Toki Architect & Associates＋ben architects & engineers

この計画は吉備高原都市、すなわち岡山県の中央部の山岳地に建設が進められている都市計画の一部である。周囲はなだらかな山並みの連続で、見渡すかぎり建物もまだ見当たらない緑の海原といった美しい風景に囲まれた場所で、敷地の広さは平らな部分が4ha少々あり、周りの山も含めた広大な場所にバイオテクノロジーの施設を計画したものである。敷地はかなりの山と谷を造成して平にしたものだが、中央よりやや北に自然のままの法面を残して、北側と南側とでは約6.5m程の高低差がつけられている。北側は切土で南側は谷を埋めた盛土になっているため、北側に建築物を主に配置し、南側は農園として使用される計画になっている。また農園は敷地の南面を通る幹線道路より約10m程高くなっている。このような環境の中で、まず敷地内の車の動線としての道路を円形に描き、求心的なシンボルとして配置計画の特徴を持たせている。建物はこの円に対して構成されているが、周囲の状況に合わせてふたつの軸線を持っている。ひとつ目の軸線は、すぐ目の前の敷地に計画されている建物の軸線と同じにして共通性を持たせた。もうひとつは、西側に計画されているハウジングの道路計画でメイン道路が南北軸をとっていることから南北軸を設定し、ふたつの軸を交差して建物の主な構成としている。歩行者の動線は円の南端のゲートを通り、南北軸にそった歩道を進んで6.5mの高低差を結んだ階段からアプローチできるようになっている。階段と絡んで水が流れていて、憩いの場にもなっている。農園にもふたつの大きな池や小川などを配して静かなやすらぎの空間をつくりだしている。

建物の折板の屋根は、構造的な理由もあるが敷地の中央に残した自然の法面にある松林の間から見えるシルエットの面白さを意図したものである。その折板の建物と交差している南北軸の2階建の建物は、屋根が緩やかな曲線で波打っている。主に反りの曲線を描いているが、それは日本の伝統の中で多く使われ、西洋の伝統にはない日本の穏やかな山並みに美しく映える曲線として使われたものである。(土岐新)



所在地：岡山県上房郡賀陽町吉川字地蔵ノ礼
7594-1
主要用途：研究所
構造設計：(有)レン構造設計事務所
施工：(株)大本組、中村建設(株)
敷地面積：43,000m²
建設面積：2,702.3m²
延床面積：2,974.4m²
主要構造：RC造(一部S造)
規模：地上1階(一部2階)
竣工：1996年10月予定



キーセンテンス

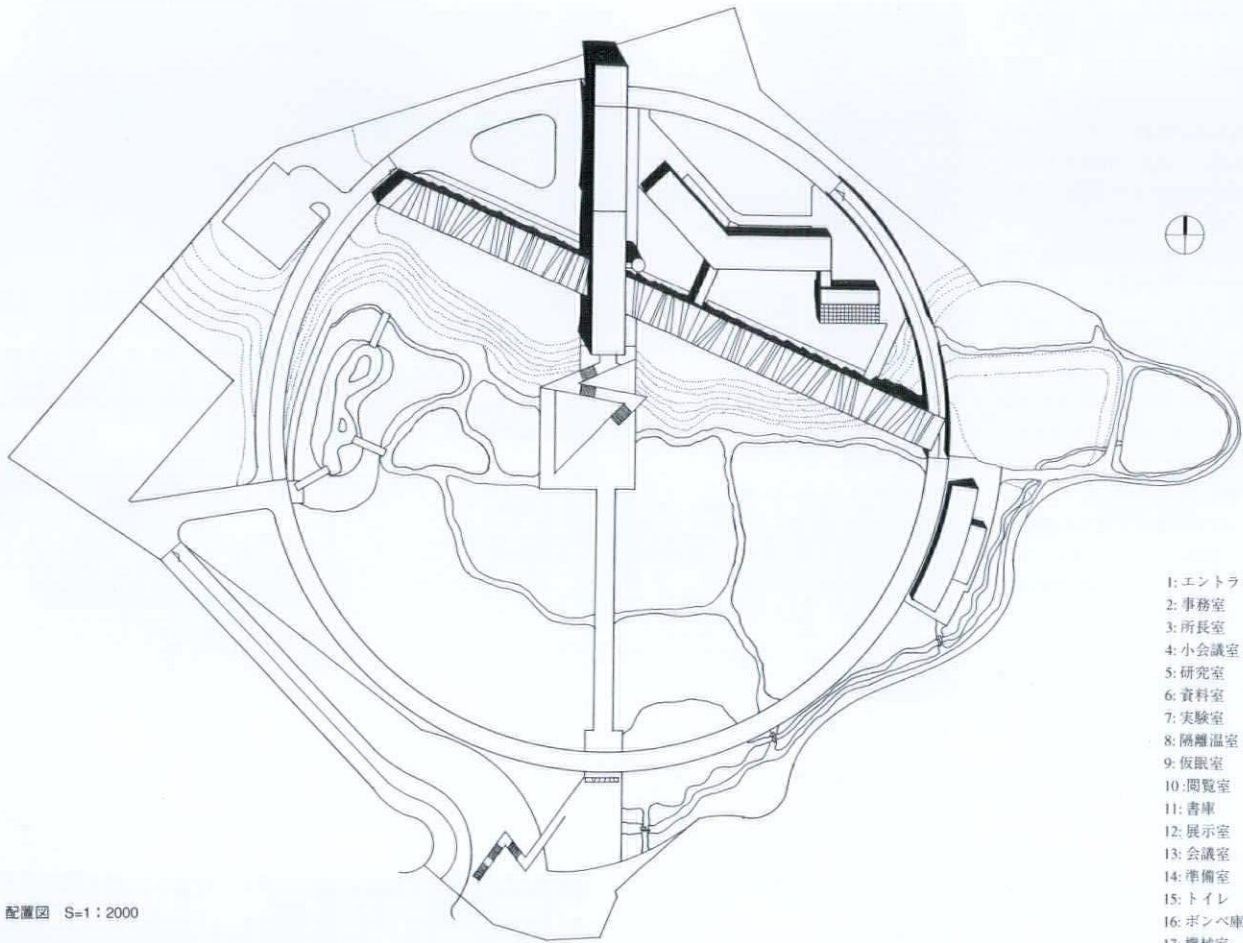
1. 吉備は岡山発祥の原点であり、歴史的な脈絡を重視する必要がある。吉備文化という歴史性を踏まえながら、バイオという先端的イメージを出していかなければならない。
2. 吉備高原は自然が美しい土地である。安易に造成を行うのではなく、建築のデザインとからんで外構計画が行われ、そして造成設計が行われるという手順で進めたい。

3. 岡山県には「緑の政策」があり植生の再構築を宮脇昭教授が指導されている。このような動きと連繋をとりながら、緑の修景に留意する必要があるだろう。
4. バイオ研究所としての使い易さと、研究の展開に対応しうるフレキシビリティを計ること。
5. CTOプロジェクトとして先行している隣接の「岡山県総合教育センター」のキーセンテンスはこのプロジェクトにおいても踏襲される。

- 造成計画は先行しており、必ずしも

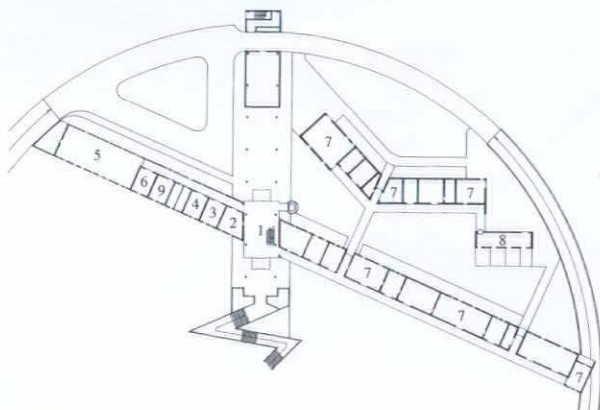
十分な結果を得ることはできなかったようである。上部構造(建築)からデザインされた環境計画と、下部構造(土木)とのすり合せは今後に残された大きなテーマであり、好ましい協同作業が組まれるようになることを期待するものである。

(岡田)

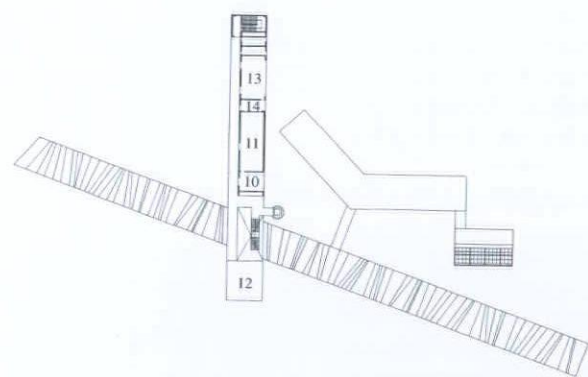


配置図 S=1:2000

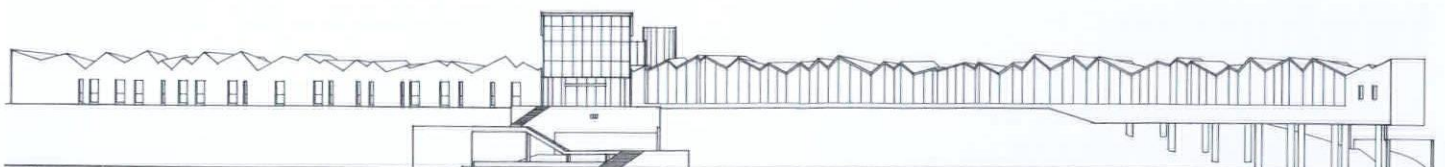
- 1: エントランスホール
- 2: 事務室
- 3: 所長室
- 4: 小会議室
- 5: 研究室
- 6: 資料室
- 7: 実験室
- 8: 隔離温室
- 9: 仮眠室
- 10: 閲覧室
- 11: 書庫
- 12: 展示室
- 13: 会議室
- 14: 準備室
- 15: トイレ
- 16: ボンベ庫
- 17: 機械室



1階平面図 S=1:2000



2階平面図



西立面図 S=1:800

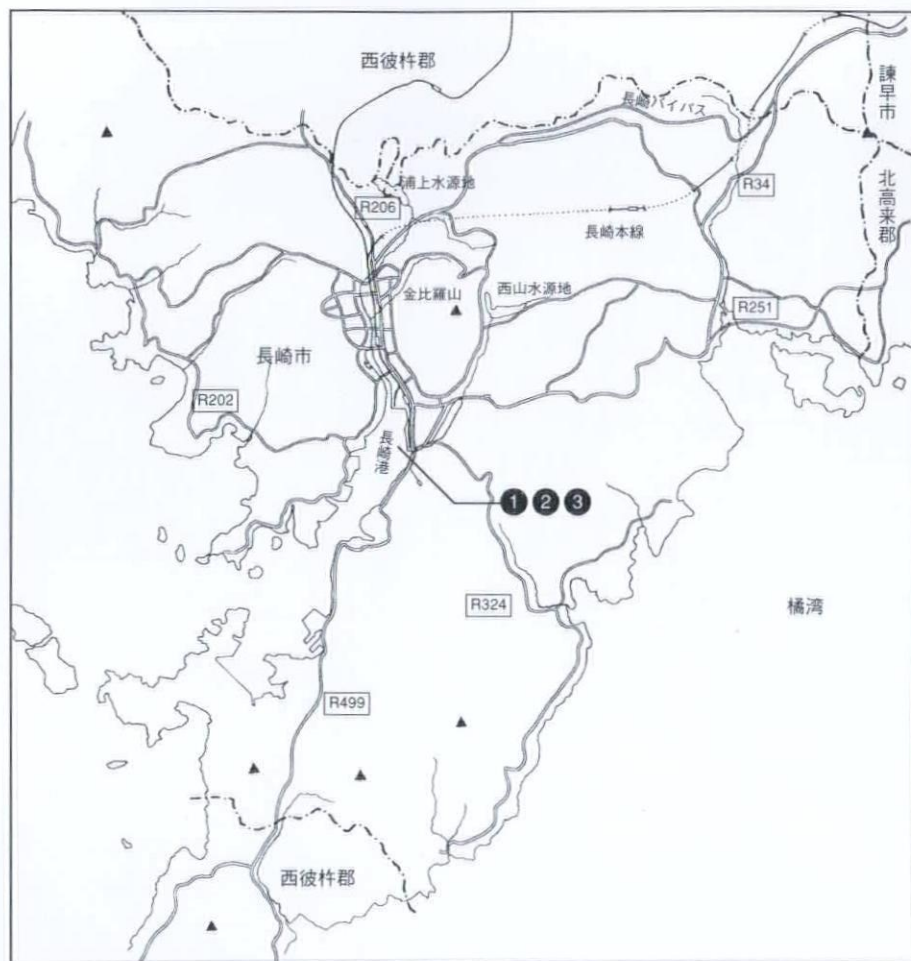
長崎アーバン・ルネッサンス

Nagasaki Urban Renaissance

長崎県では、1986年に「ナガサキ・アーバン・ルネッサンス2001構想」を策定、推進していた。その後、1990年に「都市プロジェクト顧問」が指名され、以前とは違った手法を持った都市づくりへのアプローチが提案された。

それは、長崎という都市を読み込んだ結果の、大開発構想ではなく自然治療法的都市づくりである。

以下は、ようやくその姿を見せ始めた「ナガサキ・アーバン・ルネッサンス2001構想」プロジェクトである。



1. 長崎港ターミナルビル
高松伸／高松伸建築事務所＋三菱地所株式会社一級建築士事務所
長崎市元船町
2. 長崎港元船B棟上屋
北川原温／北川原温建築都市研究所
＋三菱地所株式会社一級建築士事務所
長崎市元船町
3. 長崎港元船C棟上屋
マイケル・ロトンディ／ロトアーキ
テクツ＋三菱地所株式会社一級建
築士事務所
長崎市元船町

90年当時、市中心部の背骨にあたる112haの地区を対象に、都市再構成のプロジェクト「ナガサキ・アーバン・ルネッサンス2001構想」（以降NUR2001）が既に推進されつつあった。全国各地の類例にないNUR 2001も各種調査や委員会、あるいは推進会議等で合議しながら進められ、当時流行していたコンベンション都市化を目指すという基本方針が決定されていた。だが、建築のデザインレベルや都市開発の面でやや遅れを感じさせていた長崎では、豊富な観光資源を有するにもかかわらず、経済は低迷を示しNUR 2001も戦略等の見直し機運にあった。こうした事情から、長崎県では新たに「都市プロジェクト顧問」の制度を設け、知事および担当部局への助言とともに、プロデューサーのような役割を務めながら、構想推進に向けてリードしてゆく方法を投入してゆくこととなった。いわゆる外部の知恵の積極的な導入を計ろうという訳である。（堀池秀人）

ナガサキ・アーバン・ルネッサンス
2001構想について

德永正憲

1. 構想策定の経緯とその概要

長崎は港を中心に栄えてきた町である。港を中心に、山に囲まれた地形は独特の景観を形成し、特に港に映える夜景は美しく、我々市民の誇りである。しかし、このような地形は地域の発展に制約を課すことになり、それを打開するための町の発展策として、海面の埋立に活路を求めてきた。ハード面から見た長崎の歴史は、まさに埋立の歴史といえる。

近年、高度成長期以降、長崎市中心部においては都市機能の集中、交通の渋滞、公園・緑地などのオープンスペースの不足など、都市機能・都市環境の悪化が進んできた。また、長崎の基幹産業である造船・水産・観光の行く末にかけりが見えてきた状況の中で、長崎のこれからの活性化対策を何処に求めるかが課題であった。

こうした状況の中で、都心・臨海部において工場の移転、漁港機能の移転、港湾の再開発計画等のさまざまな動きがでてきた。この時期をとらえて、長崎の都市の再生を図るためのまちづくりプロジェクトとして策定されたのが「ナガサキ・アーバン・ルネッサンス2001構想」（以下「NUR2001構想」）であ

る。産学官60人から成る構想策定委員会を設け、2年がかりで検討し、昭和61年3月策定した。

このプロジェクトの対象区域は、事業化の動きがあり、計画実行の可能性が高い、長崎都心・臨海地帯(松山運動公園から松ヶ枝国際観光船埠頭に至る南北5km、面積約112ha)である。

基本理念と都市経営戦略

構想の基本理念として、安全で快適な文化のある生活が享受できる「人間環境都市」、地域経済活力のある「高次産業都市」、国際社会に開かれた「国際平和交流都市」の3つを掲げ、この目標達成のための都市経営戦略として「情報交流拠点都市（コンベンション都市）」を目指すこととした。

5つの戦略プロジェクト

コンベンション都市を実現させるための具体的な戦略プロジェクトとして、1. コンベンション施設プロジェクト 2. 水と緑の都市環境プロジェクト 3. 文化施設群プロジェクト 4. 都心型住宅プロジェクト 5. 高度業務地区プロジェクトの5つを考え、計画対象区域内に、それぞれの地域の特性に応じて各

プロジェクトを配置した。

先行プロジェクト

「NUR2001構想」の対象区域の中で、臨海部の内港地区は事業実施の熟度が高く、具体的な動きもでてきていたことから、先行実施地区として位置付け、「長崎港内港地区再開発事業」を県事業で推進することとした。

老朽化・陳腐化した港湾機能を再整備すると共に、コンベンション都市としての中核機能を当地区で受け持ち、併せて海に開かれたシーサイドパークを整備することとして、昭和63年2月港湾計画（一部変更）を決定した。

現在計画している内港地区再開発事業は元船地区は、内港地区の港湾機能を集約することとして、北側に物流（貨物バース）、南側に人流（五島フェリー、ジェットフォイル、沿岸航路等）を計画し、旅客ターミナルビル、貨物上屋などの公共施設の計画と併せて、中央部は賑わい空間としての商業施設を計画している。

常盤・出島地区は、コンベンションの拠点地区として位置づけ、コンベンション施設、2つのホテル、フィッシャーマンズワーフなどの計画と併せ、海に開かれたシーサイドパーク、国道側には水路を利用した水辺のプロムナードなどを計画している。

2. 都市プロジェクト顧問の委嘱

当構想は、計画対象区域も広く、地域によっては権利が輻輳しており、事業実施の熟度もさまざまである。また、事業の展開には長期を要することが予想される。このため、今後、まちづくりとして事業を推進していくには、一貫した理念、考えのもとに事業を展開していくことが必要であると考えた。

この事業を円滑に、かつ継続性を保ちつつ推進していくために、都市計画の専門家の助言・指導を得ながら進めるべきであるという意見が出された。種々検討の結果、長崎市出身の建築家、都市プロデューサーで、国際的に活躍されている堀池秀人氏を、平成2年12月から県の都市プロジェクト顧問に委嘱し、「NUR2001構想」の推進に当たって、総合的、専門的立場から指導、助言を得ながら、事業を進めてゆくこととなった。

3. 顧問委嘱以降の経過

平成2年12月、顧問就任以降、堀池氏は活発に活動され、1.「NUR2001構想」に係る過去の調査の分析・問題点の抽出、2.「NUR 2001構想」推進のためのシナリオ作成として、(1)コンベンション都市づくりについての提案、(2)陸けい島・運河方式による埋立についての提案、(3)エンカウンター・トレイル（歴史の学習、情報ネットワーク、歴史をたどる散歩道）の提案がなされた。また、各地で当提案についての講演などを開催し、特に、陸けい島・運河方式による埋立については市民の反響を呼んだ。

この提案は、先行プロジェクトである常盤・出島地区の整備について、「21世紀の出島」のイメージ

の下に、「水辺のプロムナード」として事業を展開する契機となった。

平成3年には、下図に示すようなフローに基づく都市づくりが提案された。

市民参加

- ・問題マップの作成
市民はもとより、都市に関する多数の人間の様々な声を都市づくりに継続的に反映させる。

デザインレビューボード

- ・問題マップの分析、評価
- ・新規プロジェクト、プログラムの誘発
- ・設計者の推薦、専門的な助言
- ・アナリスト、コーディネーターとしてその「作家性」を発揮する。

都市設計、建築設計

- ・建築者はデザインレビューボードによる助言により、緩やかに誘導されて設計活動を行う。
- ・その範囲内で、各設計者は、その「作家性」を最大限に発揮する。

同時に、「NUR2001構想」推進地域の問題マップを作成された。

平成5年には、事業化を目指したフォーリーによる街づくりシナリオの作成を行い、県に対して具体的な提案がなされた。

この、フォーリーによる街づくりの提案を受けて、事業の推進に当たる県としては、庁内に協議機関を設け検討を行ったが、既に進行中のプロジェクトについては、提案された進め方を今すぐ採用することは難しいとして、先送りすることとなった。

今後は、各種事業制度との整合性に十分配慮しながら、提案を生かすことを検討したいと考えている。

4. 長崎港内港地区再開発事業の推進

「NUR2001構想」策定後、その先行プロジェクトである「長崎港内港地区再開発事業」を中心に、実現に向けての事業を展開することとなった。

長崎港内港地区再開発事業の実施に当たって、特に埋立計画について、市民の間から疑問視する意見が出され、環境の問題などと併せて、埋立の必要性が問われることとなった。

また、当地区における倉庫群の移転集約計画についても、他地区へ移転すべきとする意見が出てきた。このような動きに対応し、県としては倉庫群の移転計画の再検討と併せて、堀池顧問の提案である「陸けい島・運河方式」の考え方を採用し、常盤・出島地区の埋立計画の運河構想について検討することとなった。

これらの再検討による計画の変更については、関係者との調整が整い、現在、事務的な手続き（港湾計画の変更）を進めているところである。

元船地区の埋立は平成4年3月完成し、上屋、旅客

ターミナルビル等の建築設計の段階に入った。この建築設計の段階で堀池顧問より、有能なデザイナーをアドバイザーとして採用する提案（デザインレビューの提案）がなされた。

県としてこの提案を採用し、堀池顧問から建築デザイナーを推薦してもらうこととなった。その結果、旅客ターミナルビルについては高松伸氏、B棟上屋については北川原温氏、C棟上屋についてはマイケル・ロトンデ氏にデザインをお願いすることとなった。

それぞれの建物は、すばらしい個性を持った、ユニークな建物であり、市民の多様なニーズに応えるデザイン、多様な解釈のできるデザインとして設計されている。それぞれに「海」をテーマにデザインが調査され、旅客ターミナルビルからB棟上屋へ、さらにはC棟上屋へと、課題をつなげていく日本古来の「連歌」のように総合的な調和をとっている。

5. 今後の事業の進め方について

「NUR2001構想」を推進するに当たり、多面的立場から意見を聴し、総合的な推進を図るとともに、広く県民、市民各界各層の理解と協力を得るため、平成2年より、産学官52名で構成する「NUR2001構想推進会議」を設置し、構想推進に反映させている。

また、平成6年より「NUR2001構想推進会議」の下部組織として、推進会議の一部の委員（10名）で構成する「企画部会」を設置した。この「企画部会」の発足に当たっては、堀池顧問からも知事へ助言があったものである。また、堀池顧問にもこの「企画部会」の委員に就任を願い、積極的な指導・助言をいただいているところである。

平成6年には、この「企画部会」を9月より毎月開催し、問題点の整理を行い、一定の成果を上げた。今後も、この「企画部会」で協議・検討を行い、元船地区で予定している賑わい空間としての商業施設の実現化を図ると共に、常盤・出島地区において、コンベンション拠点地区として整備することとしているコンベンション施設、2つのホテル、フィッシャーマンズワーフなどの計画について具体化を図る予定である。

都市づくりは、市民はもとより、都市に関する多数の人間のさまざまな声を継続的に反映させる必要があると考える。また、同時に建築家、都市計画家等の専門的な指導・助言もぜひ必要である。

当計画の実現までの期間が長期にわたることから、計画の一貫性と継続性が必要である。しかし、常に計画の見直し、再検討によるフィードバックも必要もあると考える。

今後も、当プロジェクトを推進するに当たってはこれまでの経験を踏まえ、また、堀池顧問の指導・助言も仰ぎながら、さらに有効な推進方策を模索しつつ、長崎の都市の再生を図るためのプロジェクト、「NUR2001構想」の早期実現に向けて、官民一体となって推進していく考えである。

●とくなが まさのり／長崎県長崎都心再開発推進局長

堀池秀人

長崎アーバン・ルネッサンス

実験的な取り組み

既に進行しつつあった内港部の埋立て事業に対し、自然界のサイクルや都市記憶に配慮すべきとの立場から、現在の海岸線（の形態）を保存するため、続く埋立地を水路や運河で切り離し、陸繋島化するように、緊急に提言した。続けてJIAのイベント「アーキテツ・ホリデー」を誘致し、横文彦氏やレム・コールハース氏など国内外の建築家や文化人を長崎に集め、シンポジウムやワークショップにコンペなどを催し、市民の都市づくりへの関心を誘発していくといった文化戦略の第一弾がスタートしていった。そこでは、レム・コールハース、マッシミリアーノ・フクサス、マイケル・ロトンディ、ナディム・カラム（クリスチャン・ド・ボルザンパルクが急遽来日不能となり、ピンチヒッターを務めてくれた）に、高松伸、北川原温らがワークショップを行ない、多くの有益なアイデアや

示唆を得た。

一方、莫大なコストを要する大がかりなマスタープランが抱きがちな問題点を指摘し、よりフレキシブルなグランド・ヴィジョンとしての「マスター・イメージ」の必要性を説いていった。立案－修正の手続きの煩雑さ、制度の図案化としての意義、予算獲得の手段としての役割等々故に硬直化し易いマスター・プランの弊害を是正したいというねらいが、そこにあることはいうまでもない。さらに、都市の現状を把握していくために、対象地区を越えて繰り上げられている読解行為の中から、住民の声のサンプリング——専門家によるラボでの分析——「問題マップ」の作成といったプロセスを1サイクルとし、そのサイクルの積み重ねによって都市づくりを進行させていく方法。上意下達式に進められてきたこれまでの都市計画の方法に替る、積み上げ方式とでも呼び得る方法の提案を行なっていた。

自然療法としての都市づくり

積み上げ方式の都市づくりは、点的なプロジェクトを少しずつ投下しながら、その効果を確認しながら、次へと繋げていくといった連鎖反応をも想わせる。その方法はスクラップ・アンド・ビルトに典型を見えるような、大胆な改変を行なう都市計画の方法を、近代医学の外科手術や臓器移植に見立てるならば、漢方医学のツボ療法。いうならば、自然療法によって自然治癒を目指す、癒しのような方法である。近代論を下敷きとした都市計画の方法は、一般に道路や橋などといったインフラづくりが先行し、建築へと進行する段階までに相応の時間が経過している。このため、住民のいらだつ声や、都市の状況の変化への対応の前に、マスタープランの修正－再立案のイタチごっこを余儀なくくり返すことになりがちであった。そうした傾向に対して、ここで提案された方法は、段階毎にある程度の



都市形態（アーバン・フォーム）

完成を期待できる点において、首長の交替等に伴う施策の変化などを含めた都市の状況変化への対応や現行の制度的な都市計画の方法との共存も可能であると考えている。

コノテーションによる誘導

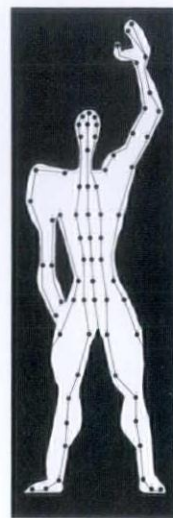
先行実施地区として、埋立て地でフェリーターミナルや上屋（倉庫）等の建設がさし迫っていた。続く埋立て地でも、ホテルやコンベンション関連施設等が計画されていく。そこでは、当然ながら街並みを形成していく建築のデザインが問われていくことになる。そこで、地区全体のデザインのコントロールと設計者選定への助言が求められた。

既にコンペ方式の是非や設計者推薦方式やデザイン審査機構について提言を行っていたが、時間に余裕はなかった。進行中のプロジェクトの大きな流れを止めることは許されないとの判断から、進行しつつあったスキー

ムのレビューを行ない、新たにデザインをリードする建築家の投入を提言し、建築家の推薦を行なった。そして、デザインの自由度を保障しながらコントロールする方法としてコノテーションによる誘導を行なっていった。

コノテーション、つまり含蓄のある形而上の言葉を建築家に提示することによって、これを「刺激」として喚起されるイメージから構想してもらおうという方法。あたかも遺伝子のように、こちらの意向なりコンセプトなりを、あらかじめインプットしておくことにより誘導していこうという、バイオテクノロジーにヒントを得たこの方法には、建築家の理解能力や構想力が求められることは、いうまでもないが、そのデザインの自由度を保証しながらコントロールできる、より文化的で知的な方法だと考えている。

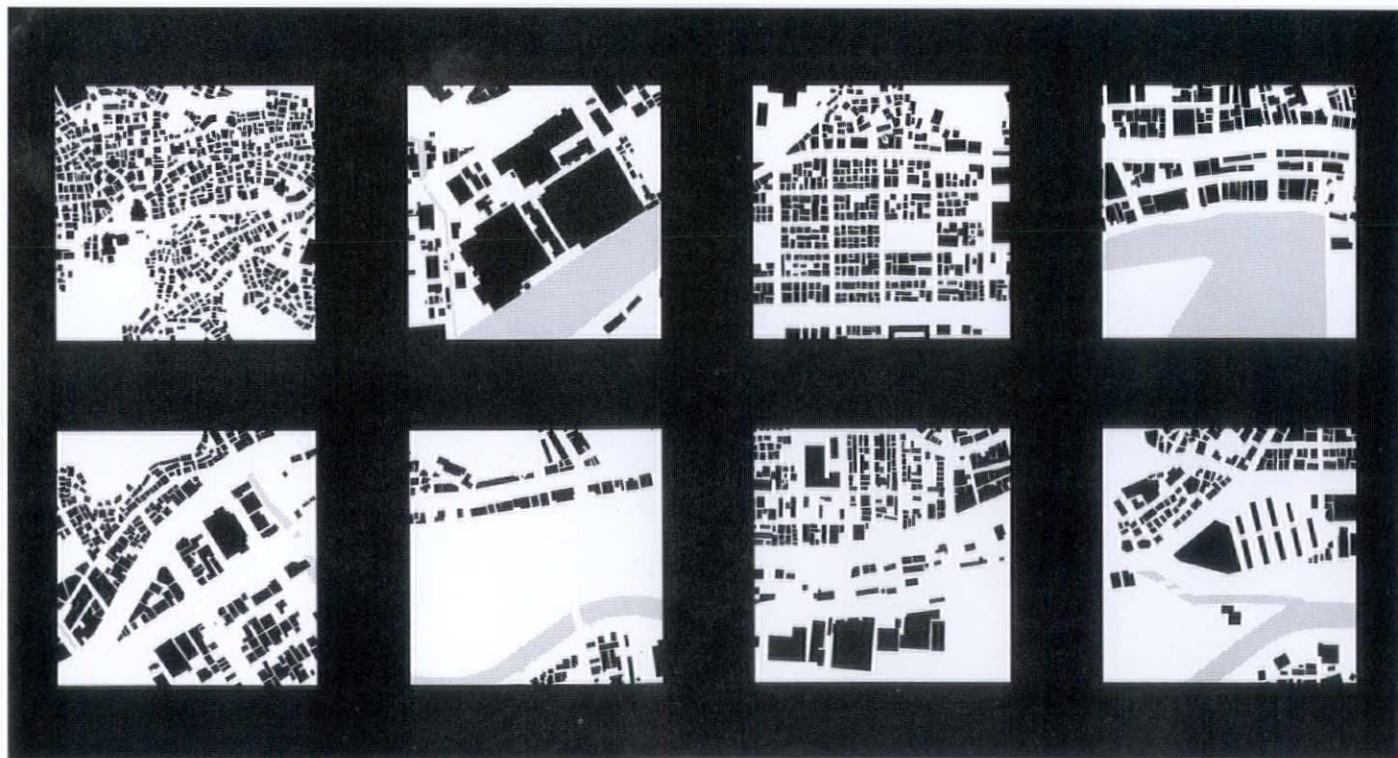
●ほりいけ・ひでと／建築家、長崎県都市プロジェクト顧問



身体経絡（つぼ）モデル



身体血管系統モデル

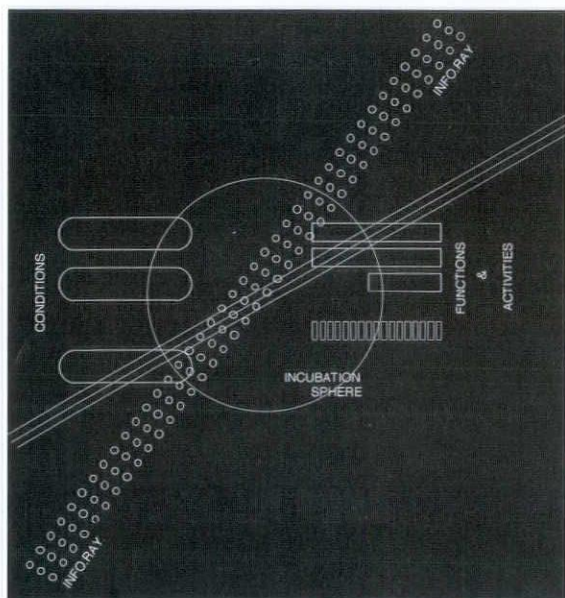


都市組織（ファブリック）のタイポロジー

三つの武器

都市づくり、或いは社会的構想力をもつ建築を考える3つの方法概念

長崎アーバン・ルネッサンス



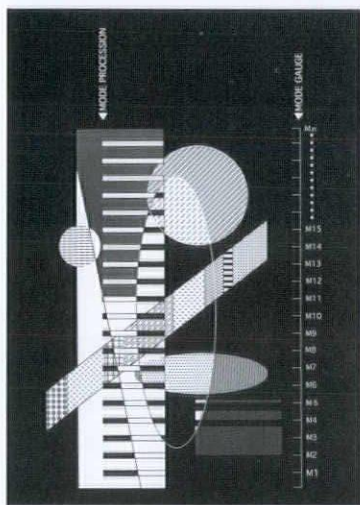
ZONING
INCUBATOR
CONCEPTUAL
MODEL

ゾーニング・インキュベーター (Z・I) の概念図

都市を形成している情報や交通などといった社会的アクティビティを受容する器としてのゾーニング・インキュベーター (Z・I)。それは、膨大な情報量の流れの中において、それらをコントロールしたり、領域化する。一方、社会的構想としてのプログラム上現われてくる電子記号化された空間メタファーなども対象化している。その意味

では、情報的世界観の産物だが、描かれたシェーマは建築的空間装置を都市(社会)とかわかせようとするときに想起されるマイクロ・ゾーニングとしての空間モードをイメージさせ、上位では都市的ドメインのゾーニングへの展開が目論まれている。

バイオテクノロジーの用語を借りるならば、遺伝子型(現象に対してそれを成立させている仕組み)の組織を胎内化した「都市のアトラクター」がイメージされよう。

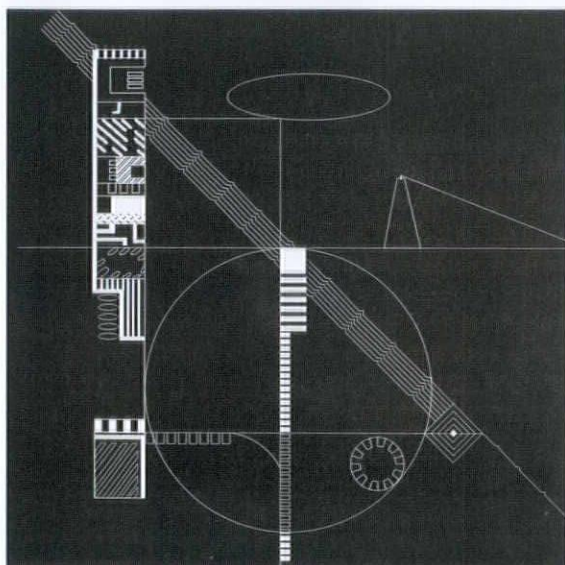


PROGRAM
PROCESSING
DIAGRAM

プログラム・プロセッシング・ダイアグラム

Z・Iを建築的空間装置へと転換していく過程。つまりプログラム・プロセッシングでは、情報モードやアクティビティ・モードなどによる構成。いわゆる自己組織化が立ち現われてくる。ここでは、個別間の関わりと社会との関わりを、(ソシュールの言語学で言うところの)バロールとラングに分けて考えるような記号論的思考が求められる。デジタル化による分析や操作性の向上が計られ、相転移が検討される。それぞれのモードにตอบสนองするドメイン

の拡がりや重なり、影響圏や自己変容能力に応じた干渉などが、ここでの主要な関心事である。符号化していくプロセスと解読のパラドキシカルな作業を繰り返しながら、サイトスベシフィックなモデルへと展開していく。システム・ダイナミクスを想わせるこの方法は、カオスイン・カオスアウトのパラダイム変換の契機をのぞかせながら、フラクタル幾何のマンデルブローの全体としての建築的空間装置の像を示していく。



ARCHITECTURAL
DEVICE
IMAGE

建築的空間装置のイメージ

モードをデコード化することで構想される建築的空間装置は、シンタクティクスとして操作されていたモデルにセマンティクスを付与していったホロニックな空間モデルである。社会的アクティビティ・モードのZ・Iから発想されたということにおいては、関係論的自己組織化モデルとして、実体論的自己組織化モデルよりも組成要素の自由度は大きいものと言える。つまり、すでに器官分化がおこり、組成要素と

しての各細胞に、他との関係で個々の機能を与えている人体における自己組織化に似ている。そこでは場所の記憶をインプットしながらの負のエントロピー(秩序化)の進展が仮想されているが、社会的(つまり、外部の)拘束条件に対して成立しようとする時、それはインキュベーターから進化し、メタフォルカルな電子メディア化された工場のビルディング・タイプのイメージを喚起させる。

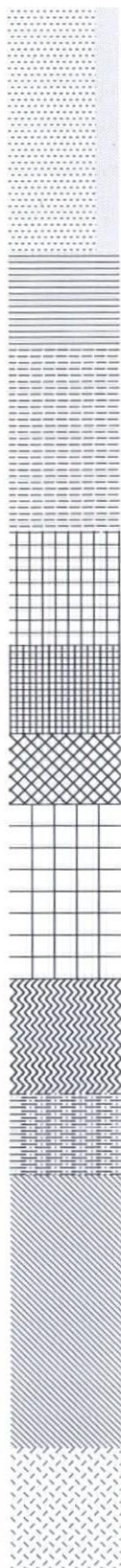
*:「生命と場所」清水博著参照

作業のダイアグラム

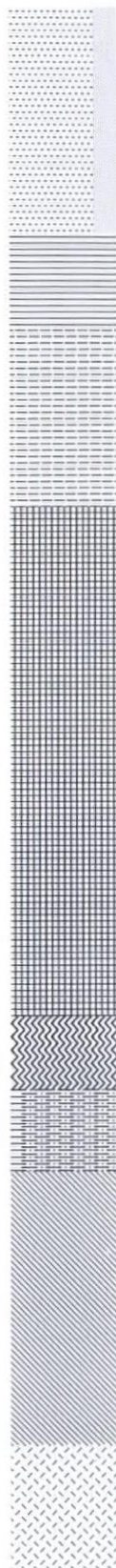
DENSITY: 密度 (分布) モード
 PHASE I: マスタープランのモード (エンコード化)
 PHASE II: マスタープランの簡略モードへの読み換え
 — 相転移 (モード・トランジション)
 PHASE III: モードによるマスターイメージ
 PROGRAM PROCESSING DIAGRAM: サイト・スペシフィック
 な空間イメージ・モデルの作成 (デコード化のプロセス)



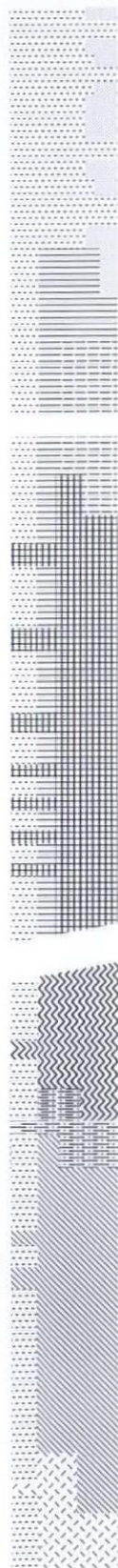
DENSITY



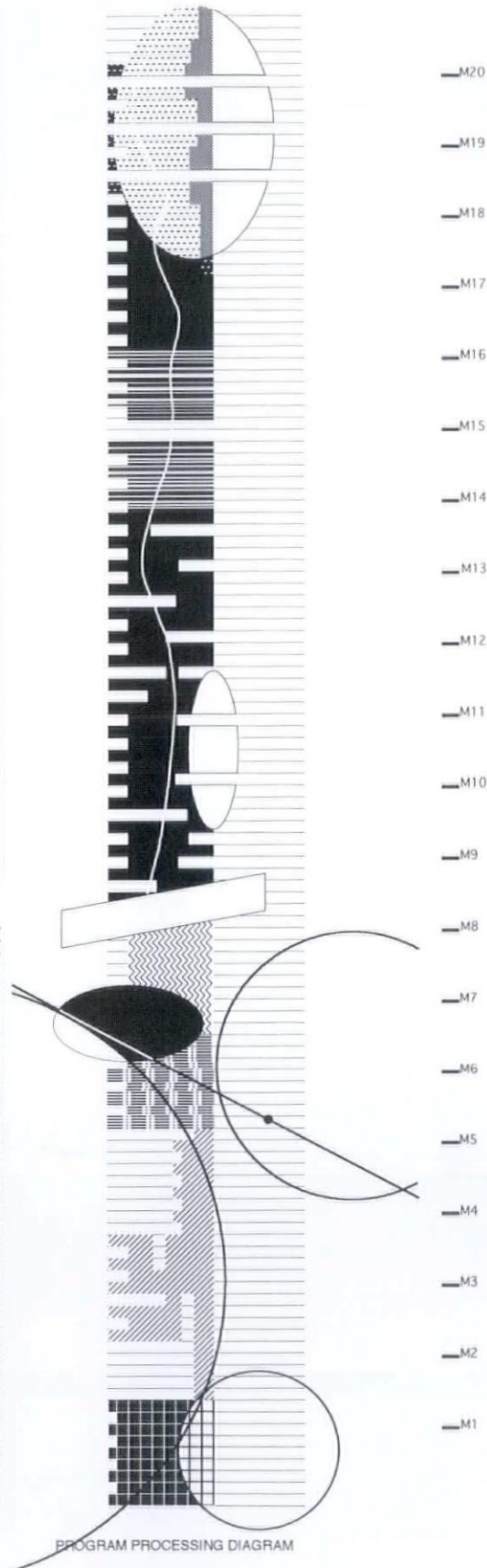
PHASE I



PHASE II



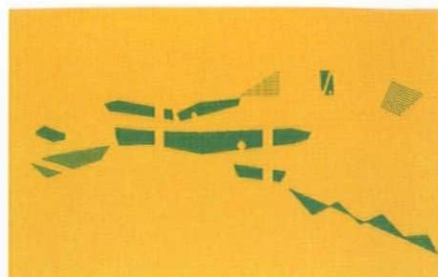
PHASE III



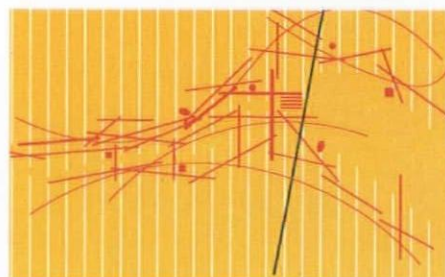
PROGRAM PROCESSING DIAGRAM



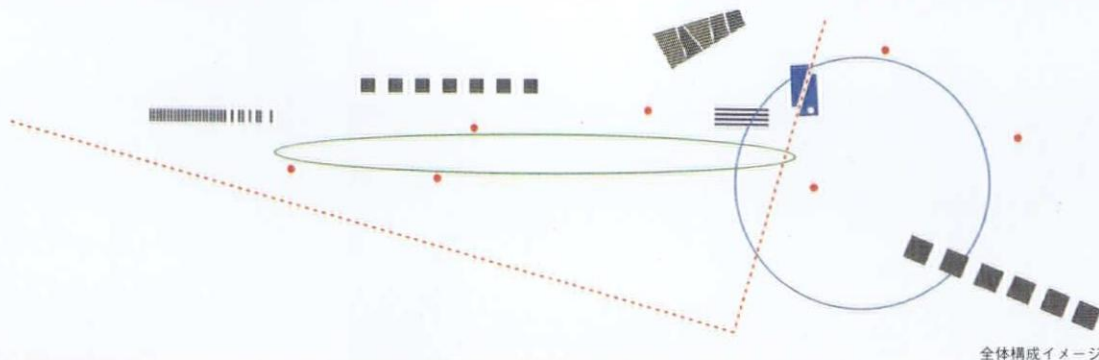
水域コンポジション



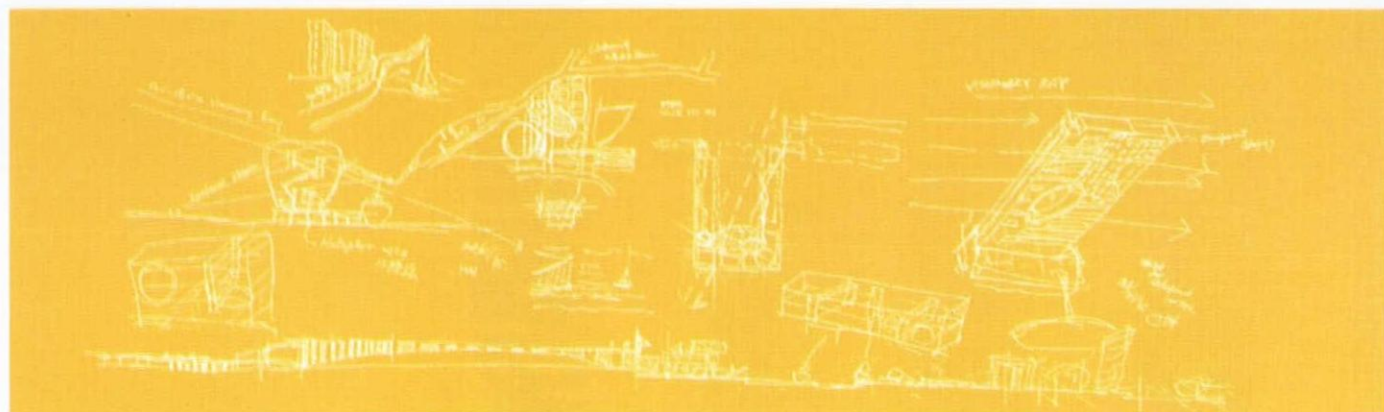
トポグラフィ



線形解析



全体構成イメージ



数々のイメージスケッチ

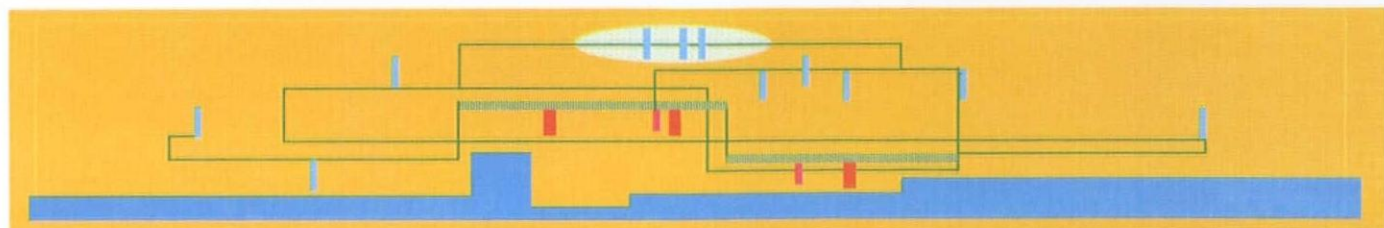
点在する点刺激としてのフォリー

どんなに過密と言われる都市でも、じっくり読み込んでいくと結構な数の空地を発見できるものだ。それは様々な形態で現われるが、概ね都市内の「遺棄されたスペース」として放置されているか、ゴミ捨て場、廃車置場などとして、負のイメージの場を形成している。たまたま駐車場や駐輪場として生かされて(?)いても、それはアイロニカルな利用と言わざるを得ない。それらは、主として都市計画のインフラで切り残された場所に発生している。それらが高架橋脚の下や廻りに繁茂する様は、その典型といえる。「問題マップ」を作成するため長崎を読みとる作業を繰り返す中で、我々はかなりの数のこうしたスペースを発見していった。一方、概して都市には何らかの問題を抱え、あたかも患部となって

いる場所が存在しがちである。こうした場所を治療していく拠点、あるいは、都市を人体に喩えるならば、ツボとしてそこを刺激することによって周辺の癒しの波及効果を期待できる拠点の存在。それを効果拠点(E-Point)として捉え、そこに点刺激としてのささやかなプロジェクトを投下していくことを構想していった。いうまでもなく、先に挙げた「遺棄されたスペース」は、そこが患部と判断される場合、癒しのE-Pointとして注目され、スポットライトを当てることで負から正へのイメージの変換が期待されよう。さらに、癒しと言うよりも、積極的に街並みを形成していくためのE-Pointの存在もあることは言うまでもない。

E-Pointに投下されるプロジェクトには、当然な

がら、Z・Iとしての資質が期待される。当面のプロジェクトとして、周辺地区のインフォメーション・センター機能をフォリーとして7ヶ所に布置することが提案された。ここで言うフォリーとは、周辺地区の都市模型やNUR2001をはじめとする各種都市プロジェクトの状況を広報し、住民の、街に対する認識や都市(公共)意識の向上と情報交換の場として機能することを想定している。加えて、フォリーを担当した建築家には、周辺地区のマスター・アーキテクトのような立場で、引き続き、将来の地区づくりや建築デザインの相談にのっていくことが期待されるであろう。



エンカウンター・トレイル
遭遇の道

トレイル・パターン

ボストンのフリーダム・トレイルの存在は単なる「観光ルート」としての認識を越え、人々の都市内歩行回遊のムーヴメントの誘発に役立っている。長崎における「遭遇の道」の提案は、内港地区のプロ

ジェクトと既存市街地を歩行回遊で繋いでいこうというものである。豊富な名所旧跡とコンベンション施設や文化施設、さらには各E-point、そして中央地区(商業中心)へとリンクさせていく長崎固有の

道は、サイン誘導等のわずかな整備だけで実現することが可能であろう。都市のコアをほぼ歩行圏で結ぶことができるといった長崎のトポグラフィックな条件が、それを担保している。



マスター・イメージ模型写真



マスター・イメージ

マスター・イメージ

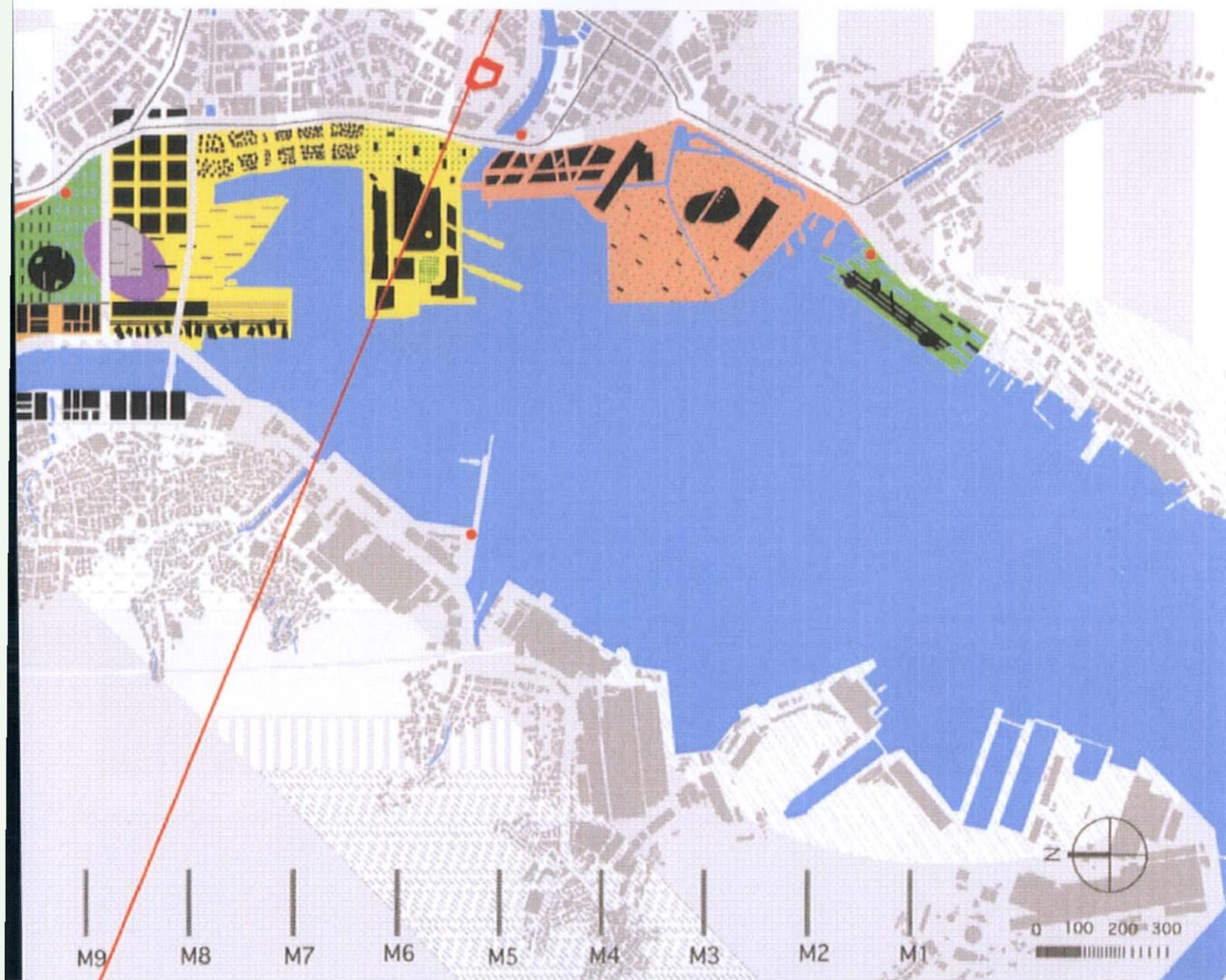
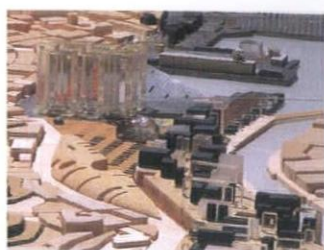
マスタープランは、広義にはインフラや建物の配置を示し、「量」のコントロールを行ないながら、都市の完成像を描いたものとして理解されている。が、狭義には都市生活者をコントロールする制度の図化であり、官主導型の都市計画においては、予算獲得の慣例化された手段となっている。一般には、その立案に当たっては、複雑な合議のプロセスを経ることとなっている。このため、本来都市がもつ多義的な属性や慣習、記憶などという計量化されにくい「質」については、非合理的なこととして排除されてきたというのが実情ではなかろうか。

こうした中、長崎ではNUR2001が県・市・民間の三位一体で推進するプロジェクトであるという事情もあり、マスタープランはあっても確定的なものとはなっていなかった。件の実情を勘案すると、このことは長崎にとって幸いしていると思われた。だが、キッチュ化された建築の乱入による街並みの混乱、長崎が本来持っていた資質や文化性の喪失などと言った問題を前にさし迫っていた計画が野放図のままよいという訳にはいかないことは明らかだった。グランド・ヴィジョンの必要性、それは、計画を糸の切れた凧としないためにも、住民が自分達の街の将来像を知るためにも問われていた。

ここに提示されたマスター・イメージは敢くまで顧問あるいはプロデューサーとしての私案である。正

確に言うとも以前提案されたものの改訂版である。オーソライズされることが望ましいが、それは必ずしも必要条件ではない。何故なら、このマスターイメージはマスタープランの弱点を補完するために描かれ、一つの都市像を示しているのにすぎないからだ。様々な異論であろうが、議論を喚起することに1つの目的があり、私案であるがために、複雑な手続きを踏むまでもなく、修正も可能であるという受け皿が用意されている。

だが、その作成の仕方は、インフラを引き、ゾーニングや画地割を描いていくといったマスタープランの作成手順とは異なっている。人間に身近な空間を優先し、建築を配置したあとから道路を割りつけるといった逆行した手順で描いている。道路や建物



間のスキ間を等閑視し、連続した空地と見なしコントロールしながら街路の発生を促す。歩車共存の考えを下敷きしながら、これまでの都市計画がなおざりにしてきた空き地に目を向け、そこに空間計画を試みている。マスタープランをネガに読みながら、微妙にシンクロさせていくこの方法が、たとえばマスター・イメージを空論化させないためにも必要だった。加えて、都市全体を人体に喩えてのツボの発見と検証、そして布置。新たに提案をすることでプロジェクトの進展を計ろうとするネライがそこにはある。



長崎駅周辺地区マスター・イメージ



元船地区マスター・イメージ

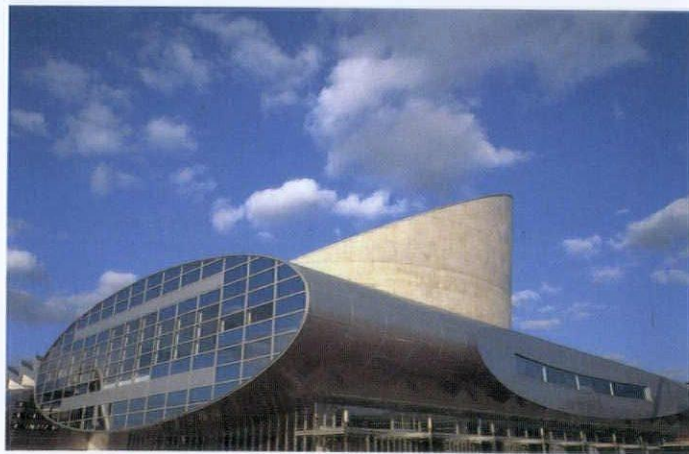
長崎港ターミナルビル

高松伸／高松伸建築設計事務所＋三菱地所株式会社一級建築士事務所

Nagasaki Port Terminal Building

Shin Takamatsu Architect & Associates＋Mitsubishi Estate Co., Ltd.

長崎アーバン・ルネッサンス





港町長崎は、日本の歴史のその様々な重要な局面において、常に貴重な役割を果たしてきました。そしてその多くは、長崎という、いわば、天与の立地によって育まれた都市的機動力によるものであると言っても過言ではありません。当「長崎港ターミナルビル」は、その長崎湾のほぼ中心に位置する元船地区において、港町長崎の新たな海への都市ゲートとして、また同時に海からの都市ゲートとして、「ナガサキ・アーバン・ルネッサンス2001構想」によって位置づけられた計画であり、長崎港一帯を含む都市的視点との深い関連を考察しつつ構想されたものであります。

元船地区は、その形状と立地条件からして、かつての出島とも言うべき特性を色濃く有しており、いわば現代の出島とも言える象徴的価値を体現しております。したがって、現代都市における、現代の出島の先端に位置する当建築計画においては、ターミナルの果すべき都市機能の効果的な実現は当然のことながら、その象徴的価値に基づく建築における都市的表象の開発と、その建築の実現が、なによりも達成すべき最大の課題として定位されなければならないと言えます。

勇壮な船舶を連想する、なめらかな曲線を有する全長95mの楕円形のシンダー、その煌めく船体は、待合室を包み込む打ち寄せるガラスの波に運ばれて横たわり、夜ともなれば、それはさながら光の波に浮遊する未来の超高速船の如くです。その未来のフォルムが係留するのは、最高高さ25m、直径35mの巨大なビット（係留杭）。そのビットの内部には、ターミナルのエンタランススペースが内蔵されています。ビットの上部は、直射光遮光ルーバーを装備したスカイライトの列から差し込む陽光によって支持されているかの如き大屋根で覆われています。見送る人々の様々な憶い、待ち受ける

人々の期待にあふれ返るエンタランスから洩れる幾何学的な光は、稲作山方向へと正確に傾斜したこの円形の星根を通して、その山頂へと正確に都市活動の息吹を送ります。加えて、ビットに繋かれた巨船へと押し寄せる大波のうねりをイメージする屋根、静かに水面を切る帆船へと追憶に誘う構造物。それらの建築的エレメントの構成はすべて、我々の知る通常のスケール感とは大きく離れた存在様態であるにしても、この建築が引き受ける遠い視線と、都市的スケールの視界へのシンボリックな応答として、と同時に、なによりも歴史と記憶と未来への応答として、我々が開発した克明な建築的デノテーションであるということが出来ます。日々の船舶利用や、観光のための営為に対する細やかな配慮によって構築された、シンボリック、かつノスタルジック、かつフューチャリスティックなこの建築が、来たるべき長崎の、エネルギーで有機的な都市的コノテーションの運動に向けてゆるやかに稼働を開始するであろうことを期待しています。

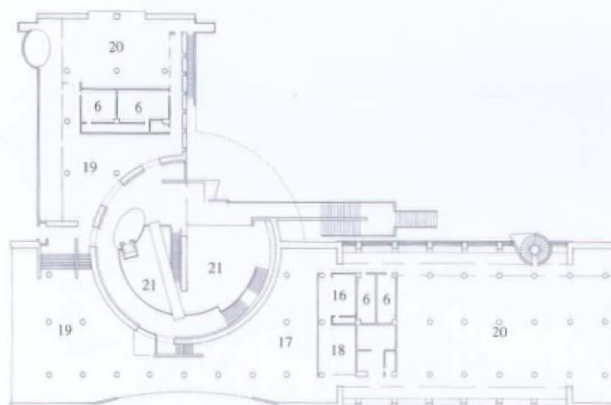
(高松伸)

提示されたコノテーション：

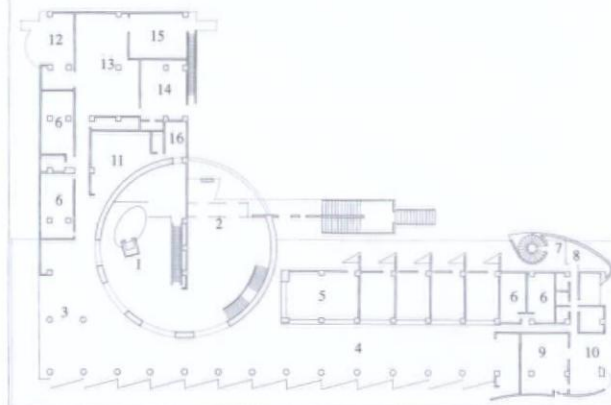
起爆装置
すさまじさ
特異な力の気配
投錯

第1投目のプロジェクトとして、確固たる輪郭をもち、存在感のある建築の登場を計ろうとした。比較的小規模の建築ではあるが、これから始まる構想の狼煙をあげることを狙ったため、力量をこなせる建築家として、高松伸氏の力量に期待した。

被爆都市長崎から、世界に向けて、文化的爆弾をうち返していきたいという本音がその底流にあったことも吐露しておこう。

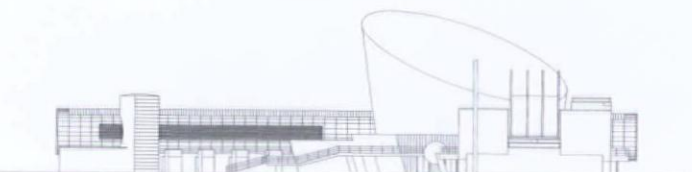


2階平面図 S=1:1200



1階平面図 S=1:1200

- | | |
|---------------|-------------|
| 1: エントランスホール | 12: ゴミ置場 |
| 2: エスカレーター | 13: 空調機械室 |
| 3: 売店 | 14: 電気機械室 |
| 4: 待合室 | 15: 熱源室 |
| 5: 切符売場 | 16: 厨房 |
| 6: トイレ | 17: 軽食・喫茶 |
| 7: 従業員用エンタランス | 18: VIPルーム |
| 8: 管理室 | 19: フェリー待合室 |
| 9: 貨物室 | 20: 事務室 |
| 10: 駐車場 | 21: 吹抜 |
| 11: ロッカールーム | |

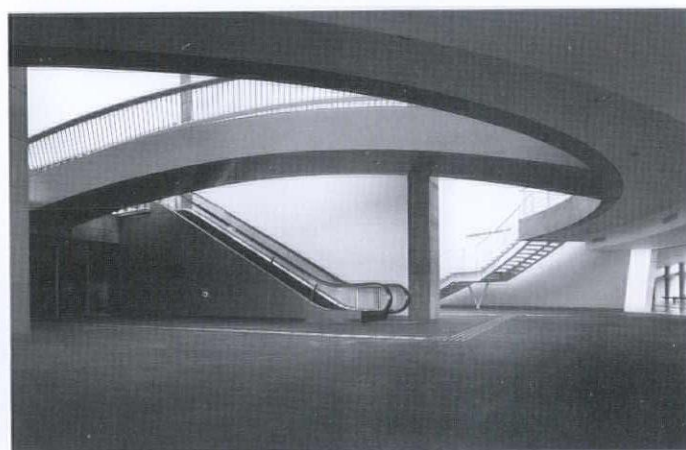


北立面図 S=1:1200



断面図 S=1:1200

所在地：長崎市元船町17番3号
主要用途：フェリーターミナル
構造設計：三菱地所株式会社一級建築士事務所
施工：日本国土開発・大進建設工事共同企業体
敷地面積：8,160.00㎡
建築面積：3,596.45㎡
延床面積：5,645.12㎡／1階：2809.08㎡／2階：2836.04㎡
主要構造：SRC造（一部S造）
規模：地上2階建
竣工：1995年8月



長崎港元船B棟上屋

北川原温/北川原温建築都市研究所+三菱地所株式会社一級建築士事務所

Nagasaki Port Warehouse B

Atsushi Kitakawahara Architects Inc.+Mitsubishi Estate Co., Ltd.

長崎アーバン・ルネッサンス

この倉庫建築の形態は、長崎湾のもつ母性的な空間イメージを参照している。それは、ルーフの空間と表現に集約されている。このルーフは湾を覆う架空の山の一部でもあり、湾を囲む美しく優しい山並みの象徴でもある。倉庫の箱形の空間の上に、強い日射による熱を遮断するための大きな通風層の空間が設けられているが、これは常にうつろい、歴史が通過していく虚の空間としての意味をもたせている。銀色のルーフがこの虚の空間を包み込むという構成は、長崎湾の地形と歴史そのもののメタフォルカルな表現である。また隣接する客船ターミナルがファロスのイメージをもつのに対して、この倉庫はマトリックス（子宮）的イメージをもたせ、ナラティブな呼応を意図している。屋根の通風層は外壁まで回り込み建築全体を二重構造とし、海側へ向けて大きく開口した通風層のファサードはフィン（垂直翼）が並び風を迎え入れる。それに対して陸側は、ステンレスぶきのルーフが外壁をくろみ、対置する建築や環境との直接的なコノテーションを回避するよう寡黙な表情をもたせている。

それにしても、長崎でのJIAアーキテクツホリデーのイベントを始めて、さらに具体的なプロジェクトのたち上げへとコミッショナーの堀池氏の奮闘ぶりには目を見張るばかり。今回の倉

庫の設計では心残りが多かったが、コミッショナーと喧嘩ごしの仕事ができ、なかなか楽しかった。これからが面白そうだ。（北川原温）

提示されたコノテーション：

虚ろな存在感

超存在

視線の誘導

2投目に当たるこの建築は、高松氏によるフェリーターミナルと隣接している。したがって「隣接性の論理」や「連辞」といった、気になる事項に関する議論の末、上記のコノテーションが提示された。近接する商業関連施設をあまり顕在化させたくないとの考えから、多少擾乱であることを許しても、コンセプチュアルな建築の出現を期待した。シュールレアリスティックともいえるような言説に応答できる建築家として、北川原温氏を推挙した。

所在地：長崎県長崎市元船町14-38

主要用途：倉庫

構造設計：三菱地所株式会社一級建築士事務所

施工：大周建設株式会社

敷地面積：3,205.00㎡

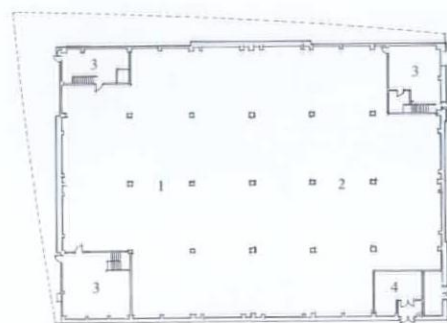
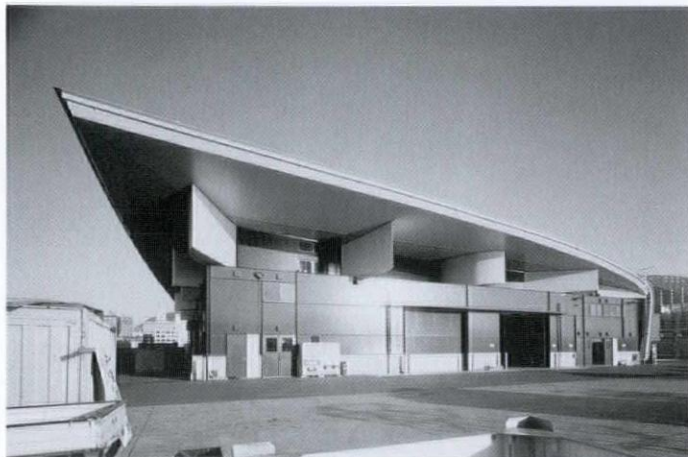
建築面積：2,077.81㎡

延床面積：1,989.00㎡

主要構造：S造

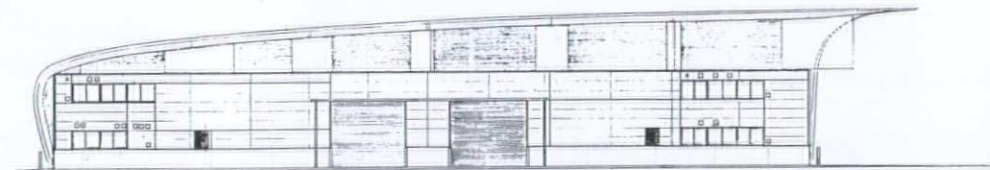
規模：地上2階

竣工：1994年12月

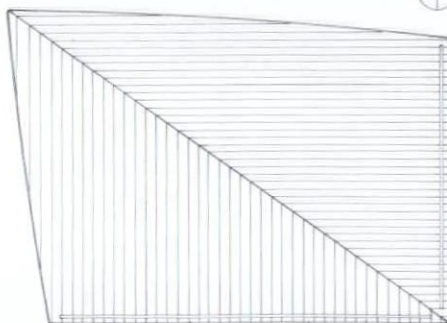


平面図 S=1:1000

- 1: 倉庫1
- 2: 倉庫2
- 3: 事務所
- 4: 電気室



北立面図 S=1:500



屋根伏図 S=1:1000



南立面図 S=1:500



長崎港元船C棟上屋

マイケル・ロトンディ/ロトアーキテクト十三菱地所株式会社一級建築士事務所

Nagasaki Port Warehouse C

Michael Rotondi/RoTd Architects, inc.+Mitsubishi Estate Co., Ltd.

長崎アーバン・ルネッサンス

C棟上屋は長崎湾に突き出た埋立地に建設される、多目的施設のプロジェクトである。この建物はウォーターフロントへのアクセスが可能な倉庫である。だが同時に、屋上はパブリック・ガーデン・スペースとして利用でき、多くの人々が持つ、「もっとウォーターフロントを身近にしたい」という気持ちに応えている。

建物内部は3つの構造系から成り、内部空間のタイプの違いをおおまかに示している。倉庫部分の素材には主にコンクリートを使っている。屋上は、布と地元の造船技術でつくられたスチール部材で構成される。この内部空間は、それらの部材で部分的に覆われており、伝統的な日本の禅庭に近い屋上庭園となっている。

モンスーンの強い風圧に対応するため、建物の南側は、スチール壁の堅いシェル構造になっている。一方、布構成の部分は、市街からの建物の眺めを際立たせ、所々日陰をつくる、輝く柔らかな膜となっている。

布構成は、非平行の鉄パイプが徐々に形を変える枠組みを使用し、主に4つの区域に分かれている。各ゾーンはスケールと空間を囲んでいる壁などの角度が違っているため、全く違った空間体験ができる。半透明の布によって生み出される、四方に広がる光と、空に向かって開放された空間とが、伝統的な庭園でよく見られる木立の役割を果たす。ねじれたり、波打ったりする布の幾何学的形態は、造船技術の粋を集めたスチール構成部と接続する。この形態はまた、伝統文化「長崎くんち」の「竜踊り」のイメージを喚起する。

提示されたコノテーション：

反復の美学と詩学 (Aesthetics/Poetics of Repetition)

アンビバレンツ (Ambivalent)

長大さへの警句 (Aphorism onto

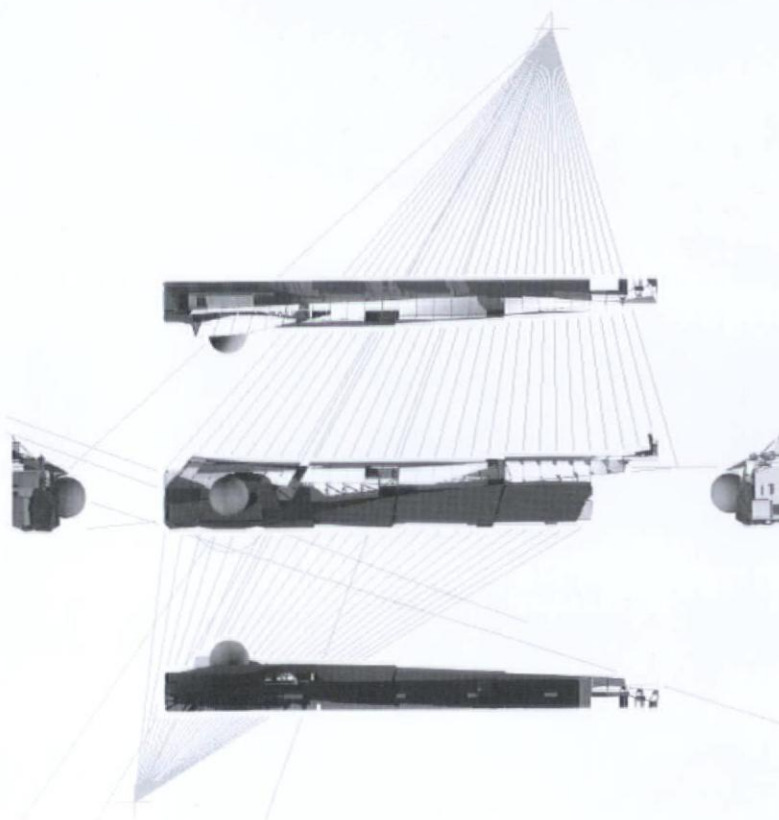
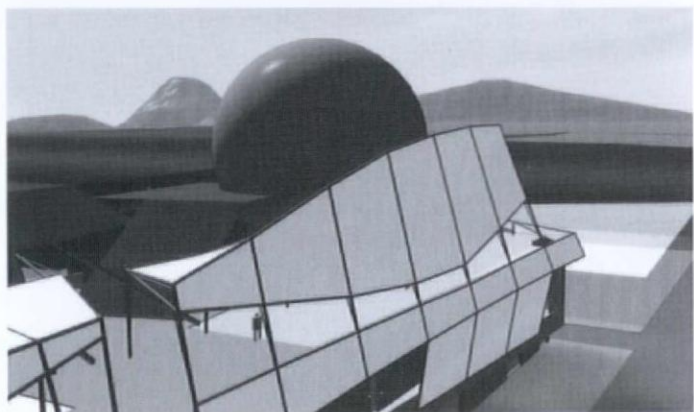
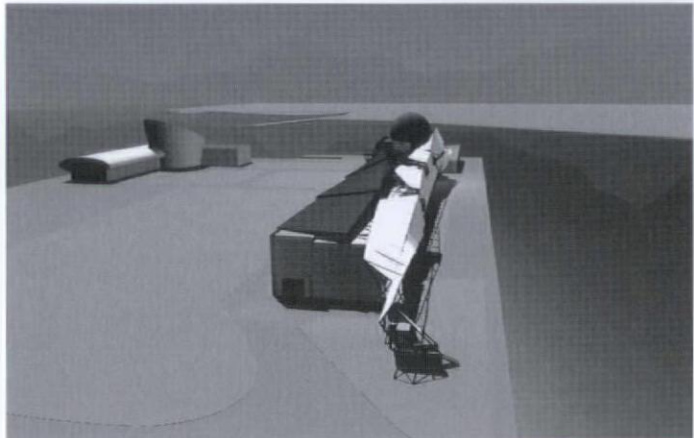
Longueur)

黙示の力学 (Revelation of Dynamics/Power)

200mを超える長さで横たわることになる第3投目の建築では、その屈曲さを如何に回避していくか、が問われていた。

また、先行した2棟と同じく、必要上デザインがうるさくなりがちな商業関連施設と隣接することになるため、その強度において調停することを考慮しておくことが求められた。比較的安価な材料で構成しながら、空間の豊かさを引き出すことにおいて、巧みな建築家として定評のあるマイケル・ロトンディはこうしたプロジェクトには欠くべからざる存在として推薦された。

彼に提示されたコノテーションはいきおい、その長大さに向けられることとなった。



所在地：長崎県長崎市元船町14-38

主要用途：倉庫

構造設計：三菱地所株式会社一級建築士事務所

敷地面積：8,928.04 m²

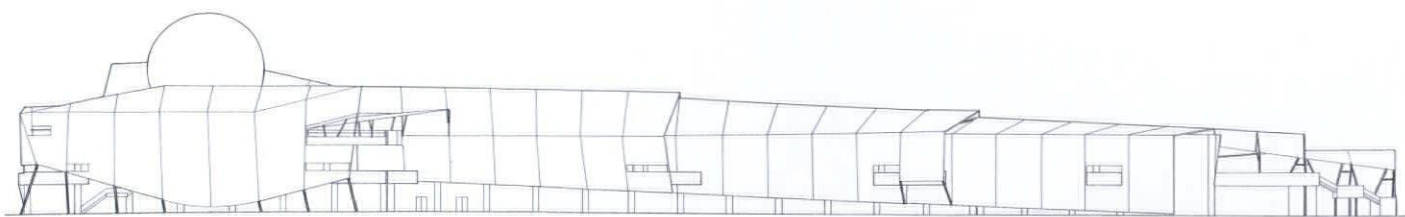
延床面積：10,630.26 m²

主要構造：RC造

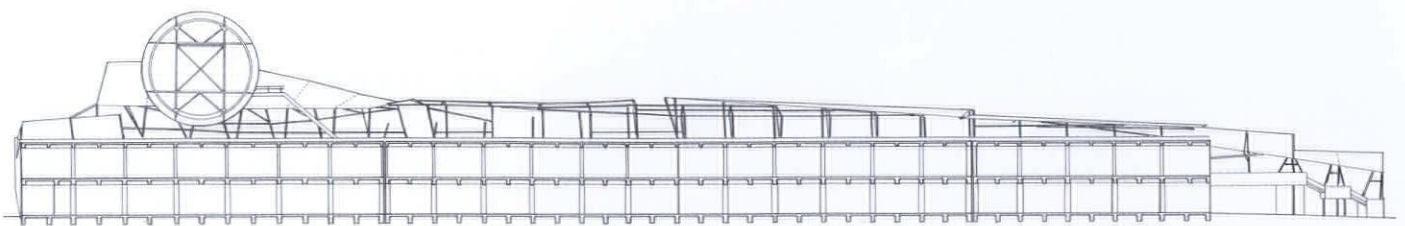
規模：地上4階

SD9601

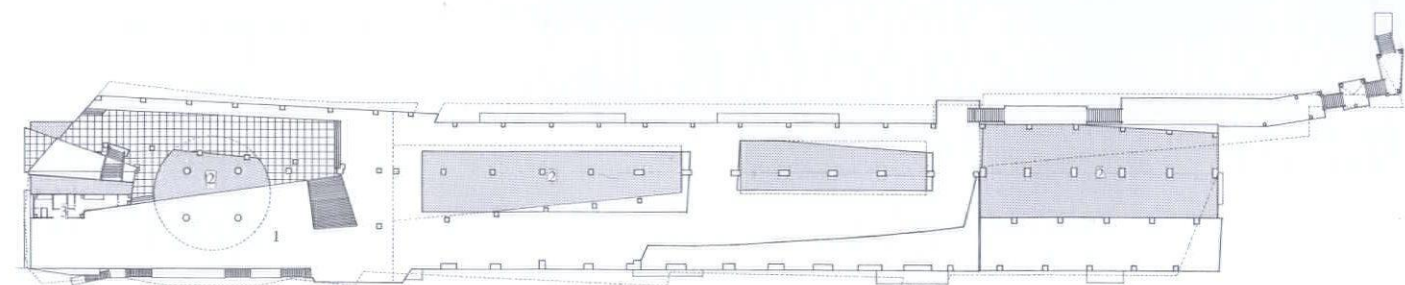
126



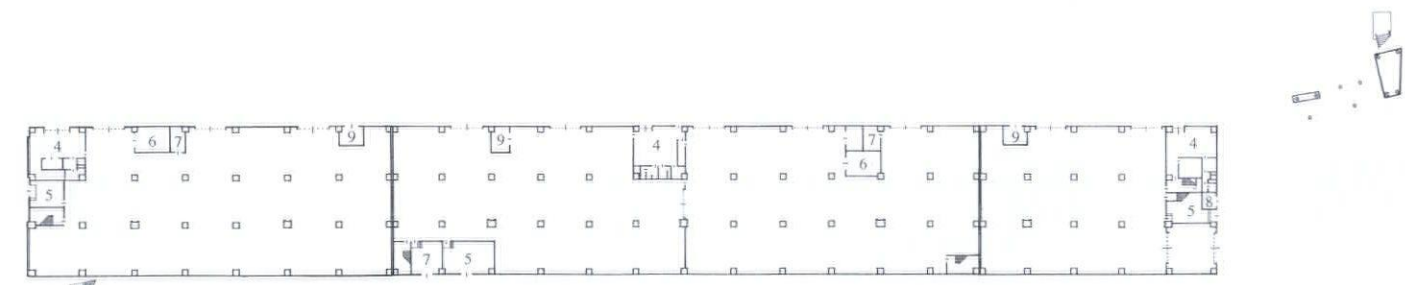
南立面図 S=1:1300



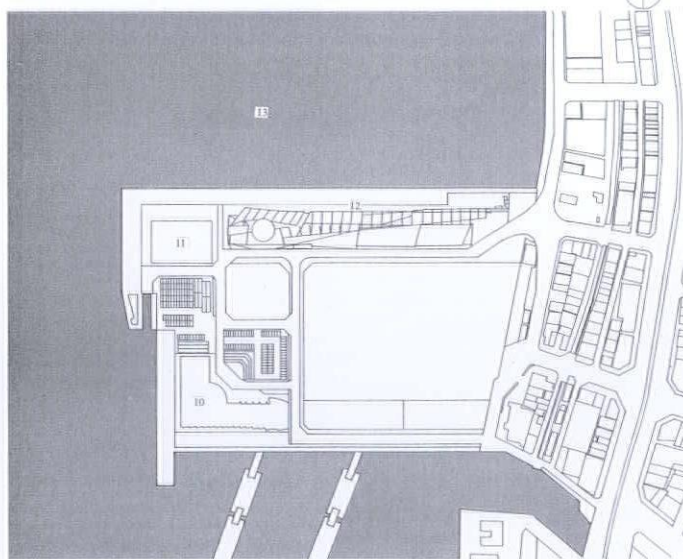
断面図 S=1:1300



4階平面図 S=1:1300

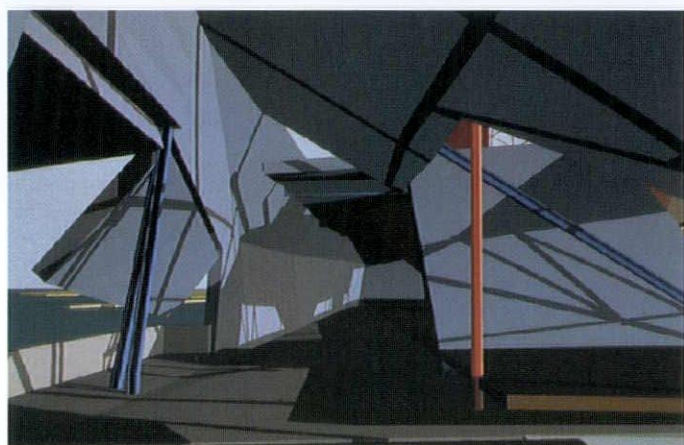
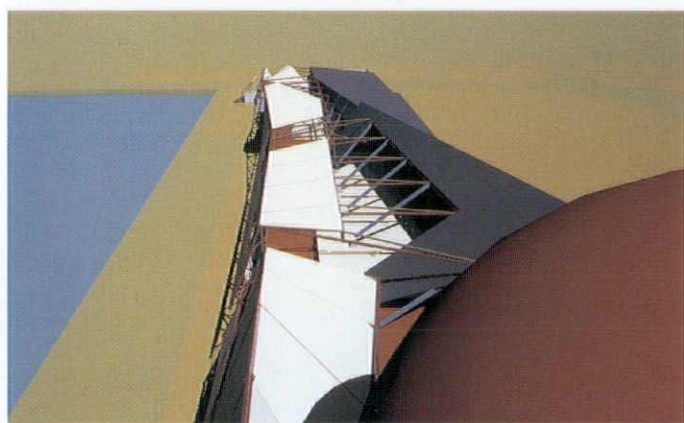
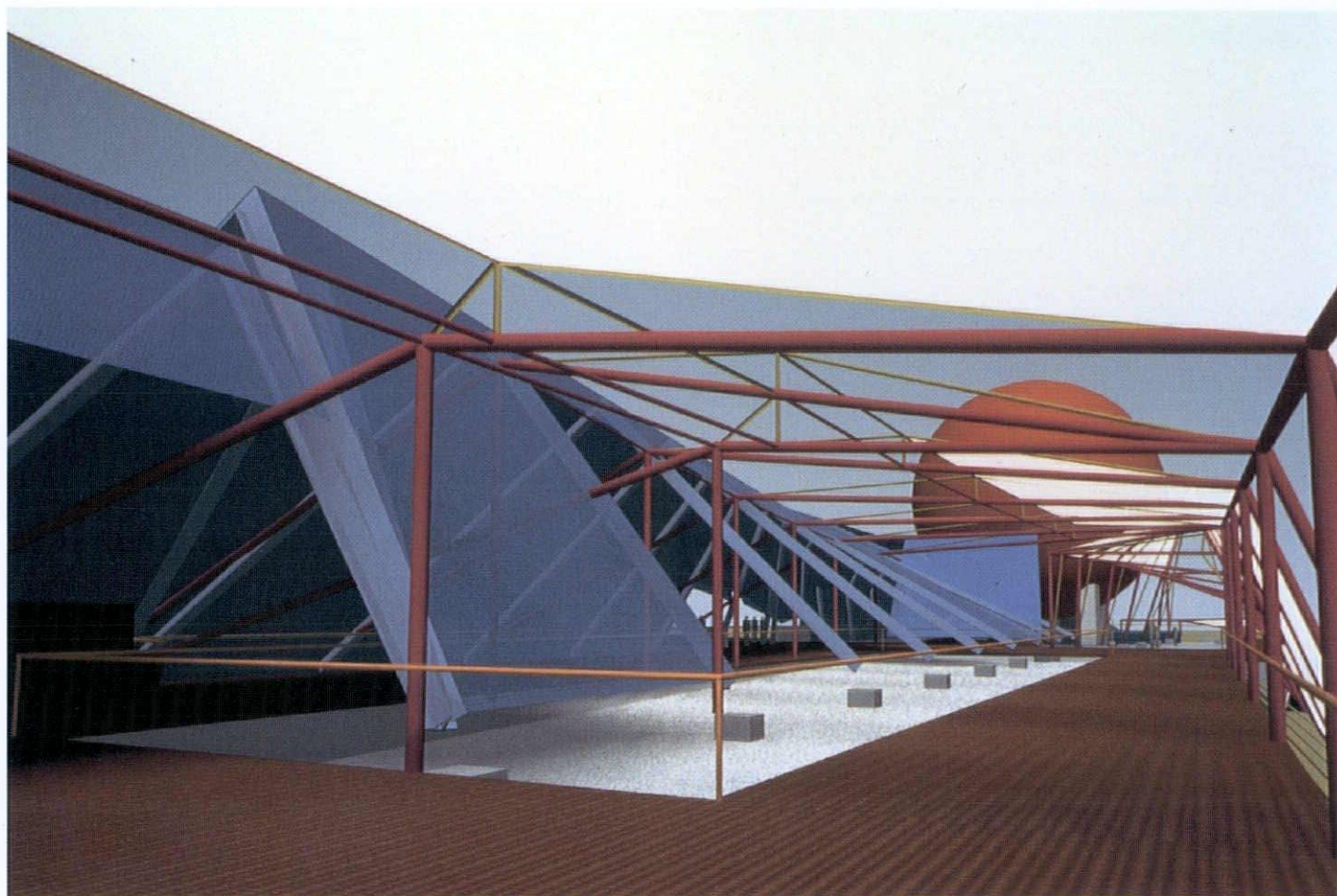


1階平面図 S=1:1300



配置図 1:6000

- | | |
|---------|-------------|
| 1: 橋デッキ | 8: 屋外機置場 |
| 2: 砂利 | 9: OM |
| 3: 公衆便所 | 10: ターミナルビル |
| 4: 事務室 | 11: 上屋B |
| 5: 電気室 | 12: 上屋C |
| 6: EV | 13: 長崎湾 |
| 7: MR | |



白石メディア・ポリス

Shiroishi Media Polis

白石市では、ウィーンの美しい街並みに魅せられた市長の発想により、1992年秋に白石市の都市づくりのために建築家たちへ協力が仰がれた。

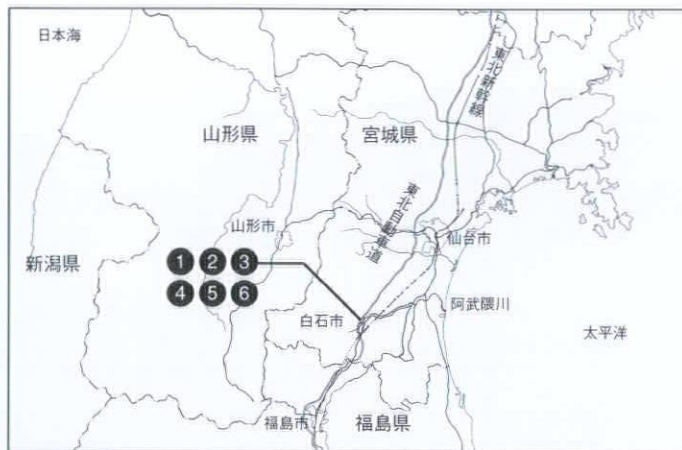
その出発点として、「白石デザイン会議」が編成され、参加型まちづくりが提案されプロジェクトが進行した。

その後、1994年夏に「都市プロデューサー」が指名され、新たな提案による都市づくりが動き始めている。

以下はプロデューサーの元でのもの、市選定建築家との協議によるものなど、多様なアプローチによる都市づくりに挑んでいる白石市のまちづくりのプロジェクトである。



白石市章



1. 白石市立白石第二小学校
芦原太郎建築事務所+ワークショップ
白石市字白石沖
2. 白石しらさぎ橋美装計画
阿部仁史アトリエ
白石市銚子ヶ森地内
3. 白石デザインフォーラム展示デザイン
(トライ・エックス/タイプ001)
阿部仁史アトリエ
4. 白石北保育園 (STREAM)
堀池秀人都市・建築研究所
白石市福岡長袋
5. 白石市文化体育活動センター (VELO CITY)
堀池秀人都市・建築研究所
白石市鷹巣地内
6. ZONA (福祉の里)
堀池秀人都市・建築研究所
白石市福岡蔵本

*1,2,3は白石市デザイン会議からのプロジェクト。4,5,6は都市プロデューサー制度からのプロジェクト

第三次白石市総合計画 (ホワイト・プラン)

くらし日本一のまちづくり
計画期間：
昭和63年度～平成12年度

白石市デザイン会議構想 (平成4年度策定)

都市プロデューサー制度 (平成6年度～) + 市選定建築家

- 各種業務計画
現行行政組織、法制度等の効率的活用
- 各種戦略計画
地域特性を活かすためのプロジェクト

まちづくり事業
・白石城復元事業
・水と石との語らいの公園整備事業
・水芭蕉公園整備事業
・スパッシュランド建設事業

ホワイトプランに基づき実施を計画している事業に「質」を備えた建築を実現させる有効な方策の構想
機能性・耐久性・適正価格重視
加えて「風格」(建築単体及び地域運動)

構想のパイロットケース
・白石第二小学校改築事業
・しらさぎ橋建設事業
・消防ポンプ小屋、火の見櫓整備事業

都市デザイン策定委託、新たな都市づくり計画への指導助言
白石市デザイン会議構想の実現

計画実現
・北保育園建設事業
・文化体育活動センター建設事業
・総合福祉センター建設事業
・情報センター建設事業
・市営住宅建設事業
・市立南中学校建設事業

「くらし日本一のまちづくり」を 目指して

川井貞一

白石市の概要

白石市は宮城県の南端に位置し、市域は約285km²と宮城県第3位の面積を有し、奥羽山脈(蔵王連峰)と阿武隈高地に囲まれた白石盆地に中心市街地が発達している。

現在の市の骨格が形成されたのは、仙台伊達政宗の重臣片倉小十郎景綱が伊達藩の南の守りとして、慶長8年(1603年)に白石城主となり、城下町・街道が整備されてからのことである。近年、東北縦貫自動車道(白石インターチェンジ)、東北新幹線(白石蔵王駅)等高速交通体系の整備により、隣接3県の県庁所在地(仙台市・福島市・山形市)へは1時間以内の時間距離にある。人口約4万2千人。

本市は、昭和63年度に第三次白石市総合計画(ホワイトプラン)を策定し、「くらし日本一のまちづくり」を目指して、数多くの事業を推進しているが、小中学校建設や道路整備を例にしても、現行の各種法規制や補助金制度等、事業そのものが、国県に依存していると言っても過言ではない。これらの各種制度は、数多い地方自治体にとって相応のメリットを有するが、日本全国、画一的な小中学校整備・道路整備がなされ、没「個性化」を誘発し易くしている。

第三次白石市総合計画(ホワイトプラン)

第三次白石市総合計画基本コンセプト：

Water ----- 「水」の流れと音 ----- 白石川、斎川
High land ----- 「高原」と丘 ----- 南蔵王、丘
Idea ----- 伝統技術・先端技術 ----- 和紙、誘致企業
Time ----- 歴史と未来の「時」の流れ ----- 城下町、歴史の道
Energy ----- 地域活性化の活力 ----- 住民意欲、創造力

水と高原と歴史を活かし、市民のアイデアとエネルギーを結集することによる個性あるまちづくりを目指す。

目標年度：平成12年(西暦2000年)

計画期間：s 63～H12

業務計画(行政組織、法制度などを効率的に活用)
戦略計画(地域特性を活かす横断的プロジェクト)
・お城山整備計画
・遊歩道ネットワーク計画
・白石蔵王駅周辺計画 etc

本市は、この地域で生まれ、育ち、学び、働き、遊び、また喜怒哀楽を共にするなど、本市とさまざまな関わりを持つ人々にとって、安心と幸福を増進するまちづくりを目指し、そのために「くらし日本一」というスローガンを掲げている。これは、本市の有する様々な地域個性（白石川や掘割等の水の清流や音、南蔵王連峰、白石和紙や伝統こけし、誘致企業の先端技術等の生活文化に蓄積された知識・知恵、先人が築き上げた歴史、住民の活力や創造力）を発見、開発し、組み合わせ、独自性を生み出しながら「実質的な生活水準日本一・世界一を目指す」という基本目標のことを指している。

実質的な生活水準とは、人々のくらし向きを実質的に捉え、貨幣的に評価できる要素（例えば所得）ばかりではなく、それ以外の要素（例えば生活環境）をも含めて考える生活水準をいう。

実質的な生活水準を考える場合は、物価、労働・通勤時間、休暇、文化的環境、自然環境、快適性その他の各要素をも総合的に捉えることが必要である。

その実施計画であるホワイトプランに基づきまちづくり事業を実施しているが、戦略計画の第1位に位置するお城山整備計画（白石城復元事業）は、歴史資料や遺跡発掘調査を繰り返し、史実に忠実に木造による完全復元を行い、昭和63年度から平成6年度の7年間の歳月と約30億円の事業費を基に実施した。全国では首都圏、東北地方では仙台市への一極集中が進み、人口や経済指数においては白石市との差は広がる傾向にあることから、市民が「物」だけにとらわれることなく、心の過疎を払拭し、先人が築き上げた白石の歴史と市民の魂のシンボルとして、また、市民が舞台として活動できる生涯学習の場所として「白石城」を復元したものであり、三次目的として、白石城復元に伴う他の地域住民との交流の場を設けることとし、平成7年5月3日より一般公開し、9月初旬には入場者数が30万人を超えている。

また、白石城を核として、武家屋敷整備、掘割（内堀・外堀）の整備、古典芸能伝承の館（能舞台・茶室）建設、そしてこれらを有機的につなぐ遊歩道ネットワークの整備等を併せて実施し、お城山周辺は「歴史文化が薫るエリア」として市民に親しまれている。

完成した白石城の耐用年数は250年を有し、現在も市民のシンボルとして定着しつつあるが、その本来の効果は、今後の歳月によって白石城が周辺の風景に溶け込み、小さい時からお城を見て育った子供たちが、21世紀に地域を担う時こそ達成されるものと考えられる。

白石デザイン会議構想

白石市の城下町としての都市構造、つまり城跡や掘割・町割の秩序、道路網の狹隘が逆に白石市の城下町らしい魅力のひとつであるとの逆転の発想と同様、限られた事業費をより有効に活用するため、従来、使いやすく・丈夫で・適性価格の施設整備を図ることを重視してきたが、これら要件に「白石らしい質の高い」公共施設整備におけるデザイン構想の策定を前東北工業大学川向正人助教授（現：東京理科大学助教授）を始めとする建築家に依頼した。

川向正人氏、芦原太郎氏（芦原太郎建築設計事務所主宰）、北山恒氏（現：横浜国立大学助教授）、そして堀池秀人氏（堀池秀人都市建築研究所主宰）の4名により「白石デザイン会議」を組織し、ホワイトプランの診断や白石市の現状の視察、確認分析を重ねていただいた。

まちづくりの手法については、白石城復元事業に代表される、城下町としての歴史的街区の都市構造を守り、城下町イメージの集積を育てていく地区と東北新幹線白石蔵王駅に代表される、21世紀に向けた本市の新しい顔づくり構想等、重点地区を選定し、具体的なまちづくりのコンセプトとして外科手術的都市の改変ではなく、本市におけるイフェクティブポイント毎に刺激を与え、周辺の計画を誘導（誘発）し、自然治癒を目指す漢方療法的都市づくりの構想を提言された。

これらデザイン会議の構想提言を平成4年度に受けた際、より具体的に目に見えるものにするため、ホワイトプランに基づき計画されていた「白石第二小学校改築事業」や市民公募により命名した「しらさぎ橋」建設事業等を本構想手法により実施した。

白石第二小学校改築事業については、実際に学校を利用する主人公である児童や教師、保護者の皆さんと建設を担う行政、建築家が小学校の設計段階から一緒に考えるワークショップ手法で進めた。

学校建築に係るワークショップ手法については前例がなく、デザイン会議4名の委員に指導を受けながら進めたが、小学校低学年（「こんなものがあつたらいいな」＝遊具や遊び場所）、中学年（「こんな教室があつたらいいな」＝特別教室等）、高学年（「こんな形の学校があつたらいいな」＝全体的な外観や設備等）毎にテーマを設定し、児童690名、保護者661名、教師・行政を含め合計1401名が参加してのイベントを実施、主人公が考えたすべてのアイデア・提案を建築家が把握し、そのアイデア等を最大限に活かして建築された校舎で児童が生き生きと授業を受けている。（屋内体育館及び一部特別教室については、平成8年3月竣工予定）

しらさぎ橋については、都市計画街路整備事業の一環として計画していたが、一級河川斎川が白石城を中心とする歴史的地区と白石蔵王駅周辺を中心とする新しい町並みを南北に分断している地形と、斎川が建設省の「ふるさと」の川モデル事業」に指定を受け、従来の河川改修とは違った新しい発想により整備が行われることを考慮した。その結果上部工の設計については、白石デザイン会議の指導の基に、従来の指名競争入札ではなく、随意契約により建築家を選定し、地域にふさわしい橋梁設計を委託した。

これら、デザイン会議の主旨と成果や今後のまちづくりについて、市民と共に考え協議する場として「白石デザインフォーラム」を開催した。

白石デザインフォーラムでは、白石第二小学校改築ワークショップでの児童や保護者の意見が具体的にどのように学校建築に取り入れられたか、また今後のまちづくりにおけるデザイン会議の検討内容・ディスカッションの成果（構想）がパネルや模型としてわかりやすく展示され、「市民」と「行政」と「建築家」の白熱した意見が交換された。

都市プロデューサーの採用

公共施設整備の原点は、「完成した施設が市民に愛され、市民に数多く利用していただくこと。」だが、実施にあたっては、その事業費の適切な運用が行政に求められており、建築や土木工事についての施工事業者の選定については、指名競争入札や一般競争入札が採用されている。

質の高い建築は文化に通じると考えるが、建築デザインを左右する設計者（建築家）の選定は、その入札金額だけでは目安に成り得ず、建築家の美的感覚や感性は金額では計れない。

本市の歴史文化を継承し、創造しうる「質」を備えた建築をつくることは易しいことではなく、完成時の「質」、そして永く使い続けている間に生じる「質」の変化に対する評価は、高度な専門的知識と感覚が要求されているが、これらは行政や一般市民では非常に困難である。

これらの難問題を解決する方法として本市は、堀池秀人氏の提唱する東洋医学的手法（外科手術的にスクラップ・アンド・ビルドにより都市を改変していくのではなく、白石のイフェクティブポイント（漢方というツボ）に対する最小で最大の効果を求めて、自然治癒を目指す漢方医学療法的な都市づくりの手法）に最も共感し、白石市「都市プロデューサー」制度を創設、堀池秀人氏に都市プロデューサーを委嘱している。

堀池氏は、学生の頃から都市工学研究のため白石市を訪れ、本市の個性に高い評価を与えており、白石デザイン会議構想にも参画され、市民の要望等も熟知されている。

現在、「都市プロデューサー」には、市民の意見を充分に取り入れつつ、ホワイトプランに基づいた21世紀における本市の全体的な都市デザインを描き、同時に、新しい都市づくり計画への指導や助言もいただいている。

また、わずかに人口4万2千人の白石市が、特定の地域に建築群をつくることは困難であること、優秀な建築家として堀池氏にも建築単体の設計を委託する場合もあること、また白石市全部の建築設計をプロデューサーに委任することは、いらざる誤解を受ける恐れがあることなどを考慮し、都市プロデューサーと充分協議しつつも、建築単体設計に係る建築家選定権限は自治体が持ち、責任の所在を明確にしている。

建築文化を地域振興のひとつの方策とする考え方は、比較的新しいものであり全国的にはくまもとアートポリスが有名だが、小さな自治体である白石市が、個性あるまちづくりを推進するより有効な方策として、都市プロデューサー制度という新しい取り組みを実施し、「くらし日本一」を目指したまちづくりを具体的に進めている。

●かわい・ていいち／宮城県白石市長

言語の共有とプロセスの透明化

「白石デザイン会議」の試み

川向正人

白石デザイン・ポリス

解体から関係の構築へ

地域が時折見せる閉鎖性・排他性に過度に反応して、地域そのものを敵視し、リージョナリズム（地域主義）に抗するインターナショナルイズム（国際主義）を相も変らず掲げるのは、あまりに教条的で観念的な振る舞いと言わねばならないであろう。地域は近代の間に踏み躪られ、痩せ細ってしまった。高度経済成長期の辺りから、人々は地域社会に根ざした生活から、急速に離れていった。それまでは、人々は、日々の生活でも祭りや盆正月の年中行事においても、助け合い、ものを分け合って、実に濃密な相互扶助的な関係の中で生きていた。住宅の居間にも、外の路地にも、声が響き笑いが絶えることはなかった。家族の生活、地域の生活があった。それが、急激に解体してしまった。人がいなくなり、子供は遊ばなくなり、地域社会は冷え込んでいったのである。

今、徐々に地域は回復しつつある。笑顔を取り戻し、元気を回復しつつある。だが、一度は、死の町、死の村を体験した人々は、現状に安穏としているわけではない。だから、他者に対し、つい頑ななポーズをとることがある。甘い誘いには、人一倍、用心する。だからといって、地域が常に閉鎖的で排他的だとするのは誤りなのだ。地域はむしろ開かれており、他者に優しく、無防備ですらある。その優しさと無防備さが、これまでの歴史で、様々な地域の悲劇を生んだとも言えるのである。

その地域が今、建築文化的に見ても、少しずつ回復しつつある。総体的に、地域の文化的活力が回復しつつあり、と同時に、文化水準の向上にともない、建築により高い質を求めるようになってきている。その結果、従来は何の変哲もない建物を建てて済ませていたものまでも、質の高い建築を求めて、建築家に設計を委ねようとする気運も生まれつつある。地域と意欲的に取り組み、建築家が質の高い建築の魅力を伝えることによって、地域

住民や行政が建築家の職能を改めて認識し、設計を依頼する。このような好ましい気運が生まれつつある。海辺の、あるいは山里の、小さな町や村にも、日々の生活を刺激し、生きる楽しさを倍増させ、人々がそこに住むことを誇りに思い、住み続けたいと願うような魅力いっぱい建築が、ポツポツと姿を現しつつあるのである。

ほんの少し前までは、「内」（地元）の建築家は、「外」（多くの場合、東京及びその周辺）から来る建築家に仕事を奪われるのではないかと、必要以上に身構えていた。そして「外」の建築家は、「内」の建築家のそういった姿勢を、偏狭で無意味な地域主義として非難した。その対立自体は、まだまだ完全に解消したわけではないし、また新たな局面を開くためにはその対立のエネルギーが必要とされる場合も少なくない。しかし、要は、地域にふさわしい、地域が望む、質の高い建築がつけられるかがポイントであって、ある「関係」が生まれ、その中で建築家同士の切磋琢磨によって地域に提供する建築の質が高まれば、「内」「外」のいずれかが問題ではなく、地域からの設計依頼数は必ず、総量として増えてゆく。バイそのものが大きくなってゆくのである。

建築言語への変換と共有化のプロセス

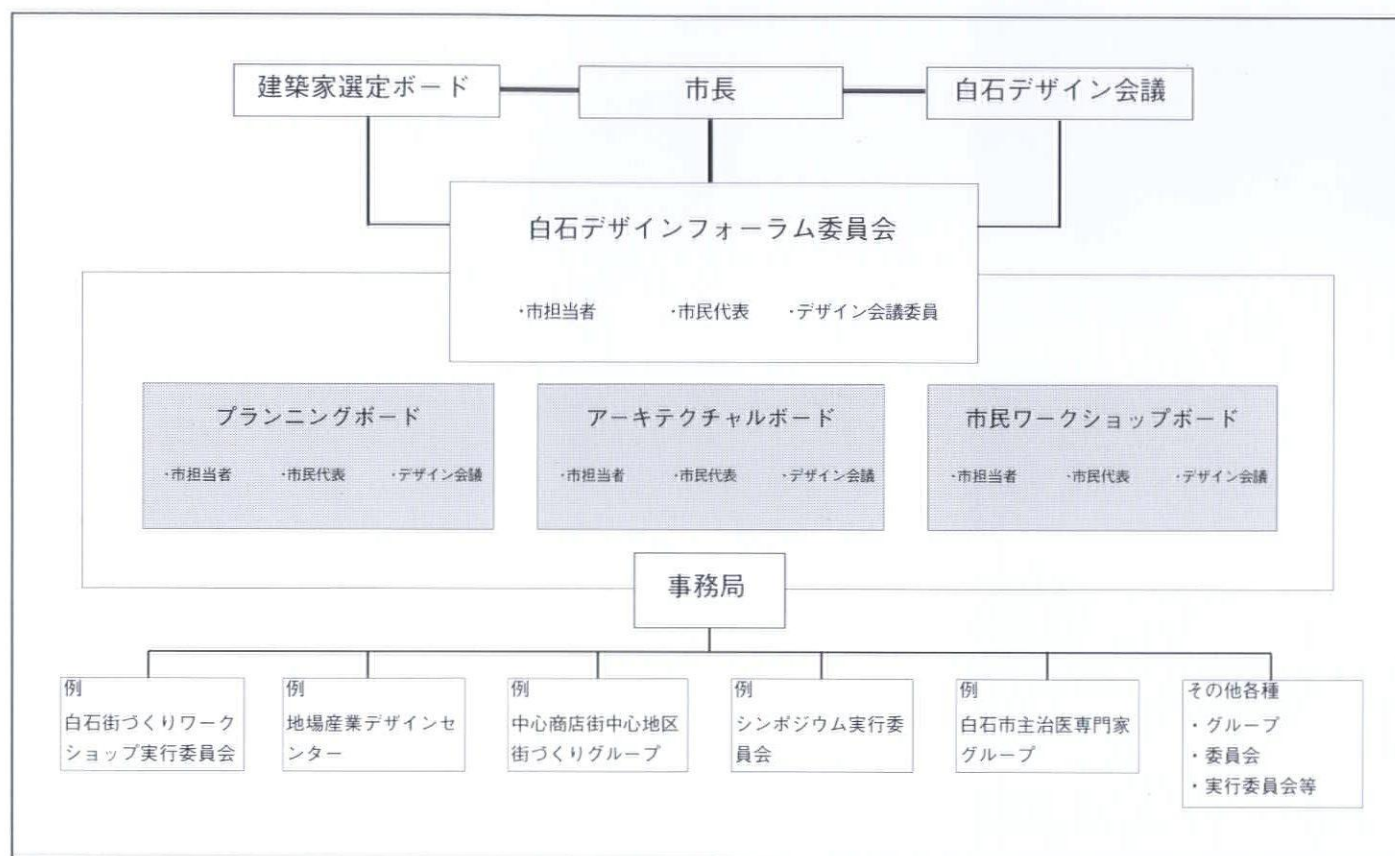
先に私は、地域にふさわしい、地域が望む、質の高い建築をつくれるかがポイントだと述べた。「具体的に言えば、それはどのような建築か」。私の述べたことに對し、当然のことながら、このような問いが立てられるはずだ。この問いに答えるのは残念ながら紙面の関係上、別の機会に譲らざるを得ないが、当座の答えとして、「成功か失敗かは、まだ判断できないが、取り敢えず、これから出てくる実際の作品、白石第二小学校をご覧下さい」と申し上げておきたい。

ここでは、最終的には建築の質にはね返ると思われる、建築の計画と設計のプロセスについて述べておきたい。かく言うにも理由があって、望ましいプロセスの確立こそが、宮城県白石市で「白石デザイン会議」を組織したときに、私たちが共有していた最大の関心事だったからである。

私の地域研究、あるいは建築史家としての歴史研究のメインテーマでもあるが、「ある時代、ある（地域）社会には、様々な現象を生む母胎となる、内在する生活の様式あるいは形式がある」と私は考えている。それは、「隠れた秩序」と言ってもいいし「構造」という表現を当ててもいいかもしれない。「様式」という概念を例に挙げると最も分かり易いと思うが、近代という時代は、時代や社会に内在するそれを解体し、きわめて個人的なものに置き換えてしまった。個人様式ばかりがキラキラと輝く時代となった。しかし、近代以前には、とくに地域社会には、日々の生活でも実感できる「生活の様式あるいは形式」が存在していたのである。地域の活力が回復するというのは、単に人やイベントが増えることではなく、この種の「様式」「形式」が、時代とともに変容しながらも、再び有効に機能し始めることを意味している。

もともと建築家は、この種の内在する「様式」「形式」を、個別の言語化を通して、その建築・空間に顕在化させてきたのではない。しかも、その言語は、私的なものではなく、共有可能なものであったはずだ。

「白石デザイン会議」では、まずメンバーとして参加する建築家同士の言語の共有が重視された。個人の仕事取りとしないことは言うまでもなく、個人様式、私的言語の強引な持ち込みも極力避ける努力がなされた。その努力がどの程度実を結んだかは今後の評価に委ねたいが、言語を共有しオープンな人間関係を築くことで、いかに個人主義の陥穽に陥らずに、地域・都市に内在する「様式」「形式」に接近してゆけるか。「白石デザイン



白石市における参加型まちづくり提案組織図

会議」の関心を要約すれば、恐らく、ここに行き着くはずである。

「白石デザイン会議」の企画・運営で、進行中の建築・都市づくりの情報を一般市民に公開し、また彼らから意見を求める「白石デザイン・フォーラム」を開催したのも、言語を共有しオープンな人間関係を築く試みを拡大するものであった。コミュニケーションの輪を広げ、また一般市民とのコミュニケーションを通して、地域社会に内在する「様式」「形式」にアプローチする試みの一環として行なわれたものである。

プロセスを透明化すること

「白石デザイン会議」は、「建築家選定ボード」によって課題に見合った能力を有する建築家を選定するところから、その建築家が提出する案を段階毎にチェックすると同時に行政担当者や一般市民がその案の内容について理解するのを助ける場としての「プランニングボード」「アーキテクチャルボード」「市民ワークショップ」を相互に関連し、ひとつのシステムをなすものとして提案した。市内の中心的な公共施設・空間であり日常生活上も市民

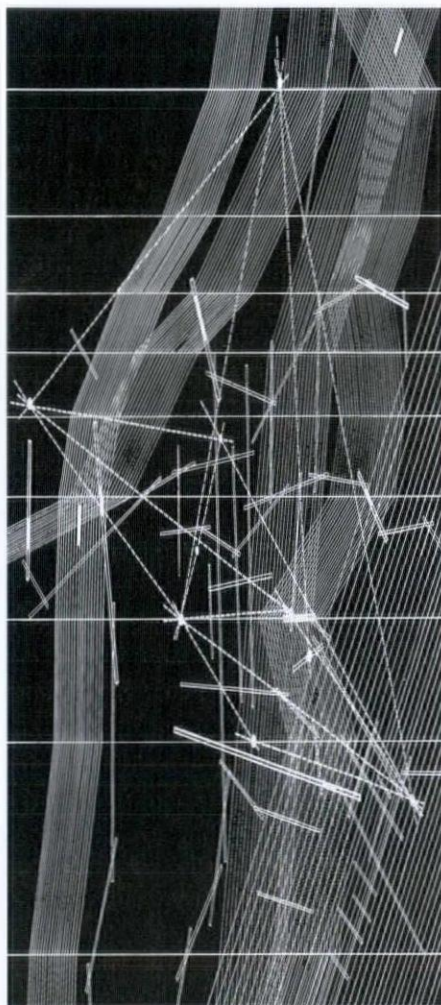
との結び付きが強い白石第二小学校の全面建て替えを、計画から設計まで「白石デザイン会議」で担当することになり、メンバーの荻原太郎氏と北山恒氏（ワークショップ）が、設計J Vを組んで、私たちの提案したシステムを、まさに試行錯誤で進めている。

個人の思惑を排除して、徹底してプロセスを透明化する。そうすれば、その向こうに、地域の「様式」「形式」が自然に浮かび上がってくるはずなのだ。

●かわむかい・まさと／東京理科大学助教授、元「白石デザイン会議」委員長

堀池秀人

白石メデア・ポリス



線形解析

「平行の街」

東北の大都市仙台に程近い白石は人口4万2千人の小さな都市として、嫌が上にも仙台の影響圏下に置かれている。新幹線や高速自動車道が仙台からさらに北へ伸び、白石に通過型の都市としての性格を与え始め、商圏や通勤・通学圏といった人々の生活に影響を及ぼしながら、僅かずつではあるが、若年人口の流出や経済低滞の兆候を見せ始めていた。そこで、都市の活性化が大きな目標に据えられ、注目度が高く、文化的でインパクトの強いプロジェクトを展開しながら都市づくりを行なうことが求められた。

一方、東北新幹線や東北自動車道などの、ほぼ南北に走る交通インフラや河川により、東西方向に平行状に分断された白石では、当

然のように地域分断が発生し、せつかくの城下町としての歴史的な骨格も歯こぼれ状態を呈し、スプロールと没個性化の傾向を示していた。そのあまり輪郭の定かでない景観の中にあって、分断するインフラだけが妙に明瞭に目に映る様を、いつの間にか「平行の街」と呼ぶようになっていた。

先に触れたようにウィーンに造詣の深い市長との度重なる対話は、時として文化や芸術にまで及び、その中から文化戦略としての都市づくりを望んでおられること、進出してきている先端企業との協調や情報化時代を睨んでの高度情報都市化への期待等を知ることとなった。さらに、建築史の平井聖氏の監修により復元された白石城や、健康食品でもある温麺、伝統工芸としてのこけしや手すきの和紙などを全国的に知らしめていくことで、白石という都市の広報にも繋げていこうという考えも披露された。都市の知名度を上げていくことで、自分達の街に対する人々の誇りや愛着を喚起し産業活性をも促すという例は他都市にいくつか知っていてもいた。

こうした規模の都市で、ジョエル・ガーロが言うような社会学でいうエッジ・シティ化の危機に直面した場合、かなり強いインパクトをもつ戦略を立てないことには、そうした流れを食い止めることなどできないこともわかっていった。

一方、「デザイン会議」の時も含めて何度もこの街に足を踏み入れるうちに、そこに毎回小さな新しい発見があることに誘われ、数名の所員を引きつれ、じっくり都市を読み込んでいく読解行為を重ねていった。微地形を縫うように展開する露地的空間や都市組織の織りなす綾、白石川と齊川の合流点に顔をのぞかせるトポグラフィックな奇岩や、田畑のまん中に唐突と登場した築山のようなスケールの小山とそれを暴力的に突き抜けていく新幹線レールが生み出した印象的な光景等々、さほど大きくはない都市規模に深みを与える発見の数々に我々は目を奪われていった。

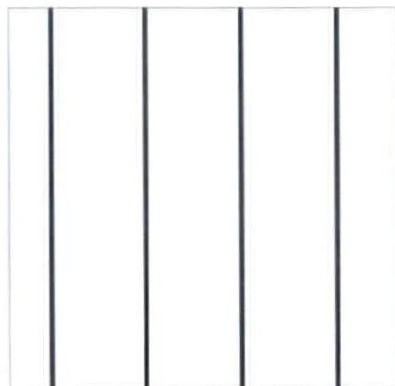
また、他都市でもよく目にする光景だが、いわゆるデコレートッド・シェッドのようなキッチン化した建築が混入することによる街並みの混乱や、全国に汎用するアーケードや商業看板等による無個性化などが目につき始

めていた。だが、低滞しているかに見えるこの街の緩やかな経済成長が幸いしてか、そうした問題は、それほど大きくはなく、肥大した商業資本が街全体を媚態化してしまうような程ではなかった。

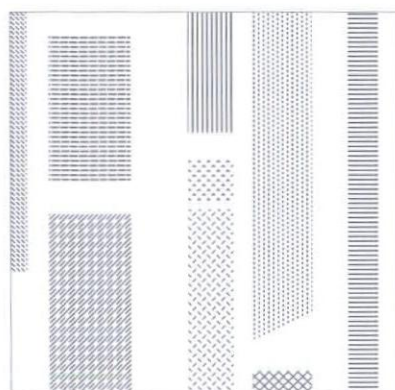
こうした体験の中から、この街には微地形を大胆に改変していくような、いうならば、大がかりな外科手術を伴うような都市づくりの方法は、ふさわしくないと思うに到った。かわりに、城郭や町割、水路に武家屋敷など若干残っている歴史的骨格、幾分歴史性を帯び始めた大正ロマンを想わせる建築の点在などなど。新旧の建造物が微妙にバランスをとりながら共存し、微地形に応答しながら成長していく姿がふさわしく思われた。しかし、一方でこうした読み方が他者のまなざしであることも気になっていた。そこに住んでいる訳ではない者が、生活者のまなざしをもとうとしても限界がある。それを少しでも補う意味で街に住む人々と積極的に接点をもちながらヒヤリングをしていった。そうした中で、街づくりによる活性化を強く願っておられることなどを実感していった。街づくりを続けていくには、まずそれなりの活力、つまり初動力とでも呼べるようなモーメントの必要なのが口々に叫ばれてもいた。そうした状況の中、白石市では、スポーツ・アリーナ、メッセ、コンサートホールを複合した大きな施設の建設が計画されていた。都市規模に比して、スーパー・スケールとも思われる施設が、綾を見せる中心都市域に計画された場合、この街に決定的なダメージを与えようと考えられようが、幸い新幹線駅近くの、新開発地に計画されることが既に決定されており、ひとまず胸をなでおろした。そこは従前の都市計画により、もとの土地の記憶は見事にかき消されてしまっていた。そのあつけからかんとした様に、やや唾然としながら訪れてみると、そこでは、この街を平行の街と呼ばしめた新幹線路が、皮肉にも分断によりその影響が他地域に拡がるのを食い止めているようにも思えてきたのだ。

●ほりいけ・ひでと／建築家、白石市都市プロデューサー

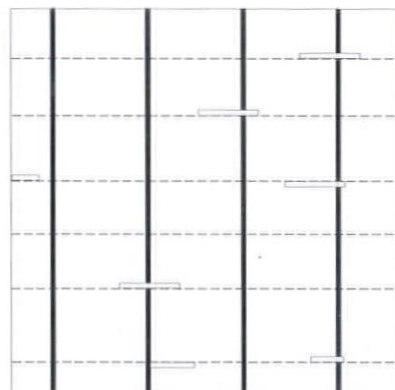
*: ジャーナリスト “Life and New Frontier” 著



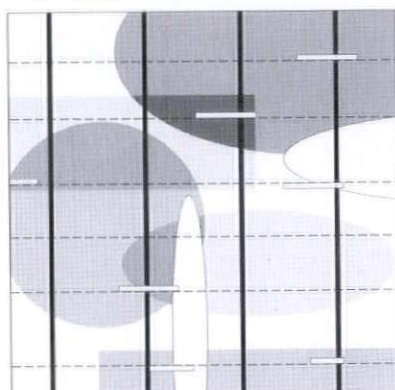
都市構造モデル



ゾーン組織モデル



作用子(都市的デバイス)モデル



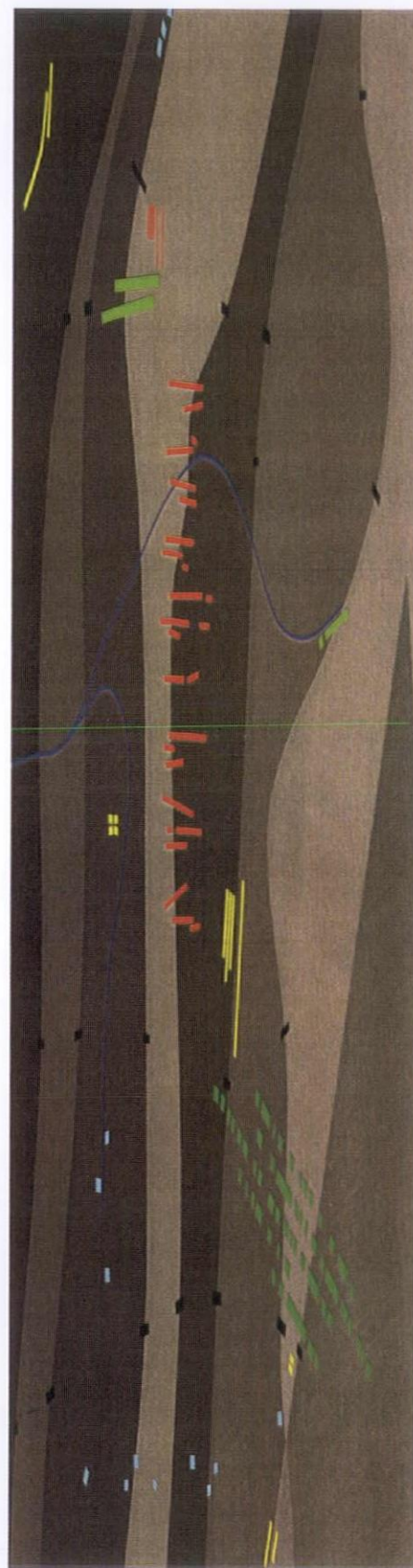
ゾーン・インキュベーション・モデル

この街には相反するようにも思われる二つの期待があるように思われた。全国的に常套化している「調和のある街づくり」なる標語は、そうした場合には便利な言葉だ。だが、現実に応用しようとする、デザインや感性、さらには趣味などといった非合理的な評価基準の前に、あえなく撤退をさせられた例を、これまで数多くの都市づくりの現場で目にきてもいた。街の活性化という、いわゆる都市力強化を求める声と、白石の微地形を捉えた場所性や歴史性に配慮し、緩やかな共存を求める声の存在。そこでは、異なる2つの方向にそれぞれ応答するデュアル・タイプの戦略が要請されていると考えた。

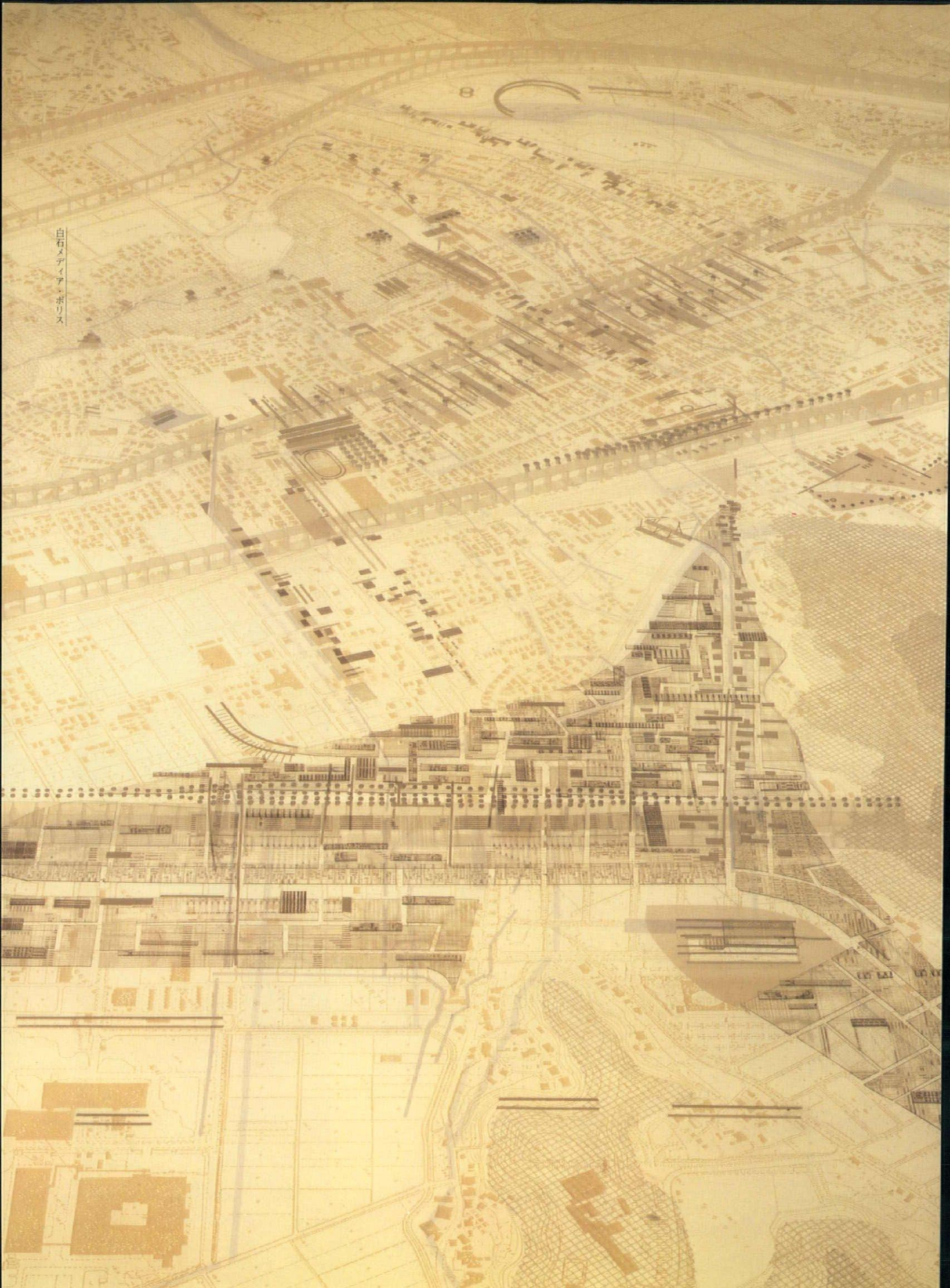
とり急ぎ計画の実施がさし迫っていた大型複合施設は、コンベンションという最も現代的な機能構成の内容からも、「強化」のためのプログラムが期待されていた。さらに、情報ネットワーク化の機運が高まりを見せ始めた白石では、高度情報都市を目指すという大きな流れがリアルな徴候を現わし始めていた。こうした未来指向のプロジェクトが「強化」を目指していることは言うまでもない。その「強化」のためのプログラムは、初動をつけ、強度を増していく思考で発想していかなくてはなるまい。だが、一方で肥大する資本やメディアの前に、都市がコントロール不能となることだけは避けなければならないはずだ。そこで、「強化」の推進力でありながらもある意味で抑止力として作用する文化的戦略を遺伝子のように投入していくことを構想していった。いうならば文化的遺伝子となるのは、初段階は担い手としての「人」であろう。広い人的チャンネルをもつ三枝成彰氏をコンサートホールの音楽監督に、白石城のポスターのデザイナーにCGアーティストの河原敏文氏を、さらに観光ボランティアの服装等のデザイナーやアドバイザーに、服飾を通してコンセプト的なメッセージを世界に発信し続けている三宅一生氏を、それぞれ推薦していったのは、そうした理由からであった。現在交渉中の三宅氏は、ヒット中の作品のマテリアルが、白石でつくられていることもあり、どうやら地元では待望されているようである。今後、なるべく多くの文化人やアーティスト、建築家などに参加してもらい、大きな文化的なうねりを生み出していくことが期待されている。

一方、さし迫っていた公共施設の計画が点在していること、現在はあまり大きな財政力のない都市であること、幸い歴史的骨格がかなり残っており、微地形と応答しながら都市組織との間で細やかな綾を成していることなどを勘案する中から、ささやかなプロジェクトを張りながら、大きく都市を構想するような方法、拠点計画を都市への点刺激として、周辺への波及効果を期待しながら積み上げていく方式、いうならば人体へのツボ療法にも似た自然療法的都市づくりの方法を構想していった。

文化的戦略と自然療法的方法、この2つをオーバーレイした地平にデュアル・タイプの戦略が浮上してくるという訳である。



全体構成イメージ





デュアル・タイプの戦略は、オーバーレイされながら展開していくものとして構想されていることは、先に述べた通りである。デュアル化される戦略なり方法なりを相として捉えるならば、オーバーレイであるということは、それぞれの相が各々独立に思考(計画)され、操作されることを保証しているはずだ。

そこでは、相相互の関係性が検討され、そこに発生するであろう僅かなズレの中に、新たな空間の発生の契機が期待されていることも否定できない。オーバーレイの操作は、そのことにおいてのみ意味をもっているからである。しかし、このことは、都市がバラバラでよいということを意味するものではない。そこには一貫するコンセプトの存在が必要となる。ゾーニング・インキュベーター(Z・I)のモデルは、こうした場合に想定されてくる主導概念である。

情報やアクティビティを受容する器^{コンテナ}＝Z・Iのイメージが主導する建築的空間装置のモデルは、都市(社会)と関わりをもとうとすることにおいて、“都市建築”のモデルを意味する。“強化”を目指す施設や、効果拠点(E-Point)における波及効果が、期待される施設などが、いずれも都市へ投下される点刺激として構想される時、Z・Iの概念は重要な役割を果たしていく。

言いかえるとZ・Iから発想される建築的空間装置は、作用子として社会と関わりをもつモデルである。このモデルを都市域レベルまで拡大した、都市的空間装置とでも呼びうるディバイスは、作用子として、地区間、地域間に横断的に関わるモデルとして構想される可能性を胎内化している。そこに、作用子としてのディバイスの拡大モデルを、地域分断の解消への武器^{ウェポン}として登場させる意義が見え隠れしてくる。

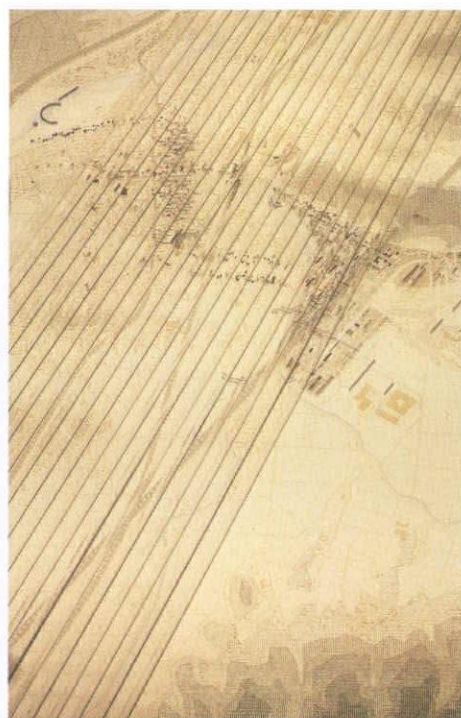
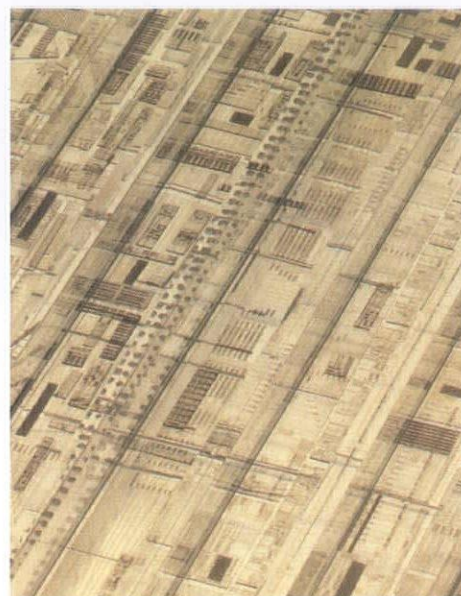
*114 ページ参照

マスター・イメージ

現状の都市を読み込む作業、それは、「都市のつぼ」(E-Point)と見立てられる都市構成上の重要な拠点を発見すると同時に、これまでの都市計画でなおざりにされてきたスキ間のような空地(ネガ・スペース)に目を向ける行為でもあった。

マスター・プランで対象化することが困難な、こうした空間やその集積としての都市形態。それらを掘り上げていくかのように描かれるマスター・イメージの存在は、たとえそれが私案であったとしても、人々にグランド・ヴィジョンとしての都市像を示しながら、都市づくりを先導しようとするところにおいて、その意義は大きいと思われた。都市プロデューサーが、マスターイメージで意志を表明することは、活発な議論を呼び、人々の都市(公共)意識を喚起させる意義があるが、ある意味では冒険でもあろう。その上でも、都市づくりをリードするという、求められた役割を果たすことを優先したいと考えた。

今回提示されたマスター・イメージは、都市プロデューサーに就任以来初めて提案された私案である。イメージを喚起するための若干の誇張があることは否定しないが、実現可能性をかなり意識しながら描いたものでもある。その為、進行中のプロジェクトについては、極力リアルにプロットしたつもりだし、現段階で考えていることは概ね盛り込んである。模型写真や図面から読みとっていただくのが一番手っ取り早いだろうが、敢えて説明を加えるならば、トポグラフィカルに極立っていた2ヶ所の場所(先に触れた奇岩と築山状の小山)を基軸に、綾を見せる既成市街地中心部には、露地等の空地に対するデザイン、大正ロマンを想わせる街区列にはイン・フィルによる整備、新幹線駅周辺にはデジタル化された電子の海といったメタファーによる街区構成、そして駅前の「光の塔」—Zona—Velo・city との間での光のグランド・アートの提案といった構成である。



P.136, 137: マスター・イメージ模型

白石メデア・ボリス



点刺激と波及域の考案



1: 田畑の中の築山状の小山と貫通する新幹線。『光の空洞としてのトンネル』

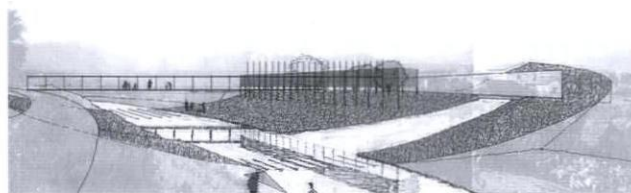


2: 在来線駅前: 駅舎前の広場としての大歩行者空間。プラト、長いキャノピー、インフォ・センター、インフォ・ボードが顔をのぞかせる

3: 新幹線駅周辺: 「デジタル化された電子の海」へと視線を誘導するvoid (すき間) のデザイン

4: バイパスと国道とその分岐点としての場所性を表明する建築的デバイス

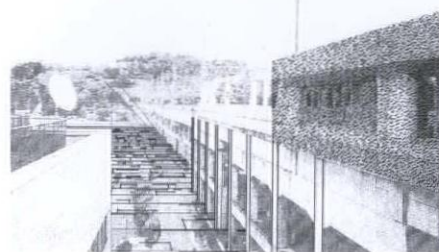
E-Pointを発見しようとするまなざしは、どこか診察医のそれを想わせる。都市組織の形成が顕著な地区では、主としてそれは癒しを必要とすると考えられる個所、つまり“患部”や、歯抜けの状態の空地、“遺棄されたスペース”としてのスキ間などに向けられ、未だ都市組織が形成されてないところでは、将来の発展形態を見据えた上での効果性を担保するトポグラフィックなコンディションへと向けられる。大切なことは、その場所で空間の質、いわゆる場所性を読みとり、点刺激のあり方と波及域を考察するという、徹底した現場主義をとる



5: 斎川、沢端川合流点: フリーマーケットスペース、美しい石造り倉庫、川を横断するトポグラフィックなプレート

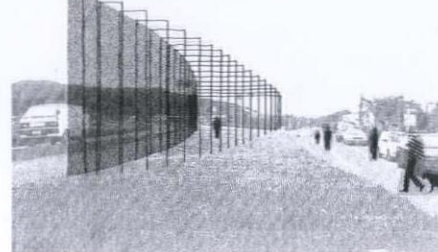
たこの方法は、さらに、地域を繋ぐ作用子としての都市的空間装置で強化されながら、地域分断の解消に向けて提案されている。

ここで大まかにその提案の点描を試みるならば、新幹線駅周辺から新開発地に展開する“電子の海”をメタファーとするゾーンは、新幹線と平行に伸延された新しい業務ビル群との間でデジタル化された風景を描きながら、「高度情報化都市」のイメージを表徴していくことが想定されている。これらの地区から在来線駅にかけては、ほぼ直線状に、グラデュエーションを示しながら、旧中心部へと



3: 斎川、沢端川合流点: フリーマーケットスペース、美しい石造り倉庫、川を横断するトポグラフィックなプレート

ことではなかろうか。白石では、現場での議論とラボでの分析/検討が交互に繰り返されていった。ここに提示されているのは、現在までに発見されたE-Pointと、それぞれで考えられる処方の一部である。全てに共通しているのは、極力ささやかな(コスト上でも)しかけで大きな効果を生み出そうという一貫した姿勢である。それぞれには固有な波及域が想定されており、その意味ではある程度の完結性が付与されている。したがって、それぞれがプロジェクトされた場合、完成すると、あるまとまった効果を見ることが企図されている。そこには、都市づくり



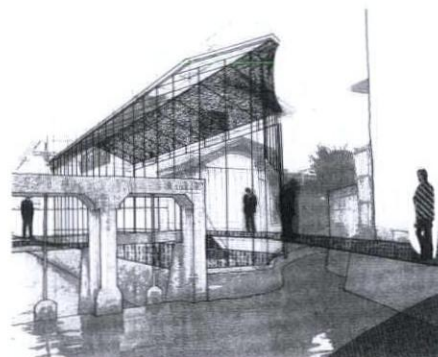
4: バイパスと国道とその分岐点としての場所性を表明する建築的デバイス

という大きな流れがサイクル毎に成果を見せていくことで、中断した場合に、半端な醜態をさらすことがないようにとの願いが込められている、と言ってもよい。

さらに、頂度マスター・イメージが、マスタープランよりもフレキシブルに、全体像を示しながら、都市イメージをリードしようとしているように、ナラティブなゾーニングが、オーバーレイされることで、地域地区制よりもフレキシブルで緩やかなゾーニングをかけ、地区イメージをリードすることを考えている。「平行の街」を想わせる白石で発想され



6: 道路を横断する露地の空間のつらなり



7: 沢端川に水路が入り込んでいるE-point。橋とボードウォーク、ガラスのギャラリー

人々を導びいていき、さらに、斎川をまたぐディバイス群が在来線駅の地域へと繋いでいくであろう。若干趣きを変えた白石駅周辺の地区から大手町へと带状に続くゾーンは、歴史的地区へと繋ぐ重要な軸線として白石城へと向かっていく。できれば視線の抜けも確保したいところだろう。このスパインと直交するゾーンでは、露地の空間が道路を横断しながら、平行状に連なり、この街のきめ細やかな魅力を魅力的に見せてくれるだろう。

さらに、大正ロマンを想わせる建物が新しくイン・フィルされた建物との間でアンサンブルを演じ

てくれるゾーンや、小さな水路と緑の帯で繋がったゾーンなどが、白石に回遊性をもたらしてくれることを期待したい。

こうしたナラティブなゾーンとオーバーレイして投錨されるであろう武器としてのディバイスの数々。これらが効果を発揮しながらバランスのとれた都市として成長していくことを願ってやまない。



8: 新開地区(鷹ノ巣地区)方向全景。左手には「電子の海」に喩えられた低層高密度の建築群とVelo-City。右手には業務ビル群

白石市立白石第二小学校

芦原・北山設計共同企業体

Shiroishi Municipal No.2 Elementary School
Ashihara-Kitayama Joint Design Corporation

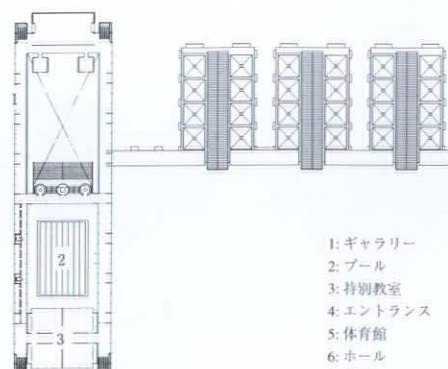
白石デザイン・ボリス

この小学校は、白石市のまちづくりの一環として位置づけられている。白石市では、新しいまちの姿を模索中であることから、私達は行政・専門家・市民という三者が一体となってまちづくりを進めるための開かれた場として「白石デザインフォーラム」を提案し、そのパイロットプロジェクトとして設計にとりかかった。

従来の学校の設計では、建築計画学的側面が重視され、ややもすると学校の本当の主役である児童たちの意見・意識がなかなか反映されることがなかった。そうしたことから、ここでは「ワークショップ」という開かれた設計方式を採用した。児童・父兄・教職員の参加によってフィードバックを繰り返しながら計画が進められてきた。

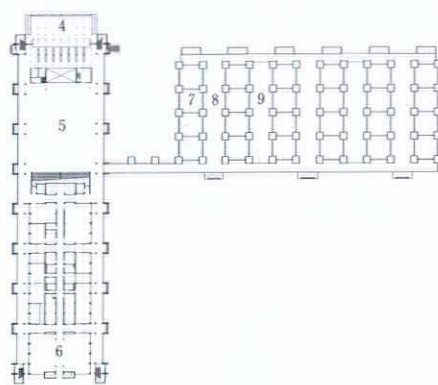
この学校の配置は、教室棟と地域のコミュニケーション施設としても機能するパブリック棟（体育館・プール・特別室・会議室・職員室）とに二分され、それらがし字型に交わっている。そして全体は、通風・採光を配慮したエコロジカルなデザインが基調となっている。

教室棟では、旧校舎の良さを生かした平屋建てとし、日本家屋の広間広縁のイメージが導入されている。その空間システムは、4室1ブロックの教室と大廊下（多目的スペース）、中庭を交互に配置している。さらに可動空間仕切りによって、多様な教育方式にも対応できるように計画されている。現在のところ教室棟が完成しており、パブリック棟は今春完成予定である。



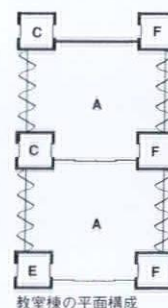
2階平面図

- 1: ギャラリー
- 2: プール
- 3: 特別教室
- 4: エントランス
- 5: 体育館
- 6: ホール
- 7: 教室
- 8: 多目的スペース
- 9: 中庭

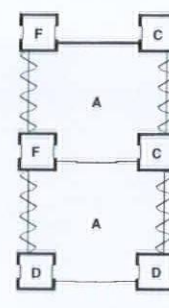


1階平面図

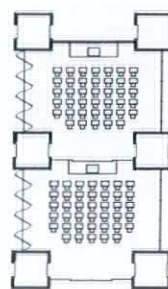
所在地: 宮城県白石市字白石沖29
主要用途: 小学校
施工: 安藤建設
敷地面積: 24,482m²
建築面積: 7,272m²
延床面積: 8,831m²
主体構造: RC造+S造
規模: コミュニティ棟: 地上2階/
教室棟: 地上1階
竣工: 1996年3月 (予定)



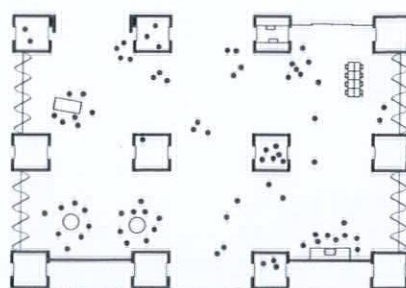
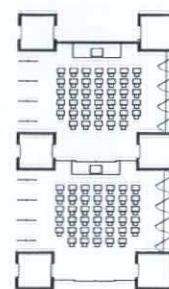
教室棟の平面構成



- A: 教室
- B: 多目的スペース
- C: 教師用スペース
- D: 児童用スペース
- E: 休憩室
- F: 倉庫



教室使用例: 机の整列配置



教室使用例: 各生徒の机を除いたランダムな使用

教室棟使用バリエーション



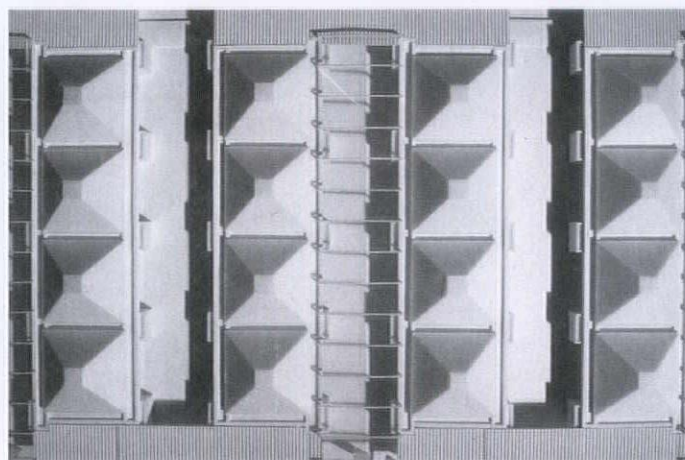
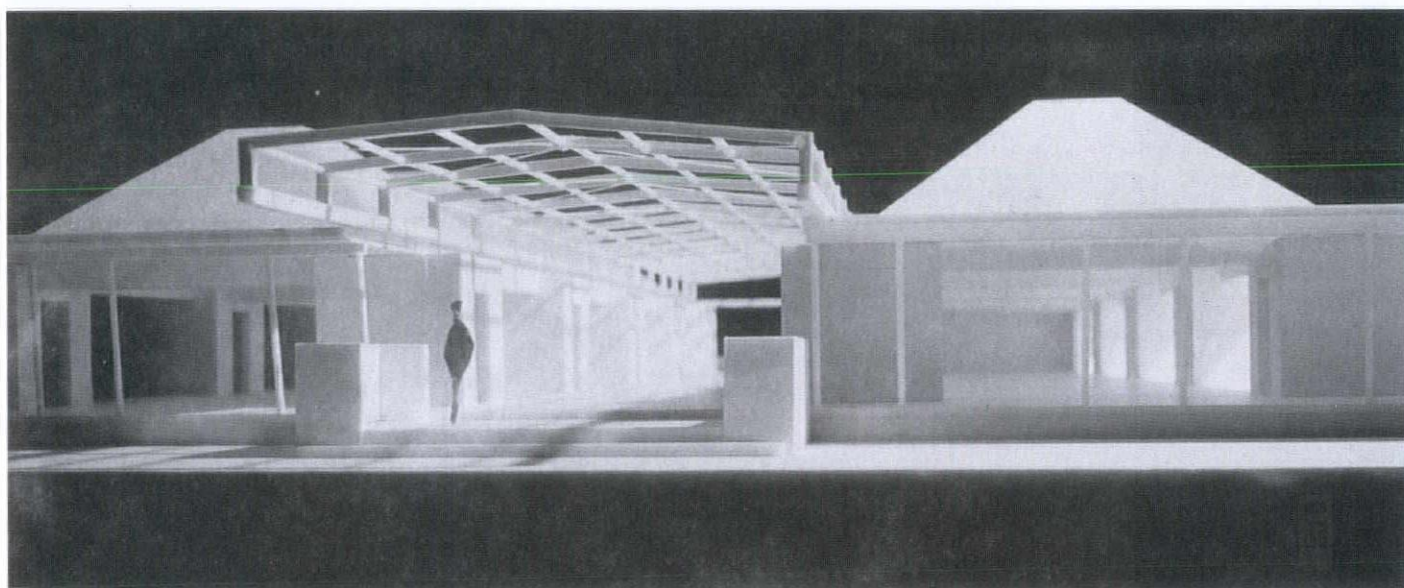
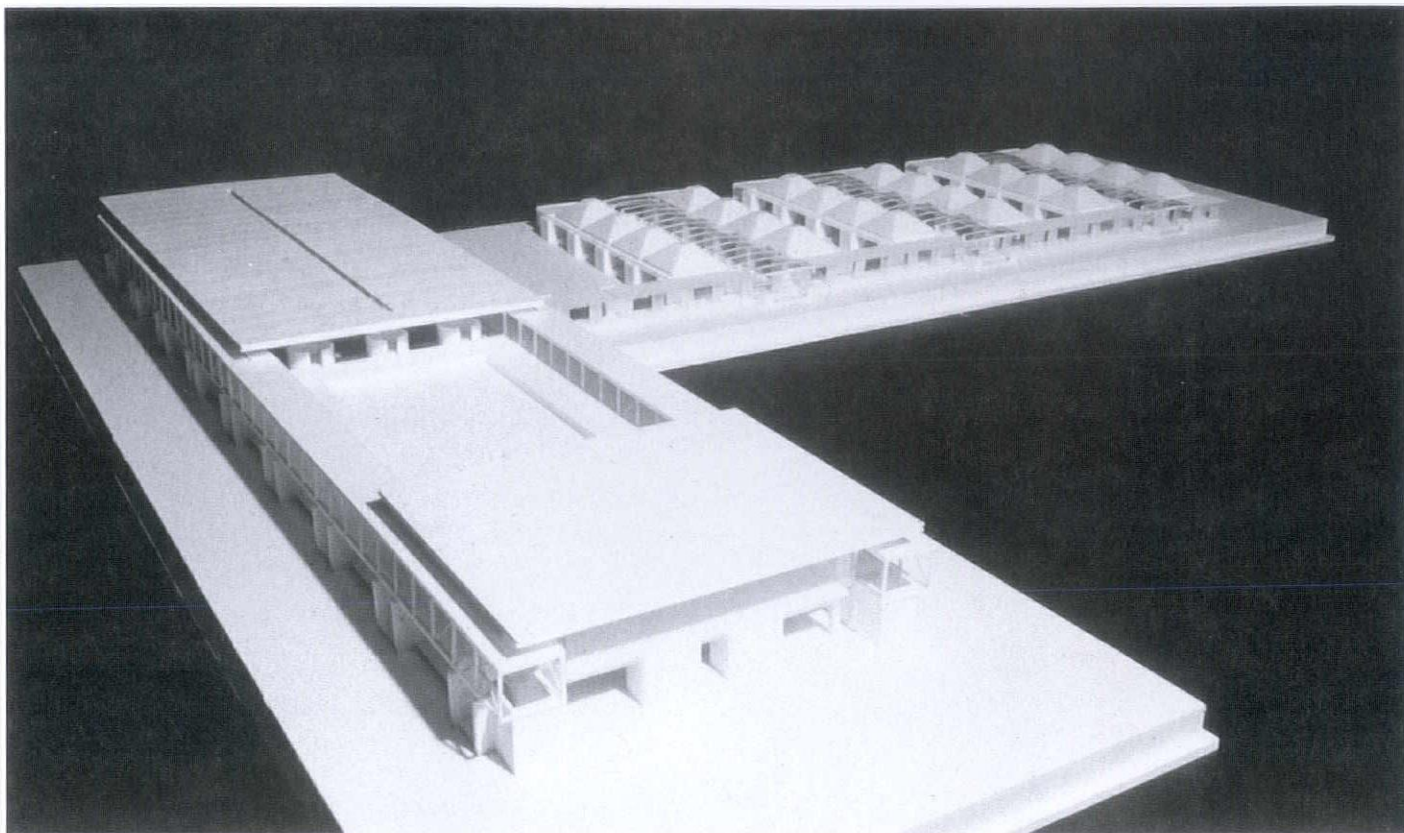
既存の白石第二小学校。旧来の平屋建て校舎が並んでおり、明るくのびやかな雰囲気が感じられた。



ワークショップによる設計方式のプロセス。児童たちの「こんな学校があったらいいな」というイメージの発表会風景。



白石デザインフォーラムに展示された模型。多くの人達の意見を取り入れながら設計が進められた。



しらさぎ橋美装計画

阿部仁史アトリエ

Shirasagi Bridge

Atelier Hitoshi Abe

白石メディア・ポリス

【課題】

在来線白石駅東側を流れる斎川に架かる橋梁に、新しい白石市のシンボルとしての象徴性を持たせること。川によって分断されている既存の中心街と、新幹線白石駅周辺に建設中の新しい街とを結ぶこの橋は、ランドマークとして重要な位置に存在する。

【問題】

我々が参加する以前にすでに橋梁本体は設計が完了しており、鉄骨桁部分の制作も終了していた。

したがって、本体のデザインには手をつけることはできないというのが設計の前提条件であった。

【解決】

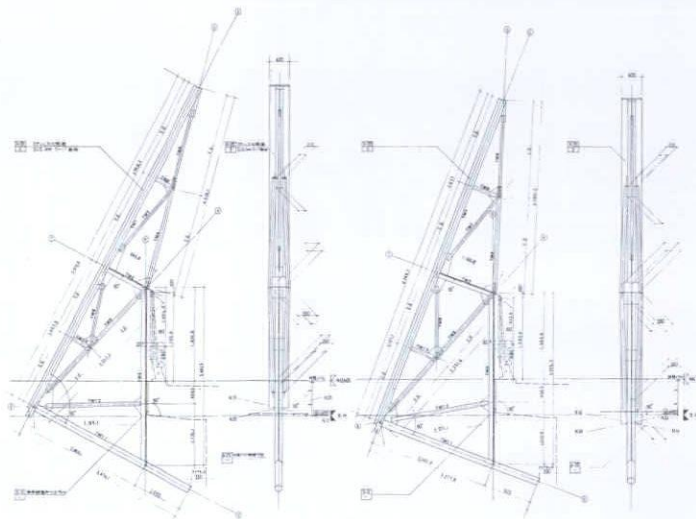
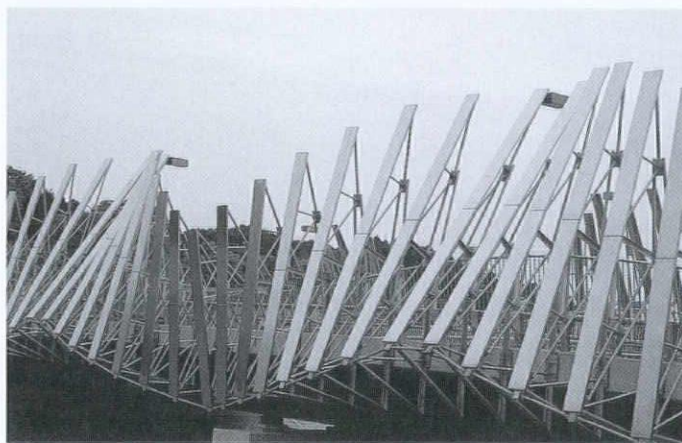
本計画は既存の橋への新しい構造体の付加である。したがって、元設計における諸条件を遵守しながら、橋の視覚イメージを大きく変える方法の提案が必要である。

ここでは、既存の構造を維持しつつ全体の視覚イメージを大きく変えるため、いくつものフレームで全体を包む、ラッピング——包み込み——の方法を提案している。ラッピングを構成するエレメントは左右それぞれ37ずつの相似する直角三角形のフレームであり、これが、拡大・縮小、回転、移動、切断の4つのパラメーターからなる幾何学的操作により、少しずつズレながら橋を包み込むことで、波状の造形を成している。半透過性の被膜システムの採用によって元設計への許容追加荷重限度380kg/m以下の重量増加で全体のイメージを一新することが可能となった。また、システムのうねりのリズムは、元設計において既に固定された橋梁灯の高さ、位置、その他法規による手摺、車輛防護柵等の規定などを取り込む様、かたちづくられている。

このフレームの連なりからなる橋を渡る人々は、あたかもうねる水の流れや山脈の連なりの中を移動していくように感じるであろう。硬直した既存の橋がほぐされ、融け、緩やかにうねり出し、幻像が立ち上がった。(阿部仁史)



所在地：宮城県白石市鏡子ヶ森地内
主要用途：橋
構造設計：アジア航測
主体構造：S造
規模：最高高さ6.5m
竣工：1989年11



白石デザインフォーラム展示デザイン

(トライ・エックス/タイプ001)

阿部仁史アトリエ

Shiroishi Box (XX Box/Type 001)

Atelier Hitoshi Abe

【課題】

- 1：白石デザインフォーラム'93シンポジウムにふさわしい会場をつくりだすこと。
- 2：新しい白石のプロジェクトを発表展示する場を設けること。
- 3：白石第二小学校のワークショップにおいて描かれた700人の児童により大版の絵を展示すること。
- 4：市・市民・専門家が共に、積極的に行う街づくりというデザインフォーラムのコンセプトを体現したインスタレーションとすること。

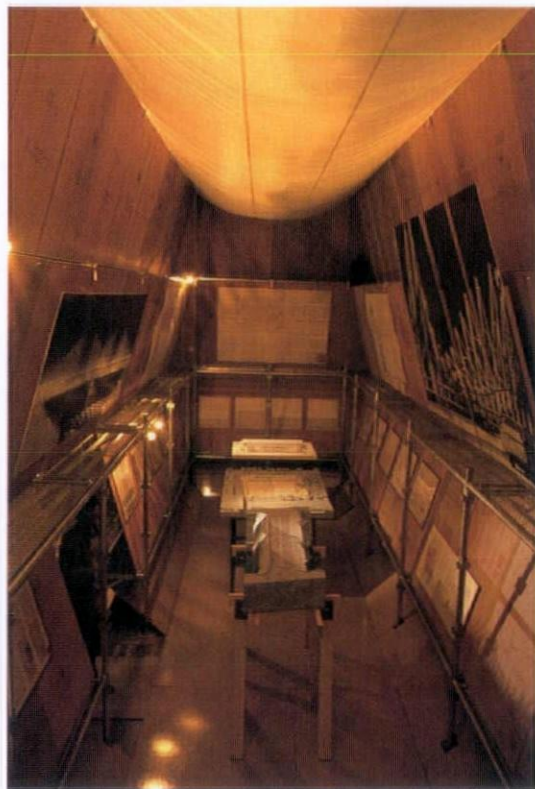
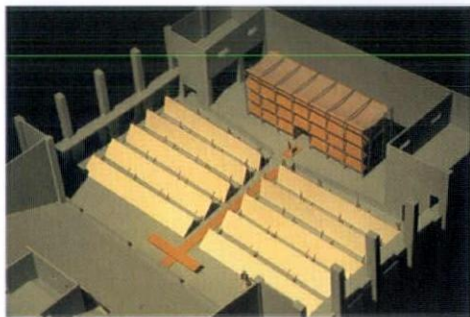
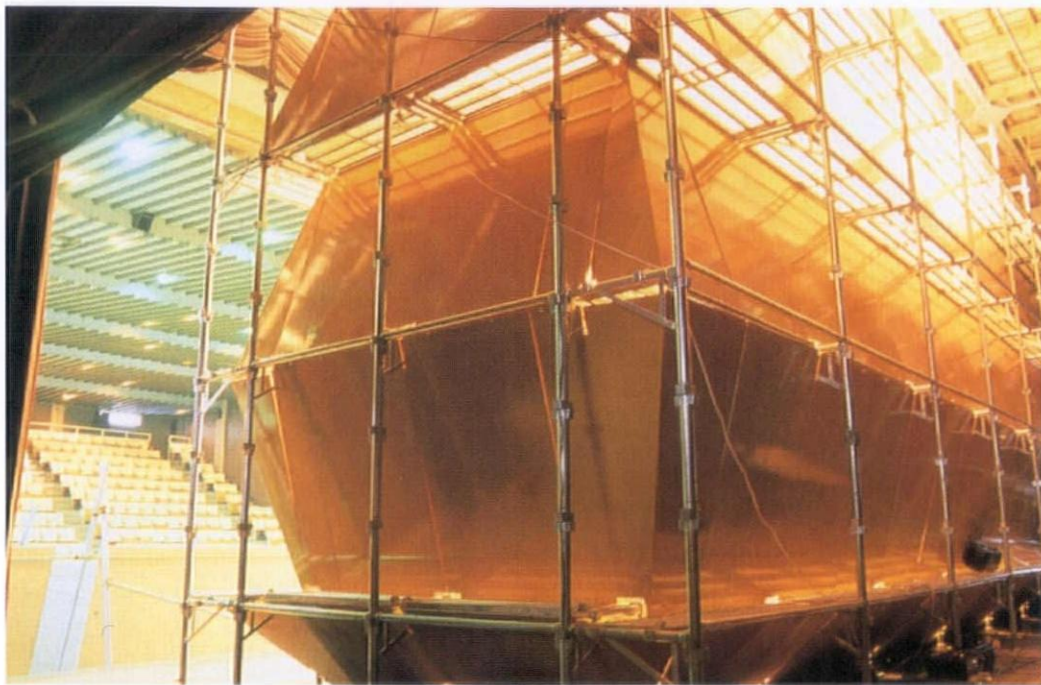
【問題】

- 1：会場が巨大な特性のない空間であるため小手先のインスタレーションでは負けてしまう。ローコストでいかに強いインスタレーションを行うか。
- 2：小学校の絵が大型で、素朴であるがゆえの力強さであふれている。それに対し、精巧につくられているため繊細な我々建築家の作品をどうバランスさせるのか。
- 3：どう街づくりのコンセプトをインスタレーションに込めるのか。

【解決】

- 1の解決：L≒13×W≒4×H≒5.4Mの仮設小美術館（白石ボックス）をステージ上に据え、観客席からそこに向かう軸線を生じさせる。同時にその軸を強調する形でパネルを設置することで強い方向性を場に生じさせる。
- 2の解決：建築家の作品は、白石ボックス内に収め、より小さなコントロールされた空間で展示を行い、児童の作品と分離する。
- 3の解決：全体の設営を、街づくりという建設行為のシミュレーションとして行ってみる。

展示のインスタレーションそのものではなく、ステージ上で行われる制作の過程が、市役所職員、建築家、学生、市民、業者を役者とした街づくりの演劇となっている。そのクライマックスが市と市民と建築家達の結婚のセレモニーであるシンポジウムであり、大団円のうちに劇を終了する。そのつくるプロセスの中で参加者（役者）は、デザインフォーラムの目指す街づくりの意識に目覚めていく。大道具（白石ボックス、パネル）はリースの足場、コンクリート化粧型枠など、通常、表には出ない建設補助資材でできている。街づくりへの思いがあれば、足場リースを注文することで、いつでもどこでも白石ボックスは出現する。（阿部仁史）



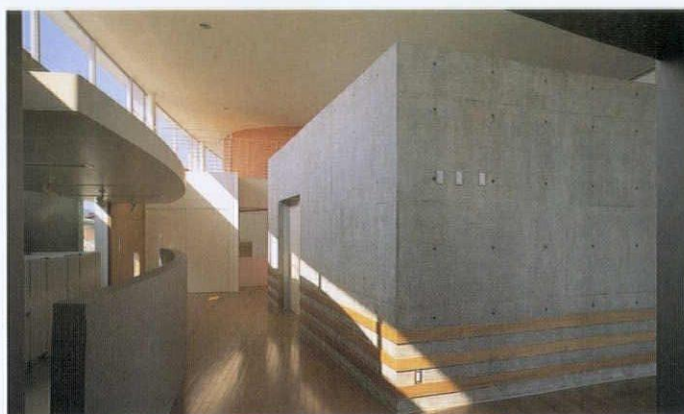
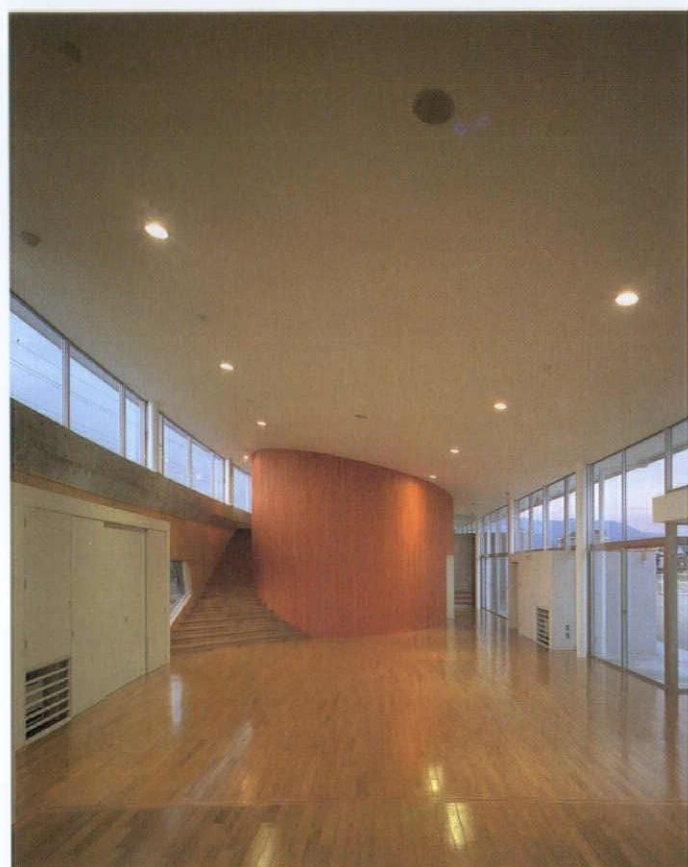
STREAM (白石市北保育園)

堀池秀人都市・建築研究所

STREAM (Shiroishi Nursery School)

Hideto Horiike+URTOPIA Inc.

白石メデア・ボリス



シヴィタス・バラレラス（「平行の街」）を想わせる都市構造にあって、敷地周辺は、耕作地と、それを食い荒らすかのように拡がろうとする新興住宅地が、ポリフォニーを演じるかのように、輪郭の乏しい、見ようによっては、シュールな風景を描いていた。この場所を最初に訪れた時から、我々は、そこをこれから始めようとする都市構想、いやもっと言うならば都市実験の拠点の1つとすることを想い描き始めていた。いわゆる効果拠点（E-Point）となるか否かとの診察医的な目差しが向けられたのだ。だが、そこは、比較的对勘療法が想い付き易い中心市街地の高密度な相隣環境などではなく、途方もなく掴みどころに乏しい、いうならば、無個性の場所ではなかった。我々がとるべき方法は、そこにある微かな徴候を発見し、空間的質質として

抱えていく、読解行為の積み重ねしかないように思われた。

一方、全国的にややクリシェ化しつつある情報都市化の趨勢の中で、この街も近々そうした局面に立ち向かうことも判っていた。

新興住宅地化、いや都市化の流れに、いまや飲み込まれんとする場所。飛び交う情報の流れや急激に増大加速しようとする、アクティビティの流れに直面しようとする場所。いつしか我々は、そこに海流や気流を想わせるストリームの存在を読み取っていた。さらに、これらを受容し、整流／制御する空間装置のようなビルディング・タイプが必要なることを痛感し始めていた。

件の空間装置をモデル化する時に立ち現われてくる概念としてのゾーニング・インキュベーターの具現化。それは、与件としてのプログラムの多少の

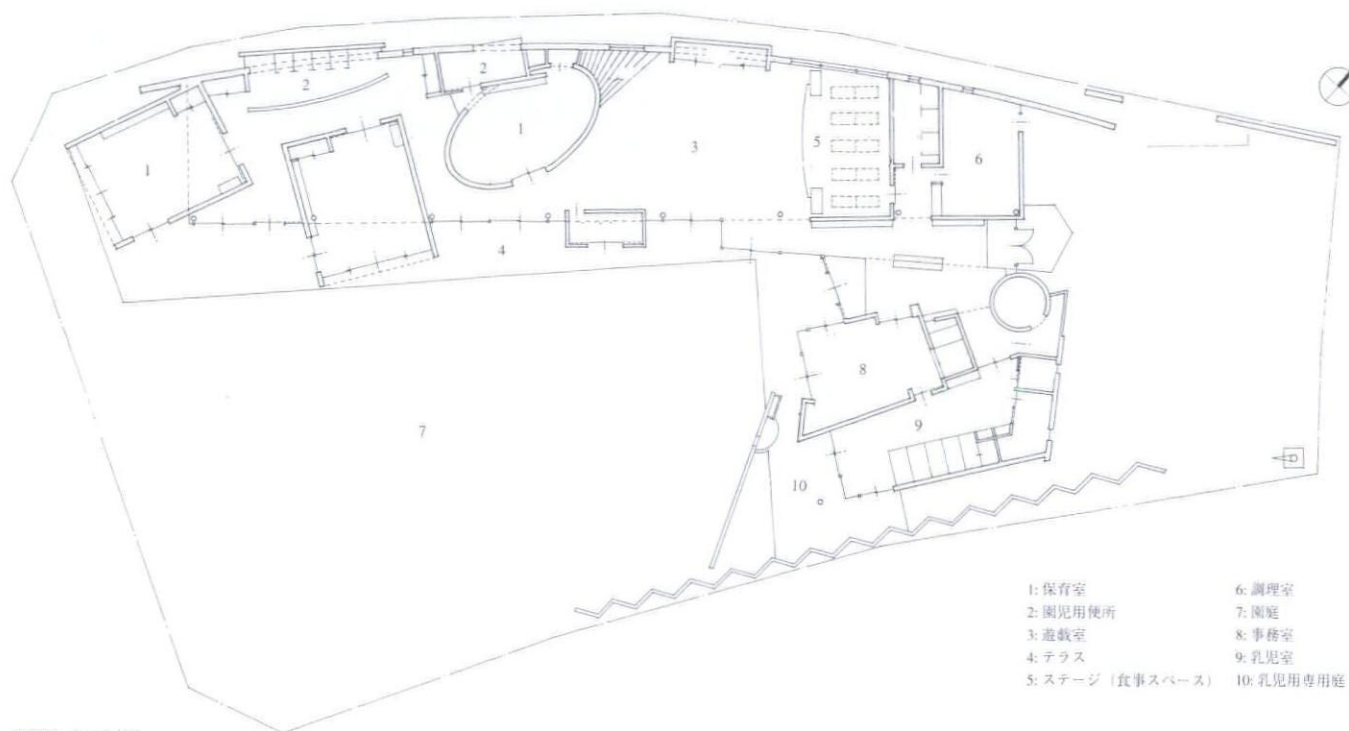
読み換えを必要としていた。自己完結的なプログラムから開放系のものへの変換、同列並存の画一的、硬直的なそれからフリースタANDINGな配列への変更など、主として空間の質を決定していく換骨奪胎を行なっていた。

オープン・エンデッドな、ストリームの抜け行くような大きめの空間の中で、思い思いの場所と形で個々の単位空間が占有していく多島海のような空間には、子供達ののびやかさに対応するように、天空光のふりそそぐ竪穴、列柱、露地の空間や大階段などが顔をのぞかせている。そこは、彼らにとっての、都市空間の体験学習の場でもある。

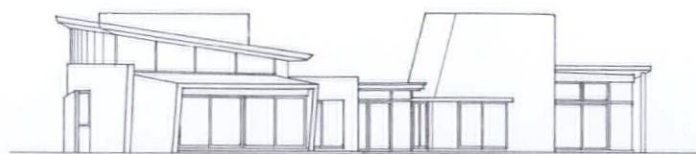
配置計画において街区組織との相互貫入を計ることをお願いした白石第二小学校の場合と同様に、〈STREAM〉でも極力開放的なビルディング・タイ

プを採ることで、街と繋げ、関わろうとさせている。わずかな手掛かりの中で都市建築の成立を目指していることは言うまでもない。

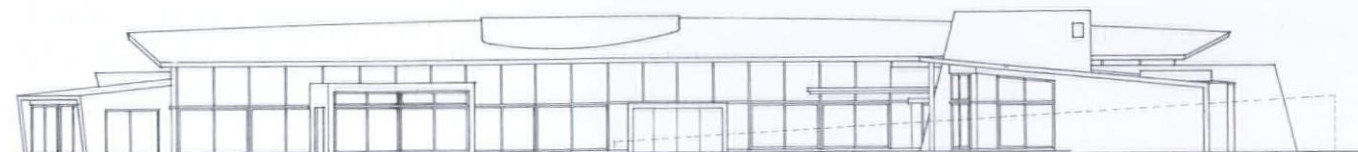
所在地：宮城県白石市福岡長袋字岩崎地内
主要用途：保育園
構造設計：織本匠構造設計研究所
施工：（建築）五洋建設
敷地面積：1,770.24m²
建築面積：576.27m²
延床面積：580.40m²
主要構造：RC造+S造
規模：地上2階
竣工：1995年7月



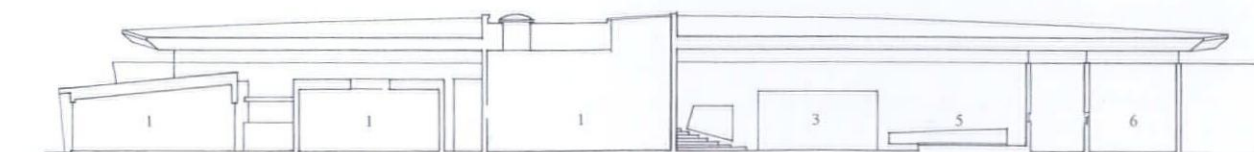
平面図 S=1:400



西立面図 S=1:300



南立面図 S=1:300



断面図 S=1:300

- | | |
|-----------------|------------|
| 1: 保育室 | 6: 調理室 |
| 2: 園児用便所 | 7: 園庭 |
| 3: 遊戯室 | 8: 事務室 |
| 4: テラス | 9: 乳児室 |
| 5: ステージ（食事スペース） | 10: 乳児用専用庭 |

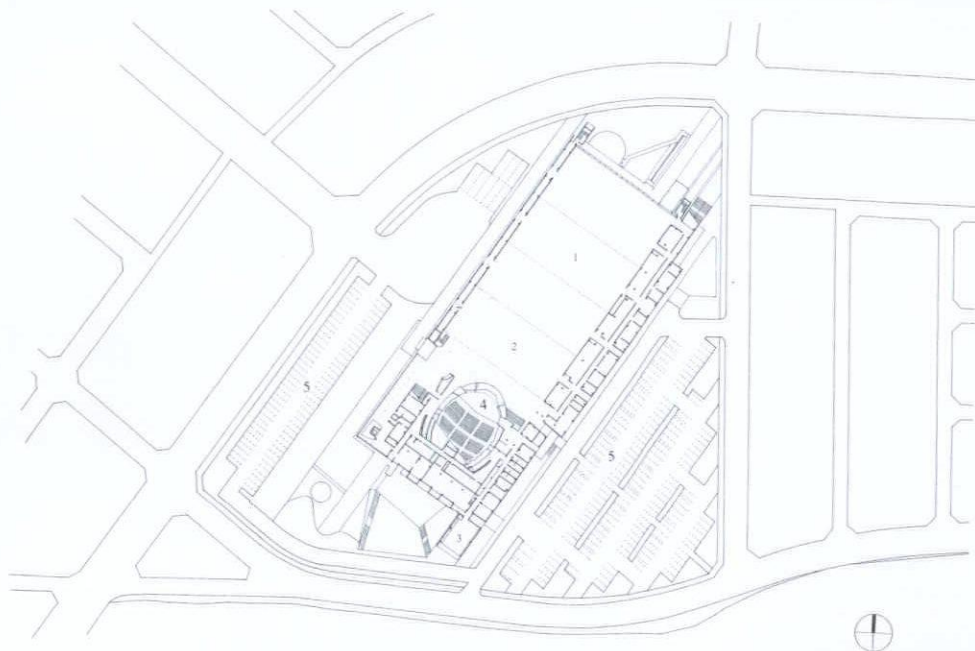
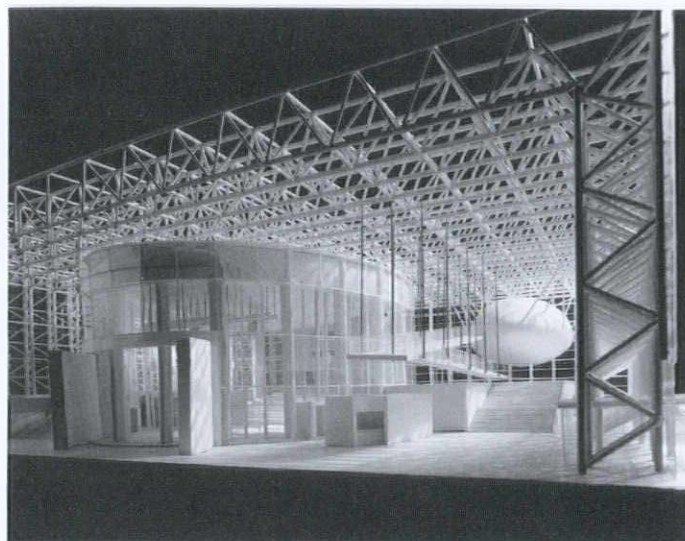
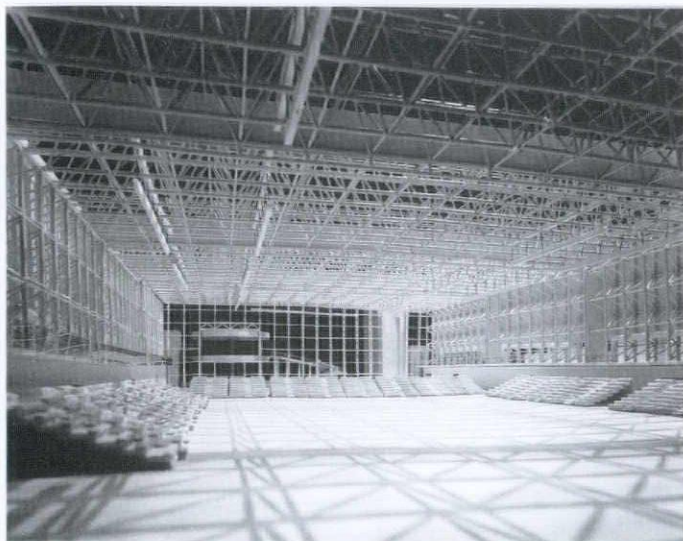
VELO・CITY (白石市文化体育活動センター)

堀池秀人都市・建築研究所

VELO-CITY (Shiroishi Messe)

Hideto Horiike+URTOPIA Inc.

白石メディア・ポリス



配置図 S=1:3000

- 1: メインアリーナ
- 2: サブアリーナ
- 3: リハーサル室
- 4: コンサート・ホール
- 5: 駐車場

既に形態上の、土地の文脈や来歴を断ち切ってしまった場所に計画される大型施設ということから、そのインパクトの強さ、都市構造との関係、歴史的コアを成す地区や白石城との関係が、当初から強く意識されることとなった。いわゆる、人やものや情報の交流施設として求められる高い注目度への要求に対し、単純で明快な構成の、強度を高めた建築で回答していくことを目指すこととした。

近くを走る高速交通の速度感に負けない強い単純幾何学の形態。そこには、

武家地としての歴史をもつこの街に潜在する武士道や兵法の質実剛健さや、律儀さとの符合と、ランドマークとしての白石城との、強い呼応関係が期待されている。また、その都市構造の中に見られるリニアな構成軸、なかでも新幹線の線形に、正確に回答させた配置計画や、中心市街地との関係軸の設定、遠望する丘陵の山頂付近で水平に浮遊することとなる〈Zona〉(福祉の里)のリニアな光軸との連鎖応答などは、この街のグランド・デザインに想いをめぐらす中で発想された。

透明ガラス貼りのコンサートホールやピアノ・ノビレ、空中レストラン、斜路、エレベーターと大階段などを包み込む透明被膜としてのガラス・カーテンウォールは、人々の賑わいや交通といった都市的ドラマを視覚化していくはずだ。いわば周囲の風景をとり込む作業と、内部の都市的情景を映し出す作業を同時進行させていく、二重映しの効果が期待されている。この建築的装置は、いわばコミュニケーションの生産工場として発想されている。

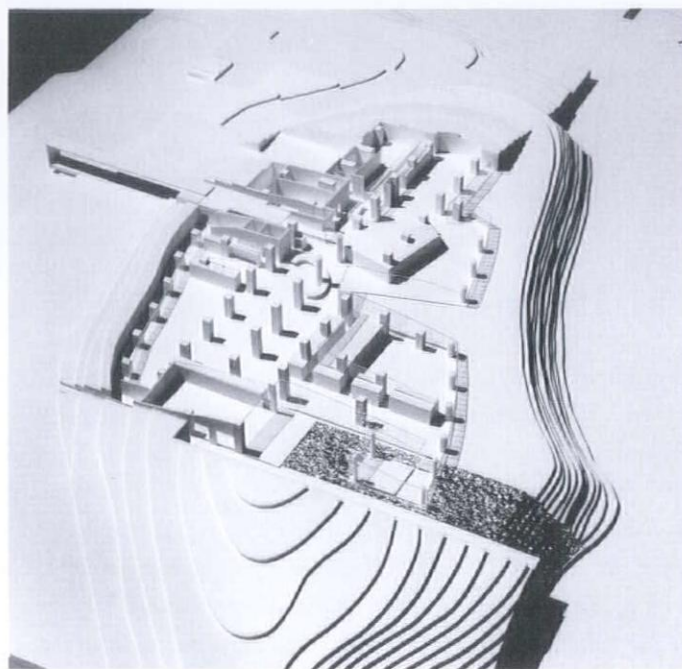
所在地: 宮城県白石市鷹巣地内
主要用途: 音楽・ホール、体育施設(展示施設)
構造設計: 総本匠構造設計研究所
施工: (建築)大林組・奥村組建設工事
共同企業体
敷地面積: 30,756.87㎡
建築面積: 10,946.87㎡
延床面積: 12,993.78㎡
主要構造: S造(一部RC造)
規模: 地上4階
竣工: 1997年3月予定

ZONA (福祉の里)

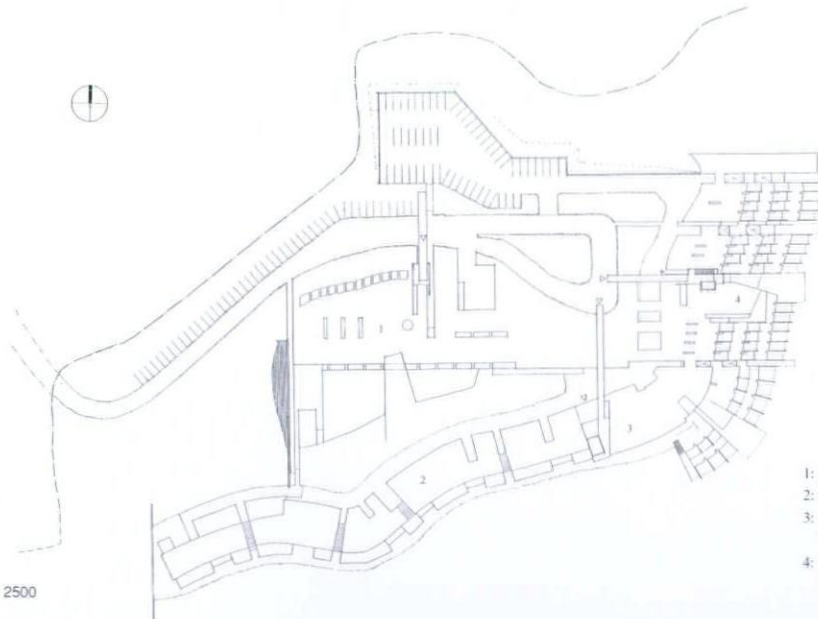
堀池秀人都市・建築研究所

ZONA (Health and Welfare Village for Aged People)

Hideto Horiike+URTOPIA Inc.



Shiroishi Media Polis



全体配置図 S=1:2500

敷地は市街地の北端にある小山状の丘陵地の頂部である。いわゆる都市のペリフェリーに位置するこの場所からは、中心市街地や在来線の駅と新幹線の駅、白石城などが一望されると同時に、市街地からは、街の風景の輪郭を成す重要な要素、つまり、貴重なスカイラインを形成していると思われた。白石の人々、或いはこの街を故郷とする人々にとって、その記憶されている風景を一変させるような建築を登場させることについては、大いに留保を覚えた。丘の稜線をそのままに、求められるヴォリュームを建築化する。あた

かも山腹に風穴を開けるかのように、地面下に全ての空間を設営していく、いわゆるアーステクチュアとしての建築、〈Zona〉はそうした想いから発想された。等高線に沿って平面が計画され、山腹に帯状の大きな開口が登場する。Zona (ラテン語で帯を意味する)の名称の由来となった横一列のこの大きな開口は、ややもすると疎外されがちな高齢者に、その子供達の住む街を一望する展望台を提供すると同時に、市街地や新幹線駅からのまなざしには、横一文字の光の帯 (Zona) として、京都の大文字焼きのごとき光景と映る

ことが期待されている。

横一列の大きな開口と、数多くの堅穴が、光溢れる空間をもたらし、地中の設営が、冬の強烈な蔵王おろしから高齢者達を守ってくれることになろう。新幹線駅前に提案する予定の光の塔と、その周辺のマイクロ・チップ化された街並み、リニアに布置されたVelo・City (白石市文化体育活動センター)の直方体との間で、グランドアートとしての光のコンポジションを描く時、空中に浮遊するZonaは、トポグラフィックなE-Pointとしての光彩を放っていくこととなろう。

所在地:宮城県白石市福岡蔵本字茶園

地内

主要用途:総合福祉センター、特別養護老人ホーム、ケアハウス、デイサービスセンター、在宅介護支援センター

敷地面積:83,000㎡

建築面積:総合福祉センター:2,330㎡

／特別養護老人ホーム、他:5,170㎡

延床面積:総合福祉センター:2,530㎡

／特別養護老人ホーム、他:5,750㎡

主要構造:RC造(一部SRC造・S造)

規模:総合福祉センター:地上1階／

特別養護老人ホーム:地上1階／

デイサービスセンター:地上1階／

ケアハウス:地上3階

竣工:1998年3月予定

知事の見識と官僚制

三宅理一

昨今我国のあちこちで自治体主体の「地域おこし」が流行っているのは、大変結構な現象だと思われる。当然といえば当然だが、それらの大半は「日本型」としかいいようのない政策立案と事業実施のスタイルをまもっている。「日本型」と呼んだのは、行政マンや市民、それに専門家のだれもが、欧米とはまったく異なった論理と倫理を介在させて動いているという意味であって、別に悪いニュアンスで言っているのではない。

面白いのは世に様々なかたちで流布している教科書やマニュアルの類が、先進国たる欧米の事例をモデルとしているせいか、そこに示された理想型と眼の前で展開する現実とのギャップに意外と気がつかない人々が少なくないということだ。たとえば、大学で教えている都市計画とかアーバン・デザインという、日本の伝統的都市構造の把握すらできないまま、妙に新しい都市のモデルを重ねてしまうことが普通で、いきおい若い建築家諸氏は、日本の雑然とした町並みを、ヨーロッパやアメリカでなされつつある新しい都市開発の方式で造り替えることがもっとも妥当だと思ひ込むようになる。

その一方で、実際に都市行政や地方行政を担当している行政マンは、我国ならではの役所の論理を下敷きに外からはなかなかわかりにくい意思決定の仕組みを取り仕切っているようだ。加えて官庁間、セクション間の縄張り意識はそれなりに強いようだから、役所の掲げる政策が一体誰のためにあるかが見えなくなることもある。

しかし、この10年来の地方を眺めているとその空気が多少薄らいできたかとの印象を受ける。地方公共団体つまり県とか市とかの首長が都市や建築のあり方について幅広い「見識」をもつようになってきたのである。平松大分県知事は一村一品運動を起し、佐川前水戸市長は芸術を町の旗印に揚げようとした。いろいろな批判があるにもかかわらず、

こうした首長が一途に目玉となるような政策を推し進めることによって、その県なり市なりが全国の中でも特化した状況を切り開くようになった。特に最近はこの意識の中に「美学」が盛り込まれるようになり、どこにいても雑然さの印象を免れなかった日本の町並みに、ある種の装いと美しさを求めるようになってきた。今回取り上げられている熊本県や岡山県などの例は、そのもっとも先端的な事例である。

むろん、こうした「知事の見識」「市長の見識」は以前から存在した。丹下健三の建築を強く推した香川県の金子知事らにまつわるエピソードは日本の近代建築にとってきわめて大きな支えとなった。強力なパトロンともいえるこれらの人物の存在があって、建築家は自身の能力を十全に示すことができ、また公共建築の分野で高い質の空間をつくり得たのである。

最近の都市デザインの流れを知る上で重要であるにもかかわらず、しばしば見落されてきたのは、我国の中央官庁の指導力の問題である。とりわけ旧内務省の流れを汲む自治省の存在は重要で、全国の地方公共団体の首長の中にはその出身者もかなり多い。東京都政を良い意味でも悪い意味でも圧倒的に支配してきた鈴木前知事や、今回の岡山CTOの発案者であり、在任23年を迎える長野士郎県知事など、まさに自治省OBの鑑とでも呼べる人間だろう。

地方自治が叫ばれるようになると、住民による創意あふれた自治というのが謳い文句となるが、地方の実態はそう甘くはない。利権としがらみに縛られた地方政治のかもしれない。鶴の状況は全国どこに行っても普通に眼にすることができ、むしろ中央(自治省)の介入があって始めて状況が好転するという話は山ほどある。単に国の補助金という意味合いだけでなく、ヴィジョンの策定と事業の推進というところで、中央から派遣された官僚がど

れだけの力を発揮しているかは、地方自治の実態を知っている者なら誰しもが理解できるだろう。我国の地方自治は決してイギリスやドイツのように成熟はしていないのである。

しかし、自治体の首長がいくら見識があったとしても、それを支える官僚制のレベルでその内容が十分に咀嚼されていない物事は実際に動かない。華族の血と元ジャーナリストというブランドを引っ下げてさっそうと登場した細川前知事の元で「くまもとアートポリス」の仕組みを組み上げるにあたって、その裏方であった若手の官僚たちがいかに努力を重ねたかは想像に難くない。

不思議なことに(あるいは当然の成りゆきとして)そこにできあがる人脈は「東京大学」を軸としているのだ。元来が官僚制をつくり上げるためにできた官立大学であるわけだから、歴史的な裏付けを有しており、そのネットワークの強さは眼を見張るものがある。「くまもとアートポリス」でも「クリエイティブTOWN岡山」でもその人脈がいかに生かされているかは、知る人ぞ知る話である。インターネットの時代からいえばこのやや時代遅れのネットワークが今なお官僚制の世界を支配しているようだ。

たまたま今回の特集で、熊本県と長崎県というふたつの九州の県が取り上げられているが、同じ九州と言っても人々の自治意識はかなり違うところがあるだろう。外様大名の系譜をもち旧藩主を今なお敬愛して地域のプライドを保つ熊本と、幕府直轄地で明治以降は大企業の支配した町である長崎とでは地元に対するまなざしそのものが異なる。加えて有田焼を除いてこれといった輸出用の産物がなく徹底して教育県をめざした佐賀が入ってくれば、地域整備の主体が誰になるかは大いに分かれるところだ。

大分の一村一品に対抗するかのように築き上げられた「くまもとアートポリス」では、やはり旧藩主のカリスマ性が輝いて見えた。

それに対して、佐賀県では内田祥哉、三井所清典といった別のタイプの地域の立役者がいる（ここではやや古めかしい旧制高校の人脈が生きているようだ）。一方、長崎県は比較的オーソドックスな（つまりどこにでもある）都市計画の枠組の中に戦略的視野をもつプロデューサーが入ってきたということで、これまた事情が異なる。実際に地方都市で仕事をしていて実感することだが、どこも江戸時代以来のメンタリティと地方性を今なお引きずっているようで、その差異が面白いが、逆に言うと、どんなに新しいヴィジョンを掲げてもその中味はその地域の「古層」にフィットするように組んでおかないと人は動かないということだ。

コミッショナー、プロデューサーと呼ばれる人たちは、その点を十分に心得ているようである。こうした役職は、たとえばドイツのIBAの仕組みにヒントを得てつくられたようだが、ある意識では首長の「美学的意識」を現実化する役割と権限を集中的に与えられたポストということが出来る。奇妙なことに我国の都市計画家、プランナーたちの決定的弱点である「美学の欠如」を補うべく、現職の建築家が担当している。

これは大変良いことで、仮にそうした役職がお定まりのプランナーが担うことになれば、今まで飽きるほど眺めてきた万博や都市博の類と変らず、建築の質的向上は望めない。そもそも都市計画家のマスタープランはどこか二次元的で都市とはそもそも三次元であることを理解していないようでもあり、本当に良い空間とは何かという美学の真髄を心得ていない（中途半端な専門性がなせる技なのか）。

バブルの時代、商業施設の領域でプロデューサーを業とする専門家が数多く登場したが、その中にそれなりの都市空間をつくり上げるに到ったのは僅かな例しかない。そうした数少ない人物の一人である浜野安宏の場合

は、ごく素直な意味で「人が集まる」というキャッチフレーズを繰り返し、民間ベースでの賑わいを演出した。彼の商人的発想は先に挙げた官僚制のその対極に位置するものであり、難解な役人の作文に較べて単純明快である。町によってはそのような商人的特質を前面に押し出した方が成功する。かつての神戸などがそうだった。おそらく港町の伝統をもつ長崎の場合も変な県民性などは出さずにこの種の商人魂もしくはそろばん勘定のできる良質の建築を求める方が正解なのであろう。何故か堀池秀人によって指名された建築家はそうした方面の才能も十分持ち合わせた人間のようなのだ。

我国の官僚制の特色のひとつに先例主義なるものがある。新しい企画も、先例にのっとっているというところで初めて説得力をもち、許されるわけで、冒険をしない、アイディアのみには投資をしないとといった弊害がある。逆に、ある特異な成功例があると皆それに倣うという奇妙な習癖もあり、都市計画ではその点がやけに目立っている。要はどこに行っても同じ手法と同じかたちでつまらない、といったものだ。

気になるのは、IBAやバリのグラン・プロジェの影響が、くまもとアートポリスを始めとする多くの地方プロジェクトで同じように現われているということである。役人の視察旅行というと猫も杓子も同じところに行き、徹底してその手法を学んでくるというが、現在進行形の地域プロジェクトはどうであろうか。その意味では官製型プロジェクトに対して石山修武による気仙沼プロジェクトのようなまったく異なった取り組みの存在が高く評価されてもよいだろう。象設計集団ももっと頑張ってよいのではないか。良い建築が数多く生み出されるのは素晴らしいことであるが、場合によっては脱官僚型の仕組みづくりも必要なのである。

最後に一言。最近の建築の質は非常に高く

なっていると思われるが、ランドスケープとなると我国のそれはどうしてあんなに質が低いのであろうか。住民のランドスケープに対する意識もはっきり言ってそう高くはないし、役人もその美学的判定基準をもっていない。あちこちのまちで、どうでもよい景観デザインが高い予算をかけて実施され、その町の景観をおとしめているにもかかわらず、誰も待ったをかけないのは困りものだ。この点こそコミッショナーたちに改めて考えて頂きたい。

●みやけ・りいち／建築史家、芝浦工業大学教授

まちづくりと建築家の活動

国吉直行

1. 文化行政、都市デザイン行政、まちづくり、町おこし運動の流れの中で

1970年代以降の各地の自治体は、それぞれ独自の様々な活動に取り組んで来た。

「地方の時代」「地方の復権」といった言葉が自治体運動として登場したのもこの頃であった。各県、各都市は、それぞれの地域の自立的発展のために、地域の活動の独自性や地域の空間形成における独自性などについて理念形成と手法の開発を開始した。

これには、文化という切り口とともに自治体としての組織改革の視点をもった文化行政（神奈川県など）や、独自の都市空間の形成をはかる都市デザイン行政（横浜市、神戸市、世田谷区など）とともに、町おこし、村おこし（大分県や湯布院町など県下市町村、その他多くの自治体）などといった自治体運動として展開されてきた。

建築デザインをキーワードとした地域づくりとしての「くまもとアートポリス」は、このような背景の中で生まれ、また、その後の富山、岡山、長崎など各県のプロジェクトも生まれてきた。

こういったプロジェクトについて自治体側として期待した点は、プロデューサーとの協同作業による様々な側面からの地域としての独自のアイデンティティづくりであり、具体的には、地域の主要施設である公共建築に対する創造活動を通して、(1)独創性豊かな建築家による新しい地域空間形成理念の導入をはかる(2)建築家とのコミュニケーションを通じて自治体関係者や地域市民が新しい刺激を受ける(3)計画検討を通じて独自の地域空間づくりの理念や文脈形成を進める(4)そして、建築文化の推進地として全国にアピールするとともに、建築文化を通じての人的交流をはかる、などであったと考えられる。

2. なぜ地方で活発なのか

熊本、富山、岡山、長崎と新しい試みとしてのプロデューサー方式に取り組んだ自治体は、いずれも東京や、大阪、名古屋といった大都市から離れた地域である。一方、大都市においては、東京都のような複数の指名建

築家による計画提案を委員会が審査し設計者を決定するプロポーザル方式などが活用されているが、プロデューサー方式を採用した自治体は無い。そこで地方で活発な理由として次のようなことが考えられる。

(1)地方都市では、地域の空間構造や空間を構築する主体の関係が比較的単純であり、また地域空間において公共建築の果たす役割が大都市にくらべて大きい。このため公共建築における工夫が地域に対し影響を持ちやすく、地域の公共建築群をつなぐ新しいシステムとしてのプロデューサー方式に期待感が寄せられたため。

これに対し、東京・大阪のような大都市においては、都市空間を構成する要素が多様でかつ複雑にからみあっており、また民間建築の比重が高く、公共建築を中心とした工夫だけでは地域の固有の空間的アイデンティティの形成が困難と考えられる。

(2)大都市においては、新しいデザイン理念による建築は数多く登場しており、また、公共建築においても一定水準以上のものが設計され、新しい建築デザインに対する慣れがあり、また一方、大都市においては都市として取り組むべき課題が多い。このため、建築デザインの質の向上に関する課題や工夫などに対する市民や行政の関心が相対的に低い。

地方では、すべてがこの逆となっており、このためプロデューサー方式が新鮮さを与え、また地域住民に期待感を与える地域空間向上のための取り組みとなったと思われる。

3. 地域空間の総合的演出という視点からの取り組み

プロデューサー方式は、公共建築の質の向上



横浜・関内地区のまちづくり

によって地域空間の質を高めようとするものと考えられるが、一方、近年各都市では、都市の中の様々な地区について、地区内の民間、公共の全ての建築物や、道路、広場、川、橋、街灯、サインまでも含む形態を共通の理念によって構成し、全体的質の向上と、個性の創出を計ろうとする活動も活発である。

横浜や神戸などの大都市では、20年ほど前から、多様な事業主体による、上記のような様々な官民の施設群から構築されている都市空間について、総合的な質の向上と個性をつくることを意図した都市デザイン活動を行政として推進してきた。この活動は、既存市街地などの一定の地域空間における空間形成理念を持ち、様々な事業に対し働きかけ時間をかけて都市空間改造を進める取り組みである。この地域空間を形成し育てる理念は、地域の地形や歴史、文化などの空間的資産などを踏襲した各地域独自のものとなっている。各都市の都市デザイン活動は20年ほどの間に様々な工夫と成果を生み出している。

一方、中小の都市においても、個性的なまちづくりに取り組む都市が増えつつある。

最近では、町としての「美の基準」を掲げた条例を設けた、神奈川県真鶴町の活動などが有名である。

こういった各地域の都市デザインやまちづくり活動に多くの建築家が参加している。職能として地域の空間分析や、空間形成理念の提案の能力を生かし、民間側からの専門家、学識者として、あるいは、行政内の専門家として多面的な活動がみられる。

4. 地域空間づくりに参加する建築家

他方、かつての倉敷市における浦辺鎮太郎氏



小布施町のまちづくり

の活動のように、小さな都市などの一定の地域において長期に建築設計活動とまちづくりへの提案とを続け、一定の成果を収めつつある建築家も増えている。まちづくりに大きな役割を果たしてきた宮本忠長氏などがその代表であるが、神戸市北野周辺のまちづくりに役割を果たした安藤忠雄氏、伊豆松崎町における石山修武氏、釧路市における毛綱毅曠氏などにも同様の視点を感じる。東京都渋谷区代官山地区において、長期にわたってヒルサイドテラス以来のコンセプトによる街区づくりに取り組んで来た横文彦氏の活動も秀逸である。こういった地区では、彼の個性的な発想や、空間形成理念が地域の理念として受け入れられ、地域のまちづくりの推進役を果たしてきた。

5. プロデューサー方式の課題と今後の可能性

プロデューサー方式は、これまでの行政内部だけでなされてきた建築家選定が、ともすれば安定志向に走りがちで各地域において新しい血を加えることに欠けていた点を打ち破り、若手や新人の登用など積極的に行おうとしている点が先進的であり、地域における創造的活動となっている点は評価すべきと考える。

しかし、一方、各地域から期待されている固有の地域空間の形成について考えると、プロデューサー方式による公共建築の計画や建設のプロセスを通じて、周辺の街の空間形成に関してどのような新しい流れを構築できたのかといった疑問点も残る。

また、熊本だけで進められていた時期と異なり、岡山、長崎と多くの自治体で採用されるようになってきた現在、各県の取り組みに、それぞれの地域の個性を生み出すような工夫

がなされているのか。熊本で選ばれた建築家群と岡山、長崎の建築家群に特徴的な差異があるのか。あるいは、熊本で取り組む時の建築家の視点や地域との関わりと岡山、長崎の場合に差異があるのか、多少疑問が感じられる。

プロデューサー方式を進めるに際しては、プロジェクトを進める自治体や、プロジェクトの中心となるプロデューサー、そしてプロデューサーに指名された建築家は、それぞれの役割の中で各地域の固有の空間形成につながるシナリオを持ち、地域に訴えることが重要と思われる。また、建築だけでなく地域空間を構成する様々な施設づくりへの提案やアドバイスなど多様な活動も望まれる。まちづくりは息の長い事業である。

長期にわたる地域との付き合いも必要である。まちづくりの新しいシステムとしてのプロデューサー方式もいったん開始されたら、それぞれの地域において長期にわたって展開することによってその集積効果を生み出すことが大事である。また、長期の取り組みの中で、時間の経過とともに地域独自の新たなシステムとしての工夫を加えることも重要である。知事の交替後も継続して進められている熊本の取り組みには、今後、独自の工夫が積み重ねられて行くことを期待する。

またプロデューサー方式と共に、建築家達の新しい発想により、地域の市民との共同作業を通じて地域のコンセプト形成をはかろうとする宮城県白石市などの試みもある。

大都市近辺においても、公共建築ではないが、ニュータウンの開発事業などにおいては近年いくつか類似の実験的取り組みが生まれてきた。地区の全体的イメージの構築と地区の中の多様性の創出をねらう方式としての、マスターアーキテクト方式（多摩ニュー

タウン・ベルコリーヌ南大沢）やプロデューサー方式（幕張ベイタウン）などである。

多くの事業主体の複雑な関係で構成されている大都市において、固有の空間的魅力の形成を行うには、多様な側面からの視点を持った総合的な対応や活動が必要になっている。

こういった取り組みにおいて、大都市の都市デザイン活動などと連携し、都市の中の一定の地域を公共建築、民間建築を含め長期にわたって見守り育てる地域区毎のプロデューサー的役割の建築家が存在すれば、各地域の空間形成はより創造的なものとなるであろう。今後、行政の中で可能性を検討すべきと考える。

建築家と地域との関係は今後も多様な展開がなされると思うが、建築家と地域との様々な形の密度濃い協調関係によって、今まで以上の新たな成果が生まれることを期待する。

●くによし・なおゆき／横浜市都市計画局都市デザイン室主任調査員



松崎町のまちづくり



釧路フィッシャーマンズワーフ

photos: N. Kuniyoshi

Photo Credit :

Satoshi Asakawa 浅川敏 p.31、p.61-64、
p.93-95、p.102-103
Yukio Arikawa 有川幸雄 p.35、p.43、p.84-85、
p.87、p.96-97、p.100、p.107、p.117、p.119、
p.136-137
Isao Inbe 齋部功 p.34
Sigeru Ohno 大野繁 p.21、p.51、p.120-121、
p.123-125
Noriaki Okabe 岡部憲明 p.20
Kohji Okamoto 岡本公二 p.22-23、p.27
Yasuhiko Kidera 木寺安彦 p.86
Yutaka Kinumaki 絹巻豊 p.75
Nobuyosi Nakagiri 中桐暢良 p.66、p.77、p.91、
p.99
Junichi Simomura 下村純一 p.46
Yoshio Siratori 白鳥美雄 p.40
Yoshio Takase 高瀬良夫 p.89
Hiroaki Tanaka 田中宏明 p.144
Mitsumasa Fujitsuka 藤塚光政 p.26、p.48
Hiroyuki Hirai 平井広行 p.39
Katsuaki Furudate 古館克明 p.30、p.37、p.44
Mitsuo Matsuoka 松岡満男 p.41
Koji Murakoshi 村越幸治 p.71

C.G. Credit :

Michiaki Aeiba 饗庭倫明 p.38
前田建設工業株式会社 p.106

資料協力:

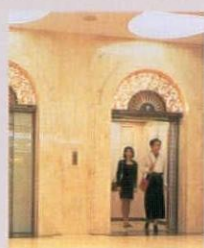
熊本県土木部建築課
岡山県土木部都市局建築指導課
長崎県都心再開発局
白石市役所

HITACHI

広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

日立エレベーター・エスカレーター

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m/分の超高速エレベーターや、身近な暮らしの中で利用される、車いす用ステップ付きエスカレーターや、ホームエレベーターなど、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。



Hotel & Residence



Public Space



Office Building



Shopping Center



超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。



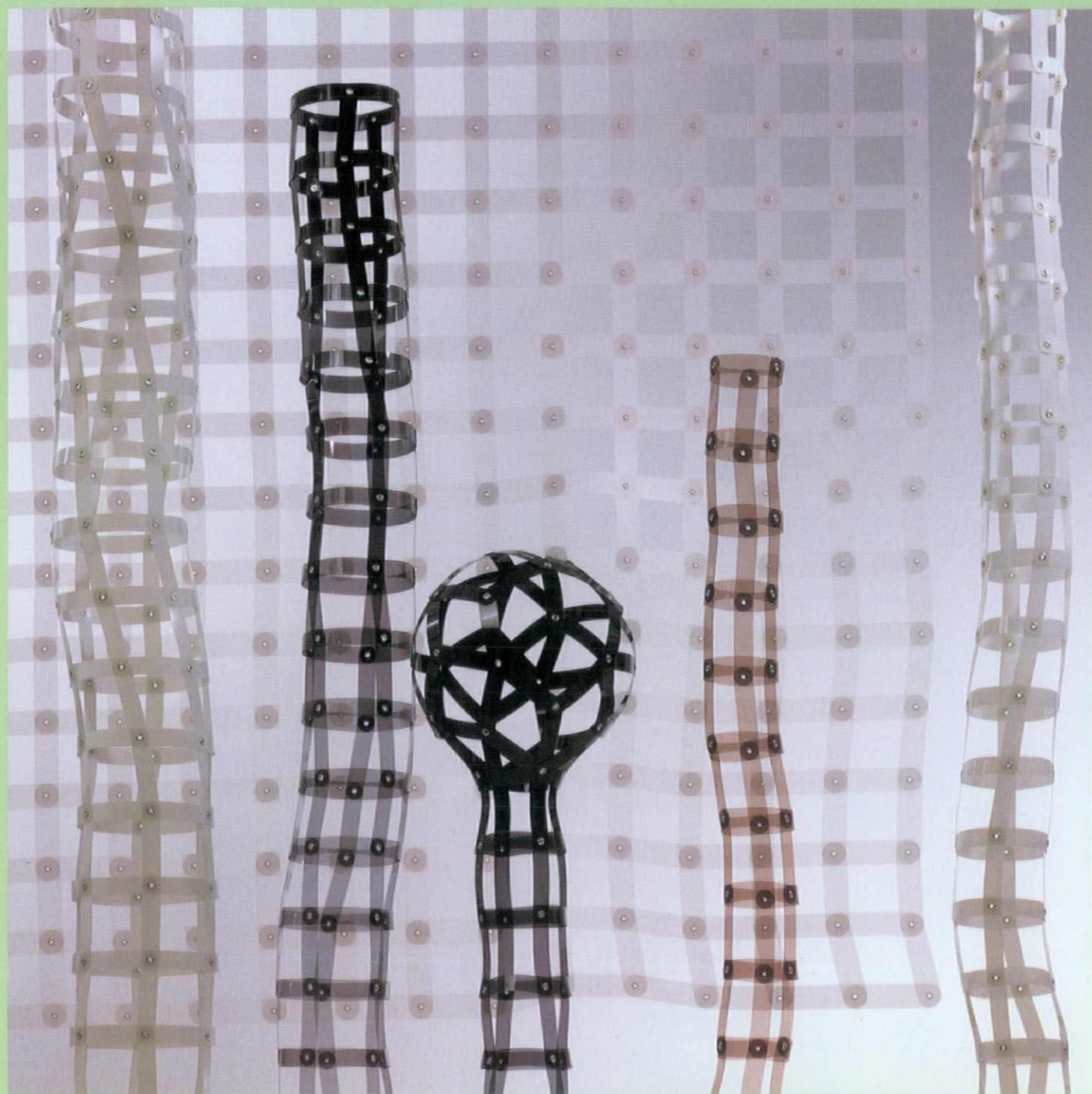
株式会社 日立製作所

お問い合わせは＝電機システム事業本部 昇降機事業部/電機システム統括営業本部 〒101-10 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地
電話/(03)3258-1111(大代) または最寄りの支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000
北陸(0764)33-8511・中部(052)243-3111・関西(06)261-1111・中国(082)223-4111・四国(0878)31-2111・九州(092)741-1111



戸村 浩

MOVE FORM——チューブとネット

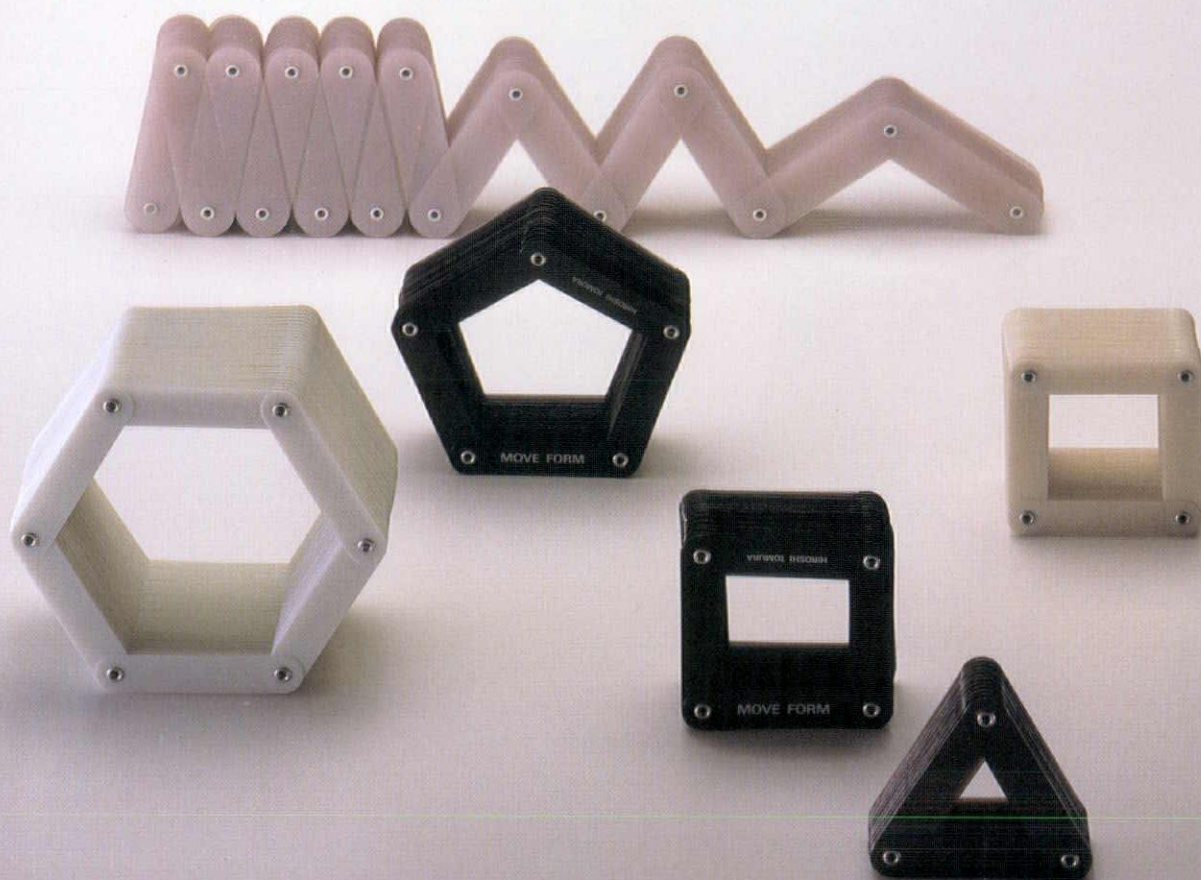


「近代の科学技術の発達によって、繁雑に成長し尽くした現代社会。その無機的に増殖する人工領域は、自然を侵食し、大変な勢いで膨張し続けている。だが、この様に人間が自然から遊離すればするほど、その自然の真価は明らかとなり、人は無窮なる自然と、常に対峙していることを知る。新しい造形言語としてのコンピュータの刺激的な造形表現への可能性。その最新のハイテクの世界にも、根底には、今やローテクと呼ばれる、素朴で原初的な造形原理が脈々と流れている。ハイテクノロジーが活発になればなるほど、人間にとっての自然の存

在のごとく、このローテクの重要性は益々と高まるであろう。

本稿は、人類が自然の原理を詮索し始めた頃から、近代のトポロジー、量子力学へと、今日のハイテクの基となった科学思想の元に、数理的造形の世界を繰り広げる。」

これは、トムの時空形象学、このアップル・トモロジーを連載するにあたっての趣意書である。仮想現実によって組み立てられていくこのニューメディアの時代。モニターに奪われてしまった我々の視線を、再び、手元に戻そうとするささやかな試みである。



撮影：田中 昇

かくして、ドーム型の92面体による照明器具から紹介し始めたのだが、バックミンスター・フラーのドーム空間といえば、一方、フライ・オットーのテント空間を思い出す。今や、エアー・ドームにとってかわられた感があるが、それらは誠に美しい。フライ・オットーの優雅な織織面の膜構造は、風をふくんで地面すれすれに打ち広げられた、白い大網のような。半径によって決定される球体ドームとは違って、水平方向へ伸びる空間の連続性は、起伏のある有機的な流れをつくり、幾多の空間を呑み込んでいく。

不安定構造論の一役を担う MOVE FORM はフラーのドームより、このフライ・オットーの膜構造体に近いのかも知れない。

1930年代、原子や分子、そして結晶学への探求と、近代科学の技術力の進歩に従って、可変的構造体の研究が盛んになされ、いろいろな特許が出願されている。しかし、それらの多くは弾力性のないパイプや角材を使用しているため、その変形は限られた動きであった。そして、その興味は、支点としてのジョイントの工夫に集中している。それに引き換え、不安定構造論の MOVE FORM は、柔軟な素材を使

用したことにより、オーガニックな形態の変形と動きとが生まれ、あらゆる空間の生成を可能にしているかのようだ。故に、このムーブ・フォルムは、数カ国で新たな発明として特許認可されている。

空間に三原則というものがあるとすれば、それは、

- ①閉じていること。
- ②連続すること。
- ③変化すること。

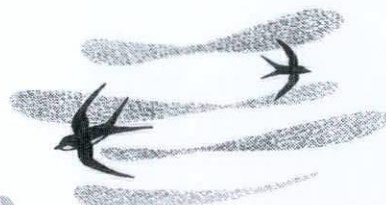
の三つであろう。①は閉鎖と有限を意味し、②は解放と無限を、③は成長と動きを示唆している。フラー・ドームは閉ざされた空間を提案し、オットーは、解放された空間の妙を見せてくれた。

閉じていなくてはならない各空間を一体化するには、ネットのような、空間の網が必要で、遠く離れた空間同士を連結するにはチューブのような構造体がある。それらに対応出来るのが、MOVE FORM の構想かも知れない。ここに示したチューブとネットも、その部分的な一例だが、上のごとく小さくたたむことが出来る。

●とむら・ひろし／造形美術家

。空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元気である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ピュイ、ピュイ。
澄みわたった空気に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。
額に汗をにじませながら、
一步一步標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと
梢で声を
張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齢は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで
季節の深まりを知る。

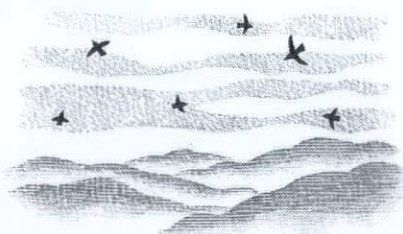
山の秋は短い。

頂から麓へ向かって

早くも赤や黄に色づきはじめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちよつと早起きして
近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサッガサッという音が

林全体に響き渡る。

見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

「抽象性／透明性・再考」考 ライト・コンストラクション展

マイヤー・シャペーロに淵源し、ドゥワイト・マクドナルドやクレメント・グリーンバーグによって敷衍される、アメリカの元トロツキストによる美術批評の系譜は、表面上はスターリニズム批判の形式をとりながら、しかしその実、東西冷戦下におけるアメリカの反共プロパガンダと、ほとんど変わるところはない。実際、東西冷戦下において、グリーンバーグのような批評家がアメリカの公認文化イデオログになったのは、当然といえば当然のことだろう。抽象主義＝アヴァンギャルド＝アメリカ V.S. リアリズム＝キッシュ＝ソ連などという図式は、あまり根柢のあることには見えないのだが、しかし、東西冷戦下におけるひとつの美学的尺度にはなっていたのだ。この点では、「抽象主義」とは、冷戦下におけるアメリカのいわば文化的「国策」のひとつだったのであり、ニューヨーク近代美術館は、アメリカの国策遂行機関としての側面も持っていたわけだ。あるいは文化とは、別の手段をもってする戦争の継続だ、というわけである（ちなみに冷戦下のCIAは、海外の親米派の「文化」雑誌を支援している）。

ところでおもしろいことに、グリーンバーグは、抽象主義の例としてキュビズムを引いているが、コーリン・ロウは、透明性の例としてキュビズムを例に引いている。ロウは「透明性」を、文字取りの透明性と、現象的／知覚的透明性のふたつに分けて分析しているが、

この透明性についての論考は、1960年代、当時のアメリカの若い建築家の間で、広く読まれたものである。

さて、1995年9月21日から、ニューヨーク近代美術館で、テレンス・ライリーのキュレーションによって、28人（組）の建築家やアーティストによる33のプロジェクトを特集した「ライト・コンストラクション展」が開かれた。この展覧会のタイトルとなっている「ライト（Light）」にはもちろん、ロウの透明性と、おなじく、ふたつの意味がかけられていよう。つまり「光」であり、「軽さ」である。

テレンス・ライリーは、この展覧会のテキストにおいて、ロウの「透明性」に言及しつつ、しかし彼の「光／軽さ」が、ロウの透明性とは異質であることを強調している。たとえばビエール・シャローの「ガラスの家」や、F.L.ライトの「ジョンソンワックス・タワー」にみられるような半透明／光を、ロウ的な文字どおりの透明性の批評とみるのである。「transparent」ではなく、「diaphanous」な光とも言えるだろうか。あるいは、ロウの現象／知覚的な透明性とは、異質なものが積層する両義的で抽象的な空間の概念のことだが、ライリーは、コールハースのフランス図書館計画案に、ロウ的な現象／知覚的透明性とは異質の、空間／軽さをみているようだ。

さて、こうした解釈は、どこまで妥当なのだろう？あるいはロウの透明性との違いを言

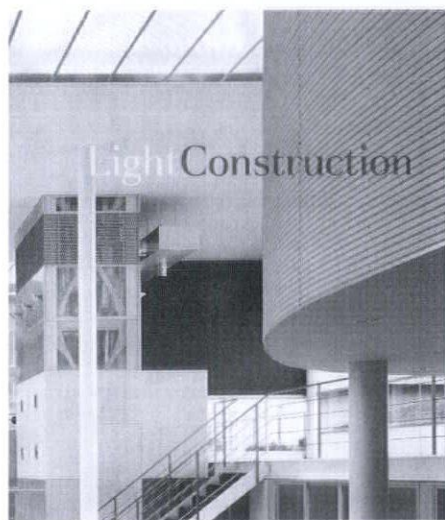
うほど、むしろそれを意識してはいないだろうか？

たとえば、ここでふたつのプロジェクトを出展しているスティーヴン・ホールが、ジェームス・タレルなどと共に、1960年代以降の現象学的方法論を進化させることで作品を制作してきたことを考えるなら、透明性と光／軽さの相違より、むしろそれらの連続性の方にどうしても目がいってしまうだろう。チュミの「グラス・ヴィデオ・ギャラリー」や、ヌーヴェルの「カルティエ財団ビル」なども、ネオ・ミース／抽象主義風の透明な建物である。

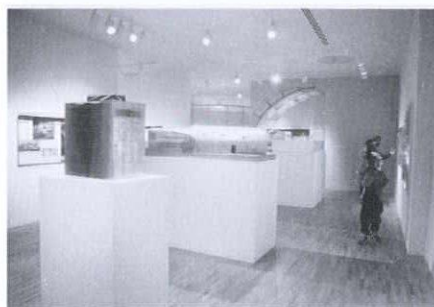
もちろん、こんなことで揚げ足をとるつもりはないのだが、しかし、「ただの保守的な展覧会だ」（アイゼンマン）などという批判も、全面的には賛成しないものの、必ずしも全く的外れな批判とも言えまい。

一方で、1980年代的重厚さから90年代的な軽さへ、といったたぐいの謂いを取りあえずパラフレーズするなら、今シーズン中、一部の話題をさらったのは、ダウントウンのドロイグ・センターで開かれたタトゥー・ショーである。ゲイ・コミュニティの崩壊が言われるなか、「変態」なるものも、ゲイやSMといった80年代的なものから、タトゥーという90年代的なもの（？）へと移行しつつあるのかもしれない。

●松畑 強／建築家



展覧会カタログ



会場風景

ライト・コンストラクション展
会期：1995年9月21日～1996年1月2日
会場：ニューヨーク近代美術館
参加アーティスト、建築家：
マイケル・ヴァン・ヴァルケンブル、フィリップ・ジョンソン、
妹島和世、横文彦、サンハウザー・イスターソン、ヘルツォーク＋
デ・ムーロン、ジャン・ヌーヴェル、伊東豊雄、ヴァン・ベルケ
ル＋ボス、スティーヴン・ホール、ピーター・ツムトール、ハリ
ー・ウルフ、カーコラーネ＋リーマティネン＋ティルコーネン、
ダン・グラハム、バーナード・チュミ、ニコラス・グリムショウ、
アバロス＋ヘレーロス、メルダッド・ヤズダニ、ウィリアム＋
チェン、フランク・ゲーリー、レンゾ・ピアノ、ジョエル・サン
ダース、ギゴン＋ガイヤー、デニス・アダマス、メリッサ・グ
ールド、ノーマン・フォスター、オートナ＋オートナ、レム・
コールハース

若き建築家6人香港に上陸 「インビジブル・ランゲージ」香港展

去る10月31日から11月10日まで、香港大学建築学部内のギャラリーを会場として、「インビジブル・ランゲージ」と題された建築展が開かれた。野口昌夫（東京芸術大学助教授）をキュレーターとし、出展者は芦原太郎、小川晋一、北山恒、木村丈夫、野田俊太郎、原尚の6人の建築家。

この展覧会は、先ずニューヨークのパーソンズ・スクール・オブ・デザインで第1回が開かれ（1991年12月4日～1992年1月10日）、続いてロンドンのAAスクール（1992年10月3日～11月6日）、さらにミラノのアイデア・ブックス・ギャラリー（1993年4月29日～5月30日）と巡回し、今回初めてアジアの都市で開かれたものである。この間、約4年。理解あるスポンサーに恵まれたとは言え、実に息の長い手作りの活動である。

これに限らず、ここ数年、1人の建築家のワンマンショーとは異なる形式の、日本の若手建築家数名のグループ展が幾つか組織され、欧米、あるいはアジアの諸都市を巡っている。

いずれもこちら側の事情というよりは、受け入れ側の日本の建築に対する関心の変化による現象といえ、興味深い。

「インビジブル・ランゲージ」は巡回展ではあるが、内容はそのつど大幅に改められている。特に今回は大きく構成が変わっている。模型とパネルによる言わば古典的な展示に会場の約半分の面積がさかれる一方で、もう半分はCGとパソコンによる展示にあてられた。CGでは建築家1人につき1点の近作が詳細に紹介され、パソコン3台では来場者がマウスを使って過去のすべての作品に自由にアクセスできるようになっている。

建築展にCGやパソコンを使うのは今や珍しくない。しかし会場の様子はそれらの前例とはかなり異なるものだった。

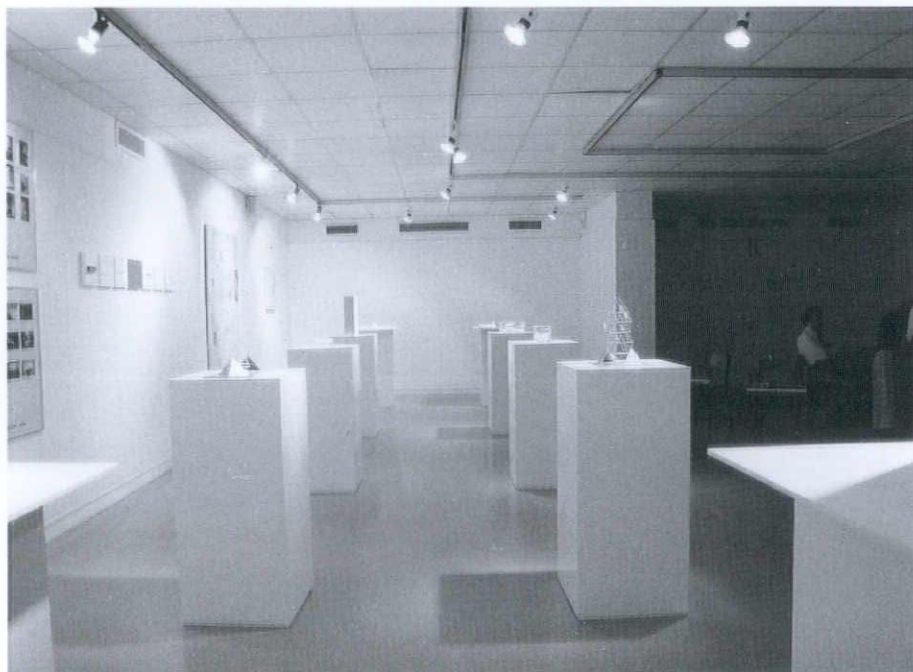
あくまでもアート・オリエンテッドの、丁寧な細工が施された小ぶりの模型が、真っ白な台座にひとつずつ丁寧に置かれている。そこでは建築は、あたかもジュエリーのような。

反対側の壁面にはCGの動画が大写しになっ

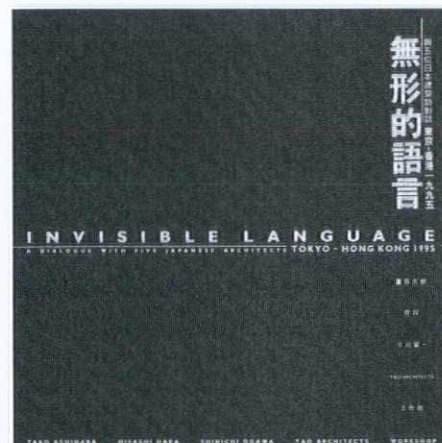
ている。そこに登場する建築はすべて実際に建設されているか、建設を前提に考えられていて、すこぶる現実的なものののだが、画面の中ではどれもが根無し草のごとくアンリアルで、宙に漂っているように見え、その意味でどれもが等価に写る。

そして中央に設置されたパソコンには、建築家たちのすべての過去が、作品のみならず血液型や趣味や家族構成までもが、圧縮され、評価も重みづけもなしにファイリングされている。

通常、このように異なる3種類の展示には、何らかの序列がつけられるか、ストーリーが与えられるのが普通だ。しかしここでは、何の序列も、ストーリーもなしに、広い会場の中に言わば放置されているのだ。放置された3種の展示は、それぞれにシャープな像を結びながらも、全体としてひとつの像に収斂していくことがない。その結果として6人の建築家像も、固定的なものとしては現れることがなく、一瞬浮かんではずぐさま消えていく、



会場風景



展覧会カタログ

幾つもの像の重なりあいとしてのみ捉えられる。

進んで採用されたのであろうこうした折衷的な展示構成そのものが、日本の建築家が置かれている現在の状況を象徴的に示しているように思われた。

建築は1人の造物主たる建築家の手から魔法のように生み出される。この地ではまだ一応そういうふうに想定されている。だが、いったん現実化の道をたどると、社会、技術、環境、経済、メディアなど、様々なフィルターにかけられ、その過程で建築家の署名は急速に色あせ、建築は匿名性の海の中に溺れていく。そこからかろうじて救出されるには、簡便なレファレンス・ツールに頼るしかないのだが、そうしたツールの中で建築家は、もはや尊厳に満ちた造物主としての姿ではなくなっている。

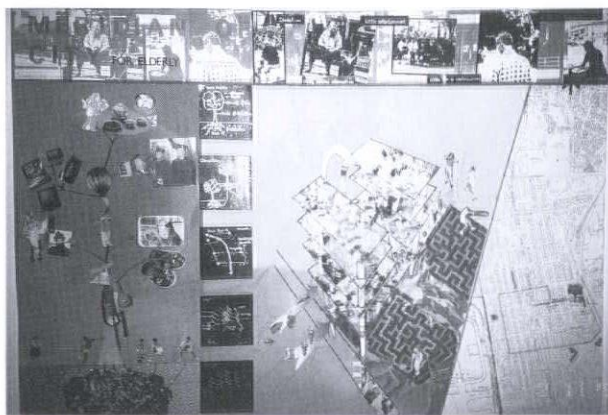
このような現在の日本の建築家の存在根拠にまつわる背理が、確かに今回の展示構成にも現れていた。恐らく欧米の都市が会場であ

ったとしたら、こうした展示は一貫性がないとか、筋が見えないなどとして退けられるか、東洋の神秘として片付けられてしまうところだろう。しかし香港展の来場者にはすんなりと受け入れられていた。考えてみれば、あらゆる背理が渦巻いているのがメトロポリス香港に外ならず、ここを根城とする建築家や学生にしても、一夜のうちにすべての価値基準が覆されてしまう恐れの中で活動しているわけで、「インビジブル」展の少なからず分裂気味の展示など、違和感どころか、むしろ親近感を覚えたに違いない。このことだけでも、欧米を巡回してきた展覧会が初めてアジアの都市で開催された意義があったと言わなければならない。

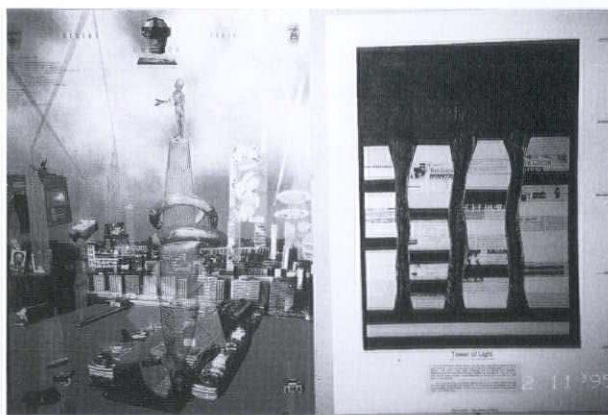
並行してシンポジウムとワークショップがもたれたが、より豊かな成果を生んだのは後者だった。香港大学の修士1年生80人ほどが5班に分かれて出展者の建築家5人につき、香港の5つの地区を対象にサーベイを行い、固有の「ツボ」を捜しだし、地区の活性化の

ための効果的な提案を行うというプログラム。課題提出の5日後にサーベイから得られた地区の読み方の発表を行い、その3日後に最終プレゼンテーションというハードな日程。あくまでも実際上の問題点を見だし、その合理的な解決を図ろうと急ぐ学生たちと、具体的な形態を提出する以前のコンセプトの明快さと新しさを問う建築家たちとの間で、しばしばすれ違いもあったようだが、両者が互いを理解しようと精力的に議論を重ね、最終プレゼンテーションでは各建築家の班ごとに、見事なまでに全く異なるアプローチによる成果が生まれていた。手間暇はかかるにしても、この種のコミュニケーションの積み重ねこそ、一方交通ではない真の相互理解に欠かせないものであることが実感された素晴らしいワークショップだった。

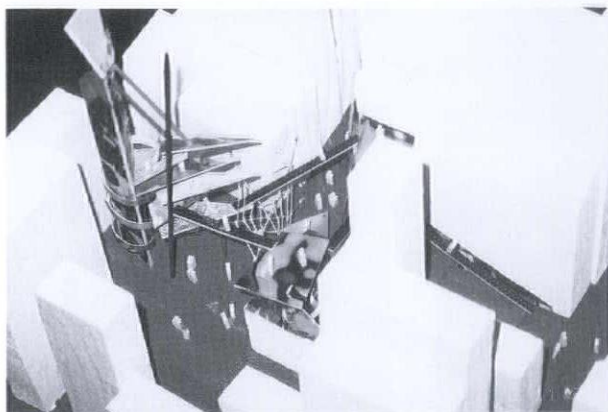
●伊藤公文



ワークショップ時の原グループの学生作品



ワークショップ時の木村グループの学生作品



ワークショップ時の荻原グループの学生作品



ワークショップの審査風景

彫刻家と建築家の共同制作の可能性

イサム・ノグチとルイス・カーン——刻み込まれたランドスケープ展

1961年から5年間、造形家イサム・ノグチが建築家ルイス・カーンとニューヨーク・リバーサイドパークのアデーレ・レヴィ記念遊園地を共同計画した。今回の展覧会では、計画初期から最終案までのいくつものプロセスを示すブロンズ模型とドローイングを中心に、彼がランドスケープに刻み込み、産み出そうとした様々な造形の模型（そのものが既に造形作品なのであるのだが）が展示されている。同時に、日本での丹下健三氏との広島平和公園内の橋の欄干、および大谷幸夫氏との横浜こどもの国児童遊園地のふたつの共同制作の図面と模型も加えられており、ノグチのランドスケープデザインの紹介とともに、造形家と建築家の共同制作の展開がもうひとつのテーマになっている。

リバーサイドパークの遊園地プロジェクトは5年間の間に5つの案が提案されており、その5つのバージョンの模型がノグチによるブロンズの造形作品で提示されている。

初期のバージョン1の模型では、ちょうど宇宙に様々な星雲が自由にちりばめられているような、個々に独立して展開していた迷路、円形劇場、築山などの造形が、バージョン2、3、4と進むにつれて徐々に中央のプレイスペースを囲み込むようになる。そして、ある空間的な広がりや定義するように造形的なモチーフ群につながりが与えられていく。こう言っていえば、この過程で各造形群が建築的な要素として空間を定義する意味と秩序があたえられていく様子が読み取れて非常に印象深い。それは共同作業の過程の中でノグチが作り出していったものである。が、徐々に変化を遂げるブロンズ造形の背後に何らかの形でカーンの影を感じてしまう。制作

過程でどのような対話が造形家と建築家の間にあったのか知る術もないが、建築の側に立つ私にとってみれば、その変化は理解可能な方向への形の洗練のように最初は見えた。しかし段階を踏む5つのバージョンのブロンズ像の間を行き来する間に、第1のバージョンの、自由かつそれぞれがひとつの世界を持って、しかも広がっていきこうとするような不思議なカオス的なパワーが少しずつ消えていく寂しさを感じざるを得なくなった。そうしてあらためて見れば、これ以前の彼の作品、例えば展示作品のひとつである〈形だけでつくられたプレイグラウンド〉(1941年)の持っている力と比べれば、リバーサイドパークの第5のバージョンは確かに異質な、ある種の静けさを感じさせるものになっている。これが洗練という言葉で簡単に肯定的に捕えて良いものなのかどうか私にはわからなくなった。この展覧会のカタログにカーンのつぎのような言葉が引用されている。「形はノグチからきている。私の考えではそれらをつくるには、建設の秩序に答えなければならないだろう。ノグチも同じ秩序の感覚を持っているが、ただ、彼はそれに拘束されていない」。意地悪く言えば、カーンは、形は自分のものではないと考え、ノグチは建設のための秩序を自らを拘束するものと感じたと言っているようにも読める。純粋な造形と建築との世界の違いがテーマになっている。彫刻の世界の側からの視点で見たとき、ノグチのブロンズのこの変化はどのように映るのであるか興味深い。

会期中に大谷幸夫氏がノグチとの共同制作者である建築家立場から、そして京都大学の前田忠直氏がカーン研究の立場からそれぞれ記念講演をなされた。その中で前田氏は、当

時のノグチとカーンの言葉を引用して次のように述べられた。カーンが共通の重なり合う地平を探しつつけながらも建築家と造形家の世界の違いに着目していたことや、カーンの作品分析を通して、カーンの言う空間のオーダーの概念について指摘された。この概念は、この作品の変化の過程の中にも現われており、その理解に示唆を与えるものであった。

また、大谷氏がこどもの国児童遊園でのノグチとの共同制作の経験を語られた。その中で同氏が、「自然が内包し潜在させている規律や調和的諸関係を抽出し、それらを純化し形象化して現すこと。あるいは幾何学的・人為的造形を投入することで自然が可能性として保持している小宇宙空間を呼び覚ますこと」を見事に示すノグチの造形に感銘を受けながらも、樹木の生い茂った現実の丘陵を前に、このように見事に抽象化された形象を自然の樹木や生き物の世界にいかにか実現すればよかったのだろうかと思問されていたのが印象深かった。建築は人間との関わりの中で現実で建設されることを前提とした制作であるから模型は模型に過ぎない。しかし、ノグチのブロンズと石膏の造形を見たとき、これが様々な制約の中で変形していくのはしのびないと思うほど、ひとつの完結した芸術として我々の精神に様々なイメージをかきたててくれる。造形芸術の中で建築がおかれている位置をもう一度考えさせてくれる機会になった。

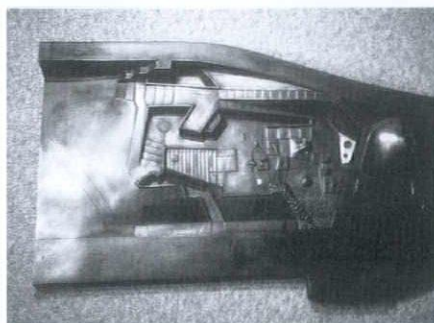
●垂井洋蔵／石川工業高等専門学校教授

イサム・ノグチとルイス・カーン
——刻み込まれたランドスケープ
会期：1995年11月1日～11月23日
会場：金沢工業大学ライブラリーセンター展示室
主催：金沢工業大学

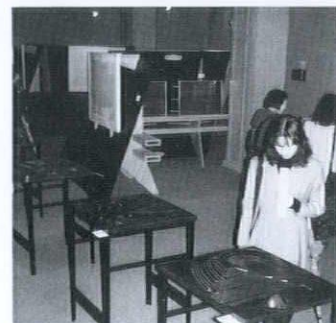


リバーサイドパーク遊園地プロジェクト、バージョン1

SD9601
160



リバーサイドパーク遊園地プロジェクト、バージョン5



会場風景

風景の生成

クリスト&ジャンヌ=クロード展

梱包されたライヒスタークと進行中のプロジェクト

梱包する(wrapping)ということには、いくつかの意味が考えられる。

ものの表層を隠すことによって、逆にその内容を意識させること。その内容についての想像力を刺激すること。

時折、クリストの作品以前に梱包された作品として、マン・レイの写真〈The Enigma of Isidore Ducasse, 1942〉やヘンリー・ムーアのドローイング〈Crowd Looking at a Tied-up Object, 1942〉などが関連づけられて語られることがある。マン・レイの作品の、物体を覆い隠している布は、まさしく神秘のベールだ。20世紀初頭の記号の革命、シニフィエ、シニフィアンとの関係性を浮き立たせる試みのひとつであろう。しかし、意味内容とは初めから存在しているものではなく、隠された瞬間に生成されるものではないのか。「隠すこと」はその「意味」の発生機構自体を還元的に問うもの、「見ること」その行為を問うだろう。

しかしながら、クリストの魅力の核心は、ラッピングすることによる根源的な知覚への問いかけ、批評性だけにあるわけではない。大勢の人々の共同作業、長い年月を掛けて展開される計画、そうした人の手の集積が生み出す広大な風景が、私たちを魅了するのだ。彼によって隠されたものは、決して謎(The Enigma)に包まれたものではなく、あらかじめ了解されたものである。それは初期の雑誌やドラム缶のラッピングの作品から一貫している。

今回の展覧会は、今年の6月27日から2週間に渡って公開された、クリストの梱包の集大成ともいえるベルリンの旧ドイツ帝国議会議事堂——〈梱包されたライヒスターク、ベ

ルリン、1971—95〉に加え、進行中の作品として、〈オーヴァー・ザ・リヴァー〉、〈ゲート、ニューヨーク、セントラルパークのためのプロジェクト〉の巧みなドローイング・カラー・ジュが展示されている。

〈オーヴァー・ザ・リヴァー〉では河の上空に張られたナイロンの布が、河川の地形を描き出す。〈ゲート〉では黄色い布で構成される門が歩道に沿って無数に配置される。その布は風によってたなびき、ひらめいて、ニューヨークのグリッドの一部をなすセントラルパークに行路を導き、線の交差を浮かび上がらせる。

クリストの描き出す風景は、思わず息をのむ壮大さを持ちながら、どこか懐かしい。〈ランニング・フェンス〉と万里の長城、マイアミの〈囲まれた島々〉とピンク色の熱帯の花びら、〈ゲート〉と京都の伏見稲荷の鳥居。ギャラリーで展示された作品は、いわば作品そのものではない。作品と名付けられるであろうものは、そのプロジェクトの過程から始まり、最終過程として生成される現場の光景である。展示された作品は、イメージを確定させるためのエスキース的なものでもあり、プロジェクトを実現させるための資金源でもある。

彼らは、関係諸機関や住民への説明会を多数行う。それはイベントのプロデュース作業を思わせる。複製技術の時代にあつて、2度と見ることのできない一回性によって生命を持ち得る光景を出現させようとする試みである。だから彼らが創出しようとする光景は、いわば、美術館をめぐるシステムと距離を置く。

プロジェクトは、他の観念的な現代美術、例えばミニマリズムのアプローチのように「見

ること」や「知覚すること」を問題にすることによって、芸術の概念の拡大を試みるものではない。作品内部の世界を対象にしない。クリストの壮大な風景は、ひたすら外部へ、公共の場へと広げられ、大勢の人々と共にある。

東西ベルリンの境界線上に建つライヒスタークは、自由と民主主義の象徴でもあった。24年間にも渡る議会や住民との交渉を経て、200人を越す作業員やクライマーによって、それは梱包された。

アルミコーティングされた布に覆われたことによって、建物のディテールは消され、その社会状況、政治、文化がより純化された形で抽出される。

青空を背景にした銀色の皮膜は一定の姿を見せない。それは神秘のベールではなく、訪れた人の手に触れられる。布は、美術史を見渡しても伝統的な素材である。光は反射し、時には透き通るかの様相を持って、布は時刻の移り変わりと共に変化し、それぞれの空を映し出す。記号論的、現象学的解釈の言葉は届かない。大勢の人々に囲まれたライヒスタークは、見る者のそれぞれの思いを吸収し、美しい思い出、一回限りの夢の具現ともなった。

クリストは民主主義と、歴史をも包みこんだのであろうか。

風景は一瞬、時間や空間を包括して、日常的な場から切り出される。

●渡邊高宏／建築家 アトリエ・ファイ

クリスト&ジャンヌ=クロード展

梱包されたライヒスタークと進行中のプロジェクト

会期：1995年10月25日—11月12日

会場：アサクラギャラリー&ヒルサイドフォーラム

主催：ヒルサイドテラス、アート・フロント・ギャラリー、

佐谷画廊

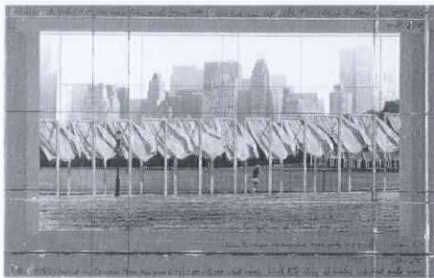


梱包されたライヒスターク、ベルリン、1971-95

Photo: Ei Okuno

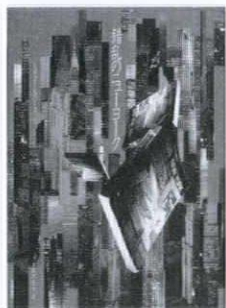


オーヴァー・ザ・リヴァー、コロラド州、アーカンサスリヴァーのためのプロジェクト 1995年 © Christo Photo: Wolfgang Volz



ゲート、ニューヨーク市、セントラルパークのためのプロジェクト 1995年 © Christo Photo: Wolfgang Volz

『錯乱のニューヨーク』
レム・コールハース＝著
鈴木圭介＝訳
A5判 406頁
筑摩書房 4200円



評者＝
小林克弘

若きコールハースが見たニューヨーク

本書は、ニューヨークで生じた興味深い建築的現象をシナリオ風に綴った面白い読み物であり、と同時に現代建築のリーダー、レム・コールハースの建築思考の源流を知る上で不可欠の書であるという、不思議な二重性を持つ。さらに言えば、緻密な実証的知性と驚異的な発見的感性との協働の上に生み出された類稀なる書物なのである。

内容は決して難しくない。むしろ楽しく面白い。訳文も、原文の雰囲気やうまく日本語に置き換えることに成功しており、読み易い。読者は知らず知らずの内に、コールハースが次々と提示する、ニューヨークの真面目にして荒唐無稽な（それ故に錯乱した）諸エピソードの世界へと引きずり込まれることになるだろう。

諸エピソードの断片をつなぎ止めているのは、コールハースによれば「マンハッタンイズム」なる概念である。これは、必ずしも明確に定義されていないが、「過密の文化」の一形態であり、「建築のエクスタシー」で満ち満ちており、「完全に人間の手によって捏造された世界の中に暮らすこと、言い換えれば空想の世界の中で生活すること」というプログラムを持つもの、とされている。そして、マンハッタンイズムの具体的事象として、コニー・アイランド、ヒュー・フェリス、エンパイア・ステート・ビル、ダウントウン・アスレチック・クラブ、ロックフェラー・センター、レイモンド・フッド、ウォーレス・K.ハリソン、ラジオシティ・ミュージックホール、ニューヨークのダリとコルビュジエといった、建築、建築家、あるいは建築的出来事が次々に舞台に登場する。これらの多くは、よく知られてはいたものの、少なくとも1978年の出版当時までは、決して誰も真面目に取り上げようと

はしなかった、あるいはそれらの意味を深くは考えようとはしなかった事柄だったのである。

したがって、これらに注目したこと自体、若きコールハース（執筆時は30歳代前半である）の卓越した感性を示しているということができる。本書は疑いなく、鋭い感性によってなされた発見の書なのである。そして、同じく重要なことは、コールハースが本書を著すに際しては、極めて丹念かつ緻密な下調べを行っているということである。コールハースは最初シナリオライターを目指したこともあって、諸エピソードをシナリオ調に記述するという書き方を採っており、それ故に、本書は一見すると、実証的な研究書とは思われにくい。しかしながら、実際には、彼は恐らく数年にわたる資料収集や関係者へのヒアリングといった地道な研究活動を行っているであろう。私自身、2年間コロンビア大学において、ニューヨークのアールデコ建築という本書と部分的に重なるテーマに関して、そうした研究活動を行ったことがあるので、コールハースの地道な努力はよく理解できる。

今や、コールハースと言えば、大変な影響力を持つ建築家であり、特に日本では、コールハース流のデザインが大流行である。しかし、本書出版当時は、コールハースは建築家としてはほとんど無名の存在であった。本書を通して、ニューヨークの建築的錯乱を楽しみつつ、若きコールハースの問題意識、感性の源、地道な努力、つまりは現在のコールハースを作り上げた土壌に目を向けてみることも大切であろう。

●こばやし・かつひろ／建築家、東京都立大学助教授

Metropolitan Library

1月の評者＝
橋爪紳也

明治・大正・昭和初期にかけて建てられた歌舞伎小屋風の劇場、いわゆる芝居小屋に関する本が毎年のように出版されている。内子座や金丸座の活動を紹介する雑誌・新聞記事もしばしば見るようになった。派手さはないが、隠れたブームにあるのかも知れない。

全国をめぐるガイドブック風、さまざまな立場の専門家による論集、写真を主とした本というように、それぞれに特徴があり楽しく読める。ただ「建築史屋」から言わせてもらえば、どの本にも小屋そのものの設計図や実測図が掲載されていない。資料としては不満が残る。

なぜこの種の芝居小屋が、突然、注目されるようになったのだろうか。おそらくは琴平・金丸座での歌舞伎上演が成功したのがきっかけだったのではない。以後、「先人の遺産」を再生、地域活性化の種に

しようと各自治体が躍起になった。豪華な多目的ホールを田園に乱立させた、バブル期の文化行政に対する反動なのかもしれない。

芝居小屋の本をまとめて眺めていて、数年前に訪れた台湾・台南市のことを、ふと思い出した。近代化を果たした台北よりも、経済成長と伝統に根差すヴァンキュラーな生活文化とが微妙な均衡を保っているあたりが魅力的だったことを覚えている。20世紀後半の「米文化帝国主義」に疑問を抱く異邦人は、「完成品」よりも「過渡的状況」に惹かれるものだ。

特に印象深かったのは、路地の奥でたまたま出会った祭だ。京都の地蔵尊のごとく、各街に廟が祀祭されていた。その夜は、路地を塞いで廟のある広場に面して、仮設の舞台がしつらえられ「歌謡ショー」が演じられる。「芸能の場」が、畏怖すべきものと人々とを親密に繋ぐ機会を用意する。さらにはコミ

『美術館とは何か』

大島清次=著

四六判 270頁

青英舎 2200円



評者=

渡辺真理

私たちは私たちにふさわしい美術館をもつ

これは美術館に関する入門書ではない。だから、書名からミュージオロジーについてのハウ・ツーものを期待して手にとった人は失望するに違いない。

この本はまさしくそういった私たちの姿勢——与えられたものを嬉々として受け入れる姿勢、安直な知識を疑いもせず容認する姿勢——に対する警鐘なのである。そういった私たちの姿勢が、つまるところ、この本の中で述べられている、現在の我が国の公立美術館が陥っている苦境の遠因となっていることはやがて自明だからである。その一方で、この本は、なぜ自分は美術館に行くのか——といった卑近なレベルから、美術館とは何かを再考するには格好の書である。この本を読むことによって、大方の人間は無自覚無批判に繰り返してきた美術館体験の意味を問いかけることになる。

「多目的ホールは無目的ホールである」という音楽、劇場関係者の主張がようやく社会的に認知されたのか、この頃、地方自治体の建設するホールは専用ホールであることが通例化したようである（クラシック音楽専用ホール偏重のきらいはあるが）。ところが、美術館建設となると、ホールのひそみにならうなら「無目的美術館」となるリスクが大であるにもかかわらず、依然として「多目的美術館」が横行している。著者のいうところの電灯の寓話——電球とソケットとコードを買ってくれば村に電灯がともると信じた村長の話——は、私たちの周囲に着々と続々と建設されていく地方公立美術館と、著者のつまびらかにするその実体を見聞するなら、決して単なるジョークとして笑いとばせるような話ではない。

設立の理念の欠落した無目的美術館の出現は、電灯の寓話のような、ナイーブで善意に

富んだポリティックス（橋ができ、道路の舗装が完成した後では美術館・博物館の建設は住民の啓蒙とアイデンティティ育成には不可欠である）の所産に他ならないが、公立美術館のアポリアはそれに止まらない。美術館をとりまく様々な制度という問題も難問である。学芸員という職能も昨今ではキュレーターと呼称されたりするので、門外漢はつい欧米の美術館の同名の職種と同一視してしまいがちであるが、どうやらまだまだ似て非なるもののようである。制度、とりわけビューロクラシーとの軋轢、などと書くと、単にキセイカンワの話じゃないのとか、そりゃあ美術館組織だけの問題じゃない、ホール運営だって何だって皆同じ問題を抱えているんだから……という具合に、論点は拡大拡散し次第にボヤケてしまうのが我が国特有の悲憤慷慨尻切れトンボ型議論であるが、「制度」の取り扱い方については、

①制度を弾力的に運用する

②制度を徹底的に改革する

③美術館組織を制度の枠から外す

の3つの方策が考えられる。しかし、著者に従うなら、美術館に関しては、①の弾力的運用はもはや限界のようである。②は制度の構造改革を必要とするから、美術館の置かれた緊急事態の解決には間に合わない虞れが強い。となると、残された道は③しかないように思われる。それが公立のうちでも最も下位の（と著者のいう）区立の世田谷美術館が常に耳目を集める企画展を成功させている一因ではないだろうか。セタガヤの実験に学ぶところは多い。セタガヤに続くのは果してどこか。

●わたなべまこと／建築家、設計組織ADH

ユニティの有り様にも、大いに影響を及ぼしていることを肌で感じた。

面白いと感じたのは、伝統的な仮設舞台で、今風の「ショー」が上演されていた点。「護るべき伝統」と「国家が要請する近代化」というふたつの価値観が揺れていた。日本各地に遺る伝統的な芝居小屋も、かつては文化の「近代化」を促す役割を担ったのではないかとふと思いついた。

そこで考えさせられたのが徳永氏の2論文。丹念な調査に基づいて、大都市と地方都市における小屋の成立過程、運営状況を比較して、双方に別の論理が働いていたことを論じている。適切なのは地方における動向。「御大典」「皇紀2600年」といった国家的な祝賀を名目に、一方で公民館、他方では民衆芸能と連携した常設の小屋が建設されたという指摘に注目したい。

徳永氏の論文を精読して、中長期の時間で測りうるならば、芝居小屋ないしは劇場の有り様は、「都市化／近代化」が進行している度合いを推し量る指標になるのかも知れない、と思いついた。だとすれば劇場の変遷を論ずることで、「都市化の時代」であった20世紀を総括する記述が可能だろう。機会があれば「劇場史」を手法として用いた、ぼくたちの「都市文明論」をまとめてみたいと、年頭の夢想をひろげた次第である。

『ザ・康楽館』

星雲社、1993、1800円

『劇場をめぐる旅——芝居小屋建築考』

INAX、1994、1854円

『全国「芝居小屋」巡り』

1995、1600円

『松山東雲女子大学人文学部紀要』第2巻、1992

徳永高志著「地域における芝居小屋の設立と運営」

『松山東雲女子大学人文学部紀要』第3巻、1995

徳永高志著「近代的劇場の成立と芝居小屋」



自然を征服しようとは思いません・自然と調和させるだけです

空気調和の

三建設備工業株式会社

本社 東京都中央区日本橋蛸殻町1丁目35番8号

☎(03)3667-3431(大代)

支店 北海道・東北・横浜・名古屋・大阪・中国・九州

新刊紹介

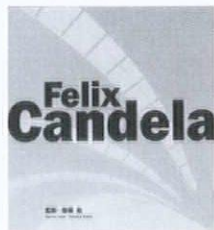
『フェリックス・キャンデラの世界』

齋藤裕＝監修

300×300cm 244頁

TOTO出版 9800円

HPシェルの構造家として名高いフェリックス・キャンデラの作品集。代表的なイグレスア・デ・ラ・ヴィルヘルン・ミラグローサ教会を始めとする13の作品を掲載、図面、CGを用いた詳細な紹介を試みる。またキャンデラ自身によるものを含め、オブ・アラップ、三宅理一らのテキストも併載する。



『チベット／天界の建築』

友田正彦＝著

A5判 48頁

INAX 927円

ヒマラヤ山麓諸国に一大文化圏を築いたチベット仏教は、建築の領域でも独自の文化を育んできた。本書では知られざるチベット建築に光を当て、世界一の規模を誇るポタラ宮殿、数々の僧院、それら建築物に施される様々な装飾の意匠性など、その魅力をひもとき、豊饒な建築文化を紹介する。



『日本の木の椅子』

渡辺力＝総監修

鈴木恵三＝編

A4判 160頁

商店建築社 3500円

1994年に開催された「日本の木の椅子展」を受けて編まれた本書は、「日本のオリジナリティ」を基準に、明治から近代、現代までの108点を掲載。デザイナー28人へのインタビューも含まれ、素材としての木の多様性を見ることができる。



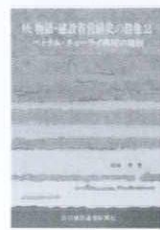
『続・物語建設省営繕史の群像2——ベトナム・チョーライ病院の建設』

田中孝＝著

四六判 360頁

日刊建設通信新聞社 2600円

ベトナム・チョーライ病院は建設省初の海外事業としてベトナム戦争の最中に建設工事が始まった。その後15年で全面修復が必要となるまでの過程をつぶさに検証。ベトナム戦争の陰で知られなかったチョーライ病院の実相を明らかにする。



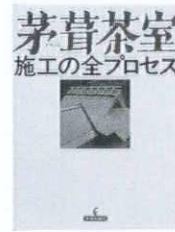
『茅葺茶室——施工の全プロセス』

和風建築社＝編

A4W判 128頁

学芸出版社 4944円

四畳半台目の茶室と水屋棟の施工過程を55の工程で詳解する本書。全体はカラー写真を豊富に含む、全400点の写真と図面、スケッチで構成。基礎から庭までの作業を解く。普請の工程とともに、実際の作業を詳細に示すことで、各職方の持つ独特の技術をも明らかにしている。



『世界のインテリアデザイナー作品集』

日本インテリアデザイナー協会＝編

A4判 50頁

六耀社 7600円

名古屋で開催された「世界インテリアデザイン会議」を記念して発刊された本社は、JID(日本インテリアデザイナー協会)会員の作品を中心に各国デザイナーの作品を加え、インターナショナルエディションとして290点余りを収録。今の国際的なデザイン動向、各国の傾向と実情などを知る格好の書。



「トーンネットとウィーンデザイン
すべては曲木椅子からはじまった」展

近代住宅のデザインに多大な影響を与えた3つの個性、曲木椅子の始祖トーンネット、そしてトーンネットの家具を重用したヨーゼフ・ホフマン、アドルフ・ロース等にスポットを当てた展覧会。

会期：1996年3月16日(土)～4月7日(日)
10：30～18：30 (金・土のみ19：30まで)

会場：パークタワーホール
東京都新宿区西新宿3-7-1

新宿パークタワー3F
入場料：一般700円、学生600円、小学生以下無料
問い合わせ：リビングデザインセンターOZONE
Tel. 03-5322-6500

第2回照明探偵団・連続講座
「夜景に見る都市計画」

都市の構造を探るためには高所から夜景を眺めるに限る。激動の20世紀を生きてきた、マンハッタン
の夜景は私達に何を語ろうとしているのか。
近代照明史に都市の構築過程を探り、意図した夜景
を考える。

テーマ：「私達には都市の夜景がデザインできるの
だろうか」

日時：1996年1月19日(金) 18：00開場、18：30開演

会場：東京デザインセンター
品川区五反田5-25-19 Tel. 03-3445-1121

ゲストパネラー：深谷哲夫

コーディネーター：面出薫

探偵レポーター：稲葉裕

応募方法：往復はがきに住所・氏名・年齢・職業・
連絡先を記入の上、「東京デザインセンター照明探偵
団係」宛まで。

JIA第2回建築セミナー'96
「気持ちいい建築ってなあに？」

模型作品展

会期：1996年1月8日(月)～2月2日(金)
9：00～17：00土日休館

会場：すまい・るギャラリー

文京区後楽1-4-10 住宅金融公庫本店1階
出展建築家：新居千秋、泉幸甫、大江匡、平倉直子、
古市徹雄、藤本隆男、宮崎浩、アーキテクトファイ
ブ、シーラカンス、ワークショップ。

入場無料

講演会

日時：1996年1月13日(土) 14：00～17：00

会場：すまい・るホール

文京区後楽1-4-10 住宅金融公庫本店1階

講師：シーラカンス

コーディネーター：桐原武志

参加費：1000円

定員：300名(申込先着順)

申し込み：住宅金融公庫東京住宅センター

Tel. 03-5800-8211

「ロトチェンコの実験室」展

今世紀始め、アートを社会に機能させようと色々な
実験を試みた、ロシア・アヴァンギャルドの中心作
家、アレクサンドル・ロトチェンコとヴァルヴァラ・
ステパーノヴァの活動を追う。ペインティング、立
体からヴィンテージ写真まで、約200点を展示。

会期：1995年12月1日(金)～1996年5月6日(月)
(月曜及び12月31日～1月5日休館)

11：00～19：00 (水曜は21：00まで)

会場：ワタリウム美術館

東京都渋谷区神宮前3-7-6

入場料：一般1000円、学生800円

問い合わせ：ワタリウム美術館

Tel. 03-3402-3001

大倉富美雄「RATIONAL REVIEW
'90～'95建築・家具・サイン」展

大倉富美雄氏の、建築分野での写真と模型の展示を
はじめ、テーブル、椅子などの家具、サイン作品を
紹介する。

会期：1996年2月14日(水)～2月18日(日)

10：00～20：00

会場：アクシスギャラリー

東京都港区六本木5-17-1

問い合わせ：アクシスギャラリー

Tel. 03-3587-2781

'96Japan Shop関連シンポジウム
第14回「セクション」

1974年の発足以来22年間、一貫としてコマース
スペースの現在を見据えてきた「商環境デザイン賞」。
本年より「JCDデザイン賞」と改名し、21世紀型サ
ービス産業時代の中で、商環境が社会のどの位置を
指し示すのか考えていく。

テーマ：「デザインの現在地点」

日時：1996年1月31日(水) 13：00～17：00

会場：日本コンベンションセンター

(幕張メッセ国際会議場)

①パネルディスカッション1

「ショップスケープとしての商環境」

パネリスト：高山不二夫、近藤康夫、栗生明、北川
原温

②パネルディスカッション2

「領域がもたらす全体性のデザイン」

パネリスト：押野見邦英、隈研吾、伊東順二、浅葉克巳

コーディネーター：渡部隆

定員：500人(当日先着順)

入場料：3000円

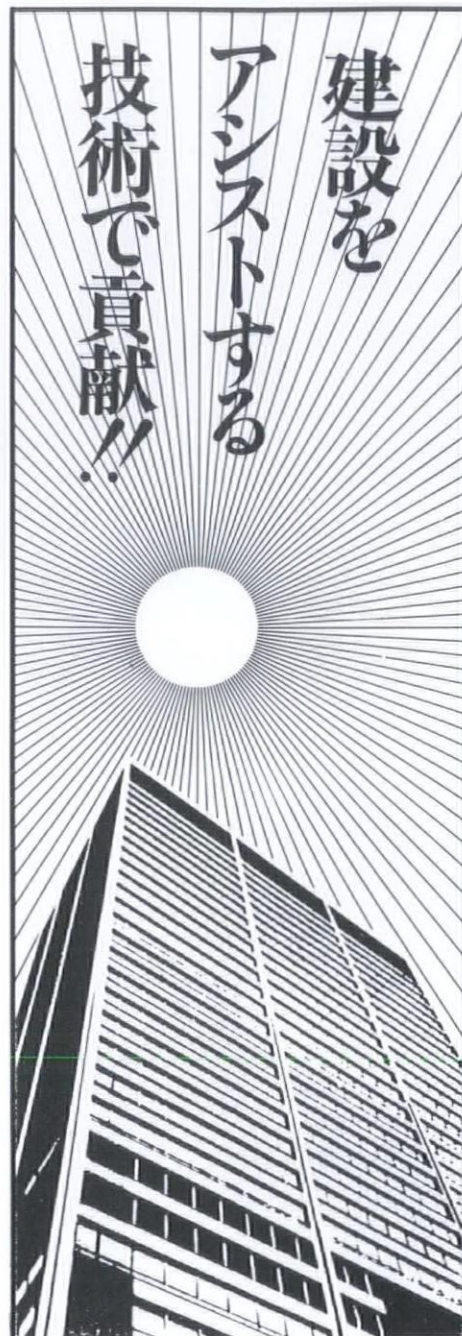
問い合わせ：

(株)シムインターナショナルsyokankyo編集部

Tel. 03-3498-0831 担当/山崎

■お詫びと訂正

9512号P.43の記事中、2段5行目、17行目、3段1行目の「均質」
は正しくは「均質」です。お詫びして訂正致します。



- 一般電気設備工事＝設計施工
- 防爆電気設備工事＝設計施工
- 計装工事＝設計施工
- 電気加熱保温工事＝設計施工
- 静電気接地用リール＝販売

ASTEC
SHOWA ASTEC

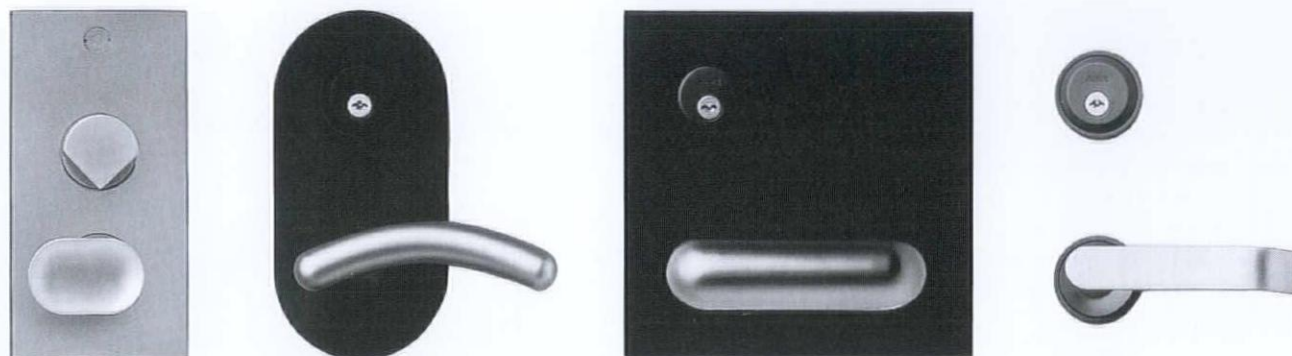
昭和アステック株式会社

(旧社名 昭和電機工業株式会社)

取締役社長 浦 道 雄

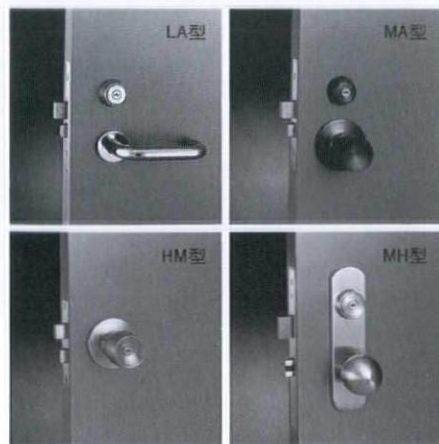
- 本社／東京都港区東新橋2丁目7番3号
電話03(3437)3851(代表) ㊦105
- 支社＝関東・中部・関西・中国
- 営業所＝新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
- 駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

なぜINTERFACEは



いい製品だけを心掛けてきたMIWA。

ロックには、まず破壊攻撃に対する対破壊強度、耐久性、豊富なカギ違い数という3つの基本性能が求められます。その上で、いいロックであるためには、用途に合わせた幅広い機能、使いやすさと建物との調和を考えたデザイン、さらには滑らかな作動感や音質、多彩なキーシステムなどをできる限り盛り込んだ、完成度の高いメカニズムが必要です。もちろん安心してご使用していただくための品質管理、販売、アフターサービスなどソフト面の充実も欠かせま



せん。MIWAはこのすべてを満たすことに全力を投入してきました。

時代を先取りしたロックINTERFACE。

ロックはさまざまな用途や要望によって細分化され、現在では実に多くの製品がつくられています。もちろんすべての製品は、今の社会が必要としているものばかりです。しかし決して現状に満足しているわけではありません。私たちは今の時代にふさわしいロックをあらためて考え、さらに1歩前進させるために3つのコンセプトを見つけました。それはボーダーレス時代に備え、国際的に通用するロックにすること。高級化する建物に即した機能、性能、感性を備えた本格的なロックにすること。そして利用者にとって選びやすく、取り付けやすいロックにすることです。この3つの要素を満たすには、まず国際的な規格に適合させる必要があります。しかし、残念ながらロックには世界共通の規格がありません。そこで私たちは性能基準が厳しく、システムチックに整備されているアメリカのANSI規格（米国国家規格協会）に着目しました。

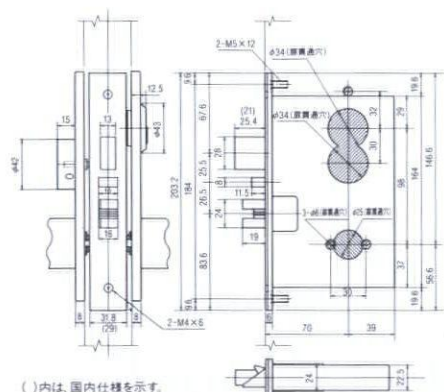
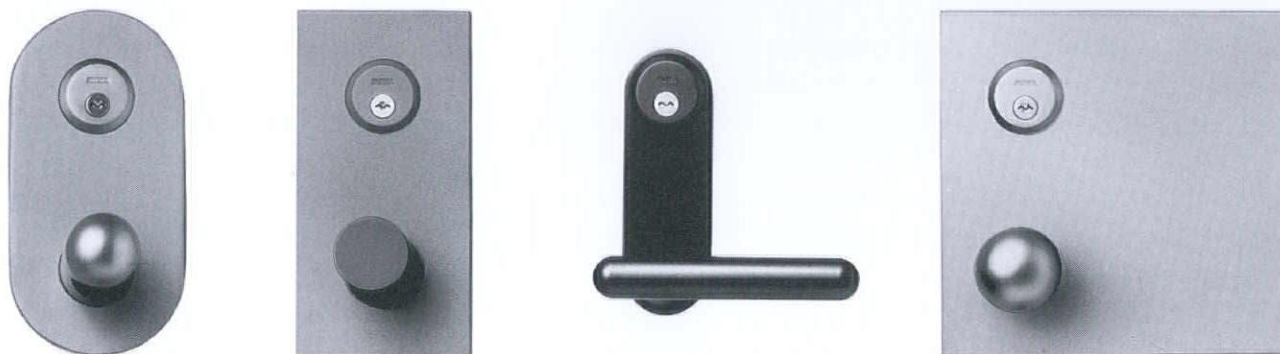
●ANSI規格は厳しい性能基準を規定。

ANSI規格はロックの実用性能試験、防犯性能試験、耐久性能試験、仕上性能試験について厳しく規定しています。その内容のレベルは非常に高いのですが、MIWAでも同じような研究を継続的に行ってきたので、努力の結果クリアすることができました。もちろんINTERFACEはこの規格のすべてに適合させて、信頼性を実証しています。

●ANSI規格は切り欠き寸法を規定。

ANSI規格には寸法基準があり、施工性を向上させています。玄関ドアから室内ドアまですべての錠ケースとストライクは、規定の切り欠き寸法に合致しなくてはなりません。ですから、扉と枠の加工が錠機能の決定前に行え、錠機能の変更もケースの交換だけで済みます。また、この規格はアメリカのものだけに、日本の一般的なドアには適さない部分があります。そこで、国内のドアの仕様に合わせたフロントの幅、デッドボルトのストロークなどを盛り込んだ、国内仕様のケースも用意しました。もちろんANSI規格のメリットはそのまま確保しています。

生まれたのか。



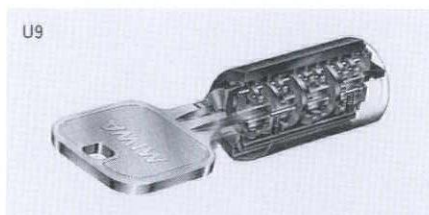
●ANSI規格はロックの機能を統一。

ANSI規格の最大の特長ともいえるのが、錠機能の記号化で、20数通りの機能がシステムチックに構築されています。たとえばルームドア錠は『F21』、ホテル錠なら『F15』のように、部屋の用途に合わせた機能の指定が、メーカー間共通の記号で行えます。

INTERFACEの安心を支える『U9』。

ANSI規格では特に規定されていませんが、
けっして無視できないのがロックの生命ともいえ
るシリンダーです。INTERFACEとはほぼ同時

期に完成した主力シリンダー『U9』は、約1億5千万通りの膨大なカギ違い数を得たので、多彩なキーシステムにも対応できます。しかもキーシステムの構築によって起きる、急激なカギ違い数の減少もありません。もちろん不正解錠に強く、カギの質感もよく抜き差し感が滑らかになりました。



格調を重視したシステムチックなデザイン。

このようにANSI規格への適合をはじめ、操作感や音質などにまで配慮してメカニズムを磨き上げましたが、もうひとつ大切な要素があります。デザインを忘れてはなりません。人の感性に訴え、高級化する建物にも対応する格調高いフォルムを用意するために、私たちは一流デザイナーに協力をお願いしました。モジュール化されたレバーハンドル、ノブ、エス

カチオンは自由な組み合わせができ、カラーを含めると660ものバリエーションが得られます。選択の幅をより広げるにより、それぞれの個性やセンスが表現でき、組み合わせること自体が楽しめるようになりました。これがMIWAの自信作INTERFACEです。今後もデザイン展開などを含めて、さらに充実したシリーズに育てていきます。

記号	用途例または 一般名称	略図	機
F01	空錠	室外側 Exterior side  室内側 Interior side 	常時、内外のハンドルでラッ
F02	個室 寝室 浴室錠	 	ラッチボルトは内外のハンド ムターン、外からは非常開錠 を操作すると、外ハ ンドル操作により外ハ
F21	一般居室用	 	ラッチボルトは内外のハンド ムターン、内からはサムターンで開
F22	個室 寝室 浴室用	 	ラッチボルトは内外のハンド ムターンの操作で施錠されます のハンドル操作により外ハ

※INTERFACEカタログをご希望の方は、美和ロック株式会社までご請求ください。

INTERFACE

ランドスケープ／人工と自然の風景

—日仏工業技術会シンポジウム：景観工学と風土

90年代には急速に景観が浮上してきた。建築設計分野ではランドスケープデザインへの関心が高まり、アーキテクトは建築をランドスケープと見立ててつくことに関心を示している。ランドスケープ・アーキテクトの活躍も目立つ。建築をオブジェクトとしてではなく環境をうながす空間装置としてとらえる視点が共有化されつつあるように思われる。それは、僕たちをとりまく人工環境が高度に極端に発展してきたということについてのある種の息苦しさを感取っていることにもよるだろうし、また余りにも急激に環境を加工してきた過去半世紀のあいだに失われてきた自然について考えざるを得ないところまで僕たちが来てしまったからだともいえる。つくりあげてきた建築群や都市をややひいた視点から眺め、次世紀の都市や建築の行方を考えているといったことだろう。現代建築、現代都市を見る僕たちのまなざしも変化しつつある。今世紀人間は近代テクノロジーを手中におさめ、それを駆使することによって歴史的に空間の勢いと規模で大地を加工してきた。20世紀も余すところ数年となった現在、そうした活動の結果として出現した、さらには現在出現しつつある20世紀の都市の風景を冷静な目で眺めてみようという機運がでてくるのもうなずけようというものだ。身近に考えるならば、僕たちの暮らしている日本の都市をどのように眺め、どのように解釈するかということも広義のランドスケープの課題といえる。全体として美しいとはいいがたく快適な状態ともいえない、清潔ではあるが乱雑でスケールは悪くはないが混乱している。大がかりに人工的に手が加えられてきたこの都市は、今後、もともとの地形や自然、さらには文化的コンテクストとどのように折り合いをつけていくのが望ましいのか、建築と都市の空間の課題として個別のデザインの問題とは別の位相で問われていくだろう。

ともあれ、社会にむけての景観をめぐるさまざまな立場からの広範な議論は始まったばかりである。昨秋、東京のお茶の水で広義の景観についての日仏国際シンポジウムが開催されている。そこでは、内外の識者が集まってさまざまな角度から景観の問題を取り上げられた。分野が広がっているだけにフォーカスしにくい面があるものの、いくつかの興味深い論点を提出されている。パネラーは、コー

ディネーターとして西洋建築史の三宅理一、そして景観工学の樋口忠彦、ライティングデザイナーの面出薫、前日仏会館館長で思想史のオーギュスタン・ベルクの諸氏である。まさにインターディシプリナリー（専門領域を超えた学際的横断的）な顔触れであった。専門分野が異なる人たちがそれぞれの専門の切り口から景観にアプローチできるところに、この概念の有効性を見てとることができる。景観が具体と抽象のあいだを漂うある種曖昧なコンセプトであるにせよ、現在多領域の関心をひいているという事実に関心がもたてるのである。

はじめに、各パネラーが景観についての課題を提供した。樋口は、学生時代に自転車部員として日本全国の道を走りまわり、訪れた先々で体験した美しい日本の景観にひかれたのがきっかけとなり土木工学を専攻し、仲間たちとともに「景観工学」という新しい学問分野を切り拓いてきた。自らの体験から景観の構造は地形が大きなファクターとなっていくとの確信を持ち、経験する空間こそが面白く重要なのではないかと指摘する。視覚的景観構造と空間的景観構造という枠組みのもとに、日本人が好ましいと考えてきたものについてボタンを発見するという視点で考察を続けてきたという。樋口は、近代の都市計画の方法、すなわちコルビュジェ、CIAMへのアンチテーゼとしてのプリティシチュアンスケープスクールに共感を覚え、理念ではなく日常的な視点から都市を眺めるというアプローチで都市デザインを考えていくことの重要性を指摘する。

次に、オーギュスタン・ベルクが、思想史のなかで風景を位置づけて論を展開した。風景は客観的存在でもなくまた精神的存在でもなくその中間に存在する、と彼はいう。ハイデガーの時代性と和辻哲郎の風土性について触れ、風景における主体と客体の構図を与えてから、風景概念をもつ文化ともたない文化を比較するための4つの標準を示した。風景ということば、風景の美、風景画、庭園の4つの文化に存在するか否かというのがそれで、日本やフランスのように風景という概念が明確に存在する文化とそうでない文化とがあることを指摘する。ヨーロッパにおける景観論争が、科学的実証主義VS主体を主張する人文科学主義という構図になっているとい

シンポジウム：景観工学と風土
日時：1995年10月30日 18:00-20:30
場所：日本化学会
東京都千代田区神田駿河台1-5
主催：日仏工業技術会

う報告がされた。

面出薫のプレゼンテーションは見事で説得力があった。都市は夕刻から夜にかけての明かりと光のデザインでさまざまな表情を見せる。面出は、光のデザイナーとして手がけてきた建築空間を例にとりスライドで紹介していく。ライトスケープ（光景）と呼ぶべき美しく美しい夜の景観にオーディアンスは皆見入っていた。同時に世界の明かりと光を探索、採取する照明探偵団という活動も紹介された。「自然光に学べ」と面出はいう。一口に自然光といっても、地域や文化によって違いがあるという指摘が創造力を刺激する。

シンポジウムで指摘された論点を深め論議を進めていくにはもう幾日もの時間が必要だ。僕が岡河貢氏とまとめた「テクノスケープ」(SD9504)のような課題もある。いずれにせよテクノロジーの操作によって分析的に形成されてきた現代の環境を景観という総合的な態度で見直す作業は今後ますます盛んになると思われる。次世紀の景観をどのように描いていくのか。興味と議論はつきることがない。

●宇野求／建築家、千葉大学助教授



19世紀のフランス庭園、Désert de Retz



東京湾岸の風景、千葉市

新井大介
太田浩史
奥田真也
松原弘典
和田克明



戦後50年の昨年には、原爆ドームの世界遺産登録への動き、旧朝鮮総督府の解体決定、東京裁判の行われた市ヶ谷駐屯地大講堂の部分保存決定など、戦争と建築をつなぐ様々な出来事があった。その一方で、厚生省・建設省によって昨年の完成に向けて計画されていた「戦没者追悼平和祈念館」の着工は大幅に遅れている。これはそもそも1985年に「国家のために父を捧げた遺児らへ何らかの慰謝事業を」という日本遺族会の要求に答えてスタートしたもので、87年には識者懇談会が「戦争を客観的具体的に伝える資料を展示する遺児記念館の設置が妥当」と厚生省に報告し、92年に基本計画を基に予算要求、現在123億円の総事業費が見込まれている。名称については「国民に分かりにくい」との議論から現在のようになった。この構想に対しては、当初から歴史学者などから「被害を受けた人々の実態解明のための資料発掘や、戦争再発防止のための教育に関する研究をすべき」と計画の見直しを首相に求める声明が発表されたり、日本遺族会へ予定される運営委託にも日本戦没学生記念会などから「公正中立な運営が期待できない」と反発が示されたりした。建築家選定の

が歴史家や哲学者によって盛んに議論されているように、ホロコーストや戦争のような出来事は果たして表象しうるものなのか、むしろ表象の限界を示すものではないのかという間に直面せざるをえないからである。つまり、それを伝える術を我々は持たないという所から始めなければならないということだ。これは文学、映画、建築という違いを超えていかなる媒体にも当てはまる。

例えば、フランスのジャーナリストでもあるクロード・ランズマンが1974年より11年をかけて監督し、1985年に完成させた映画〈SHOAH〉。この9時間半にわたる映画ではアウシュビッツ強制収容所以外のヘウムノ、トレ布林カといった絶滅収容所など、歴史としてこれまで語られなかった資料を提出している点でも注目されるが、最も話題になったのはその手法である。そこでは当時の悲惨さを伝える記録映像も用いられておらず、〈シンドラーのリスト〉のようなヒューマニズム的英雄やイスラエル建国というクライマックスも存在しない。ランズマンによって、収容所の「死に損なった」ユダヤ人、周囲に住んでいたポーランド人、ナチの元親衛隊や歴史学者に対してインタビューがなされ、それに答える人々の顔、現在も使われているユダヤ人を運んだ鉄道、収容所跡の原っぱなどが写し出されるのみだ。人々は言葉につまり、

海外建築情報リミックス

不透明さに対する疑問の声も上がる中、菊竹清訓によって、靖国神社脇の軍人会館跡である九段会館の駐車場に「平和への祈り」のかたちとして、「S」字を上下に引き伸ばしたような計画案（地下1階・地上10階建、延べ面積1万㎡強、高さ60m、構造S造、外壁チタン）が提出された。これに対して、千代田区議会から皇居周辺の景観問題や風害・電波障害に対する意見書が提出されたり、これが同氏による老人ホームのデザイン「人の祈るかたち」と酷似していることから、そのオーナーからクレームがつくなどの動きもあった。また、阪神大震災後にはこの建物が災害時の北の丸公園への避難の障害となること指摘され、防災面での計画の再考が求められた。そして昨年9月に政府は計画を大幅に変更、展示物は歴史解釈を伴わない戦中・戦後の国民生活に関する資料が中心となり、菊竹事務所による新計画案（地下2階・地上7階、高さ45m、延べ面積は微減）では1階にピロティが設けられ、建物全体をチタンのエンベロップが緩やかに覆う外観となった。厚生省は「周辺環境との調和に最大限配慮されたデザイン」としたが、その1週間後には再度区議会から防災面での見直しの意見書が出され、現在今年度内の着工に向けて政府と住民との合意形成のための調整がなされている。

しかし、もはや戦争博物館は箱物でも何でもとにかく建てば良いという時代ではない。展示内容だけでなくその建築としての表現にも複雑な文脈が前提にされる必要がある。というのも「戦争を記憶する」ということ自体というより忘れようとしてきたことだけに言葉にするこ

Theme: **ビルディングタイプ** その4「戦争を記憶する建築」(戦争博物館)

とができないのだが、執拗にインタビューは続けられる。映画の中で次第に重ねられてゆく証言によって、ユダヤ人を収容所に輸送する列車ダイヤの緻密さや、収容所での死へのプログラムの合理性が明らかにされることで、ホロコーストでの出来事を決して「悲惨さ」や「代償」の物語には回収させないというランズマンの強い意図がずっとと伝わってくる。

戦争を記憶することを目的とした建築としては、旧アウシュビッツ強制収容所のように戦争を目撃した建築を博物館として再生するものや、中部フランスのオラドゥール村のようなナチス親衛隊に襲われて村人642人が皆殺された時のまま廃墟と化した街全体を博物館とするもの、USAホロコーストミュージアムのように新たに建てられるものなど、その在り方も場所によって様々だ。それらからも、戦争博物館は様々な水準での社会的、文化的問題がからまった複雑な関係の中におかれたビルディングタイプであり、場所性や民族や政治体制などによる特異性を持たざるを得ないものであることがわかる。日本では、最近になり大阪府や埼玉県などで「ピースセンター」がつけられはしたが、戦争を記憶する建物は、広島、長崎を除いてまだ十分に整備されているとはいえないビルディングタイプであり、当然建築の問題として語られることも少なかった。戦争博物館は日常的にはつい目をそらしてしまうことを問題にせざるを得ないが故に、建築家の創作の論理や表現方法に見直しを迫るようなごつごつした素材を突きつけているのではないだろうか。

アトリエ・ワン

新しいビルディングタイプの出現や、特定のビルディングタイプの急速な増大は、建築の歴史のなかで価値観の転倒がなされる時のひとつのきっかけを与えてきた。戦争を記憶する建築（戦争博物館）は、高度経済成長に専念してきた日本では後回しにされていたビルディングタイプであり、当然建築の問題として語られることも少なかったが、建築家の創作の論理に見直しを迫るような素材を突きつけるものではないだろうか。

参考文献
朝日新聞（931219朝、940319朝、940601朝、941212夕）
日経アーキテクチャー（19951023）
建築ジャーナル（199501）
「ショアの衝撃」岡田哲十
高橋哲哉編、未来社

コア・スタッフ'96
今井公太郎
岩下暢男
アトリエ・ワン
曾我部昌史
山本想太郎

AA: L'architecture d'aujourd'hui
PA: Progressive Architecture

第一次世界大戦中の1916年、ペロンヌ近郊のソンムにおいてベルギーに侵攻したドイツ軍と、イギリス・フランスを中心とした連合軍によって半年にわたって泥沼のような攻防戦が繰り返された。その犠牲者は100万人を超える。

長らくこの地に記念施設が建設されなかったのは、理由がある。遠くカナダ、オーストラリア、南アフリカに至る国際的な犠牲、また兵士の戦死に匹敵する一般市民の死と、このソンムの戦いの戦禍の広範さと微妙さが、事態の客観的な把握を困難にしていたのだ。多数の遺族の、参加諸国の、様々な感情。1992年になってようやく設立されたこのペロンヌの戦争博物館は、もとより史実の単純な記録や悲劇の否定だけでは埋め合わせることのできない複雑な背景をもっていた。戦争は表象しえるのかという問い以前に、戦争博物館というビルディングタイプが必然的に持つ政治的な意味が問われていたともいえる。

政治的文脈の認識なくしては、ペロンヌの「ヒストリアル」が示した新しい戦争博物館の像を理解することはできない（ミッテランのグラン・プロジェクトのひとつでありながら、地元ソンム県が実質的に建設のイニシアチブを担い、経済的にはECの経済的援助も受けるなど、クライアントも複雑である）。コンペに先立って発表されたそのプログラムは、ソンムの戦いと第一次世界大戦を国際的な視点から、また市民の立場から研究・再解釈するためにリサーチセンターの併設を謳っていた。そして何よりもこの施設を特徴づけるものがある。それは展示、研究から資料の収集、理念的な目標までが、戦いの当事者である独・仏・英の歴史家たちによって共同で計画されていたということである。戦争の不条理を単にメモライズするのではなく、立場を超えて解釈していくのだというその意志は、何よりも「メモリアル」に代わる新造語、「ヒストリアル」に込められている。

さて実施案として選ばれたヒストリアル計画は、この施設の性格を十分に補強する。中心的な課題として問われた開戦前から終戦へと至る5つの時期の展示計画に対し、H.シリアニは「ポートレイト・ルーム」という6番目の部屋を付加し、螺旋状に配置した展示空間の中心に据える。この「ポートレイト・ルーム」は市民の視点の重視というプログラムへのシリアニ自身の独自の提案である。大戦が始まる直前のペロンヌの人々の普通の肖像と生活の展示が大戦の経緯と照らし合わされることで、ある日突然に地方の街が直面することになった戦争の背後の国際的な力学を際立たせている。しかし、戦争というモチーフへの建築的な対応は、あくまでも限定されている。この「ポートレイト・ルーム」とファサードに規則正しく並ぶ棒状の突起物（軍人墓地の十字架の配置を暗示）以外に、戦争博物館としての特別な表現はなされない。爆撃によってできたと言われる敷地の地形に対しても、それを表象しようとする記号的な操作が避けられていることなど、建築はあくまでも展示の背景なのだというシリアニの考えがうかがえる。展示室の採光への周到な、繊細な配慮もそれを裏付けるものである。

戦争という主題の明示とその解釈は、A.リスバルによる展示計画が担っている。まず、床から数十cm沈めた穴に横たえられる展示資料。いうまでもなくこれはドイツ軍と連合軍が前線に築いた塹壕を示しているが、ひときわ目を引くのがその中に時折配される、兵士達の残した可愛らしい絵や彫刻である。リスバルはこう述べている。「極限状態の中でも、ひとはものをつくることができるのだ」。そして展示空間に点在する、3段に分けられたショーケース。これがヒストリアルにおける中心的な展示品である。独・仏・英それぞれの視点で捉えた最新の分析が、戦争前の、もしくは戦争のさなかの彼らの立場と論理の差異を明らかにする。この差異を突き詰めてい

くことは容易ではない。そして差異はどこまでいっても埋められないのかもしれない。しかしその相対化こそが、戦争という不条理を把握する手立てなのだ。

たったひとりの死でさえも、やすやすと納得することはできないのだから、大量の死を理性的に受けとめることがそう簡単にはいかない。理性以前にわき上がる本能的な「否！」の強さと重みに、われわれはいつも言葉を失ってしまう。確かに戦争を思うとき、なによりも大事なものはこの「否！」であり、それをメモライズすることは人として当たり前の感受性ではある。

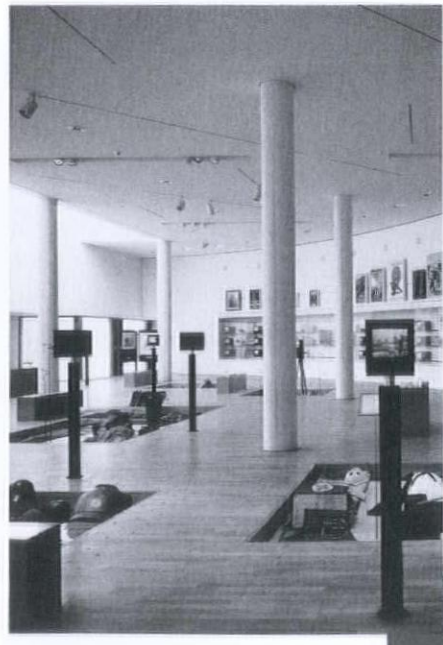
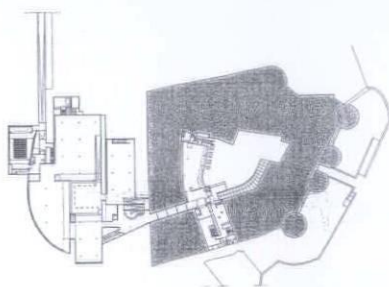
しかしそれだけではない、ともまた思う。困難を承知でも戦争の端緒を問うべきではないか。われわれは「否！」を和らげるため悲劇を語り伝え、死者を悼み、そして平和を願うが、しかしそれは歴史の把握とは別物なのだ。平和は、確かに共有できる価値である。「否！」も人である限り共有できるはずだ。しかし当事者たちにとっては、共有できなかった何かこそが重要なのだ。なぜならそれが戦争を生んだのだから。記憶するべきはその何かなのではないか。

ゆえにペロンヌのヒストリアルは「否！」のメモライズには依存しない。その建設の背景には、いうまでもなくヨーロッパの累々たる戦いの歴史と、それを乗り越えようとする現代の協調体制がある。この地で繰り返された泥沼の戦いを把握するとき、問われたのは当事者たちの中に今もなお潜む立場の差異と、それを相対化する新たな視点だった。100万人の夥しい犠牲の記憶のために必要とされたのは、折りを超えた、理性の表象だったのである。

ペロンヌ第一次世界大戦ヒストリアル 「ヒストリアル」と呼ばれる戦争博物館

太田浩史

Historial de la Grande Guerre À Péronne
architect: Henri Ciriani
AA: 9209



ふたつの見る膨らみ ふたつの
傷跡の縫い目
ここにも
顔を横切って

ひとつの光 お前の最初の
焰から尋ね出されて
もうずっと 外に
見つけられたものの中に
するりと入り込む

パウル・ツェラン「ふたつの見る膨らみ」

自らの経験としても、また目撃者としても立ち会うことのなかった出来事の記憶、否応もなく我々を拘束するような記憶を前に、その義務と技法において「私」はどう受け取るべきか。そしてどうすれば受け取ることができるのか。例のあまりない今回のテーマに対しては、そこにみられる「記憶する」という特異な行為について記すことにしたい。

オーストリアのユダヤ系詩人である、パウル・ツェランの詩は、極限の恐怖という内的体験の記憶を外的な事象の形姿と動きによって語ろうとする。ここでは事実に対する距離、過去に対する距離が不思議なまでに払拭されている。詩の内容に目を転じれば、引用された文あるいは話が、途中で中断されてしまったり、ひとつの詩の中で文が、句が、互いに対立していたりする。また個々の詩が互いを評釈しあうものとして捉えられるようなことさえある。だが、それは注意深く言葉を切断してヴォイドを用意し、意味を産出する微分素をプレテクストとも言うべき空間の中で、リリカルに、かつドライに、口に

しないことによって語りかけようとする彼の技法と言えよう。

ポーランド出身の建築家、ダニエル・リベスキンドによるベルリン博物館増築棟（ユダヤ博物館）が現在建設中である。全体構成を示すドローイングには、地下に埋伏されたユダヤ博物館、既存博物館に対する増築博物館、そして全体を貫通するヴォイドの3つの要素が描かれている。異様なその形態は、まっすぐだが切れ切れに分断されたラインと、曲がりくねりながらも無限へと続く2本のラインによる平面構成によって成立している。そこにはひとつの構図が読み込めよう。弁証法における時間軸モデルである。それはユダヤ人とそうでない者との間に引き起こる様々な相反する事実に対して、また両者の惨事に対する重荷の相互交換が困難な現実に向けられている。そして注意すべきなのは、しかしながら、止揚として位置する場がヴォイドとなっていることである。さらに構成について加えれば、両者に共通な事実——ユダヤ博物館スペースはその地下に設けられている。（虐殺という事実に対する）無意識の告白不可能な羞恥状態においては、その精神構造として地下墳墓がモデルとされるが、増築棟に設けられたヴォイドには、隠されたその墳墓を、ピーピング（のぞき見）させる構図が仕組まれているように思われる。こうしたヴォイドによる不安定な構築は、主体に慎重に揺さぶりをかけ、内と外を反転し、あらゆるものを相対化させる。そこでは、事象に対する距離が限りなく（ゼロ）に漸近する空間が出現する。

また、セマンティックに捉えるならば、上述のヴォイドはベルリンの歴史を横切るユダヤの不在の歴

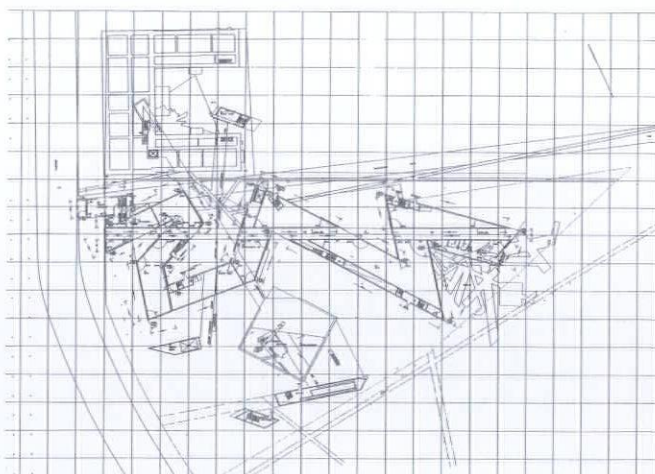
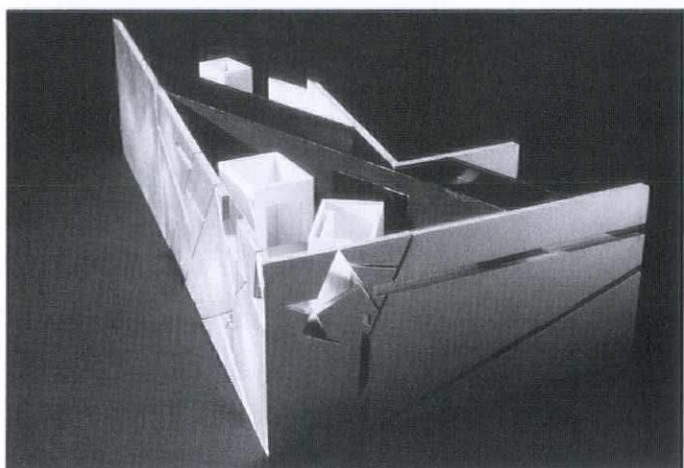
史であり、またホロコーストの巨大な空白という意味をまさにリテラルな空虚として、圧倒的な無の空間として扱っていると言えるが、注目したいはそのテキスト性そのものではなく、そこにおいて単一的な意味作用の流れを中断させてしまう仕掛けにある。それは無数に配された複雑な弾道という、もうひとつのヴォイドである。このヴォイドは主体に限りなく近いところから、マスを貫通し壁を切り裂き剥離させる。その開口部から不意に入り込む複雑な光は、一切を眩い断片に粉碎するであろう。それはテキスト空間における意味生成のプロセスのあちらこちらに、自ら傷跡をつける行為であるといえる。そして、その傷跡に全てが入り込んでくる。

記憶はものではない。少なくとも、その対象化と蓄積がそのまま記憶とはなり得ない。ものやひとに記憶は宿る。だが、どんな世代も記憶を持つことはできない。「ひとが記憶を所有するのではなく、記憶がひとを所有し、ひとに取り憑くのだ」と鶴岡哲は指摘する。記憶を与えることは、したがって、持たない「もの」を与えることである。記憶のあらゆる偽造の可能性も、そしてまた、その思いがけない限界も、どちらもこの逆説のうちに確かに書き込まれているように思われる。ただ、芸術や建築が、現前する事実に対してイマジネーションをそのプロセスにいまだ留保させていると信じるならば、テキストの世界を創造的に探検する「詩」という行為に、われわれはあの惨事から遺贈された記憶を繋ぎ止めることができるのかもしれない。

ユダヤ博物館 ヴォイドの中の記憶

和田克明

Jewish Museum with The Berlin Museum
architect: Daniel Libeskind
a+u9202



1階平面図

戦争は美しいといったのはマリネッティだが、ある建築家は戦争を記憶するための建築は美しくあってはならないという。戦争は勝者と敗者という両極を生み出す。勝者の側に立てば、活躍した兵器を美しく陳列する建築、あるいはテクノロジーの最前線にある軍事テクノロジーを表徴する建築が望まれるだろうが、遺族や反戦を唱えるものにとっては、正確に伝達されるべき情報を保護することを最低限、建築に対して要求するだろう。このようにして、ふたつの種類の「戦争を記憶する建築」が存在することになる。しかし、物質的断片や廃虚見本などをソフトとしてだけでなく、ハードとしても建築を構成する要素として扱う手法は両者に共通の常套手段であるといえる。これがこの種の建築の幅を狭くしている悪しき手法のひとつである。残念ながら、物質的世界最後の砦としての建築が不可視のモニュメントに太刀打ちできないでいる現場に、われわれは幾度となく出会ってきた。他方で、建物の外観の彫刻的可視性を重視することが様々な誤解を生むことがあることも知っている。完結したシンボリズムを取り出した建築は当然のごとくその意味を問われるが、多くを語れば語るほど、シンボリズムの意味は希薄となり、存在根拠すら怪しくなるといふジレンマを抱え持つ。そこで実体ではなく、投光器や音響装置、レーザー光などの非物質に頼ろうとしてしまうのだ

が、博物館が数十年単位で恒久的に存続するものである以上、建築の実体を持たざるを得ないことは確かである。ポール・ヴィリリオは、第2次大戦後の戦争博物館はトーチカや城の主棟の様に、建築内部を暗箱にしたまま外部の状況のみを把握すべく設計されているという。最も博物館らしい博物館が戦争博物館であるというわけだ。とは言え、暗箱さえあれば良いのだろうか。そんな状況の中でワシントンのホロコーストミュージアムは戦争博物館の可能性を考える上で極めて示唆的な提案を見せてくれる。

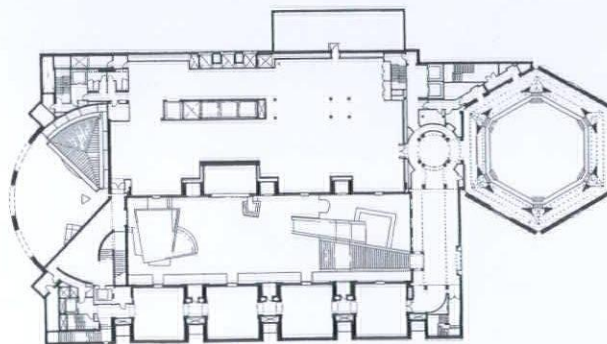
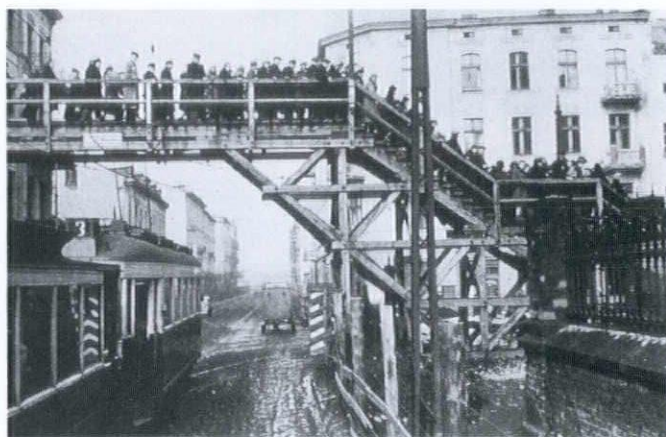
「証人のホール」と題されるアトリウムは土木的建造物のヴォキャブラリーとスケールで成り立っている。外部的仕上げの煉瓦壁、それに囲まれた4つの小部屋、幅の広いパースの強調された階段、それらを包み込むガラスのトップライトなどの要素が5層分の吹き抜けの中にパッケージされている。それらの背景を知らないものからみれば、どこかの駅のコンコースなどを想像させる。その背景とは先に悪しき常套手段であるとした手法である。例えば、空間を横断する橋は、人々をユダヤ的なウィルスから保護するため、としてワルシャワ・ゲットーにつくられた橋を連想させる。あるいはアウシュビッツのガス室を覆っていた煉瓦は爆発を防ぐために鉄骨で補強されていたのが、このアトリウムはまさに煉瓦と鉄でできている。それでもメタファーの「もと」

自体が具体的であるためにメタファーの強度は弱められ、悪しき手法が影を潜め、かえってそれが好結果を生んでいる。メタファーを解釈しようとする単純には答えに到達できないようになっているのだ。重要なのは一元的な解釈に陥らないことであり、一度体験すれば良いというようなテーマパーク的な仕掛けが一切ないということだ。ソフトが伝えることに対してアシストもディフェンスもしない。かといってそれがそっけない均質空間であるわけでもない。戦争を記憶するものを内包する建築は駅のコンコースをつくるやり方を参照すると良いだろう。びかびかの新材などを使うのではなく、逆に古っぽく見せるためにウェザリングを施すようなこともせず、あるいは物質的断片を装飾的に使うことで逃げるのでもない。正直で、冷静で、多義的な建築だ。建築家は虚構であることを建築で表すことは得意であり、日常的なスケール感から解放することなどして現実との不連続な関係を作り上げることはむしろ容易である。戦争が現実であり、それらを日常のなかに滑り込ませることができればよいのであるが、不特定多数の人間が体験するということと併せて考えると、公共の建築土木的な作り方を慣用することで理想的な戦争博物館に近づくことができそうだ。設計者のフリードはこの施設が教育施設であり、祀るための施設ではないことを第一に考えたようだ。

ホロコースト・メモリアル・ミュージアム 記憶する建築

新井大介

Holocaust Memorial Museum
Architect: James Ingo Freed
PA9302



「戦争を記憶する建築」の実現には明らかにいくつかの困難が付きまとう。前提としてまず、そこではそもそも想像を超えた恐怖、回収不可能なものがあえて何らかのかたちで（直喩であれ、暗喩であれ）表象されなくてはならない、という逆説的な問題がある。またさらに、もし仮に何らかの具体的な方法で空間が姿を現すことができたとしても、建築そのものが根源的に手で触って知覚できる「もの」からなる以上、様々な「解釈」が二義的にどんどん付加してくるので、設計者の意図とはまるで無関係なところで享受者／建築の利用者に不正確にその意味が伝わりかねない、ということもある。なまじ深刻なテーマだけにこのことについては慎重にならざるを得ない。

表象不可能なものをそれでも表象しなければならぬ、という問題に対する比較的単純な反応に、何らかの解釈なりテーマを、建築家が「設定する」という解決方法がひとつあるだろう。エルサレムの「破壊された共同体の谷」のモニュメント（L.ヤハロフ他、1993年）では、表面に失われた3500のコミュニティの名前が彫られた遺跡のように巨大な岩石が群れをなして一種の迷路的な空間を作っていたり、同じくイスラエルのホロコースト博物館のアネックス（R.カルミ、1993年）では展示空間が螺旋状に下に延びていき、これは「逃れることのできない渦」というように説明される。こうした例——直接的であれ、間接的であれ、戦争に対する設計者の「解釈」を介入させて空間をつくることで何とかして過去の思わしい記憶を表象しようとするもの——は、切り口がシャープであれば成功し得るが、すぐさまキッチンで陳腐なものに陥る危険性もある。

より知的でスマートに見える無難な解決法は、ミ

ニマリズムを援用することによる形態の多義性を「控え目に」主張しながら、空間に解釈の幅を与えることである。これは冒頭の「もの」の多義性を逆にうまく使っていると言える。もう各々の「もの」についてひとつの解釈をおしつけることはしないのだと割り切り、「もの」自体の解釈の喚起力だけを準備して、それ以上は来訪者に委ねる、というやり方。それとうまく合致するのはシンプルな形態である。ボストンの〈ニューイングランド・ホロコースト・メモリアル〉（S.サイトヴィッツ他、1991年、このプロジェクトはカーンの「600万のユダヤ人の殉教者」計画を参照している）では、炉の上に6本のガラスの塔が立ち、そのかすかに揺れる焰の上を来訪者が歩けるようになっている。パリの「追放のメモリアル」（G.H.バングッソン、1962年）は「無名囚人の墓」と名付けられた地下に埋まった細長いクリプトを持っている。こうした例においては、しばしばミニマルな空間を前面に押し出しながら、それにさりげない注釈がつけられることでより作品を知的に見せる戦略がとられる。サイトヴィッツは自分のタワーの姿が、特に夜景においてはユダヤ人の伝統的な儀式的時に使う蠟燭のように見える、と説明しているし、バングッソンの地下室の壁にはめ込まれた無数の石英の小石は、ユダヤ人が墓の上に小さな石を並べる慣習のほめめかしであるという。シンプルな形態により解釈に幅を与えながら「最後の一言」で急速に意味を一点に収束させもするこの「知性」は、確かにスマートだが、果たして本当に「根源的な」姿勢と言えるのだろうか？

このふたつ、「表象する」と決めて何らかのストーリーを「つくりあげ」てそれを洗練させていくか、あるいは意味ありげな単純な空間をまず最初につく

り、取り方によっては「そのようにも見える」という一言を添えるか、というのは多かれ少なかれ「メモリアル」な博物館やモニュメントをつくるのに収斂しがちな大きな選択肢のふたつではある。これが太分うがった問題構成であるのは間違いない。がしかし、結局のところ我々がこうした2択から逃れられないのは、我々が自明なものとして受け入れている記憶を「固定化」しようとする姿勢そのものに根がある、という指摘もまた正しい。過去の回収不可能性を克服しようとするこの「固定化」の方向に立つ以上、それは漸進的にゼロに近づくことはあっても、決してゼロにはならない（回収できない）。恐らくここまで来て最も強烈なやり方は、ビルケナウ（ブジェジンカ——アウシュビッツの第2収容所）のようなものだ。そこでは当時のままの収容所があまりにぶっさらばうにそのまま残されている。

ここがすぐそばのオシフィエンチム（アウシュビッツ）よりもさらに強烈なのは、あまりに絶望的な収容室のバラック、ナチが敗戦時に爆破していったガス室の瓦礫、囚人を能率よく「運搬する」ための鉄道の引き込み線といった道具立てもそうだが、何よりもそれらがあまりに率直に放置され、何ら保存のための努力が払われていない（ように見える）からなのだ。あたかも自身が戦争の忘却の現場に立たされているかのような感じ。ここは過去の「固定化」とはあまりに無縁だ。戦争の記憶は、あるいはひょっとすると、アーレントの言う「忘却の穴」が垣間見えた時、すなわちその建物が「残っている」ことよりもそれが「残らなかったかもしれない」ことに気付いたときに、より強く呼び覚まされるものなのかもしれない。

メモリアル・モニュメント

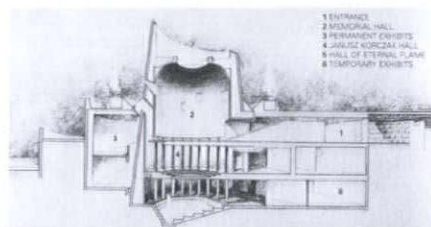
忘却の現場

松原弘典

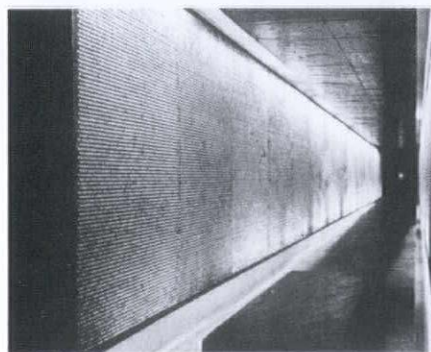
破壊された共同体の谷のモニュメント（L.ヤハロフ設計）——①
ホロコースト博物館アネックス（R.カルミ設計）——②
ニューイングランド・ホロコースト・メモリアル（S.サイトヴィッツ設計）——③
追放のメモリアル（G.H.バングッソン設計）——④
PA9302
ビルケナウ、ナチに破壊されたガス室（写真＝松原弘典）——⑤



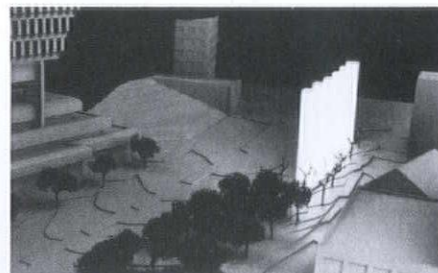
①



②



④



③



⑤

戦争を記憶する建築に関する議論は大きく分けて次のふたつに集約されるだろう。すなわち、「戦争」を「物理的な建物＝カタチ」として記述する方法について。もうひとつはその展示内容について。

前者に関して、私の意見をいきなりぶちまけてしまうと、「戦争」を物理的な建築として「記憶」することなど不可能である（たとえてきたとしても、それは非常に私的な作業として個人に依存して記述されるにすぎない。つまり、意図的に記述された「戦争」というカタチを、その意図通りに見る者が受け取るには限らない）。後者に関していうと、何よりもまず、それが展示されているものである限り、決して自分の問題としては捉えられない、ということに注視すべきだ（テレビで報道された阪神大震災のインパクトとそれを忘却していくスピードに、「あれっ、こんなんではなかったのに……」などと感じている人も少なくないはずだ）。

ここでは「戦争」を他人事ではなく、より自分自身の問題として考えるために、自らの出発点として「戦争」を捉え直してみよう。実際、現在の日本の諸都市をほぼ現実には覆い尽くしている近代建築的な建造物の成立の根底には、戦災による白紙状態がある。つまり戦争の記憶とは、戦争を直接体験していない世代にとっても決して無関係なことではない。直接それを体験することこそできないが、現在のあなたの便利な生活の出発点には、戦争の記憶が白紙

状態として記述されているのだ。

下の写真はサヴォア邸（1929年竣工）であるが、近代建築の非装飾性といった、コルビュジエによる近代建築のプロパガンダとは裏腹に、サヴォア邸は実に「厚化粧」な建築である事が見てとれる。実際、RC造だと信じ込んでいたサヴォア邸の白く平滑な壁面が、実は予算的な理由から煉瓦造にプラスターを塗ったものだと知って、少なからぬ衝撃を受けた輩も少なくないはずだ。だが、この写真のもつインパクトはそれだけに起因するのではない。なぜか。それはこの写真と共に現在のサヴォア邸を見比べると、竣工当時のそれとは全く別の意味が読み取れるからだ。

サヴォア邸はいまでもなく、郊外住宅として設計された建物であるが、実際に「住宅」として使用された期間は30年代初頭のごくわずかな期間だけである。大戦中の空爆によって傷ついたサヴォア邸は、ナチスによって「納屋」として屈辱的に占拠され、戦後は補修されないまま、長らく「廃墟」さながらの状態に放置されていた。その後60年代に入り、ようやく高まった近代建築保存の気運によって、完璧に修復され現在の姿となる。傍点の意味は、竣工当初、1階部分はグリーン、頂部の曲面はピンクとブルーに塗られていたのに対し、すべて「白」で塗り込められたからだ。結果として、現在は誰も住むことなく、文字通り「モニュメント」としてのみ保存

されている。だが、サヴォア邸は一体何を記念しているのだろうか。

それは、確かに建築史上では近代建築のモニュメントであるが、この写真とともにあなたがそこに読み取るべきなのは、そのやたらと白い壁面に（プラスターで！）塗り込められた戦争の記憶である。

これは何もサヴォア邸に限らず、戦禍を受けた後、「白」く（これが重要！つまり、まるで何事もなかったかのように）修復され現存する建築には、共通していることだ。例えば、ヒトラーが、当時画期的であったガラスのカーテンウォールを閉校と同時に煉瓦壁に替えてしまったデッサウのパウハウス（1926年竣工）なども良い例だろう。

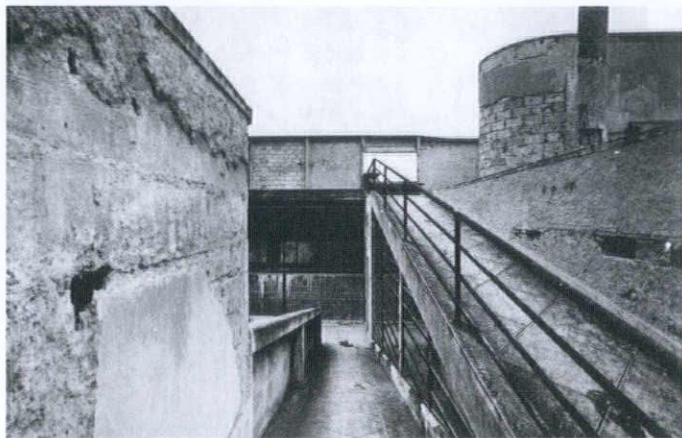
このことは、被爆した広島から、「広島派」と呼ばれる白く透明な建築が生まれていることや、戦争博物館や平和祈念館といった建物が、戦争のもつ残虐で陰惨なイメージとは裏腹に、その多くが静寂で、「白」い表現形態をとることと通じているのかもしれない。

「戦争」を直接展示してしまうことは容易い。だが、そこには常にゆがめられた解釈と、他人事であるが故の忘却の危険が潜んでいることを忘れてはならない。白紙状態に隠蔽された過去を読み解くことこそ、自分自身の問題として戦争を記憶することである。

ビルディングタイプではなく、概念操作による戦争博物館 白い廃墟

奥田真也

Villa Savoy
architect: Le Corbusier
The Le Corbusier Archive7, Garland Publishing Inc. and
Foundation 1984
BAUHAUS
Hans M.Winger, MIT Press 1987



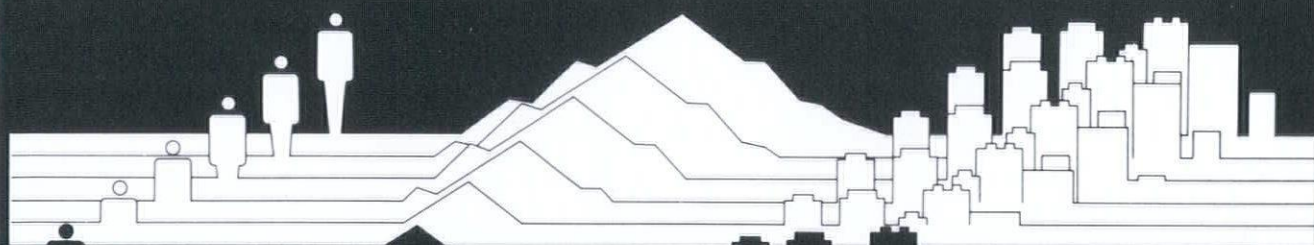
サヴォア邸



パウハウス

SANKI

人を育む。自然を守る。産業を支える。
三機のエンジニアリング技術は多彩。



人間活動のすべてを支える社会環境を一体化させ、
そして調和させようとする三機の総合エンジニアリング技術。

快適で機能的な都市生活、
合理的で先進的な産業活動、そして、それをとりまく自然。

三機は、これらを単独ではなく、
総合技術を通して見つめ、有機的なひとつの流れを実現しようとしています。

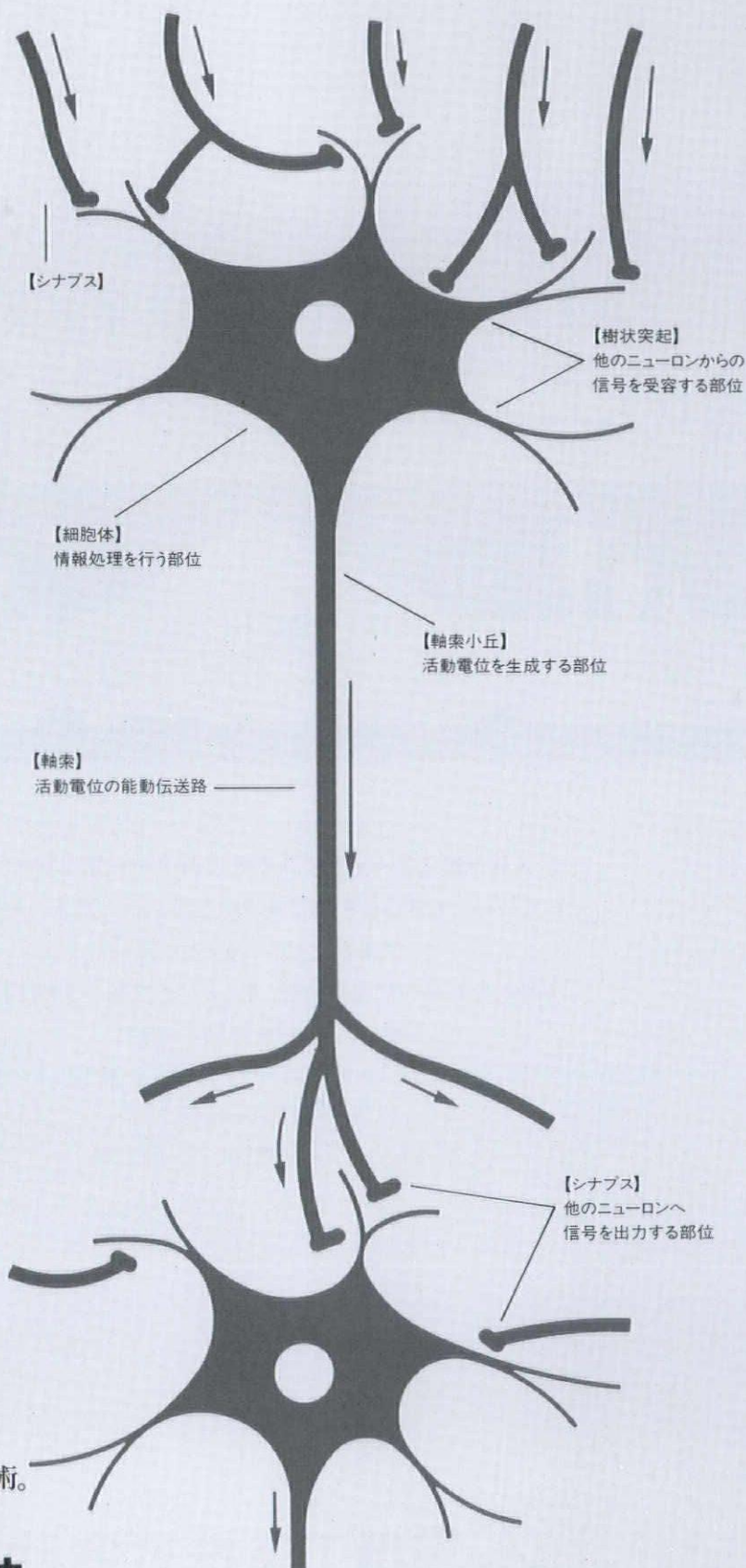
多彩な技術を結び、
新たなシステムを展開している三機。



三機工業株式会社

本店 東京・日比谷・三信ビル TEL.(3502)6111
支店 北海道・東北・北関東・東関東・横浜・名古屋・北陸・大阪・
神戸・四国・中国・九州

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



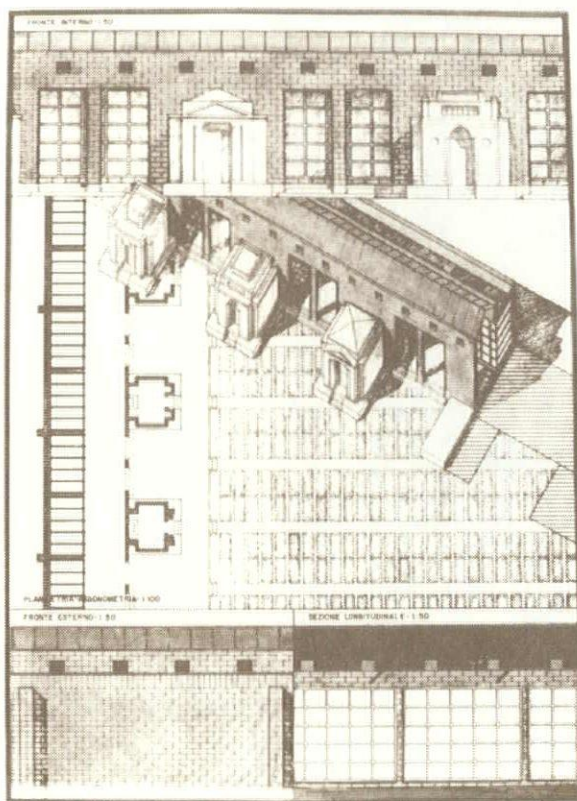
私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマに込めるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-35562135

時代の呼吸に応える技術。



東熱



フランシアの墓地／マリノ・ナボッツィ

9602

特集

建築のメモリア——イタリア合理主義の流れ

今世紀前半に、リベラやテラーニらのアバンギャルドたちによる運動として注目された合理主義建築。しかし、そもそも合理主義建築は18世紀から現在まで、イタリア建築の基調として連綿と流れているものである。それはポストモダンやデコンとも明らかに一線を画し、歴史的文脈からアプローチする手法を通して、現代イタリア建築の一翼を担っている。本特集では、6人の建築家の仕事と思考に触れ、現代におけるイタリアン・ラショナルイズムの流れを考察する。

[建築家]

アントニオ・モネステローリ（ミラノ工科大学教授）、フランコ・ステラ（ヴェネチア建築大学教授）、マリノ・ナルボッツィ（ジェノバ大学教授）、ウンベルト・シオーラ（ナポリ大学教授）、アルドゥイーノ・カンタフォーラ（ローザンヌ工科大学教授）、ニコラ・ディ・バディスタ（建築家）

[論文]

アルド・デ・ボーリ（ジェノバ大学教授）、櫻井義夫（建築家）

新連載

ヤマト・ホテル巡礼——都市とホテルの空間文化誌

ある都市文明が、異なる都市文明との接触を試みるとき、そのための装置としてホテルが重要な役割を果たしている。人・ものが交錯し、その時代の社会と文化を映し出す。この連載では、第二次世界大戦前に日本が中国に展開した5つのヤマト・ホテルを、現地取材した筆者たちが拠点、異国、リゾート、様式も含めて考察しようとするものである。

[筆者]

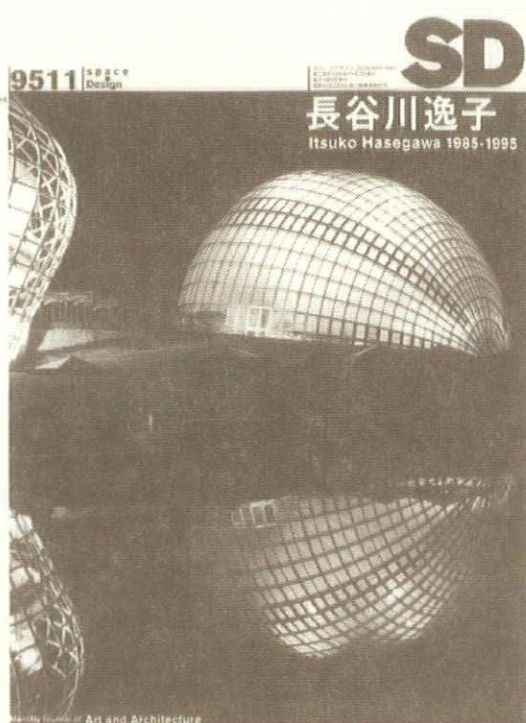
角野幸博（武庫川女子大学教授）、永井良和（関西大学教授）、橋爪紳也（京都精華大学助教授）、竹山聖（京都大学助教授）、毛谷村英治（京都大学助手）、横川公子（武庫川女子大学教授）全6回のリレー連載。

連載：トムの時空形象学4

[文]戸村浩

SD

バックナンバー



9511

特集

長谷川逸子 1985—95

1990年の湘南台文化センター竣工を機に、長谷川逸子の建築は規模も徐々に大きくなり、また公共のものを多く手掛けることとなった。それらの作品には従来の、自立する建築を追求していた時代とは違った、建築の公共性を重視しようという現在の意識が込められている。本特集では、過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介する。

〔作品〕

山梨県フルーツミュージアム、すみだ生涯学習センター、大島町絵本館、氷見市海浜植物園、氷見市立仏生寺小学校、熊本市営託麻団地、フットワークコンピュータセンター、新潟市民文化会館、他全30作品。

〔論文〕ピーター・クック、クリスティーン・ホーレイ、岡河貢、小嶋一浩、長谷川逸子、他

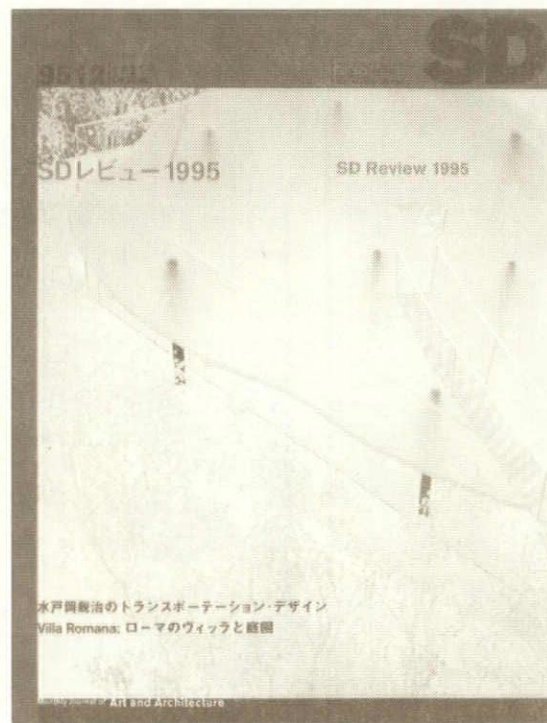
〔対談〕多木浩二×長谷川逸子

〔撮影〕大橋富夫、他

連載：apple tomology トムの時空形象学 2

文＝戸村 浩

特別定価＝3,000円／本体2,913円



9512

特集

SDレビュー1995

SDレビュー1995入選展の結果を、審査員のコメントと共に誌上発表。

〔入選者〕

市原出、遠藤秀平、大林直高（KAJIMA DESIGN）、佐々木聡、佐藤光彦、チー・ティエナン、手塚貴晴＋手塚由比、トム・ヘネガン＋アーキテクチャー・ファクトリー、長坂大、長田直之＋筏真司、中東嘉一、西沢大良、藤本壮介、山口賢＋BEAM STUDIO、由田徹＋岡本美樹、吉田進（大成建設設計本部）

〔審査員〕高橋誠一、坂本一成、内藤廣、妹島和世

水戸岡鋭治のトランスポート・デザイン

1993年、特急「つばめ」の車輛デザインで、国際鉄道デザインコンテスト「ブルネル賞」を受賞し、今春には特急「ソニック883」が完成し注目を集めている。JR九州を舞台に続けられている一連の公共交通の仕事を紹介する。

〔作品〕

特急ソニック883、特急つばめ、高速船ビートル2、高速バスレッドライナー、JR西鹿児島駅舎

Villa romana: ローマのヴィッラと庭園

ローマの都市部・近郊にみるヴィッラと庭園——そこには、自然や神話を主題にした「文学的な空間」がある——を追って。

〔事例〕ヴィッラ・アルバーニ、ドリッパ・バンフィーリ、ヴィッラ・ファルコネリ、ヴィッラ・メディチ、他。

〔文＋写真〕長谷川正允

連載：トムの時空形象学 3

〔文〕戸村 浩

定価＝1,950円／本体1,893円



新刊

サントリーミュージアム天保山

大阪・天保山に昨年完成した安藤忠雄設計のサントリーミュージアムの全貌を余すところなく伝える建築の書。

三宅理一の書き下ろし論文、項目別の簡潔な解説文、大橋富夫による多数の写真、スケッチ、そして新たに描き起こされた詳細図などによって、大胆な構想、精緻な設計、様々な建築技術が明らかにされている。

ひとつの作品を通して、建築家安藤忠雄の全てに迫る。

安藤忠雄・三宅理一 共著

A5版

80頁

定価1950円





不朽の名著

堀口捨己著作集〈全8巻〉

刊行委員 50音順

稲垣栄三、内田祥哉、木村徳国、神代雄一郎、平良敬一、高橋純一、中村昌生、早川正夫

堀口捨己博士が、大正9年、分離派建築会をおこして世に出られてからの設計・著作活動は、まことに濃厚なエネルギーと鮮烈な姿勢によって貫かれております。

堀口博士の建築作品は芸術院賞や学会賞に輝き、またその著作は毎日出版文化賞、北村透谷文学賞、学会賞を受けられています。

著作集は先生自ら企画・装丁され完結までに10余年の歳月を要し、堀口先生の研究成果の集大成となった我が国唯一の堀口捨己著作集です。

庭と空間構成の伝統 (縮刷版)

B5変・318頁
¥20,600

庭の意義、庭のあり方、庭の生いたち、庭作りの伝え書きなど、日本古来の伝統を解明し、写真を通してその空間構成の伝統を追求する名著。

堀口捨己作品・ 家と庭の空間構成 (縮刷版)

B5変・266頁
¥16,480

書名の示す通り「自然を入れた庭と建築の連り」という一貫した設計思想を背景とした作品の集大成である。

利休の茶室 (復刻版)

A5・714頁
¥18,540

文章家として歌人として、また建築家としても一流である著者が、コクのある文章と史実に基づく数多くの資料や図版・写真を挿入しつつ、利休の茶室の真髄を解明する名著。

建築論叢

A5・554頁
¥13,390

1.現代オランダ建築、2.現代建築に表われた日本趣味について、3.建築における日本的なもの、4.信長茶会記、5.桂離宮、の5編を収め、とくに1、5は約200頁の写真を付す。

茶室研究 (復刻版)

A5・876頁
¥23,690

利休の茶を受けついだ人たちの茶室をまとめたもの。利休が作った茶室を更に進めた江戸時代の秀れた人たちのもので、利休の弟子の織田有楽の如庵から尾形光琳の遼廊亭などまで、国宝や重文を主として調べた成果。

書院造りと 数奇屋造りの研究

A5・614頁
¥18,540

書院造りと数奇屋造りについて永年にわたる研究の成果。(一)書院造りと数奇屋造りについて (二)君台観左右帳記の建築的研究 (三)君台観左右帳記の異本校注 (四)洛中洛外屏風の建築的研究

利休の茶 (復刻版)

A5・782頁
¥18,540

茶の湯のもつ深みと広がりに基づきそれを知り究めようとする。昭和16年北村透谷文学賞をうけた論文をもとに今回加筆された。利休の茶の真髄を探る名著。

堀口捨己歌集

A5・558頁
¥13,390

建築・庭の大家として知られる著者には、歌会始の召人に選ばれたほどの歌人としての一面がある。自選の和歌800首と珠玉のような随筆5点に、自作の絵・茶杓の写真等13点を配し、年代順に編集されたユニークな歌集。

【関連書】

堀口捨己 〈現代の建築家〉

SD(スペースデザイン)82年1月号の堀口捨己特集をハードカバーとした保存版です。堀口先生の作品・著作を理解するための格好の入門書となっております。

SD編集部編
A4変・176頁
¥3,300



鹿島出版会 107 東京都港区赤坂6-5-13
TEL (03) 5561-2551 FAX (03) 5561-2561

物語／ものの建築史 門のはなし

山田幸一監修 佐藤 理著 四六・128頁 ¥1,339

古来から、日本建築における門は、その建物の風貌であり顔立ちである。その形には様々な機能のほかに、格式などの隠された意味があった。こうした門の歴史をひもとき、社寺や離宮の門を中心に形と意味を解説する。

〈物語・ものの建築史〉シリーズ

山田幸一監修

本シリーズは、日本建築の各部位や材料のルーツ・変遷をありのまま記述するものである。記述対象の評価が定まっているだけに、その中から今後の日本の建築のあり方を探るよすがの1つでも見いだすことができればより幸いで、内容も極力この方法でまとめている。

畳のはなし

佐藤 理著 四六・128頁 ¥1,339

日本壁のはなし

山田幸一著 四六・120頁 ¥1,339

建具のはなし

高橋康夫著 四六・128頁 ¥1,339

風呂のはなし

大場 修著 四六・128頁 ¥1,339

台所のはなし

高橋昭子、馬場昌子共著 四六・128頁 ¥1,339

便所のはなし

谷 直樹、遠州敦子共著 四六・128頁 ¥1,339

窓のはなし

日向 進著 四六・128頁 ¥1,339

床の間のはなし

前 久夫著 四六・128頁 ¥1,339

屋根のはなし

石田潤一郎著 四六・128頁 ¥1,339

和瓦のはなし

藤原 勉、渡辺 宏共著 四六・128頁 ¥1,339

住み続けるための新まちづくり手法

佐藤 滋＋新まちづくり研究会著 A5・250頁 ¥3,296

バブルの地価高騰は家賃値上と相続税の支払不能を誘起した。都市では家を借りるのも生家に住み続けるのも難しい現在、それを乗り越え“まちに住む”を実現した地区があった。まちに住み続けたい人必読の実録&手引書。

[SDライブラリー] 20

建築と非建築のはざままで

ロバート・ハーピソン著 浜田邦裕訳
A5判・208頁 定価3,193円

本書は、建築を分析していくための新しいシンタックスを「建築の意図性」「虚構性」に見いだそうという視点から建築を語る建築論である。庭園、モニュメント、要塞、廃墟、絵画空間、イマジナリーな建築に言及する。

かたちに見る造形の構成

イメージ・ジェネレーターの展開

島田良一編著 B5判・146頁 定価3,502円

造形のイメージを発想し、三次元で展開した造形教育の教材として編集。素材の基礎形態のシステム化、形の連続・断片的活用を、コンピュータ・グラフィックス処理し、建築の部分・全体・パターン考案の補助手段にて解説。

都市と建築の解剖学

形態分析によって[設計戦略]を読む

ジェフリー・ベイカー著 富岡義人訳 B5判・296頁 定価5,974円

歴史的な町並や集落の成立を探り、また現代建築の巨匠であるアルト、マイヤー、スターリングの作品の設計過程を分析する豊富なイラストによって構成された本書は、建築を学ぶものにとって貴重なテキストである。

ハイテック・コンストラクション3

スーパーシェッズ

大空間のデザインと構成

クリス・ウィルキンソン著 難波和彦・佐々木睦朗監訳
B5判・144頁 定価4,635円

本書は大架構建築の歴史と今後の可能性について、具体的な事例を中心にまとめており、単に技術的な視点からだけでなく建築的視点からも論じている点が特異である。19世紀の博覧会展示場、鉄道駅舎、工場などからはじまり、最近の空港、競技場、展示場にいたるまで、多種多様な大架構建築の事例を機能別に分類し、それぞれについて過去から現在までの歴史の変遷をコンパクトにまとめている。写真・図版多数。

インテリアデザイナーのための

住宅設備設計の知識

石崎清士著 四六判・182頁 定価2,266円

技術開発の著しい住宅設備の設計について、インテリアデザイナー向けに解説。コンセントやスイッチの配置、空調や照明、給排水設備の留意点、さらにマンション等に設置されるホームオートメーションなどにも言及。

人気急上昇

月刊

ダルトンレポート

予約申込殺到!!

年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません

DALTON REPORT

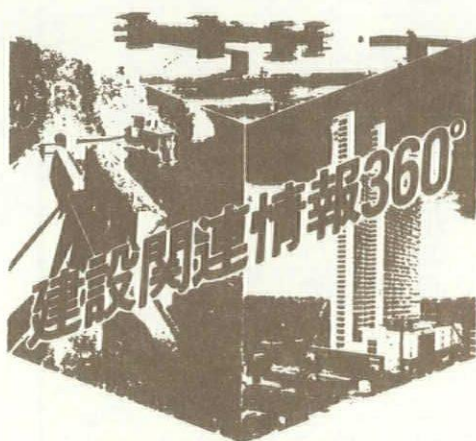
9512号 目次

●特集●'95建設業界10大ニュース

- わいどあぐる ●急速に普及—「抗菌」商品・グッズが女性に大モテ／不動産不況—「礼金」不要の物件が急増
- 霞が関ホットライン ●専門工事業者に評価制度／建設業界に時短指針／ローアリミット廃止
- 阪神復興 ●復興住宅部品の標準図書作成／「住宅用地情報あれば知らせて」
- 列島を拓く ●大阪・舞洲—夢洲連絡橋、年度末にも設計委託／埼玉・東川改修に二層河川構想
- 学会・協会・業界 ●「現場」と「経験」を7割が重視／7割を超える企業が競争激化懸念
- コンピュータ ●ワープロ感覚で電気設備積算／上下水道業者向けに書類作成ソフト
- こんな方法考えました ●下降式垂直コンベヤーシステムを開発／社内研修は映画製作から
- こんなモノつくりました ●霞ヶ浦のヘドロから軽量骨材／シールドマシン軌道上の障害物を検知
- ハウジング ●節約！木くずで内装材／50年間、建替え不要

▶ 今月の「拾出し」 ◀ ISO9000シリーズ認証申請ラッシュ

●用語・語録 ● ISO (国際標準化機構)



建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

- 忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
- これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

購読のお申し込みは今すぐに！
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。
申込書用紙をきりと、もれなくご記入のうえ、ハガキに
全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先

〒107 東京都港区赤坂6-5-13

(株)鹿島出版会 情報システム事業部

ダルトンレポート読者係 ☎(03)5561-2553

- 定期購読料 1年購読(12冊) 4,900円(税込)
- (送料共) 3年購読(36冊) 9,800円(税込)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の
郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。

□新規購読申込

SD

フリガナ
お名前

ご自宅 〒
住所

お勤め先

(職種)

該当の
ものに
○印を

ご専門

ご担当

建築 土木 機械 電気 事務 ほか

設計 施工 管理 営業 経理 ほか

購読期間(☑印をつけてください)

☐ 1年

☐ 3年



9409 Ideas and Approaches to Architecture and the City: A New U.S. East Coast Movement; Introduces 11 architects. B. Shirdel / J. Kipnis, Michael Sorkin Studio, S. de Martino, A. Wall, RAAUm, W. Jones, A. Zago, Pollari X Somol, G. Rynn, D. Garofalo, M. Rakatansky. Texts; Tsuyoshi Matsuhata. **Recent Work by TAO ARCHITECTS / Shuntaro Noda:** Photos; Kouji Horiuchi, Text; Youichi Iijima. ¥ 1,950



9410 Torroja's Legacy of Structure and Space: The contemporary meaning of Eduardo Torroja. Works; Madrid Racecourse at Zarzuela, Market at Algeciras, Pont de Suert Church, etc. Discussion; Norihide Imagawa, Keiichi Irie. **Rebirth As a City of the Arts: Gibellina Nuova, Italy:** Urban development and architecture in Italy. Photos, Texts and Interviews; Masaru Miyawaki. ¥ 1,950



9411 Airport Architecture as the Nexus of the City: Featuring Kansai International Airport Passenger Terminal Bldg. And 21 airport terminal buildings in the world; Stansted, Denver, Chicago O'Hare, Stuttgart, San Pablo, King Abdul Aziz in Jeddah, New Seoul Metropolitan, Chek Lap Kok in Hong Kong, etc. Texts; Deyan Sudjic, Paul Andreu, Hiroyoshi Yamada, Noriaki Okabe, etc. ¥ 3,500



9412 SD Review 1994: Featureing SD Review 1994: The 13th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. Text: Naoyuki Takashima, etc. **International Collaboration Project: The Children's Village in Oswiecim:** Architect: Mario Botta, Fumio Maki, etc. **Projet pour La Chapelle de St. Viogor de Mieux par Takubo 2.** ¥ 1,950



9501 Riken Yamamoto: Introducing his works for last 5 years. Ryokuentoshi=Inter-Junction City, Takashimacho Gate of the Yokohama Expo'89, Day Care Center for the Geriatric Patients, Junior High School in Iwadeyama, House in Kamakura, House in Okayama, etc. Text by Riken Yamamoto, tom Heneghan, Motomu Uno. ¥ 3,000



9502 Baroque Architecture in Sicily and Lecce: Features the distinctive Baroque style resulting from the mingling of Roman Baroque and the indigenous ancient Grecian and Hellenistic cultures. Introduces Palazzo Spadaro, etc. Photos: Ichiro Ono. Text: Hirohide Yakeyama, Masanobu Hasegawa, Satoshi Okada. ¥ 1,950



9503 Multi-unit Houseing Today: Introduce architects who have made many multi-unit housing recently and their works. Masahiko Araki: Living Alley, Takao Endo: Higashi-Osaka Yoshita Public Housing Complex, Hidetoshi Ohno: YKK Namerikawa Dormitory, Yuzuru Tominaga: Shinchi Housing-C, Yasumitsu Matsunaga: Project 951, Makoto Motokura: Seikousou. ¥ 1,950



9504 Senes from the Technoscape: Focus some scenes or landscape constructed by industrial facilities, civil engineering structures, etc. Introduce Wind Firm, The Thames Barrier, The Arecibo Observatory, The Kurobe Dam, Shiobara Hydro-Electric Power Station, Kasai Sewage Processing Plant, Trans-Tokyo Bay Highway, Drilling Platform, Japan Microgravity Center, Circular Farm, etc. ¥ 3,000



9405 Mega Architecture: Recent Works of Paul Andreu: Introduces some of Andreu's many monumentalscale buildings, railway stations, sports stadiums, and other works. Feature on **The Creation of the Foreign Settlement in Kobe and Its Development.** ¥ 1,950



9506 The Potential for Using Computers in Architecture: Examines how architecture is being influenced by the use of computers. Architects: Neil Denari, Peter Eisenman, Keiichi Irie, Toyo Ito, Hani Rashid, ARX, Kengo Kuma, Makoto Sei Watanabe, etc.. **Mysterious Design Drawing Exhibition:** T.Ara, F.Enomoto, S.Hisada, N. Iijima, E. Sottsass, S.uchida, etc.. ¥ 1,950



9507 Takahiko Yanagisawa: Art Museum Space and Detail: Features five museums by Takahiko Yanagisawa, who won the competition for the Second National Theater in 1986. Museums introduced: Utsubo Kubota Memorial Museum; Museum of Contemporary Art, Tokyo; Kazumasa Nakagawa Art Museum, Manazuru; Kiriyama City Museum of Art; etc.. ¥ 2,700



9508 Urban Public Spaces: Features small public facilities designed by architects. Architects: Atsushi Kitagawara, Naoko Hirakura, Shuichi Kitamura, Toyo Ito, Waro Kishi, Kazuko Fujie, Atelier Zo, Koichi Nagashima, Mitsuru Senda, etc. **Digital Urban Design: The New Language for Design Cities:** Introduces new methods by Yanagida Ishizuka & Associates. ¥ 1,950



9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates: Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last skyscraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuhari Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥ 3,800



9510 Architecture of Response: Recent Works of Cesar Pelli: Introduces recent works by Pelli built around the world, especially in Asia: NTT Shinjuku Headquarters Building, Sea Hawk Hotel & Resort, Kuala Lumpur City Center, etc. **Tower Art in Tsutenkaku:** Introduces an art and architecture exhibition held at the Tsutenkaku Tower in Osaka. ¥ 1,950



9511 Itsuko Hasegawa: 1985-1995: Introduces 30 works by Hasegawa for 10 years. Works: Museum of Fruit, Yamanashi, Sumida Culture Factory, Ohshima-Machi Picture Book Museum, Footwork Computer Center, House in Kumamoto, Leaf House, Niigata-City Performing Arts Center, etc. Text: Peter Cook, etc. Conversation: Koji Taki and Itsuko Hasegawa ¥ 3,000



9512 SD Review 1995: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Toru yoshida and Miki Okamoto, Ti-Nan Chi, tom Heneghan and The Architecture Factory **Villa Romana:** introduce the villa and the gardens in Rome. **Transportation Design by Eiji Mito'oka:** Design of express train and ship ¥ 1,950

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in _____, 1994

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building, Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoen Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

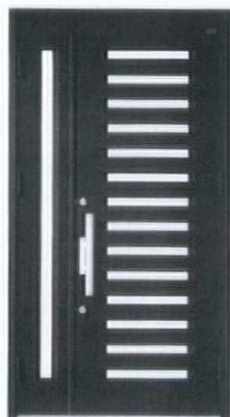
Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

● 玄関ドア

セルウィン2400

● 立山アルミニウム工業株式会社



立山アルミニウム工業株式会社では、住まいに優越の印象を漂わせるデザインと、2,400mmというドア高さをもった高級玄関ドア「セルウィン2400シリーズ」を展開しているが、好評のモダンタイプに加えて、洗練性を高めたクラシックタイプのドアバリエーションを4タイプ新発売した。

特長

- ① ドア高2,400mmの大型玄関ドア。
- ② モダンからクラシックまで、洗練性に満ちたデザインを選べる。
- ③ ドアデザイン4タイプ、子ドア4タイプ、袖パネル4タイプなどを追加、住まいに合わせて選べる多彩なラインナップ。
- ④ ツーロック方式、コンストラクションキー、内蔵ガードロック、3連3バルブ使用のドアクローザーなど、充実した機能を装備。また、磨耗の激しい下枠に耐久性に優れたオールステンレス下枠を標準装備。
- ⑤ カラーは、シックな住まいを彩るブラック・アーバングレー・ホワイトの3色。

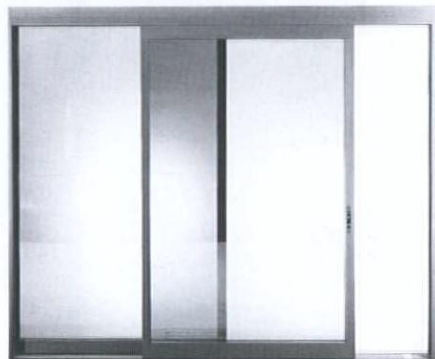
価格（写真タイプ）

505,000円

● 自動ドア

アンダーフラットユニ

● 昭和銅機株式会社



昭和銅機株式会社では、従来のオートドアのイメージを一新した、福祉施設、病院、クリーンルーム専用のドアおよび窓、アンダーフラットユニを新発売した。

特長（出入口ドア専用）

- ① メカを全て框の中（上框）に組入れた自走式のため故障が少ない。
- ② 下部が完全フラット（内部用）で車椅子も楽々通過できる。
- ③ 部品を大幅削減し、コストダウン。
- ④ 特殊なエアータイト機構により音やホコリもシャットアウト。

特長（窓専用）

- ① メカを全て框の中（タテ框）に組入れた自走式のため故障が少ない。（万一故障しても点検が容易である）
- ② 部品を大幅削減し、コストダウン。部品数が少ないので静音。
- ③ 特殊な締め機構で音やホコリもシャットアウト。
- ④ リモコンにより遠隔操作が可能である。

● 工事用高所作業車

橋脚補強工事用高所作業車

● 株式会社レンタルのニッケン



株式会社レンタルのニッケンでは、橋脚の補強工事を専門に行う高所作業車を開発、レンタルを開始した。この作業車は現在、全国で数多く行われている橋脚補強工事専用開発したもので、橋脚に鉄板を取付けコンクリート樹脂などを注入し補強をしていく作業を無足場工事にて行うことができ作業の機械化と工期を大幅に短縮することを可能とした。機種は、同社のオリジナル商品であるX型リフトとZ型リフトを改良し最大積載荷重2,000kgとした2タイプがあり、それぞれに持ち上げ能力500kgのテレスコピックリフトを搭載し鉄板を1枚ずつ持ち上げて、取付け・溶接が可能になっている。2タイプとも橋脚の形状にあわせて4方向型で各方向に4台のテレスコピックリフト（棒リフト）を備えている。また、車両から鉄板を運搬できるクレーンを搭載した作業車も用意し、幅広いニーズに応える。そして、Xリフト型はクローラー式でサイドにスライドする機能を取付け幅寄せを容易にして、作業効率をアップさせた機種であり、Z型リフトはタイヤ式を採用している。以上の問い合わせは、同社お客様相談室0120-14-4141へ。

立山アルミニウム工業株式会社 住宅建材事業部
富山県高岡市早川550番地
〒933 Tel 0766-20-3559

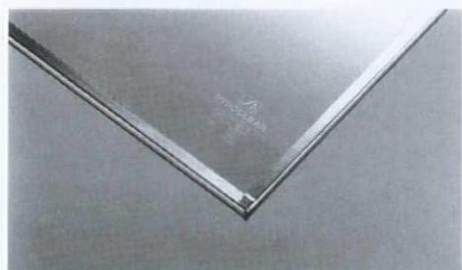
昭和銅機株式会社
東京都板橋区前野町6丁目1番10号
〒174 Tel 03-3969-1101

株式会社レンタルのニッケン
東京都千代田区永田町2丁目14番2号
〒100 Tel 0120-14-4141

● 耐熱強化ガラス

パイロクリア

● 日本板硝子株式会社



日本板硝子株式会社では、新しい網なし防火ガラス、パイロクリアを新発売した。わが国では、建築物の開口部からの延焼を防ぐため、ガラスに金網の入った網入り板硝子が、法的に義務づけられてきたが、外観上の理由から網のない防火ガラスを求める需要も強く、同社では、通常のフロート板硝子に特殊な超強化処理を加えた耐熱ガラスの開発に成功した。

特長

- ①防火性能と網なしの外観に加え、強化ガラスでもあるため、万一破損した場合でも、小さな破片になり、対人体衝突などの日常安全性や、地震時における安全性にも優れている。
- ②超強化処理によって、強度は同じ厚さのフロート板硝子の6倍以上、強化ガラスの約2倍もある。
- ③通常のフロート板硝子と同じ色調をしているので周辺の硝子色と違和感がない。
- ④アルミニウム製乙種防火戸通則認定制度の主構成材料として近々認定される予定であり、これにより通則認定を取得している各社、各種のアルミサッシと組合わせて乙種防火戸として使用できる。

価格

55,000円/㎡

日本板硝子株式会社 東京支店 開拓営業課
東京都港区芝1丁目11番11号
〒105 Tel 03-5443-0132

● エアコン

中温用エアコン

● ダイキン工業株式会社



ダイキン工業株式会社では、食品加工場やスーパーマーケットのバックヤードなどにおいて食品の鮮度維持と作業環境を両立させ、15～30℃の範囲で安定した室温を維持できる中温用エアコンの室内機（天井埋込カセット形、天井吊形）および室外機をフルモデルチェンジし、順次新発売する。

特長

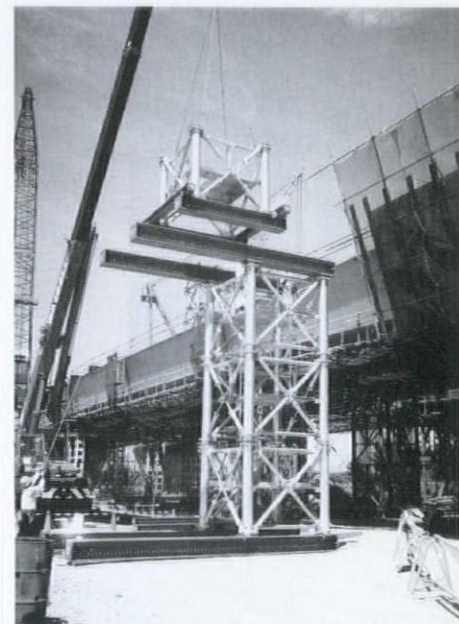
- ①2～10HPの範囲で、天井埋込カセット冷暖形・冷専形、天井吊冷暖形・冷専形の4シリーズ、24機種をフルラインナップした業界トップの品揃え。
- ②冷却能力を高め、静音化と軽量化による業界トップの基本性能を実現した。
- ③通風路に耐油性樹脂（PP：ポリプロピレン）を採用し、耐油性を向上した。
- ④天井埋込カセット形は3種類の風向設定が可能なマルチフロータイプとし、天井吊形は、オートスイングの風向リモート設定機能の追加によりドラフトを大幅に緩和した。
- ⑤設計自由度の大幅アップ。
- ⑥集中管理システム（別売）の充実。

ダイキン工業株式会社 汎用空調生産本部
大阪府堺市金岡町1304番地
〒591 Tel 0722-59-9282

● 支保工

NISSO 3 S SYSTEM
MEGABENTシリーズ

● 日綜産業株式会社



日綜産業株式会社の新製品、NISSO 3 S SYSTEM MEGABENTシリーズとは、伸縮式の斜材を採用することで、折りたたみを可能にした超重量級大型支柱支保工（ベント）システムである。昇降設備と作業床を内蔵し、プレス構造にシリンドラーを採用して、X・Y軸の両方向に強度を均等化することにより、変形荷重などによるねじれがさけられる。このように超重量荷重に対する製品そのものの安全はもちろんのこと、高さのかみ合わせが可能で、その用途も型枠支保工、鋼管製ベント、作業構台など幅広く使用できる。

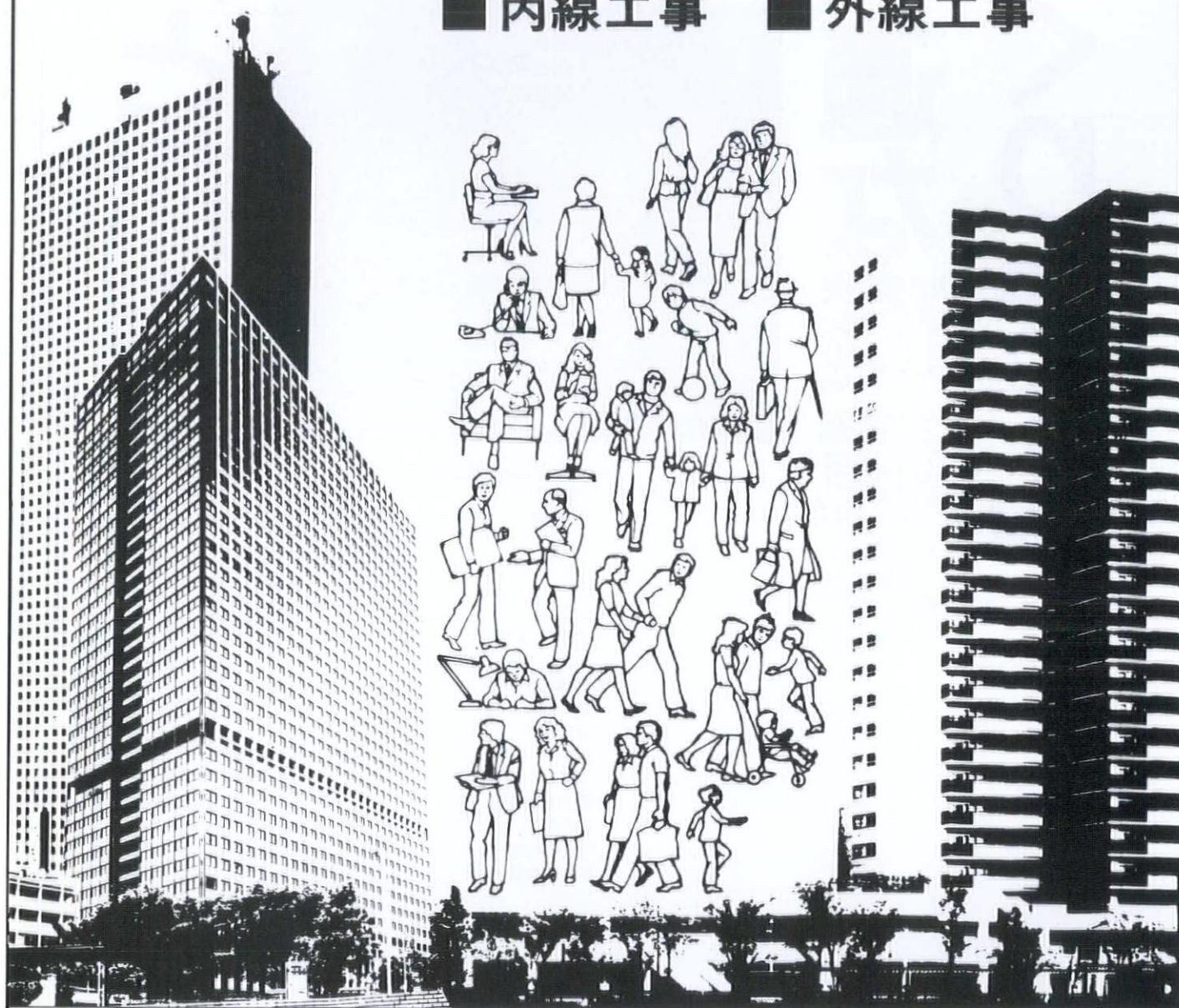
特長

- ①型枠支保工として使用する場合は1柱あたり許容荷重は110TON、鋼管製ベントとして使用する場合は（水平荷重20%との組み合わせ）の1柱あたりの許容荷重は50TON、（ただし高さ・数値で変わる）
- ②内蔵された昇降設備、作業床が、開くと同時に使用できる一体型システムで、作業時の安全を確保する。
- ③ピン構造で折りたたみ式なので、組立て解体が簡単。また、運搬が容易で、保管が効率的にできる。
- ④高さのバリエーション（1m、2m、4m）であらゆる現場に対応。

日綜産業株式会社
千葉県千葉市美浜区中瀬1番3号 B-12
〒261-01 Tel 043-296-2756

技術と伝統の…

■ 内線工事 ■ 外線工事



東光電気工事株式会社

取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1-4-5 千101 電話/東京 3292-2111

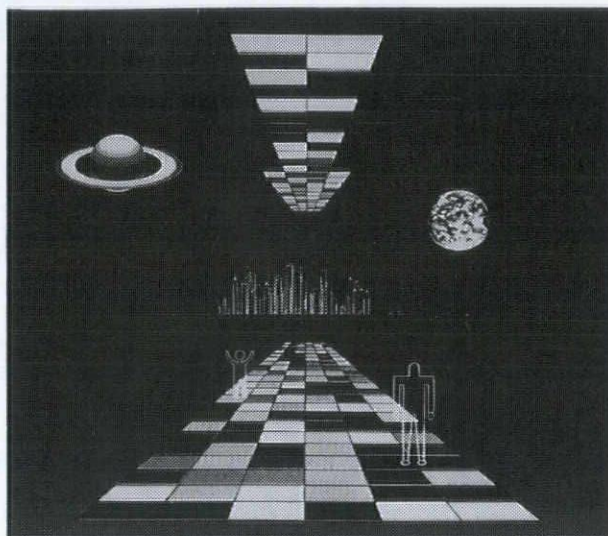
支社所在地/札幌・仙台・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

快適な環境を
つくります。

営業種目 設計・施工・監理

●電気設備

受変電、幹線
動力、制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装



●空調・給排水・衛生設備

空調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム

●プラント

プラント計装
システムエンジニアリング

●情報通信設備

情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム

●電力流通設備

受変電
架空送配電
地中送配電

人と都市の

活力と魅力にあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。

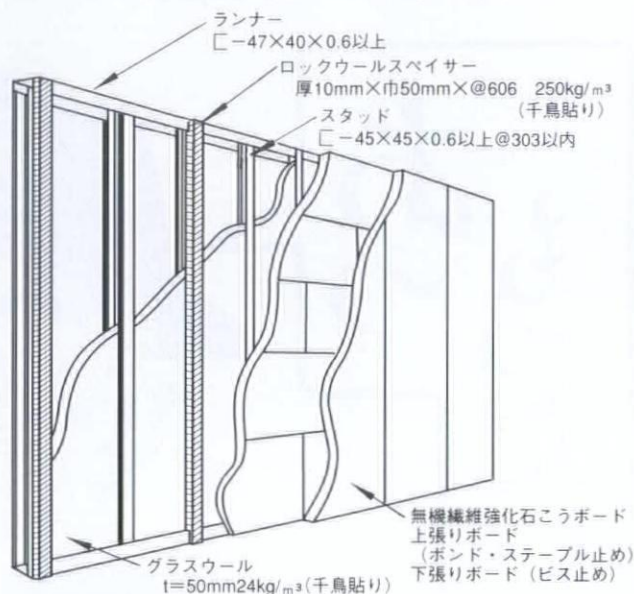
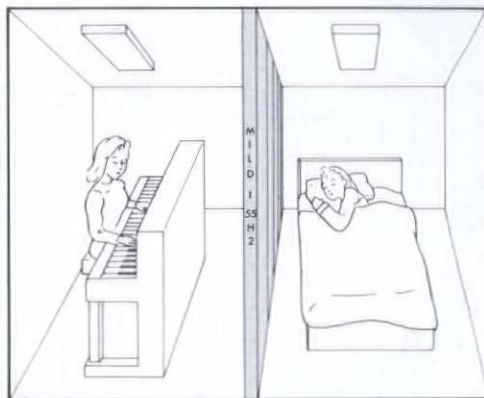


住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06) 537-3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 ☎(03) 3454-7311

遮音等級 D-55 耐火構造 2時間 合格！ マンテン®のハイグレード間仕切壁 MILD-55H2

ホテル・共同住宅・オフィス等において
益々要求される高性能化に応じて、JIS
規格1号特級仕様の高遮音間仕切壁
「MILD-55H2」を開発。
遮音(個)第234号
耐火 W2285



考® 誠意・熱意・創意で生きる
株式会社 **マンテン**®

本社 〒556 大阪市浪速区日本橋東1-10-6 TEL (06) 644-2151(代) FAX (06) 644-2166
東京 〒136 東京都江東区亀戸2-3-17 TEL (03) 3683-6151(代) FAX (03) 3685-8706
札幌 TEL (011) 783-8661(代) FAX (011) 783-8669 横浜 TEL (045) 451-6245(代) FAX (045) 451-6248
名古屋 TEL (052) 661-9511(代) FAX (052) 654-0048 福岡 TEL (092) 611-2180(代) FAX (092) 622-2278
高岡 TEL (0766) 24-5506(代) FAX (0766) 21-3941 台北 TEL (001886) 2-562-3574 FAX (001886) 2-511-5646

N 日章工業株式会社

- 本社 〒101 東京都千代田区内神田3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000
- 大阪支店 〒541 大阪市中央区高麗橋2-4-6 (大正不動産ビル6階) ☎06-201-5704
- 仙台営業所 〒980 仙台市青葉区中央3-2-27 (日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所OAシステム特約店
日立金属フリーアクセス・ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施設商品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備

自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサー
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建材商品

AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア

ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建設商品

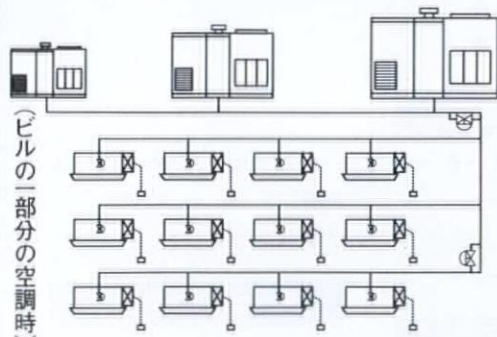
クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

あつ
もつ
たい
ない。



ひと部屋だけの空調に
全てのアロエースが
稼働するのは

必要な台数しか稼働しません。



矢崎のスーパーアロエース、アロエース・タフはともに高効率COP1.02。この高効率をい
かんなく発揮するのが異容量アロエースの組み合わせによる集中設置です。デジタルコン
trolパネル[DCP]のご利用により部分空調時には小さな「アロエース」が運転。建物
全体を空調すれば自動的に全ての「アロエース」が運転、経済性の優れた空調が実現。

20%負荷運転でもCOP1.02を維持。



デジタルコントロール
パネル



スーパーアロエース



アロエース・タフ

矢崎総業株式会社

本社：〒108 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル17F TEL.03-3455-8812
空調機器営業事業部：〒435 静岡県浜松市子安町1370 TEL.0534-61-5112

札幌支社 TEL.011-852-2914 名古屋支社 TEL.052-833-8415 中国支社 TEL.0829-23-2115
仙台支社 TEL.022-284-9115 大阪支社 TEL.06-458-4825 四国支社 TEL.0878-33-3336
東京支社 TEL.03-3298-3140 北陸支社 TEL.0764-41-6516 九州支社 TEL.092-411-4835

広告目次

S D誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命ください (五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX 06 (368) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX 03 (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX 06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8249代

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区岩本町2-5-12

神田ポンビアンビル (3863) 6011代

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

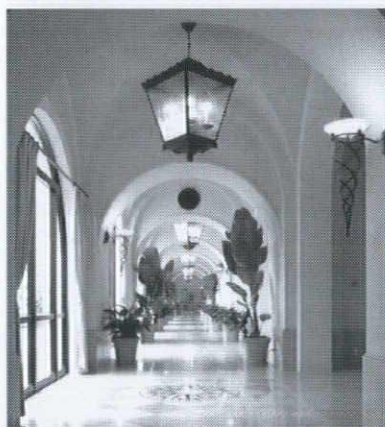
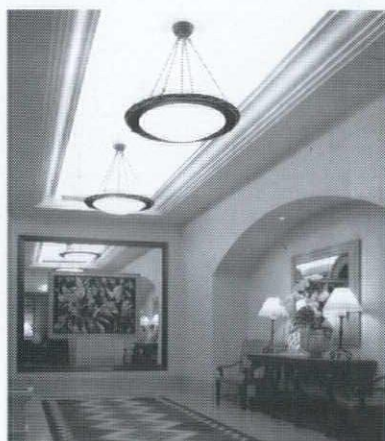
名古屋センタービル052 (221) 7641代

カ	(株)関電工	A1
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
キ	(株)きんでん	A12
コ	(株)弘電社	A10
サ	三和シャッター工業(株)	A3
	三建設備工業(株)	164
	三機工業(株)	175
シ	新日軽(株)	表4
	新菱冷熱工業(株)	156
	昭和アステック(株)	165
ス	住友電設(株)	A16
タ	大興物産(株)	A7
	タイタン(株)	A11
	大栄電気(株)	A11
ト	東洋熱工業(株)	176
	東光電気工事(株)	A15
ニ	日新工業(株)	A9
	日章工業(株)	A17
ヒ	(株)日立製作所	153
ホ	ホテルイースト21	A8
マ	松下電器産業(株)	A2
	(株)マンテン	A17
ミ	美和ロック(株)	166・167
	三菱電機(株)	表2
ヤ	矢崎総業(株)	A18
	山田照明(株)	A20
ロ	ロンシール工業(株)	表3

表情多彩



照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



ホテル日航アリビラ（沖縄）



山田照明株式会社 本社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL 03-3253-5161 横浜支社/ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL 045-311-1731
仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町11-11 (ANDビル) TEL 022-267-1630 大阪支社/ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23 TEL 06-643-3421

福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL 092-282-7635 名古屋支社 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新東陽ビル) TEL 052-252-5161 札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水三栄 4-2-3 TEL 011-811-2215
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL 0273-63-1442 千葉営業所 〒260 千葉市稲毛区緑町 1-25-14 TEL 043-244-2540 静岡営業所 〒422 静岡市稲川 3-12-4 (山中ビル) TEL 054-283-9788
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL 082-293-6119 鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (鹿児島ビル) TEL 0992-58-0031 秋田出張所 〒010 秋田市山王 6-8-6 (ナカムラビル) TEL 0188-65-2550
宇都宮出張所 〒380 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL 0286-60-1381 長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27 TEL 0262-43-8420